

| | |
|--------------|---|
| Title | モンテーニュにおける思考と作品の様式とその進化 |
| Author(s) | 竹田, 英尚 |
| Citation | 大阪大学, 1988, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/1221 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

モンテニユにおける
思考と作品の様式と
その進化

竹田英尚

目次

| | |
|--------------------|-----|
| 序論 | 1 |
| 第1章 『エッセー』の萌芽 | |
| 1. 『エッセー』以前の文学的活動 | 15 |
| 2. 故事実例の収集における個性 | 27 |
| 3. 思索の現実性 | 43 |
| 4. 古人の思想の活用 | 56 |
| 5. 真理の探究の形式 | 71 |
| 6. 自己描写 | 81 |
| 7. 執筆の動機および目的 | 106 |
| 第2章 個性の開花 | |
| 1. 思想の表現方法の個性 | 123 |
| 2. エッセーの論理 | 147 |
| 3. 自己描写 | 173 |
| 4. 章の構成 | 196 |
| 5. 『エッセー』の個性の確立 | 218 |
| 第3章 円熟の『エッセー』 | |
| 1. 日常の思索の論理 | 238 |
| 2. 自由奔放な随想 | 257 |
| 3. 自己描写 | 289 |
| 4. 運動の象徴的な意味と円環の構成 | 315 |
| 5. 作品論の進化 | 346 |
| 結論 | 364 |
| 参考文献 | 368 |

序 論

モンテーニュの『エッセー』は言うまでもなくフランスの代表的な古典である。出版の当初から人々の注目を浴び、以来、時の流れを越え、国を越えて愛読されてきた。すでに数百年にわたって数多くの文人たちが人と作品について語り、多くの碩学たちが諸史料を調査しながら論究を深めた。あるいは、新しい批評の流派があらわれるたびに新しい読解がもたらされた。このような状況においては、大学でようやくフランス語を学びはじめたにすぎない極東の研究者が容喙する余地など、まったく残されていないようにさえ思われる。しかしながら、人間が数十年の人生の営みとともに残した作品という言語の有機的総体は、現実世界や人間自身とおなじように深く、複雑である。私達が新しい真実を発見するのが困難なのは、過去の遺産の莫大な量自体が原因ではなく、その圧倒的な力で固定観念が押しつけられ、視点が硬直するからである。私達がこれから考究しようとする問題は、『エッセー』にとってはごく当然の研究テーマでありながら、視点の硬直によって旧来なおざりにされてきた代表的な一例であろう。

『エッセー』は思想のみならず表現様式においても大きな魅力と個性をもった作品である。モンテーニュはあるときは諄々と語る緩慢な展開によって、快く読者の精神を揺り動かしながら、あるときは軽妙な変化によって才気煥発な衝撃をあたえながら、近代の随筆という様式をもっとも最初に、きわめて魅力ゆたかに開拓した。そして今日の人々は随筆を「エッセー」とも呼び、ふたつは同意義の語になっている。しかしながら当時では「エッセー」という語はこのような意味をもっていなかった。『エッセー』はジャンルを区別する名称に従うならば随想とか随筆と形容しうるとしても、現代の形態から想像するだけではその性格は理解できない。作者モンテーニュは「エッセー」と題してみずからの思索と著作行為を表現した。それは自身の書の文学作品としての特異性を明瞭に意識した名称であった。『エッセー』はすでにその表題が文学史上のどんなジャンルの作品ともちがった個性を強調しているのである。

もちろん誰もこのような表現様式の個性に気づかなかったわけではない。それどころか、『エッセー』を論じてこの側面を見落とすならばゆゆしい欠点になるほど、それは顕著な特徴であった。多くの批評家や研究者がくりかえし言及し、論究してきた。そしてその挙げ句に視点の硬直と重大な欠落が生じたのである。たとえば、『エッセー』が普通の随筆の概念におさまらないのは、容易に脈絡をとらえられないほど自由奔放な展開をおこなって

るからである。それはとても記述の論理に従っているようには思われない。そこでランソンは、ジャンチヨムとして談論している日常の自己を作品のなかに表現するために、学ばない自然な文体を求めた結果、『エッセー』に書かれる随想が乱脈な展開になったと解釈した(1)。あるいは、ヴィレーは、第3巻において章の構成を司っているのはただ空想の流れであり、「馬車について」の章では読者を驚かせ、とまどわせるためにモンテーニュが無秩序を装っているとまで言っている(2)。しかしこの種の説明は、いくら詳細になり、いくら真実に近づこうとも、重大な欠点をまぬがれえない。つまり、それは原因や意図や結果を説明してはいても、自由奔放な随想の展開それ自体を研究していない。したがって、いずれについてもその説明は対象自体の分析から推論されたのではない。対象自体を直視することなく、その原因や意図が論じられてきたのである。

『エッセー』の随想をジャンチヨムの気取らない雑談風であると言おうと、自由な空想の流れであると言おうと、この種の説明は言葉の形容によって複雑な実態を理解したと錯覚しているにすぎない。『エッセー』の随想の展開は無秩序であるという見解に反対する人達も、しばしばおなじ過ちにおちいつている。研究史の流れのなかでは前者に対抗しながらのちに現れたようであるが、後者も別種の形容を見つけて満足するばかりで、『エッセー』全体の随想様式の研究へ向かおうとしない点では、大同小異である。たとえばラブレニーは、表面上の無秩序のもとには独特な秩序がひそんでいと主張し、わずか一ページのあいだに「深い秩序」、「詩的秩序」、「うち解けた手紙の秩序」、「会話の秩序」、「書き物の秩序というより話の秩序」などと表現を変えながら、結論として「生命の秩序」と性格づけている(3)。しかしながら、いかに言葉の形容を尽くそうとも、いかに真実を突いていようとも、結局のところこれらは印象的な把握と表現であって、読者が非論理的な飛躍や紆余曲折に満ちた随想の展開を追ってゆく助力にはほとんどならない。また、みつつの章を例にとってラブレニーがおこなう分析は、私達に『エッセー』の特殊な秩序を教えるものではない(4)。簡単に、全体的に批判するならば、『エッセー』の秩序という問題はそこにあるような、部分々々の内容に関するメモとテキストの引用との羅列によって示しうるほど単純ではない。それぞれの章が必ず序論ではじまり、全体についての結論で終わるという見方が批判的な反省なしに踏襲されているのを見ると、彼が新しい秩序観をしっかりと探求しながら分析したのかどうか疑わしい。たとえば「会話の秩序」と言うのなら、最後の話はその日の雑談全体の結論にならなければならない規則なぞまったくないのである。

作品様式や随想の形態がくりかえし話題になりながら、実態に視線を据えた研究がおこなわれなかったひとつの理由は、作者自身の言葉から解答が得られたからであろう。『エッセー』を書くことについて常に反省していたモンテーニュは、方々で、その主題や著述の方法や目的などを語っている。したがって、それらの言葉の理解につとめ、全体を要約し、まとめるならば、『エッセー』という作品を分かったつもりになることができた。彼の説明にあいまいな点や矛盾があれば、統一的な解釈を探究した。成長につれて変化発展したのがその原因であるならば、進化として整理しなおした。こうしてモンテーニュみずからが語った作品論についての論究は進んだが、随想それ自体の研究はなおざりにされたままであった。

作品の特異性を表す書名の語から問題の究明を図ろうとする方法にも、おなじような欠落がある。「エッセー」という語を拾い上げ、分類、整理するならば、その意味のあらましを示すことができよう。それは(1)試験、(2)実験、経験、(3)試飲、見本、(4)試み、練習、などの意味で使われているという(5)。しかし問題はほとんど解決していない。モンテーニュはいずれの意味で『エッセー』と題したのであるか。ひとつの代表的な意味と残りの意味との関連はどのように考えるべきなのであるか。これらの意味と書名との関係には進化があったのであるか。浮かんでくる疑問に答えるためには、この語が使われている文脈を検討しなければならない。そして、さらに、その解釈を深め、発展させ、決定するために、『エッセー』の主題や方法や目的などをのべたモンテーニュ自身の作品論に頼ることになる。しかし、彼の言葉のなかに『エッセー』の性格を探るのでは、もう解明は進展しないであろう。書名に使われた「エッセー」という語やその動詞形「エッセイエ」の意味がいずれであれ、ひとつ明らかなことがある。語の最終的な意味がいずれであれ、「エッセー」なる行為の要は『エッセー』を書く行為のなかにある。「エッセイエ」とはモンテーニュにとって『エッセー』を書くことであると言ってもまちがいはない。彼は『エッセー』の著作を通して「エッセイエ」を実践したのである。この、まったく平凡な、基本的な認識から再出発しなければならない。そして随想の実態そのものを追究しなければならない。そのための分析方法と分析概念を考案し、これらをより精密にしてゆくようにつとめるべきであろう。

従来から章の構成は折りに触れ、くりかえし討論されてきた。いろいろな章が個別にとりあげられ、どのような意図によって、どのように構成され、全体についての結論は何であるかなどと議論されてきた。しかしながら、これをもってすでに随想の実態が研究され

ているとは言えない。今まで指摘したのと同様の重大な欠点がある。恣意的な分析によって架空の構成を捏造するのを避けるためには、章全体の姿を対象にする以前に、モンテーニュ流の随想の展開の特徴を把握していなければならない。自由奔放な展開が研究者に各部分の評価や相互の関連づけの可能性をさまざまに提供しているがゆえに、その点は『エッセー』研究ではとくに注意しなければならない。抽象という行為とともにテキストの文脈から離れたとき、作者の論理ではなく解釈者みずからの論理に従ったさまざまな推論の組み立てが可能なのである。全体の構成を論じるからには当然その内部を綿密に分析している、と章の構成の論者たちは反駁するにちがいない。しかしながら私達が言っているのはそのような意味ではない。章の構成を分析するに先立って、まず『エッセー』全体における随想の展開の仕方を研究しておかなければならない。それが必須不可欠の前段階なのである。その成果にもとづいて恣意性を抑制しながら、分析を進めなければならない。随想の千変万化の動きを私達の関心に従ってではなく、モンテーニュの思考法に従って追えるようになっていなければならない。

どのようにして分析と認識の恣意性に歯どめをかけるか、これは私達研究者の忘れてはならない課題である。従来は非常に狭い視野で章の構成や意図や結論について討論されてきた。そのため分析と論が巧妙でありさえすればよかった。その蓋然性を吟味し、検証する場を設定するのをおこたっていた。たとえば、ある章の展開が無秩序なのは、モンテーニュの真意の政治的あるいは宗教的な危険性をカムフラージュするためであると考えられる立場がある。しかしそのような仮説を主張しようとするならば、危険性のない思想がのべられている章には無秩序がないかどうか、あるとすればどのような構造から生じているか、カムフラージュのためと想定する無秩序とどこが似ており、どこがちがっているかなども検討しなければならない。要するに『エッセー』の反論理的な性格や構造などがもっと研究されなければならない。あるいは、ある章の全体をしめくくる最終的な結論が何であるかを議論するのみならず、それと同時に、いやそれ以前に、モンテーニュははたして最後にかかわらず結論がなければならぬと考えていたかどうか、彼の随想の態度や思考の方法はそのような統一的な歩みをおこなう性質のものであったかどうかなどが反省されなければならない。あるいは、各章は自由奔放な展開で、論理的な構成を欠いているように見えようと、そこには『エッセー』特有の、超論理的な秩序があると言うのなら、形容する語を考えるだけでなく、そのような秩序ができあがる過程をできるだけ明瞭に示す分析の仕方や視点についてもっと工夫を重ねなければならない。随想の展開の過程を離れて章の

秩序を考察しうるのならば、問題は単純である。ひとつの章に含まれたいくつかの小テーマや大テーマの出現の順番や相互の関係について、研究者が綿密な分析によって論理性を指摘できたとしても、その章は必ずしも十分な秩序をもっているとは言えない。読者が『エッセー』を読みすすみながら不安や当惑をおぼえるかどうかは、主題から主題への移り方やその間の夾雑物の有無や量などに影響される。問題は相互の関係が分析的に発見しうるかどうかというより、まずそれが実際にどのように提示されているかである。あるいは章の論の秩序というのは、主要な部分々々の内容を要約したときにひとつの結論に向かう思考の流れが発見されるということではない。内部の他の諸要素がその流れを妨げていないかどうか、どの程度乱しているであろうか、などの具体的な側面を無視してはならない。従来は、原則的に前から後ろへ読みすすみ、途中で出会うすべての要素から影響をうける読者の立場と、実際の随想の流れを多かれ少なかれ超越し、夾雑物を捨象しながら分析をくりかえす研究者の立場とが混同されたまま、秩序があるとかないとか議論されていた嫌いがある。後者は前者が読みすすんでゆくときに感じる論理性や非論理性、秩序や無秩序の次元をしばしば看過している。章全体の姿を対象にした従来の論考も他の研究とおなじように、まず『エッセー』全体のなかで随想の展開の個性を検討するをおこなっていたのである。

したがって私達の論文の方法とテーマは、以上のような批判に立って、随想の展開の実態やその内部構造を綿密に分析するところにある。たとえば、読書から採集した標本のような故事実例や史実は、随想の展開においてどのような役割を果たしているのだろうか。章という単位をまず忘れ、作品全体においてその位置と機能を調査しなければならない。そして、また、それらを正しく評価するためには、『エッセー』の構成要素として、どのような他の分析対象を設定するのが適当であろうか。このような反省にもとづいた私案と分析例が本論において示されるであろう。『エッセー』の特色として人口に膾炙した自己描写も、それらの構成要素のひとつとして捉えなければならない。従来この問題の考察はほとんどがモンテーニュ自身の釈明した言葉について解釈するだけであった。実態のほうに視線がそそがれたとしても、自己描写の部分だけに限られ、他の諸要素との関連、すなわち随想の展開のなかで果たしている機能は注意されなかった。拙論のような分析の視点は自己描写の複雑多様な性格を解明するひとつの手がかりになるはずである。

あるいはまた、モンテーニュの随想の自由奔放な展開はどのような特徴をもっているのだろうか。論の急転や飛躍や脱線のメカニズム、随想の紆余曲折の構造などはどのよう

になっているのであろうか。これらの分析は『エッセー』という作品を、作者が説明した言葉の解釈によってではなく、『エッセー』そのものの中において理解する道を開くであろう。作者自身の作品論も、実態の詳細な分析と照らしあわせるならば、より正確な意味を知ることができるであろう。従来研究者たちは『エッセー』の実態とほとんど比較照合しようともせず、しばしば安易に、無反省にモンテーニュの言葉を自分の立論のなかにくみ入れてきた。たとえば、章には十分な秩序があると主張する論拠に、つぎの言葉がよく引かれる。

私はひとりでに内容が分かるようであって欲しい。どこで変わり、どこで結論になり、どこで始まり、どこで再びとり上げられているかなどは、内容自体が十分に示してくれる。鈍い耳やなまくらな耳のために連結や接合の言葉を挿入しながらつづりあわせたり、みずから注釈をくわえたりするまでもない。(III-9, p. 995)

(6)

しかしながら、この言葉と『エッセー』の現実とを比較検討したうえで、みずからの論証に利用した人はいない。ここには「連結や接合の言葉」という、きわめて具体的な手がかりがあり、この視点から随想を分析するのはさほど困難な作業ではない。つまり、その種の語句が『エッセー』のなかでどのような機能をはたしているか調べてみなければならない。「どこで変わり、どこで結論になり、どこで始まり、どこで再びとり上げられているか」という関連を、モンテーニュが「連結や接合の言葉」に頼って示しているところがあるかどうか、その使用はどのような効果をあげているかなどを調査してみなければならない。そののちに初めて、上の文章の本当の意味が理解できるのである。たとえばこの一例のように、作者自身の『エッセー』論を実態の分析とつきあわせながら、言葉の言葉による解釈の恣意性と循環性をすこしでも回避するようにしなければならない。

随想の展開の過程を注視するならば私達はまた、さらに深くモンテーニュの精神活動の内部を観察することができる。随想の形式はたんに作品の表面的な装飾ではなく、知性の活動の様式でもある。随想の展開の過程にはおのずと思考法があらわれている。モンテーニュは読書も体験も含めた経験というものをどのような方法によって吟味、吸収しているであろうか。設定した主題を論じるとき、視点の移動や各部分に関連づける構築の仕方には、どのような特徴が見られるであろうか。彼は一方でどのようにしてみずからの思索を

活発に活動させ、一方で人間の思考という、この茫漠たるものに確かな歩みをあたえているであろうか。結局、どのような論理性、あるいはどのような非論理性がモンテーニュの思考の個性なのであろうか。随想の形式の問題は、さらに内部に進めば、このような考察に深まってゆく。そして表面的な形態についての分析結果がさらに深い内部から評価できるようになる。『エッセー』における随想の形態は作者の思考法や認識方法を把握しなければ正しく理解できない。第3巻の章に代表される自由奔放な展開が生まれる原因を推察するためには、随想の形態の分析にあわせて、モンテーニュ流の思索の論理的な特徴と非論理的な個性を知らなければならない。

したがって随想の展開の過程を注視した分析はだんだんと深く、広い問題へ通じてゆく可能性をもっている。随想の内部的な構造はモンテーニュの精神の内部的な構造であり、そしてそれはまた彼の思想の内部にひそむ構造に通じる。そこで私達は、精神が現実世界と接触しておこなう運動から生まれる思想を、その結果である言葉から理解するだけでなく、その運動を司っている構造から把握できるであろう。もちろん、モンテーニュのいろいろな思想の内部構造までも捉えようとするのは、さらにひとつの大きなテーマを加えることであり、この論文の目標を越えている。しかしながら、このような展望を背景にしながらか、『エッセー』の随想形態とその構造と論理についての研究は、モラリスト・モンテーニュを理解するための根本的な問題のひとつとなる。彼の真髄までも深く照らし出す可能性をもっている。

つづいて、私達の別の研究方法について述べておかなければならない。『エッセー』は巨匠モンテーニュのただひとつの作品であり、39才で筆をとって以来59才で死ぬまでの、彼の人生の歩みとともにできあがった作品である。人生経験が豊かになり、深まってゆくなかで、彼は思索を書きつづけて『エッセー』にした。以前の随想を補筆し、修正し、新しい章を書きくわえ、何度か版をあらためて出版した。加筆訂正の作業は死の床につくまでつづけられ、その書き入れのある1588版『エッセー』が死後に残された。現在流布している『エッセー』はこの手沢本にもとづいて公刊されている。このいわゆる「ボルドー本」の姿がおそらくモンテーニュが新しく読者に贈るために準備していた『エッセー』であろうが、研究の方法としては、約20年間の思索と著述が複雑な地層のように重なった作品をどのように読み解いてゆくかという問題がある。私達はその発展の経緯にもとづいて、『エッセー』の層を方法的につぎのように分離し、みつつの主要な時期を設定することにした。

第1巻と第2巻はごく小数のヴァリエントを除外するならば、三層から成っている。1580年版のテキストの上に、1588年以前と以降の二度の加筆、訂正がある。したがって、後者のふたつの層を切りはなすならば、執筆開始後1580年までの思索と著述の姿を観察することができる。つまり、まず1580年版『エッセー』を研究対象にするのである。さらに、初版の出版に到る執筆活動は前期と後期に二分される。第1巻と第2巻のすべての章の執筆年代が推定されているわけではないが、モンテーニュが書齋を離れて政治的な活動をしたらしい、数年の中断期が明瞭にふたつの執筆期に分けている(7)。そして、現実世界のなかで経験をつんだ年月を境にして、質の変化を見せている。私達はこの論文では前者の執筆期を初期、後者を中期と呼んでいる。

初版の出版後数年はモンテーニュはほとんど筆を執らなかつたにちがいない。1580年の6月にはドイツ、スイスを経てローマへ到る大旅行に出発した。1581年11月に帰国したのちは、ボルドー市長を二期にわたって勤め、宗教戦争の渦中であつて職責を果たした。これらの経験が以前の思想の吟味の石となり、新しい思索の糧となって生じた成長は、主として1588年版『エッセー』第3巻に結実している。1580年版の第1巻と第2巻にたいする加筆訂正を考慮の外においたとしても、新しく設けられた第3巻の1588年版の姿を対象にするならば、思想も文体も円熟の境に達した著作活動を観察することができる。私達はこの時期を後期と呼んでいる。

最後に1588年版『エッセー』の余白に書き入れられた層が残る。つまり、本論では晩年と名づけている1588年から没年の1592年のあいだに、以前の全3巻にほどこされた加筆、訂正である。私達はこの層も研究の対象にとりあげないことにした。

以上のように『エッセー』の成立の経緯に従って私達は初期、中期、後期という時期を設定した。それらは現実のなかで経験を積んだ年月を境にして、モンテーニュの個性が開花し、成長していった、主要な三段階であるのは疑いようがない。したがって、1580年版『エッセー』と1588年版『エッセー』の第3巻を研究対象にし、前者にたいする後期の加筆訂正と後者にたいする晩年の補筆修正を除外したとしても、モンテーニュの思索と著述の行為をゆがめて理解する恐れはないであろう。その特徴の大半は把握できるであろう。

しかし、一方、ボルドー本『エッセー』が読者のために彼の準備した最後の作品であるとするならば、私達の追究はこの最終版を研究するための前段階にすぎない。私達はそのような限界は虚心に認めている。しかしながら、最終段階を対象にしていない欠点があるとしても、私達の方法にはいくつかの利点と意義がある。『エッセー』研究の現状においては、

加筆の層を重視しながら、それが入り組んでいる錯綜した姿を最初から対象にするのは、非常に困難な課題である。とくに私達のテーマのように随想の展開そのものを注視するときには、それはいっそう甚だしくなる。いままで随想の展開の過程の分析に正面から取り組んだ研究はきわめてすくなく、分析の視点も分析概念もまだほとんど開拓されていない(8)。このような現状においては私達のような視野の限定は許容されるのみならず、重要な基本研究として不可欠であろう。私達のような方法的な分離によって、まず、できるだけ自然な、単純な姿の随想を分析することができる。この利点はけっして小さくない。私達と同種のテーマについて最初に本格的な研究を発表したトゥルノンが先に加筆の仕方を目をそそぎ、その結果にもとづいて1580年版『エッセー』を分析しているのは、納得しがたい方法である。彼が指摘するモンテーニュの思考法は私達より緻密で明確ではあるが、ヴァリエーションを研究しなければ発見できないとも思われぬ。むしろはじめから1580年版の随想の分析に精力をそそいだほうが、よりいっその成果をあげられたにちがいない。あるいは、最初に加筆の仕方だけに注目しているために、分析の結果をまとめながら解釈するにさいして、モンテーニュの随想によくある特徴をなにか加筆の作業に特殊なように過大評価している側面がある(9)。

もちろん加筆の層が交錯しているのは周知の特徴であり、この点に注目するのは『エッセー』研究の重要なテーマである。しかしながらそれにはほとんどの場合もとのテキストの状態についての評価がからむ。たとえば、現在出版されている『エッセー』は、邦訳もふくめて、細々と(A)(B)(C)を記入し、執筆期の相違を示している。この問題を例にとりながら考えてみよう。これらの記号が細々と記入されるひとつの理由は、加筆が以前の文脈を乱し、随想の展開を理解しがたくしていると思なされているからである。最初のテキストと加筆部とを区別するならば、『エッセー』が読みやすくなると信じられているからである。たとえば、第1巻と第2巻において文脈が把握できない箇所によくあたったときには、(B)や(C)の加筆を無視して(A)の文章だけを読みなおすならば理解できるようになると言うのである。しかしながら、はたして『エッセー』の随想が整然としていないのは、加筆の層がいきまじっているからであろうか。それが最大の原因であろうか。加筆の層を除いたテキストの状態においても、中期やとくに後期の章がところどころで自由奔放な展開を見せているのは珍しくはない。それならば、最初の展開の自由さと加筆による混乱とをよく比較検討したのちでなければ、加筆がもとのテキストにもたらした乱れを適切に評価することはできない。あるいは、前者と後者とのあいだで無秩序の質に相違

があるかどうか調べてみなければならない。もし両者にほとんど違いがないならば、(A) (B) (C)の記入は読者の役にたつよりも、テキストを煩雑にする害のほうが大きいであろう。さらにまたこの調査は、初期と中期と後期とに分けておこない、それぞれの結果を比較してみなければならない。なぜならば、後になるほど自由奔放さが増し、しかもそれがモンテーニュの随想の自然な進化と考えられ、なおかつ晩年の気ままな加筆による発展が後期までと質的にほとんどちがっていないならば、(A) (B) (C)の記入はまったく余計なおせっかいと言うべきであろう。たとえ晩年の加筆が奔放さを増していようと、以前の進化の延長線上に考えられるような性質であるならば、このボルドー本の状態を『エッセー』の決定稿とみなすべきであり、版を区別する記号を本文に記入するのは適当ではないからである(10)。加筆の層を除外している私達の研究はこの問題について結論はだせないが、必要不可欠な前段階として貢献しうるのである。

私達の方法のもうひとつの意味は主要な執筆期を設定し、モンテーニュの思索と『エッセー』の進化を考察できることである。周知のようにピエール・ヴィレーは進化という観点から新しい大研究をなしとげ、輝かしい足跡をのこした(12)。以降、彼のあまりにも単純化された説明に批判がくりかえされ、このような研究は下火になった。しかしながら『エッセー』のように一冊の内部に執筆期のことになったテキストが含まれ、しかも比較的容易にそれらを分離させ、独立させられるときには、進化という視点からの研究は特有の意義をもっている。最終的なテキストの状態では考察が複雑になり、異論が続出する問題も、主要な執筆期ごとに調査をおこなったのち、その結果の比較検討にもとづきながら解釈をすすめるならば、議論の要点をもっと明確にできるであろう。たとえば、私達のテーマに関連する一例をあげて言えば、『エッセー』第3巻の随想の千変万化な動きは出版の当初から人々の注目をあつめてきた。その原因や意図が推測され、論じられてきた。しかし、作品様式の変遷のなかで第3巻の随想を把握しなおそうとするならば、論考をおこなうための調査の苦労は増すが、問題の究明はもっと明確になるであろう。どのような変化、発展を通して、なぜ第3巻の変幻自在な展開が生まれるに到ったのか理解できるならば、もうすこし明快な考察が可能になるであろう。たとえば後期の随想の奔放自在で紆余曲折にみちた展開も、その類型がすでに初期の章にも見出されるならば、前提としてこの特徴が第3巻に固有であることを必要としている論は排除されなければならない。後期と初期あるいは中期との相違が、基本的には、奔放な展開の類型の数と頻度の相違にすぎないならば、無秩序におちたと思われるほどの随想も、モンテーニュの個性におうじた自然な発展とし

て理解するのを基本としなければならないのであり、政治的な意図や作為的なてらいや晩年の加筆などを重視する解釈は避けるべきであろう。このようなテーマにかぎらず、その他にも、変化発展のなかで捉えなおすことによって考察をより明確にできる問題はいろいろとあるにちがいない。この進化という方法的な分解による研究は軽視してはならない利点をもっている。

ヴィレーの進化の説明は読書からうけた影響を過大評価し、著作と思想の執筆期による相違を強調するあまり、生きた人間の成長というより、外部からの影響による変化の図式を提示したにすぎない嫌いがある。ところで、一人の人間の歩み、とくにその進化を描くとはいったいどのような行為なのであろうか。それはただ変わった跡を詳らかにすることではない。進化を捉えようとして私達はしばしばそちらのほうに目をうばわれる。変化を安易に進化と思いこまないようにしなければならない。モンテーニュの歩みの各時期の特徴を概括し、差異をきわだたせるだけで満足してはならない。そのようなのは進化のまがいものであって、結局は不連続な相違にすぎない。変化は進化の現象的な結果であり、一方進化は同一のものの質の変化であり、連続性のなかにその秘密がある。それはなにか連続している創造的な運動のひきおこす変貌である。そこに進化を捉え、表現するむつかしさがある。しかし、私達はモンテーニュの20余年の歩みのなかにあって連続的な創造活動が生じさせた変貌を描くようにつとめなければならない。

ヴィレーの説の欠点は彼の最大の貢献の裏面であって、ある程度やむをえないのかも知れない。彼の努力の中心は『エッセー』の源泉の探究であり、それにもとづく作品研究である。そのため内面的な考察が不十分なのも仕方がないであろう。その欠点をおぎなうのが私達後進の者のつとめである。それではヴィレーにもっとも欠けているのは何であろうか。それは作品を書く行為によって生じる進化についての考察が欠如していることである。『エッセー』の著しい特徴である自己描写と、作品名にもなった「エッセー」という思考と著作の方法は、最初から明確な制作方針だったのではなく、モンテーニュが作品を書くにつれて発展したことを思うならば、この欠点は些細な問題ではない。ヴィレー自身ものべているように、もしモンテーニュが最初から自己描写の意図をもって書いたのであれば、『エッセー』は私達の目にしているような作品様式にはならなかったであろう。あるいは、また、彼の思索がルソンという伝統的な形式を破ってゆく動きが『エッセー』の進化であり、彼自身の作品論は内部にこのような進化がすすんだのちの自覚として語られる面がつよい(13)。したがって、読書や実人生の体験のほかに、作品を書くこと自体がもたらす成長を把握す

る視点と分析方法が、『エッセー』の研究にはとくに大切なのである。モンテーニュがみずからの『エッセー』についてのべた作品論を、執筆期によって区別しながら考察し、解釈するだけでは不十分である。彼の『エッセー』論の変遷も、随想の形態や著作の方法の変遷とともに捉えなおすならば、いっそう正確に理解できるであろう。いかに頻繁に彼がみずからの作品について語っていようとも、それらを執筆期に区別して整理すればおのずと進化の描写ができあがるわけではない。それらの間にはかならず私達が推察と解釈によって埋めなければならない空隙がある。その空隙にかくれた推移を正しく想像し、連続した発展を内にふくむ真の進化を描き出すためにも、随想そのものの分析から捉える研究が欠かせないであろう。

随想の形態の考察からさらに一步すすみ、モンテーニュの思索と『エッセー』の進化を描くこと、これが私達の研究に付加された目標である。作品の形態や構造の分析は、その根底にある作者の知性の活動形式や思考法やその論理性や非論理性などの特徴を明らかにする可能性をふくんでいる。この可能性をさぐりながら、表現様式とその変遷についての論考を、モンテーニュの思索の歩みの描写に深めてゆくのが私達の野心である。しかも、それは思想の変化発展を要約する行為ではない。思索の結果である思想ではなく、思想を形成してゆく内面的な運動様式の進化を描くことを目指している。表現様式は外的な姿ではあるが、翻せばもっとも内的な活動でもある。その変遷についての観察が私達を精神内部の構造と力動的な動きの認識に導き、モンテーニュの道程を思想のさらに内側から描くことになれば幸いである。

序論（注）

（１）巻末の参考文献表のⅡ-B-41, pp. 314-315を参照。以下同様の表記法をとる。

（２）Ⅱ-A-8, p. 840, p. 898.

（３）Ⅱ-A-38, pp. 139-140.

（４）Ⅱ-A-38, pp. 140-168.

（５）Ⅱ-A-7.

（６）「ⅡⅡ-9」は『エッセー』第3巻第9章の意味。以下についても同様の略示法をとる。ページの表記はのちに述べる私達の研究方法にしたがって、ヴァリエーションを考慮しないと晩年の加筆修正の文章については、Ⅱ-A-8によっておこなう。

（７）Ⅱ-A-69, t. 1., pp. 382-391.

（８）すでに述べたように、紀要論文や著書の一部では、随想の展開の個性や章の構成や秩序などがしばしば論じられている。しかしながら、これらの問題のみに焦点を絞り、単行本を発表するほどの成果をあげているのは、私達の知るかぎりでは、Ⅱ-A-37とⅡ-A-48とⅡ-A-67の三者のみである。しかも37は言語学の進歩から生まれた新しい作品分析の方法を、『エッセー』のいくつかの章に適用した試みの域を越えていない。また48は、随想の動きを分析する方法に学ぶべきところはあるが、モンテーニュが普遍的な思考法、すなわち神へ向かう思考をもっていたことを論証する目的に片寄っており、解釈の進め方に疑問な点がすくなくない。したがって、『エッセー』全体において随想の展開の過程を分析し、重要な成果を生みだしている本格的な研究はまだ67のみである。

（９）たとえばⅡ-A-67, pp. 44-45, pp. 52-54などを参照。

（１０）（Ａ）（Ｂ）（Ｃ）の記入には、執筆期による作者の意見の相違や思想の成熟のちがいを読者に味わってもらうという目的もある。確かに私達もその面白さを感じたことがないわけではない。しかしながら、膨大な（Ａ）（Ｂ）（Ｃ）に比べれば、無理なくそのような読解を楽しめる箇所は無きにひとしい。私達の研究テーマと直接的な関連性はないので詳細に検討したわけではないが、他の問題のために執筆期の相違に注意しながら『エッセー』を読んだ程度での私達の感想である。

（１１）私達のテーマを研究するかたわらで感じたままを参考までに記しておくならば、確かにごく一部の（Ｃ）には以前とはちがった、無頓着な加筆の仕方が見られる。意識の

流れにおける個性的な飛躍やその躍動性の観点から説明できない、不自然なものがある。しかしながら、ほとんどは後期の奔放性の継承であり、新しい種類の無秩序とは思われない。とするならば、『エッセー』の随想の反秩序的な展開は(A) (B) (C)の記入によって読み解けるような性質ではなく、これらの煩雑な挿入は益よりもはるかに害が多い。

(12) この名著はII-A-69である。

(13) II-A-69, pp. 307-308.

第1章 『エッセー』の萌芽

1. 『エッセー』以前の文学的活動

1568年に家督を相続して地方領主となったモンテーニュは、1570年に37才の若さでボルドー高等法院参議の職を放擲した。しかしその彼の心中は明らかではない。法院の希望の部署にすでに義兄や岳父がいて、配置転換の嘆願が受け入れられず、法官としての昇進の道が断たれたからであるとか、宰相ロピタルの失脚後新旧両宗派の抗争のなかにあって弾圧の機関になってゆく高等法院に絶望したためであるとか、官吏の生活の隷属と味気なさに倦み疲れたからであるとか、あるいはいったん官職を捨てたのち宮廷に入って剣の貴族になる野心をいただいていたからであるとか、いろいろ推測されているが、確かな決め手はない。

官職を去って領地に隠退した彼は館の一隅の塔を修築し、二階に寝室、三階に書斎をつくった。そして1571年2月28日書斎の壁にラテン語でつぎのような文章を記したのち、1572年頃より『エッセー』の執筆をはじめた。

キリスト紀元1571年3月1日の前日、38才の誕生日にあたり、久しい以前から高等法院への隷従と公務の重責に倦み疲れていたミシェル・ド・モンテーニュは、すでに過半を越えた人生の残りを平穩に暮らさんがため、なんらの衰えなくも、博識な女神の胸に隠退した。願わくば運命の神よ、自己の自由と平安と閑暇に捧げんと決めた、この父祖伝来の、心地よい隠棲の館を完成させたまえ。

『エッセー』の著者としてモンテーニュを見ている私達には、この記念文がそれとなく文学的な野心を表明しているようにも思われる。「博識な女神の胸に隠退した」とか、「自己の自由と平安と閑暇に捧げんと決めた」などという言葉のなかに、文学への志が感じられるような気もする。あるいはまた、私達がそのように信じたいのは、すでに以前に彼が一種の「作品」を発表しているからである。『エッセー』が彼の最初の精神的な産物だったのではない。もちろん私達のテーマは『エッセー』の随想の研究であって、以前の文学的活動ではない。しかしそれを知っておくのは初期の『エッセー』を考察し、評価すること

とまったく無関係ではない。本論に入るに先立って、この方面を一瞥しておこう。

モンテーニュの名は最初は翻訳者として世にあらわれた。スペインの神学者レーモン・スボンがラテン語で書いた『自然神学』を訳し、1569年に出版した。しかし翻訳の動機は、彼の言葉どおりだとすれば、『エッセー』の誕生を予測させるような内面的なものではない。

死の数日前私の父はうち遣られた文書の山のなかに偶然この本を発見し、私にフランス語に訳すように命じた。このような著者を翻訳するのはやさしく、ほとんどただ内容だけを表現すればよいが、文章の高雅と優美に精力をそそいだ作家を訳そうとするのは危険な企てである。より脆弱な国語に移すときには、ことさらそうである。それは私にとってはまったく未経験の新しい仕事であった。しかし、その頃はたまたま暇であったし、またこの世で最良の父の命令には何もさからえなかったので、最善をつくしてやりとげた。父はこのほかの喜びようで、印刷に付すように言いつけた。これは彼の死後に実現した。(II-12, pp. 439-440)

文字どおりに受け取るならば、偶然の出来事によって父親からあたえられた命令がモンテーニュを翻訳に従事させたのである。父親にたいする彼の厚い敬愛の情は『エッセー』に時折あらわれており、上のような感情的な意味づけが嘘偽りであるとも思われぬ。しかし彼の言葉がすべてを説明しているわけではない。遅くとも父の死に先立つ3年前の1565年、スボンについて碩学チユルネーブに質問している事実を考えあわせるならば、彼はすでにこのころ計画を練っていたようである。この企てには文学的な野心がひそんでいたと見られなくもない。確かにギリシア・ラテンの古典をはじめ名著の翻訳は当時の知識人の第一の仕事であった。無二の親友ラ・ボエシも、クセノフォンやプルタルコスPlutarchusの翻訳を試みていた。内容だけを表現すればよいから楽であると言っているにもかかわらず、『自然神学』の翻訳にはそれ以上の努力が窺われる。原著のスコラ的ないかめしさを精彩のある文章に和らげ、粗野な夾雑物を除きながら明瞭で優雅な趣をあたえようとするなど、文体上の苦心や工夫が随所に見られるという。つまりそこに文学に志す者の意気込みが感じられるとも言えるであろう(1)。

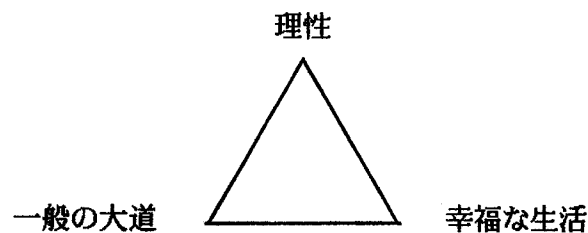
しかしながら、『自然神学』が私達のテーマに関連する側面についてコパンの主張しているほどの影響をおよぼしたとは思われぬ。私達はスボンの著書もモンテーニュの翻訳

の作業も検討してはいないが、私達自身の研究にもとづいてその立論を判断できないわけではない。コパンは『自然神学』が「エッセー」という思考法や作品形式の選択や決定にも影響したにちがいないと考えている。しかしながら彼の比較、考察はあまりにも表面的である。スポンがたんに真理を教示するのではなく、人間と他の被造物との相違や、過去と現在の人間の状態などについて読者みずから考えてみるように勧めているからといって、モンテーニュに「判断の試し」という思考法を教えたとは言えない(2)。この比較におけるコパンの「エッセー」という行為の理解の仕方は単純すぎる。詳しい説明は私達の後の章を見てもらわなければならないが、簡単に言っても、自分自身で考えてみるのがすなわち「エッセー」なのではない。あるいは、別な言い方をすれば、「自分自身で考えろ」と言われても、人間はそうたやすくは自分自身の思索ができないからこそ、「エッセー」という方法が必要なのである。たとえば、自分が思考をはたらかせる目的やその結果に拘泥する感情を振り捨てることは、「エッセー」のひとつの重要な原理である。スポンが個人的な考察を呼びかけているからと言って、論の主題や展開の方向がはっきりしている類の『自然神学』が「エッセー」という思考の方法や意義を教えたとは信じがたい。『自然神学』の翻訳の作業にモンテーニュの文学的意気込みを見ておくほかに、私達の研究テーマとの関連はないであろう。

翻訳者モンテーニュにつづいて、1571年1月、『ラ・ボエシ著作集』のなかに再び彼の名が見られる。臨終の友から贈られた詩や翻訳を、彼は心をこめた永別の印として刊行した。しかしその著作集にあって彼はただ出版の責任者にすぎない存在なのではない。モンテーニュはラ・ボエシの作品や翻訳のひとつひとつに献辞を添え、徳や幸福や理性などについてみずからの思想を織りこみながら、親友を顕揚し、献呈の理由づけをおこなっている。したがってそれらは同時に彼の断想の小品でもある。そこには『エッセー』以前の思想が垣間見られる。たとえば、かつての宰相ミシェル・ド・ロピタルに捧げる献辞は、国家における人材の任用の問題を論じながら始まっている。それはモラリストというよりもっと現実的に、「講和のときは危険であること」(I-6)などの、剣の貴族むきの一連の章を書く初期のモンテーニュを予想させる。また、おびたしい人を対象にした国家の人事においては、任用は偶然に左右されると主張するなど、国家や公職の見方に強く運命観があらわれているのは『エッセー』とまったく同じである。別の献辞における断想は、モンテーニュの転換期とみなされている時期の思想とほぼ同じ内部構造の上に展開している。つぎに挙げるのは「ブルタルコススの結婚の規則」に添えられた献辞の冒頭である。

(1) 閣下、人間のなすもっとも顕著な愚行のひとつは、我々に満足と安心をもたらす、世間に受け入れられた共通の意見を破壊し覆すために、知能の力を使うことでもあります。(2) というのは、天が下のものすべては自然から授けられた手段や道具を、自身の生活の便宜と利益のために使うのにたいして(実際それこそ本当の使用なのです)、一方人間は他人よりたくましく明敏な精神を持っているように見せようとして、理性のもっとも精緻な働きによって吟味し、検査しなければ何物も受け取ろうとも、受け入れようともいたしません。そして彼らの魂を穏やかな安らいの座から揺さぶり出し、長い探求の果てに、けっきょく懐疑と不安と恐怖で一杯にしてしまいます。(3) 幼さと単純さがまさに神の真理によってあれほど勧められているのは、理由のないことではありません。(4) 私としては、有能さで人に劣ろうとももっと気楽に暮らし、利発さに劣ろうとももっと満足して生きたいと思っています。(番号は説明の便宜上の筆者の付加)(3)

これは「レーモン・スポン弁護」(II-12)の重要な部分をすでにレジユメしているような論である。それぞれの思想の成熟のほどはこの短い文章では推測しがたいが、すくなくともここに見られる論の構造は「レーモン・スポン弁護」の骨格をなす考え方のひとつに等しい。人間の理性について、下図のような三角形をなす関係において、本性や価



値が問い直されている。それは両者にまったく共通した思想の構造である。(2)において突然大きく視野をひろげ、「天が下のものすべて」を思い起こさせながら「自然」という観点を導き入れたのち、理性の小生意気さがあだとなって不安と懐疑に苛まれている状態を強調し、けっきょく理性とは人間を自然から逸脱させる愚かな特質にすぎないと糾弾する。このような視野の拡大と視点の転換にもとづく理性批判は、「レーモン・スポン弁護」においても重要な論法になっている。(3)における「幼さ」と「単純さ」の勧めも、

(4)における何よりも幸福な生活を求める態度も同様である。

『ラ・ボエシ著作集』には、献辞のほかにさらにひとつモンテーニュの「作品」がはいっている。それは親友の死を父に知らせ、臥してより息をひきとるまでの数日の様子を詳細に述べた手紙であるが、ただの私信の文章ではない。死にのぞんでもゆるがない友の勇気や、妻や肉親に贈る惜別の言葉や、二人のあいだの友情などを切々と伝える、荘重な文学的小品である。

モンテーニュの文学の世界へのデビューは、すでに『自然神学』の翻訳と『ラ・ボエシ著作集』の刊行にあったとも言えよう。1580年にボルドーの書店より『エッセー』のあらわれる10年ほど前であり、『エッセー』の執筆をはじめめる数年前である。父親にたいする孝順とか親友の供養とかの名分の蔭から、文学の道に踏み入ろうとする志がひそかにあらわれているように思われる。しかし、『エッセー』の誕生を予測させるような特徴が見られるわけでもない。ふたつの仕事のなかに文学的な活動を見い出しうるとしても、『エッセー』執筆の動機や作品形式の選択の理由などを推測させるような類ではない。法官であるモンテーニュのなかに文学性を発見したとしても、特別注目しなければならないほどの意味をもっていない。青少年時の伝記的な事実からも容易に想像できるのみならず、法官の職にあったとは言え、知識人は特定の職業人であるよりもまずユマニストであろうとした当時の風潮から考えてみても、それはなんら不思議なことではない。しかしながらまた翻訳と献辞は彼の内面の発露でもある。将来『エッセー』の著作をとおして姿形を定めてくる内面的な何かが、より活発な発現と成長の場をもとめはじめたのであると言えよう。このような意味においてならばふたつの仕事は『エッセー』の誕生の鼓動をふくんでいる。

のちの著作行為ともっとも関連性が強いと思われる痕跡は蔵書のなかに見られる。モンテーニュは本の余白に読書メモを書きこむ習慣があった。1564年に読んだニコル・ジルの『フランス年代記』には、細かな書きこみが残っている。初期の創作の読書にたいする依存の強さが一読しただけで想像できることを思うならば、直接作品の誕生に通じるかどうかは別にしても、この資料は貴重である。幸い現代の私達の手元にまで届いた『フランス年代記』の所蔵本を調べ、『エッセー』の作者がどのように読書を進めていったのか見ておこう。この本は愛読書であったわけではないが、残されたメモには彼の注意と関心の方向がよくあらわれている。それは書物にたいして彼の精神がどのような活動をしていたか知らせてくれるであろう。そして塔の書齋における読書が『エッセー』の著作とどのようにつながっているか教えてくれるであろう。

ニコル・ジルの『フランス年代記』を読みながらモンテーニュが余白に記しているのは、たんなる読書感想のメモなどではない。『エッセー』のなかでは、「私が本を読むのは、まともな気晴らしによってただ楽しみたいからである」（II-10, p. 409）とか、「そこ〔塔の書斎〕にいて私はあるときはこの本を、あるときは別の本を、目的もなくゆきあたりばつたり、ばらばらとめくる」（III-3, p. 828）など、たいていは自由な読書三味の喜びをのべているが、それに反して『フランス年代記』のメモは彼の読書がじつに注意ぶかく、丹念な勉強であったことを示している。また『エッセー』の別の箇所では、読み終わった日付とおおまかな評価を巻末に記入する習慣について言及し、三冊の本のかつての書き入れを紹介している。たとえばデュ・ベレ兄弟の回想録ではつぎのようである。

対処の仕方に苦勞した人たちが書いたものを読むのは、いつも楽しい。しかし、否定しがたいほど明らかに見てとれるように、このお二人方には自由率直な書きぶりがたいへん不足している。たとえば聖ルイ王の側近ジュアンヴィル侯とか、シャルルマーニュ大帝の大法官エジナルとか、もっと記憶にあたらしいところではフィリップ・ド・コミーヌとかの、おなじ類の昔の記録にきらめいている自由さが欠けている。この本は歴史というよりむしろ皇帝カルロス五世と戦ったフランソワ一世の弁護である。お二人方がなにか事実の重要な部分を変えているとは信じたくないが、しかし、事件についての判断を、しばしば道理に反してさえ、我々の利益になるようにゆがめたり、主君の生涯にある痛いところはすべて書き落としたりするのは、彼らのよくつかう手口である。モンモランシー殿とブリヨン殿の失寵が忘れられているのがその良い例である。実際ただエタンブ夫人の名前さえもあらわれない。秘密の行動ならば隠すこともできようが、すべての人が知っていて、しかも国事にあれほど重大な影響をおよぼした事柄を黙っているのは、弁解のしようのない欠点である。結局のところ、フランソワ一世およびその時代におこった出来事について完全な知識を得るためには、私を信じるならば、よそへ行かれるがよい。この本に期待する利益は、二人の貴族が現場にいた戦闘や軍功についての個々の物語である。あるいは、また、おなじ時代の何人かの王子たちの私的な言動とか、ランジェ侯があたった折衝や交渉などであり、これらの箇所には知られるに値するものごとや平凡ならざる考察がしばしばいつまっている。（II-10, pp. 419-420）

『エッセー』から推察するだけでは、読者はモンテーニュの批評の鋭さや柔軟さにのみ注意をひかれる恐れがあるが、『フランス年代記』のメモはその裏にある研鑽をしめしている。上のような、歴史書としての書きぶりに関する評価や、長所や欠点の指摘や、事件を判断する正当さの批判などは、克明にメモをとる、綿密な読書の習慣をとおして磨かれたのであった。彼はただ楽しみのためや知識をふやすために本を読んだのではない。

初期の『エッセー』は周知のように歴史や物語から集められた実例が構成の要になっている。したがって、執筆以前の読書の習慣を理解しておくかどうかは、初期の『エッセー』についての解釈に微妙に影響する。この意味においても、これから『フランス年代記』に記されたメモの特徴を検討してみよう。

モンテーニュの丹念なメモに一貫している方法は、読書を受動的な受容ではなく、知性を積極的に働かせた批判的な吸収にするために、記述を関連づけ、補足させあい、互いに吟味させあう方法である。読書中の本の部分々々をメモによって関連づけながら理解するのみならず、さらに彼はニコル・ジルの記述をつねにほかの歴史書と照らし合わせている。塔の壁にそって並ぶ蔵書とはべつに、机の上にはいつでも比較照合できるように数冊の本が積んであったにちがいない(4)。そして時々フランスやギリシア・ローマの他の史家たちと読み比べながら、メモをページの余白に書きこんでいったのであろう。このような習慣は『フランス年代記』にかぎられた一時的なものではなかったにちがいない。残されたメモのなかには、べつの読書が参考になって、あきらかに読了後ふたたびこの本を開いて記入したらしい形跡がある(5)。

したがって私達の目にまず映るのは、克明に諸家の記述を比較照合しながら、事実の食い違っているところをこつこつと注釈している、地味な歴史家のモンテーニュの姿である。そこには、性急に思想を弁じる材料にしようとするような態度はまったく見られない。ほかの歴史書と比べあわせながら、彼は『フランス年代記』の書いている史実をじつに注意ぶかく検討している。小さな記述の相違まで見おとさない細心さにくわえ、事実には忠実な、地味な歴史家ぶりは、多くの場合諸家のあいだの相違を確認するだけに甘んじる慎重さにも見られる。「フロワサールの書くところでは、彼はその男をみずからの手で殺した」(98, p. 131)(6)とか、「この事はすべての人が一致しているわけではない。コミーヌ、シャルル8世王の回想録を見よ」(159, p. 204)とか、ニコル・ジルについて真偽の判断を急がず、まず何よりも違いを発見することに注意を向けている。あるときはおなじ事件についてニコル・ジルとはべつの観点から眺めてみるためであろうか、ち

がった角度から述べた他の史家と比較するメモをくわえている。史書の著者たちが事実として書き記したことを、細心な批判精神をもって検討しながら学んでいるモンテーニュの姿が、メモのなかから浮かびあがってくる。

ただ史実を記述すればすむはずのところ、これほどの相違があるのならば、事件の原因や行動の理由についての説明とか功績の評価などは、本の記述を鵜のみにしてはならない。諸家を比較しながらモンテーニュはそんな思いを禁じえなかったにちがいない。そして史実を正しく解釈する練習にいつそう励んだであろう。彼の事実を見る目はこのような注釈の勉強をとおして磨かれていったにちがいない。歴史学の学問的な客観性がうち立てられる以前、愛国心によって王を讃めたたえるのを第一とした記述や、歴史的な事件の展開を神の摂理にこじつける宗教的な解釈などがなされがちであった時代にあつて、モンテーニュは史実を公正な冷静さで眺める、澄んだ批判精神をもっていたように思われる。ニコル・ジルがイギリス王とフランス王の抗争を説明して、天理にもとる謀叛のようにイギリスの反抗を非難している箇所には、簡潔な言葉を刺し、歴史を書く者にあらざる感情をとがめている。また、事件の推移に神の介入を言いたてたならば、論の悪用であると批判している。ニコル・ジルがフランス史の史家であるよりもしばしば弁護士になっているところには、注意ぶかい注釈を記している。

次に、歴史書に書かれた事実を正確、公正に学ぶための比較照合とはややちがったメモを見てみよう。記述の真偽の検討とはべつに、モンテーニュは『フランス年代記』のおなじような話を思い出すと、メモによって同系、同類の史実をまとめようとしている。「この種の話に関しては、わがフロワサールの第3巻第17章を見よ」（25, p. 46）とか、「ブルタルコスハスルラの生涯のところ、おなじような死のいくつかの例をしるしている」（131, p. 168）などをもっとも簡単なものとして、この種の関連づけは比較照合による事実の検討につづく重要な仕事であつた。この作業からただちに私達は初期の『エッセー』を思い浮かべる。その著作の方法の中心的なひとつは、章題に示したテーマについておなじ種類の実例を集め、綴りあわせることである。しかし、この類似性は明らかではあるが、両者の直接的な関連性を断定するのは早計である。このようなメモはさらにちがった意味ももっている。本に閉じこめられた史実は、本当は空間的にも時間的にも広く延びている連環の鎖が著者の都合にあわせて断ち切られている。モンテーニュが同系、同類の事実を結びつけるのは、この不都合をいくらかでも解消するためでもある。あるときは彼は『フランス年代記』にあらわれた事件のその後に興味を引かれたのである

うか、べつの史書によってのちの展開を知れるようにメモをくわえている。ニコル・ジルの本のなかにおいても、事件としては一連のものでありながら、年月の隔たりのあるため別々にあらわれる史実どうしがページのメモによってつながれている。書物に記述された史実がたんに記憶するための断片的な知識にならないよう、こうして生きた現実の動きのなかに戻されるのである。

類似事実の関連づけのなかには、モンテーニュが史実をモラリスト的に眺めている例がある。史実を勉強するのみならず、思索の材料にしようとしているときがある。たとえば、ある貴族が高位の官職を何度も断ったという話のところには、「こうした事は私達の間から見れば実にふしぎである。だが時折見られる」（127, p. 161）と注を付しながら、べつの何人かの例を書きくわえている。『フランス年代記』におなじような抜擢の例があらわれるページも注で結んでいる。史実を利用しながら自分の思想を述べたり、人間性を描いたりしようとする意識は、これらの注釈ではまだ明瞭ではないが、やがてモンテーニュの思索を導く原動力になるような興味の動きが、このような関連づけをおこなわせたのであろう。読書で学ぶ史実はこうして著者とはちがった観点から再構成される。『フランス年代記』を読んだころそのような再構成の意識をどの程度もっていたか、またその意識は『エッセー』の誕生に通じる類かどうかなどは明確ではないが、この読書態度が、みずからの問題意識にしたがって史書から実例を集めて構成する方向へ発展しうるのは確かである。『エッセー』の愛読者ならば、モンテーニュが高位の官職を断った人たちの例にメモを付しているのを見たときに、「自分の名誉を譲らないこと」（I-41）や「榮譽について」（II-16）や「高貴な身分の不便なことについて」（III-8）などの章をただちに思い浮かべるであろう。簡単な注釈による整理ではあるが、これらの章のような思想を展開する基礎になりうる作業である。このような注釈が彼の内部の漠然とした関心にすこしずつ姿形をあたえ、思想に成熟させ、やがて『エッセー』を創作する基礎になったと想像することもできるであろう。

こうして見ると、モンテーニュはただ歴史を正確に勉強するためにのみ丹念なメモを書きこんだのではないようである。彼にとっては史実はたんに過去の出来事ではなく、現実世界の延長であった。生き々と人間を感じとる感受性があるならば、それは現実の観察にひとしかった。人間の実生活を眺めるように歴史を読む態度によって、「この王妃の忍耐によってこの評議会の破廉恥がゆるされるわけではない」（145, p. 186）のように、史実は時によれば道徳的な判断の練習対象になる。あるいは、また、おなじような

視線によって歴史は人間観察の格好の場となり、モンテーニュは史実から人間性についてのマキシムを引き出す。町の攻略におけるアルカドという男の裏切りの話のところでは、「善良な者もまちがうことがあるのであろう。スペインではアルカドは裁判職の者の名前なのだから」（2, p. 23）と、人間の性状を認識しようとしている。実例——→道徳的、哲学的認識という形式が、読書の注釈にすでにあらわれている点に注意しておこう。『エッセー』の構成の基礎をなす思考法のひとつだからである。さらにこの形式の変形も注釈のなかに見られる。アルビ派の人たちがあやまった信仰を捨てるか火刑を選ぶか迫られたとき、死を選んだのに関して、つぎのような注が付されている。

それゆえ、殉教とは死ではなく死の原因をもって言う、と聖アウグスチヌスが説いているのは、まことに真実である。（24, p. 44）

この形式は史実から自分で認識を引き出す変形であり、古今の賢者の言葉を借りながら自分の意見を明確にしようとしているのである。この思索の練習形態も、のちに『エッセー』の構造にあられるひとつである。

『フランス年代記』のメモのなかには、史実を利用する態度がさらに進んだ形式も見られる。類似事実を集めること、史実を道徳的、哲学的考察の材料にすること、これら二種の行為の発展的な合成になっている注釈がある。

ここからつぎの論の根拠を導き出せるであろう。つまり、息子が自分の約束を履行しなければならない義務を、父親の命令の権威が免除できるかどうかという問題。わが国の歴史において法王や王や行政官たちが義務を免除している例はかなりの数にのぼっている。しかし父親の例はすくない。古代のローマやギリシアの人たちの、あの完全な徳にたち戻って見るならば、行政官はけっしてそうはしないどころか、むしろ逆のことにつとめたにちがいない。（3, p. 24）

このような注釈には、モンテーニュが史書に何を求めたかがよく現れている。歴史は彼にとって現実の経験の時間的、空間的な延長であり、人生において人間の直面する問題のひとつの解答を示している実例集の世界であった。彼はモラリストとしてそれを思索の材料にした。史実は彼の経験的な思索のよりどころであった。

ドゥゼムリによれば、『フランス年代記』に書き込みがなされたのは1564年である(7)。とすれば『エッセー』執筆のかなり以前であり、しかもおなじような丹念な読書はおそらく一度や二度ではなかったであろう。メモの書きこまれた所蔵本は、千冊を越えていたという蔵書のうち、ほかに二冊残っている。その一方は1578年2月25日、同年7月21日が読書の開始と終了の日付になっている(8)。他方は1587年に読まれ、メモの三分の二は下線やかっこなどの付加にすぎないので(9) 考慮の外におくならば、すくなくとも1564年から1578年のあいだ同じような習慣がつづいていたと考えられよう。つねに注意ぶかくメモや注釈を書きこんだのではないかも知れないが、私達が『フランス年代記』に見たような方法は、モンテーニュの読書による研鑽の核をなしていたにちがいない。1571年に「高等法院への隷従と公務の重責に倦み疲れていた」日々から解放され、彼は館の一隅の塔に作った書斎のなかで読書に耽ったであろう。しかしそれは『エッセー』のなかで強調しているような、ただつれづれを慰めるだけの行為ではなかった。ある本には数週間、数ヶ月をかけて『フランス年代記』のような作業をしながら、研鑽をつづけたにちがいない。とくにまだ『エッセー』という表現手段のなかった頃においては、それは精神的な活動として重要な意味をもっていたであろう。書物によって学ぶ知識を関連づけながら整理する目的もあったであろうが、しかしそれ以上の意味をふくんでいた。史家たちの記述の真偽の程度を批判し、判断する力を養ったのみならず、史実のなかに人間を感じとる感覚を磨き、人生と現実を読みとる認識力を発達させた。さらに読書の受動性を自己の精神の能動的な活動に変えた。あたかも実生活における観察や経験の反省と吟味でもあるかのように歴史を読む態度から生まれる注釈は、一種の思索の形態でもあった。それは史実にたいする思想的な反応の痕跡であり、モンテーニュの内部に無意識的に、漠然とひそんでいる興味を方向づけ、明確にしていったであろう。それは彼の内面で胎動しはじめた何かに姿形をあたえてゆく行為であったとも言えよう。

以上この第1節で検討したような体験を背景にして1572年頃より『エッセー』が書かれはじめる。次節からは初期の章を選びながら、作品の構造のなかに引退後数年間のモンテーニュの思索と著作の姿を尋ねてみよう。

第1章第1節(注)

- (1) II-A-22, pp. 81-100. II-A-27, pp. 111-113.
II-A-72, pp. 24-25.
- (2) II-A-22のp. 105と第7章を参照。
- (3) III-A-16, p. 159.
- (4) I-A-2, t. 12., p. 97 (5), pp. 154-155 (1).
- (5) I-A-2, t. 12., p. 162 (6).
- (6) 後者はI-A-2, t. 12. のページであり、前者はモンテーニュのメモにつけられている番号である。以下同様。
- (7) I-A-2, t. 12., p. 20.
- (8) I-A-2, t. 11., p. 300. なおメモの全容についてはII-A-67, pp. 312-351を参照。
- (9) II-A-67, p. 308.

2. 故事実例の収集における個性

無位無官の生活に入っておよそ2年後モンテーニュは『エッセー』を書きはじめる。1573年頃まで集中的に書きつづけ、この期間が執筆の第1期となる。従来この期の作品は没個性であると見なされている。章題に記したテーマにしたがって、故事逸話や史実を名句や詩句と綴りあわせているにすぎない。自己の経験を反省し、現実の世界に目をそそぎながら思索を練っているようには見えない。モンテーニュの個性の彩りは乏しく、彼の関心はもっぱら収集と記録に向けられているかのようである。『エッセー』はすこし注釈を付した、読書の知識の収録簿のような外見をしている。

ルネサンス期における知識を求める熱情は現代の私達の想像にあまるところがある。人間にかかわる事柄はすべてその渴望の対象であり、中でももっとも尊重されたのがギリシア・ローマに関する知識であった。人々は文学とか哲学とかにかぎらず、風習や生活の用具や装飾品などまで、輝かしい文化全体を知ろうとした。古典作品のみならず、古代の歴史や道徳的逸話に人々はつよく引かれた。それらは彼らの精神をまちがいなく豊かにし、高めるにちがいない宝であった。ユマニストたちは名著の翻訳と並んで、そのような宝を掘り集め、出版する仕事に励んだ。16世紀のフランスでは、ありとあらゆる種類の金言集、警句集、模範実例集、逸話集などが盛んに編纂された。たんなる百科事典的な収録にすぎないこの種の本の大流行は、ルネサンスという時代を非常によく表している。ラテン語で、フランス語で、外国人の編んだものさえ翻訳して、大部の選集があいついで刊行された。まとめてルソンと呼ばれるこの種の本は時代の欲求に答えたのち、やがて文学史から姿を消していった。それは知識にたいする尊敬と渴望から生まれた、きわめてルネサンス的な作品様式である。

周知のようにピエール・ヴィレーはルソンを研究することによって時代の潮流のなかに『エッセー』の誕生を位置づけた(1)。両者の類似性を明らかにしながら、モンテーニュは流行に倣ってルソンの類を作ろうとしたのであると結論した。こうして初期の『エッセー』は没個性であるという見方が実証的な研究によって確立され、伝統的な見解になった。作品にひそむ作者の精神の動きを敏感に察知するチボーデさえも、初期の『エッセー』に関しては固定観念に囚われたままである(2)。

ルソンの調査を含んでいない私達の研究はもちろんヴィレーを越える新説を提示できるわけではない。しかしながら私達の研究成果にもとづきながら、従来の見解にたいするい

くつかの批判を示すことはできる。ヴィレーにあってはルソンとの類似性を発見し、明確にするのが主眼であって、それ以上詳細な作品様式の理解には精力をそそいでいない。したがって、ルソンと似ているかどうかは別にして、まず初期の『エッセー』をもっと精密に把握する視点や分析概念を見つけなければならない。そうすれば、没個性と見なして満足してきた従来の見方とはことなる展望が開けるにちがいない。

考えてみれば、個性は突然不連続に生じるのではなく、非個性的なものの中から生まれてくる変容こそ人間の内的生命の神秘であろう。初期の『エッセー』がルソンに優る鮮やかな特徴をもっていないとしても、個性の誕生を準備している動きがそこに隠れているはずである。モンテーニュの精神はみずからの個性におうじて活動しつつ、著作に影響をおよぼしたはずである。『エッセー』の進化を描こうとするならば、その活動を捉えるのがひとつの要点になる。そしてそれがヴィレーにもっともかけている側面である。

内容が没個性的な作品にひそむ作者の精神の活動を見るためには、その内部構造に注目する分析方法がとりわけ適当であろう。第2節から第5節において、初期の作と推定されている章の構成とその根底にある論理を抽出し、それぞれについて著作の意味を考えながら、モンテーニュの思索の様子を明らかにしてみたい。

初期の作品のなかでもとくに非個性的なタイプは、古今の史実や逸話や金言がただ羅列されているだけであり、作者自身の思索を表現している言葉は皆無に近い。これらの章は読書から拾い集めた各種の実例の収録帳にすぎないように見える。現代人ならば著作や作品としての意義がどこにあるのか疑いたくなるであろう。たとえば一例として、第1巻第5章を開けてみよう。

第5章 攻囲された砦の大将は講和のために城を出るべきであろうか

ローマの地方総督補佐官ルキウス・マルキウスは、マケドニア王ペルセウスとの戦いにおいて、自軍の準備をととのえるために必要な残り時間を稼ごうとして、あれこれと和睦を提案した。たぶらかされたマケドニア王は数日間の休戦を承諾したので、敵が武装するのに好都合な余裕をあたえ、惨澹たる破滅の目に会った。しかしながらローマの元老院は、ただ勇気に優ることのみが勝利を得る正当な手段であると考え、この戦いぶりを醜く不名誉であると判断した。彼らはまだ次のような結構な金言を聞いたことがなかったのである。

敵にたいしてならば、奸策か勇気かの選択に誰がこだわろう。

我々はどうかと言えば、ローマ人ほど潔癖ではなく、戦の勝利を得た者を名誉ある者と見なす。そして、リサンドロスに倣って、ライオンの皮で用の足りぬときには、すこし狐の皮を縫いつけねばならぬと言う。奇襲のもっともありふれた動機はこの考えの実行に由来する。我々の言うように、和睦の協議や調印ほど大將が待ち伏せを警戒しなければならぬ時はない。それ故に、当代のすべての武人の口にのぼる規則では、攻囲された砦の指揮官はけっしてみずから講和に出かけてはならない。我々の父の時代に、ナンソー伯に抗してムーゾンを守ったモンモール殿とラシニー殿は、その咎で非難された。しかしまた、この理屈でゆくと、自分の側に安全と有利が残るようにして出かけるのならば、許されることになる。レスキュット殿が講和のために近づいてきたとき、レッギオの町でギ・ド・ランゴン伯のとった態度がその一例にあたる（ただしデュ・ベレー氏の言を信じるならばの話で、グィツチャルディーニは自分自身のことだと言っている）。というのは、その講和の最中に騒動が勃発し、レスキュット殿とつき従ってきた一隊は大変な窮地におちいり、アレクサンドロ・トリウルチオが殺されたのみならず、レスキュット殿自身も否でも応でも身の安全を図る最上策として、自分の要塞からほんのわずかししか離れなかったランゴン伯の後ろについてゆき、襲撃を避けるために伯爵の約束に身を任せて町へ入るしかなかった。しかしながら、さらにまた、攻め手側の言葉どおりに城を出て、非常にうまくいった者もいる。たとえばコメルシーの城でイギリス人に攻囲された、シャンパーニュの騎士アンリ・ド・ヴォーのように。攻城を指揮していたベルテルミー・ド・ヴォンヌは、外から城へ地下壕を掘りめぐらせ、爆破して城中の者をおしつぶすためにはただ火をつければ良い段になって、講和に出てくるのが身のためだと、先のアンリに勧告した。アンリは三人の間につづいて城を出てみると、自陣の壊滅がはっきりと目に示されたので、敵にいたく感謝した。彼とその一隊が降服したのち、坑道に火が点火されると、城は支柱を失ってことごとく崩壊した。（I-5, pp. 20-24）(3)

この章の内容にはモンテーニュ自身のものは皆無であると言っても過言ではない。彼はただ読書に拾った実例を綴りあわせているだけである。それでは彼はたんに知識にたいするルネサンス的な信奉からこの章を書いたのであろうか。金言や史実を集め、記録するの

が目的だったのであろうか。言葉に注意するだけではなんら知りようはないが、章の構造に隠れている特徴が十分に著作の意図を示している。叙述されたみつつの実例（ルキウス・マルキウス、ランゴン伯、アンリ・ド・ヴォの例）は、すべての武人の口にする規則（攻囲された砦の指揮官はけっしてみずから講和に出かけてはならない）を焦点にして組み立てられている。そしてその展開は「我々はどうかと言えば、ローマ人ほど潔癖ではなく」、「しかしまた」、「しかしながら、さらにまた」の連結の言葉にあらわれた特徴をもっている。つまりこれらの語句は当代の規則とか常識にはおさまらない側面を追ってゆく動きを示している。実例に埋まった平板な作品ではあるが、モンテーニュは規則とか常識の画一性の裏にあるさまざまな現実の姿を見つめようとしている。そのような動きに彼の思索がある。けっきょく「攻囲された砦の大將は講和のために城を出るべきであろうか」という主題についてはなんら判断が下されていないのであるが、彼はひとつの問題にひそむ現実の多様性を確認したことに満足しているのである。そこにこの章の著作の感情的な意味がある。

第1巻第49章は、習慣について論じている冒頭の短い部分のほかは、いろいろな実例の羅列にすぎない章であるが、列挙に先立ってモンテーニュはつぎのように言っている。

私は我々と同じであったり、違っていたりする昔の習慣を、ここにいくつか記憶にあるままに書きつらねてみたい。それと言うのも、人事のこのような絶えざる変化を脳裏に置くことによって、我々が習慣についていっそう確かな、いっそう明るい判断を得んがためである。（p. 452）（4）

実例の収集列挙がモンテーニュにおけるもっとも中心的な思想のもとに意味づけられている。世界の絶えざる変化を自覚することが確かな、明るい判断に通じるのである。ところで世界を時間の軸で見た「絶えざる変化」は、空間的に見たときには「多様性」となる。絶えず変化する「流動性」と規則化できない「多様性」は、彼の抱く人間観や世界観の根本的な性格をなしている。したがって実例の収集列挙は思索の重要な基本段階であったと思われる。この行為によって「同じもの」と「違うもの」との区別が可能になり、「流動性」や「多様性」の一面々々が明瞭に識別され、「いっそう確かな、いっそう明るい判断を得る」ことができる。この判別という行為は、現象の「流動性」や「多様性」から強い印象を受けているモンテーニュには、非常に大切であるように感じられたにちがいない。

混乱におちいらないうちにも、それは私達の想像する以上に深い意味をもった、思索の基本作業であつただろう。

絶えず変化する「流動性」と統一できない「多様性」は、思想というよりむしろ世界や人間にたいする基本的感情であつた。それは彼の生まれ、育つた時代を考えればごく当然かも知れない。周知のごとく当時のヨーロッパは、燃えるような知識欲に駆られたユマニストたちが復興させたギリシア・ローマ文明によって、時間的な奥行きを増し、空間的には、15世紀以来の大航海によって東西へみずからの世界を広げていった。しかも印刷術の発展が、ギリシア・ローマを始めとする地中海文化圏のみならず、インドやアメリカ新大陸などの遠く珍しい異国についても、つぎつぎと新しい知識を普及した。ルネサンスは近代最初の情報氾濫期であつた。『エッセー』のなかに実例として収められている故事、史実、人物、風俗習慣などは驚くべき世界的な分布を示している。ギリシア文明が展開し、ローマ帝国が発展した地域、ヨーロッパやアフリカ地中海沿岸国や地中海東方地域はもちろん、小アジアからインダス川まで広がるペルシア帝国あるいはアレクサンドロス大王領の地方、黒海とカスピ海の北方のスキタイ人の国、ローマ人が帝国の北方に見聞したゲルマニア、マホメットとイスラムの世界、ヨーロッパよりはるか以前に火薬と印刷術を知っていた中国、中央アジアの大征服者ティームール、オスマン帝国のサルタンたち、中世ロシアのモスクワ大公国、東洋のインド、発見されたばかりの南北アメリカ新大陸、これらの時代と国々にわたる社会と人間の種々相が、安易な進歩観や自国文化の偏見にもとづく価値体系によって整理されることなく、『エッセー』にあふれている。

しかもルネサンスの最初の世代ではないモンテーニュは激しい社会変動の時代を生きなければならなかつた。彼の世代はもはやギリシア・ローマ文化のルネサンス（復活）のなかに人間の輝かしいルネサンス（新生）を夢見てはいられなかつた。もはや未来に美しく生まれかわる世界を心から信じられる世相ではなかつた。大胆な大航海を聞いて人類の偉大な情熱と力強い可能性にただ感動すればよいような時代は過ぎていた。人間精神の高らかな凱歌と生命の歓喜と謳歌にはかげりが見えはじめていた。世界のすばらしい飛躍的な拡大はモンテーニュの世代では大きな動乱を巻き起こす力に変わった。彼の生まれたころ大航海はコルテスのメキシコ侵略やピサロのペルー略奪に代表される征服者の時代へ移り、人間の荒々しい欲望と国家の征服欲によって否応なく世界を変えていった。福音主義と呼ばれる運動をすすめた聖職者やユマニストたちは、ギリシア・ローマ文化を学んで得た知的な力と純粹な信仰の倫理的な力との協調によるキリスト教の刷新を願っていたが、ルタ

一の宗教改革は信仰の変革には社会体制の変革が伴わざるをえないのを明らかにした。ルター派の改革運動がフランスにおいて修道僧や小商人や職工などの下層階級に浸透するにつれ、伝統的な権力に刃向かって大きな社会変動を引き起こす力が醸成され、のちには王政による中央集権化を背景にした貴族層の政争がからみ、新旧両宗派の対立は社会全体を巻きこむ戦乱となった。さらにフランスの16世紀は社会の構造転換の起こった時代である。15世紀末からの経済の急速な復興がもたらした活発な商品流通によって、商人たちは富を蓄え、生産形態の進歩は資本家階級と労働者階級との分離を押し進めた。絶対王政の基盤を固めてゆく王権によって、かつての諸侯は俸禄で生活する官僚的貴族やたんなる土地所有者に変えられていった。そして経済史上いわゆる価格革命と言われるインフレーションが、このような社会階層の上昇と没落を加速し、激化した。

したがって世界の飛躍的な拡大とフランス社会の渦巻く動乱が、モンテーニュのなかに人間や世界にたいして流動性と多様性をつよく感じる基本的感情を育んだとしてもふしぎではない。内省と思索につれてこの感情に明確な姿形があたえられ、根底に流動性と多様性の特徴をもつ人間観や世界観の思想ができあがったのであろう。そのような特徴は初期にあらわれ、後期に到るまで連綿とつづいている。たとえば初期については、第2巻第1章を読むだけで明らかになる。それは章題からして「我々の行為の定めなさについて」と名づけられている。ほとんどの章が中期に書かれている第2巻において、初期に属するこの随想が最初におかれているのは、作者がこのような認識を重視しているからであると言えよう。おなじ操作は第1巻についてもおこなわれている。その第1章は「さまざまな方法によって人はおなじ結果に到る」と題され、ある目的を達するための確実な法則なぞありえないことを実例の列挙が強調するなかで、つぎのような意見が表明されている。

ほんとうに人間は驚くほど空虚で、変わりやすく、多様な存在である。人間について恒常的で包括的な判断をうち立てることはむづかしい。(1-1, p. 6)

第1巻の以降のほとんどすべてが初期に書かれていながら、冒頭に中期の作品が選ばれているのは、やはりモンテーニュがこの章の思想を重んじているからであろう。中期についてはこの小品のほかに、第2巻の最終章の末尾、つまり初版『エッセー』の結びを飾るつぎの文章を示すだけで十分であろう。

私は自分と反対の思想をすこしも憎まない。他人の判断が自分と一致しないのを見て腹をたてたり、意見が異なるからと言って人との交際が我慢できなくなったりはしない。それどころか、多種多様こそ自然のとりもつとも一般的な姿であるので、我々の考え方や思想の一致を見るほうがはるかに珍しく、はるかにまれであると思っている。人間の顔と同様、すべてがぴったりとおなじである意見が世界にふたつとあったためしはない。そのもつとも固有の性質がすなわち多様と不一致である。(I I - 37, p p. 652-653)

後期に書かれた第3巻からおなじような特徴を探すのはさらにいっそう容易である。最終的な認識の態度を述べていると見なしうる、「経験について」を読むだけでも良い。この章は始まるとすぐ、真理の探究の根幹をなす理性と経験についてつぎのような見解を表明している。

理性はじつに数多くの姿をとってあらわれるので、我々はそのいずれに依拠すればよいのか分からない。その点では経験も理性に劣らない。現象はつねに似ていないがゆえに、我々が類似性から引き出そうとする結論は不確実である。(I I I - 13, p. 2) (6)

すこしあとの文章では、15年間あまり司法官を勤めたモンテーニュは法律を例にとりながら、いかにも彼らしい主張をしている。

我々の立法家たちは個人の行為の種類を10万と選び、それに10万の法律を結びつけて何を得たであろうか。この数も人間の行動の限りない多様さには遠く及ばない。我々がいくら法律を考え出そうと、現実の変化に追いつけはしない。仮にその100倍を追加したとしても、将来生じる事件のひとつとして、選ばれ、記録されたおびただしい実例のどれかにぴったり該当するようなことはないだろう。異なった見地からの判決を引き起こす特殊性や差異がどこにも残らないほど正確に対応させ、適用できる例が見つかるようにはならないであろう。たえず変化している我々の行動と固定した不動の法律とはほとんど関連がないのである。(I I I - 13, p. 3)

基本的感情とも認識論とも言える側面においてこのように感じ、信じているモンテーニュにとっては、流動性と多様性を理解することが思索と経験の基礎になり、中核にならなければならなかった。この特徴もまた中期にも後期にも一貫して見られる。たとえば、

我々の母なる自然の大いなる姿を、その尊厳をなんら損なわずまるで一幅の絵を眺めるように思い描く人、その顔のなかに全体的な絶えまない変化を読みとる人、そのなかの自分のみならず一国全体をも非常に細い針の一点のように見る人、このような人たちのみが正しい大きさでものごとを評価できるのである。(I-26, pp. 207-208)

今までなんども言ったように、生活を陶冶するためには、たくさんの他の生活の多様性をいつも精神に提示し、我々の本性がとる姿のたえまない変化を味わわせてやる以上に優れた学校を私は知らない。(III-9, p. 166)

したがって、実例の収集、羅列にすぎないような初期の作品も、以上のようなモンテーニュの内面と思想の脈絡のなかに置いてみるならば、その著作の意味が明らかになる。認識を試みるほとんどすべての対象に彼は流動性や多様性をつよく感じる。それらは容易には秩序だてられそうにもない。彼はまず対象の流動性や多様性の様相を具体的にひとつひとつ判別し、確認しようとする。この行為が思索の基礎にならなければならないのである。外見は実例の収集、羅列のようであっても、その章の構造はしばしば流動性と多様性の感情のなかで思索する姿をあらわしている。たとえば、最初に分析した第1巻第5章のほか、実例の列挙が対照と比較による判別の構成になっている章(例：I-13)、各部分の小論と実例が、「しかし(Toutes-fois)」、「だがしかし(Si est-ce que)」、「実をいうと(Pour en dire le vray)」などの連結の語句が示しているように、前の部分を否定しながら展開してゆく、多様性を確かめる構成の章(例：I-12)、あるいは読書で学んだ思想を収録する場合、相反する意見を組にして並べ、彼自身が判断をくだすに先立って区別しながら秤にかけているような章(例：II-3)など、実例の収集、列挙には、モンテーニュが基本的感情に従いながら「いっそう確かな、いっそう明るい判断」をめざしている姿がうかがわれる。

たんなる実例の羅列のように見られがちな章にも、流動性と多様性の感情に従った彼な

りの著作の実践が隠れているのであるならば、流動性や多様性と関連の強いテーマの章がおなじような構成をいっそうはっきりと示すのも当然であろう。たとえば「我々の判断の不確実なことについて」（I-47）においては、兵士の武具は豪華にするのが良いという考え方、実例 \longleftrightarrow 武具は必要な程度にとどめて質素にすべきであるという考え方、実例、敵の領土に攻め入って敵軍を撃つのが良いという意見、実例 \longleftrightarrow 敵軍は自国内で迎え撃つべきであるという意見、実例、章全体はすべてこのような構造から成っている。モンテニユ自身良否の判断をなんら下さず、戦における種々の考え方のいずれも逆の実例があり、逆の失敗例も成功例もあることを示しながら、最後に「我々の判断の不確実なことについて」の小論をつけくわえている。つまり彼は流動性や多様性を越えた統一的な真理を求めるよりも、むしろこれらの現実を直視しながら「我々の判断の不確実なこと」を明瞭に自覚した知恵を身につけようとしていると言えよう。

章の構成という全体の姿にこだわるのを止め、すこし細部に目をやり、部分々々の結合や展開の論理を分析したときにも、おなじような傾向が見出される。それは基本的感情に導かれた章の構成とまったく同様の特徴であり、流動性あるいは多様性の論理と名づけることができる。今までとちがった著作のタイプを検討しながら、このモンテニユ的な論理に注目してみよう。

多数の実例を関連づけながら収録するもっとも手軽な仕方は、内容の等しいものをまとめることであろう。初期の『エッセー』にはこのようなきわめて初歩的な著作形態が見られる。たとえば「睡眠について」はつぎのようにはじまる。

理性は我々にいつもおなじ道をゆくように命じてはいるが、しかしながらおなじ歩調で進めとは言っていない。賢者は人間通有の情念に負けて正道を踏みはずしてはならないが、これに譲歩したり、このために歩みを速めたり遅めたりしたとしても、自分の義務に反するわけではない。無感動な不動の巨像のように突っ立っていなくともよい。徳の権化となった人でさえ、食事にゆくときよりも突撃するときのほうが、脈はいっそう激しく打つと思う。それどころか、興奮し、発奮するのも必要である。したがって、偉大な人物たちが大事の実行にあたり、まったく普段の態度どおりに平然とし、睡眠時間が短くさえならないのを何度か見て、私は稀有のことと感心した。（I-44, pp. 412-413）

そしてあとはただアレクサンドロス大王やオトー皇帝などの例を列挙しているだけである。しかも章の6分の1ほどにすぎない冒頭の文章も、ヴィレーによれば、セネカの『道徳書簡』の一部を借りて発展させたものである(7)。この借用と論述によって統一的な意味を付与し、実例を関係づけ、秩序づけようとしたのであろう。きわめて簡単な著作形態ではあるが、しかしともかく受動的な読書から積極的な思索へと一步を踏み出している。章に収録する実例を選択するためには、脈絡となる共通の意味を識別しなければならない。その考察を通して自身の興味の所在がすこしづつ明らかになり、その興味の重みも測られることになる。茫漠とした内面の世界が明確になってゆく。読者は別にして、すくなくとも作者にとってはこのような意義があるのは否定できない。

決まった方針に沿って実例を収録するだけの行為にも、個性の活動が介在するからであろうか、この章の列挙のなかにいかにもモンテーニュらしい乱れが見られる。冒頭の論からすればこの章におさめるべき実例は、大事を控えていながらよく眠ったということが普通の落ち着きを乱さない偉大さをあらわしていなければならない。ところが、ぐっすり眠ったために非難される結果を招いた例もつけくわえられている。モンテーニュはみずからの立てた法則性を強化したり、証明したりするばかりではなく、簡単には法則化できない現実の多様な一面を指摘するのを忘れたくないのである。私達はこのような視点の移動と思考の展開を多様性の論理と呼ぶことができるであろう。彼はみずからの抽象的な思考作用がうち立てる仮説と合致しない事実には注意をはらうのみならず、むしろそのような側面を発見するのに喜びをおぼえているようにさえ思われる。たとえば「弁舌の遅速について」では、弁論の術で軽妙さと敏捷さの才能のある人は弁護士に向いており、ゆっくりと論を練る準備の必要な人は説教士に向いている、と冒頭で自分の意見を明らかにする。しかしながら彼がその直後に記しているのは、「しかし法王クレメンスと国王フランソワのマルセイユにおける会見ではこれとまったく逆のことが起こった」(pp. 40-41)と、かならずしも彼の論どおりにはゆかなかった実例である。あるいは「自分の名誉を譲らないこと」においては、万人にあって名誉と栄光にたいする執着ほど強いものはなく、これらを他人に譲る人はほとんど見られないと述べながら、後に引用する実例はすべてその逆の例、つまり自分を犠牲にして他人の名誉や栄光を守ったり、高めたりした人たちの話である。これらふたつの章のような例証は、自分の論の説得性を増すためには明らかにマイナスになるはずであるが、モンテーニュの基本的な感情に忠実な、自然な思考の流れはこういう風になるのであろう。

もちろんこのような特徴は実例の列挙にだけ見られるわけではない。意見の提示の仕方にもうかがわれる。章の最後が「しかし」の思考法によって変化しながら終わっている例を挙げてみよう。これはいかにもモンテーニュらしい終わり方である。初期としては比較的長い第1巻第23章は、習慣というものの特性について考察しながら、一度社会に受け入れられた法律を変えるのは益よりも害が多いことを主張している。しかし最後になると、ときには法律を変更しなければならない非常事態もあると明言したのち、実証のための実例を記している。あるいは「臆病の処罰について」では、兵士を臆病さのゆえに厳罰に処してはならないという主旨で展開しながら、彼は最後につきのように書かずにはいられない。

しかしながら、普通の限度をまったく越えた、明白ではなはだしい無知あるいは臆病さが見られるときには、悪意と狡智の十分な証拠と見なし、これを罰するのは当然であろう。(I-16, p. 81)

したがってモンテーニュの思考の展開は、だんだんと肯定を強化し、論理的な整合性や真理性を高める方向へ向かうよりは、断定によって除外される事実や見解を追ってゆく傾向がある。どうしても彼の目は定義や法則からはみだす現実の側面へ向かうようである。彼の思索は容易には現実の多様性を捨象できないようである。展開の節をなす接続詞で形容するならば、この傾向は「しかし」(Mais, Toutes-fois, Si est-ce que など)の論理と呼ぶことができるであろう。この「しかし」は以前の部分を否定し去るのではなく、一方に別の事実も存在し、別の意見もありうることを示すものである。論が硬直した断定になるのを避ける論理である。つねに現実の流動性や多様性に視線をそそいでいるがゆえに、判断を固定させてしまうのを嫌う論理である。これは角度を変えて言うならば、社会に通用している常識や規則を批判する思考を示している。そこに漏れている現実の諸側面や見解を明らかにしながら、この思考は批判的な作業をつづけてゆく。しかしながら、それは正面きって常識や規則を破壊する行為ではない。うち立てられ、固定された過去の思想をもう一度現実の流動性と多様性のなかに置きなおし、その妥当性に疑問を投げかけ、徐々に信頼性をはぎとりながら崩壊させる批判である。この論理はまた別の一面から言えば、精神の柔軟さのあらわれでもあろう。モンテーニュはみずからの思考の抽象と総括の作用をも「しかし」の論理で抑制することによって、自分の意見にたいするこだわりを捨て、

現実の多様な側面を考察してゆく。考えるという作用がふくむ、自己肯定の硬直におちいらないようにする。このような論理の思索をくり返しながらか、思想が広がり、豊かになり、判断力の成熟につれてその深みが増してゆくであろう。しかしながらこの論理は構築や体系化には向いていない。この相違は、たとえば論証を導く接続詞に注意しながら、モンテーニュの1ページとデカルトの1ページを読み比べるだけでも察しがつくであろう。チボーデは「攻囲された砦の大将は講和のために城を出るべきであろうか」(I-5)、「講和のときは危険であること」(I-6)、「毅然たる態度について」(I-13)などに注目し、最初の計画ではモンテーニュは世間に自分を売りこむのも兼ねて、戦争をする貴族のための実例集を編もうとしたのであろうと推定した(8)。しかしながら、第1巻第6章のようにはっきりと教訓を示しているのが例外的であり、他のふたつの章のように結局はどのような態度をとろうと確実な結果は望めないことを証明しようとしているような実例集が、軍人によろこばれるかどうかは大いに疑わしい。結論のあいまいな思考が戦場に赴く人たちに歓迎されるとは考えがたい。モンテーニュの世間にたいする認識はそれほど甘くはなかったであろう。チボーデ自身明快な解答が不可能であるというところに落ち着く展開の特徴に気づいていないわけではないが、戦争をする貴族のための実例集という仮説を立てる誘惑に抵抗しえなかったのは、初期の章の十分な分析による検討をつづけなかったからであろう。初期の著作の論理はすでに実例や知識のたんなる収集に甘んじているような性格ではない。今まで信じられ、固定され、しばしば形骸化した過去の真理や規則をもう一度現実の流動性と多様性のなかにもどそうとする、批判精神の運動である。貴族むきの章においても例外ではない。当時の剣の貴族の話題になったにちがいない戦陣訓なども、おなじように現実の流動性と多様性のなかにも置きなおされる。チボーデの指摘したようなテーマの共通性が見られるのは、ひとつはモンテーニュに身近な話題だからであり、ひとつは、すべて戦に関する実例でできている「我々の判断の不確実なことについて」(I-47)の最後に述べられているように、「事件とその結果は戦争においてさえほとんど運命に左右される」(p. 442)からであり、そして「よく考えてみれば、我々の思案や決心もまったくおなじように運命に左右されている」(p. 443)からであろう。つまり、世界と人間自身の流動性と多様性に起因する不確実性や偶然性の代表的な実例を、戦争がしばしば提供しているからである。心情的にも思想的にも、さらに思考法的にも、初期の彼が好んで戦争関係の実例を選び、思索の対象にする十分な理由がある。チボーデの仮説に合致する章の数は、これらの内的な理由よりも重視しなければならないほど多量

なわけではない。ただ剣の貴族むぎの実例集を編むためであったと見なすのは、表面的な、狭い理解であろう。

「しかし」の論理は先に基本的感情と呼んだモンテーニュの内面と軌を一にする特徴である。後者と性格をおなじくする知性の傾向である。成長期の歴史状況が深く浸透して基本的感情となり、その知性へのあらわれがこのような論理となったのか、それとも歴史状況はただ天性の傾向を強めたにすぎず、彼の個性がこのような感情や論理に顕著にあらわれているのか、私達はいずれを採り、いずれを主張するつもりもない。あいまいな手がかりしかない、本質的で原理的な決定にかかずらうつもりはない。16世紀のフランスの歴史状況とモンテーニュという人間の個性が触れあったところに、流動性と多様性を特色とする感情や論理が生まれたと考えるだけで私達には十分である。そして、没個性と見なされてきた初期の『エッセー』にひそむ個性的な活動と著作の意味が明らかになれば満足である。私達の分析と論証はまだはじまったばかりであるが、この第2節だけでも、伝統的な見解の欠点について納得していただけるのではないだろうか。ヴィレーのように、実例の収集と記録のタイプの章には「モンテーニュ自身のもものは何も入っていない。誰でもこれらを無限に増大できるであろう。これらには何の個性もないのであるから」(9)と言い切るのは単純すぎるであろう。またランソンもおなじように、「彼は珍しい、あまり知られていない、風がわりな、信じがたい事実を集めるのに専心した」(10)、「まだいくぶん子供じみた好奇心がこれらの章を誕生させたことは否定できない」(11)と説明している。たしかにモンテーニュにはそのような好奇心が大いにあった。しかし、彼がただ事実の収集に専念したとしか見ないのはまちがいである。あるいはバラーズの言うように、初期の章のほとんどは「書物から得た実例のつぎはぎ細工」(12)であるとしても、この特徴がすべてではない。全体がまったく没個性なわけではない。モンテーニュの個性の活動がなんら著作に影響を及ぼしていないわけではない。故事実例の収集と記録のタイプの作品が、当時のルソンと比較してなんら際立った個性をもっていないのが事実であろうと、あるいは後期の『エッセー』や文学史に残った他の作品と比べればきわめて価値の低いものであろうと、これらをもって潜在している個性の活動を見落としてはならない。私達がこの第2節で指摘したような特徴は、他との比較にたえうるほど個性的な表現をとっているわけではないが、モンテーニュという人間とその思想の脈絡において理解するならば、正に個性に直結している。したがって個性的な活動として作品評価のなかに組み入れなければならない。初期のもっとも没個性に見える著作の実践もモンテーニュの個性の活動を誘っている。

このような側面に気づくならば、ヴィレーのようにただ愛読書の影響だけから個性の開花を見る狭さを訂正できるであろう。この節で見たような、著作行為自体がもたらす個性の誕生と活発化を、愛読書が促進したと考えるべきであろう。たしかに初期の『エッセー』は器も材料も借り物であって、独創的な創造物ではない。しかしながら非個人的な借り物によって進められる個性の活動という二面性を捉えなければ、初期の『エッセー』を理解することはできない。

第1章第2節（注）

(1) I I-A-69, t. 2., pp. 7-70.

(2) I I-A-65, pp. 44-87.

(3) 執筆期の区別をしなければならないときには、第1巻と第2巻についてはI-A-9の1580年版からの引用である。

(4) この章は初期の作ではないかと推測させる理由がいくつかあるが、決定する証拠は見つからないと言う。ここで、執筆年代が不確実な章や部分に関する、私達のとりあつかい方の原則をのべておこう。ヴィレーによれば、初版の出版に先立ち、中期においても、初期の作品にたいする加筆訂正がおこなわれたらしい。とすれば、たとえ彼が源泉の研究によって執筆年代を決定している章であろうと、その細部については、厳密に言うならば、つねに中期の加筆の可能性があることになる。しかし、この点は注意が必要ではあるが、ヴィレーの執筆年代の推定を利用した『エッセー』研究をいちじるしく困難にするわけではない。たとえば、私達が第1巻第5章の著作の意味を考察する出発点にした、「我々はどうかと言えば、ローマ人ほど潔癖ではなく」、「しかしまた」、「しかしながら、さらにまた」などの語句は執筆年代の推定のしようがなく、中期の加筆の可能性を完全には否定できない。しかしながら、実例をつないでゆく展開から考えて、これらの語句が中期の加筆である蓋然性はきわめてひくい。しかも、たとえそうであったとしても、この章の著作の意味についての私達の考察はいぜんとして有効である。

第1巻第49章の冒頭の論は、この章が初期の作であるとしても、のちの中期に書きかわられたのかも知れない。このような場合、私達はつぎのような理由で、初期の著作の意味についての考察に援用できると考えた。この章の後半のような実例の羅列はもっとも初歩的な著作のタイプであり、中期にもまだ一部に見られるとは言え、初期の一大特徴であるのは否定できない。このような著作の意義が意識化され、文章で表明されたのが中期であったとしても、その考え方が初期の著作をうまく解明するならば、有力な傍証になる。明瞭な自覚に達したのは初期ではなく中期であるとしても、モンテーニュをそのような著作へ向かわせた動機を理解する手がかりとしては有効である。背景にあった無意識的な動機が、著作を重ねるにつれて明瞭な自覚になっていったと考えられるからである。したがって、このような傍証の類はかならず同時期のものでなければならないわけではなく、要は初期に属するのが明らかな事実との関連のつけ方であり、これにもとづく推論の展開の仕方である。このように、執筆年代の不確実性は、多くの場合、研究に普通に付随する問

題点に帰着する。

なお、ヴィレーの執筆年代の推定はI-A-8やII-A-69で知ることが出来るが、参照しやすく詳しいのはI-A-4, t. 4. である。特別にことわらないかぎり、私達もこれを利用している。

(6) 後期のテキストについては、すでに述べたこの論文の方法に従って、I-A-10のページを表示している。

(7) I-A-4, t. 4. , p. 135.

(8) II-A-65, pp. 59-60, p. 62.

(9) II-A-69, t. 2. , p. 42.

(10), (11) II-A-41, p. 110.

(12) II-A-6, p. 54.

3. 思索の現実性

館の一隅の塔がモンテーニュの思索の場であったが、その空間はルネサンス期の該博な知識によって古代ギリシア・ローマやこれらの文化圏はもちろん、中近東やアジア、さらには南北アメリカ新大陸の世界まで包みこんでいた。塔のなかの勤勉な読書にあらわれるこれら諸地域の実例が、さしあたり彼の思索の世界の現実であった。しかし別の観点から言えば、この特徴が初期の『エッセー』について知識の没個性的な収集や思索の不在などの印象を押しつける。読書から拾い集めた知識にすぎないものを単純に実例と見なしてよいのであろうか。それを現実と同一視し、現実の流動性とか多様性とか論じるのはおかしいのではないか。前節を読みながら、このような疑問をいただいた人がいるにちがいない。初期のみならず全期にわたってこの問題は『エッセー』の著作行為を捉える重要な点である。のちに触れるように、実例にたいするルネサンス期の考え方は研究されてはいるが、その成果が『エッセー』の分析や評価に十分に生かされていない。たとえば、初期の著作行為を分析するとき、どのような構成要素を想定し、注目すればよいのであろうか。その工夫がまだほとんど練られていない。作品の構成要素としてヴィレーは、モンテーニュの意見、読書から集めた実例、彼自身の経験、の三種類しか考えていない(1)。つまり最後の要素においては、他人を観察して書いた話と自己自身にたいする内省によるものが区別されていない。これら両者の相違を曖昧にしておくならば、自己の観察と描写が他者にたいするのとはちがった意味を帯びて存在している『エッセー』を分析する上にかなり重大な影響を及ぼす。ランソンは読書、経験、自己自身への内省を基本的な要素とし、これらの結合によって『エッセー』が構成されると説明した(2)。しかし彼はこれらの要素と関連の存在を指摘しているだけであり、新しい作品分析の参考にはほとんどならない。まして、経験や自己自身への内省という要素が稀である初期の『エッセー』を捉えなおす指針を示していない。ヴィレーよりのちはじめで随想の展開の詳細な分析によって本格的な研究をおこなったトゥルノンは、随想の展開に占める自己描写の機能を分析の対象として設定していない(3)。彼の現在の関心の焦点がすこし異なっているからでもあろうが、やはり、やがて考えなければならない重要な欠落であろう。

したがって、ここで私達の実例の捉え方と作品分析の視点を述べ、今後の批判と改良に委ねよう。従来から明確であったように、作品の構成要素として、とくに初期においては実例の代表として、書物から集めた史実や逸話や風俗習慣の諸例がある。これらをまとめ

て読書実例と呼ぶことにしよう。さらに、書物の利用の仕方として、もう一点注意すべきであろう。書物で学んだ偉人の意見や思想をどのように著作に組み込んでいるか。モンテーニュはモラリストであり思想家なのであるから、この点に注意するために、別に思想例という要素を設定すべきであろう。つづいて中期のころから、自分の生きてきた現実のなかから抽出した実例がだんだんと多くなる。これを見聞実例と名づけよう。おなじように経験についての反省ではあるが、自己認識や自己描写が重要なテーマである『エッセー』においては、自分自身の行動や心理を観察し、記述した部分は自己実例として区別すべきであろう。これらの要素を関連づけながら、あるいはこれらの要素から刺激を受けながら記述した部分が、モンテーニュが実例について吟味し、解釈し、随想へ発展させた文章である。これらは私見と名づけてまとめることにしよう。

私達と同一の傾向の『エッセー』研究がすすむにつれ、やがてこのような構成要素の設定では粗雑すぎるようになるにちがいない。簡単な用語では捉えきれない側面や選別できない境界の領域に重要な問題がひそんでいるかも知れない。しかし、現段階ではこれらの分析概念が、従来の研究とはすこしちがった成果をもたらしてくれるであろう。初期の著作の意義をより明らかにし、『エッセー』の進化、特に初期から中期への進化をより明確に把握しうる利点は含んでいるように思われる。

初期の著作法について考察をつづけよう。モンテーニュはただ読書実例を集めて整理するだけでなく、しばしばひとつの実例の宿す意味に深い関心を払っている。章のなかの複数の実例が同一の価値のまま並んでいるのではなく、ひとつに焦点があてられ、これを解釈することに思考が集中している。たとえば「我々の幸福は死後でなければ判断してはならない」（I-19）は、捕らえられたクロイソス王が死刑に処せられる瞬間「おお、ソロンよ、ソロンよ」と叫んだという話ではじまる。そして前半は、この言葉を伝え聞いたキュロス王の解釈を紹介したあと、他のいくつかの読書実例で立証しながら、その解釈のもっともである理由を述べる。後半に到るとモンテーニュはクロイソス王の言葉の意味について自分自身の解釈を試みる。短い章ではあるが、ひとつの実例の意味にたいする関心が一貫している。

読書実例に宿る意味の解釈に努力する態度は、クロイソス王の言葉のように謎めいたところのある場合に限らない。どのような実例であろうと、少なからざる意味を示唆している。知識として受け取るのではなく、現実の一断面として眺める姿勢とその内部に徹する眼光を具えている者ならば、ひとつの読書実例のなかにも人事の諸側面を読みとることが

できる。たとえば「理由なく砦を固守すれば罰せられること」においては、兵法上とても守り切れない砦を死守しようとした人々を死によって罰したという実例のなかに、モンテーニュは勇気の限度という考え方と徳の限度を見極めるむつかしさを汲みとるのみならず、理由なく砦を固守したかどうかの判断を左右する、生きた人間の心理に目を向ける。つぎのような実例から、

モンモランシー元帥はバヴィアの攻囲のとき、ティチノ河を渡って聖アントニオの郊外に宿営する役を任せられたが、橋の一端にある塔が肉弾戦になるまで抵抗したので、その中にいた全員を絞首刑に処した。そののちにも、王太子殿下に従ってアルプス越えの遠征をし、ヴィラノ城を武力で奪いとったとき、怒り狂った兵士によって城中のすべての者がめちゃくちゃに切り殺されたにもかかわらず、生きのびた大将と旗手をおなじ理由で吊るし、絞殺した。マルタン・デュ・ベレ大将も、この地方を統べるトリノ総督であったころ、サン・ボニ大将にたいして、この人の残りの部下が落城の際虐殺されたにもかかわらず、おなじ処置をとった。(I-15, pp. 75-76)

モンテーニュは事件の綾を織りなす人間の性状を以下のように描きだす。

しかし、城塞の強弱についての判断は攻め手の勢力との比較、評価によっておこなわれる。と言うのは、2丁のカルバリン長砲にもちこたえるのが関の山であるのに、30門の大砲を待ちうけるのは気違いじみているからである。常勝君主の偉大さや評判や人々の払う尊敬などがさらに考慮に入る場合には、こちらの方面にすこし秤を傾けすぎる恐れがある。おなじような理由でつぎのようなことも起こる。チムールやマホメットなどの東方の君主や今もいる彼らの後継者たちの慣習にしている勧告や挑戦の形式が、誇り高く傲慢で、野蛮な命令に満ちているように、自分自身と兵力に絶大な自信をもっている人たちは、自分に刃向かうに値するものなどおおよそ何もありえないように思われるので、勝利のつづく限り、抵抗に出会えばすべて刃にかけてゆく。

(同、pp. 76-77)

これらの意見や描写がとりたてて言わなければならないほど立派なわけではない。しか

し、表面的な意味の類似性から読書実例を綴りあわせるのとは明らかにちがった態度が見られる。このような吟味と解釈には、読書実例のふくむ現実の内部へ踏みこんだ観察と思索がある。読書実例はこうして現実の複雑な相のもとへ帰り、生身の人間の生気をとりもどし、その心理の陰影を帯びてくる。のちの中期ではあるが、モンテーニュは優れた歴史家か、さもなければきわめて単純な歴史家を好む理由をつぎのように述べている。

単純な歴史家は何か自分のものを混ぜる力はなく、知りえたものをただ注意ぶかく勤勉に何でも集め、取捨選択をくわえずにすべてを誠実に記録するので、真実の認識に関してはまったく我々に判断をゆだねる。・・・(中略)・・・それは裸で形の定かでない、歴史の素材である。そこから利益を引き出せるかどうかは各自の理解力しだいである。(II-X, pp. 117-118)

単純な歴史家の記述であろうと、「誠実に記録」された「歴史の素材」の裏に人間の躍動を感じとれるならば、無味乾燥な事実の羅列ではなくなる。先ほどの吟味と解釈にもおなじような感覚が発揮されている。読書実例はモンテーニュのこの感覚で捉えられ、生きた現実が変わるのである。

初期の『エッセー』に挙げられている実例の大半は書物から得た知識であり、作者自身の経験にもとづいた事実は少ない。しかも、彼自身の思索から生まれた意見も、多くの場合、収集した知識の陰からかろうじて顔を見せているにすぎない。この点では初期の『エッセー』はたしかに書物偏重であって、経験的な現実から生まれているとは言えない。しかしながらこの傾向をもって直ちに、初期のモンテーニュが経験とか現実を軽んじていたと見なすのは早計であろう。成長したのちの時期に初めて経験主義者になったと考えるならば、読書実例にたいする彼の思索の重要な側面を見逃すであろう。初期においても彼は「経験」や「現実」を重んじていた。「事実」こそ実り多い思索をもたらす宝庫であった。読書実例の収集も、「事実」によって判断力を磨き、思索を練ろうとする精神にもとづいていた。初期のモンテーニュが選んだ「事実」は読書実例の「現実」であったが、これは理由がないわけではない。

初期の著作全体におよぼ明確な方法論をもっていたかどうかは明らかでないが、彼は自分なりの価値評価にもとづいて読書実例を目下の思索の対象にしていたようである。たとえば、抽象的な議論から話を転じるところに、つぎのような前置きがある。

だが実例に移ろう。これこそ私のような非力な者が追うにふさわしい獲物である。

(I-14, p. 67)

たしかに実例 (exemples) をいかに活用するかは、初期の著作上の重大問題であっただろう。いかに実例に学ぶかは、「非力な」初心のモンテーニュの方法的な課題であったにちがいない。つぎの言葉はさらに詳しく実例と著作の関連を語っている。

以上が私の話したかった、みつつの真実の物語である。これらの感動的で悲劇的な魅力は、読者を喜ばすために想像にまかせて捏造する物語に劣らない。私はその仕事に従事する人たちがなぜむしろ書物にあらわれる無数の、非常に面白い話を選ぼうとしないのかふしぎに思っている。そのほうが苦労も少ないし、人にもたらす喜びも利益も大きいであろう。これらが関連しながら一体をなす本を作りたいと思うならば、別の金属をはんだづけするように、自分としてはただ接着剤を提供しさえすればよい。そして、作品の美的な要求に従って修正をくわえ、配置を工夫しながら、この方法によってあらゆる種類の、まったく真実の出来事を積みかさねてゆけるであろう。ほとんどおなじ仕方でオヴィディウスは『変身譜』の各部分をむすびつけ、組み立て、アリオストはあれほど多くの、さまざまな説話をひとつづきにまとめあげた。(II-35, pp. 587-588)

初期の『エッセー』の中心材料である読書実例（「書物にあらわれる無数の、非常に面白い話」）が、ただ興味（「喜び」《plaisir》）の上からだけではなく、価値判断（「利益」《profit》）の上から評価されている。著作についての方法的な自覚が明瞭に読みとられる。残念ながらこの章の執筆年代は推定できていないが、しかし、たとえ中期であるとしても、初期にモンテーニュがある程度的方法的な自覚をもっていた可能性はきわめて強い。引用の文章で彼の勧めている作品形式が正確に『エッセー』のどのような構成に対応するのは断言できない。その点で彼の言葉の曖昧さは否定できない。しかしながら、つぎのように推察することはできるであろう。まず第2巻第35章の構成は、数行の前置きにつづいて、章題にふさわしいみつつの実例がかなり詳しく紹介されたあと、上の言葉が書かれている。したがって、きわめて初歩的な利用の仕方について言っていると思われる。また、基本的な特徴から見れば、「作品の美的な要求に従って修正をくわえ、配置を

工夫する」以外は、「自分としてはただ接着剤を提供するだけ」で、読書実例を「積みかさねている」構成は、初期の非常に多くの章にあてはまる。したがって、第2巻第35章が中期の作であるとしても、上の言葉は初期の著作について、あるいは中期にもなおおなじような著作をおこなうことについて弁明していると考えてまちがいはないだろう。とすれば、初期のほうに圧倒的に多い著作のタイプについて中期に突然方法的な意識をいだいたと考えるより、なんらかの程度は初期にもっていたと見なすほうが自然であろう。「実例」こそ「非力な者が追うにふさわしい獲物」であるという自覚の周辺には、明瞭さの程度に相違はあるとしても、興味の上からのみならず価値判断の上からも読書実例を重視する方法的な意識があったにちがいない。この点についての基本的な姿勢は頑固なまでに一貫していたと思われる。たとえば、書評の章とも言える「書物について」(II-10)において、「ただ面白いというだけの本」(p. 102)としてボッカッチョやラブレの名を挙げ、それ以上の言葉を費やしていない。現代の私達には承服しがたい、このような書き方と評価の仕方も、今検討したばかりの基本姿勢からすればなんらふしぎではないのが分かるであろう。あるいは、読書実例に依存しなくとも自分の随想を展開できるようになった後期や晩年においても、モンテーニュは以前のテキストにたくさんの読書実例を加筆している。この点についてヴィレーは博学癖をまだ抜けきっていないとか(4)、老後の楽しみとか(5)のように解釈しているが、重要な側面を看過している。その作業は初期から一貫している、「実例」という「事実」にたいする評価と執着をあらわしていると考えべきであろう。いかに見聞実例や自己実例にもとづいて随想を展開できるようになろうとも、彼の読書実例にたいする評価は変わらなかったのである。それが「事実」を重視する思索の重要な要素であるのに変わりはないのである。

モンテーニュが読書によって実例を集めるのはけっして知識を誇るためではない。事実にもとづいて思索するためである。初期における彼の著作と思索の行為を理解するためには、この要点をしっかりと把握しなければならない。単に知識にすぎないか、それとも思索の材料であるかという相違は、対象自体の性質よりもむしろこれを取り扱う態度に左右される。それは子供の教育における歴史の勉強の仕方について彼の指摘しているとおりである。

これは、ただ楽しむ以外の目的を知らない人もいるように、人によれば無益な勉強にすぎません。しかしまた人によればこの勉強ははかりしれない成果をもたらします。

お子様はブルタルコスの『英雄伝』を読むならば、じつに多くの利益を得られるでしょう。しかし家庭教師は自分の役目の目指すべきところを忘れてはなりません。自分の弟子にどこでマルケルスが死んだか記憶させるよりむしろ、そこで死んだのがなぜ彼の義務にふさわしくなかったかを考えさせるべきです。史実を覚えこまずのではなく、史実を判断することを教えなければなりません。(I-26, p. 204)

おなじように、読書実例の存在についても、知識の収録に終わっているか、それとも判断力を磨き、思索を練る材料になしえているかどうかを見なければならぬ。さもなければ著作の努力を軽視し、初期の『エッセー』の意義を看過することになる。

先に「我々の幸福は死後でなければ判断してはならない」(I-19)と「理由なく砦を固守すれば罰せられること」(I-15)を例に挙げながら分析したように、モンテーニュは読書実例にひそむ意味を読みとろうとしていた。彼の意識はあきらかに「史実を判断すること」に向けられていた。第1巻第26章は中期の作であり、初期には史実を読む態度についてこのように明確な説明は見られないが、著作の実践ぶりに十分にあらわれていると言えよう。視点をかえて言うならば、彼は初期における著作の経験を踏まえて上のように勧めているにちがいない。それはとうぜん想像できる、思想的な結実の道程である。そこに体験と内省の連続性が見られる。判断力の養成を第一の目標として説いている「子供の教育について」(I-26)のなかには、初期の著作を理解するために非常に参考になる言葉がほかにかなりある。それはこれからの検討とともにすこしづつ明らかになるであろう。

したがって初期の『エッセー』が書物から借用した実例に埋まっている現象をもって、ただちに著作が読書の知識の収集にすぎなかったと見なしてはならない。モンテーニュが思索に努めていなかったとは言えない。書物が教える実例を尊重するのは初心の彼の方法的な態度であった。古今の書籍におさめられた実例は「非力な者が追うにふさわしい獲物」であった。彼にとってはまずそれが事実の世界であり、現実であり、人間をもっともよく導く智慧と思想の宝庫であった。読書実例はたしかに生の経験的な事実ではないが、初心の者にとってはずっと「喜びも利益も大き」かったであろう。彼はそれを判断をはたらかず練習対象にした。その態度は最初から現実に向かったよりも効果的であったにちがいない。読書実例はひとりの人間の経験よりはるかに広く、豊かな世界である。折りしも時代は自己充足的な世界が崩壊し、キリスト教文化以前のギリシア・ローマや、異教の東洋や、

ほとんど宗教も政治ももっていないかのような原住民のいる新大陸にまで地平が広がっていた。事実の秩序的な連関が崩れ、真偽は容易に決められそうにもなかった。あえてその決定をなそうとすれば、旧来の偏見や固定観念にとらわれた過ちをおかしたであろう。モンテーニュは読書実例のすべてを事実として積極的に評価し、そこにひそむさまざまな意味を読みとろうとした。

書物に記された実例は多かれ少なかれ著者によってすでに加工された現実である。ほどよく調理された現実である読書実例は、複雑な意味を宿しながら変化している流動性と多様性の経験的な世界を直視し、認識のためや生きるために深く適切な意味をひきだす行為がまだ十分にできない者にとっても、興味をもって判断を試しながら学ぶことができた。しかもそれは現実そのものではないとしても、なお共通な多くの性格を含んでいる。観察力と判断力の育成に資するところはけっして少なくない。みずからの経験の世界をふりかえらせ、やがて読書実例に代わる事実を自分自身で発見できるようにさせるであろう。すでに見たようにモンテーニュはこの移行を可能にさせる態度と著作法をもっていた。実際に初期の作品のなかに私達はその様子を見ることができる。たとえば、読書実例に導かれながら途中で彼自身の観察と思索にもとづく実例に変わってゆくときがある。「哲学するとは、死ぬことを学ぶにあり」（I-20）のなかでは、書物に拾った例を数多く並べたのち、「私の兄弟のことをつけくわえるならば」（p. 102）とことわりながら弟の不慮の死を実例に挙げ、死についての哲学的な議論を体験的現実のなかへ移しこんでいる。第1巻第10章では、セウエルス・カッシウスの例を切っ掛けにしてみずからの経験に目を転じ、「私のごく個人的な普段の経験で知っている」（p. 42）実例を見つけたのち、自分の体験した事実にもとづいて論をすすめている。ちなみに「私は経験によって知っているので」、「私は他の機会に経験したので」、「我々が経験において見るかぎり」などのような殊更な言葉を、モンテーニュはときどき使っている。これらの語句は書物の世界と現実とを関連づけようとする生まじめな緊張に由来しているにちがいない。興味ぶかいことには、読書実例も見聞実例もおなじように自由に『エッセー』に書きいれるようになった時期の彼は、これらの何割かを冗語として消去しているのである。

従来初期の『エッセー』については読書実例に視線がそそがれ、私達の言う見聞実例にはほとんど注意がはられなかった。ところが実際にはこの数もすでにけっこう多いのである。両者の数量を比較したときには大変な差があるとしても、しかしながら前者について正しく評価するためには後者の存在を検討し、考慮にいれるのが不可欠であるとさえ言え

よう。両者をともに視野におさめていなければ、モンテーニュの思索に果たした読書実例の意義を十分に把握することはできない。注意の方向を変えるならば、初期の『エッセー』においても見聞実例が思っていた以上に多いのに気づくであろう。しかもその記述の仕方にもさまざまな相違があり、この方面における進化もすでに進行していたのが分かるであろう。

読書実例を参考にしながら発見するのが容易な見聞実例としてまず考えられるのは、史書などで知った史実とおなじような同時代の事件である。たとえば「悲しみについて」では、戦に敗れたエジプト王プサメニトゥスは奴隸の服装で水を汲みにやらされているわが娘を見ても、死刑につれてゆかれる息子を見ても、おちついた態度を乱さなかったが、臣下のひとりが捕虜にまじって連行されるのを目にしてはじめて激しく悲しんだという読書実例を紹介したのち、つぎのように見聞実例をくわえている。

この話は最近われわれの王家の御一人に見られたことと比較できるであろう。その御方は滞在していたトレントで一族の大黒柱であり名誉であった長兄の訃報に接したときにも、第二の期待のかかっていた次兄をしばらくのちに失ったときにも、模範的な毅然たる態度で衝撃に堪えたのであったが、数日後に臣下のひとりが死んだこの最後の事件には、感情におし流され、確固不動の姿勢をくずし、悲嘆と哀惜にふけた。そのためある人たちはこれについて議論し、彼が心につよく感じたのは最後の打撃だけであると言った。しかし真実は、すでに悲しみに満ち々々であったので、ほんのわずかな圧力の増加が忍耐の堰を切っておとしたのである。(I-2, pp. 7-8)

しかもモンテーニュはただ見聞実例を付加するだけで満足してはいない。直後にプサメニトゥスの話にもどり、その態度について理由を記している。読書実例と見聞実例はこの理由の考察においてたんなる列挙よりも緊密に結びついている。(6)。

彼が実例に使っているのは歴史に残るような同時代の事件ばかりではない。すでに初期のころから普通の人間に起こった事件や逸話などにも注意をはらっている。しかしこれらも読書実例と競って記しているとも考えられる。たとえばつぎのような話を記入し、つづいて『エプタメロン』のなかの言葉と関連づけ、さらにあとではプルタルコス『英雄伝』にある逸話を併記している。

人から聞いた話では、我々のあわれな国家の内乱中、私の住むごく近くの娘が窓から飛びおり、宿営していたやくざ兵士の暴力をのがれた。墜落しても死ななかった彼女は、自分の意図をくりかえし実行するために、のどに短刀を突きたてようとした。そして人に押しとどめられたが、そうとうな重傷であった。彼女自身の告白によると、兵士はまだ願望や懇請の言葉と贈り物で迫っただけであったが、けっきょく無理やりの手段にうったえるのではないかと怖くなったのだそうだ。この言葉のみならず、おちついた態度といい徳の証拠に流した血といい、まるで第二のルクレチアそっくりである。ところが、私は知っていたのだが、実際には彼女はそれ以前も以後も愛想のよい、なびきやすい女であった。(II-1, p. 5)

このように現実の世界に注意をはらいながら適当な実例を抽出し、『エッセー』に記入する作業とともに、見聞実例の質もすこしづつ変化していったであろう。だんだんと作者自身との距離を縮めながら、日常的な性質がくわわったにちがいない。たとえば「習慣について、そして既存の法律は容易に変えるべからざること」(I-23)においては、自分の胃を毒に慣らしたミトリダテス王や13世紀の聖者アルベールの伝える、蜘蛛を常食とした娘につづいて記されているのは、彼が最近自分の家で見ただけの、ほかの人が手でする多くのことを足でできるようになった両手のない人の話(pp. 135-136)である。あるいは第1巻第14章においては、肉体の受ける激しい苦痛を堪え忍んだ実例を書物から引き出し、列挙しているなか、スイス傭兵につき従っている女やジプシーの女(p. 68)や美しく見せるために苦痛に堪える婦人(pp. 70-71)など、当時の風俗の描写でもあるような例が混入されている。あるいは「想像力について」(I-21)において、身辺に拾ったみつつのエピソードの連続(pp. 126-129)やこれらの話の性質を見ると、モンテーニュが著作に見聞実例をとり入れる習慣にそうとうなじんでいたように思われる。そのひとつは、薬剤師がきまった順序どおりに準備をととのえ、薬を注入しなくともこの儀式だけで灌腸をしたように気分よくなる男の話であり、他のふたつは、パンといっしょにピンを呑みこんだと信じこみ、苦しんでいる婦人にたいして、ある人が吐瀉物のなかに曲がったピンをそっと混ぜて指し示すと、たちまち痛みがとれたという例と、招待の数日後ある貴族が猫の肉のパイを出したのだと嘘をついたところ、客のひとりの女性がひどい下痢になり、熱をだしたという例である。

見聞実例の記述の方法にも変化と進化がうかがわれる。見聞したことがらをコント風に

まとめるばかりではなく、数行に要約しながらいくつかを列挙するときもある。わずかな相違のようにも思われるが、記録するより利用するほうに比重が移っており、事実にたいする興味のみならず思考の実証的な基礎として処理されている。読書実例の記述の仕方にもおなじような進化があり、両者の結合した形態も見られる。たとえば第1巻第21章の冒頭では、想像力の強大さについて説得力を増すために、数行に要約された読書実例や見聞実例が混じりあいながら併記されている。

著作に見聞実例を書き入れる行為はモンテーニュの思索の有り様にたいして読書実例とはちがった効果をひきおこしたにちがいない。論の展開のなかに書物で知った実例を引用するよりも、自分の経験のなかから探しだした実例を織りこむほうが、思索はいっそう具体的に、いっそう自己自身にそくしてすすめられるはずである。思想の現実的な深まりと成熟に果たす効果はより大きいであろう。あるいは著作に収録するという作業に付随する思考の活動もちがった側面をふくんでいる。選択し、収録し、構成することがおのずと観察となり、現実的な反省となる波及的な作用は、見聞実例のほうがよりいちじるしいであろう。複雑な意味を宿しながら動きつづけている現実から実例を切りとるのは、時によれば同時に思索の行為でもあり、自分の思想の表現でもある。時によればそれだけですでに社会にたいする批判ともなる。

おなじように試み、習慣というこの激しい先入観を振り解こうとした人ならば、疑う余地もなく是認されている多くの事柄が、付随した年月の白髭としわに支えられているにすぎないのに気づくであろう。しかも、この仮面をはぎとり、真理と理性にもとづいて吟味するならば、自分の判断がまったくひっくりかえったように感じるであろう。しかしながら、また、いっそう確かな状態に置きなおされたようにも思うであろう。たとえば私はそのとき彼に尋ねてみるだろう。いったい国民が自分のまったく理解できない法律に強制的に従わされている事態ほど、奇妙なことがほかにあるだろうか。結婚や贈与や遺言や売買などあらゆる私事にわたって、自国語で書かれてもいなければ公示されてもいないために知りようのない規則にしばられ、これを理解し利用したければ、必然的に金で買わなければならないほど奇妙なことがあるだろうか。わが国の歴史家の伝えるように、我々にローマ帝国の法律を課そうとしたシャルルマーニュ大帝に最初に反対したのは、ガスコーニュの一貴族で、私の地方の人であった。私はこのことを運命に感謝している。合法的な習慣として裁判の職が売買され、判決

がまったくの現金払いであり、払う資力のない者には裁判が拒否されても違法ではない、いったいこんな国よりも野蛮なところがほかにあるだろうか。(I-23, pp. 141-142)

以上、見聞実例による著作と思索がところどころに浸潤している様子を調べてみたが、章全体として捉えたときにもおなじような特徴が見られる。たとえば第1巻第32章は数量的に読書実例より見聞実例のほうが優勢である。あるいは、見聞実例で始まる章(I I-5)があるのみならず、第1巻第43章では現実にたいする考察から章のテーマが生まれている。ごく短い、内容のとぼしい作品であり、論の展開も書物に拾った実例に依存しているとは言え、読書と経験の関係が逆転しているのは注目に値しよう。

したがって初期の『エッセー』は表面的な印象から想像したくなるほど知識偏重の著作ではない。全体の数量から見れば読書実例が圧倒的なのは確かであるとしても、モンテーニュはこれをたんに知識としてではなく、判断力を働かせる対象として受け取ろうとした。この態度によって読書実例は観察と思索の練習材料になりえた。しかも彼はこの点についてすでに方法的な意識と自覚をもっていたにちがいない。従来は注意がむけられなかったが、読書実例から見聞実例へ移行し、後者が数を増し、一部では章の中心になっているような進化がすでに初期においても進行していた。このような進化はただ知識を拾い集め、記録するだけに満足していたならば生じなかったであろう。それをもたらしたのは作者の才能にくわえて、読書実例にたいする態度と方法的な自覚であった。

第1章第3節（注）

(1) II-A-69, t. 2., p. 274.

(2) II-A-41, pp. 102-108.

(3) II-A-67.

(4) II-A-69, t. 2., p. 256.

(5) Ibid., p. 508.

(6) すでに述べたように、たとえ初期に推定された章のなかであろうと、細部は中期の加筆の可能性はある。第1巻第2章のこの例に即しながら、見聞実例が書かれた年代の不確実性について私達のとった態度と原則を示しておこう。

一、第1巻第2章の執筆年代に関するヴィレーの説明には、中期の加筆の痕跡を認めた他の章に記しているような注意書きが見られない。

一、この例の提示や記述の仕方は前後の読書実例と関連性があり、見聞実例があとからたんに挿入されたような構造になっていない。

一、いわゆる(B)や(C)の加筆から想像するならば、以前のテキストを大きく書き変えなければならないような実例の挿入は、中期においてもあまりしなかったであろう。前後のわずかな修正ですむ場合がほとんどであったにちがいない。

一、見聞実例そのもののなかにも、ときどき執筆年代を推定する手がかりがある。たとえばこの例は1563年の出来事であり、「最近(dernierement)」という語は、中期の加筆ならばまず使われなかったであろう。

一、初期に推定された章に存在する見聞実例が相当な数にのぼる事実は、すでに最初から記されていた蓋然性を高める。この推測が否定されるのは、なにか新しい方針によって中期に意図的に増量されたと考えられる場合である。しかし、中期におけるモンテニユの制作方針には、初期の作品のなかに見聞実例を増加しなければならない理由は見あたらない。

4. 古人の思想の活用

モンテーニュが書物から拾い集め、『エッセー』の材料にしたのは、諸国の風俗習慣や歴史上の事件などばかりではない。ギリシア・ローマの哲人たちに代表される古人の卓見や思想も彼の収集の対象であり、作品を構成する要素であった。私達は前節の最初において思想例と名づけ、この点に触れておいた。自分の思考の展開を表現しうるように読書実例や見聞実例を組み立てるのみならず、さらに思想例も織りこむことによって、彼は実例にたいする吟味やそこから発展する思索をより実りおおいものにしようしたのであろう。まず一例をあげよう。たとえば第1巻第33章は下記のような構成と展開になっている。

大部分の古代人の考え方 → 古い格言 → 注釈 → セネカの教え → 注釈 → 読書実例

このような著作の意義は前半と後半ではややちがっている。後半から見てゆくならば、モンテーニュは数行の注釈によってセネカの『書簡』にあった思想とプーシェの『アキタニア年代記』の実例とを組みあわせている。つまり実例と結びつけながら思想を事実に立脚させているのである。この構成は「子供の教育について」のなかで彼が勧めているひとつの方法を思い出させる。「判断力と品性を陶冶するためにもっとも主要な科目である哲学」(I-26, p. 217)を教えるために、彼はつぎのような提案をしている。

哲学のあらゆる有益な思想はうまく実例と組みあわせながら教えることができるでしょう。人間の行動はみずからの規範として哲学に従い、吟味を受けなければなりません。(同、p. 209)

本当の哲学の単純な理論は三段論法とか弁証法とかの仮面を必要とせず、子供にとってもりっぱな教育科目である、とモンテーニュは主張する。そして哲学を実例と組みあわせながら教えるように勧める。ところでこの方法は中期に教育の思想として述べられる以前に、すでに初期の著作において彼自身によって実行されているのである。それはセネカの思想と並べて『アキタニア年代記』の実例を記入するのとまったくおなじ精神にもとづいている。哲学の教育に関する上の忠告はまさに「有益な思想」を「うまく実例と組みあわ

せる」著作の体験のなかから生まれたにちがいない。もちろん読書で出会う実例は、前節で指摘したように、「どこでマルケルスが死んだか」よりも「そこで死んだのがなぜ彼の義務にふさわしくなかったか」を考え、「史実を覚える」よりも「史実を判断する」ことに努めるような態度で眺められている。このような著作法による思索の練習は、数行の注釈以外はすべて借り物から成っているが、その効果はけっして小さくない。思想例と読書実例の結合は哲学を現実の生气と躍動のなかにもどし、同時に判断力と思想の成長をうながす。この「エッセー」において、一方では、実例にたいする自分の解釈が自然に古人の意見と突きあわされる。実例のような人間の行動を古人がいつそう深く適切に判断し、思想に結晶させているのを知ることによって、未熟な判断と思索が鍛えられる。一方では、ただ言葉だけの空疎な操作におちいるのを避けながら思想を学ぶことができる。「学問と真理は判断力がなくとも我々のもとに宿りうる」(II-10, p. 100)のであって、いつになっても現実と触れあわず、いっこうに人生を生きる知恵をもたらさない恐れがある。古人の思想例と実例を組みあわす「エッセー」において、モンテーニュは判断力を働かせながら学問と真理を学んでいるのである。

ちなみに著作をとおして判断力を磨こうという意図は『エッセー』の構成に十分にあらわれているように思われる。たとえば第2巻第4章のつぎのような構成からも、思想例の収録とよく似た意義を読みとれるであろう。

アミヨとプルタルコスにたいする賛辞 → 読書実例 → プルタルコスの解釈 → 私
の解釈 → 立証のための読書実例 1 → 同 2 → 同 3 → 結論

この章は独立的な冒頭の賛辞のあとで「いま私はプルタルコスが自分のことについて語ったつぎのような話を読んでいたところだ」(p. 36)と書き残しているように、読書からわずかに発展しただけの単純な著作である。しかし、それだけいっそう端的に、この章を書いた理由が構成にあらわれている。モンテーニュはプルタルコスと肩をならべて解釈を試みるために筆をとったにちがいない。ここでは実例よりもプルタルコスの付した意見に関心が向けられているのであり、後半の読書実例は自説の説得力を増す論を展開する代わりに収録されている。数量的には書物からの借り物が支配的であるとは言え、この章はあくまでも自分の思考を試してみようとする動機から書かれているの見落としてはならない。受動的な読書に飽き足らず、浮かんだ考えを鮮明にしようとする欲求が著作を導

いたのであり、読書実例の裏にはそのような意図が一貫している。

昔の偉大な思想家にかぎらず他人の意見と対比させながら自己の判断を明確にし、思索に発展の動きをあたえるのは、モンテーニュの好んだ方法のひとつである。この思考法は短い章の構成の要をなすだけでなく、長い章においてはしばしば随想の展開の原動力になっている。ところで「子供の教育について」のなかに、外国旅行を勧めてつぎのように述べているところがある。

こういうわけで人々との交際はこの目的〔判断力の育成〕にすばらしく適しています。また外国旅行についてもおなじように言えます。しかしながら我々フランス貴族の流儀にならって、サンタ・ロトング神殿の広さが何歩あるとか、リヴィア嬢の下着が豪華であるとか、あるいは別の人たちのように、ある古い廃墟のネロの顔はどこそこのおなじようなメダルよりどれだけ長いとか広いとかいうような知識を持って帰るためではなく、これらの国民の考え方や生き方を知るのを主眼とし、我々の頭脳を他人の頭脳とこすりあわせて磨くようにしなければなりません。（I-26, pp. 198-199）

他人の意見と対比させながら自分の意見を表現してみる「エッセー」は、根本的には外国旅行の意義とおなじように、「我々の頭脳を他人の頭脳とこすりあわせて磨く」ところにあると言えるであろう。他人の頭脳が第2巻第4章のようにりっぱな哲人であるならば、「こすりあわせて磨く」効果はいっそう大きいであろう。モンテーニュは『エッセー』を出版したのち、スイスからドイツを経て、イタリアを巡る旅にでるのであるが、このような著作の方法はそれに先立つひとつの外国旅行であり、その意義の実践であると言えよう。第1巻第33章の前半に見られた、古代の人たちの一般的な思想や古い格言に注釈を付しながら論をすすめる著作もおなじ形式に含められるであろう。書物で出会った思想例について意見の相違を比較したり、自分の賛同と批判の点を明確にしながら文章で表現するのは、対象の理解においても自己の思想の成長においても、受動的な読書よりさらに深い影響をおよぼす。著作と表現の行為にとりいれることによって「我々の頭脳を他人の頭脳とこすりあわせて磨く」効果が深く内部に浸透する。読書によって空間と時間を自由に旅行すると同時にこの著作法を実行しながら、モンテーニュはのちに実際の外国旅行について主張するとおりに、自分の頭とギリシア・ローマの哲人たちの頭とをこすりあわせて磨い

たのである。

読書実例にかぎらず書物で学ぶ事柄をどのように思索や著作にとり入れるべきであろうか。これは近代最初の情報氾濫期であるルネサンス時代の大きな課題であった。おなじように、古人の思想を利用した著作のあり方も、当時の思想家が直面しなければならなかったひとつであった。それはたんに先人の思想を学ぶ心がまえではなく、具体的な利用の問題であった。したがって現代ならば剽窃とか盗作とか非難されるような借用が平気でおこなわれていた。と言うよりそこにルネサンス風な出発点があった。当然初期の『エッセー』にも方々にそのような箇所がある。さらに、おなじ人間のおなじ著書の思想を借用しつつけながら、その換骨奪胎を基礎にして一章を書くことさえある。しかしながらこのような著作もまた、ただ書物の知識を記録するだけの行為ではない。思索の練習としての意義もあったはずである。「孤独について」を例にとりあげ、この方法についてすこし検討してみよう。もちろん思想の源泉を知るのが私達の目的ではない。ヴィレーの研究(1)を参考にしながら、『エッセー』の構成に窺われるモンテーニュの思索の一形態として一度見ておくことにしよう。そして著作の意義と思索の練習としての効果について考えてみよう。

この章の構成要素は思想例以外についてはほかと特別ちがってはいない。さまざまな書物から選びだした実例が記入され、見聞実例も挿入されている。モンテーニュ自身の注釈やそこから発展した論の展開もある。ただ章全体の基礎にセネカの『書簡』の文章と思想の借用があり、その上にこれらの要素が織りこまれている。モンテーニュはあるときは『書簡』の一部のたんなる翻訳を『エッセー』に差し入れ、あるときは要所々々を抜き書きしながら論をつくりあげる。言葉は彼自身の言い回しに変わりはじめているが、思想内容はほとんど『書簡』とおなじところもある。ごくわずかな部分におなじ比喩や類似の表現があらわれるときもある。この章における彼の思索はセネカに助けられながら進んでいる。このような古人の思想の利用法は、冒頭と末尾の部分を『書簡』と比較してみるだけでも、概要がわかるであろう。「孤独について」はつぎのような書き出しになっている。

孤独な生活と活動的な生活とのあの長たらしい比較はやめておこう。また「我々が生まれてきたのは自分ひとりのためではない。社会のためである」という、野心と貪欲が隠れ蓑につかう美しい言葉については、現在舞台にいる人たちに思いきって判断をまかせよう。官職をもとめ、地位をのぞみ、世の中のことに気をもむのは、逆に社会から自分ひとりの利益を引きだすためなのではないかどうか、自分の良心を叩いて

よく反省していただきたい。世間にのしてゆくために人々が今の時代にとっている悪い手段を見るならば、たいしてりっぱな目的ではないのがよく分かる。野心にむかっては、我々に孤独の味を教えるのはまさにお前なのだと答えることにしよう。なぜなら交際ほど野心の避けるものがほかにあるだろうか。それは何よりも自由な振る舞いを好み、仲間を求めたりはしない。善をなすも悪をなすも機会はいたるところにある。しかしながら「最悪の者が大多数をなす」というピアスの言葉や「千人のなかにひとりの善人さえいない」という『集会の書』の言葉が真実であるならば、大衆にまじれば感染がきわめて危惧される。(1) <悪人たちをまねるか、憎むか、どちらかでなければならぬ。多いからといって人に合わせるのも、ちがっているからといって激しく憎むのも、どちらも危険である。> (2) <とはいっても賢者はどこであろうと満足して生きられないわけではない。実際宮廷の群衆のなかでただひとりで生きることさえできる。しかしもし選べるならば、宮廷を見るのさえ避けるであろう、と賢者自身が言っている。必要とあらばそんなことに堪えもしようが、自分の意志しだいならばこちらを選ぶであろう。賢者には、まだ他人の悪徳とたたかわねばならぬうち、十分に悪徳を捨て去ったようには思えないのである。>ところで孤独の目的はただひとつ、もっと悠々とゆったりと生きることであると思う。(I-39, pp. 359-361. 番号と< >は説明の便宜上の筆者の付加)

(1)の部分でモンテーニュはピアスや『集会の書』の言葉を踏まえながらみずからの思索を発展させているように見えるが、実際は『書簡』7のほとんど引き写しである。

【世間大衆の悪が知らず知らず我々を侵すという話につづいて】あなたは【大衆を】まねるか、憎むかしなければならぬ。しかし、悪人たちが多いからといってまねるのも、我々とちがうからといって大勢の彼らを憎むのも、ともに避けるべきである。(pp. 32-34) (2)

つづく(2)は『書簡』28を換骨奪胎しながら書きくわえている。

必要とあらば、そんななか【広場】でも静かに生きられる。しかし、もし自分で決めるのが許されるならば、私は広場の付近を、いやこれを見るのさえ遠く避けるであ

ろう。〔荒波のただなかに乗りだし、困難を求めてたたかう人たちには賛成できないという少しあとの話のなかで〕賢者はそれに堪えるであろうが、選びはしない。彼は戦いよりも平和を好むであろう。他人の悪徳と争わなければならないのならば、自分の悪徳を追放してもあまり得にはならない。（pp. 200-202）

このような借用をおこないながらモンテーニュは章を書きおこす。セネカの言葉を借り、考え方をとりいれながら、孤独な生活についての自分自身の感情に明確な表現をあたえ、力強い思想に育てようとしている。

つぎに章の末尾を比較してみよう。『エッセー』はつぎのように書かれている。

〔孤独な生活に入るように勧めて〕彼ら〔エピクロスとセネカ〕はこう言っている。

（1）＜あなたは今まで泳ぎつつ漂いつつ生きてきた。帰ってきて港で死にたまえ。＞あなたは前半生を光明にささげた。後半生は影にささげたまえ。（2）＜得られる果実をあきらめなければ、仕事をあきらめることはできない。したがって名声と榮譽にたいする心づかいをすっかり捨てたまえ。＞（3）＜あなたの過去の行動の輝かしさがあなたを照らしすぎ、隠れ家のなかまでついてゆく恐れがある。＞他の快樂とともに他人の賞賛がもたらす快樂も捨てたまえ。（4）＜あなたの学問と能力については心配することはない。そのお陰であなた自身がいつそよりっばな人間になるならば、その効用は失われないであろう。あの人のことを思い出したまえ。ほとんど人に知られそうもない学芸のためになぜそんなに苦勞するのかと尋ねられると、彼は、わずかの人に知られば私には十分です、ひとりでも十分です、ひとりもいなくとも十分です、と答えたではないか。彼の言うとおりでである。あなたとひとりの仲間がいれば、おたがいに観客は十分である。あるいはあなたとあなた自身だけでも良い。大衆もあなたにとってひとりであり、ひとりもあなたにとって全大衆であると思えば良い。＞（5）＜無為と休息から榮譽をひきだそうとするのは卑劣な野心である。洞穴の入り口で足跡を消す動物のように振る舞わなければならない。もはやあなたが求めるべきは世間があなたについて語るのではなく、あなたがあなた自身に語りかけることである。＞（以下省略）（pp. 379-381）

章を結ぶために利用している哲学者の意見は、なぜか「彼ら」となっているが、すべて

セネカの『書簡』から選ばれている。ここでは「彼らはこう言っている」と明示しており、無断の借用や盗作ではない。と言ってもただ翻訳し、引用しているだけではない。より良い結びの言葉をつくりあげるために、人称の変更を始めとして、修正をくわえながらまとめ直している。したがって『書簡』と比較しながら、古人の思想を利用する著作の姿を想像してもまちがいでないであろう。実際に他の章においても以下のような手法による剽窃がところどころに隠れている。

(1) は『書簡』19の比喩に倣いながら、さらに自分自身の着想による比喩的表現をくわえて文章をつくっている。

我々は海で生きてきた。死ぬのは港で死のう。(p. 124)

(2) は『書簡』22の簡潔で力強い要約である。たんなる引用よりも進んだ利用の仕方であり、より高度な力量が必要であろう。ヴィレーに逆らって、もはや剽窃ではなくモンテーニュ自身の言葉になっていると評価することもできよう。

しかしルキリウスよ、仕事の報酬を軽蔑してしまえば、仕事から逃れるのはたやすい。「ではなぜ私はこんな大きな前途の望みを捨て去るのか。私はちょうど収穫のときに離れてゆくのか。そばには奴隷がいいるだろうか。駕籠におつきの者がいないだろうか。応接室は閑散としているだろうか」こんな考えが我々を宙にまよわせ、我々を押しとどめているのだ。(p. 154)

(3) は『書簡』19の比喩を利用しながら、自分の文脈に適した文章に巧みに作りかえている。

かつての[あなたの行為の]多くの光が、どこに逃げようとも、あなたについてゆく。(p. 126)

(4) は内容も表現も『書簡』7と非常によく似ているが、要所々々を選びだし、自由に順序を変えてまとめなおしている。

「ではなぜ私はこれらのことを学んだのであろうか。むだな努力をしたのではないか」と恐れなくとも良い。あなたは自分自身のために学問をしたのだ・・・ [中略]・・・デモクリトウスは言っている。「たったひとりも私にとっては大衆とおなじであり、大衆もたったひとりとおなじである。」つぎの答えもりっぱである。言葉の主は確かではないが、ごくわずかの人にしか知られない学芸のためにどうしてそんなに苦勞するのかと尋ねられたとき、その人は、「私はわずかの人に知られば十分なのだ。ひとりでも十分なのだ。いや、ひとりもいなくとも十分である」と答えた。第三の注目すべき言葉は、エピクロスが研究の共同者のひとりに書き送ったものである。

「私はこの仕事を多くの人のために書いているのではなく、あなたにむかって書いているのだ。というのは、我々は互いに相手がひとりいれば、観客は十分なのだ。」(pp. 34-36)

(5) は『書簡』68の一部のほとんど引き写しであるが、最初の文の修正には工夫が見られる。

隠遁を自慢するのは柔弱な野心である。ある種の獣は発見されないように自分の洞穴の付近で足跡をわからなくする。あなたも同じようにしなければならない・・・ [中略]・・・あなたが隠遁したときに求めるべきは世間があなたについて語ることでなく、あなたがあなた自身にむかって語ることだ。(p. 46)

以上のような手法で古人の思想を利用する著作法はこの章の途中でもおこなわれている。その構成の輪郭を要素によって描くならば、つぎのような図になる。(Sは『書簡』の借用部、Vは詩句の引用、Eは実例の挿入、Mはモンテーニュ自身の注釈や意見の展開を表す。)

M-S-M-V-M- [中略] -S-M-V-M-E-E- [中略] -M-V-M-S.

「孤独について」の一章を書こうという動機はまちがいなくモンテーニュ自身の内面的な欲求だったであろう。孤独な生活について確固たる思想を持ちたいという気持ちは、官

職を辞し、社会から退いた彼自身の願望であったにちがいない。引退にあたっては、「残されたわずかな人生をひっそりと平穩に暮らすよりほかのことにはできるだけ心を煩わすまいと決心した」（I-8, p. 31）のであるが、しかし彼は「放れ駒となった精神が、逆に自分のこととなると、他人の仕事を引き受けたときより百倍も多く動きまわるのを知った」（I-8, pp. 31-32）。「それに、宮廷や市場から逃れたからといって、我々は人生の主たる苦しみから逃れられるわけではない」（I-39, p. 362）。モンテーニュは無位無官の生活をほんとうに我が物にしたいと願う。『エッセー』を書きながら孤独な生活の意義を主張し、みずから論そうとする。しかし彼はまだ自分の感情に思いどおりの言葉と形体をあたえられない。まだ願望を明確で力強い思想に発展させられない。言葉は尽き、心のなかには満たされない思いがのこる。そのようなとき彼は古人の思想に助けを仰ぐ。古人の言葉が代わって彼自身の考えを引き出してくれる。彼の感情を的確な思索へ、充実した思想へと導いてくれる。あるいはまた彼の思索はその刺激をうけて活発になり、『エッセー』を書きすすめることができる。先ほど検討した著作法を考えあわせながら、つぎのような反省を読むならば、私達の想像がまちがっていないのが分かるであろう。

私の生まれもった能力について言えば（この本はその試しなのですが）、仕事の重みでたわんでいるのが感じられます。私の理解力と判断力はよろめき、つまずき、ぐらつきながら、かろうじて手さぐりで進んでいます。できるかぎり前進したときでさえ、私はいちども満足をおぼえたことはありません。そのむこうにさらに世界がつづいているのが分かりながら、私の目はどんより雲って、はっきり見分けられません。そして私自身の生来の能力だけを使って、頭に浮かぶすべてを手あたりしだいに語ろうとしているとき、つい最近もプルタルコスが想像力について論じていたように、りっぱな著者たちが思いがけなくたまたま私とおなじ主題を扱っているのに出会うと、これらの人たちに比べればじつに脆弱で貧弱で、まったく鈍重で活気がないのに気づき、みずからにたいする憐憫と軽蔑の情が湧いてきます。しかしながら得意に思っている点としては、私の意見は光栄にも彼らと一致しており、またほかの人たちとちがって私はすくなくとも彼らとのなほだしい相違を認識しています。（I-26, pp. 187-188）

モンテーニュは古人の思想を『エッセー』に織りこむ著作法について告白しているわけではない。上のような文脈における要所々々の言葉が暗示しているだけである。おそらく虚栄心や自負のたぐいがまったく包み隠しのない告白を妨げたからであろう。そこには、模倣から出発するのが時代の条件と要請でありながら、ただ盲従したり流行を追っているだけの人たちとは一線を画さなければならない微妙さがからんでいる。引用部につづく文章においてもおなじような感情が他人にたいする批判を急がせ、自分自身の著作のことを忘れさせている。引用や剽窃によって自分の評判を高めようとする、同時代の無分別な著者たちの愚かさを批判したあとで、彼はつぎのように言う。

もしこれらのりっぱな文章を詰めて私の論考をつくりあげるならば、他の部分のくだらなさが際立ってめだつことになるでしょう。(同、p. 190)

評判を高めようという意図は彼にはなかったとしても、この言葉はあきらかに行き過ぎである。古人の思想や文章を無断で作品に織りこむのは、同時代の多くの人たちとおなじように、初期の『エッセー』のひとつの方法なのである。この時代的な問題を冷静にみつめられるようになった晩年のモンテーニュは直後に加筆し、つぎのように訂正している。

他人を例にとってみずからの欠点を咎めることは、私のよくやるように自分を例にとって他人の欠点を咎めるのと矛盾しているとは思われません。あやまちはいたるところで告発し、逃げ場をすべて奪わなければなりません。私自身、事あるごとに無謀にも私の盗品と肩を並べようとしたり、それらと一緒に歩いてゆこうと企てたりしているのをよく知っています。それらを識別する判断者の目をだませるかも知れないという大胆な望みがなかったとは申せません。しかしそれは私の適用の手腕であると同時に私の創意と力によるものなのです。(同、p. 147)

このように弁解しながら言い過ぎを改めたあとでは、著作形態の類似の奥にある質的な差異を的確に指摘している。古人からの剽窃を作品に織りこんだ成果は「適用の手腕」と「創意と力」に左右される。「孤独について」の章のように、たとえ要所々々をセネカに頼っていようと、『エッセー』を書きすすめるためには自分自身の思索がともに活動しなければならない。『エッセー』のなかでセネカと「一緒に歩いてゆこうと企てたり」、「肩を

並べようとしたり」することによって、セネカの思想はみずからの思索の動きに溶けこむ。このような著作も「エッセー」として軽視できない意義と効果をもっている。古人の思想を自分の内面がもとめている思索のなかに組み入れるならば、書物におけるたんなる言葉の集積が個人の人生のなかで活動しはじめ、経験によってふたたび生命をあたえられる。古人の思想が表現を教えつつ思索を明確にし、発展させ、感情を思索へ、思索を思想へと変貌させてゆく。

折りにふれてすでに述べたように、中期の第1巻第26章で子供の教育についてモンテーニュが勧める方法と、彼の修業期である初期の『エッセー』の著作形態は、構造やイメージにおいてしばしば共通したところがある。初期の著作が彼の自己教育であるとするならば、その経験が教育論の要になったとしてもふしぎではない。著作のなかで実感し、汲みとったことが子供の教育に関する思考に影響するのは当然である。彼が自己の経験を吟味しながら思想を生み出す人であるひとつの証でもあろう。この節で検討したような著作法の意義について雄弁な弁明の役をはたすのは、つぎの箇所である。

先生は生徒にあらゆることを篩にかけさせ、なにごとくも権威や評判によって頭に宿さないようにさせてください。アリストテレスの原理も彼にとっては原理であってはなりません。ストア主義もエピクロス主義も彼にとって主義であってはなりません。千差万別の考えを生徒に示してやってください。彼は選べるならば選ばば良いでしょう。さもなければ疑惑のなかにとどまれば良いのです。なぜならばクセノフォンやプラトンの思想を彼自身の思考によって抱くならば、それらはもはや彼らのものではなく、彼自身のものであると言えるでしょう。彼らの考え方を吸収しなければならぬのであって、彼らの教訓を学ぶのではありません。そして、これらをどこから得たかなどというのは、忘れたければ思いきって忘れれば良ろしい。大切なのは自分のものにする事です。真理と道理はひとりひとりの共有物であって、最初に言った人のものでもなければ後から言った人のものでもありません。蜜蜂はあちらこちらの花に盗みをはたらき、のちにこれらから蜜をつくります。この蜜はまったく彼らのものであり、もはやたちじゃこう草でもマヨナラ草でもありません。おなじように生徒も他人から借りた断片を変化させ、融合させ、そこからまったく彼自身の作品すなわち判断力をつくるでしょう。彼の教育も労苦も勉強もただこの形成を目指しているのです。

(I-26, pp. 196-197)

「なにごとくも権威や評判によって頭に宿さない」認識を説くモンテーニュの心にまず浮かぶのは、やはり多様性のイメージである。すこしわき道にそれるようであるが、この要点は再度注目しておくべきであろう。生徒は彼とおなじく多様性、すなわち「千差万別の考え」を前にしている。と言うより、原理を原理として、主義を主義として受け入れるのをやめ、すべてを篩にかけようとしはじめると、現実の多様性と流動性があらわになり、どうしても判断力を働かさなければならなくなる。初期の『エッセー』にそくして言うならば、既成の思想例を選別し、構成することも、態度しだいで判断力のかかわる行為になる。生徒にしるモンテーニュにしる「千差万別の考え」を対象にしながら「選べるならば選び」、「さもなければ疑惑のなかにとどまる」ことがどうして判断力なしにできるであろう。どうして判断力の涵養にならないはずがあるだろうか。本書の第2節などにおいてモンテーニュの多様性と流動性の意識が『エッセー』の著作に影響しているのを考察したが、おなじような密接な関連がここにもあらわれている。さらにすこし後のところでも彼はくり返し、世界の流動性と多様性を展望しながら思索する態度を教えている。

我々の母なる自然の大いなる姿を、その尊厳をなんら損なわずまるで一幅の絵をながめるように思い描く人、その顔のなかに全体的な絶えまない変化を読みとる人、そのなかの自分のみならず一国全体をも非常に細い針の一点のように見る人、このような人たちのみが正しい大きさでものごとを評価できるのです。ある人々によればこの大きな世界は類概念のもとの種概念であって、さらに数がふえるそうですが、これこそ我々の姿を映して正しく認識するための鏡であります。要するにこれが私の生徒の教科書であってほしいと願っています。じつに多くの傾向や学派や見解や思想や法律や習慣などが、我々自身のものを健全に判断することを教え、さらに我々の判断にその不完全さと生来の弱さを自覚させます。これは取るに足らない勉強ではありません。じつに多くの国家の有為転変や運命の変化が我々のことで大騒ぎしないように諭してくれます。忘却のもとに埋もれたじつに多くの名前や勝利や征服が、落ちてやっとなに知られる鶏小屋ていどの砦や10人の射手を奪うことによって我々の名前を永遠にしようという望みをこっけいに見せます。じつに多くの外国の盛儀の誇らしさと気高さやじつに多くの宮廷や貴人たちのすばらしい荘厳さが、我々の視力を強く確かにし、目を閉じずに我が国の輝かしさを見つめられるようになります。我々の以前に埋葬された莫大な数の人々が、あの世にいい仲間に出会えるのを恐れないように勇気づけ

てくれます。そのほかのことも以上と同様です。(同、pp. 207-209)

つづいて、借り物から成る非個人的な『エッセー』を評価する観点を私達に教えている箇所に移ろう。「クセノフォンやプラトンの思想を彼自身の思考によって抱くならば、それらはもはや彼らのものではなく、彼自身のものであると言えるでしょう」、この言葉はまさに思想例を利用し、収録した『エッセー』についての力強い弁明でもある。そのような著作にも作者自身の思索があり、思想があると宣言していると言えよう。非個人的な素材を利用したこのような個性の活動を、私達は構成を分析しながら眺めてきたのである。実際、みずからの思考によって抱いてもなお古人の思想が私達自身のものにならないのならば、私達はいつ自分の思想をもつことができるであろうか。判断力をはたらかせた受容によって先賢の思想が個人のものに変わるのでないならば、偉人以外は自分の思想をもちようがないであろう。モンテーニュは初期の『エッセー』の著作をとおして、他者の思想が受容者の個性の彩りを帯びはじめ境界における、思想と受容者の両側におこる微妙な変化を実感したにちがいない。そしてその体験にもとづき、「どこから得たかなどというのは、忘れたければ思いきって忘れればよろしい」と彼は言う。たしかにそれは「自分のものにする」ためのひとつの方法であろう。まさに彼自身出典などはどこにも示していない。詩句のように引用が明らかなきも、名著の文章を引き写しているときも、典拠を記してはいない。自分の思考の流れに従っているかのように書きつづけている。それは「自分のものにする」ために、「思いきって忘れて」しまっているのだとも言えよう。実際記憶力はしばしば思想をただの知識にとどめ、個人の内部で个性的に変質するのを妨げるところがある。いつまでも出典にこだわっていると、思想の表面の言葉だけが残りがちである。まさに古人の糟粕にすぎなくなる。「どこから得たかなどというのが」忘れられ、思想を運ぶ言葉が個人の内部に沈んで消え、そののち自分自身の表現に変わってふたたび浮かんできたとき、古人の思想が自分のものになったと言えるであろう。生命体である内面世界におけるこのような思想の受容、そしてそれによって引き起こされる精神の変貌を認めてこそ、モンテーニュも私達も「真理と道理はひとりひとりの共有物であって、最初に言った人のものでもなければ後から言っている人のものでもありません」と主張できるのである。この言葉が人類の遺産である偉大な思想についても、また一個人の精神についても、非常に深い意味をもってくるのである。

最後にモンテーニュはこのような精神の変貌を簡潔な美しいイメージで表現する。「

蜜蜂はあちらこちらの花に盗みをはたらき、のちにこれらから蜜をつくります。この蜜はまったく彼らのものであり、もはやたちじゃこう草でもマヨナラ草でもありません。おなじように生徒も他人から借りた断片を変化させ、融合させ、そこからまったく彼自身の作品すなわち判断力をつくるでしょう」、この言葉は子供の教育について語っているというより、初期の『エッセー』に最適な比喻である。「他人から借りた断片」による著作の意義をみごとに弁明している。私達は「あちらこちらの花に盗みをはたらいて」いるのを見るばかりではなく、「これらから蜜をつくっている」かどうかを検討しなければならない。

「蜜」とは判断力であり、それがやがてモンテーニュ自身の花を開かせる滋養となるであろう。私達は初期全体の非個性的な『エッセー』のなかに「蜜をつくろう」と努力している行為を読みとらなければならない。それを如実に表しているのが作品の構造である。

モンテーニュが子供の教育について語る言葉は、以上のように、彼の著作法とふしぎなほどの符合を見せている。それはけっきょく『エッセー』の著作も子供の教育もおなじように判断力の養成を目指しているからである。

第1章第4節（注）

（1）以下源泉についてはI-A-4, t. 4にもとづいている。

（2）セネカの『書簡』については、下記の版のページを記した。

SENECA AD LUCILIUM EPISTULAE MORALES, with an English translation by Richard M. Gummere, Havard University Press, 1953.

5. 真理の探究の形式

中世的世界像における調和的な真理体系が崩壊し、新しい胎動のはじまったヨーロッパには地理上や精神上の新世界から旧来の概念に変革を迫る事実が続々と押しよせてきた。それらの集成はルネサンスの学者や知識人の第一の仕事であり、編纂者たちはとりわけ好んで諸国の風がわりな習慣を集めた。人間や社会についての先入観からかけ離れた種々様々な習慣の存在が、固陋な世界像の崩壊と新しい世界の豊かな広がりを見ごとに示唆しているからであろう。多様性と流動性を感じながら世界を眺めているモンテーニュもとうぜんこの趣味を共有するひとりである。諸国の風俗習慣はその圏外の者には想像もおよばない思考様式や行動様式をふくんでいる。明瞭な体系化には容易に服さない事実群のひとつの典型であろう。そこでは事実がただ事実という重みをもって存在している。

習慣にたいするこのような嗜好が象徴しているように、事実が秩序的な連関を消失し、氾濫していた時代においては、真偽の区別は簡単ではない。もし困難を感じないならば、それは多くの場合旧来の偏見にとらわれているからであろう。とすれば、とるべき方法はすべてを肯定して受け入れるか、すべてを否定して疑うか、いずれかであろう。モンテーニュの態度は前者であり、彼はまず読書で出会う実例をすべて事実として評価するところから出発した。『エッセー』の実例には私達から見れば信憑性にとぼしく、事実と見なすのを躊躇するものもかなりある。しかしそれは彼の思索が事実を軽視しているから生じたのではなく、真偽を弁別するよりまず肯定して思考にとりこむという方法的な態度に起因している。あるいは、また、吟味はまだこれからおこなわなければならない事実にたいして、重要とか些細とかの区別は安易になすべきではないであろう。『エッセー』第1巻と第2巻の目次を一瞥するだけで、モンテーニュが種々雑多な問題を思索の対象にしているのが分かる。「どんなにつまらない事柄であろうと、この寄せ集めの本のなかに入れるにあたいしないものはない」(I-13, p. 50)のである。こうして事実の世界はほとんど無限に広がってゆく。

このような傾向はコイレが科学史の立場から説明しているところとも似通っている。ルネサンスの心性をひとことで言うならば、「すべてがあり得る」という信じ易さであり、この別の側面として、複雑で多様な事実にたいする止めどもない好奇心と知識の収集癖があった。そして一方、集めた事実を分類する統一的な理論を欠いていた(1)。あるいは、ビュッソンによれば、ジャック・タユロは魂について述べられたさまざまな理論を引証し

ながら、理性の無能さを証明しようとした。アントワヌ・ミュレはいろいろな思想家の相反する主張を衝突させる方法によって哲学を貶め、信仰を優位に置こうとした(2)。これらの方法が好んで使われたのも、統一性のない、雑然たる集積から強い衝撃を受けたからであろう。

モンテーニュは時間的、空間的に拡大した世界の多様性と流動性のもたらす混乱からどのようにして逃れようとしたのであろうか。すでに第2節において触れたように、「事件とその結果は戦争においてさえほとんど運命に左右され」(I-47, p. 442)、「よく考えてみれば、我々の思案や決心もまったくおなじように運命に左右されている」(I-47, p. 443)、このような無法則性を彼は感じている。あるいは風俗習慣の実例に出会うたびに、「人事の絶えざる変化」(I-49, p. 452)に打たれる。そこで彼は実例を収集、列挙しながら、多様性や流動性の様相を明瞭に識別し、「いっそう確かな、いっそう明るい判断を得よう」(I-49, p. 452)とする。しかしながら、効用は否定できないとしても、その行為が混乱を解消し、新しい秩序を生み出すとは思われない。個々の様相を識別するのみならず、全体的な理解と統一的な認識へむかう思考法がなければならない。思索が秩序の欲求であり、著作が秩序へむかう行為であるとするならば、そのような結合と組み立てこそ必要であろう。『エッセー』の実例の構成にもこの痕跡は存在している。

たとえば第1巻第34章はこの論証的な構成のもっとも単純で素朴な形式である。運命の動きのひとつひとつの様相を理解するために実例が記され、注釈が付され、つぎのような構成になっている。作者自身の言葉といえば、それぞれの始めにある短い注釈だけであり、あとはすべて実例の紹介である。

運命の動きは定めなく、さまざまであるので、当然、我々の前にあらゆる様相を示す。正義の動きがつぎの場合ほどはつきりとあらわれたときがあるだろうか。——→グイッチャルディーニ『イタリア史』からの実例——→ときには運命はわざと我々をからかうように思われる——→デュ・ベレ兄弟『回想録』からの例——→ときには我々の奇跡と張りあって喜ぶ——→ブーシェ『アキタニア年代記』からの例と、デュ・ベレー兄弟『回想録』からの例——→ときには医者役目をする——→プリニウス『博物誌』からの例——→運命は技巧に関する見識において画家のプロトゲネスをも凌いだのではないだろうか——→プリニウス『博物誌』からの例——→ときには運命は我々

の意図を修正したり、訂正したりするのではないだろうか——→フロワサル『年代記』からの例。

モンテーニュは運命という語をよく使う。この章で彼はその流動性（「運命の動きは定めなく、さまざまである」）と多様性（「あらゆる様相」）の混乱から脱し、明確な認識を得ようとする。その際彼は分析的な方法をとっている。読書で出会った実例のなかに運命の働きの一面々々を分析し、それらをこの章にあつめ、章題「運命はしばしばその歩みを理性と一致させる」によってみずからの結論に代えている。分析はきわめて簡単で、しかもただ列挙されているだけであり、章の内部に総合の努力は見られないが、しかし内容と章題との関連が分析と総合を暗示している。この構成は運命という対象について統一的な認識を得ようとする欲求の軌跡であろう。

上のような単純な形態からすこし進むならば、実例は結論を目指す論証のなかにあらわれ、論の展開を支える要素として働くであろう。そのような章も書かれている。個々の実例の意味がまだ貧弱ではあるがとにかく作者の思索によって関係づけられ、結論へむかう論理的な構成のなかに組みこまれている。たとえば「悲しみについて」（I-2）はつぎのように展開している。

読書実例——→見聞実例——→解釈——→解釈を裏づける読書実例——→経験の分析による立証——→詩句の引用による分析の裏づけ——→結論——→結論を立証する読書実例の列挙。

前半は悲しみという感情について理解をより確かにし、より深めるために実例を集め、ひとつの解釈を強化し、立証する方向にそって組み立てている。そして、後半では、人間の激しい感情一般についての考察へ発展させ、実例の直接的な解釈をより抽象的なレベルの認識に高めている。この構成は問題提起から結論へむかう思考が個々の実例の意味を関係づける動きから生まれている。さらに、無用な要素が混在していないという特徴をくわえ、第1巻第2章は緊密な論理性と統一性をもっていると見なせよう。

論証的な構成は短い章にかぎって実行されているわけではない。初期としては長い章でも、結論へむかう展開のなかに実例が組み入れられている。たとえば「幸、不幸の味は大部分我々の考え方によること」（I-14）は、明確な構成をもったその一例である。ま

ず章題のような問題提起をおこない、つづいていろいろな場合を実例とともに検討したのち、結論が導きだされている。設題——→論証——→結論、という思考によって内容が統括されている。

以上みつつの章を例にあげながら分析した特徴は、ある意味では、以前に指摘した多様性の構成や多様性と流動性の基本的感情にもとづく思考法などと矛盾している。前者は設定した問題の枠組みにしたがって結論にむかってゆく論証的な展開をおこなっているが、後者は問題の多様で流動的な側面を吟味してゆく運動にすぎない。前者には論理的な進展があり、統一的な秩序があるが、後者はそのような性格を獲得していないという意味においては非論理的である。ではどちらが『エッセー』の特徴であり、モンテーニュの個性なのであろうか。両者が存在するかぎり、両者とも『エッセー』の特徴であり、モンテーニュの個性である、と見なすのが私達の立場である。『エッセー』全体の随想形態について綿密な研究がまだなされていない現状においては、一方の存在をもって他方を否定したり、一方を誇張したりすることがしばしばおこなわれている。論証性の強い箇所や章を証拠にして、『エッセー』の非論理性を強調する見解に反論したり、あるいは逆のことをおこなったりしているのは、まだ研究の未成熟な段階における議論のすれ違いであると言えよう。

たとえばオリヴィエ・ノドは随想の展開の分析に正面からとりくんだ著書を発表した数少ないひとりであり、モンテーニュの思考の論理的な側面について優れた分析をしめしている。しかし、このような側面が存在するのを証明することによって、私達が多様性と流動性という概念で説明し、一般には<<mobilité>>とも呼ばれる特徴を、『エッセー』とモンテーニュの思想全体について否定しようとするのは性急にすぎるであろう(3)。今までに私達が明らかにしたように、論証による普遍化を試みる思考も、論理的な固定化に逆らう批判的な運動である思考も、いずれも見られるのである。したがって一方を否定し、一方を過大評価することにおちいらぬよう、両者を総合する見解に努めなければならない。私達は進化の研究によってそれを試みるであろう。またオリヴィエ・ノドは現象の意味や本質を探究する思考も全体的な統一と総合を目指す思考もほとんど相違がないように思っているようだ。前者を後者と同一視しながら分析結果を解釈している(4)。この混同がモンテーニュの思考の特質を誤解させている。実例のひとつひとつの意味を明確に認識してはいるが、相互の関連を理解しようとはしなかったり、全体的に統一する方向へは進もうとしないことも、十分にありうる。本質を把握する行為は、個々の認識を関係づけ、総合しながらおこなわれるときもあれば、一例を捉えて、その意味を熟慮し、洞察し、普遍的

な深みに達することによって実現されるときもある。それは場合により人により異なっている。モンテーニュの思考はいずれの性格が強いのか、この点についても私達は進化の視点から明らかにしてゆきたい。

ジャン・イヴ・ブユーとローレンス・クリツマンとはまったく反対の意見をのべている。前者によれば初期の作品は全体的な秩序があり、断言をもとめる歩みがあり、ひとつの真理を証明するために実例があつめられている。これに反し、概して無秩序になった後期の作品では、既成の確言が批判的に分析され、隠された欺瞞をあばくために解体されるという(5)。しかし、これは一面しか捉えていない、相違を際立たせる修辞に溺れた単純化である。初期には章を統一する秩序があるように思われるのは、おおくの場合章が短いからであって、その著作を司っている思考が全体を総合する動きをもっているからではない。私達がこの節で指摘した以外の思考法は、章が長くなり、主題が複数になったとき、相互を関係づけ、統合するような論理性をそなえていない。この点は注意して識別しなければならない。また第2節において多様性の構成や論理として説明したように、ひとつの真理を証明するのとはまったく逆に、既成の見解やみずからの考察の一面性をつぎつぎと批判する思考によって実例が収集されるのも、初期の『エッセー』の重要な特徴である。さらに、執筆期による作品の性格の相違をブユーのように形容すればいかにも鮮やかに進化が捉えられているようであるが、ひとつの重要な問題点が隠されている。これほどはつきりと『エッセー』が変化したのであるならば、著作の方針や思想がおおきく変わったからであるにちがいない。ところが、今後すこしづつ明らかにしてゆくつもりであるが、そのような急激な転換は存在しなかったし、それは進化を説得するためにおちいりがちな誇張なのである。今までに分析したように初期にいろいろなタイプの著作が見られる事実も、すでにある程度その証明になっているであろう。

後者によれば実例の収集は一般的な真理を証明するためではなく、読者を当惑させるためである。テキストは総括的な論理をもたず、最初に提示した情報の妥当性を検討しながら展開し、解答を出すどころかつぎつぎと疑問を生みだしてゆく(6)。クリツマンのテキスト分析と特徴の抽出は著作行為と思考の重要な側面を照らし出してはいるが、やはり一面的である。時代的な条件のなかで自分にふさわしい著作と思索のありかたを摸索しているモンテーニュの姿をまったく看過している。初期の章の著作法をひとつひとつ分析したとき私達がまず気づくのは、共通性であるよりも、中期や後期以上に種類が多いという特徴である。この現実から解釈を出発させなければならない。それはモンテーニュがルネサ

ンスの遺産であるルソンという形式に倣いながら自分にふさわしい作品様式を摸索した痕跡であるにちがいない。したがって、このような試みを経たのち、彼がどのような思考法とどのような著作法を『エッセー』の原理として選んでゆくか、これが初期から中期への進化を考察する私達のひとつの視点となる。

なおブユーとクリツマンの研究は『エッセー』の進化をテーマにしているわけではなく、明確に執筆期を設定して論じているのではない。したがって上記の紹介と批判は、彼らの説明から私達の言う初期の作品に該当すると判断したからである。ヴィレーが華々しい成果をあげ、やがてその説が批判にさらされてのち、進化という観点からの研究はほとんどおこなわれなくなった。しかし一方では、『エッセー』が作者の20余年の歩みとともにできあがった作品であるため、進化をテーマにしていない研究もしばしば執筆期による相違を論じている。そしてヴィレー以上の単純化や誤解が生じている。進化に言及する解釈や説明をおこなうのならば、それにふさわしい自己の研究方法を明確にすべきであろう。

私達はこの第5節までにおいて、モンテーニュがどのように実例を利用しながら『エッセー』をつくっているか、その方法を調べてきた。ひとつの注意すべき点として、読書から集めた実例は彼にとっては記憶すべき知識ではなく、現実の経験とおなじように判断と思索の対象であった。したがって著作において実例をどのように利用するかという問題は、どのような態度で対象を捉え、どのように認識を発展させるかという認識論に通じる。実例を利用する著作の方法論は認識の方法論と共通した性質をもっている。モンテーニュの認識論は『エッセー』の構造の意味を別の角度から知らせてくれる。あるいは作品の分析の結果を私達の思想によってではなく、作者自身の思想にしたがって解釈するためにも、この角度からの考察が必要であろう。要点の簡潔な説明が見られるのはつぎの箇所である。

さらに私は主題については偶然が提供してくれるままに任せる。私にとってはどれもおなじように結構なのである。しかも主題を全体的に、かつ底の底まで論じるつもりはない。それぞれがもっている千の顔のなかから、自分の気にいったのをとりあげる。私は普通とちがった珍しい光のあて方で捉えるのが好きである。(I-50, p. 460-461)

モンテーニュが目指すのは全体的な、徹底的な理解ではない。それはたんに選択の問題ではなく、事物の多様性と流動性を強く感じている彼にとっては「千の顔」の全体を認識

しようとするのは無謀な企てのように思われるからである。彼は様相のひとつひとつをとりあげ、「普通とちがった珍しい光のあて方で捉える」ことができるように、個々の考察に精力をそそぐのである。

第1巻第50章の執筆年代はヴィレーによれば初期に推定できなくもないが、不確実であるという。のちに言及するように私達の作品構造の研究とこの章の言葉を照らし合わせた結果も初期の可能性を高めるのであるが、しかしまた上の文章に拘泥する必要もない。おなじような考え方は執筆時期の確かな章に一部分ずつあらわれている。まず、それぞれのものが千の顔をもっているという見方はつぎの箇所の最後と共通している。あるいは、すでになんどもモンテーニュの多様性と流動性の意識を論証したあとでは、このような引用は無用かも知れない。

我々は断固たる意志によって侮辱の復讐をなしとげ、勝利の一種独特な満足感をおぼえるが、しかしながら涙をながして泣く。我々が泣くのは復讐が成就したからではない。何も変わりはしなかったが、我々の心がものごとを別の目で眺め、別の面を思い浮かべるのである。というのはそれぞれのものは数多くの相貌と数多くの輝きをもっているからである。(I-38, p. 358)

全体を関連づけ、統一的な理解を得ようとする認識方法にたいする疑問の表明はつぎのところに見られる。

人間の行動を熱心に検討している人たちは、ひとつひとつを結びつけ、おなじ輝きのもとに置こうとするときほど当惑をおぼえることはない。・・・[中略]・・・世間にはこういう例がいっぱいあり、めいめいが同じようなたくさんの例を提供できるであろう。したがって、利口な人たちがこれらの部分をつなぎ合わせようと苦勞しているのをときどき見ると、私には奇妙に感じられる。というのは、定めなきことこそ我々の本性にもっとも共通した、明白な欠点のように思われるからである。(II-1, pp. 1-2)

このような多様性と流動性を本性としている対象にたいしてモンテーニュが提唱する認識の方法は、つぎのような性格のものである。

ある種の法と規律を自分の頭のなかに定め、打ち立てた人であるならば、我々は彼の人生のあらゆる局面においてひとしい生活態度とものごと相互の確実な関連と秩序が輝くのを目にするであろう。小カトーの場合とおなじように、こういう人の人生について説明するのは非常に簡単であろう。その鍵盤のひとつに触れたならば、すべてに触れたにひとしい。非常に調和のよい音の調べをなし、相互に矛盾することはありえない。しかし、反対に、我々にたいしては、行為とおなじ数だけ個々別々の判断が必要である。私の考えるところもっとも確実な方法は、行動と周囲の状況を関連づけて理解するにとどめ、それ以上の詮索をしたり、それ以上の結論を導き出そうとしたりしないことである。(I I-1, pp. 4-5)

結局のところモンテーニュの表明している認識論は、基本的感情とおなじように多様性と流動性を特色とする人間観や世界観にもとづいたものばかりである。この節で分析した論証的な著作のような、全体を関係づける総合と統一的な秩序をみずからの目標としてのべた文章はない。この節で私達の指摘したような著作はおそらく伝統的な論理性に従ったのであり、彼の関心と問題意識はその方向には向いていなかったにちがいない。「運命はしばしばその歩みを理性と一致させる」(I-34)では、運命のひとつひとつの働きを分析し、章題によって全体の総合を示そうとしたが、この企ては成功したとは言えない。分析と総合の関係は曖昧であり、運命のいくつかの様相を断片的に描くことに終わっている。現象の多様性や流動性の諸側面を検討しているだけの作品のほうが、味わいぶかい出来栄である。あるいは第1巻第23章は、習慣の影響力についてまず肉体への作用、つづいて精神への作用を論じたのち、習慣の威力がもたらす最大の結果に焦点をしぼり、長年の慣例から権威を帯びているにすぎない、法律の理性的な根拠の薄弱さを批判して前半部をしめくくっている。そして後半部では行動に視点を転じ、いかに馬鹿げているとも社会の一般的な形式に従うのが賢者の態度であるという主旨の論を展開する。この章は全体的な分析では、結論へ向かってゆく論理的な組み立てが明確なタイプに分類できる。しかし最後は、それまでの主張とはちがった行動の仕方を選ばなければならない場合に注意をうながしながら章を結んでいる。論証の統一的な秩序をみずから破壊しているのである。これらふたつの章が示しているように、全体を関係づけ、総合する思索はモンテーニュの資質に合っていなかったのかも知れない。論証的な構成の作品は摸索期ゆえの著作形式であり、認識形式であったとも考えられる。彼は共通性を抽象しようとしても、具体的

な個々の特徴を閉却できないのであろう。彼は統合に向かう抽象的な論理性よりも、個々の様相を見分ける繊細さに恵まれていたようだ。あるいは、一般法則をひきだしうるような恒常性や斉一性を感じられないのかも知れない。現実の流動性や多様性に心が占められていたのならば、「状況」を越えて妥当する真理や原理を探究するのに懐疑的であったとしてもふしぎではない。彼から見れば、具体的な様相のひとつひとつにおいて「行動と周囲の状況を関連づけて理解するにとどめる」のが、「もっとも確実な方法」である。私達の研究が抽出したタイプで言うならば、第3節でとりあげた第1巻第19章や第1巻第15章のような思考法であろう。実例が宿している、現実の多様性と流動性の諸様相を判別し、事実の教える意味をひとつひとつ汲みとってゆくことがモンテーニュの認識と著作の要なのである。

第1章第5節(注)

- (1) III-A-15, pp. 32-33.
- (2) III-A-6, p. 397, p. 289.
- (3) II-A-48, pp. 64-75.
- (4) II-A-48, pp. 77-102.
- (5) II-A-56, pp. 101-102.
- (6) II-A-37, pp. 47-48.

6. 自己描写

『エッセー』はモンテーニュが自己を描いた作品でもある。もっとも一般的な意味において作品は畢竟作者の自我の表現であり、小説家ならば小説をとおして、哲学者ならば思想体系をとおして自己自身を披瀝しているとも言えるが、しかし『エッセー』とモンテーニュの関係はもっと直接的である。彼は随所で自己の性格を分析し、自身の嗜好や肉体的な特徴を語るのみならず、一日の大部分を過ごす塔と書斎の有様まで詳しく記入している。「憎むべき自我」に執着するこの特徴がパスカルの罌甕を買ったのも当然であろう。

自己を描こうという彼の愚かな企て！しかも誰にもよくあるような、行きずりの、みずからの主義に反した過ちではない。そうではなく彼自身の主義として、計画の第一の眼目として企てたのである。弱さのゆえにたまたま愚かなことを言うのはありがちな欠点である。しかし意図して言うのは我慢がならない。(ブランシュヴィック版 62)

たしかに自己描写はモンテーニュの主義であった。『エッセー』を出版するに際して巻頭にくわえた序文はその宣言文である。

読者よ、これは誠実に事実を記した書物である。まず最初にお断りしておくが、私が筆をとった目的はわが家だけの、私的な目的以外のなにものでもない。あなたのお役に立つことも自分の栄誉のこともまったく考慮しなかった。私の力ではそのような企ては不可能である。私がこれを書いたのは、親戚や友人たちの個人的な便宜のためである。すなわち、彼らがやがて私と死別したのち、私の態度や気質の特徴のいくらかをこのなかに発見しながら、私についてのかつての知識をより完全な、より生き々々したものに育ててほしいからである。もし世間の評判を求めるためだったならば、借り物の装身具で装い、緊張し身を固くして、最良の歩きぶりを見せたであろう。私が見てもらいたいのは気どりや技巧のない、純粹で自然な、普段の様子の子の私である。というのは私が描く対象は私自身だからである。

このように自己描写は明らかに『エッセー』の一大特徴なのであるが、しかし、かと言っ

てこの問題が単純なわけではない。第一に、序文にかぎらずほかで何度も表明されている自己描写の理由や目的は首尾一貫していない。私達は相違について考察をめぐらせ、あるいは変化発展の相において捉えなおさなければならない。第二に、モンテーニュは自己を描く方針を定めたのち『エッセー』にとりかかったのではない。したがってその起源を探究する研究が必要である。第三に、微妙で困難であるが、そもそも自己描写とは何かをも考えなければならない。従来この点にあまり疑問をいだかなかつたために研究が深まらなかった嫌いがある。自己描写というものの性格についての反省が『エッセー』についての分析と平行して進まなければならない。フィリップ・ルジュンヌによれば、自伝はつぎのような範疇における要素から構成されている。

- | | | |
|----------|---------------------------------|-------------|
| 1. 言語の形態 | a) 物語 | b) 散文 |
| 2. 主題 | 個人の生活、一個人の歴史 | |
| 3. 作者の状況 | 作者と話者との同一性（作者の名前は実在の一人物を指示している） | |
| 4. 話者の位置 | a) 話者と主要人物とが同一 | b) 物語の回顧的観点 |

ルジュンヌはこれらの条件をすべて満たしているのが自伝であると定義したのち、他の隣接ジャンルに欠如した条件の一覧表によって相違をしめしている。それによると、「自己描写あるいはエッセー」は1-aと4-bの性格が欠如していることによって自伝と異なっている(1)。なお、また、自伝の基本的な特徴としてルジュンヌが述べている自伝契約の存在、つまりテキスト内部における作者・話者・主要人物の一致を読者に約束している点においても、先ほど序文を見たように『エッセー』は条件を満たしている。しかし、このような画期的な自伝の定義も、『エッセー』の自己描写に関する疑問を解決できる類ではない。構成要件について明確な理解が得られたのは大変参考になるが、みずからの方法によって考察しなければならない多くの問題がいぜんとして残っている。

自己描写をこの論文のテーマのひとつとしてとりあげたのは、随想の構造や展開の過程に注目する私達の研究方法が新しい貢献をなしうと思われたからである。作者みずからがしばしば自己描写に言及しているため、従来『エッセー』におけるその説明を解釈するのに汲々とし、具体的な分析の労を怠ってきた。彼の言葉に解釈者の言葉が追加されるだけであって、自己描写の現実にはほとんど目が向けられなかった。もちろん作者自身の説明

は貴重な手がかりであるが、自己描写の実際の姿はそれに劣らず重要な事実である。私達は逆に後者をまず観察したのち、その解釈のなかに前者を組み入れるようにするであろう。

したがって『エッセー』のどのような部分を自己描写として注目するか、まずこの点を決めなければならない。原理的な定義を最初に明らかにするのは困難であり、またそれが最終目的でもなく、私達は自己描写の実態を観察し、把握しようとしているにすぎない。しかし自己描写を表す指標を明確にしておかなければ、秩序だった分析がすすめられない。私達としては簡単に、作品において直接自己自身を話題にしている部分をすべて自己描写と見なすところから出発することにしよう。人称で言えば、話者も主要人物も一人称になっている場合である。この点は自伝よりずっと単純である。したがって、いかにもモンテーニュらしい個性が窺われるとしても、記述の直接の対象が他者や物であるならば、それは自己描写とは見なされない。逆に、どのような陳腐な、とるに足らない内容であろうと、自己が自己についてという話者と対象との同一性が存在しているならば、自己描写として観察することになる。

私達のこの簡単な指標は初期の自己描写を考える際にとくに有益であると思われる。初期の作品には中期や後期のように存分に自己自身を語った、自己描写らしい自己描写はほとんどなく、その萌芽の状態を観察し、起源を推察しなければならないからである。とすれば作者自身の説明に頼るのは危険でさえある。それは起源を意識的なものと決めてかかるに等しい。起源は意識的な場合もあれば無意識的な場合もある。ルジュンヌの言う自伝契約はこの問題については参考にならない。自己描写 (autoportrait) やエッセーが文学ジャンルになったのはのちのことであり、モンテーニュにおいてはルソンという下地から両者が生まれてくる。第3節において私達は初期の『エッセー』について読書実例、思想例、見聞実例、自己実例、私見という構成要素を設定した。この図式にしたがって言うならば、前二者を後三者が侵食してゆく運動のなかから自己描写とかエッセーという性格が生じるのである。したがって彼自身による弁明と自己描写の起源とは区別して捉え、たとえば私達のような指標を仮定して萌芽の状態を分析してみる必要がある。さもなければ起源を捉え、初期から中期への進化を明らかににはできない。自己描写という個性的な様式を誕生させるにいたる初期の著作の役割を看過することになる。

私達は作者である話者が自己について語るという同一性の存在する記述が初期の作品においてどのようなあらわれ方をしているか、つまり展開の論理と構造のなかで理解するよ

うに努めるであろう。そのようななかで把握するならば、自己描写の感情的な、あるいは思想的な意義がより明確に理解できるはずである。自己描写についてのモンテーニュ自身の自覚と表明がどこに由来し、何に関連しているか知ることによって、彼の言葉をいっそう的確に判断できるようになるにちがいない。また、このような分析をくりかえしながら、簡単な指標からはじまった考察がだんだんと豊かになるであろう。彼が自己について語る内容はけっして一様ではない。たとえば、性格や気質について反省すること、食べ物や酒の好みを語ること、肉体的な特徴を描くこと、書斎の間取りを紹介すること、これらはまったくおなじ性格の自己描写であろうか。伝統的な見解、たとえばランソンのように、たんに人間とその心理にたいする探究の欲求から理解するだけで十分であろうか(2)。これほど内容がちがっているならば、その背景にある動機や心理も異なっているかも知れない。随想の展開のなかでそれぞれちがった意義を帯びているのではないかと想像するのも可能である。私達は種々の性格の自己描写が随想の構造と論理のなかでもつ価値を評価しながら、その上に私達の解釈を打ち立てようとするであろう。

どのような過程を経て自己自身についての記述があらわれるか。その出現の構造と論理を捉え、究明するのは複雑であるのみならず、非常に微妙な問題である。研究方法にしたがって調査、分析し、整理しようとしたとき、私達は一部分のテーマとしては取り扱いきれない広さと深さを感じた。しかし、とにかく全体的なテーマと関連する範囲内だけでも明らかにするように努めることにしよう。私達が設定した作品の構成要素から言えば、初期の『エッセー』においては非個性的な読書実例と思想例が支配的であり、これらの要素のなかに個性的な三要素（見聞実例、自己実例、私見）が浸透してゆく。このような進化の外貌にしたがって、まず思想例との関係のなかで記述が自己自身に及ぶ場合を見てみよう。

(1) この教えにいっそう適した気質の人々がいる。理解がのろく、鈍く、繊細で気むずかしく、気軽に動かない人たちは（私は生来の性質からも思想からもこの種の人間である）、張りつめた活発な精神の人たちよりもこの忠告に従うのがいっそう容易であろう。後者は何でも受け入れ、何にでも首をつっこみ、すべてに情熱をもち、どのような機会であろうと自分を差し出し、提供し、捧げるからである。(2) 外的な偶然的な便宜は我々が快く感じるかぎり利用すべきであるが、我々の主要な土台にしてはならない。理性も自然もそれを望んでいない。なぜ我々はこれらの法則に逆らい、我々の幸福を他人の力に従属させようとするのであろうか。(3) さらにまた、

信仰心によってなした多くの例があり、理性によってなした何人かの哲学者の例があるように、あらかじめ運命のもたらす事故を先取りし、我々の手中にある便宜を捨て去り、あるいは身のまわりのことを自分自身でしたり、地面に寝たり、目をくりぬいたり、財産を川のなかへ投げ捨てたり、苦痛を求めたりするのは（ある人たちは今生の苦しみにによって来世の至福を得るために、別の人たちはもっとも低い段階に身を置くことによって新たな墜落のない安全を得るために）、過激な徳の行為である。もっとも激しくもっとも強い天性の人たちは隠遁さえも輝かしい模範にするがよい。

貧しいときにはすこしの所有とその確実さを誇り、わずかなもので満足する。しかし、運命が好転し、裕福になれば、肥えた土地からの収入に恵まれた者ほど幸せで賢い人はいないと主張する。

（４）私にはそんな極端にまで行かなくとも、する事は十分にある。私にとっては幸運なときに不運にそなえ、安楽なときに想像力のおよぶかぎり未来の不幸を思い浮かべるだけで十分である。（５）ちょうど我々が模擬戦や騎馬戦で身を慣らし、まったく平和なときに戦のまねごとをするようなものである。（６）私は自然の必要としている限度がどこまでであるか見ようとする。そして、戸口に來たあわれな乞食がしばしば私より陽気で健康であるのを眺めては、彼の立場に身を置き、私の魂を彼の流儀にあわせて変えてみようと試みる。このようにして他の例でも経験を積むならば、死や貧乏や侮蔑や病気が間近に迫っているのを感じようと、私より劣った者が忍耐強く受けとめているものを恐らない決意をたやすく固めることができる。（７）それにまた、知力の低劣さが強力さより多くをなしうるとも、理性による効果が習慣の効果の域に達しえないとも思われない。（８）あるいはまた、付属的な財貨がいかに頼りにならないか知っているので、私は十分に恵まれているさなかであって、最高の願いとして、自己から生まれる富と自己自身とに満足するようになしたまえと神様に祈願してやまない。（９）元気な若者たちのなかに、風邪にかかったときに飲む丸薬をたえず小箱にいれて持ち歩いている人々を見うけるが、彼らは手近に治療薬をもっていると思う分だけ風邪を恐れることがすくないのである。こういう風にしなければならぬ。まして、もっと激しい何かの病気に脅かされているように感じたならば、患部を和らげ、ねむらせる薬をそなえなければならない。（I-39, pp. 369-

この「孤独について」の著作の方法は一度第4節で分析した。それは古人の思想を引き写したり、要約したり、比喩を借用したりしながら、自分の作品に織りこむ剽窃であった。したがって引用部の冒頭を読んだとき、以前の部分についておよその想像ができるであろう。さらにまた、引用文より後の部分でも、おなじように古人の思想を利用しながら孤独な生活についての論を展開している。このようにして進められている著作の途中に上のような部分があられているのである。

(1)は古人の教えを反省し、吟味している。そのとき自己自身についての言及が挿入され(原文では関係詞節)、記述の客観性が崩れはじめる。古人の思想と自分自身との関係がいくぶん明確になり、自己の人間性の露出が生じる。その書き振りはたんに「私のように理解がのろく、鈍く」と書くのに比べ、いっそう強い自己表現の欲求が感じられる。記述へのこの自己自身の侵入はのちの展開にすくなからざる影響をおよぼしたにちがいない。後半の「後者は何でも受け入れ」云々の、いかにもモンテーニュらしい批判をふくんだ文が付加されたのもその影響かも知れない。いずれにしろ(2)はすでに引用部以前の古人の思想を学ぶだけの展開ではない。(1)の後半でみずからの内部に生まれた新しい脈絡を発展させている。(2)と(1)の関連がやや曖昧なのもそのためである。視点を変化させているが、(3)もその脈絡の継承である。

(1)における自己自身がまだ細部への侵入にすぎなかったからであろうか、(2)の人称は「我々(nous)」であるが、(3)にたいする批判的な展開である(4)は「私(je)」の人称によって自己の態度を明確にしている。ヴィレーによれば(4)に似た意見はこの章で利用されている『書簡』に見られ、(5)もセネカがしばしば使っているイマージュに近いと言う(3)。(3)が読書の知識にもとづいた記述であるのを考えるならば、(4)がセネカの影響のもとに書かれた可能性は否定できない。しかし、その痕跡が認められるとしても、表現にははなはだしい相違があり、自己自身のほうに引き寄せた内面の運動から生まれた文章であるにちがいない。(6)と(8)がその証明になる。これらはもはや古人の思想を学ぶためやただ私見を挿入する類の記述ではない。自分の思想を表現することと自己自身を描くことが密接に一体化している。それは対象と自己との距離を縮め、自分自身にそくした表現を求める、(1)から(4)に到る内面的な運動があつてこそ生じる変化であつて、(4)と(5)においてもまだ『書簡』のたんなる借用にとどまら

いたならば(6)や(8)は生まれなかったにちがいない。(7)のような理性にたいする信頼がセネカにしばしば見られるとしても、周辺の(6)と(8)はそのような類似性を越えた個性的な輝きを放っている(4)。

古人の思想を学びながらの、「孤独について」の著作は、公職を辞して無位無官の生活を送りはじめたモンテーニュにとって切実な、内面的なつながりがあった。しかし、たとえそのような場合であろうと、人によれば一般化した、客観的な書き方でおし通すかも知れない。表現の形態は時代により個人によりさまざまである。モンテーニュは第4節で考察したような著作法を選んだのであるが、その途中で内面化の運動が進展すると、話者が自己自身について語るという同一性が強まってゆく。上の引用部では、随想がすすむにつれだんだんと自己描写の色彩が強まる様子が観察できる。古人の思想を自分にそくして理解し、吸収しようとする態度がこのような変化を引き起こしたにちがいない。自己自身に言及することは、他者の思想を自己の文脈に置きなおし、みずからの個性にそくして変質させる方法であったとも考えられる。それがどの程度意識的であり無意識的であったのかは非常に微妙であり、可能なかぎり実例を分析したのちに考察しなおすことにしよう。また、そこには自分という人間を明確にしたいという願望や自己について語り、表現したいという欲求がからんでいるかも知れない。モンテーニュの心理についてこのような側面を想像することもできるであろう。

古人の思想を理解しなければならない箇所にあられるのであるならば、私見を述べている、独立性のより強い部分において自己自身への言及がおこなわれたとしても何らふしぎではない。たとえば第1巻第20章には自分の生まれた年月日と時間に触れたところがある(p. 99)。この例においては自分の誕生日と年齢を記さなければならない必然性はない。自己を表面にあらわさない客観的な書き方は、その意志さえあれば難なくできるであろう。モンテーニュは自己自身に言及し、みずからに反省をうながす形式のもとに思索をふかめるのを選んだのである。したがってそれは思考と論の質にかんする好みに左右されている。自分自身にそくし、具体的な日常の世界にくだって思考をすすめ、論を展開する彼の好み在那里に窺われると言えよう。そしてその結果、記述の生硬さがとれ、生彩と充実度を増している(5)。

思考と認識の過程のなかに自己を反省し観察した結果をさらにはっきりと組み入れ、位置づけているときもある。この問題については初期の作品に占める経験の位置、つまり私達の言う見聞実例を思い出さなければならない。以前の節において、読書に拾った実例を

中心にした思索と著作の態度を分析したのち、そのなかにどのように見聞実例があらわれてくるか考察した。たとえばつぎのような二例を思い出してみよう。第1巻第20章で予想もつかない変死の例を書物から数多く列挙したあと、モンテーニュは最後に弟の不慮の死をつけ加えている。読書で知った実例をみずから見聞した実例とむすびつけ、死についての哲学的な議論をすこしでも自分の経験のなかへ移し込もうとしているのである。あるいは、第1巻第2章の構成における経験の位置はつぎのようであった。

読書実例——→見聞実例——→解釈——→解釈を裏づける読書実例——→経験の分析による立証——→詩句の引用による分析の裏づけ——→結論——→結論を立証する読書実例の列挙。

読書実例の意味を解釈し、解釈を裏づける実例をさがす試みがおのずと思索を刺激し、経験の分析をうながしている。これらの二例の示すように、『エッセー』にあっては読書実例の世界と現実の世界は通じあっている。書物で出会った実例を対象にした思索は机上の空理空論におわることなく、モンテーニュを現実にたいする観察と吟味へと導いてゆく。読書実例の世界における彼の思索は、みずからの発展によって現実の世界へ帰ってゆく反省的な方向性を内在している。このような思索の動きのなかで自己自身を実例にとりあげることが生じたとしてもなんらふしぎではない。先ほどの二例では他者について見聞した事柄であるが、さらに進んで自分自身におこった事件や過去の行動や考え方などを反省し、客観的に捉えなおしながら実例化することもできる。そしてそれを読書実例や見聞実例とおなじように認識の対象とし、思索の展開を支える事実として活用しはじめたとしてもふしぎではない。反省的な方向性が内在しているのみならず自己を表現する欲求もひそんでいるらしいモンテーニュの思索にあっては、それはごく自然な変化であり、進化であったにちがいない。私達の言う自己実例の出現である。では具体的に『エッセー』にそくして考察してみよう。

(1) しっかりと足を踏んばって耐え、これ【死という敵】と戦うすべを学ぼう。まず最初に我々にたいする敵の最大の有利さをとり除くために、普通とはまったく反対の道をとろう。敵から異常さをとり除き、敵と慣れ親しむようにしよう。何よりもしばしば死を頭に浮かべよう。あらゆる機会をとらえ、そのあらゆる様相を想像しよ

う。馬がつかずいても、瓦がいちまい落ちてきても、ピンがちょっと刺さっても「ひょっとしてこれが死であつたら」ととっさに思いめぐらしてみよう。こうして我々を鍛え、訓練しよう。我々の本性を思い出させるこのリフレインを祭りのときや幸福な最中にもいつも口ずさみ、喜びに心を奪われるあまり、死が我々のこの活気を狙い、脅かす方法や切っ掛けがじつに数多いことをときおり反省するのを忘れないようにしよう。(2) エジプト人たちはそのように振る舞った。彼らは宴会の最中の最大のごちそうのとき、死人の乾いた肉体を運びこませ、客たちへの警告とした。

(3) 明けゆく毎日を自分にとって最後の日と思え。

あてにできなかった日々を感謝して受けよ。

(4) 死がどこで我々を待ち受けているかわからない。いたるところでこれを待とう。死の予行演習は自由の予行演習である。死を学んだ者は隷属を越えた者である。死ぬすべを知るならば、我々はあらゆる服従と強制から解放される。(5) 捕虜になったあわれなマケドニア王が凱旋式に引き回さないように頼むために派遣した使者にむかって、アエミリウス・パウルスは「そんな要求は自分自身にすればよい」と答えた。

(6) 本当にどんなことであろうと自然がすこし手を貸してくれなかったならば、人為や技巧がかろうじてうまくゆくのをさえずむつかしい。(7) 私自身は憂鬱屋ではなくて夢想家である。私はほかの何よりも死についての空想に始終耽っている。もっとも放縦な年齢のころ、ご婦人がたや遊興のさ中であつて、嫉妬心や期待している何かの不確実さなどにひとりで一生懸命に耐えているように見られたときもあつたが、しかし私が黙想していたのは、つい先日、私のように遊びや恋や楽しい思い出で頭をいっぱいにしておなじような饗宴から帰ろうとしているとき、熱病と死におそわれた見知らぬ人のことであつた。おなじ運命が私の耳元まで近寄ってきているかも知れないと、反省していたのであつた。私はこのような思いに耽りながら額にしわをよせてはいなかった。ほかの場合と変わりはない。このような想像で最初から痛みを感じないのは不可能であるが、もてあそび、慣れ親しんでいるうちに、結局はまちがいなく手なづけられる。さもないならば私はたえず恐怖と狂乱におちいついていたであろう。というのは、私ほど自分の命を信用せず、その継続を重視しない者はいないからである。私が今日まで幸福な状態を享受した健康がその期待を延ばしもしなければ、病気がそ

れを縮めもしない。私は各瞬間に死からのがれたような気がする。(8) 実際は災いや危険が我々を死に近づけることはほとんどない、あるいはまったくないと言ってよい。我々をもっとも脅かしているこの事件がなくとも、数百万の他のものが頭上に迫っているのを考えるならば、元気であろうと熱があろうと、海上にしようとなが家にしよう、戦場にしよう、休息中であろうと、死はおなじように我々のそばにいるのに気づくであろう。(9) 死ぬ前に私がなすべき用を仕終えなければならぬとなると、たとえ一時間あればよいものでも、いくら時間があっても足りないように思われる。(10) 先日ある人が私の手帳をめくっていたとき、私が死後にしてもらいたい事柄について記した覚え書きを発見した。私は彼に、自宅からほんの一里はなれていただけで、健康で元気だったけれども、家まで到着できるとはまったく確信がなかったため、急いでこれを認めたのだと説明した。実際その言葉にうそはなかった。(I-20, pp. 105-109)

(1) においてモンテーニュは死の恐怖を乗り越えるために正面から死を見据えるストア的な方法を提唱する。(5) まではすでに私達の検討したような著作法である。(2) と(3) で実例と詩句を挿入。(4) ではセネカの『書簡』26を剽窃しながら、簡潔な表現で思想に力強さをあたえている。(5) は前者を実証するための実例の引用。これらの記述ののちに思索の反省的な動きがはじまる。(6) は(4) や(5) からの直接的な発展ではなく、視点を変えながら(1) や(2) の内容を捉えなおしたのである。おそらく(2) のエジプト人の話が(7) のようなみずからの過去を呼びおこし、視点の変化を引きおこしたのであろう。死に慣れ親しむ方法は彼自身が実行し、体験した方法であった。死の恐怖にうち勝つこの技巧は「慣れ」という自然の助によって効果を奏した。つまり(7) における自己自身への言及は死に対処する(1) のような方法論について、みずからの体験によって現実性をあたえ、その有効性を支持する働きをしている。思考が実例にそくして展開するために挿入されている点においては、読書実例や見聞実例とおなじような役割をはたしている。しかしながらまた(7) には、哲学的な議論を読書実例と組みあわせることや、見聞実例をつけ加えながら現実のなかで再吟味することとはややちがった趣がある。そのような論理の枠を越えて輝く生彩がある。(7) によって随想は外界の現実からさらに個人の内面に溶けこみ、モンテーニュという個性との関わりの中で死生観の思想を描くに到っている。彼の人間性が以前とは質のちがった新しい味わいを付与してい

る。この箇所はすでに自己描写としての意義を帯びはじめていると言えよう。これからさらに発展した(10)はその色彩をより濃厚にしている。随想の展開に占める論理的な価値もいっそう微妙である。(8)は視点をかえながら(1)から(7)までに含まれている別の側面に焦点をあてている。読みくだしているとき(7)と(8)との関連が曖昧に感じられるのはそのためである。記述の人称が(8)の「我々」から(9)の「私」に変わるとともに(10)のエピソードが語られる。しかしこれがはたして(8)の論の有効性や真理性を増す働きをしているかどうかは疑わしい。(8)のように感じている者がいることを(10)によって示してみても、(8)の真理性を増す効果はほとんどない。(8)の話者と(10)は同一人なのであるから、個人の妄想を述べているのに変わりはないとも見なしうるからである。したがって(10)は(8)のように感じている人間の存在を知らせる働きが中心であり、結局のところそのような自己自身を描くことに比重が移っている。随想の発展につれて(1)の論の拘束性が弱まるとともに、自己描写としての独立性が強まったと考えられよう(6)。

モンテーニュの思考は読書実例に倣いながら現実から見聞実例を抽出する発展方向をふくんでいたのみならず、論の進展とともに自己自身に視線をそそいでゆく反省的な傾向をもっていた。彼の精神は読書実例や古人の思想にたいして活発に反応しはじめると、その内容を理解し、記憶する状態にとどまるのを嫌い、自身の身の上に引き移して捉えなおすのを好む傾向があった。記憶が苦手で、やや論理性に欠けていて、生来夢想家のところがあり、感受性が豊かで繊細な人間はこういう風に思考がめぐるのかも知れない。この推測が適当であるかどうかは別にしても、モンテーニュの思考の反省的な動きは引用部の分析から十分に察せられるはずである。『エッセー』の自己描写はこの性癖に由来しているのではないだろうか。彼は事実の世界を智慧と思想の宝庫と考え、判断を試みる第一の対象として評価したのであるが、自己描写もこの基本的な態度と関連があるにちがいない。事実を捉えようとする視線が反省的な思索の活動とともに読書実例から自分の見聞した現実へ、さらに自己自身の世界へと深まってゆく進化の結果、自己描写があらわれたと推察されるのである。それは最初はほとんど無意識的な進行だったであろうが、その意義を彼に教え、自覚させる事件がおこった。彼は全速力で馬を駆ってきた兵士に衝突され、周囲の人たちから死んだと思われたような失神状態におちいった。「実習について」と称する章は人の報告と自分の想起しうる事実とをつきあわせながら、その時の状態を分析し、描写した作品である。彼は意識と無意識とのあいだを漂った体験を、死の素顔をまぢかに見た貴重な

死の実習として『エッセー』に書き記したのである。そしてこの章の結論としてつぎのように述べている。

ごくつまらない事件についてのこの話は、自分のための教訓を汲みとらなかったならば、あまり意味がないであろう。というのは、本当のところ、死に慣れるためには死に近づくしかないと悟ったのである。ところで、プリニウスの言うように、自己を注意ぶかく観察する能力をもっているならば、めいめいにとって自己自身がたいへん良い教材である。ここに記すのは私の学説ではなく研究であり、他人にたいする教授ではなく自分自身の演習である。(I I-6, p p. 57-58)

自己自身へ視線をむけるように努め、『エッセー』によってその観察を実行し、記録しようとするならば、たしかに自己自身への言及が多くなるであろう。しかし上の言葉はまだ純粹な自己描写の意識ではないことも見落としてはならない。その点は死に対処する方法を述べるなかに出てきた自己描写と同様である。それらは彼の「研究」を支える事実のひとつであり、この「研究」に付属したものだからである。先ほどの引用部から私達が推察したのとおなじように、モンテーニュが落馬事故をとおして、みずからの内部に進行していた、事実の質の進化を自覚したにすぎないのである。

落馬事故が彼の内部に醸成されていた変化に気づかせたと言い切るためには、第1巻第20章は第2巻第6章より以前に書かれていなければならない。ヴィレーの研究によれば、前者は最後の部分を除いて1572年、後者は1573年か1574年の作品である。私達の推測は執筆年代に適っている。しかしながらこれらの章が初期に属するのはまちがいないとしても、詳しい年代は断言できないという。したがって、落馬の体験によって第2巻第6章の末尾のような啓示をうけた結果、第1巻第20章のような自己自身への言及が作品に織りこまれるようになったのだと言えないわけではない。推定執筆年代はこの見解を完全に否定はできない。しかしながら、この第6節における私達の分析のすべてと考えあわせるならば、自分自身についてのべる様式が落馬のときの啓示を待ってはじめて『エッセー』にあらわれたようには思われぬ。つまりモンテーニュがつねに「めいめいにとって自己自身がたいへん良い教材である」という自覚にもとづいて自己を語っているとは考えがたいのである。あるいは今後の展望を兼ねて言うならば、のちの執筆期の自己描写は内面の世界を省察するのみならず、自分の嗜好や肉体的な特徴や書齋のありさままでも描

くようになるが、これらすべてがはたして「自分のための教訓を汲みとり」、真理の研究をふかめるために「自己を注意ぶかく観察」しようという目的から生まれたのであろうか。その自然な発展の結果であらうか。それともほかに自己描写の性格に影響をおよぼす原因があるのであろうか。これらの疑問を解決するためにはもちろん後期の『エッセー』まで考察しなければならない。しかしこの問題はまた初期の自己描写の問題でもある。作者自身の言明は先ほどの第2巻第6章の末尾の言葉だけであるが、はたして実際に初期の自己描写はそのような一様な性格しかもっていないのであろうか。落馬の体験によって啓示された思想のみがその発展の原動力なのであろうか。つねに自己自身への言及は真理の認識に貢献する論理的な位置を占めているのであろうか。これらの点に注意しながらもうすこし私達の分析をすすめなければならない。

つぎのような文脈における自己自身への言及の意義を考えてみよう。

カエサルも偉大なポンペイウスも数々の卓越した特質に恵まれていたが、馬術も非常に巧みだったそうである。カエサルは若いころ手綱なしで裸馬にまたがり、両手を背中にまわしたまま走らせた。自然はこの人物とアレクサンドロス大王を兵法におけるふたつの奇跡となすのを望んだように、また彼らに異常な武器をあたえるのに努めたと言えよう。なぜなら誰でもよく知っているようにアレクサンドロスの乗馬ブケファルスは牡牛に似た頭をし、主人以外の誰が乗るのもゆるさず、彼だけが乗りこなすことができた。そして死後にはブケファルスの名をとった町がたてられ、称えられた。またカエサルの乗馬も、蹄が人間のように指の形にわかれた前足を持ち、馴らすのも乗るのも彼にしかできなかつた。死後にはその像が女神ヴィーナスに奉獻された。私は馬に乗ったら最後なかなかおりようとしなない。というのは、健康なときも病気のときも、それが私のもっとも気持ちよく感じる状態だからである。プリニウスも言っているようにこの状態は胃にも関節にも大変よい。さて、どうせここまで来たのだから、話をつづけよう。〔以下以前とおなじように馬にかんする実例がつづく〕（1-48, pp. 444-445）

このような自己実例が認識や論証の上でどれほどの価値があるかきわめて疑わしい。それをつけ加えることによって、前後の実例の意味についての理解がどれほど深まるのであろうか。みずからを反省し、自身の経験のなかで実例の意味を捉えなおす効用があるとも思

われない。「めいめいにとって自己自身がたいへん良い教材である」ような自己観察とも考えられない。それは「自己を注意ぶかく観察する」中から生まれたというより、口からふと漏れた身の上話に近い。心が読書実例から逸れてゆくままに、特別な目的意識なしに語られたにちがいない。しかしそれだけにいっそう純粋な、独立性のつよい自己描写になっている。何か自覚的な目的で描かれたのではない、平素のくつろいだモンテーニュ自身が表現されている。ただ自己自身を語ることに価値を認めないならば、このような記述は無意味であろう。しかしながら初期において彼がそれを評価するのは、「自己を注意ぶかく観察する」とき「めいめいにとって自己自身がたいへん良い教材」になるからである。この引用部における自己自身への言及は明らかにそのような意味づけでもって許容できる性質のものではない。別種の価値観が必要であろう。しかし初期の『エッセー』には彼がほかに自己描写を説明した言葉はない。したがって、認知的でも論理的でもないなにか別の理由で、潜在的な意識から生まれたと考えなければならない。

ところで上の第1巻第48章は初期の作と推定され、この章に中期の加筆の跡があるようにもヴィレーは書いていない。しかし、初版の出版以前に中期において初期の作品に筆がくわえられたという事実を思い浮かべると、先ほどの自己実例はのちの挿入ではないかと疑いたくなるほどの独立性をもっている。引用部の最後の言葉がその疑惑を否定しうる性格をもっているようにも感じられるが、強引な挿入ののちにこのような釈明でつじつまをあわせている例が後期の加筆に見られないわけではない。もし第1巻第48章で問題の部分だけが中期の挿入であったとしても、執筆年代の研究の方法からしてヴィレーが気づくのは不可能であろう。しかしながら、私達は他の部分からの傍証を積み重ねながら、そのような自己描写が初期に出現してもふしぎではないことを証明することができる。

どのような形式でどの程度自己自身に言及するかは、作者の欲求や個性によってさまざまな変化を示す。逆に自己を文章の背景に押しやり、個人的な色彩を消しさろうとする傾向ももちろん存在する。どちらの方向へすすむかは記述において当面するひとつの選択の問題である。初期の『エッセー』では読書実例や思想例が圧倒的に優勢であり、モンテーニュがそれらの収録や精々ささやかな私見の付加に没頭しているように思われがちである。しかし読みとる注意の仕方を変えるならば、彼が初期においても自己を記述のより前面に出す欲求をもっていた証跡を発見できるであろう。たとえばつぎのような終わりかたをしている章がある。

したがって我々の生涯の他のすべての行動はこの【死ぬという】最後の行為によって吟味され、真価が試されなければならない。それは最高の日であり、他のすべての日々を裁く日である。ある古人も言っているように、それは私の過去のすべての年月について判断をくだすべき日である。私は私の研鑽の成果の試しを死にゆだねる。そのとき我々は私の思想が口から出ているか心から出ているかわかるであろう。(I-19, pp. 94-95)

この章は最後の「私」の部分がなかったならば、読書実例と思想例を利用した普通の著作にすぎない。この章を書きすすめながらモンテーニュは自己自身とのつながりがより明瞭な表現をもとめる感情におそわれたのであろう。内容も初期の彼の重要な主題のひとつである。その欲求から上のような結びになったにちがいない。

このような記述を自己描写に含めるのは適当ではないという反論が当然予想される。しかし考察からまったく除外するほうがより大きな、より不自然な欠落を生じさせるであろう。たしかにそれは自己自身を反省し、観察しながら、精神的な、あるいは肉体的な特徴を分析し、描いているわけではない。たんに思想の述べ方の変形であると言えよう。しかしながらこのような記述の仕方を選び、好む傾向と自己描写を切りはなすことはできない。おなじ心理的な脈絡にあると見なすべきであろう。その仮定に立っていちど検討してみるのには是非とも必要な作業である。

潜在的に自己自身について語る欲求をもっている者らしい書きぶりは、ときどき章の冒頭にも見られる。たとえば「想像力について」は実例を列挙するに先だってつぎのような書き出しになっている。

「強い想像は出来事を生む」と学者たちは言っている。私も想念の非常に大きな力を感じるひとりである。これで傷つけられる者もいれば、中には一変させられる者もいる。(I-21, pp. 120-121)

私も云々の文は省いてもなんら支障はない。それは思考の論理的な要素としても、論証の説得性を増す上でも、ほとんど効用がない。記述と自己自身との距離の決定におおきく作用しているのはむしろ心理的な要因であろう。

以前にとりあげた、自己描写としての独立性や純粋性のつよい、乗馬にかんする自己実

例は、前後だけを見るならば、読書実例のなかに忽然とあらわれているようであるが、章の冒頭ですでに「私」の表出をふくむ記述の仕方がえらばれている。

さあこれから文法家になった私をお目にかけてみましょう。自然に学んだ以外にはどんな言語の知識もなく、形容詞や接続法や奪格が何かさえまだ知らないこの私の芸当を御覧ください。(I-48, p. 443)

この章で軍馬について実例を収録しようとしたときモンテーニュがこのような書き方をもとめる心理状態にあったことは、のちに突然自己描写があらわれるのと無関係ではないであろう。前者があったからこそ後者が出現したのであり、読書実例の列挙の底には両者のつながった心理的な脈絡が存在していたにちがいない。

いかにものちに自己描写という様式を生みだす者らしい自己表現の欲求や個性の傾向がうかがわれるのは、章の書き出しや結びに限られたわけではない。もちろん途中の展開にも見られる。しかもはや例証する必要もないであろう。この半自己描写とも言える記述が、短い章であるにもかかわらず、冒頭と途中と末尾にあらわれる第1巻第17章の存在を指摘すれば十分であろう。あるいは冒頭の例はすでに自己描写の域にたっしているとも見なせよう。これらはいずれもより客観的な記述に変えるのは可能であり、機会をのがさず自己を表出する書き方をおこなうモンテーニュの欲求と傾向をしめしている。しかもこれらの部分は主題の論の展開と密接に関連している。それらが最初から書かれていた蓋然性はきわめて高い。しかもヴィレーはこの章がもっとも初期の作のひとつであると推定している。今まで半自己描写の例証にとりあげた文章がすべて中期の加筆であり、しかも章のほかの箇所にはその作業をヴィレーに推測させる痕跡がまったく残っていないというのは、あまりありえない仮定である。あるいは、モンテーニュが中期において初期の作品の細部まで修正したとは考えがたい。以上の私達の分析と第17章の例をくわえて推論するならば、この厄介な問題点についての疑念は一掃できるであろう。

第1巻第8章は従来『エッセー』執筆の動機を語っている章として注目されてきたのであるが、この節で分析した特徴を念頭におきながら読みなおすならば、すこしちがった側面に気づくであろう。「まったくの無為のなかに放置し、精神が自立し、自己のなかにとどまり、安住する」(同、p. 31)のを望んだ、引退の最初の意図に反して無聊にくるしむ状態に言及しながら、モンテーニュは執筆の理由をのべている。

しかし放れ駒となった精神は、

無為はつねに精神をさ迷わせる

逆に自分のこととなると、他人の仕事を引き受けたときより百倍も多く動きまわるのを知った。そして心のなかにはたくさんの魑魅魍魎がつぎつぎと、あてもなく、無秩序に生まれてくるので、私はその愚劣さ、奇怪さをゆっくりと眺めるために、時がたてば精神みずからが恥じるようにとも願いながら、それらを記録しはじめた。(同、pp. 31-32)

しかしながら初期の作品はほとんど読書実例や思想例の収録であり、ところどころに記されている私見もとても「心のなかの魑魅魍魎(chimères et monstres fantasques)」と形容できる底ではない。作者自身の証言でありながら、奇妙に作品の現実とずれている。この点が第8章の謎である。私達の目下の問題と関連させながら考えるならば、自己を中心にした記述にたいする欲求に注目すべきであろう。証言に相応する作品形式を正確に想定するのは別にしても、モンテーニュの心が求めている方向は明らかである。初期の作品の外観とは相反し、彼が欲していたのは、史実や逸話を集めたり、古人の思想を要約したりするのではなく、自己自身を表現するような記述であった。前者の趣味は否定できないが、すくなくとも一方には後者の欲求が潜在していた。私達がこの節で分析した特徴と考えあわせながら、上の言葉をこのように理解してまちがいはないであろう。あるいは第8章全体が自己描写の章であるとも言えよう。執筆の理由の説明はまったく自己の内面を描写しながらすすめられている。この点で「実習について」(II-6)の章とともに初期の作品のなかでは出色の生彩をもっている。第8章はモンテーニュの本来の傾向に従いながら執筆の動機をのべているのである。

自己描写を生みだす記述の傾向や心理的な脈絡がすでに十分に存在していながら、なぜ自己描写らしい自己描写は初期にはほんのわずかしか書かれていないのであろうか。フリードリッヒが指摘しているような(7)、自分について語るのを禁じた伝統的な拘束がまず想像されよう。古典古代においては修辞学も倫理学も、模範になる大人物の場合をのぞいては、この行為にたいして虚栄心のあらわれとして否定的であった。キリスト教は神や聖職者のまえで告白するときのほかは一般に許していなかった。また宮廷や社交の礼儀の規

則では無駄な行為として非難されていた。しかしながら一方ルネサンスの文学では、先進国のイタリアなどで自伝が著され、自己を描くのが正当化されはじめていた(8)。デュボワによれば(9)、自己について語るのはこの時代に共通した傾向であり、社会的な規範がもはや個人の欲求にこたえる機能をうしない、あたらしい価値体系が期待されているような転換期においては、自己自身を本の題材にするのは一般的な好みにも必要性にも合致していた。したがって、文芸思潮にかんする知識を借りるならば、初期の『エッセー』における自己描写の抑制の理由が説明できるわけではない。私達はいずれももっともらしい相反した知識をもっている。みづから詳しく調査した検討なしには、簡単にそれらを利用することはできない。私達の研究方法に従って『エッセー』の内部に目をむけるならば、初期についてはつぎの痕跡がただひとつの手がかりである。「嘘つきについて」は1580年版では冒頭の自己描写が中断され、そこにわずかにモンテーニュ自身の理由づけがうかがわれる。

記憶について口を出すのが私ほど不似あいな者はいないだろう。というのは、私のなかにはその形跡すらほとんど認められないからである。世の中に記憶力がこれほどひどく欠如している人がいようとは思われない。他のすべての部分は普通で人並みなのであるが、この点については特異で、きわめて珍しく、評判と名声を得るに値するのではないかと思っている。これに関していくつか面白い話もできるのであるが、目下のところは主題を追ってゆくほうが良いであろう。記憶力に自信のない者が嘘つきになろうとしてはいけないと言われているのは、理由のないことではない。(I-9, pp. 32-33)

最後の文からわかるように嘘をつく行為は記憶力と関係があり、自己自身への言及はこの意味で章の主題とつながっている。自分の記憶力の欠如が頭にうかび、モンテーニュはこのように章を書きおこしたのであろう。彼の心は作品の主題の傍らで自己自身が書き記されるのを望んだのである。しかし初期の彼はこの話が長くなりそうになると、躊躇しはじめる。心の自然な欲求にしたがった自己描写は章の主題という価値観によって抑えられる。「これに関していくつか面白い話もできるのであるが、目下のところは主題を追ってゆくほうが良いであろう」の言葉のなかに、心の欲求と理性的な著作意識が相反した葛藤がかすかに感じられないであろうか。実際のところ、『エッセー』を自己描写の書であると

宣言したのちの1588年版においては、このような遠慮は無用とばかりにこの文を消し去り、自分の記憶力のいちじるしい欠如についてかなり長く書きくわえている。したがって、章の主題という価値観だけが原因であるかどうかは疑問がのこるとしても、自己について語ろうとする衝動は初期においては抑制されていたと考えられよう。

初期における自己自身への言及やその発展の形態を眺めおわった今、私達は『エッセー』に自己描写があらわれる原因や目的についてどのように推察すべきであろうか。私達は自己描写なるものをモンテーニュの思索と心の動きのなかで理解するために必要な材料を得たように思う。

これまでに指摘したように、まず第一の現実として読書実例にたいして判断を試みながら、思索を発展させる努力をかさねたモンテーニュは、だんだんと経験的な実例を抽出し、『エッセー』に記すようになる。このような進化のひとつの結果として自己描写があらわれる。自己自身に関するものこそもっとも有益な事実であると気づくようになる。それをはっきりと自覚させたのが落馬の事件である。こうして思索の世界は深みをくわえてゆく。読書実例——見聞実例——自己実例、このような事実の層ができあがり、以後これらの比重の推移が思索の成長を示すひとつのバロメーターとなる。しかしながらこのような自己描写は自己を描くこと自体に価値を認める純粹な自己描写ではない。自己を描くのは自己をさらに越えた何かの目的のためであり、自己以外の何かを認識するためである。落馬して意識と無意識のあいだを漂った経験を詳細に分析してみても、「ごくつまらない事件についてのこの話は、自分のための教訓を汲みとらなかったならば、あまり意味がないであろう」ということになる。ところが初期の生硬な作品の多いなかで、この章の分析描写は細緻な臨床報告のような魅力がある。この価値はまったく評価されていない。「自己を注意ぶかく観察して」自己自身を「教材」にするとと言っても、自己描写そのものにどの程度の価値を認めているか疑問なのである。自分を観察するのは体験的な実感のなかで思想を練るためであろうし、章の主題のために自己について語るのを中断したように、自己描写は思想的な価値の下位に置かれている。したがって、みずからの経験の世界に帰り、自己自身に帰ってゆく反省的な思索の動きのなかであらわれはじめた自己自身への言及は、独立的な価値を認められた自己描写ではなく、付屬的なものである。モンテーニュが思索の努力のなかで到達し、落馬の経験によってはっきりと自覚した自己実例という様式は、中期に「読者に」の序文のなかで表明されるような自己描写に直接つながるようには思われない。

一方今のべた傾向とは別に、認識的な位置づけの曖昧な自己自身への言及や独立的な自己描写がところどころにあらわれている。しかしモンテーニュがこれらの意義を弁明している言葉は初期には見当たらない。それらの記述は価値を認められていると否とにかかわらず、彼の自我が発露したひとつの姿であろう。彼の心のなかには自己自身について語り、より直接的に自己を表現したいという欲求がひそんでいたにちがいない。パスカルのような人から見れば、自分について語りたがるのは憎むべき自我の悪行であり、我慢がならないのも当然であろう。しかし自分のことを話すのはもっとも自然な自己主張の仕方であり、私達はそれによって快い自己の存在感を覚えるのも事実である。もちろんその欲求の大小は生来の気質にもよるであろう。あるいは成長の過程で形成されたさまざまなコンプレックスの影響も考えられる。時代相の反映かも知れないし、執筆当時の生活形態に理由があるかも知れない。これらの原因を論じるのは別にして、『エッセー』から推測するならば、モンテーニュの内部には存在感の欠如とでも名づけるべき不安があったように思われる。彼の自我はこれを充足する様式として作品のなかに直接書き記されるのを望んだのであろう。『エッセー』の自己描写の根源は欠如している存在感の代償であったにちがいない。心友ラ・ボエシの死より十余年のちの、つぎの言葉はあながち誇張ではないであろう。

私の全生涯と言えども、あの人との快い交際の喜びに恵まれた四、五年間に比べればただ幻であり、ただ暗くたいくつな夜にすぎない。彼を亡くしたその日以来、

やむことなく心痛め、神はかく望みたまいと、やむことなく栄えあらしめるその日。

ただものうく生きながらえているにすぎない。手中にした楽しみでさえ私を慰めるどころか、彼を亡くした恨みをいや増しにする。我々は何につけても半分ずつであった。今は彼の分を盗んでいるような気がする。

分けあう人のいないかぎり、なんの楽しみも求めないのがつとめと心に決めた。

私はすべてに半身であることにすでに慣れ切っていたので、今の自分はもはや半分し

か存在していないような気がする。何をし、何を考えても、彼のいないのを淋しく思うばかりである。私に先立たれたとしたならば、彼の思いもおなじだったであろう。

(1-28, pp. 271-272)

ラ・ボエシの死はこのような喪失感をモンテーニュの心に残しつづけた。そのような感情は官職を放擲したのちの、無位無官の塔の生活によっていっそう強められたにちがいない。ちなみに彼は失った「半身」を『エッセー』によって回復する企てをおもいつくことがある。雇った画家が「各壁面のいちばん良い中央を選び、そこに全能力を傾注した人念な絵を描き」(1-28, p. 252)、そして「まわりの空間を異様さと多彩さだけがとりえの幻想的な描写でみたす」(同前)のを眺め、彼は自分とラ・ボエシの個性の違いに思いをめぐらす。彼には「異様さと多彩さだけがとりえの」作品は可能であるが、「芸術の手法どおりに作りあげる、洗練されたりつばな絵を企てるなど思いもおよばない」(同、p. 253)。そこで、ふたりの友情の切っ掛けになったラ・ボエシの「自発的隷従論」という論文を借り、『エッセー』の中心に据えるならば、「この作品の残りすべてを引き立ててくれるであろう」(同前)と思う。この企てが象徴しているように、モンテーニュとラ・ボエシの個性は相互補完的であり、両者の存在があいまって各自の充足感が得られたにちがいない。ラ・ボエシの死はモンテーニュの存在感に大きな欠落を生じさせたにちがいない。しかも親友の死後もなお彼はそれを埋める方途を見出せなかったようである。「高等法院への隷従と公務の重責に倦み疲れて」(10)、「なんらの衰えなくも、博識な女神の胸に引退し」(11)、館の一隅の塔で読書にふけり、執筆していたモンテーニュの存在感はいぜんとして充足されてはいなかったであろう。『エッセー』はそのような感情を満たす必要があった。彼が『ラ・ボエシ著作集』を刊行したのち『エッセー』を執筆したのは、退官するのみならず、この出版によって過去の生活にけじめをつけ、新しい存在感のよりどころを発見する道を歩みはじめるためだったかも知れない。「孤独について」の章ではつぎのような目標が語られている。

妻がいて、子がいて、財産があって、とりわけ健康に恵まれているのは必要なことにはちがいないが、しかし我々の幸福がこれらに左右されるほど執着してはならない。店の奥に自分だけの、まったく自由な小部屋をとっておき、そこに我々の本当の自由と根本的な引退と孤独を築かなければならない。ふだんからその小部屋で、他のどん

な知己交友もはいる余地のない、まったく個人的な、自分自身との対話をおこなわなければならない。あたかも妻もなく、子もなく、財産もなく、お供も召使いもいないかのように、そこでひとり語り、ひとり笑って、いつか失うときがやってこようと、これらなしですますのが我々にとって新しい事態ではないようにしておかなければならない。(I-39, pp. 365-366)

心友を失い、官職を去っても、このような行為を実行するならば、自己が自己自身のなかに安住した、揺るぎない自我が完成するはずであった。しかしながら、これは容易には達成できない、一種の究極の境地であろう。現実には彼の精神は、執筆の動機に触れながらみずから描いているように、無為のなかをさ迷っていた。

我々の精神は何か専念させ、馬勒をつけて束縛しなければ、茫漠たる想像の野原をあちらこちら奔放に走りまわる。そしてこの興奮のなかでありとあらゆる夢想、妄想を生み出す。

病者の夢のごとくむなしい幻妖を思い描く。

確固たる目標のない魂は自己を見失う。なぜなら、人も言うように、どこにでも居るというのは、どこにも居ないということなのだから。(I-8, pp. 30-31)

自己描写はラ・ボエシの死以来以上のような状態にあった自我のひそかな欲求に起因するのであろう。自分が「半分しか存在していないような」欠如感や、「どこにでも居る」がまた「どこにも居ない」ような希薄な存在感は、すべて心友の死別や退官によって引き起こされたとは言えないかも知れない。以前から深部にひそんでいた感情がこれらの事件とともに露になっただけかも知れない。しかし、決定的な原因はいずれにしろ、このような心理と自己描写との関連の脈絡は十分に注意すべきであろう。『エッセー』のなかで自己を語り、描くことによって、モンテーニュは「どこにでも居る」がまた「どこにも居ない」ような自我が確かな存在になったように感じたにちがいない。希薄な存在感が充填されたように感じたとしてもふしぎではない。自己自身への言及は彼にこのような慰謝や喜びをもたらしたにちがいない。

初期の自己描写は大きく分けてふたつの性格をもっている。ひとつはモンテーニュの思索が事実の新しい層に到達して発見したものである。ひとつは思索の論理に従属しない、自我意識の発現形式である。彼は前者に関しては明瞭な自覚をもつに到り、観察すべき新しい対象としてその価値を認める。一方後者については彼自身まだ自覚的な価値評価をあたえていなければ、中期のような弁解ものべていない。自我の欲求を満たそうとする、ほとんど無意識的な表現形態であったと思われる。このような解釈は恣意的な想像の類として批判をうけるかも知れないが、しかしながら、作者自身の表明している思想によっては説明できない自己描写が初期に存在している。これは看過できない事実であり、自己描写の心理的な要因について推察するのを避けるべきではない。私達の分析と考察は一方が認識的な進化と発見であり、一方が潜在的な欲求である二種類の自己描写を明らかにした。この両者のまじりあった内面的な運動のなかで自己描写が発展してゆくのである。

第1章第6節（注）

(1) III-A-18, p. 14.

(2) II-A-41, pp. 104-107.

(3) I-A-4, t. 4., p. 118. 以下同様に源泉についての知識はこの本にもとづいている。

(4) 自己描写の部分はヴィレーの研究方法では年代決定の手がかりがすくなく、つねに執筆年代の不確実性がつきまとう。引用した箇所に関する私達の見解をのべておこう。

ヴィレーによればこの章は初期の作の可能性が強いが、中期の加筆がなかったという証明はできないという。しかし引用文に関しては、分析したような発展の動きからして、自己自身に言及した部分だけが中期の加筆であるとは考えられない。(1)の関係詞節などの細部は別として、ほとんどはひとつづきで書かれた蓋然性が高い。仮定してみなければならぬのは、全体が中期の加筆ではなかったかという疑問である。しかしながら、(4)と(5)と(7)におけるセネカとの関連がその反証になるであろう。借用や剽窃の著作法から離れ、個性的な展開へ移った部分においてもまだセネカの影が残照のように見られるのは、おなじ時期に書かれたからであるにちがいない。なおセネカの愛読は初期の特徴のひとつである(Cf. par. ex. II-A-72, p.34)。

(5) この章の執筆年代は大部分が1572年頃であるが、中期にかなりな加筆があったらしい。とすれば、今とりあげた箇所は、前後との関連がやや曖昧であるとか、論の生彩がことなっているなどの特徴だけを見るならば、中期の加筆ではないかと疑いたくなる。しかしながら、「39才をちょうど15日過ぎたばかりである」という文が1572年に書かれた明白な証跡を示している。この箇所の存在とその性格は、ひるがえって先ほどの第1巻第39章の例のような自己描写への発展が初期にも十分にありえるように思わせる。そのような傍証として考えることもできるであろう。

(6) 第1巻第20章は初期に属させるべき作品であり、私達の引用した部分も1572年ごろに書かれたであろうと推定しながらも、ヴィレーはこの章に中期の加筆があったという理由によって、自己描写についての分析からこの部分はずしている(II-A-69, t. 2., p. 135, 注1)。しかし、彼の説明は除外するほうが良いという論証にはなんらなっていない。彼が除外するほうを好んだ理由を推測するのは省略するとして、引用部が中期に加筆された可能性について私達の見解を記しておこう。

(1) は章の主題を展開した中心部であり、他の大部分とおなじころに書かれたである

う。(6)と(7)は(1)から(5)とは視点も論調も変わっており、中期の加筆ではないかと疑いたくなる。さらに(8)から(10)はその可能性がいっそう強まるようにも思われる。しかしながら私達の引用文以降は(10)の内容を踏まえた展開になっている。しかも、<<Tout ainsi qu'on a planté nos cimetières joignant les Eglises>> (p.111)あたりからの、(1)と関連する中心の流れにもどった箇所も、(7)の自己描写の内容が投影した書き方になっている。したがって(7)や(10)はたんなる挿入ではありえない。加筆したときに、同時にあとの箇所においても、章の中心的な展開とうまく合体させるような書き換えが必要である。したがって、私達が以前仮定したように、中期の加筆も後期や晩年とおなじように挿入や部分的修正であり、テキストを書き換えるような作業ではなかったとするならば、引用部のほとんどは初期に属すると考えられる。

(7) I I - A - 27, p p. 238 - 239.

(8) I I - A - 27, p p. 229 - 230, p p. 233 - 235, p. 239. および I I - A - 69, t. 2., p p. 136 - 139.

(9) I I I - A - 12, p. 232.

(10), (11) いずれも書齋の壁の引退の辞。

7. 執筆の動機および目的

モンテーニュが『エッセー』を書きはじめたのはおよそ1572年、39才の頃であった。ボルドー高等法院の職を辞してから2年ほどのちである。退官を記念して書斎の壁に記した引退の辞には、文芸の女神の胸に憩いながら自由と平安を享受する願望が語られていた。またすでに彼はレーモン・スポンの『自然神学』の翻訳者であった（1569年出版）。哀悼の意をこめて刊行した『ラ・ボエシ著作集』（1571年）のなかで友の作品や翻訳のひとつひとつに添えた献辞は、徳や幸福や理性などについての思想を織りこんだ彼自身の小品でもあった。したがって、モンテーニュが『エッセー』を書きはじめたとしても、格別にふしぎではないとも言えよう。しかし『エッセー』は前二者とはちがった著作の形式である。それは新しい生活における、まったく意味の異なった活動であったかも知れない。彼はなぜ『エッセー』を書きはじめたのであろうか。この行為に彼は何を期待したのであろうか。あるいは初期の作品を書くなかで著作の方針はどのように変化、発展したのであろうか。第1章の最終節にあたってこれらの問題を考察してみなければならない。

モンテーニュは『エッセー』のなかでしばしばみずからの作品について語っている。中期や後期に比べればはるかに少ないとは言え、初期においても同様である。もちろん作者自身の証言が問題を解く重要な鍵であるのは言うまでもない。しかし残念ながら、それですべてが明らかになるわけではない。というより、私達の研究によって補わなければならない多くのことが残されている。まずそれらの証言は常に、十分に明瞭であるとは言えない。私達は的確に解釈する根拠を獲得しなければならない。さらに彼は目的や方法について熟慮したのちに書きはじめたのではないようである。彼自身の作品論は書きつづってゆくなかでなされた折々の発見であり、進化の一過程における自覚を表しているにすぎない面がある。おなじように初期においても、すべての章にあてはまるとはとても考えられない作品論がある。したがって同期のひとつひとつの章の研究に問題が帰着する。それ故に私達は執筆の動機や目的などを第1章の最後でとりあげたのである。今まで私達は『エッセー』の形態を注目してきた。『エッセー』という作品はどのような要素によって、どのように構成されているか、この分析がすべての考察の挺子であった。この方法は最後の問題にあたって効果的であると思われる。作者自身の作品論を検討し、解釈する有力な手がかりを提供してくれるであろう。当然のことながらひとつひとつの章が何よりも雄弁に著作行為の実体を示しているからである。

「無為について」と題された第1巻第8章が、おそらくモンテーニュの最初に記した、みずからの作品についての反省であろう。しかもそれは執筆の動機をのべた随一の証言である。私達の今までの考察は何よりもまずこの章の言葉と照らし合わされなければならない。つぎがその全文である。

我々の目にするように、空地が豊かによく肥えているならば、数かぎりない種類の、無用な雑草にたえず満ちあふれる。そして、土地に役目をはたさせるためには、何か種をあてがい、我々の役にたつように用いなければならない。また、我々の知っているように、女性はまったくひとりだけでも形のわからない肉の塊や断片を生みだすときもあるが、正しく自然な出産のためには別の種とともに生殖がおこなわれなければならない。精神についても同じことが言える。我々の精神は何かに専念させ、馬勒をつけて束縛しなければ、茫漠たる想像の野原をあちらこちら奔放に走りまわる。そしてこの興奮のなかでありとあらゆる夢想、妄想を生みだす。

病者の夢のごとくむなしい幻妖を思い描く

確固たる目標のない魂は自己を見失う。なぜなら、人も言うように、どこにでも居るといのは、どこにも居ないということなのだから。

最近わが家に引退するにあたって、私は残されたわずかな人生をひっそりと平穩に暮らすよりほかのことにはできるだけ心を煩わすまいと決心した。精神を慈しむには、まったくの無為のなかに放置し、精神が自立し、自己のなかにとどまり、安住するように仕向けてやる以上の策はありえないように思われたからである。そして年とともに精神がずっしりと重く熟してくるならば、今後それはずっと容易になるであろうと期待していた。しかし放れ駒となった精神は、

無為はつねに精神をさ迷わせる

逆に自分のこととなると、他人の仕事を引き受けたときより百倍もおおく動きまわるのを知った。そして心のなかにはたくさくの魍魎魍魎がつぎつぎと、あてもなく、無秩序に生まれてくるので、私はその愚劣さ、奇怪さをゆっくりと眺めるために、時が

たてば精神みずからが恥じるようにとも願いながら、それらを記録しはじめた。(pp. 30-32)

閑居の日々を送る心の動きを描き、『エッセー』執筆の経緯を語っているモンテーニュの言葉になんら難解なところはない。無聊に苦しむ精神に確かな仕事をあたえるために筆を執ったとしてもふしぎではない。しかしながらそこに謎がふくまれている。彼が書きはじめたという作品の説明は、字義どおりに理解するだけでは現実の『エッセー』に当てはまりそうにないのである。これまで私達の考察した章がはたして心のなかにつぎつぎと生まれる「魑魅魍魎」を記録したと言えるであろうか。それらは史実や逸話と古人の思想や詩句とを綴りあわせたにすぎなかった。モンテーニュなりの考えが構成を司っていたとしても、彼自身の思想は背後に埋没していた。「夢想」や「妄想」を記していたとはとても思われない。このような齟齬が顕著であるため、従来の見解では、第8章の言葉は初期の作品様式を指し示していないと見なされ、初期の『エッセー』には「魑魅魍魎」は認められないとして片付けられた(1)。しかしながら第8章は昔を回想した文章ではない。初期のなかでも特に最初のころに書かれたと推定される作品である。その証言は執筆当初のモンテーニュのものである。彼がまったく嘘偽りをのべているのでないかぎり、その言葉は容易に退けられないはずである。ひとつひとつの章の実状と綿密に照らしあわせながら吟味する価値があり、執筆の動機ともっとも初期の作品についての告白としてなんらかの理由があると考えなければならない。

ルネサンスの世紀にあっては、心に浮かぶ思いを記録したとしても、その様式はおそらく現代とは異なっただであろう。この点は十分に注意しなければならない。事実についてであろうと思想についてであろうと、記述には多かれ少なかれ書物からの種々の知識が引用されるであろう。そのような借用はたんに流行であったばかりではなく、時代的な課題もあった。ポダンヤル・ルワやガヤールたちが歴史書の読み方と利用法について論じたのもそのためであろう(2)。モンテーニュのように習慣に関する古今の実例を収集しながら、偏見に縛られた、視野の狭い思考を脱しようとする態度は、アンリ・エチエンヌの『ヘロドトス弁護』やラ・ボエシの『自発的隷従論』にも見られる(3)。哲学的なディアローグにおいてどの程度、どのように金言や思想的な権威を引証するかは、作家たちの著作の方法のひとつの要であった(4)。現代風に考えればみずからの想像力によって生みだすはずである物語というジャンルについて、おなじような特徴をラブレのなかに見つけだすの

はたやすい。たとえば『第四の書』の第17章、第34章、第37章、第39章などにある博学な列挙を読むならば、私達の言う読書実例はルネサンスの共通の出発点であり、これをみずからの創造のなかにどのように組みこむかという課題が、物語作家であると思家であることを問わずひとしく課せられていたのがわかる。文章と表現においても、「孤独について」の章のモンテーニュのように古典古代のテキストから借用し、みずからの観察と想像と思索のなかに組みこみながらあたらしい生命をあたえようとする方法は、周知のとおりラブレールもロンサールもデュ・ベレーも実行している。剽窃しながら個性的なものを生み出す創造の行為を、すでに言及したようにモンテーニュは蜜蜂と蜜によって説明したが、まったくおなじ比喩を使ってロンサールが詩について(5)、ヴォ克蘭・ド・ラ・フレネが悲劇について(6) 主張している。まさに歴史状況を象徴する一致であろう。

したがってモンテーニュが「夢想(reverie)」あるいは「妄想(folie)」あるいは「心のなかの魑魅魍魎(chimeres et monstres fantasques)」を記録したと言っているとしても、読書からの知識をまったく排除した作品を意味しているわけではないであろう。またこれらの語は活発で奔放な想像力を強調するために使われたのではなく、とりとめのない随想を卑下した形容であろう。つまり、史実や古人の思想や詩句などがちりばめられていようと、モンテーニュ自身の随想が章の展開の主体になっているならば、第1巻第8章の言っている作品にあたりと見なすべきなのである。読書で得た知識をつづりあわせ、組み立てるのではなく、頭のなかに浮かんだ考えを記すのが中心になっているならば、それは第8章の証言が指し示している作品なのである。

それでは実際にどの章が該当するのであるだろうか。つづく第9章と第10章である。これらの章においては、個性的な生彩を別にすれば、ともかくも論の展開が見られる。第9章の量的な比較を言うならば、読書実例が4ページと7行を占めるのにたいし、作者の私見の部分は2ページと6行である。しかし後者には前者に従属しない独立性があり、前者の数もふたつだけである。量的な差異は読書実例の収集に精力がそそがれたからではなく、その紹介に長い記述を要した結果にすぎない。第10章は量的にも私見の展開のほうが優勢であり、しかも読書実例はそのなかに組みこまれている。これらの点においてさらに進んだ作品になっている。また、すでに触れたように、第9章は自己描写的な記述によって書き起こされている。自己を著作の中心に置こうとする欲求において第8章と似かよっており、章の順番はしばしば執筆の順序に従っているというヴィレーの仮説と考えあわせるならば、第8章を前書きとして自己確認したのちに第9章や第10章が書かれた可能性が

つよい。以上に指摘した特徴は、これらの章を観察するだけではそれほど注目にあたいるとは思われないであろう。以前の第2章から第7章までの著作の方法と比べなければ、顕著な相違に気づくことはできない。これらの章においては私見の記述は、実例や金言や詩句をつないでゆく働きをしているにすぎない。構成がモンテーニュの思考を表現しているとは言えるが、独立的な論の展開は皆無である。したがって第9章と第10章は以前の章には見られない特色をもっているわけであり、第8章の証言はそこを焦点にして述べられたにちがいない。

質の評価にこだわるならば、第9章や第10章はあきらかに味読に堪える随想ではない。思索の勢いも思想の成熟も個性的な輝きもとぼしい。やはり「心のなかの魑魅魍魎」が躍動しているようには感じられない。しかしながらこの形容は、第8章全体がそうであるように、心理的な表現として理解しなければならない。つまり、すでに書いた作品を眺めなおした反省ではなく、執筆に駆りたてる内面の動揺を描いているにすぎない。それは明確な思想の存在を意味しているとはかぎらない。第8章の書き振りからしても、このような内面性と曖昧さはことさら言い立てるまでもないであろう。したがって随想が主体であるならば、質的なレベルがどうであれ、第8章の言う作品にあたると見なすべきなのである。あるいは、現実の『エッセー』とくいちがっているところであろうと、なんらかまわらない。初期の著作行為がこのような内部と外部の齟齬をふくんでいることを教えているのである。

「心のなかの魑魅魍魎」は自分の思想について謙遜した表現であると言うより、むしろ「茫漠たる想像の野原をあちらこちら奔放に走りまわる」精神の動揺そのものに近い。それは感情とも思想ともつかない、両者の混濁した意識の動きである。それは官職の桎梏から解放された精神のなかに何かが生まれはじめた胎動でもあろう。しかしながら本人の目には、すでに鮮明な思想的な姿形をそなえているように見えたにちがいない。モンテーニュはそれらを記録しさえすればよいと思った。無為の苦しさは和らぎ、精神は確かな目標を得るはずであった。ところが実際の『エッセー』においては、第8章の証言に相当するのは短い小品であり、随想の勢いも個性の輝きもとぼしい。言われているような著作の方法は成功しなかったのである。その破綻はすでに第11章にあらわれている。先立つふたつの章とおなじように、この章も要になっている実例はデュ・ベレ兄弟の『回想録』からの引用である。くわえて前半が私見の展開の形式をとっている点も考えあわせるならば、これらみっつの章はおそらく日時のへだたりのすくない一連の著作であろう。しかし第11章は、前半部の論述において、ふたたび読書の知識への依存がつよくなっている。第2章か

ら第7章までの著作の方法と第9章と第10章との中間的な形式になっている。

したがって、いざその相貌を描き、記録しようとしたとき、モンテーニュが見ていたはずの「心のなかの魑魅魍魎」は、多くは捉えどころなく逃げ去ったであろう。それらは表現によって思想に整えようとする、多くは掌中から消え去るほど曖昧模糊としたものだったにちがいない。中期になると執筆の動機をつぎのように説明しているのは、まさにこの事実を証明している。

文章を書くことに頭をつっこんでみようという馬鹿げた考えが最初に浮かんだのは、ある憂鬱な気分のせいであった。数年前に飛びこんだ孤独な生活の苦しみが、私の生来の気質とはまったく正反対の気分を引き起こしたからであった。そこで、ほかの題材などまったく持ちあわせていないのに気づいたので、自分自身を提示し、これを材料とし、主題とすることにした。(II-8, pp. 66-67)

第1巻第8章の告白では「心のなかの魑魅魍魎」こそ記録の対象であり、作品の材料であった。ところがそれから五、六年後に書かれた上記の章では、執筆の理由を退官後の生活から説いているのにかわりはないが、もはやおなじ類の形容はまったく見られない。「ある憂鬱な気分(Une humeur melancolique)」の思い出だけが残っているように、「心のなかの魑魅魍魎」は思想というよりむしろ、新しい生活をはじめたモンテーニュの感情や欲求の不明瞭な動きであった。したがって、みずからの志向にかなった自己自身という主題を発見した今となっては、「ほかの題材などまったく持ちあわせていなかった」ように思われるのである。けっきょく「心のなかの魑魅魍魎」とは「ある憂鬱な気分」とほとんど変わらないものだったのである。

第1巻第8章における執筆の動機についての説明は以上のように理解すべきであり、したがって同時に作品様式の起源についても再検討が必要になる。すでに触れたようにヴィレーは、当時流行していたルソンというジャンルを模倣しようとしたところに『エッセー』の起源があると主張している。もちろん私達の研究はルソンとの比較を含んでいないのであるが、今までの作品分析と考察にもとづいてこの学説の修正を提唱するのは許されるであろう。

ヴィレーの研究から推察するならば、初期の『エッセー』がルソンと共通した特色をもっているのはまちがいない。しかしこの事実からただちに、ルソンを模倣しようという意図

が『エッセー』を生んだと結論してはならない。もしそうであるならば、モンテーニュはなぜ第1巻第8章のような説明をしたのであろうか。彼は嘘を書いたのであろうか。執筆の理由に関するこの重要な証言を、ヴィレーが『エッセー』解釈のなかにとりこめなかったのは当然の結果でもある。第8章は彼の説とは反対の側面、つまりモンテーニュはルソンに不満足であるからこそ『エッセー』を書きはじめたことを示しているからである。ルソンの特色である、事典的で非個人的な知識の収集にたいして、彼はみずからの「夢想」や「妄想」や「心のなかの魑魅魍魎」を重視すると宣言しているのである。たとえ実際の作品がルソンを越えた個性をまだ獲得していないとしても、彼のこの意図を否定することはできない。これらを考えあわせるならば、彼の動機と目的が明らかになる。ルソンが知識の百科全書集積によってルネサンスの遺産を守ろうとしたのにたいし、モンテーニュはどのようなただ継承し蓄積するだけの形式を破り、より実り多い著作のありかたを発見しようとして筆をとったのであり、初期の『エッセー』はその摸索と試みなのである。著作の方法と形式において比較するならば、初期は中期や後期よりはるかにその種類が多い。内容から判断すればもっとも個性のとぼしい初期の作品が、素材の利用と構成の仕方においてはもっともさまざまな変化を見せている。この事実はモンテーニュの摸索の努力を証明している。おそらくルソンのなかにも初期の『エッセー』ほどさまざまな方法を試している作品は見あたらないのではないだろうか。

ルソンを越える進化を『エッセー』に可能にさせた原動力は、才能という当然の要素を別にすれば、ひとつは自己に忠実であろうとする欲求であり、態度であった。モンテーニュはこれをルソンに対立するひとつの方針とした。第1巻第8章はそのような選択と決意の表明である。私達がすでに分析し、指摘したように、史実や金言や詩句などをつづりあわせたにすぎない著作にも、いかにもモンテーニュらしい特徴がひそんでいた。一例をあげるならば、「多様性の構成」と形容しうる章が見られるのは、著作において注意ぶかく自己の内面の声に従った結果であろう。また第8章の選択と決意がのちの『エッセー』の主題である自己描写に通じる底流となり、それがすでに処々に露出していることは前節において分析したとおりである。

読書から集められた実例は『エッセー』においてはたんなる知識ではなく、現実とおなじように眺められている。読書実例に倣いながらモンテーニュはみずからの見聞の世界から実例を探し、『エッセー』に収録した。第8章の、自己の思索に忠実であろうとする方針は、以前に指摘した、このような進化の動きとも結びつきながら有益な結果を生んだにちがいない。

ない。そして、知の遺産にたいするこだわりから少しづつ解放され、現実自体にたいする考察も作品のなかに市民権を獲得し、発展したであろう。一例をあげて説明するならば、たとえば第1巻第32章を読んでみよう。この章は第9章や第10章とおなじように私見をのべるのが中心になっている。その量はあわせて約2ページ、章の半分以上になる。しかも引証される実例は読書の知識によるものより、現実の事件のほうが重要な位置を占めている。それらはレバントの海戦であり、ロッシュラベユやモンコントゥールやジャルナックの戦闘の勝敗をめぐる新旧両宗派の議論である。したがってこの章はほとんど読書の知識に頼っていない。現実の世界に目をむけた思索の記録であり、ルソンとは非常に異なった著作が一部にはすでに生まれているのである。

第1巻第8章を書くことによってモンテーニュは自己の内面と思索に忠実であろうとする欲求を著作の方針に昇華させ、この決意によってルソンの枠を打ち破ろうとした。しかしながらその試みは初期においてはかぎられた条件のもとでしか成功しなかったであろう。その成果はところどころに見られるにすぎない。第8章の方針は著作の具体的な場においてルソンを乗り越えてゆくためには漠然としすぎている。こんな曖昧な態度で解決がつくほど過去の遺産は軽くはない。初期の『エッセー』全体として見るならば、実例においても思想においても、多数の本から借り集めた知識に依存している。その段階を抜け出ているとは言えない。しかし一方では私達の作品分析が指摘したように、読書の知識の収録簿のような外見をした章の底にはモンテーニュなりの思索の跡があった。借用した知識を組み立てる構成においてはみずからの個性にしたがった、彼なりの思考を実行しようとしていた。初期にすでに彼は、非個性的なもののなかに個性を侵入させる進化を可能にするような方法的な意識をもっていた。それはつぎの箇所にもっともはっきりとあらわれている。

判断力はあらゆる事柄に使う道具であり、いたるところに顔を出す。したがって、ここでおこなう判断の試しについても、私はあらゆる機会を利用する。自分にはわからない問題であろうと、試しに判断をはたらかせ、渡れそうな浅瀬はないか遠くからさぐってみる。そして私の背丈にとっては深すぎるのを発見すると、川岸に立ちどまる。これ以上先へは進めないという認識が判断力を発揮した成果なのである。しかもそれは判断力がもっとも誇りとする手柄のひとつである。あるときは空虚な、つまらない事柄にも判断を試し、信憑性をあたえたり、支えたり、補強したりするものがないかどうか考えてみる。あるときは議論の尽くされた高尚な問題に判断をめぐらして

みる。しかし自分の力で発見できるものは何もなく、道はすっかり開拓され、踏みならされているので、他人の足跡の上を歩く以外のことはできない。そのようなときには最上の道を選び出すのが判断力の仕事であり、無数の小道のうちでこれ、あるいはあれがいちばん良いと示すのである。さらに私は主題については偶然が提供してくれるままに任せる。私にとってはどれもおなじように結構なのである。しかも主題を全体的に、かつ底の底まで論じるつもりはない。それぞれがもっている千の顔のなかから、自分の気にいったのをとりあげる。私は普通とちがった珍しい光のあて方で捉えるのが好きである。(I-50, pp. 459-461)

ここでモンテーニュは書名「エッセー」とおなじ語(essai および動詞 essayer)を使いながら説明している。したがってこの章が書かれた年代は、著作の方法について彼が明瞭な自覚を獲得した時期を教えてくれる。しかし残念ながらヴィレーは確かな年代決定に到っていない。初期の終わりごろと推測できなくもないが、根拠は十分ではないと言う。私達の研究は章の執筆年代を決める証明はできないが、その成果にもとづく判断はやはりヴィレーの推測と一致する。というのは上の言葉は初期の作品の構造と論理の分析によって私達の知りえたところとよく合致するからである。まず、その説明が第8章で退官後に書きはじめたと言っている、「心のなかの魑魅魍魎」を記録するような作品を指していないのは明らかである。第50章はもはやそのような内面生活との関係をはなれ、自己の著作行為を客観的に捉えなおした反省が語られている。第8章の時期から相当の年月の経過を想像してもまちがいはないだろう。著作の意識は明確になり、すでに数多くの章を書いた経験を思わせる。史実や思想例を利用する著作をとおして、判断力の機能を的確に把握するに到っている。しかし一方また、その判断力についての理解は中期ほど成熟していない。それは以下に詳察するとおりである。

私達は構造と論理を分析しながら、没個性的な知識の収録の背後にある思索の活動の様子を探ったのであるが、第50章でモンテーニュはそれを一口に「判断の試し」であると言っている。初期の『エッセー』がたとえ現代の私達には無味乾燥であるように映ろうとも、当然彼自身はそのような著作にもなにか魅力を感じていたはずである。それはただ知識を獲得する喜びだけではなかった。たとえ外見は書物からの借用物におおわれていようと、内部には精神の個性的な活動があった。史実や逸話や金言や古人の思想をつづりあわせてゆく行為には判断力を試し、働かせる楽しさがあった。モンテーニュは人間にとってきわ

めて重要な能力である判断力なるものを自覚するに到った。これは以後の思想においてもひとつの核となる重大な発見である。しかしながら判断力の内容や対象は一定不変ではない。『エッセー』とおなじように変遷、進化してゆく。それはモンテーニュの思索の進化の指標でもあれば、思想の成熟の一面でもある。

第50章の描く判断力の特徴はもっぱら練習として行使されているところであろう。その説明からは、人生の不透明で不確実な状況における不安や緊張は感じられない。想像されるのは、自分の思想とか経験などとほとんど関係なく、ただ試しに判断を働かせている様子である。それはたんに判断力を練磨する練習であって、余暇の知的な遊びのようでさえある。確かな論理的な認識を不可能に思わせる、複雑で動的な現実あまり感じられない。判断力の行使の対象はなまの現実ではなく、初期の代償的な現実である読書実例であると考えてまずまちがいはないであろう。第50章の描く「判断の試し」の有様は具体的に初期の著作にぴったりと当てはまり、私達の研究の結果と合致する。構造と論理の分析から私達は、実例のたんなる収集、列挙にすぎないような章がじつは「いっそう確かな、いっそう明るい判断を得る」ための準備であるのを知った。これらの章は「渡れそうな浅瀬はないか遠くからさぐっている」著作であると言えよう。また「空虚な、つまらない事柄」を材料にしている章もとくべつ珍しくはない。のちの執筆期に比べてあきらかに初期に多い。あるいは一章全体に渡ってセネカの『書簡』から思想や力強い表現を借用しながら論を進めたときもあった。また主題に応じて古人の思想を適所に織りこむのは判断の練習法のひとつであった。それらはまさに「他人の足跡の上を歩」きながら、「選び出すのが判断力の仕事である」ような著作である。

モンテーニュはみずからの『エッセー』について語るのが好きな人であるが、初期にはその数はまだ非常にすくない。目立つのは第8章と第50章だけであり、さらに作品論としての前者の曖昧さや後者の執筆年代の不確実さもくわわり、初期における彼の作品にたいする意識には従来あまり注意がはらわれなかった。しかしそれはすでに初期から存在していたにちがいない。執筆年代がより確実な章に残っている文章をくわえて考えるならば、この推測はほぼまちがっていないであろう。第50章のような作品論が初期に書かれたとしてもなんら突出した、不自然な現象ではないのが納得ゆくであろう。つぎの引用は章の冒頭に書かれている。第8章に記された、自己を作品の中心にしようという欲求と態度の継承として、自己描写的な記述ではじまった章があったのとおなじように、これらの章はみずからの作品にたいする強い意識によって書きおこされていると言えよう。

どんなにつまらない事柄であろうと、この寄せ集めの本のなかに入れるにあたいしないものはない。(I-13, p. 50)

どんなにさまざまな野菜が入っていようと、サラダという名のもとにすべてが包みこまれる。おなじように、名前について考察するという名目のもとに、これからここでさまざまな物のごった煮をつくってみよう。(I-46, p. 420)

よく言われるように哲学するとは疑うことであるとするならば、まして私のように馬鹿げたことを書いたり、とりとめのない空想にふけったりするのは、いっそう疑うことであるにちがいない。というのは初心者のはずべきは探究し、議論することであり、解決するのは先生だからである。そして私の先生は、異論の余地なく我々を統治し、人間のむなしい論争の上方に鎮座する、至聖なる神の意志の権威である。(II-3, p. 19)

これらの文章は第50章となんら矛盾していないのみならず、おなじ脈絡にそった考え方を示している。後者がより深く捉え、より詳しく説明しているにすぎない。「どんなにつまらない事柄であろうと」、「入れるにあたいしないものはない」という『エッセー』の題材の無限定性は、第50章にも読みとられる。「寄せ集めの本」や「さまざまな物のごった煮」に相当する語句は見あたらないが、これらは題材の多様さに焦点をしばって形容しただけであり、この欠如を重視する必要はないであろう。なおこれらの形容が作品の非論理性や無秩序性を表現しようとしていると解釈するのは、文脈から離れ、中期や後期と混同した誤解である。初期の章には構成が平板な欠点こそあれ、読者をとまどわせるような展開はまだ見られない。「寄せ集めの本」と訳した<<rapsodie>>はいろいろな書物のあちこちから材料を借用しているという意味であり、「ごった煮 (galimaffrée)」は「名前について」という章題のもとに雑多な話をつめこんだことを言わんとしたのである。一方に多かれ少なかれ材料を処理する構成の意識はあろうが、中期や後期のような自由奔放な展開を強調しようとしているのではない。したがって第50章の、「さらに私は主題については偶然が提供してくれるままに任せる。私にとってはどれもおなじように結構なのである」の文章が表しているところとほとんど変わりはない。

すでになんども分析し、指摘したように、モンテーニュはただ知識を記憶するかわりに

『エッセー』に記録しているのではない。したがって、第13章や第46章の冒頭の文章がたんに知識の収集についてのみ説明しているとは考えられない。彼は前者によって『エッセー』の題材の自由さを、後者によって構成の自由さを主張したかったのであろう。また第50章ほど明確な説明はできなかつたとしても、みずからの作品についての反省によって章を書きおこしたのは、「判断の試し」とよく似た方法的な意識をもっていたからであるにちがいない。ルソンのような知識の収集に甘んじない著作のありかたについて、なんらかの感知や自覚があったからであろう。第50章の「判断の試し」の作品論は突然あらわれた、孤立したものではなく、みずからの著作行為についての反省の集大成なのである。第8章で表明したような欲求を背景にしながらさまざまな著作の仕方を試すなかで察知し、発見した、折々の作品論の進化の結果なのである。

第2巻第3章からの引用文について今まで考察しなかつたのは、第50章よりさらに発展した「判断の試し」の側面があり、他のふたつの章とは同列に論じられなかつたからである。もちろん異質であったり、矛盾したりしているところはない。「私のように馬鹿げたことを書いたり、とりとめのない空想にふけったりする」という説明は、第8章や第13章や第46章や第50章に含まれている思想からなりたっている。これらの章について考察をくりかえしてきた私達は、この説明をたんに謙遜として理解するようなあやまちは犯さないであろう。「馬鹿げたこと」を題材にしたり、書いたりするのも禁じないという姿勢は、自由に判断の試しをすすめてゆくために必要である。「とりとめのない空想にふける」というのは卑下した言い方ではあっても、自分の思考とその自由な発展を大切にす態度の表明でもある。上記の第3章の文章は第50章とおなじように「判断の試し」、あるいは、今後それぞれの時期に応じてその内容を検討しなければならない用語を使って言うならば、『エッセー』を書く根本である「エッセー」という思考法に言及している。そして、さらにその後半には新しい一面への発展がある。「エッセー」という思考は解決する能力と権威をみずから拒否し、放棄することによって、逆に「探求」と「議論」の権利と自由を守りぬこうとしている。このような性格は第50章の説明から推察できないわけではないが、第3章の引用文は宗教的な権力や論争などの現実との関係のなかに一步踏みこみながら明確にしている。ふたつの章の時間的な前後関係は正確には知りようがないが、一方のみであるよりも両者をあわせた認識のほうが進化のより高いレベルを示しているのはあきらかである。

したがって初期においてすでに「エッセー」（「試し」）という方法的な自覚があり、そ

の進化があったと思ってほとんどまちがいないであろう。起源は明確にはできないが、「エッセー」という方法の意識が、強弱や明瞭さにちがいはあっても、多くの章の背後にひそんでいたにちがいない。第1章を通じて私達が指摘したように、モンテーニュの個性にふさわしい構成の方法があちらこちらに内在しているのは、書物からの知識を収録するのではなく、自分の判断を試し、思考を練るために活用しなければならないという自覚が背後にあったからであろう。また、他の執筆期にくらべ、章の構成のタイプがはるかに変化に富んでいるのは、「エッセー」という目標にふさわしい作品様式を摸索していたからであろう。モンテーニュは第50章では「判断の試し」として説明した、「エッセー」という方法的な態度によって、知の遺産という重荷から自己を解放し、ルソンを越える『エッセー』の進化の可能性を開いた。ヴィレーの言うように(7)、ルソンの著者たちが知識の普及を第一の目的にし、博学を誇示する傾向にあったのに対し、おなじように知識を尊重しながら彼はまったく異なった方針をうち立てた。作者の天分を別にすれば、この「エッセー」という方法的な自覚と方針こそ、第8章で表明された、自己の内面に忠実であろうとする決意とともに、独創的な『エッセー』を誕生させる原動力になったのである。

ところがヴィレーは初期における「エッセー」という方法の意識や思考をきわめて軽視している。この点が彼の研究のもっとも重大な欠点であろう。彼はこの問題に簡単に言及しているが、そこにもふたつの大きなあやまりがある(8)。まずヴィレーは、第50章の説明が初期の終わりごろであると仮定する場合、ようやくこの頃になってモンテーニュが判断力を働かせて著作しはじめたと考える。しかしこのような解釈では初期についてにしる、初期から中期についてにしる、書くという行為のなかですすんでゆく『エッセー』の進化は捉えられない。ヴィレー自身の見解でもあるはずだが(9)、モンテーニュみずからの『エッセー』論は、これに従って著作するためにあらかじめ決定された方針ではないようである。作品を書くにつれてすこしずつ深まった進化を自覚した折々に記された性格が強い。第50章の説明も、初期の終わりごろの進化と特定の様式についてのべていると限定するのは無理である。作品の分析と照らしあわせたとき、その言葉は以前の章にもよくあてはまる。初期全体の著作の意義についての総括的な弁明と見なすべきであろう。

またヴィレーは事実に従順な思索や自由な批判精神を個性の芽生えとして注目しているが(10)、しかしすでに検討したように、これらの特徴は「エッセー」と通じている。つまりヴィレーの指摘しているようなモンテーニュの天分は、「エッセー」という方法的な態度によって自由な活動を誘われ、著作のなかへ引き出されたのである。いろいろな教訓がふく

まれ、思索の有益な材料になる読書実例を集めたり、みずからの感情を表現し、思索を発展させてくれる金言や古人の思想を記録したり、あるいは両者を組み合わせたり、そこに自分の経験を挿入したりする行為は、精神を鍛練する、実りおおい成果を生む可能性をふくんでいる。ところがモンテーニュの精神と思索に生じたような進化はルソンの著者たちにはもたらされなかった。もちろん才能の差ではあろうが、そのみならずモンテーニュはルネサンスの先人たちによって蓄積された膨大な知識に押しつぶされないように自己を守り、さらに自己自身を解放し、活躍させるための方法を意識していた。先天的な資質の相違のみならず、この方法的な反省と自覚の有無を注意しなければならない。第50章の作品論は著作をとおしてみずからの方法について反省がすすみ、ある程度の自信を得た結果表明されるに到ったにちがいない。

ヴィレーの他のひとつの重大なあやまりは、「エッセー」ということの意味の仕方にある。「エッセー」とは経験について判断を試す行為であると決めこむことによって、彼はモンテーニュが「エッセー」しているのはきわめて例外的であると考え、初期の『エッセー』は「エッセー」ではなくルソンであると結論している。しかしながら、その定義がまちがっていないとしても、「経験」をただ現実の体験の範囲だけで理解するならば、初期の著作の意味を把握することはできない。モンテーニュは読書実例を現実の世界のように眺め、「エッセー」の対象とすることによって、事実と経験にもとづく思考の練習をした。ヴィレー自身がのべているように(11)、世界が歴史的な奥行においても空間的な広がりにおいても急激に拡大した、ルネサンスという時代にあっては、読書実例は旧来の狭い体験の世界をおし広げる経験として、またそのような思索の材料の宝庫として理解されていた。しかし、どの時代にも見られるように、多く人は結局はそれを知識として集めるにすぎない失敗に終わった。一方モンテーニュはルネサンスのこの理想を実現する道へ踏み出した。読書の知識への隷従におちいるのを防ぎ、その前進を可能にさせたのが、「エッセー」という方法的な態度であった。したがって、題材が書物からの知識であるか現実の経験であるかという相違には、あまりこだわってはならない。両者を区別するならば、知識と経験との関係や前者から後者への発展の様子に注目しなければならない。私達の考察したように、この点においてもすでに初期に「エッセー」の進化が見られる。

「エッセー」とその対象に関するモンテーニュの考え方の変化は、作品を書く行為自体のもたらす進化を捉える重要な視点である。初期の『エッセー』とルソンとの類似性の比較に多大な精力をうばわれたため、ヴィレーはこの方面の追究がおろそかになった。「エッセー」

に言及した文章に付した欄外の注釈において(12)、初期から中期にかけてモンテーニュの考え方は「判断の試し」から「生活の試し」へ変わってゆくという重大な指摘をおこないながら、以後この問題はとりあげられていない。あのような大著で、しかも「モンテーニュの方法」という一章も設けながら、「エッセー」という意識とその実践の進化については一度も論考がなされていない。この欠如が端的にヴィレーの研究の最大の欠点を示しているであろう。

したがって初期の著作についても「エッセー」という観点は理解の重大な要である。第1巻第8章に描かれたような「無為」の状況においてそれがどのような意味をもっていたかという問題設定とともに、もう一度捉えなおしておこう。初期における「エッセー」つまり「判断の試し」は知的な鍛練のような段階にあって、対象にはまったくこだわらない。「自分にはわからない問題」であろうと、「空虚な、つまらない事柄」であろうと、「議論の尽くされた問題」であろうと、まったく選ばずしめない。「どれもおなじように結構なのである」。モンテーニュが現実の論理的な認識に絶望して判断力に頼っているというより、「あらゆる事柄に使う道具である」がゆえに重宝なのである。こうして彼は判断力の運用自体に特別な価値をあたえる。その意義はその対象もその結果をも超越している。対象にも結果にもこだわらず、彼はひたすら判断の機会を大切にする。「判断の試し」が知的な遊びの感じさえするのはそのせいでもある。かつての「心のなかの魍魎魍魎」の記録とはうって変わって、この著作方針には内面の鼓動が微弱である。しかしながらそれは「茫漠たる想像の野原をあちらこちら奔放に走りまわる」精神の動揺を鎮める効果はあったであろう。対象にも結果にもまったく無頓着に、ただ判断力を行使する機会を喜ぶ心理的な理由がそこにある。

初期の「判断の試し」が知的な遊びの風があるとしても、モンテーニュの思索が不真面目であったわけではない。それは対象が生々しい現実ではなく、読書の知識であるという精神性や、ただ試してみればよいという気楽さに由来するのであって、彼はたんに知識を弄んでいるのではない。現実とはまったくつながりのない、机上の行為にすぎないならば、精神の動揺を鎮める力はなかったであろう。彼はあいかわらず知的な遊戯の空しさのなかをさ迷ったであろう。読書実例は世界の時間的、空間的な延長であって、ルネサンス人の旺盛な現世的関心によって現実の生気を帯びていた。したがって読書実例にたいして判断を試みることは、実際の行動の状況における行使にも似た代償的な行為となる。それは「どこにでも居る」がまた「どこにも居ない」ような閑居のなかの魂にとって、ある種の鎮

静作用をなす。精神を「何かに専念させ、馬勒をつけて束縛し」、現実の行動に代わって、「心のなかの魑魅魍魎」を鎮めてくれる。初期にはこのような意味の推察される章が数おおくある。たとえば「攻囲された砦の大將は講和のために城を出るべきであろうか」(I-5)、「講和のときは危険であること」(I-6)、「毅然たる態度について」(I-12)、「国王たちの会見の儀礼」(I-13)、「理由なく城を固守すれば罰せられること」(I-15)、「臆病の処罰について」(I-16)、「ある使節たちの行為」(I-17)などである。これらの主題は、もしモンテーニュが法服の貴族の道を歩みつけたならば、社交の会話のなかで、あるいは現実の行動において当面したにちがいない問題である。執筆期のなかで初期がもっとも種々雑多な事柄を取りあげている一方では、このような貴族的な章が多いという特徴がある。それはまだ官職に代わる行動の場もなければ、自己の内面の欲求を実現する生きかたや著作のありかたも曖昧な状況のなかで、「判断の試し」が存在感の希薄な閑居の不安を鎮める代償的な行為であったからであろう。『エッセー』を書きながら判断を試すことが、「どこにでも居る」がまた「どこにも居ない」ような無為のなかで「心のなかの魑魅魍魎」に悩む不安と、現実の世界で強いられる「隷属」や「重責」(13)の苦しさとの中間のあたりで、当座の憂鬱を解消しようとする行為であったからであろう。したがって『エッセー』はまだ進化しなければならない。完全に過去の殻を脱し、「自立し、自己のなかにとどまり、安住する」自我を形成する手段にならないといけない。「実習について」の章における自己自身という主題の発見はそのような新しい存在様式の方角へ発展してゆかなければならないはずである。「判断の試し」という方針はかつて「心のなかの魑魅魍魎」に悩み、より直接的な自己表現を求めた自我を忘れていたところがある。無位無官の新しい生活を決意したモンテーニュの内面の欲求を満足させるものとは言えない。『エッセー』は閑居のなかで「どこにでも居る」がまた「どこにも居ない」ような自我に新しい存在感をもたらす作品でなければならないはずである。モンテーニュはまだ『エッセー』という著作の真のありかたを摸索しつつ歩まなければならない。

第1章第7節(注)

(1) たとえばII-A-41, p. 43. II-A-72, p. 30.

(2) II-A-69, t. 2., pp. 24-26. II-A-8, p. 5.

(3) II-A-69, t. 2., pp. 192-193.

(4) III-A-4, pp. 191-206.

(5) Réponse de Pierre de Ronsard aux injures et calomnies de je ne sais quels
Prédicantereaux et Ministreaux de Genève, V.813-V.824.

(6) L'art poétique français, V.845-V.854.

(7) II-A-69, t. 2., p. 98.

(8) Ibid., pp. 89-90.

(9) Ibid., pp. 307-308.

(10) Ibid., pp. 78-87.

(11) Ibid., p. 24.

(12) Ibid., p. 90 (2).

(13) いずれも書齋の壁に記された引退の辞のなかの言葉。

第2章 個性の開花

1. 思想の表現方法の個性

モンテーニュは執筆開始後から初版の出版まで間断なく『エッセー』を書きつづけたのではない。1580年までの著作活動にはふたつの時期がある。1572年から1573年ごろが最初の執筆期であり、およそ1577年以降が執筆第2期にあたる。ふたつの時期を区別する年代はかならずしも厳密ではないが、数年の中断期があるのは否定できないと言う(1)。私達は後者を中期と名づけ、第2章における論考の対象とした。しかしこの中断の年月は『エッセー』の歴史のたんなる空白の期間と考えてはならないであろう。モンテーニュのなかに新しい『エッセー』を醸成させた数年であった。彼は再び社会のなかで行動し、経験を積んだのであり、それは『エッセー』を書くなかでくりかえした、机上の演習としての「判断の試し」を、現実の動乱のなかに移して実行した年月であったにちがいない。

モンテーニュ家の代々の備忘録である、ブテールの天文日誌の5月11日のページには、すでに家長であったモンテーニュがつぎのように書き残している。

1574年モンパンシエ殿は当地の状況を慮り、私をサン・テルミーヌの陣営より派遣し、彼の意をボルドー高等法院へ伝達させた。法院は評議所において私を国王附法曹団の上席に就かせて引見した。

いわゆる第4次宗教戦争は1573年7月のブローニュの勅令によって終結したことになるのはいたが、地方では町の奪取の陰謀や攻防の小競り合いの絶えるときがなかった。王命を受けてモンパンシエ公は新教徒の手におちた要塞を奪還するために、ポワトゥー地方に戦陣をすすめていた。おそらくモンテーニュはこの公爵の要請に答えて国王軍に参加したのであろう。そして彼は使節としてボルドー高等法院へ派遣され、町を略取しようとする新教徒の策動にたいして警戒の措置を指示したらしい。

抗争と奸策の温床である宮廷においても彼は観察と経験を積んだようである。1571年にサン・ミシェル勲章を授けられ、王室伺候の騎士になっていた彼は、1574年7月のシャルル9世の葬儀に参列する資格があった。それが理由でパリへ出たのかどうかは明

らかでないが、1574年から1575年のころしばらく宮廷に滞在したらしい形跡がある。『エッセー』にはアンリ3世が即位して間もない宮廷の有様に言及した箇所があり、またド・トゥーの『回想録』によると、サン・バルテルミの虐殺の日以来ルーヴルに軟禁されている新教徒の旗頭ナヴァール王と旧教徒を率いるギーズ公との間に立って、モンテーニュが調停に力を尽くしたと言う。それはおそらく1574年ごろだったであろう(2)。

初版を出版するまでの著作活動を画する数年の中断期は、このように彼が自分の館を出て、現実の風波を直接に体験した時代であった。それは経験を思索の糧とした新しい熟成期であったと想像してもまちがいはないであろう。事実『エッセー』は中断期ののち個性が鮮明になってくる。第1巻と第2巻のうち味わいぶかい随想はほとんどすべて中期に属する。したがってこの第2章は主としてそのような個性の開花に注目するであろう。

しかしながら中期の作品がすべて個性的な変貌をとげているわけではない。この点に注意するのも忘れてはならない。モンテーニュは相変わらず初期とおなじような章も書きつづけている。著作の様式が思索のありかたと並行しているのであるならば、新しい着想で急激に全体が変わったりしないのは当然であろう。『エッセー』の進化は人間の成熟とおなじように緩慢である。ある章が新しい『エッセー』を示してもいれば、ある章は以前と変わらない構成である。初期の章にはしばしば読書と直結した著作行為が想像されたが、中期の個性的なモンテーニュがこのような方法を排除したわけではない。たとえば第2巻第2章はその構成のみならず彼自身の言葉も、読書と著作の直接的なつながりを告げている。というのは彼はきわめて正直に「私はいま読んでいたところだが」(p. 492)と断りながら、この章を書き起こしているからである。そして、早馬の制度を考案したキュロス王の話を書いたのち、おなじような駅馬について異なった出典の二例をつけ加えて一章としている。したがって私達にはこれらの実例に彼が興味をおぼえた理由すらもわからない。もしかするとこのころ1576年に国営の郵便馬車が創設されたからであるかも知れない。しかし作者はそのようなことは一言も言っていない。ただ読書実例を収録しているだけである。

このように中期に到ってもなお読書実例にたいする関心はけっして低下していない。モンテーニュはそれらをただ書きつらねるのも厭わない。相変わらず『エッセー』にこのような章の存在を許している。しかしながら彼の思索の方法を考えるならば、それはふしぎではない。彼は記録癖や収集癖で実例を集めているのではない。初期において、「これ[実例]こそ私のような非力な者が追うにふさわしい獲物である」(I-14, p. 67)と

明言していたように、読書実例は彼の思索のひとつの出発点である。『エッセー』によってそれらを構成するのも、思考の一形式なのである。「いま読んでいた」史話を別の出典の例と組み合わせている脳裏にはなんらかの思いが走り、知識を記憶するのとは異なった活動が始まろうとしていたにちがいない。ただ書き並べているように見えようとも、実例の構成は読書を越えた思索の次元への移行である。思索として十分な発展があるかどうかは別にして、それも「判断の試し」の一種である。実際、興味を引かれたときつねに論を展開できるわけでもない。実例から遊離するのを嫌うモンテーニュならば、なおさらそう簡単にはゆかないであろう。しかし、まだ明確な言葉にはならなくとも、いつかそこに本当に思想の芽がふくかも知れない。興味を引かれた実例を組み立てる行為もある日ある時の思索の姿である。したがって、個性的な随想があらわれた中期のなかに、実例の収集と列挙にすぎない章が残っていてもふしぎではない。『エッセー』が増補によって膨張していったように、モンテーニュは除去するのを好まないところがある。中期の多くの章と比べて第2巻第22章はまったく貧弱な作品であるが、出版するからと言って彼は取り除いたりはしない。それもある時の思索の記念である。『エッセー』に記されているのは沈黙考して練り上げた思想ではなく、書くことによって明確にしようとした、ある日ある時の思考の跡である。『エッセー』はこのような性格をもっている。「私はいま読んでいたところだが」という文を書き残していたように、「現在性」はモンテーニュの著作態度の重要な一側面である。そしてそのような「現在」の堆積がひとりの人間の考え方の推移を表す結果になる。思索の「現在」を書き記してきた彼は、中期に到って、『エッセー』がみずからの変遷、進化の記録になっているのに気づく。そして、もっと早くから書きはじめていれば良かったと残念にさえ思う。

しかも私は最初の思想を二番目の思想によって訂正したりはしない。自分の考え方の推移を表現し、それぞれの部分を生まれたままの姿で人々に見てもらいたい。もっと早くから始めていたならば、自分の移り変わった様子をながめて楽しめたのに、とさえ思っている。(II-37, p. 599)

読書実例が思索の基礎をなす重要な要素であることは中期においても変わりはない。それらをただ組みあわせているだけの章も相変わらず書かれている。しかしながら、内部にときどき見られる質的な変化に注意しなければならない。そのような章にさえ実例を利用する思索の様式の進化が認められる。たとえば「ローマの偉大さについて」の冒頭は章を

書いた理由をつぎのように説明している。

この際限のない議論について、現代のくだらない偉大さと比較する人たちの愚かさを示すために、ただ一言だけ言っておきたい。(II-24, p. 499)

と言っても「現代」とローマの比較論は一行も書かれていない。あとはローマの偉大さを表す例が並んでいるだけである。しかしこの書き出しは、第24章のために実例を集める一方で作者の目は自分の時代に注がれていることを教えている。論として書かれていなくとも、それぞれの実例の裏には比較の意識が隠れているにちがいない。モンテーニュは最初から読書実例を、直接的な体験の世界に優るとも劣らない価値をふくんだ事実の世界と見なしてはいたが、初期の『エッセー』ではふたつの世界の交流はまだ乏しかった。それにたいして上の言葉は、両者をおなじ視野に置いて『エッセー』を書くようになったことを思わせる。第2巻第9章の構成にはそのような特徴がいっそうはっきりとあらわれている。この章はつねにフランスと対比させながら、バルチア人の武器や武装法に関する例を収録している。読書実例と見聞実例が対等な一対になっているのである。この作品がけっきよくは実例を綴りあわせる以上のレベルに進んではいなくとも、その構成は読書実例の世界と経験の世界がようやく一体になりはじめたことを示している。ふたつの世界の実例がおなじように思索を支えはじめたのである。

中期ではこの交流のなかからさらに随想も生まれるようになっている。それとともに観察と思索も今までになく現実のなかへ踏み込んでいる。たとえば第2巻第32章は章題どおりセネカとブルタルコスを弁護しているが、それは作者の敬愛する二人が、前者は宗教改革派の小冊子のなかで、後者はジャン・ボダンの『歴史の方法』のなかで、不当に評価されているのに反駁するためである。第2巻第23章が題名の示すように「良い目的に用いられる悪い手段について」実例を挙げているのは、内乱状態にあった当時しばしばこのような手段が正当化されるのを憂えてのことである。「信仰の自由について」(II-19)はユリアヌス皇帝が偉大な人物であった証拠を集めている。しかしそれはたんにこの皇帝を弁護するためではない。冒頭の文章ははっきりと、キリスト教徒であるか否かを善悪の絶対的な基準にして人物を判断する愚かさを批判している。たとえ信仰は純粹であろうと、熱情に駆られて正道を踏みはずす場合もあることを示すために、一例として背教者ユリアヌスにたいする不正な評価を取り上げたのである。宗教改革の抗争と混乱を見つめ

る目がこのような一章を誕生させたにちがいない。

読書実例と見聞実例が随想の流れのなかに吸収されている次のような展開は、両者の世界の融合がいつそう進んだ姿であろう。そこではもはや読書実例の影で経験的世界との交流がおこなわれているのではない。今やふたつの世界が交錯しながら一体をなしてモンテニユの思索の展開を支えている。それとともにその思考は以前のようにただ読書実例のあとを追っているのではない。実例に依存した思考は実例を活用する思考に成長している。

もしもその価値が榮譽に由来するのであるならば、徳行はじつに空しく浅薄なものである。それでは徳にいくら独立的な地位をあたえ、運命から切りはなそうとしても無駄である。なぜなら人の評判ほど気紛れなものがあるだろうか。行動が人の目に触れ、知られるようになるのは、まったく運命のしわざである。兵士たちに「名誉をめざせ」、「勇気によって名声を獲得せよ」と教えている人たちは、その結果についてどう思っているのであろうか。それは彼らに「仲間の見ていないところではけっして危険をおかすな」、「自分の勇気を報告してくれる証人が近くにいるかどうかよく注意せよ」と教えこむのに等しいではないか。ところが実際には、誰にも気づかれないのにりっぱに行動しなければならない機会が無数に生じる。どんなに数多くの華々しい活躍が戦闘の群衆のなかに埋もれることであろう。このような乱闘のなかにあつて他人を調べる暇のある者は、ほとんど働かなかつたのであり、仲間の行動についての証言はみずからの不利を招くものである。カエサルやアレクサンドロス大王の限りなく偉大な名声は、運命のお陰でなくて何であろう。運命はどれほど多くの人を、躍進しはじめたばかりのときに消し去つたであろう。企てが端緒についたばかりのときに不運によって突然に遮られなかつたならば、二人とおなじような勇気を発揮しつづけたはずであるのに、彼らについては何も知られていない。極度の危険をあんなに数多くくぐりながら、カエサルが一度たりとも傷ついたという話を私は読んだ覚えがない。何千、何万という人たちが、彼が乗り越えたのより些細な災難に会つて死んだのである。無数のりっぱな行動が、証言者のないままに、なんらの利益を当人にもたらすことなく消え去らなければならない。我々はかならずしもまるで舞台の上にいるように突破口の上や軍隊の先頭や大将の目のとどくところにいるわけではない。垣と堀とのあいだで敵におそわれるときもある。ちっぽけな要塞にむかつて運命を試さなければならなかつたり、納屋から四人のくだらない銃士を狩り出したり、隊からひとりとはな

れ、生じた事態に応じて独力で対策を講じなければならないときもある。注意するならば、実際の経験ではもっとも華々しくない機会がもっとも危険であって、私の意見のとおりであるのに気づくであろう。我々の時代におこった戦においても、栄ある堂々たる場所においてよりも、どこかのちっぽけな要塞を争っている些細なつまらない機会に、いっそう多くの勇士が亡くなった。人に知られるであろうとか、知られたら評判が良くなるであろうとかの理由によってしか勇者にならない者や、自分の勇気が他人の目にとまる状況でしかりっぱに振る舞おうとしない者、こういう人たちには大した働きは期待できない。(I I - 16, p p. 419-422)

初期の『エッセー』に読書実例が圧倒的に多かったのは確かである。それがモンテーニュの思索の場であったと言われても仕方がないであろう。しかし彼はその世界に思索を閉じ込めたのでもなければ、現実を忌避したのでもない。最初にそれを重視したのは、一言で言えば方法的な選択であった。何と言っても古今の書籍がもっともたやすく、もっとも豊富に実例を提供してくれたからである。しかし、もし現実の世界から有益な実例を抽出する能力があるならば、読書実例にこだわる必要はない。本稿の第1章で指摘したように、彼は実例の世界を拡大する努力を怠ってはいなかった。読書実例を手本にしながら、おなじような例を自分自身の経験のなかから発見しようとした。書物で興味を引かれた実例にたいして考察をくわえながら、現実を観察するすべを学ぼうとした。このような努力の結果、読書の世界のあいだに経験的な世界が浸潤していった。読書実例を基礎にしたこのような「試し」は、自己の経験を反省し、現実を見つめる観察力を発達させたはずであり、みずから抽出した実例にもとづきながら経験的な思索をすすめるのを可能にしたにちがいない。読書実例の世界と経験の世界との距離が消失し、一体になるためには、そのような進化がなければならないはずである。事実中期の『エッセー』には自分の経験から引き出した見聞実例がはるかに多くなっている。たとえば第1巻第26章や第2巻第8章のような長い章においても、ほとんどすべて作者自身の観察から生まれた実例である。これらの章では、読書実例を取りのぞいたとしても、以前のように論の運びに破綻が生じたりはしない。彼の思索はもはや書物からの知識に依存する必要はない。自分自身の観察眼で自分の経験する世界から実例を探し出すことができる。と言ってもそれは読書実例が価値を失うという意味ではない。読書実例が事実として評価されなくなるわけではない。モンテーニュはさらにのちの、円熟期とも言える後期では、たとえば第3巻第13章におけるように、

経験主義哲学を標榜するようになる。しかし事実立脚した思索は彼が最初からずっと重んじている姿勢である。「これ【実例】こそ私のような非力な者が追うにふさわしい獲物である」と言っていたのは初期の章である。中期にもおなじような言葉がある。第2巻第37章では、「医学は実例と経験によって形成される。私の意見もそうである」(p. 609)と、自分の立場を明言している。中期までのところはまだ経験主義哲学の類を論じているわけではないが、彼は終始経験にもとづいた思索を尊重している。ただその態度に変わりはなくとも、思索の成長につれて経験の質が変化してゆく。読書実例——見聞実例——自己実例、これが彼の経験の世界を構成する層であり、自己自身という対象もすでに初期に発見されていた。したがってこの基本的な構成は初期も後期も変わりはない。しかし、おなじ層から成り立ってはいるが、経験の世界は質的に変化してゆく。初期においてはほとんど読書実例という代償的な経験の層にとどまっていた。しかしモンテーニュは方法的に『エッセー』の著作をとおして自分自身の見聞という経験の層を開拓していった。初期の著作方法にはそのような工夫があった。数年の執筆の中断期において現実社会のなかで積んだ経験が彼の個性を開花させ、『エッセー』を進化させる糧になりえたのも、この方法の成果であると言えよう。読書実例にむかって試みた方法的な思索が、事実を考察し、含まれる意味を吟味し、消化し、吸収する構えを作り上げていたからこそ、新しい経験が彼を成長させたにちがいない。これらの過程をへて中期に彼は第二の経験の層を十分に掌握するに到る。読書実例と見聞実例のふたつの層が交流し、一体になり、思索はこれらの世界を自由に往来しながら展開するようになる。(なお自己実例という経験の層については別に一節をもうけて論考する。)

モンテーニュの思索がもはや読書実例に依存しない活発な活動をはじめると、その動きにもまた新しい個性があらわれてくる。随想は紆余曲折を帯びてくる。この特徴は後期つまり第3巻にもっとも著しく、従来人々の注目は主としてそこにむけられていた。しかしそれは第3巻に突然あらわれる現象ではない。すでに中期の章のあちこちにおなじような特徴が姿を見せている。したがって第3巻のような自由奔放な展開は、モンテーニュがその時期に何か新しい方針を決意したために生じたのではなく、中期にもあった著作の態度の発展の結果なのである。ひとつはこのことを証明するために、ひとつは中期にあらわれてきた個性的な表現方法を考察するために、以下において随想の紆余曲折のメカニズムや構造を分析してみよう。

思考の展開の論理性を測るためにある程度明確に定まった尺度があれば良いのであるが、

私達は論理学や思考心理学のなかに援用できる方式を見出すことはできなかった。したがって以下は経験的な反省によるところが大きく、いっそう緻密な、いっそう的確な分析方法が考案されなければならないであろう。

まず細部を観察しながら、随想の部分々々の関係に論理性が希薄な特徴をとりあげてみよう。相互の関連の論理性は、ひとつは論点の共通性が存在し、それが明瞭であるかどうかによる。と同時に、思考の発展につれて古い論点の一部が消え去りながら、新しい論点がかわわってゆく。その際以前のどんな論点でも自由に選択でき、どんな新しい論点でも無頓着に導入できるわけではない。したがって、論理的な展開をおこなうためには、論点の共通性が曖昧でないのみならず、新旧の論点の出現と交代の仕方についても注意がはらわれなければならない。実例をあげながら、前者の条件は満たしているが、後者の論理性が希薄になってきた特徴を考察してみよう。

(1) しかしながら真実のところ、こんなに墮落した時代において、自分のことを語っている誰を信用できるであろうか。他人について語るときでさえ、嘘をついて得られる利益はより少ないはずであるのに、信用できる人はごくわずかである。あるいは、まったくいないかも知れない。(2) 道義の退廃の最初の兆候は真理の追放である。なぜならピングロスのように、真実を語るということが偉大な徳のはじまりなのである。我々の今日の真理はあるがままの事実ではなく、他人に信じこませている姿である。それは丁度、正規の通貨のみならず、通用していれば偽金でも貨幣と呼ぶのにひとしい。(3) わが国民は長いあいだこの悪徳を非難されている。と言うのは、ヴァレンティニアヌス皇帝のころマッシリアのサルウィアヌスが、嘘をつくのや誓いに背くのはフランス人にとっては悪徳ではなく、話し方の一種であると言っているからである。この証言をいっそう強調したいならば、それらは今日では彼らにとって美德であると言ってもまちがいないであろう。(II-18, pp. 477-478.)

章の冒頭から(1)までにおいてモンテーニュは自己描写について弁解している。そしてその論は(1)から(3)のような過程を経て、まったく異なった方向へ急転する。したがって、長くなるのを厭わないならば、章頭からのみならず(3)以下をも引用すべきであろう。

(1)の論点は、ひとつは以前との関連から自己描写の問題であり、ひとつは嘘をつくということである。以前の部分には、嘘がまじるという観点から自己描写を論じたところはまったくない。したがって新しい論点が導入されたわけである。自分についてのべる言葉にはいろいろな原因に由来する嘘がまじりやすいというのは、誰にでも容易に想像できる関連であり、新しい論点の導入による(1)への展開は論理性がある。ところが(3)以下ですぐにモンテーニュは(1)への発展のひとつの要である自己描写との関係を無視する。以後のところでもこの関係との考察に戻ろうともしない。(2)を移行の部分としながら、(3)以下では嘘をつくという悪徳の観点から時代の腐敗を批判している。章題に示された「嘘をつくこと」についての随想はこのような唐突な急転によってはじまる。

モンテーニュの思索が個性的な活動をはじめるとともに、『エッセー』に書かれる随想にはこの例のような融通無碍な躍動性があらわれてくる。章頭から読み進んできた読者は(3)以下においてもなかなか自己描写との関連を忘れられないにちがいない。作者とおなじようにすぐに頭を切り替えることはできない。作者にとってはきわめて自然な展開かも知れないが、そこには主題の所在と発展の方向について読者を混乱させる非論理性がある。このような特徴をどのように名づければよいのであろうか。論点の共通性は明白であるが、一部の要素が抜け落ち、まったく異なった脈絡のなかへ移っている。「論点の変位」とでも名づけることにしよう。

論点の変位によってひとつの微妙な関係が生じる。引用にそくして言うならば、先ほどから私達は(3)以下と(1)以前とはまったく関連性がないと見なしてきた。しかし緻密に観察するならば、言外の関連を想像し、私達に反論するのは十分に可能である。というのは脈絡は異なってはいても、一部の論点が共通しているため、ふたつの部分のあいだにいわば一種の共鳴が生じるからである。したがって、たとえば(3)以下は時代の腐敗を論じながら、間接的に『エッセー』の自己描写を弁護しているのであると解釈できないわけではない。ただし、その微妙な関係にひそむ意味を察知するためには、嘘をつくこと、あるいは正直に、率直に語ることなどとの関係から自己描写についてのべている、『エッセー』の他の箇所の内容を思い浮かべられる読者でなければならないであろう。さもなければ、なにか関連があるように感じたとしても、明瞭な説明はできないであろう。とすれば多くの読者は共鳴現象を感じたのであって、言外の関連を読みとったのではない。これが私達が基本的にはまったく異なった論であるから見なした、ひとつの理由である。さらにまた、『エッセー』をくりかえし読んだ専門家でさえ、論点の変位によって生じる微妙な関連

のすべての例について、説得力のある説明がつねに可能であるとは思われない。無理におこなおうとすれば無意味なこじつけにおちいるであろう。したがって私達は自然な共鳴の可能性は否定しないが、そこにモンテーニュの意図的な手法があるとは考えない。随想の非論理的な躍動の一形式として把握するのが適当であろう。

論点の変位は新しい主題へ移ってゆく箇所でのみ生じているわけではない。論理性に注意を払わなければならない論証の途中にさえあらわれる。

(1) 過去のあらゆる予言のなかでもっとも古くもっとも信頼されていたのは、鳥の飛び方から引き出される予言であった。わが国にこれに似ていて、こんなにすばらしい占いがあるだろうか。未来の事柄について結論をくだす根拠になっている、あのような法則性と秩序をもった鳥の羽根の動きは、なにか卓越した内部の力によって導かれているからこそ、あんなにけだかい飛行を生むにちがいない。この偉大な行為を、引き起こす側の理解も同意も意志もない「本能の命令」のせいにしてしまうのは、この語の浅薄な乱用であり、あきらかにまちがった意見である。(2) たとえばその証拠に、雷魚は触れた人の手や足をしびれさせるだけではない。投網や引網を動かし、操っている人たちの手にまでも、網をとおしてしびれるようなだるさを伝える。さらにまた、その上に水をそそいだときには、この作用が水をとおして手まで昇り、感覚を麻痺させるのが感じられると言う。これはふしぎな力であるが、雷魚にとって無用なものではない。雷魚はこの能力を意識的に利用し、餌食をつかまえるために使う。どろの中にうずくまり、上を通るほかの魚たちが彼の作用の冷たさに打たれ、しびれ、手中に落ちてくるのを待つ。(3) 鶴や燕やその他の渡り鳥は、一年の季節におうじて住処を変えるように、自分たちのもっている予知能力を十分に自覚していることを示してもいれば、それを実際に利用もしている。猟師たちが我々に断言するとおり、多くの小犬のなかから残しておく一番良いやつを選ぶためには、母犬自身に選択の役目をさせさえすればよい。たとえば、小犬たちを小屋の外に運びだしたとき、母犬が最初に連れかえるのが必ず最良の犬である。あるいは火が小屋の四方に迫ったように見せかけたときならば、最初に救助に駆けよったやつである。したがって、あきらかに彼女たちは我々にはない予知の方法をもっているか、あるいは子供を判断することに関して我々とはちがった、いっそう鋭敏な能力をもっているにちがいない。(4) と言うのは、我々の子供については、ほんの小さいころには、我々は身体の形態以外

には、選択の根拠にできるものを何も発見できないからである。(11-12, pp. 205-207)

この引用部を読んでいるとき、(1)から(2)への展開に自然についてゆけたであろうか。(2)の最初に書かれた「その証拠に(Et qu'il soit ainsi)」という語句が表そうとする論理的な関係は、簡単に読みとれたであろうか。あるいは、(2)と(1)や(3)とのあいだになんらの違和も感じなかったであろうか。部分を抜きだして読むときには、モンテーニュ流の展開を理解するのは比較的容易である。しかし、それでもなお、上記の思考の動きを追ってゆくのに困難をおぼえる人がいてもふしぎではない。さらにまた、以前から読みつづけている状況ではその困難はいっそう大きくなる。理由はつぎに分析するとおりである。

モンテーニュ在世中の『エッセー』のテキストには改行がないのであるが、引用部は前後とはっきりちがった段落をなすと見なして良い。そしてその論の要をなし、全体を統一する論点は、ひとつは「動物のふしぎな予知能力」であり、ひとつは「その能力の意識的な活用」である。したがって(1)から(2)は論点の変位をもたらす展開である。(2)は「動物のふしぎな能力」と「意識的な活用」を強調してはいるが、「予知能力」の例ではないからである。

モンテーニュが(2)を書いた目的は(1)の後半の主張(動物のすぐれた能力を本能の命令のせいにするのはまちがっている)を強化するためであり、(2)は論理的な価値においてマイナスではなく、プラスの価値と有用性をもっている。また、(2)と(1)や(3)とのあいだに違和があるとしても、雷魚の「ふしぎな能力」は「予知能力」という論点とすこしずれているだけであり、論点の変位というほどではない。私達にたいしてこのように反論する人がいるかも知れない。引用した部分だけにかぎって言えば、それはまちがってはいない。私達の説明は以前の展開も念頭においている。モンテーニュはかなり前から(2)のような論じ方をしてきた。さまざまな例をあげながら、人間にはない、動物のすばらしい能力やふしぎな能力はたんなる本能の命令ではなく、動物自身が主体的に働かせ、活用しているのであると力説してきた。そしてそののち(1)に到って、「予知能力」という新しい要素を導入する。したがって、新しい主題が提示されたばかりであるのに、(1)以上に長い(2)のような論が挿入されるならば、多かれ少なかれ混乱が生じる。(1)によって新しい展開が始まったのかどうか曖昧になる。あいかわらず(

2) が中心の論であると感じた読者がいてもふしぎではない。章の流れのなかで考えるならば、(2) は(1) の内部の「意識的な活用」という点を説得する効果よりも、以前の文脈を復活させながら新しい発展を乱し、曖昧にする恐れが強い。(2) はたんに(1) や(3) とずれているだけでなく、論点の所属する場を変えさせる、論点の変位を引き起こすであろう。

なお(4) は晩年に削除されている。わざわざ言うまでもないことであり、(3) の印象を減じるマイナスのほうが大きく、その処置は納得がゆく。ではなぜ(2) は削除しなかったのであろうか。(2) で確認し、強調したかった点は、(3) によって十分に読者に伝わるはずである。作者の意図にそって考えてみても、(2) を除いた(1) → (3) の展開のほうがずっと明快な説得力があるだろう。推測されるひとつの理由は、(2) が実例をあげながら論じた部分だからである。晩年の加筆の最大の特徴は詩句や読書実例の追加挿入であることを思うならば、モンテーニュが(2) を削除する気にならなかったとしても何らふしぎではない。注意しなければならない他のひとつの理由は、おそらく彼は先ほど分析したような曖昧さや多少の混乱などには拘泥しないからである。それでは私達の分析は価値のない、無益な作業なのであろうか。そのような結論にはならないはずである。デカルト以後の近代的な論理とモンテーニュの思考、とくに随想という思考の展開とはかなりちがった側面がある。前者の頭の状態のまま後者を理解しようとするならば、しばしば難渋するであろう。つまりこの節で私達は前者から後者へ頭を切り替える基本的な方式を見つけようとしているわけである。それを発見しながら、論理性と非論理性あるいは超論理性とのあいだを自由に往来する柔軟さを身につけなければならない。さもなければ、中期以降の個性的な随想は理解できない。『エッセー』を読むむつかしさや思想の解釈についての紛糾は、しばしばこのようなところに起因している。

随想の部分々々の関連については簡単に把握しつづけていながら、いつのまにか展開の経路や方向がわからなくなったときには、論点の変位がなにかあったのではないかと考えてみるのが、ひとつの良い方法である。モンテーニュの思考が躍動してくるにつれ、以前の論点を自由に選択しながら発展してゆく日常の雑談の、しかも饒舌家のような形式があらわれるようになる。

(1) 美は人間どうしの交際に大きな役割を果たす要素である。それは互いに好感をいだかせる最初の原因であって、いかに野蛮な、いかに陰気な人間であろうと、そ

の心地よさにまったく打たれない者はいない。・・・[中略]・・・人間のあいだに生まれた最初の区別と、一方を他方より勝っているとする最初の考慮が、美において優れていることであつたとしても、いかにももつともである。(2)ところで私は背丈が平均以下である。この欠点はただみにくいばかりではなく、不都合なところがある。とくに人に命令をくだすような職にある者はなおさら都合が悪い。と言うのは、堂々として威厳のある風采のもたらず權威に欠けるからである。・・・[中略]・・・他の美は女性のためのものである。背丈の美しさがただひとつ男性の美しさである。背が低ければ円い額も、澄んだ目も、ほどよい形の鼻も、小さな耳や口も、齒ならびのよい白い齒も、濃淡にまったくむらのない、栗の殻のような褐色のひげも、つりあいのよい、すこし太めの頭も、さわやかな肌の色も、感じのよい顔立ちも、均整のとれた四肢も、いずれも男を美丈夫にすることはできない。(3)そのほかは私はどっしりとした頑丈な体格をしている。顔は太っているほどではないが、ふっくらとしている。気質は多血質で、情熱的である。

さらに足や胸は毛ぶかい。

かなり放縦な生活もしたけれど、相当な年になるまでたえず頑健であつた。私はこんな風であつた。というのは、現在の私を観察しながらのべているのではないからである。今では私は40の坂を越え、老いの小道に踏み入っている。今後の私はもはや半分存在でしかないであろう。あるいはもはや私ではないであろう。私は日毎に自分から遠ざかり、自分から去ってゆく。

我々のものがひとつひとつ、過ぎゆく年によって奪われてゆく。

(4)器用さや敏捷さについては、なにごともうまく行ったためしがない。ところが、私は当時ではもつとも敏捷であつた父の息子なのである。しかも父は非常な老齢に達するまで動作が機敏であつた。・・・[中略]・・・手のほうもきわめて不器用で、ただ自分のためにさえまともに書けない。走り書きしたときには、判読しながら読みなおす苦勞をするくらいなら、もう一度書いたほうがよいと思うくらいである。きちんと手紙の封もできなければ、驚ペンを削るのもまったくできない。(5)私の身体

の状態はけっきょく精神の状態と非常によく釣りあっている。鋭敏で柔軟なところはまったくなく、ただ恵まれているのはゆったりとして、沈着で、ぐらつかないような種類の力である。(I I-17, pp. 443-448)

上の随想は(1)と(2)、(2)と(3)といった前後の関連は明瞭であり、その理解に困難をおぼえる読者はまずいないであろう。しかし(3)や(4)ではすでに話題はまったく変わっており、随想がどのような道を通って、どのような方向へ展開してゆこうとしているのか、当惑する人もいるにちがいない。それはモンテーニュが以前の論点のひとつを、論理的な発展にこだわらず自由に選んでいるからである。(2)は(1)の「肉体的な美」を継承し、背丈の美しさを論じているのであるから問題はない。ところが(3)では「美」という要素がまったく抜け落ちている。翻訳では(2)から(3)への変化の理由を表しがたいが、原文で理解するのはむつかしくないであろう。(2)の話題である「背丈」はフランス語では<<taille>>、(2)の始めの文は<<Or je suis d'une taille au dessous de la moyenne>>である。(3)の始めの「体格」もおなじ<<taille>>で、原文は<<j'ay au demeurant la taille forte et massive>>となっている。つまり(2)の内容を構成している「美」と<<taille>>の論点のうち、前者をまったく無視して後者だけをとりあげたのである。(3)が<<taille>>だけの話になったならば、「体格」との関連で(4)において運動の能力のほうへ飛ぶこともできれば、(5)の最初で「私の身体の状態」として(4)を総括したのちには、対比的に引用部以降で「私の精神の状態」についての話へ移ることもできるわけである。このような展開は連鎖の箇所に論理的な発展が欠けており、秩序や統一性の欠如の原因をなしている。この例では自己描写という統一性があると言えないわけではないが、しかしそれだからモンテーニュがこのような非論理的な展開を許しているのではない。中期の『エッセー』のあちこちに見られる現象である。

今まで分析した例においては、部分々々の相互の関連は大体明白であった。論理的に発展しているとは言えないが、読者の理解できないほど飛躍しているわけではない。ところが実は、モンテーニュの思索は活発になるにつれ相互関係の常識的な枠さえ打ち破ろうとしはじめる。そして連鎖の仕方は第三者の読者には捉えがたいほど個人性を帯びてくる。

(1) 常にすべてを言う必要はない。そんなのは馬鹿げているであろう。しかし、思っているとおりを口にしなければならぬ。さもなければ悪意の行為である。彼ら

はたえず偽り、装ってどんな利益を期待しているのだろうか。私にはわからない。一、二度ならばそうして人をだませるかも知れない。しかし、本心を隠すことを公言し、我々の王侯のなん人かのように、昔のメテルス・マケドニクスの言葉を借りながら「自分の意図を知った奴ならばたとえ下着でも火に投じるであろう」と吹聴し、さらにまた「偽るすべを知らない者は支配するすべを知らない者である」などと自慢するのは、今後の交渉の相手にむかって、自分の言葉は虚言と欺瞞にすぎないと警告を発するにひとしい。よほど単純な人間でなければ、内と外がいつも別である主義を奉じている者の顔つきや言葉にだまされるがままにはならないであろう。こういう人たちは現金で受け取れるものはひとつも示さないのであるから、人間どうしの交際においてどんな関係をもつことができるのか、私には想像もつかない。ところで、私について言えば、私はへつらったり、自分を偽ったりするよりも、人にうるさがられ、口の軽い奴だと思われるほうがよい。(2) 記憶力というのはすばらしく役に立つ道具であって、これがなければ判断力は力を発揮するのに大変な苦勞をする。私にはこの能力がまったく欠けている。私に相談したいことがあれば、少しずつ言ってもらわなければならない。さまざまな事柄があれこれとまじっている話に答えるのは、私の力にあまる。覚え書きなしには仕事を引き受けられそうもない。したがって、頭に入れておかなければならない重要な話があって、しかも長いときには、みじめだがやむをえない手段として、言わなければならないことを丸暗記せざるをえない。さもなければ、記憶力がいたずらをしたりはしないかと心配で、不安のあまりまともな態度がとれないであろう。(11-17, pp. 453-454)

モンテニユはなぜ(1)から(2)へ話を転じたのであろうか。その理由を推察できるためには、『エッセー』をよく読んでいるのみならず、随想の展開の仕方にも注意している読者でなければならないであろう。(1)の主題になっている「偽る」とか「虚言」とかの行為に必要な能力として彼の頭にまず浮かぶのは、記憶力であったにちがいない。初期の章に彼独自のこの脈絡がいつそうはっきりとあらわれている。「嘘つきについて」は自分には異常なほど記憶力が欠けているという記述によって書き起こされ、つぎのような文とともに主題に入ってゆく。

記憶力に自信のない者が嘘つきになろうとしてはいけないと言われているのは、理

由のないことではない。

したがって、意識の内部における「嘘をつくこと」と「記憶力」との結びつきが（１）から（２）への変化を引きおこしたのである。そのように推察してまずまちがいはないであろう。第１巻第９章では両者の関連は論理的に示されたが、この例のような方向転換は意識内部の個人的な脈絡に従った連想的な飛躍である。第三者の読者がついてゆけなかったとしても、当然であろう。上の引用のような言葉が当時よく言われていたならば、同時代の読者は現代人よりもこの連想を察しやすかったかも知れない。しかしながら、当時の誰にとっても明瞭であったとは思われない。本人と他人との意識の動き方の相違による、曖昧さや唐突さは免れられなかったであろう。

ところで、連想という原理を援用した捉え方は、「論点の変位」と名づけた特徴の分析にも適用できないわけではない。しかしこの原理は非常に利用しやすい、便利な道具であり、モンテーニュの随想を理解する上でほとんど利点のないような乱用におちいらぬように注意しなければならない。私達は普通の論理的な思考では捉えがたい飛躍や急転を推察するときにかぎるのが一番よいと思っている。中期に到ると、書かれた随想でありながら『エッセー』は個人の意識内部の躍動性や非論理性あるいは超論理性までも含むようになる。このような側面を把握するために連想の原理を適用すべきであり、一方で随想の論理性をなんら考えようとしなければ、無意味な乱用にすぎないであろう。

次に、紆余曲折を帯びてきた随想の展開を構造の面から理解する方法を示しておこう。今まで私達は連鎖の部分に注意をはらい、ひとつの鎖の輪と他のひとつとのつながり方を分析したのであるが、これらの平面的な視点だけではまだ十分ではない。いわば立体的な連鎖を解きほぐすすべも心得ていなければならない。『エッセー』では随想の論理的な結びつきが弛緩すると、前後の脈絡からはずれた余分な輪が滑りこむときがある。

（１）美は人間どうしの交際に大きな役割を果たす要素である。それは互いに好感をいだかせる最初の原因であって、いかに野蛮な、いかに陰気な人間であろうと、その心地よさにまったく打たれない者はいない。（２）肉体は我々の存在と大きな係わりがあり、大きな位置を占めている。したがってその組織や機構は正当に評価されなければならない。我々のふたつの主要な部分を切り離し、おたがいから隔離しようとする人たちはまちがっている。反対にこれらをつなぎあわせ、結合させなければなら

ない。魂にむかって、脳に離れてひとり思索にふけり、肉体を軽蔑し、捨て去るよう
に命じるのではなく（と言っても、なにか巧妙な偽装による以外にはそんなことはで
きないのであるが）、逆に、肉体に加担し、これを抱擁し、いつくしみ、補佐し、監
督し、諫め、肉体が道をあやまれば引きもどし、矯正するように、魂に諭すべきであ
る。結局のところ肉体を妻としてめとり、本当の夫の役をつとめさせ、そして両者の
働きがまちまちになったり対立したりしないように、調和して一体になるようにさせ
なければならない。キリスト教徒たちはこの関係について特別に教えられている。と
言うのは彼らは、神の正義は肉体と魂の交渉と結合にまで及び、永遠の報奨に肉体を
与らせるほどであるのを知っているからである。神はひとりの人間全体の動き方を見
ているのであって、罪過におうじた懲罰や報奨を全体の部分が受けるように望んでお
られるのである。（3）人間のあいだに生まれた最初の区別と、一方を他方より勝っ
ているとする最初の考慮が、美において優れていることであったとしても、いかにも
もったもである。ところで私は背丈が平均以下である。この欠点はただみにくいばか
りではなく、不都合なところがある。とくに人に命令をくださうような職にある者はな
おさら都合が悪い。と言うのは、堂々として威厳のある風采のもたらず権威に欠ける
からである。アリストテレスの言うところによると、エチオピア人やインド人たちは
王や長官を選ぶにあたり、身体が美しく、長身であることを考慮した。彼らの考えは
正しい。なぜなら、恰幅がよくてりりしい隊長が一团の先頭に進んでゆくのを見るな
らば、従う兵士たちは敬意をいだき、敵は恐怖を感じるからである。（11-17, p
p. 443-445）

モンテニユはまるでひと筋の道のように書き流している。そのように思いこむ読者も
いるにちがいない。そして、（3）と（2）との関連に困惑するであろう。しかしこの例
では連想的な飛躍がその原因ではない。文章の書かれている順序どおりに理解しようとす
るならば、私達はたちまち読解不能におちいる。実は（3）は（2）から発展しているの
ではない。（2）をまったく無視して、（1）から（3）へ続けて読みなおすならば、話
の筋道は簡単に理解できるのである。しばしば『エッセー』では、論理的な連鎖のところど
ころに、この（2）のような余分な輪が滑りこむ。しかも、ときには脈絡から逸れる輪が
ふたつも闖入しさえする。つまり第4の部分も第3の部分から発展しているのではなく、
第2の部分も第3の部分も第4の部分も第1の部分とのみ関連しているのである。したが

って、たんに脱線という常識的な理解ではすませられないであろう。脱線の仕方や構造にはさまざまなタイプがある。私達はそれらを知って『エッセー』の随想を追跡できるようにならなければならない。ひとつの話から生じた二、三種類の文脈が相互になんの関連もなく、平行して発展しているのであるから、私達はこの例のような特徴を平行構造と名づけることにしよう。この構造を心得ておくならば、中心の脈絡と脱線との把握はずっと容易になるはずである。

モンテーニュのみならず私達においても思考は単純な一本の道を進んでゆくのではない。発展する過程にはなんども分岐点があり、いくつもの枝道がある。普通私達はそれらを取捨選択しながら一貫した脈絡を保つようにつとめる。ところがモンテーニュは論理的な明快さや統一性のためにこの取捨選択をおこなうよりも、いずれの道にも思考を試してみるほうを好む。いずれをも表現してみようとする。表題「エッセー」はこのような思索と表現の態度も含めながら、「試し」を意味しているとも考えられる。彼は論理的な抑制によって明快であるよりも、「試し」という自由さによって思索を躍動させ、その活力を一杯に発展させることを望んでいたのであろう。平行構造もそこに由来する特徴のひとつであると思われる。

先ほど例示した引用部においては、(3)を読みすすんでゆくうちに読者は(1)との関連で書かれているらしい、と自然に察しがつくかも知れない。しかしそれだからモンテーニュが平行構造の存在を許しているわけではない。読者が無意識のうちに第一の部分との関連を回復できる程度に、第二の部分を短く抑えようとするような節度はまったく見られない。第二の部分における思索がつぎつぎと発展してゆく力を内在しているときには、彼はその活動のままに任せる。そして平行構造よりさらに複雑化し、第二の部分は内部にさらに新しい話題の侵入を許しながら展開してゆく。つまり脱線部がさらになんども脱線しながら進んでゆく。こうして思索を十分に活動させたのち、その発展の力が尽きると、突然最初の脈絡にもどってその筋道を辿りなおす。このような再出発はモンテーニュの随想の発展と不可分である。しかも、復帰してゆく過去の脈絡はしばしば読者には簡単には察せられない。たとえば「私のはじめの問題にひとことつけ加えるならば(Pour dire encore un mot sur mon premier propos)」(II-16, pp. 430-431)とか「さて、ふたたび話をはじめにもどすと(Or pour me remettre sur mes premières brisées)」(II-33, p. 557)などと断り書きを挟むときもあるが、この程度の言葉ではとても読者ははじめの問題を思い出せないであろう。その原因はいくつかある。「もど

ってゆく先が遠い以前である」、「のみならずときには読者の印象に強く残らない部分である」、「以前の脈絡との関連の仕方が明瞭でない」、「途中の展開が複雑である」などの原因によって、突然どこに話かもどったのかわからないことも珍しくはない。具体例を示しながら説明をつづけよう。つぎの(5)は以前とのどのような関連によって再出発したのか考えていただきたい。

(1) 私の作品にまあまあ良いと思われるところがあるろうと、真実に則した、それ自体の評価によってではなく、世間の信用を得ている、もっと悪い他の作品と比較してのことである。私は自分の仕事を喜び、悦に入っている人たちの幸福がうらやましい。なぜなら自分ひとりで楽しむのは容易な方法だからである。私の作品は気に入るところか、見直すたびに新しい不満がわいてくる。いつも心のなかにはあるひとつの観念があって、私が文章にしたものよりりっぱな姿を提示するのであるが、表現することができない。しかも、ただ想像のなかで事物のもっとも完全な姿を思い描くのさえできない。(2) こうして私は身にしみて知った。私の目にする、豊かで偉大な過去の魂によって生みだされたものは、私の想像力の限界さえもはるかに越えている。彼らの作品はただ私を満足させ、ただ心を満たすだけではない。私は驚嘆し、感嘆のあまり戦慄におそわれる。(3) それらの美は十分に判断できるのであるが、それを表現するのは私には不可能である。私は何を企てるにしても、プルタルコスが誰かについて言ったように、美の神に犠牲をささげて寵遇を祈らなければならない。

なぜなら何かが人間を喜ばせ、甘美な感覚を吹きこんだとしても、すべては優しい美の神のおかげである。

ところが彼女たちはいたるところで私を見捨てる。私にあってはすべてが粗雑であって、心地よさや優美さが欠けている。(4) 私は事物を価値の最大限のところまでふくらませるすべを知らない。私の文体はなんら題材を助けられない。したがって私には非常な魅力があって、みずから輝いている強力な題材が必要である。私は人を喜ばせることも楽しませることもくすぐることもできない。世界でいちばん面白い話でさえ私の手がくわわると、ひからびて色あせてしまう。・・・[中略]・・・私はフランス語しかしゃべれないのであるが、これさえも発音やその他の点で住む土地の野蛮

さによって変質している。と言うのは、私の会うこちらの地方の人間で、はっきりと生国も感じられず、純粋なフランス語の人に耳ざわりにもならないような話し方をする者はひとりもないからである。しかしながら、それは私がペリゴール地方の方言によく通じているからではない。私がそれをしゃべる習慣がないのはドイツ語と変わらない。またこのことで不便も感じていない。我々の上手の、山のほうには純粋なガスコーニュ弁があり、私には非常に美しく感じられ、習得したい気もちはもっている。それは簡潔で、表現力があって力強く、私の耳にするほかのどれよりも本当に男らしく勇ましい言語である。ラテン語について言うならば、母国語としてあたえられたにもかかわらず、使っていないうちに流暢にしゃべる力を失ってしまった。以上がこの方面でいかに私が無能力であるかという話である。(5) 美は人間どうしの交際に大きな役割を果たす要素である。それは互いに好感をいだかせる最初の原因であって、いかに野蛮な、いかに陰気な人間であろうと、その心地よさにまったく打たれない者はいない。(6) 肉体は我々の存在と大きな係わりがあり、大きな位置を占めている。したがってその組織や機構は正当に評価されなければならない。我々のふたつの主要な部分を切り離し、おたがいから隔離しようとする人たちはまちがっている。(II-17, pp. 438-443)

(5) は直前の内容を受けた展開ではなく、以前の脈絡へ復帰しながら再出発する随想方式に由来している。ではこの新しい発展を促す契機はどこにあるのであろうか。番号によって区分し、途中を省略した姿においてもそれは十分に明瞭ではない。(5) は(3) との関連のなかで生じている。つまり(3) の作品についての話のなかにある「美」という要素から肉体の「美」についての随想がはじまったのである。すこし以前に分析した連想的飛躍と復帰による再出発の方式との結合である。

(5) の最初で読者が以前との関係に気づくのは、おそらく非常に困難であろう。その原因について考えてみよう。上の一例外外を分析する余裕はないが、他の曖昧な再出発を理解するために参考になるはずである。よくあるような、以前にもどるといふ断り書きの類は(5) には見られない。(4) の最後の文がそれに近い役を果たしている。と言っても、(5) が(4) の終わりとつながらないことを表しているだけであり、(5) がまったく新しい随想のはじまりなのか、それとも以前と関連した再出発なのか、いずれであるかは示していない。さらに、「以上」とか「この方面」とかがどこからどこまでを指して

いるのか明確ではない。角度を変えて言えば、以前の展開はこの程度の文によってまとめるほど明快ではない。「以上」とか「この方面」の語句に読者がある程度明瞭な意味を感じとり、(5)の最初でとまどわないためには、(4)から脱線がはじまったことに気づいていなければならない。ところが、(2) → (3) → (4)の話題の変化はきわめて自然な流れに従いながら、いつのまにか論点の変位がおこなわれている。どこから脱線したかを捉え、記憶しておくのはやさしくはない。つぎの原因は(4)の質と量である。(3)までの部分が約33行であるのにたいして、(4)は中略部も含め、独自の発展をしながら約89行、およそ3ページ半に渡っている。モンテーニュ流の再出発としてはむしろ近い以前への復帰であるが、他の原因がからむならば読者の記憶を混乱させるに十分な量である。さらにもうひとつの原因はすでに述べたように(5)が連想的な飛躍によって生じており、第三者が以前との関連を察するのはやさしくないからである。最後の原因は(5)自体の展開である。(5)はわずか6行半で「美」の論点が抜け落ち、肉体と精神との関係のありかたの(6)の話へ移ってゆく。読者は(5)の話が今までの脈絡のなかでどのような位置を占めるのか、疑問をおぼえる暇さえない。

以上に分析したような展開は、書き記された作品の論理としては合点がゆかないかも知れない。しかし、私達の日常の意識の内部における自由で活発な思考を思い浮かべるならば、ごく普通の現象であろう。『エッセー』の作者は作品においてさえ、流動的な意識の躍動性を保持しながら思索をすすめ、記述をおこなおうとする。その結果、文章を読むだけでは彼の意識の流れとまったく一体にはなれない、第三者の読者にとって非常に曖昧な展開が生じるのである。なお私達が三度にわけた、三種類の引用は「美は人間どうしの交際に大きな役割を果たす要素である」の前後に渡る、ひとつづきの文章である。ページの順番に並べなおし、連続した広範囲の展開として眺めなおすならば、モンテーニュの思索と表現の方法が中期に到って帯びてきた個性を理解するまどめにしていただけるであろう。

最後に、今まで分析してきたような非論理性や超論理性あるいは統一性の欠如などがなぜ『エッセー』に見られるのであろうか。私達はまだその理由を考えていない。しかしそれは複雑な脈絡のなかにあり、一気に解答できる問題ではない。他の主題に関する考察をすすめながら、すこしずつ明らかにするしかない。この第1節ではみつつの側面を指摘し、基本的な捉え方だけを示しておこう。ひとつの理由は当然のことながら作者の気質による。

私の言葉には優しく滑らかなところがまったくない。かさかさ、ごつごつとして、

本質的に不羈奔放である。そして私にはこのようなのが気にいっている。しかしながら往々にしてあまりにも放縱に流れ、技巧や気取りを避けようとするあまり、別の極端におちいるときがあるのも十分に感じている。

簡潔であろうとして曖昧になる。

たとえば私が秩序ただし、均整のとれた別の文体を見習おうとしても、成功しないであろう。(II-17, p. 441)

したがってひとつには、自由奔放なのを好み、「技巧や気取り」を嫌う気質の周辺に理由を探してみなければならないであろう。しかも引用文で「文体」の問題がからんでいるように、それは作家としての在り方にも影響をおよぼしているにちがいない。単純にひとつの理由と言いきれない複雑さがある。

第二の理由はモンテーニュと作品との特殊な関係に由来する。

私は偶然以外には各部分の配列を決める参謀をもたない。夢想のあらわれるがままに積み重ねてゆく。それらは雑踏をなして押しあっているときもあれば、一列にならんでだらだらと続いているときもある。御覧のとおり調子の狂ったものではあるが、私は普段の自然な歩みを人々に見てもらいたい。(II-10, pp. 100-101)

つまり、みずからのありのままを作品に表現したいという欲求によるものであり、『エッセー』における自己描写の問題がかかわってくる。

他のひとつの理由はモンテーニュの哲学観による。

ただすこしでも賢くなろうとしているだけであって、学者になりたいとは思わない私にとっては、あのようなアリストテレス風の、論理的な構成は具合がわるい。すぐに要点に進んでほしい。死とは何か、快楽とは何か、私はこんなことは十分にわかっている。そんな分析に暇どってほしくない。最初から正当で確固とした道理を説き、それらの攻撃に堪えるすべを教えていただきたい。そのためには文法家風の緻密さや

言葉と論の巧妙な組み立てなどは役に立たない。(II-10, p. 111)

したがって随想のあのような展開は、無益な論理に拘泥しない、「賢くなる」のを目的にした哲学の思考法ということになる。

以上が『エッセー』の論理、あるいはその非論理性の原因を考察する視点である。しかもこれらはなんら矛盾しているのではなく、共通の、一貫した脈絡のなかにある。

第2章第1節(注)

(1) II-A-69, t. 1., pp. 382-391.

(2) この段落でのべた事柄に関しては、II-A-31, pp. 150-153、II-B-21, p. 305, p. 438などを参照。

2. エッセーの論理

1576年にモンテーニュは平衡を保った天秤の周りに「私は判断をさし控える」というギリシャ文字の刻まれたメダルを鑄造させている。1571年に書斎の壁に記した、高等法院退官の辞につづく記念の行為である。後者は『エッセー』を誕生させる引退生活へ踏みだした年であり、前者は個性的な『エッセー』が開花する中期のはじまりである。新たに筆を執りなおすにあたって彼はこのような図柄のメダルにどのような意味をこめたのであろうか。従来においては、おなじ年に書かれた「レーモン・スボン弁護」の章の懐疑主義的思想を表現していると解釈されてきた。もちろん天秤の絵と「私は判断をさし控える」という言葉が暗示している思想はひとつの重要な問題である。しかしながらメダルの図柄に含まれている、思想以前の意味については考察がなされていない(1)。つまり天秤のイメージと判断の関係にモンテーニュがこめた意味である。彼が天秤の絵を選んだ理由から考察をはじめなければならない。

この究明は一見したところではなんら手掛かりがないように思われるであろう。しかし私達は初期の章についての分析から推察することができる。それらの構造はしばしば天秤のイメージに要約できる思考法を隠していた。たとえば第2巻第3章は自殺の是非についていろいろな考え方や実行例を書いているが、モンテーニュ自身はまったく意見をのべていない。しかしこの章を構造の面から捉えなおしてみるならば、相反するものが一組になって列挙されているのがわかる。つまり彼は自殺の是非について自分自身の判断をくだすに先立って、いろいろな意見や実例を天秤にかけているのである。このような収集と整理をおこないながら、判断の秤をつくっているところにこの章の著作の意味がある。おなじように第1巻第5章はなんらの結論も出さず、よっつの実例を並べていた。しかし実例をつないでゆく語句から構造を見るならば、「我々はどうかと言えば、ローマ人ほど潔癖ではなく」、「しかしまた」、「しかしながら、さらにまた」のように、いずれも前の実例とは相反する側面へ視線を移しているのに気づくことができる。第2巻第3章が判断の材料を整理して天秤にのせた姿であるとするならば、この章は左右の天秤皿へ交互に実例をのせてゆく思索の動きから生まれていると言えよう。このような著作の実践のなかでモンテーニュは思索という行為と天秤の揺れ動く運動との類似性を実感したにちがいない。1576年にメダルを作らせるために選んだ天秤は、彼が人間の思考の特徴を表現しようとしたイメージなのである。もちろん「考える」という動詞<penser>は「測る」を意

味するラテン語<<pensare>> から派生しており、もともと思索と天秤のイメージはきわめて親近性がある。ラテン語に堪能な彼は「考える」と「測る」という語の語源的な共通性を感じとっていたかも知れない。それは十分にありうる。しかし『エッセー』にはそのようなことを言っている箇所はなく、この点についてはこれ以上詮索しても仕方がないであろう。

したがって天秤の図柄はメダルを鑄造したころの思想との関連からのみ意味をもつのではなく、モンテーニュの思索の基本的な性格を象徴している。彼の思索の天秤は簡単に一方が重くなったりはしない。その傾きが目に見えてははっきりと分かるのはまれである。多くの章は性急に結論をさがそうとすれば、不明瞭としか言いようがない。『エッセー』における「エッセー（試し）」という思考は、天秤のふたつの皿が上下する運動そのものに似ている。先に天秤の構成の一例にあげた第2巻第3章はつぎのような言明によってはじまっている。

よく言われるように哲学するとは疑うことであるとするならば、まして私のように馬鹿げたことを書いたり、とりとめのない空想にふけったりするのは、いっそう疑うことであるにちがいない。というのは初心者のはずべきは探求し、議論することであり、解決するのは先生だからである。そして私の先生は、異論の余地なく我々を統治し、人間のむなしい論争の上方に鎮座する、至聖なる神の意志の権威である。（p. 19）

天秤を一方へ傾かせて明瞭な解決をおこなうのは、神の権威以外には不可能である。しかし神はまた人間たちの空虚な議論を超越したところに鎮座している。神の意志にかこつけて「人間のむなしい論争」に絶対的な結論をくだそうとするのは、僭越な行為である。たとえば当時のフランスでは起こった事件を神の意志の介在として説明する傾向が一般であったが、モンテーニュはそのような身勝手な解釈をはっきりと批判している。それは「神意を判断するにあたっては節度をもっておこなうべきこと」（I-32）という短い一章を読むだけでも分かる。けっきょく人間の議論には疑う余地のない解決など有りえないに等しい。みんな生徒にすぎない私達人間の思索は疑い、問いを発し、探求することに甘んじなければならない。左右に揺れる天秤がふさわしいイメージとなる。この天秤の思考法は絶対的な真理を発見するためのものではない。真理は揺れ動く天秤の、状況におう

じた一瞬の傾きを捉えた判断にすぎない。そしてそれは再び揺れ動く思索のなかに消えてゆく。もしそこに残るものがあるとするならば、「試し」によってわずかながらも明敏さを増した判断力の成熟だけであろう。

モンテーニュがこのような思索に甘んじるのは、基本的な感情としてすでに指摘したように、人間を観察しても世界を眺めてもつねに多様性と流動性を感じるからであろう。彼の目に映る人間や世界の事物は普遍的な判断体系を拒否する多種多様な姿をしている。しかもそれらは有為転変をつづけており、とても明確な認識に固定できそうにもない。天秤によってみずからを象徴する思考は、この多様性と流動性ととも揺れ動きながら、しかるべき時に一瞬々々の判断をおこなおうとする。しかしそこには、ひとつの大きな危険がひそんでいる。天秤の思考は一瞬の判断の感覚を失うと、永遠に揺れ動くばかりで、いっこうに解答を見出せない恐れがある。モンテーニュは多様性と流動性に挑戦する思索のなかで、天秤がいつまでも左右に揺れつづけ、判断の行使にとまどったときもあつたにちがない。それは無限の多様性と永遠の流動性に目がくらんだ眩暈に似ていたであろう。それはひとつの見地に拘泥しない柔軟さと、さまざまな個性を識別し、絶えまない変化を感じとる繊細な感覚のゆえに襲われるめまいである。このようなとき彼は「判断をさし控える」ことを決心したのである。実際にはつねに判断を保留するのはおそらく不可能であろう。しかし、この言葉を肝に銘じておくならば、自己の思索が世界の多様性と流動性のなかに呑みこまれ、押し流されるのを避けられるにちがないと信じたのであろう。1576年に鑄造させたメダルは、彼が本当に危機的な状況におちいったことを表しているのか、それともただ判断不能の危険性を察知し、自覚した記念にすぎないのか、この問題についてはメダルの絵と言葉だけからは論じられない。「レーモン・スボン弁護」の章の思想と照らしあわせながら解決しなければならない。私達は現在のところは本論のテーマの範囲内にとどまり、モンテーニュの思索における天秤のイメージの意味と判断力との関係を明らかにするだけである。しかしその考察は「レーモン・スボン弁護」の章の思想を解釈する、ひとつの鍵になるであろう。天秤のイメージは多様性と流動性の基本的な感情を背景にしている。ところでこの感情から相対主義思想への距離はほんの一步である。後者は前者の思想的な表現である。ちなみに「レーモン・スボン弁護」の章に見られる止めどのない実例の列挙は、この多様性と流動性の感情の昂進を示すものであろう。あるいはまたメダルの鑄造が深い懐疑を表しているとするならば、その懐疑主義思想は世界の多様性と流動性に判断の感覚を乱された困惑から生じていると言えよう。

本稿の第1章で分析したように、初期の章はさまざまな著作の方法と思考法でつくられており、天秤のイメージがそれらすべてを総括しているとは考えがたい。メダルの絵は初期の著作を支えていた思考の特徴をモンテーニュ自身が捉えなおし、あわせて中期のはじめごろの思想を表現したのであろう。したがって1576年に鑄造されたメダルについての考察は初期の論理についての結論でもあれば、中期の論理についての序論でもある。中期に入るとともに思想のみならず論理も個性的になってくる。みずからの感情と知性にいっそう合致した特徴が顕著になる。それはひとまとめにして呼ぶならば「エッセーの論理」とでも名づけられるであろう。私達はこの節においてその特徴を考察してみよう。まず「エッセーの論理」は直面した問題のさまざまな側面をひとつひとつ明らかにしてゆく動きである。そして、それぞれの側面が繊細に識別され、論じられ、認識されてゆく一方、各側面のあいだの関係は各々についての認識によって暗示されるにとどまり、関係づける論理によって統括されることは少ない。「エッセーの論理」は個別的な識別と判断の性格がつよく、関係の論理にとぼしい。論理性の必要な、つぎのような箇所にさえそれがうかがわれる。

(1) 我々の判断と意志を結び、魂を縛り、創造主に結びつけるべき絆は、繫縛の力を我々の思案や分別や情熱からではなく、ひとつの形、ひとつの顔、ひとつの光しかもっていない超自然的な神聖な呪縛、すなわち神の権威と思寵から得ていなければならない。(2) ところで我々の心も魂も信仰によって治められ、支配されているのであるから、信仰がみずからの意図に役立てるために、我々の他のすべての部分をそれぞれの能力におうじて利用するのは当然である。(3) また、この機構全体のどこにも偉大な建築家の手の跡が印されていないとは思われないし、世界の事物のなかにこれらを生み出し、作りあげた職人を多少なりとも偲ばせる様子がまったくないとも信じられない。その人はこれらの高貴な作品のなかに神性の極印を残したのであり、我々がそれを発見できないのはただ能力が欠けているからにすぎない。その人みずから言っておられるとおり、目に見えない働きは目に見えるものによって我々に表示しておられる。(4) スポンはこのりっぱな研究に精励したのち、いかにしてこの世界の一部分たりと言えども造物主に反していないかを我々に示している。もし宇宙が我々の信仰に協力しないならば、神の善意を傷つけることになるろう。天も地も四大も我々の身体も魂も、すべてが信仰に加担している。これらを役立てる方法を見つけさえ

すればよい。理解する力さえあるならば、すべてが我々に教えている。「我々が御業によって永遠の知恵と神性について考えようとするならば、神についての目に見えない事柄が世界の創造をとおして見えてくる」と聖パウロも言っている。

しかも神は天の姿が地球に見えないようにはなしたまわず、たえず天球を回転させながら、神御自身の御顔と御身体を啓示しておられる。みずからを提示し、みずからを教えながら、我々がいつそうよく神を知るようになしたまい、我々が神の歩みを眺め、その法則に注意するように論しておられる。

(5) もし私の印刷屋が探し求めて借用する文章が大好きであり、冒頭が名句で飾られていなければ、この時代の好尚ではりっぱな工房の本とは言えないと信じているのであるならば、彼が張りつけたのよりもっと優れた、もっと古い血筋の、上のような詩句を利用すべきであろう。(6) ところで我々の理性や我々人間の思弁は鈍く、不毛な質料のようなものであり、神の思寵がその形相であり、後者が前者に形と価値をあたえるのである。ソクラテスやカトーの徳行が目標がなく、あらゆるものの真の創造主にたいする愛と服従を考慮せず、神を知らなかったがゆえに空しく無益な行為にとどまっているように、我々の思考も思想も、信仰と神の思寵とひとつになるのではないならば、なにか形はあっても、なんの型も輝きもない、ぶざまな塊にすぎない。(7) スポンの議論には信仰がくわわって彩りと輝きを増し、これを堅牢、確固たるものにしていく。彼の議論は初心者が神を認識する道を歩むための手引きと案内をつとめることができる。それは初心の者をいくらか陶冶し、神の思寵を受けられるようにする。我々の信仰はこの思寵によって仕上がり、完成するのである。(II-12, pp. 163-165)

以上の論は脱線部の(5)をあいだにして、(1) → (2) → (3) → (4) と (1) → (6) → (7) が論証の筋道になっている。しかも両者が融合しなければ、スポン弁護は十分ではない。各部分の論証の関係はモンテーニュのような書き方で明瞭に伝わるであろうか。まず(1)から(4)の展開を検討してみよう。(4)のスポン弁護は一読したところでは(3)との関連だけからおこなわれているようであるが、よく考えれば(3)のみならず(2)も論拠にしている。これらの両方の理由にもとづく

とき効果的な弁護となる。しかしながら(4)は(2)の理由をほとんど含んでいない書き方である。その論理関係の説明はなんらおこなわれていない。(2)の内容についての記憶が(4)に反映し、読者の脳裏に(2)と(4)の関係が浮かぶままにまかせている。自然な想起以外には両者の論理関係が存在しないに等しいのは、(2)と(3)が安易な「また(aussi)」の語でつながれて、(2)と(3)と(4)がただ併記されているにすぎないからである。つぎに(2)と(3)の論が(1)との関連の上に立たなければ、(4)は本当の弁護にはならない。なぜなら(1)はスポンのような研究を非難する論拠にもなりうる意見だからである。(2)と(3)の論は(1)の考えに固執してスポンの研究を非難する偏狭さを批判しながら、同時にスポンを弁護する役割を負っている。(1)から(4)は以上のような論証の関係にもとづいた弁論のはずである。しかしながらモンテーニュは「ところで(or)」や「また」のような簡単な語でつながりながら各部分をただ並べるだけである。(4)も(3)との関連だけにもとづいたような書き振りである。内部の論理関係は記憶力による各部分の相互浸透によって読者の頭のなかに自然に生まれてくるのにまかせている。

(1) → (6) → (7)の論証の筋道についてもほぼおなじように言えよう。(6)と(7)は(1)と関連しながら新しいスポン弁護となる。(1)との関連のなかで(6)の論拠が働くとき、(7)の最後の文(「それは初心の者をいくらか陶冶し、神の思寵を受けられるようにする。我々の信仰はこの思寵によって仕上がり、完成するのである」)が説得力のある結びとなる。しかし(6)の論は「ところで(or)」という曖昧な接続詞によって並べられているだけである。しかも(6)と(1)とのあいだには、(2)の「ところで」や(3)の「また」のような安易な連結や(5)の脱線部が介在している。展開の節目が察知できないほどではないが、(6)の始めて(1)との関連が回復されるように書かれているとは言えない。(1)と(6)と(7)の論理関係は各部分についての記憶によって想起しうるとは言え、(2)から(5)までの存在によって錯綜させられやすい書き振りであることは否めない。

以上に指摘したような論理関係はすこし注意ぶかい読者ならば自然に感じとれるであろう。しかしそれはモンテーニュが巧みに論を組み立てているからではない。それは彼の別な能力に由来する。相互の関係を暗示できるほど、各部分の論が明快で力強いからである。その点では彼は後期の第3巻におけるように、自信をもってつぎのように言うことができよう。

私は内容がひとりでに分かるようになってほしい。どこで変わり、どこで結論になり、どこで始まり、どこで再びとりあげられているかなどは、内容自体が十分に示してくれる。鈍い耳やなまくらな耳のために連結や接合の言葉を挿入しながらつづりあわせたり、みずから注釈をくわえたりするまでもない。(III-9, p. 204)

しかしながら先ほどの例は読者に労を強いる曖昧さがあるのもやはり事実である。論理関係を内容自体の自然な暗示に頼る危険性が看取できるであろう。しかもそれはごく短い部分を切り取った引用である。量的な理由を考慮に入れなければならない。量の多少が記憶の残存による各部分の相互浸透を大きく左右する。普通『エッセー』の随想の脈絡ははるかに長い部分に渡っている。したがって実態をそのまま分析するためには、非常に長い引用を挿入しなければならない。しかしモンテーニュの思索に關係の論理が乏しいことは、先ほどの文章からだけでも推察できるはずである。そこで指摘した論理性の希薄さがなんら変わることなく、各部分がさらにずっと長くなった姿を想像してもらえば良い。はたして内容自体が自然に論理関係を想起させることが可能であろうか。彼がつぎのように言わざるをえないのも事実なのである。

私は偶然以外には各部分の配列を決める参謀をもたない。夢想のあらわれるがままに積み重ねてゆく。それらは雑踏をなして押しあっているときもあれば、一列にならんでだらだらと続いているときもある。(II-10, pp. 100-101)

モンテーニュの思索は關係の論理による構想や統一性が欠けているため、問題の一面々々を考察した論はただ並んでいるにすぎない嫌いがある。『エッセー』の随想は<<Aussi>>, <<D'avantage>>, <<Et puis>>, <<Outre>>, <<Au demeurant>>, <<Au reste>>などの併記の語句によって綴りあわせられるときが多い。「積み重ねる」とは實際彼の論理にふさわしい比喩である。彼は關係づけることには頓着しないで、「判断の試し」を繰り返す。それは並列のレベルを越え、判断体系へと進む動きを含んでいないがゆえに、「試し」であるとも言えよう。

モンテーニュの並列の論理は「また」の類の語に「しかし」の類がくわわって、一對の構成要素をなしている。後者は視点を換えながら「夢想」を「積み重ねてゆく」のである。したがってしばしば<<Mais>>, <<Toutefois>>, <<Si est-ce que>>などが重要な連結の

語になっている。たとえば、「しかし」の論理にもとづく典型的な展開が第1巻第1章に見られる。この章はあとに初期の章が続いているなかでただひとつ中期の作品である。モンテーニュはなんらかの意図でわざわざ巻頭に置いたにちがいない。しかし思想に注目するだけでは、この作品の個性を十分に理解できないであろう。思考法の面から把握するすべをも心得ていなければならない。すなわち「さまざまな方法によっておなじ結果に到ること」(I-1)は彼の思索を導く代表的な論理によって綴られているのである。その特徴を知るためには、展開の節をなす語句に注意するだけでよい。それらは<<Toutesfois>> → <<Or>> → <<Toutesfois>> → <<Et au contraire>> → <<Certes>> → <<Et>>である。たとえば最初の<<Toutesfois>>はつぎのような機能を果たしている。

怒って復讐の念に燃えている者が我々を意のままにできる事態が訪れたとき、その心を和らげるもっとも普通の方法は、同情と憐憫を掻きたてることである。しかしながらときとしてまったく反対の、毅然として勇敢な行動がおなじ効果を生んだ。(p. 1)

この例のように「しかし」は「まったく反対の」現象を関連づけるときでさえ、一方を否定しながら他方を肯定するものではない。ともに真実として存在することを表現しようとしている。モンテーニュの使う「しかし」は多くの場合否定の論理ではない。対照的な側面へ視線を移したとしても、事実の存在を確認する行為であるのに変わりはない。<<Et au contraire>>や、<<Mais>>の意味に近い<<Et>>もやはり相反する事実をつないでいる。二番目の<<Toutesfois>>は相反の意味を含まない例である。保留条件をくわえたり、一部を訂正したりしながら、視野の狭い断定を避けるためのものである。相反の意味を含む<<Toutesfois>>も、モンテーニュにおいては結局この用法に帰着する。彼は「しかし」の論理によって繊細に事実を識別してゆく。それは否定しながらみずからの主張を強めてゆく「しかし」ではない。視点を変化させながら事実の多様な側面へ観察を広げてゆく結果、むしろますます断定から遠ざかる。思索の発展につれて、事実の量も、そこから引き出される意味も増殖をつづけ、関係の論理による総括がますます困難になってゆく。

モンテーニュが関係の論理に拘泥しない裏には、個々の事柄にたいする強い関心がある。関係づけながら総合するためには、存在する事実を観察するだけでなく、いずれを取り、いずれを捨てるかという取捨選択に努めなければならない。さらにまた、さまざまな様相

を識別するなかにおいても、捨象すべき側面を決断しなければならない。さもなければ、事実が氾濫し、混乱を増してゆく。ところが彼はしばしば事実を追うことに夢中になり、論理関係がその中に埋没しがちである。たとえば第2巻第33章でカエサルを批判しているところを見てみよう。その展開の骨組みは実例の列挙のあいだにある次の文章によって想像できる程度のものである。

(1) これらの欲望の差異を示すためには、ユリウス・カエサルを例にあげるだけで十分であろう。というのは、彼ほど愛の快樂にふけた者はいないからである。(p. 548)

(2) しかし、同時に彼が非常に毒されていた野心という情念と競合するようになると、この好色癖はたちまち後退した。(p. 549)

(3) しかしながら、これらすべての美質もあの激しい野心によってゆがめられ、窒息させられてしまった。彼はこの情念にきわめて強く突き動かされていたので、これが彼のあらゆる行動を導き、操っていたと、たやすく主張することができる。(p. 555)

このような簡単な構成のなかに実例があふれている。(1)の文のあとでは、まず「愛の快樂にふけた」実例が列挙される。一方の野心という欲望との関連を放置し、主題がしばらくのあいだ「というのは」以下の内容にまったく移ってしまう。この点で、展開の方向にすこしとまどう読者もいるかも知れない。しかし(1)の文のあとに収録された実例の数は特別多くはない。その程度ならば必ずしも野心と関連づけながら記述しなければならないわけではない。事実にたいする好奇心が秩序を乱しはじめるのは、(2)の文のあとからである。つづいてモンテーニュはカエサルの野心についてのべはじめるが、「しかしこの人物の偉大さやすばらしい資質や、彼の著述にふくまれていない学問はほとんどまったくないほどの、あらゆる種類の知識にたいする非常な能力などを考えるとき、私はこのことをほんとうに残念に思う」(p. 550)と、カエサルの並み外れた長所に話が触れるやいなや、たちまち具体例の列挙に転じる。展開の論理的な統一性を考えるならば、その記述はあまりにも長すぎるであろう。カエサルの偉大さを強く印象づけながら、野心という狂おしい情念の害について説得力を増すためであるとしても、(1)の実例にくわえて(2)における列挙は明らかに展開の脈絡を乱している。モンテーニュは論理的な配

分や秩序を無視し、個々の事実にたいする好奇心に身をまかせている。それは展開の論理に拘束されないのである。

事実を知り、その意味を考察することが論の全体的な構成より重んじられている特徴は、上のほかにも見られる。(2)は実例の列挙が野心という主題から逸れて長くつづくだけでなく、内部にさらに脱線部をもっている。事実を捉えて判断を試してみようとする態度は、カエサルの寛容を証明する実例をつぎのような方向へ発展させる。

私の判断するところでは、以上のようなことは非常に危険な行為である。したがって、我々が苦しんでいる内戦において、彼のように祖国の旧体制を打ち倒そうとしている人たちが、先例を模倣しようとしなないのはふしぎではない。それらは尋常でない方法であって、ただカエサルの運の強さと驚くべき先見の明によってのみうまく用いるのが可能なのである。この魂の比類のない偉大さを考えるならば、勝利の女神があのかわめて不義、不正な事件においてさえ彼を振り払えなかったのも、私には許せるように思われる。(pp. 553-554)

このあとモンテーニュは「彼の寛容に話をもどすならば」(p. 554)と断りながら、実例を挙げている。(2)における列挙が(1)から(3)への展開の論理性を乱すからと言って、彼は自分の欲求を抑制したりはしない。さらにまた、そこで触発された考えを書き記すのもためらわない。つまり事実にたいする好奇心の一方には、「判断の試し」という姿勢があり、両者は不可分である。したがって「判断の試し」はおなじように展開の論理に束縛されない、個々に独立した行為である。上のような脱線的な記述には「エッセー」という思考の特徴がよくあらわれている。

1588年以降の加筆訂正でも実例の収録が論理を乱している。(2)の冒頭の、カエサルの野心に関する論はごく短いのであるが、モンテーニュはかまわず実例を挿入し、論をふたつに裂く。しかもカエサルとは別の人物について列挙する。野心と愛の快樂との関係を表す例であるとは言え、カエサルの野心について話しはじめたばかりであり、(1)の最初では「これらの欲望の差異を示すためには、ユリウス・カエサルを例にあげるだけで十分であろう」と書いていた。したがってこの加筆は話の中心人物をきわめて曖昧にしている。モンテーニュはこのような挿入も、「ふたたびカエサルの話にもどろう」(p. 730)という注意書きを最後にしさえすれば、差し支えないと思っているようだ。しか

も彼は加筆の量にもまったく頓着しない。いわゆる（C）のテキストについて私達がページを表示している版で量を比較してみるならば、（2）に訳した文が2行、これを継承する文章が8行、ところが加筆部分は27行もある。もともと10行しかなかったカエサルの野心に関する論を、2行と8行に裂き、別の人物の例を27行も挿入して彼は平気なのである。このように論理的な理由に量的な理由がくわわり、実例の追加がまったく論を破壊している。つまり事実をたいする好奇心も、「判断の試し」という個々の行為の独立性も、けっして一時的な現象ではなく、晩年にさらに強まってさえいるのである。

おなじように「エッセー」という思考においては実例の収録自体もかならずしも論理学的な関係に忠実におこなわれているわけではない。それはのちの加筆に限らず、おなじ執筆期の記述にも見られる現象である。具体例にそくしてすこし説明するならば、たとえば「I I-12, pp. 228-230」の、川蟬の巢のすばらしさについての記述は、「交際によって生じる親愛と和合」（p. 227）という部分的な主題から逸れているのみならず、量においてもその39行は後者についての27行を上回っている。この実例の収録は論理性から見ても量から見ても秩序を乱している。展開の方向にとまどう読者がいてもふしぎではない。あるいは「I I-34, p. 571」の中ほどにある、カエサルの武具および兵士の軍紀に関するふたつの実例は、いずれも3行足らずであり、展開の論理性を考えるならば、削除するか、以前の「pp. 561-562」のあたりへ組み入れるべきであろう。もちろんモンテーニュはそんな推敲をする気はなかったにちがいない。彼の実例にたいする執着は強く、しかもその論理的な構成にはあまり注意を払わない。彼にとっては事実を知り、明らかにするだけで十分なのである。今指摘したような粗放さは彼自身も自覚していた。

私はほかにもうひとつ、おなじブルタルコスの見たという犬の例をあげるのを省きたくない（なぜなら、秩序について言うならば、乱すのは十分に感じているが、私の仕事の残りすべてと同様に、これらの実例をならべる際にもこだわらないからである）。

。（I I-12, pp. 196-197）

196ページまでは実例の選択と記入は主題の秩序に従っていた。論理的な思考による統一力が働いていたと言えよう。一方この釈明後の実例の記述は論理性も統一性も失っている。そして「pp. 202-203」のあたりになると、一体どのようなところへ向か

おうとしているのか、きわめて曖昧になってくる。展開の方向が感じられるようになるのは210ページのあたりである。つまり197ページの脱線的な実例の記入からはじまって210ページまでは、思考の新しい発展の方向をさぐっている摸索の部分であると言える。実際にそのような、ゆきつもどりつの跡が認められる。したがってこの箇所の混乱は今までとはすこしちがった理由による。論理的な秩序にこだわらないのは、摸索による発展の可能性を大切にするためである。そこにひとつの重点が置かれているが故に「試し」（「エッセー」）という思考なのであり、作品のなかにその痕跡がそのまま記されているが故に『エッセー』なのである。

論理的な関係が事実のなかに埋没しがちな傾向は文体にもうかがわれる。それは随想の展開の過程のみならず、文章の作り方にも見られる特徴である。個々の事実の説明に多くの言葉が費やされ、論理が間延びするのである。問題の性質上原文のまま引用しながら、一例を考察してみよう。

(1) Or cete assiette de leur jugement, droite et inflexible, recevant tous objectz sans application et consentement, les achemine a leur ataraxie, (2) qui est une condition de vie paisible, rassise, exempte des agitations (3) que nous recevons par l'impression de l'opinion et science (4) que nous pensons avoir des choses. (5) D'ou naissent la crainte, l'avarice, l'envie, les desirs immoderés, l'ambition, l'orgueil, la superstition, l'amour de nouveleté, la rebellion, la desobeissance, l'opiniatreté, et la plus part des maux corporels. (6) Voire ils s'exemptent par la de la jalousie de leur discipline. Car ils debattent d'une bien molle facon. (I I - 12, p. 262 - 263)

展開の論理を中心に考えるならば、(1)からすぐに(6)へ導くだけで十分であろう。すくなくとも途中はこの脈絡を乱さないように短く抑えるべきである。ところがモンテーニュの文章では<<ataraxie>>についての説明が関係代名詞によって詳細になってゆく。そしてだんだんと(1)と(6)をつなぐ脈絡から遠ざかる。と同時に論点の重要度の比重も曖昧になってゆく。しかも彼はこれらの説明でもまだ満足しない。論の中心である(1)よりも長い(5)をつけ加える。(2)から(5)は内容の充実した説明ではあるが、し

かしながら展開の筋道を乱していることは否めない。たとえば(6)と(1)との論理的な関係を表す<<par la>>が容易には理解できない。これは(1)の一部の<<recevants objets sans application et consentement>>という内容と関連づけながら(6)へ導くべき語句なのであるが、(2)から(5)のためにほとんどその力を失っている。したがって<<Car>>以下の文章で(引用は最初の文のみ)、<<par la>>が差し示すのとおなじような理由を補いながら、この関連の回復を助けなければならない。この例のようにモンテーニュの文章は関係代名詞や現在分詞が多用され、部分相互の論理的な関係を示す語句はしばしば曖昧にしか機能していない。内部の個々の説明によってぼかされがちである。彼は論の明快さのために個々の事柄にたいする関心を抑制しようなどとは思っていないにちがいない。実際(2)から(5)のような、人間の知識と幸福との問題は、いつも彼の心を離れない主題である。この観点に立つならば、詳述は十分な意義と価値をもっている。

つぎに「不均衡」あるいは「局部肥大」と名づける現象についてのべよう。それは「エッセー」という思考の自由さと独立性をよくあらわす特徴である。具体例をあげながら説明しよう。たとえばつぎのように展開をまとめているところがある。

以上によって、肉体の部分についても精神の部分についても人間が自己認識に通じていないことを証明するには十分であろう。(I I-12, p p. 324-325)

この文章を読めばほとんどの人は、二種の自己認識を批判したふたつの部分はある程度の釣りあった展開になっているにちがいないと思うであろう。ところが両者は私達の常識をまったく越えた不均衡を呈している。後者については<<Or voyons ce que l'humaine raison nous a appris de soi et de l'ame>>(p. 303)から20ページにわたって論じているのに対し、前者はわずか2ページ(pp. 323-324)にすぎない。したがって、この章を冒頭から読みつづけてきた読者であろうと、均整や調和の常識的な感覚を捨て去っていなければ、展開を整理した上の文によってかえって混乱するであろう。今までのどの部分について言っているのか、かえって疑問が増すばかりであろう。『エッセー』の読者になるためにはこのような点においても柔軟で自由な精神をもたなければならない。思想を理解しようと努める以前に、実はこのような困難を乗り越える必要がある。

あるいは261ページから「以上で分かるように、哲学のみつつの主な学派のうちふたつは明白に懐疑と無知を表明している」(I I-12, p. 266)に到るまでを見てみ

よう。一方のアカデメイア派についての論証はわずか6行であるが、ピュロニスムについての説明は5ページにわたっている。先ほどの例に比べればこの程度の不均衡は紹介するまでもないかも知れないが、ただこの箇所はつぎのような考察をするのに適している。ひとつは量的な不均衡のみならず、ピュロニスムについての説明が引用文の示すような論証の目的にしたがって規整されていないことである。それは同派の人たちの生きかたにまで及んでいる。彼らの態度がモンテーニュの好みに合致しているところから推察するならば、彼は論理的な整合性よりも、折りに触れて実りある収穫を得るほうを選んだのであろう。ひとつは後期と晩年の加筆である。アカデメイア派についての6行にはまったく筆がくわえられていないのに対し、ピュロニスムについての5ページは後期と晩年におけるほとんどおなじ量の加筆によって倍増している。不均衡は後期から晩年にかけていっそう著しくなっている。しかしながらその特徴は加筆のみによって生じたのではなく、初版から存在していたのである。私達の研究主題の範囲を越えるが、おびただしい加筆が『エッセー』の性格にもたらした変化を評価しようとする人たちのために、このような事実には注意をうながしておこう。

均整や調和などについての修辭的な規範を振り払ったモンテーニュの思考の自由さは、「不均衡」という言葉では表しきれない。おおくの場合この形容では弱すぎるようにように思われる。しばしば「局部肥大」と名づけるほうがふさわしい。まず実例を示そう。

(1) ペロポネソス戦争以前にはこの学問に大きな変革はなかった。医学に權威をあたえたのはヒッポクラテスであり、そして彼が打ち立てたすべてをクリュッソッポスがくつがえした。つづいてアリストテレスの孫のエラシストラスが、クリュッソッポスの書いたこと全部をひっくりかえした。・・・[中略]・・・プリニウスの時代まではローマ人はまだ誰も医業を営もうとはしなかった。(2) それは外国人やギリシア人の仕事であった。その様はちょうど我々フランス人のあいだでは、医者がラテン語をふりまわすのに似ている。(3) というのは、ある大医学者も言っているように、我々は自分の理解できる医学はなかなか試そうとはしないし、自分の知っている薬は価値を認めないからである。もしも薬が我々に知られていないものでないならば、あるいは海のかなたやどこか遠い地方からもたらされたものでないならば、すこしも効き目がない。我々が癒瘡木やさるさ根やさるとりいばらなどを輸入している国々にも医者がいるとしたならば、珍しさと希少性と高価さによって薬をありがたがらせ

る同じ奸策を弄し、我々のキャベツやパセリを珍重するにちがいないと思いたくなる。実際、はるか遠くの国まで探し求められ、じつに長い道中の大変な危険をおかしてもたらされたものにたいして、誰が軽んじ、誰が無益であると断定できるであろうか。

(4) 昔の医学のこのような変遷以来我々の時代に到るまで、他の無数の改革があった。しかもほとんどの場合まったく全体的な変革であった。(I I - 37, pp. 622 - 624)

(1) と (4) から読みとれるように、博学な例証によって医学の有為転変を示しながら、その不確実性を論証した部分である。そして (3) が (2) の比較表現 (elle se faisoit par des estrangers et Grecs, comme elle se fait entre nous, Francois, par des Latineurs) における <<comme>> 以下の部分の局部肥大である。この例では肥大部と前後の内容との相違が明瞭であり、文脈を混乱させるほどではないが、<<comme>> 以下にもとづくこれほどの発展は文章の普通の感覚に反しているであろう。『エッセー』に慣れていない読者ならば、(4) でただちに (1) の末尾との関連にもどれるとは限らないであろう。あるいは、きまじめな読者ならば、<<Depuis ces anciennes mutations de la medecine>> の <<ces>> が (3) をどのように含んでいるのであろうか、と考えるかも知れない。この語が (3) をまったく飛び越え、(1) を指示しているにすぎないことに難なく気づくためには、モンテーニュ流の思考法と文章法を心得ていなければならない。

もちろんいっそう著しい局部肥大もめずらしくはない。一例をあげれば、それはつぎのようなところから始まる。

(1) ほかのいろいろな問題についても彼らは右に左に篩にかけ、正しかろうとまちがっていようと、とにかく格好をつけるように努めた。というのは、口をつつしみたくなるほど不可思議なものは何もないと思っていたので、しばしば空虚で脆弱な論をでっちあげざるをえない羽目になったからである。しかし彼ら自身はそれを基本理論にしようとか、なにか真理を打ち立てようとか思っていたのではなく、研究の練習としておこなったにすぎない。こういう風にも理解しなければ、あんなに優秀な、感嘆すべき人々によって生みだされた理論が実にはかなく、区々まちまちで空虚なのを、我々はどう説明すればよいであろうか。(2) 実際、たとえば、神と世界を我々の能力と我々の法によって測り、神さまが天賦の資質としてお授けくださった、ちっ

ぼけな才知を使って神性を傷つける以上にむなしい行為があるだろうか。我々の視線を神の輝かしい御座所にまで届かせられないからと言って、我々の墮落と悲惨の下界にまで神をひき降ろしたのに勝る空虚さがあるだろうか。（I I - 1 2, p p. 2 7 1 - 2 7 2）

引用文の最初の「彼ら」とは、独断哲学の一派を指し、批判的な論考は266ページからはじまっている。この脈絡において（1）から（2）への展開を読むかぎりでは、作者は彼らの空虚な理論の一例として神についての議論に言及しようとしている、と考えるのが普通であろう。そしてそこにはおのずと、「（2）は以前の主題に従属した部分であろう」、「（2）についての記述は彼ら独断論者との関連のもとにおこなわれるであろう」、「その量は以前の主題についてより少ないにちがいない」などの予想がふくまれている。ところが彼はこのような常識には頓着せず、「たとえば」とはじまった思考がみずからの豊かな可能性のままに発展してゆくに任せる。最初の主題が「p p. 266-272」において論じられているのに比べ、（2）については「p p. 272-291」にわたって展開している。後者はもはや前者に従属した部分などではなく、独断論者との関連も無視され、まったく新しい、以前より重要な主題になっている。なおまた、後期と晩年の加筆によってそれはさらに肥大している。

『エッセー』に書かれる随想はなぜうねりが多くなり、紆余曲折に満ちてくるのであろうか。この原因の根本に考えられるのは、当然作者の思考法である。私達は『エッセー』の著述の底にある個性的な思考法を「エッセー」の論理、あるいは単純に「エッセー」と呼んできた。この呼称はモンテーニュ自身の用い方にもとづいてはいるが、一方、不都合なことに、私達は「エッセー」とは何かを定義したり、全体的に説明したりすることはできない。しかし、それはやむをえないと認めていただかなければならない。随想の実態にたいする分析と考察を通じ、徐々に「エッセー」という論理を解明してゆくのが私達の研究方法だからである。この第2節における作品分析によって、つぎのような側面が明らかになったと思われる。

モンテーニュの思索は事実にたいする強い好奇心とともに動いている。そして、実例はかならずしも前後の脈絡にしたがって取捨選択されるとは限らない。興味ぶかい意味を含んでいるならば、脱線的な記人が許される。彼は事実そのものの有様に注意を奪われるところがある。しかも実例にたいする考察（「エッセー」）も、前後の文脈にはこだわらず、

自由におこなわれる。局部肥大の最初の具体例はその単純明快な姿である。医学の有為転変を示す列挙の効果を曖昧にするかも知れないから、この部分は削除すべきであろうかなどという迷いは、一切おこらなかったにちがいない。彼にとってはそれは前後に優るとも劣らない価値をもった部分であり、まさに事実こそくした「判断の試し」（「エッセー」）の成果である。「エッセー」という思考はこのような自由さと独立性をもっている。

「エッセー」は「しかし」の論理と「さらにまた」の論理を基本的な構成要素にしている。前者は対象のさまざまな側面を繊細に識別してゆく動きであり、否定しながら断定を強めてゆく論理ではない。柔軟な視点の変化によって現実の多様性と流動性をしっかりと把握するのが目標であって、一方では現象を越えるための捨象と抽象の作用を欠いている。こうして思考が数限りない事実とその種々様々な様相を追ってゆく結果、『エッセー』に書かれる随想はうねりを増してゆくのである。

「しかし」や「さらにまた」の類の、論理的には単純な語句がくりかえしあらわれるのは、モンテーニュが各部分の相互の関係を示すことにはあまり注意を払わないからである。個々の考察に精力をそそぐのみで、それぞれを関係づけ、統一しようとはせず、ただ併記し、「積み重ねて」いるにすぎないきらいがある。対象のさまざまな側面を明らかにしてゆくが、相互に関連づけながら全体的な認識をめざそうとはしない。彼は個々の考察を統一的な体系にまとめようなどとは思っていなかったにちがいない。「エッセー」という行為がきわめて独立性の強い自由さをもっているのは、逆に言えばその論理が関係づけ、総括する作用を欠いているからである。したがって作者の思索が活発になればなるほど、『エッセー』の随想はますます統一性や秩序から遠ざかってゆくと言えよう。

以上の特徴は同一の主題についてのべた部分に見られる、論理的な不安定さである。さらに広い視野でとらえるならば、ひとつの章がすこし長くなると、首尾一貫しないのみならず、主題の交代が文章や論理についての私達の常識を超越した仕方でおこなわれる。新しい主題の発展の基礎には普通なりえない些細な一部であろうと、なんらかの成果が予感されるならば、モンテーニュはそこに含まれた思索の可能性を試す。その結果私達を当惑させる展開になる。したがって主題の継承や交代の仕方から見ても、「エッセー」という思考は無秩序におちいる危険性をもっている。展開には客観的な論理の規制が弱まり、主観的な動きと変化が増してくる。それは複数の主題間の関連や全体の論証のために各部分の思考の動きを抑制する必要がないからである。思索の展開のところどころに感じられる、新しい発展の方向とその可能性を、全体の秩序や統一性のために黙殺したりはしないから

である。モンテーニュはひとつひとつの可能性を、自分の関心にそって自由に発展させてみる。具体例の分析の際に言及したように、不均衡や局部肥大が加筆によってさらに著しくなるのも、きわめて自然ななりゆきなのである。これらの現象をひきおこした強い関心はおそらく一度の記述によって消えさらなかったのであろう。彼はふたたび湧いてきた興味のままに加筆しているにすぎない。したがって、自分の趣味や感情や思想に忠実に思索を発展させる自由を獲得するために、「エッセー」という方針があったとも言えよう。それは中期に到って主観性や心理性を帯びてくる。とすれば私達に浮かんでくるのは、執筆の動機を説明した第1巻第8章である。そこでは『エッセー』によって「心のなかの魑魅魍魎」、つまりみずからの「夢想」や「妄想」を記すと宣言していた。あわせて、初期の作品の実態とはおよそ似つかわしくないこの宣言についての私達の解釈を思い出していただきたい。ようやくモンテーニュは第8章にひそんでいた欲求と決意にふさわしい思考と記述の様式に到達したのである。作品を書く行為によってみずからの思考を伝統的な常識の緊縛から解き放ち、活力と豊饒性を発揮させるような「エッセー」の方法を身につけてきたのである。

モンテーニュの論理の性格はもちろん彼の気質や知性の傾向や種々の価値観の融合の産物である。最後に、この関連のいくつかを考えてみよう。まず論理ともっとも密接なのは、いかに哲学するかという哲学観である。彼はキケロの哲学、とくに道徳哲学を評価しながらも、書き方に不満を感じてつぎのように言う。

ただすこしでも賢くなろうとしているだけであって、学者になりたいとは思わない私にとっては、あのようなアリストテレス風の、論理学的な構成は具合がわるい。すぐに要点に進んでほしい。死とは何か、快樂とは何か、私はこんなことは十分にわかっている。そんな分析に暇どってほしくない。最初から正当で確固とした道理を説き、それらの攻撃に堪えるすべを教えていただきたい。そのためには文法家風の緻密さや言葉と論の巧妙な組み立てなどは役に立たない。(II-10, p. 111)

賢くなるのが目的であるモンテーニュの哲学観から評価するならば、「アリストテレス風の、論理学的な構成」は無益な苦勞である。「言葉と論の巧妙な組み立て」につとめたとしても、認識がより進歩するわけでもなければ、思想がより強力になるわけでもない。大切なのはそのような作業をおこなう知能ではなく、たとえば「正当で確固とした道理」

を捉える力である。そのためには、彼がくりかえし提唱しているように、判断力を磨かなければならない。『エッセー』においても、判断を試す小部分が重要な基本単位になっている。随想の価値の根源は判断力が発揮される部分々々にあり、それぞれは「判断の試し」（「エッセー」）として独立的な意義を付与されている。どのようにそれらを配列し、組み立てるかなどは些細なことである。いかに論理的に構成しようとも、それだけ真実に近づくわけではない。彼は個々の判断を総合する思索が新しい認識や真理をもたらすとは思っていないにちがいない。

モンテーニュの哲学観が比較的くわしく披瀝されているのは「子供の教育について」（I-26）である。それは大人のための哲学ではないが、すでに指摘したように、この章の論は彼自身について多くを告げている。目下の問題に関してならば、つぎのように要約できる箇所（pp. 211-216）に注目すべきであろう。

一、哲学を学ぶ者を気むずかしい憂鬱家にするのは、バロッコとかバラリプトンであって、哲学そのものではない。（p. 214）

一、弁証法のような面倒な議論はすべて捨てよ。こんなものは我々の生きる役には立たない。哲学の単純な理論を選べ。（pp. 214-215）

一、アレクサンドロスにたいするアリストテレスの教育に賛成する。彼は三段論法の立て方や幾何学の原理などを学ばせるのにはあまり時間をかけないで、勇気や節制についてりっぱな教訓をあたえることに力をそそいだ。（pp. 215-216）

これらの意見と比べるならば、「アリストテレス風の、論理的な構成」とか「文法家風の緻密さや言葉と論の巧妙な組み立て」などにたいする批判が、ただキケロにのみ向けられているのではないのが分かる。論理学や弁証法にたいする不信とモンテーニュの哲学観とは密接に関連している。上記の箇所では、バロッコとバラリプトンというスコラの論理学の術語が本当の哲学と対比させられていた。「エッセー」という論理も、スコラ哲学にたいするルネサンス人としての批判から生まれたにちがいない。それは客観性と抽象性に重点をおいた論理の拘束を一度振り払い、事実と現実こそくし、しかも自己の個性と人間性を大切にしながら思索をすすめようとする。モンテーニュのそのような欲求と探求のなかで磨きをかけられ、成熟してゆく思考法である。

論理的な整合性と統一性を重んじる認識方法にたいする不信は、多様性と流動性の感情

を背景にした、ひとつの認識論としても表明されている。私達は初期についてすでにおなじような指摘をした。人間は「みんな、片々たる小片でできており、その組織はきわめてまちまちで、形も定まらず、各部分が瞬間々々のなりゆきで勝手に動いている」（II-1, p. 9）。したがって人間を知ろうとすれば、「行為とおなじ数だけ個々別々の判断が必要である」（II-1, p. 4）。「利口な人たちがこれらの部分をつなぎ合わせようと苦労しているのをときどき見ると、私には奇妙に感じられる」（II-1, p. 2）。もっとも確実な認識の方法は「行動と周囲の状況を関連づけて理解するにとどめ、それ以上の詮索をしたり、それ以上の結論を導きだそうとしたりしないことである」（II-1, pp. 4-5）。モンテーニュはなにごとにおいても「主題を全体的に、かつ底の底まで論じるつもりはない」（I-50, p. 461）。「それぞれがもっている千の顔のなかから、自分の気に入ったのをとりあげる」（I-50, p. 461）。そして判断を試してみる。全体を関係づけた総合的な認識などは不可能であると思われるがゆえに、彼は哲学の中心に判断力を置くのである。

おなじような感情と思想は、なぜかその表明の量は初期より減じてはいるが、中期においても強まりこそすれ弱まってはいないであろう。「理性が経験以外にはほとんど根拠をもたないにもかかわらず、人間界の事件の多様性がありとあらゆる姿をした、無限の実例を我々に提示する」（II-17, p. 463）や、「たくさんの面をもつ物事を一挙に判断したがるのは狂気の沙汰である」（II-32, p. 544）などの言葉が示すように、中期においてもモンテーニュの目に映るのは、全体的な認識を期待できるような世界ではない。そこでは種々様々な相貌であらわれる無限の実例がつねに統一的な判断に逆らっている。多様性と流動性の現実固定した一般法則化を拒否している。あるいは初版の『エッセー』の末尾を飾る章で長々と展開されている医学批判は、すこし角度を変えて読めば、一種の認識批判として理解できるであろう。なぜならばこの章がつぎのように締めくくられているのみならず、

私は自分と反対の思想をすこしも憎まない。他人の判断が自分と一致しないのを見て腹をたてたり、意見が異なるからと言って人との交際が我慢できなくなったりはしない。それどころか、多種多様こそ自然のとりもっても一般的な姿であるので、我々の考え方や思想の一致を見るほうがはるかに珍しく、はるかにまれであると思っている。人間の顔と同様に、すべてがぴったりと同じである意見が世界にふたつとあった

ためしはない。そのもっとも固有の性質がすなわち多様と不一致である。(11-37, pp. 652-653)

モンテーニュの思想と医学にはつぎのような共通性があるからである。

医学は実例と経験によって成り立つ。私の意見もそうである。(同、p. 609)

したがって実験を重んじながら研究をすすめる医学者の姿は、事実にもとづいて思索する認識者の無限の世界を思わせる。

自分のまわりの数限りない物体や植物や動物や鉱物をながめている男を、私は想像する。私には彼の試みをどこから始めさせたらよいのか分からない。彼の最初の思いつきがヘラジカの角にとびかかり、きわめてあやふやで安易であろうとも信頼を置くべきであるという結果が得られたとしても、彼はさらに第2の行動においても以前とおなじように困惑するであろう。じつに多くの病気とじつに多くの状況を検討しなければならぬがゆえに、実験が完成する地点の確実さに到達する以前に、人間の認識能力のほうで錯乱してしまうであろう。数えきれない物のなかからこの角が良いと発見し、数えきれない病気のなかではてんかんに効き、多くの体質のなかでは胆汁質に良く、多くの季節のなかでは冬、多くの国民のなかではフランス人、多くの年齢のなかでは老人、天体の多くの変化のなかでは金星と土星の会合するとき、多くの身体の部分のなかでは指に良いなどと発見するまでには、これらすべては推理にも推察にも先例にも天啓にも導かれず、ただ偶然のままにおこなっているのであるから、申し分なく巧妙で、方法的で、秩序だった偶然の重なりが必要であろう。しかも、治癒したとしても、病気が終息期に達したからではないと断言できるであろうか。偶然の結果かも知れないし、その日食べたか、飲んだか、触れたかした何か別の物の作用や、あるいはおばあさんのお祈りのお陰かも知れない。さらにまた、その実験が完全であったとしても、何度くりかえされたであろうか。そこからひとつの法則を引き出すために、幸運と偶然の長い連鎖がしっかりと把握されたであろうか。(同、pp. 644-645)

確実な認識に到達するために辿らなければならない、気の遠くなるような道程を描いて、

モンテーニュは医学批判を終えている。その描写は読みようによっては、「実験」は「思いつき」でおこなうのではなく、「先例」を参考にして「推理」をはたらかせながら、「巧妙で、方法的で、秩序だった」ものにしなければならない。そして「幸運と偶然の長い連鎖をしっかりと把握し」、「そこからひとつの法則を引き出す」べきである、と主張しているようにも思われる。しかし、そのように行間を読むのは、近代科学の確立後の思想のほうに引き寄せすぎであろう。逆にモンテーニュは上のような状況を自覚することによって、論理的な整合性と統一性のある思考が世界の構造や原理を認識させるという幻想を捨てたのである。それが歴史的な位置における彼の選択であった。

しかしながら、相互に関係づける論理を軽視し、「しかし」や「また」の論理によって「判断の試し」をくりかえすだけならば、現象の多様性と流動性のなかを流れてゆくにも等しいのではないだろうか。関係の論理によって個々の判断を総括するとき、私達は現象のはかなさを乗り越えることができる。完全に世界の全体ではないとしても、すくなくともその主要な側面を理解したという確信が生じ、未来の新しい事態に対処しうる原則のいくらかを知ったという自信が湧いてくる。ところがモンテーニュの思考は活発になればなるほど、現実の多様性と流動性の襲のなかに入りこみ、その複雑さにかからまれる嫌がある。そこでつぎのような不安定さに悩まなければならない。

公にするときわめて都合の悪いつぎのような欠点も、忘れずに記しておきたい。それは優柔不断という、世事の処理にたいへん不向きな弱点である。私はあいまいな企てにおいて決心するすべを知らない。人間界の物事というのは、どんな方面に傾こうとも、その立場を確信させる現象がたつぷりとあらわれるように思われるので、私はどちらを向いても、いつも、そこにとどまるに足る十分な理由ともっともらしい根拠を見いだす。それで私は事態が切迫するまで、疑惑のままに選択の自由を残しておく。いや本当のところを白状するならば、そのときでさえ、たいていは俗に言うとおりの羽毛を風に飛ばせ、運命に身をまかせる。つまり、ほんの軽微な事情や傾きが私を運び去る。

心が疑惑のもとにあるときは、右に傾くのも左に傾くのも、わずかな重みで決まる。

ほとんどの場合私の不確実な判断は、どちらのほうへもひとしく揺れ動くので、くじ

やさいころの決定に頼りたくなる。そして《くじはマッティアスに当たった》のように、神聖な歴史の伝える実例のなかにさえ、疑わしい事柄の決定を運命と偶然にゆだねる習慣のあることに気づいては、我々人間の無力さにふかい感慨をおぼえる。(I 1-17, pp. 461-462)

個々の判断を相互に突き合わせ、吟味し、あるいは複数の判断と他の同様のグループとを比較したりしながら、抽象的な認識へすすんでゆく思考法をもたないならば、いくら繊細で、的確な判断をくだしつづけようと、私達は思想の確実性や安定性を感じて安心することはできないであろう。これらの感覚はたいていは判断の正確さではなく、因果関係の論理と体系に由来する。個々の判断を論理的な整合性のある体系にまとめあげる抽象化を嫌うモンテーニュが、みずからの思考に確実性や安定性を感じられなかったとしても当然であろう。彼の論理はけっきょく多様性と流動性を追ってゆくだけである。それらを越えたレベルへすすむ、抽象的な普遍化の動きにとぼしい。したがって、判断力がより鋭敏になり、思考がより活発になるにつれ、彼の思想はますます世界の多様性と流動性を含みこみながら、ますます堅牢な構築性から遠ざかってゆく。

それでは「エッセー」という思考法や論理は哲学の方法として失敗だったのであろうか。もし哲学とは抽象化と客観化と普遍化の行為にもとづく体系化でなければならないとするならば、そのように言えるかも知れない。しかし、すでに言及したように、モンテーニュの思索の目的は「ただ賢くなること」である。彼が世界の多様性と流動性を追究するのは、底にひそむ原理を発見し、普遍的な、固定した認識を引き出すためではない。その実相をしっかりと自覚するなかで人生を生きる知恵を身につけるためである。それが彼にとっての哲学であり、「エッセー」はこの目的にそった思考法である。話を元にもどして循環させるようであるが、この点はやはり忘れてはならない。したがって、彼の思想は一方では論理的な思考や体系的な認識のもつ確実性や安定性を欠いた危うさを示すときもあるが、一方では世界の多様性と流動性をしっかりと見つめた柔軟さと多少のことではたじろがない強靱さがある。たとえば「I 1-12, pp. 347-351」のあたりを読んでみよう。かつての天動説と正反対のコペルニクスの説があらわれた。しかしながら、前者が過去三千年のあいだ信じられ、また千年後には前者も後者もともに新しい説によって覆されないとは限らないのと思うならば、どちらの説が正しいかなどというのは頭を悩ますほどの問題ではない。たくさんの学説の変遷を見るならば、アリストテレスの原理であろうと永遠

に不変である特権をもっているわけではない。昔の医学は人間を殺してきただけだというパラケルススの批判がいかにも正当であろうと、彼の実験のために我々の命を提供するのは賢明ではない。新大陸の発見が教えるのは、プトレマイオスが理性にもとづいてまちがったのであるならば、今の地理学者を盲信するのも愚かであるという真実にすぎない。モンテーニュはこのようにして有為転変にまどわされない態度をつくってゆく。

あるいはまた、つぎのように描きながら、人間の思考のおちいりやすい偏狭さと硬直性を論じ、多様性と流動性という世界の広大さと深い奥行のなかで判断をくださるべきことを教える。

村でぶどうが霜にやられると、私の司祭は人類にたいする神の怒りを弁じたて、すでに食人種はそのため喉がからからになって苦しんでいると推断する。我々の内乱を見て誰も彼もが「この世界がひっくりかえる」、「最後の審判の日がもう我々の首筋まで迫っている」と叫ぶばかりで、今までにもっとひどい惨禍がたくさんあったことや、世界の一万という土地であい変わらず楽しい生活が送られていることに気づいていない。私に言わせれば、その放埒、無法な本性のわりには、目にする戦がこんなに穏やかなのに驚くほどだ。頭の上に雹が降ってくると、人間は半球がそっくり雷雨と嵐のなかにあるように思う。また例のサボワ公国の男は、「あのフランス王の馬鹿も、自分の幸運をちゃんと利用するすべを知っていたなら、うちの公爵様の給仕頭ぐらいにはなれる男だったのに」と言ったそうである。彼の想像力では自分の主人より高貴な権威をまったく考えられなかったのである。(I-26, pp. 206-207)

『エッセー』の読者は随所で以上の二例のような知恵の輝きに出会えるはずである。「エッセー」という思考法は、世界の多様性と流動性のままに動きながら、汲みとった知恵を処々に結実させてゆく運動である。モンテーニュがそれ以上を望まなかったとしても、なんらおかしくはない。上の文章のあとに、「我々はみんな知らず知らずのうちにこのような誤りにおちいつている。これは重大な結果と害悪をもたらす謬見である」(p. 157)と晩年に加筆しているように、それだけで大きな意味のある企てなのである。抽象化し、客観化した認識や知識の獲得がかならずしも人生を生きる知恵を増すとはかぎらないのに比べ、「エッセー」は事実こそくし、その多様性と流動性ととも揺れ動きながら、すこしでもより賢くなろうとする行為である。結局それはやはり、客観化や普遍化の過剰による

スコラの形骸化ののちに新しい道を摸索しなければならなかった歴史状況とユマニスト・モンテーニュの人間中心主義と現実中心主義を強く反映している。

第2章第2節（注）

（1）私達が以下のような意見を最初に発表したのは、「モンテーニュの思索の歩み——『エッセー』の構造とその論理に見る——（その十）」（追手門学院大学文学部紀要第10号、1976年12月刊行）においてであった。その後フロイド・グレーがおなじような見解を出発点にした著作をあらわしている（II-A-30, とくにその序文を参照）。

3. 自己描写

中期において自己描写は『エッセー』のもっとも顕著な特色になる。モンテーニュの執着はきわめて強く、作品のなかでもたびたび弁明をくりかえしている。彼は今や『エッセー』を自己描写の書にしようと思っているようである。もちろんこの表現方法は中期に突然あらわれた現象ではない。すでに初期の章にその萌芽があった。私達は初期の自己描写についてふたつの性格を指摘した。ひとつは事実学ぶ思索から生まれたものである。彼は古今の書物の示す実例を手本にしながら、自己の見聞のなかから事実を抽出する力を養った。そしてさらに、注意ぶかくみずからを観察するならば、もっとも有意義な自己自身という事実の領域が開けてくるのを知った。ひとつは無位無官の無聊の日々を送るなかでますます希薄になってゆく存在感が原因である。思想を媒介にした自己表現に飽き足りないモンテーニュは、直接的な記述で作品のなかに自分の姿を固着させることによって、希薄な存在感を補填しようとした。つまり前者は自己描写の認識的な起源であり、後者は心理的な起源である。『エッセー』における自己描写の進化は、それぞれの発展であるのみならず、両者の調和、統一を求める運動でもある。したがってその認識的な側面と心理的な側面は中期においても重要な視点になる。これらの分裂と融合の有様に注意することが中期における進化の考察に通じるはずである。

自己描写は『エッセー』のなかで処々に孤立した一角をなしているのではない。随想の流れのなかであらわれ、その出現にはなんらかの理由がひそんでいる。それは観察と思索のモンテーニュ的なリズムの一環でもある。私達の基本的な研究方法にしたがって、随想の構造と論理のなかにおいて自己描写が占める位置と果たす機能を分析するならば、自他の対比が頻繁に見られるのに気づくであろう。しばしば自己描写は他者と対峙した構造をともなっている。自己について語ることが他者を批判する方向へ発展する例や、他者の観察から自己描写が生まれる例が数多く見られる。たとえば、「自」→「他」の展開の一例をあげるならば、

そして、私自身の生来の能力だけを使って、頭に浮かぶすべてを手あたりしだいに語ろうとしているとき、つい最近もプルタルコスが想像力について論じていたように、りっぱな著者たちが思いがけなく、たまたま私とおなじ主題を扱っているのに出会うと、これらの人たちに比べればじつに脆弱で貧弱で、まったく鈍重で活気がないのに

気づき、みずからにたいする憐憫と輕蔑の情が湧いてきます。しかしながら得意に思っている点としては、私の意見は光栄にも彼らと一致しており、ほかの人たちとちがって私はすくなくとも彼らとのなはだしい相違を認識しています。そして、それにもかかわらず、自分の生み出したとおりではこんなに脆弱で低劣な考えを、好きなように走らせてやり、この比較によって明らかになった欠点を塗り隠したり、繕ったりはいたしません。——→というのは、そんなことをするならば、我々の時代の無分別な作家たちのようにお化けをつくり出すことになるでしょう。彼らは自分たちのつまらない本のなかに古代の著者たちの文章をそのままちりばめながら、盗品で名譽を高めようとしています。そして、それが逆の結果になっています。なぜならば、はなはだしい光彩の相違が彼ら自身のものを青白く、さえない、じつに醜い姿に見せるので、得をするよりもはるかに多く損をしています。（矢印は筆者。以下同様）（I-26, pp. 187-189）

つづいて先日読んだ本の例をあげながら、他者にたいする批判が繼承されている。つぎに「他」——→「自」への変化の一例をあげておこう。

他の箇所でも言ったとおり、我々の能力を基準にして信じられるか信じられないかによって、ありうるかありえないかを判断してはならない。さらにまた、自分のできないことは他人についてなかなか信じようとししないのも、大きな欠点なのであるが、ほとんどの人がこの過ちを犯している。——→私は一部の古代人の魂を、自分のに比べればはるか天のかなたに仰ぎ見ている。そして、彼らについてゆくのは私には不可能であるとはっきり認めてはいるが、彼らをこんなに高め、高尚にする原動力を知ろうとして止まない。私は彼らの偉大さに感嘆する。非常に美しい跳躍に愛着を感じる。力は及ばないとしても、すくなくとも私の判断力は心から傾倒する。（II-32, pp. 540-541）

以上の二例のように、自己を描くなかで他者を見つめる視点が定まり、他者の批判的觀察がおこなわれる。逆に、他者について語ることは他者と異なる自己の個性を確認したり、他者と対峙しながら自己の態度を明確にする行為へ変わってゆく。ちなみに《Moy》《De moy》《Pour moy》《Quant a moy》などの表現が中期には

多くなっているようであるが、それはこのような思考法と緊張関係を背景にしながら自己描写が発展したからであろう。

自己描写は自他のあいだを往来する観察と認識のリズムの一環なのであり、「自」と「他」の対峙の構造が反復してつづくときもある。つまり「自」→「他」や「他」→「自」の対比的転進のみならず、「自」→「他」→「自」→「他」と自他のあいだを往来する思考がそのまま随想の展開になっている(1)。自己を語ることは今やモンテーニュの思索の流れと一体になっているのである。しかもこの対峙の構造は、自己描写が自己の世界に閉塞した観察や思考に墮落するのを防いでいる。この構造を通じてたえず他者の世界と緊密な関係を保ちながら、自己を世界の広がりの中に置きなおし、あるいは逆に、遠く広大な世界についての思索を身近の経験についての反省と結びつけるのである。

一方このような自己描写に手前味噌の自己主張を感じる人もいるかも知れない。特に上のように対峙の部分だけを抜きだして読むときには、なおさらその印象が強くなるであろう。モンテーニュの崇拜者ならいざ知らず、普通の読者がどこかにそのような臭気を感じたとしてもふしぎではない。『エッセー』の自己描写はすべて冷静で客観的な自己観察であるわけではない。そこには強い自我意識が絡んでいる。『エッセー』で自分自身を描くことは、ただ自己にのみ目をそそいだ内省ではなく、他者と対峙するなかで自己を見つめ、自他の対比によってみずからの長所や短所を鮮明にさせながら、個性的な自我を刻みだしてゆく行為でもある。すこし皮肉な見方をするならば、自己描写にはつねに手前味噌めいたところを感じられるであろう。しかし観察と思索のなかで他者と対峙する緊張なくして、どうして確固たる自我が形成されよう。なんら自我の臭気のない自己描写なぞむしろ無意味であろう。すでに初期から「孤独について」(I-39)でも言っているように、無位無官の生活を享受するためには、「本当にただひとりで悠々と生きてゆけるようになり」(p. 364)、「自己自身を保っていさえすれば、何も失ったことにはならない」(p. 365)のような強い自我を確立しなければならない。「自」と「他」の対峙の構造の上に立つ自己描写は、モンテーニュがどの程度意識的であったかは別にして、このような自我の形成を目指す意味を含んでおり、そのような願望とともに発展したと言えよう。この側面を見落とすならば、彼が『エッセー』を書く意味の重要なひとつに理解がおよばないであろう。

この構造における他者はかならずしも同時代の人に限る必要はない。「他」は思想的研

鑽の対象である、古代ギリシア・ローマの哲学者や思想にも置き換えられる。自己描写はこのような「他」と対峙しているときもある(2)。この文化的な対峙によってそれは思想的な自己形成の方法ともなる。古人の思想がみずからの体験との具体的な照合のなかで咀嚼され、自分の生きる糧として摂取されるようになる。つぎの例によって自己描写のこのような効用を想像できるであろう。この章は冒頭で『エッセー』に言及したのち、持病の腎臓結石の苦しみを中心にした自己描写がつづいている。引用が長くなるのを避けるためこの部分は省略するが、あとの展開はつぎのようになっている。

(1) さらに私は、「平然とした顔で、落ち着いた重々しい態度を持しながら苦しみに堪えよ」と命じる訓戒については、形式的で無益であるといつも思っていた。哲学は核心と本質と実質のみを目指すべきはずであるのに、なぜそのような空しい、うわべの様子にこだわろうとするのであろうか。それではまるで哲学は人に芝居の所作を教えるようなものではないか。我々が自然に、余儀なく受ける動きや変化を押しとどめることが、その管轄の内だと言うのだろうか。それならば哲学はソクラテスに恋や恥のために赤くなったり、拳骨が振り上げられて瞬いたり、高熱で震えて汗をかいたりするのを止めさせてみるがよい。自由に思いのままになる詩の描写も、完全無欠な人間に描こうとする人物にさえ涙を禁じてはいない。

もしもそんなに苦しいなら、手をかみ、口をかみ、たえざる涙でほほをぬらす
よい。

こんな役目は我々の態度や顔つきを正すのを商売にしている人たちに任すべきであろう。哲学は教化を引き受けた我々の悟性の指導に専念すべきである。その歩みを整え、その手綱をとり、みずからの任務を果たすようにしてやろう。痛みの攻撃にたいしては、我々の魂が自分を見失わず、平生の歩みをつづけ、見苦しく足下にひれ伏すことなく苦痛と戦い、苦痛を堪え忍び、戦闘に気が高ぶり興奮しようとも、動転したり打ちのめされたりしないように導いてやろう。(2) こんなに激しい事態において、非常に整った足取りを要求するのは酷である。実質が良ければ、顔つきが良かろうと悪かろうとおなじことだ。我々の肝心要の思考と行動が平生のとおりであれば十分だ。肉体のほうは、うめいて楽になるなら、そうすればよい。もがくのがお気にいりなら、

好きなように動きまわり、飛びまわれればよい。ある医者たちが妊婦の分娩の助けになると言っているように、激しく声を出せばいくらでも結石の痛みが消え去り、苦しみをまぎらすように思えるならば、力のかぎり叫ぶがよい。我々にはたつぷりと病気の苦勞があり、思弁によってあらたな苦勞をつけ加えるにはおよばない。以上のことを私が言ったのは、普通見かけるように、この病気の苦痛に襲われて叫んだりもがいたりする人たちを弁護するためである。(3)というの、私としては、今までのところもう少しましな顔で堪えてきたからである。しかし私はこんなうわべの品位をたもつために骨を折ったりはしない。そんな美点はほとんど評価しない。外見は病気の好きなようにさせてやる。しかしながら私の場合、苦痛が普通の人ほど激しくないからであろうか、それともより精神力を發揮するからであろうか、鋭い痛みにも襲われたときにはうめいたり、いらだったりはするが、打ちひしがれたり、気の狂ったようになつたりはしない。そして激しい苦痛のあいまには、平生の状態にすぐにもどり、余波も動揺もなく話したり、笑ったり、学んだりする。というの私の魂は、肉体に感じられる攻撃のないときには、全然不安にならないからである。これはきっと思索によってこのような事態の心構えをしてきた努力のおかげであろう。(11-37, p. 603-606)

モンテーニュは(1)の最初で言及しているような哲学をずっと拒否してきたわけではない。初期の章にはしばしばストイシズムの濃厚な思想が見られる。しかし一方心のどこかでは「形式的で無益であるといつも思っていた」のかも知れない。したがって彼には再検討してみる必要があったにちがいない。上記の箇所では自己描写によってそれが実現されている。引用以前で持病に触れ、苦しい体験を語ることが、自分の経験のなかで(1)のような哲学を吟味する方向へ発展する。そして(2)における日常の実例の観察をとおして、(3)のような自己の態度が定まる。それはもはや(1)の厳しい哲学とも(2)の一般の人たちともちがった立場である。「うわべの品位をたもつために骨を折る」ような無理をせず、さりとして「思索によってこのような事態の心構えをする」のも怠らない境地である。モンテーニュは文化的な対峙のもとで自己自身を描くことによってみずからのありかたをはっきりと自覚したのである。(1)から(3)の展開には闘病の体験と哲学的な反省の結びついた言葉が随所に見られる。このように自己描写は哲学を自己の経験のレベルにまで引き降ろし、古人の思想を自分の人生から捉えなおすように促したにちがい

ない。それは一方で自分という人間を見つめながら思想を咀嚼し、みずからの個性にそくして摂取する効果的な方法であったにちがいない。しかしながらそのような効果は必然的に自己描写に伴うわけではない。自己について語るなかから自然に生じるものでもない。彼の自己描写が「自」と「他」の文化的な対峙の構造を含んでいたからである。

この構造は初期に溯ることができる。それは読書実例に埋まった作品のなかにも認められる。読書で出会った実例を解釈し、判断を試みる練習が、他人の意見と自分の意見を対比する形式に支えられている場合がある。たとえばひとつの実例とプルタルコス of 解釈を紹介したあと、モンテーニュは自分自身の解釈と立証例を書きくわえてみる（II-4参照）。みずからの意見を付加する試みが著作による判断力の練磨の効果を増している。あるいは、古人の書を読むことを、「我々の頭脳を他人の頭脳とこすりあわせて磨く」（I-26, p. 199）鍛練へ発展させている。このような初期の例はひとつの実例に関する他人の解釈と自分の解釈のささやかな対比にすぎない。しかしながらそこにも上記の自己描写のような自他の対峙がある。このような緊張関係を含んだ思索が『エッセー』を自己の存在の代償物にしようとする自我意識と結びついたとき、「自」と「他」の対峙の構造をもつ自己描写が生まれてきてもふしぎではない。後者はおなじ構造の上に進展した進化であると言えよう。

私達が実際に『エッセー』を読みながら随想の流れに従っているときには、自己描写の手前味噌のような臭気があまり感じられないとするならば、それはモンテーニュが一方では自己自身をひとつの事実例として眺める訓練を積んでいるからであろう。初期において彼は読書実例を手本にしながらすこしずつ事実の領域を開拓していった。読書実例にくわえてみずからの見聞した事実を書き添える試みを通じて、彼はついに自己自身という事実の層を発見した。その結果思索の展開を支える事実例として自己描写があらわれるようになったのである。

（1）理解力や判断力や総じて我々の魂の機能が、肉体の状態や絶えず生じている変化などから影響をうけるのは確かである。（2）病気の時より健康なときのほうが精神はいっそう俊敏で、記憶力はいっそうすばやく、思考はいっそう活発なはずである。我々の魂が眼前にあらわれるものごとを受け入れるとき、喜びと陽気は悲哀と憂愁とはまったくちがった外貌を付与しないであろうか。カトルスやサッフォの詩が活気にあふれ、燃えている青年にたいするのとおなじように、強欲な、しかめっ面の

老人にもほほえみかけるであろうか。(3)わが国の法廷には、なぜか機嫌がよく、穏やかな優しい気分になっている裁判官に出会った罪人について言われる言葉で、「この幸運に浴せ」という慣用句がある。というのは、たしかに判決はときにはより制裁のほうに傾いて、きびしく厳格になり、あるときはより情状酌量のほうに傾いて、優しくゆるくなるからである。自分の家から痛風の痛みとか嫉妬とか下男の盗みとかをひきずってきている裁判官がいるならば、魂全体が憤怒を吸いこみ、憤怒に染まっているはずであるから、判決がこの傾向にそって悪くなるのは疑いようがない。(4)大気や晴天さえも我々になんらかの変化をもたらす。それはキケロにある、つぎのギリシアの詩の言うとおりでである。

人の心は、父なるユピテルが地上へそそぐ豊かな太陽光線につれて変わる。

我々の判断力を動転させるのは、熱病や飲み物や大事件ばかりではない。ほんの些細なものごとからも影響をうける。絶えまない発熱が魂を混乱させることがありうるならば、我々には感じられなくとも、三日熱もその作用と力におうじたなんらかの変化をもたらすのは疑いようがない。卒中が知性の働きをまどろませ、まったく消し去るのならば、風邪によってそれが眩惑させられるのもまちがいない。・・・[中略]・・・(5) 仔細に自分を観察し、ほかにはまったくすることのない人間でもあるかのように、たえず自分に目をそそいでいる私は、

凍れる大熊座のもとではどの王が恐れられ、何がティリダテス王を不安にしているかなどにはまったく無頓着に。

自分のなかに見いだす空虚さと弱さについてはなかなか言う気になれない。私の足はきわめて不安定で落ち着きがなく、実によくよめきやすく、すぐに動き、ゆらめく。視力はまったく乱れており、空腹のときと食事のあとでは自分が別人のように見える。健康がすぐれ、晴れた明るい日であれば愛想がよくなるが、耳の具合でも悪ければたちまちしかめっ面の、不機嫌な、寄りつけない人間になる。あるときは何でもやる気になるかと思えば、あるときは何もする気にならない。今楽しいことがすぐに苦痛に変わる。本を手にとって、ある箇所ですばらしい優美を感じ、魂が魅惑されたとして

も、別の日に読みなおすならば、いくらその箇所をあちらこちらから眺めなおしても、どんなにこねたり、いじくったりしても何にもならない。それは私にとって見知らぬ不格好な塊にすぎない。(I I-12, pp. 337-342)

すでに述べたように、事実にもとづいて思索をすすめるのが初期以来のモンテーニユの基本的な態度である。上の(2)から(5)には、その事実の質と記述の仕方がうかがわれる。そこでは自己描写は読書実例や見聞実例とおなじように、思索の展開を支え、思想の蓋然性を高める事実例として働いている。あたかも究極の事実でもあるかのように、上の論は自己描写とともに一段落がついている。(3)などの経験的な外界の観察と実例の抽出もさることながら、(5)の自己観察と描写が心に浸透する深い真実味を付与していると言えよう。モンテーニユは読書実例や見聞実例よりさらに有意義な事実として自己自身を見つめる。そしてその内省の結果をおなじように客観的な認識行為のなかに組み入れる。そこにはもはや手前味噌のような臭気はない。一事実例として自己を眺める訓練がそのような墮落を防ぎ、他の分野と変わらない客観性を獲得させている。

しかしながら、その内部にはもちろん彼の自我がひそんでいる。自己描写はつねに一事実例としての分を守っているわけではない。背後には、そのような抑制を振り払った自由な自己表出を求めている自我が隠れている。たとえば、一例を提供するための自己自身への言及がすすむにつれ、『エッセー』を存在の代償物にしようとする自我の欲求がだんだんと表にあらわれ、一事実例の範囲を越えた純粹な自己描写に変わってゆくときがある。たとえば、「I-26, pp. 232-242」を読んでみよう。生まれ落ちて以来彼がラテン語で育てられたという、有名な話ではじまっている部分である。この特異な体験の反省と紹介は、子供の教育方法という章の主題からして異論の余地のない重要性をもっている。しかしながらその自己描写はだんだんと主題との関連を失い、教育論の論旨を乱すようになる。その結果、教育論としてまとめるための最後の8行が脈絡から浮いた不釣り合いな文章になっている。いかにも取って付けたようで、それらのあるのがむしろ異様に感じられるであろう。直接的な自己表現をもとめる欲求が自己描写を一事実例の範囲を越えて発展させたからである。

初期の「実習について」の章の結論は事実例としての自己描写に関連する自覚をのべていたが、それには保留条件がついていた。つまり「死に慣れるためには死に近づくしかない」という「教訓を汲みとらなかつたならば」、「自己を注意ぶかく観察」した分析と描

写も「あまり意味がない」のである。自己描写は教訓を探求する思索に従属し、その発見によって存在価値をあたえられていた。ところが今指摘した例はもはやこのような狭い自己描写観を逸脱している。作品のなかで直接自己を表現し、そこに自己の姿を記し留めようとする自我意識が、自己描写にたいする事実例としての論理的な抑制に抵抗し、その枠を打ち破っている。事実の層の深化とともに発見され、意味づけられた自己描写は、自我意識と自己表現の欲求によって領域を広げられ、従来とはちがった存在意義のほうへ発展した。その結果、思想の展開の論理に従属しない、自己を描くこと自体を目的にした純粹な自己描写が数を増したのである。ちなみにモンテーニュ自身の自己描写観の推移もこれを証明している。この節の最初で二側面を要約した言葉で言うならば、彼は初期では自己描写の認知的な側面のみを、逆に中期では心理的な側面のみを語っている。すなわち初期以降の発展を導いたのが自我意識であるがゆえに、彼は中期において心理的な側面を釈明しなければならないのである。この点についてはまもなく彼自身の自己描写観を検討する際にさらに詳しく論じるであろう。

以上のように、随想の展開における位置に注意しながら自己描写のあらわれる構造から把握するとき、初期と中期との共通性が浮かび上がってくる。すでに初期において自己自身への言及が論の展開のなかで事実例の役をつとめていたときもあれば、それがより純粹な自己描写へ発展していることもあった。あるいは、人の意見と自分の意見を対比させる素朴な形式のほかに、「自」と「他」が対峙した自己描写もあった。これらの数はわずかではあるが、すでに初期の作品にあらわれている。自己描写は初期も中期も構造的にはおなじ特徴を呈している。角度を変えて言うならば、ほとんど読書実例や借用した思想例で埋まった没個性の外見に隠れて、すでにこのような構造が存在していたからこそ、のちの成長が生まれたのである。それは進化をうながす構造であった。たとえ初期においては自己の観察や分析も浅く未熟であり、数もわずかであるとしても、根底には大きく発展する可能性を秘めていたのである。

このような進化ののち、さらに自己描写は新しい飛躍をおこなう。中期における到達点として、これまでとはちがった側面に注目しなければならない。今までに分析した自己描写はなにか別の主題を論じている要所々々にあらわれた例であった。いわばそれらは、『エッセー』という作品を書きながら、読書実例や古人の思想や経験的な事実などの、外の世界を侵食してゆく自我の発現形態であった。おそらくこのような侵食が十分にすすんだ結果、中期には自己と世界が対等にむかいあった随想や両者の関係と比重が逆転した作品が

出現する。それは第2巻第10章と第2巻第17章のふたつの章である。「書物について」(II-10)では、愛好する詩人や哲学者や歴史家を語り、愛読書を語るにつれ、それらに反応し、評価をくだすモンテーニュという人間、彼の判断力、精神、魂などが描き出されてゆく。この章は作家や作品の批評でもなければ、ただ自分自身を描いた自己描写でもない。そこには外部の世界と自我の均衡した自己描写の様式が見られる。一方「自惚れについて」(II-17)は自己描写が一貫している。自分について語ることが随想の展開を導いている。この章では作者自身に関する以外の話題はすべて自己描写を契機にしてあらわれる。自己を描くことから外の世界の考察が生まれる。自己と世界の関係のまさにコペルニクス的転回がおこなわれたのである。こうして自己描写によってモンテーニュの自我は完全に思索の世界を侵食し、『エッセー』を書くことと自己描写とは表裏一体の行為になる。

初期と中期の自己描写の相違は、今のべたふたつの章の特徴のほかには、私達の現在の研究の段階ではつぎのように指摘できる程度である。すなわち、ひとつは目に見えて数が増えた、ひとつはその描写の範囲が広がった、ひとつは随想の展開に果たす役割がはるかに大きくなった、ひとつは思索のリズムと一体になってきた、などである。今までにどこどころでこれらの点に触れてはいるが、さらに綿密な分析が必要なのは言うまでもない。私達が初期と中期の共通性にもとづいて自己描写の進化を捉えるように注意したのは、従来は両時期の差異を安易に際立たせ、進化の内部を看過するくらいがあったからである。たとえば、私達の研究の成果にもとづいて、すこしヴィレーの説を検討してみよう。

彼の最大の欠点は、私達が第1章第7節で論究したような「エッセー」という方法の意識について認識を欠いているところに由来する。初期と中期との共通性を捉えるためには、初期の著作をたんなる知識の収集とはちがった行為として理解する観点を見つけなければならない。そして自己描写の出現を連続的な行為の進化のひとつの結果として把握できるようにならなければならない。このような観点を欠いているため彼は「実習について」の結論をただ単独で理解し、初期においても主題が要求するときには、セネカやブルタルコス風に慎みぶかく自分の経験を語るときがあると説明しているにすぎない。この章における自覚を「エッセー」の対象である事実の質の進化として評価し、自己描写の出現との関連を推察するに到っていない。その当然の結果として、中期においてそれが事実例として発展する側面を看過している(3)。初期と中期の章における自己描写のあらわれ方についての私達の分析と「実習について」の結論の言葉とを考えあわせるならば、みずからをも一

事実例として観察しようという自覚が中期において自己自身への言及を多くしたのは疑いようがない。これは自己描写の進化を捉える重要なひとつの軸である。

「エッセー」との関連という視点を明確にするとき、この認識的な枠にはおさまらない自己描写の性格にも注意がおよぶようになる。モンテーニュは一事実例として意義がある場合にのみ自分自身について語っているわけではない。私達の第1章第6節でも考察したように、すでに初期から、作品のなかにより直接的に自己を表現する様式をもとめる感情がひそんでいた。この欲求が自己描写の性格と進化を複雑で微妙にしているのである。自己表出をもとめる傾向のみについて言えば、ヴィレーはすこしも見落としてはいない。「個性の芽生え」の章に「自己を語る欲求と感性」という節を設け、分析している。しかしながらそれは自己描写の進化を考察する視点になりえていない。たとえば、「実習について」の結論を解釈している先ほどの箇所につづき、相違にほとんど注意することなく「友情について」(I-28)における自己表出を説明している(4)。つまり自己描写の性格と進化という脈絡における前者と後者の相違を区別できていないのである。ヴィレーのこのような不注意は深い原因をもっている。と言うのは、いくつかの章の主題にしたがって直接的な自己表現をおこなっているという彼の発見も、「エッセー」という行為とその進化を捉える研究と結びつかないならば、認識的な反省と自己表現の欲求がからまりながら、自己描写という様式が作品を書くにつれてすすんでゆく進化を把握できないからである。ヴィレー批判の一例としてあげた先ほどの箇所と関連させながら言うならば、「実習について」の章における自覚によって自己自身への言及が事実例として意味づけられ、『エッセー』のなかで自己描写が市民権を得るとともに、さらにそれは「友情について」の章に見られるような「自己を語る欲求と感性」によって発展させられ、この内面の衝動による前者の市民権のいわば乱用によって領域が広げられていったのである。自己描写の進化の解釈に以上に批判したような中核が欠けているヴィレーの欠点は、「『エッセー』における自我」(pp. 133-135)の節を読むだけでも納得できるであろう。

自己描写が頻繁になるとともに、その釈明の文章もまた多くなってくる。つづいてそれらを検討する論考に移ろう。

私達は初期の章について、どのように陳腐な内容であろうと、自己自身に言及している、話者と対象との同一性が存在しているならば、自己描写として分析した。この節においてもおなじ観点を継承し、肉体的な特徴にしろ、精神的な特性にしろ、モンテーニュが直接自分について語っている箇所を観察してきた。もちろんそれは基本的な理解としてまちが

ってはいないのであるが、中期については不十分になる。たとえば私達は、自分自身を話題にしていなくとも、他の事柄について話しているなかで本人の人柄を察知することができる。人の個性があらわれ、他人に知られるのは、なにも自分について語っているときに限らない。『エッセー』の作者も中期において自己描写のこのような領域に気づいたようである。

というのは、ここにあるのは私の気質と思想だからです。私は私の信じているとおりを示しているのであって、人がこう信じるべきだと主張しているではありません。ここで私が目指しているのは、ただ自分自身を明らかにすることだけです。(I-26, p. 190)

私達が心に浮かぶ想念を見つめ、探りながら、言語によって表現する行為は、ただ自分の思想を明確に知るだけの意味しかもっていないのではない。それは思想の底にある「気質」にもかかわる全人格的な行為であり、まさに自己自身を発見してゆく作業である。『エッセー』を書くなかで言語表現にひそむ、このような深い関係を悟ったとき、モンテーニュはその方面へも自己描写を広げてゆく。

ここにあるのは私の空想であって、これによって私は事物ではなく、私について知識をあたえようと努めているのである。(II-10, p. 99)

中期から彼は直接自己を語らない自己描写の分野を開拓してゆく。それは明らかに初期とちがった進化である。しかしながら「空想(fantasies)」によって自己自身を知らせるのは、結局すべての文学作品に共通しているのではないだろうか。彼はいかなる方法でこのような自己描写を実行したのであろうか。この問題は作品名『エッセー』の由来である「エッセー」という思考法と密接に関連するのみならず、結局は『エッセー』全体の性格にかかわってくる。したがってその考察は残りの二節(とくに最終節)に譲り、この節では直接自分自身を語っている狭義の自己描写のみを検討しつづけることにしよう。広義の自己描写観はのちの進化を展望するためにも忘れてはならない重要な自覚なのであるが、中期にモンテーニュがもっとも弁解する必要があると感じているのは、前者の自己描写なのである。

もっぱら自分について語っている章のなかで、今や『エッセー』の主題は自己自身である

と言明しつつ彼はつぎのように説明している。その釈明は明快とは言えず、さまざまな理由の混交しているところに自己描写の複雑な脈絡が感じられる。

(1) 人々は私の告白したこれらの特徴から、私の損になるような他の欠点を想像できましょう。しかし何を知られようと、ありのままの自分を知ってもらったならば、目的を達している。(2) しかも、これらのような、じつに愚かでくだらない事柄をあえて筆で記すことについて弁解はしない。この私という主題の卑小さがこれ以上の充実と堅牢さに耐えられないのである。(3) それにまた、私を駆りたてているのは新奇な風変わりな思いつきである。これを自由に走らせてやらなければならない。(4) いずれにせよ、他人の忠告をうけるまでもなく、このすべてが価値も重みもなく、私の企てが大胆で無謀であるのも、ちゃんと承知している。(5) 私の判断が混乱していなければ十分である。この本はその能力の試しなのである。・・・[引用詩句省略]・・・(6) 自分で気づけないほど無自覚でないならば、私には馬鹿なことをまったく言うてはならないという義務はない。知っていながらあやまちを犯すのは私の常であって、ほかのまちがい方はほとんどないくらいである。私は偶然的なまちがいはほとんどしない。人が愚かな行動をとらえて私の軽薄な性分を責めようとも、あまり痛くもない。欠点の多い行動を平素からこのせいにするのをみずから禁じえないからである。(II-17, pp. 459-460)

モンテーニュが「ありのままの自分を知ってもらったならば、目的を達している」と断言するのにはふたつの理由がある。ひとつは認識的な理由である。(5)にも言うているように、いろいろな事柄を取り上げていようと、彼が『エッセー』を書くのはただ自分の判断を試すためである。それならば、自己自身を話題にしたときにも、「判断が混乱することなく、「ありのままの自分」を『エッセー』に描きだせたならば、りっぱに目的を達成したことになる。彼はすでに初期において、『エッセー』を書く目的は判断の試しであると宣言していたが、しかしまだその対象はほとんどすべて読書で出会った実例であり、精々みずからの見聞した事実例であった。「実習について」の章で自己自身というもっとも有意義な事実の層に到達はしたが、まだ判断の試しという目的と一致していなかった。「死に慣れるためには死に近づくしかない」という「教訓を汲みとらなかったならば」、この章の内省と記述は「あまり意味がない」のである。これら二様の自覚は初期においてはま

だ生まれたばかりで、孤立していた。ところが、上の中期の文章では、やや錯綜してはいるが、両者がおなじ脈絡のなかにあらわれている。第2巻第6章における自己自身という事実の層の発見と第1巻第50章における判断の試しという著作目的の明確化が思索の内部で触れあい、ひとつになったことを知らせている。モンテーニュにとってふたつの重要な関心事である、自己を描くことと判断を試すことが一体の行為になったのである。今や『エッセー』の主題、すなわち後者の第一の対象は自己自身なのであるから、その行為はしばしば前者の行為になる。「死に慣れるためには死に近づくしかない」などという教訓が得られようと得られまいと、自己自身はつねに判断を向けてみる価値のある世界である。

「自分について良く言うのも悪く言うのも許さない」(II-17, p. 433) 世間の礼儀を憚って自己を判断の対象にしないのは、「礼儀にさらわれて、物事の本質を放っておく」(同, p. 432) ことであり、「枝葉にかまけて、幹や本体に目をやらない」(同, p. 432) にひとしい。「判断力はいたるところにおいてその長所を保持しなければならない。他人についてと同様自分についても、判断力が真理の提示するとおりを見るのが正しい」(同, p. 432) のである。モンテーニュは世間一般の礼儀に逆らって自分の道を歩みつづける決心をかためる。こうして、外の世界に向けられていた認識の視線は、自己という世界にも注意ぶかく注がれるようになる。自己を取り巻く世界も自己自身もおなじ認識の対象になる。これは私達が第2巻第10章と第2巻第17章を分析することによってすでに指摘した進化である。モンテーニュは『エッセー』を書くなかにおける判断の哲学と自己描写の哲学によって、人間を一方の大宇宙にたいする小宇宙と考える、ルネサンス時代の世界観に到達したとも言えよう。しかしその時期はおそらく中期も終わりがごろであったにちがいない。中期の作品は、いままでの数節において考察したように、読書実例の収録が中心の、初期とかわらない章もあれば、自己描写が目立たない章もすくなくない。第2巻第10章や第2巻第17章のような、自己描写と「エッセー」が一体になった著作態度が、中期の全体に浸透しているとはとても思われぬ。モンテーニュ自身の自己描写弁護を調べてみても、上記の引用箇所以外には、「エッセー」という行為と関連づけながら弁明している言葉は見あたらない。あるいはまた、つぎに考察するような釈明がほとんどである事実も、傍証にくわえて良いであろう。

「ありのままの自分を知ってもらったならば、目的を達している」とモンテーニュが断言する裏には、別の感情的な意味がひそんでいると思われる。今説明した(1)と(5)の認識的な脈絡の周囲には、表現の不明瞭な、曖昧な理由がからんでいる。大義名分を抜

きにして彼は自己描写にどこか心が引かれるのである（「私を駆りたてているのは新奇な風変わりな思いつきである」）。彼はこの「思いつき」に執着して『エッセー』を書きつづける（「これを自由に走らせてやらなければならない」）。おそらくそこには、自己描写は意義のある作品様式になるにちがいないという予感がまじっているであろう。「風変わりな」独創性のある作品が生まれるかも知れないと期待する気持ちもあるだろう。しかし一方自己描写は、すでに何度か触れたように、モンテーニュの自我の求めている表現様式でもある。彼は『エッセー』のなかで自己自身について記述し、作品のなかに自己の姿を固着させることによって、無位無官の生活のなかで日毎に希薄になってゆく存在感を充足しようとした。しかしながら彼は作品のなかで自己を語る大義名分をまだ見出せない。自己自身という存在が判断の対象として価値をもつとしても、それは著作をとおして判断力を磨くという目的に由来する。著者自身のこの個人的な目的から切り離され、読者との関係に焦点がしぼられるならば、自己描写はたちまち傲慢な不作法となり、何の意味もなくなる。したがって彼は自己描写に執着する一方で絶えず弁解しなければならない。しかも（2）や（4）や（6）のような釈然としない理由を並べなければならない。けっきょく中期における弁明は自己描写に個人的な存在理由しかあたえられない。あるときは、顕職に就いた公的な活動で自分の価値を示す運命に恵まれなかった者は感じるとおりに自己自身を描き、自分の行為と思想を著作に託せば良いと主張する（II-17, pp. 433-434）。しかしその言葉にはただの自画像以上の深い意味はない。「たとえ普段の私とちがった別の態度やもっと上品でりっぱな姿を装いえたとしても、私はそうはしなかったでしょう」（II-37, p. 646）という原則でモンテーニュはみずからを描き、「会話のときに見たのおなじ風貌、おなじ姿態をここに認められる」（同, p. 646）ようにしようとした。『エッセー』のなかに自然な自分が移しこまれたような同一性を追求した。そしてそれは「私の性質と能力の実際を、死後数年、いや数日でも存続できる堅固なものの中に、変質も変化もこうむらないように収めておきたい」（同, p. 646）からである。「ここに私の肖像をありのままに描かなければならない」（II-8, p. 67）のはそのためである。けっきょく彼の自己描写弁護はすべて、「ある日バル・ル・デュックで、シシリア王ルネを記憶にとどめてもらうよすがとして、彼みずからの書いた自画像がフランソワ二世に贈られるのを見た」（II-17, p. 460）実例にならい、「彼が鉛筆で自分を描いたように、めいめいがペンで自己自身を描くのがどうして許されないことがあろうか」（同, p. 460）と言うのと変わりはない。許されてしかる

べきだとただ言う以外の根拠をもっていない。したがって、「書く材料に自分を使うこの企ては、名声が知りたいという欲求をいくらかでも引きおこしたことのあるような、有名な稀有な人物ならば許されるであろう」（II-18, p. 474）という批判にたいしては、もう論駁の仕様がな。この肖像は書斎の隅に隠しておき、私を知ることに個人的な関心をもっている人を楽しませるためである。隣人や親戚や友人がこの像をとおしてふたたび私と交わり、睦めるのを喜んでくれるであろう」（同, pp. 475-476）としか言えないし、「この企てと世間とのつながりと言え、いっそう速くいっそう楽に書くための機械を借りざるをえなかったこと、これがすべてである」（同, pp. 476-477）と居直るしかない。モンテーニュはまだ曖昧に予感しているにすぎない独創性や人間認識に到る価値をきっぱりと捨てることによって、確かな個人的な世界に閉じ籠もり、自己描写にたいする執着を守りつづけるのである。

中期における自己描写についての解釈は、その言明のうちもっとも有名な「読者に」という序文が出発点でもあれば終着点でもある。初版を出版するに際してモンテーニュが巻頭に付した言葉は、世間一般の人々を対象にする出版物の序文としては大変奇妙なものからである。しかし『エッセー』の自己描写に隠れている自我の欲求を把握している私達には、それは真実の感情にそくした言葉であるのが容易に理解できるはずである。彼がそこで、「私が筆をとった目的はわが家だけの、私的な目的以外のなにものでもない」とか、「私がこれを書いたのは、親戚や友人たちの個人的な便宜のためである」とか言っているのは、ただ謙遜しているのではない。「したがって、読者よ、私自身が私の書物の題材なのである。こんなに軽薄で空虚な主題のためにあなたの閑暇をお使いになるのは、賢明なことではない」と言っていようと、ただ卑下しているのではない。あるいは、作品の主題が自己自身である特異性を衒っているのでもない。彼がもっとも執着している自己描写という様式から『エッセー』を説明し、序文にしたにすぎない。それは上に考察した自己描写観のとおりであり、すこしも変わったところはない。その率直な表現が公の性格をもつ出版物の最初にあるために、当惑や誤解が生じるにすぎない。すでに初期から自己描写には、無為のなかをさ迷う、「どこにでもいる」（I-8, p. 31）がまた「どこにもいない」（同, p. 31）ような自己を作品のなかに固着させ、確かな存在感を得ようとする感情がからんでいた。中期に彼は自己描写を『エッセー』の主題にする決心をするが、一方まだその客観的な意義は不明瞭であり、個人的な理由から擁護するしかない。それならば、存在感の欠如を補償すべく生まれた自己描写が、つぎに「親戚や友人」とのつながりを求め

たとしてもふしぎではない。作品の出版は、自足的に満たしてきた存在感を他者との関係のなかへ発展させ、そこに新しい存在を築きあげようとする願望のあらわれであろう。まだ世間の読者、つまり人間一般との関係のなかで自己描写の意義を確立するのが不可能であるならば、せめて肉親や知人とのつながりのなかで意味づけようと思うのは当然である。

「読者に」の序文はけっして謙遜でも卑下でも韜晦でもない。彼のこのような心理の率直な表現である。自己描写という存在様式の当座の到達点をあらわす真実の言葉である。

私達がこの節でおこなった作品分析を考えあわせるならば、モンテーニュの弁明は一面的で、消極的に過ぎるように思われる。もっと積極的に弁護する論法がほかに可能なように思われる。私達の分析から推察するならば、自己描写は個性的な自我の形成にすくなからざる寄与をしたにちがいないし、自己と他者を観察する具体的な場を設定することによって人間認識を養成したであろうし、自己自身をおなじ分野に含めることによって事実を見る目をはるかに鋭く、はるかに深くし、事実にもとづく思索をはるかに充実させたはずである。あるいは、自己と古人との文化的な対峙によって、自分に身近な経験にもとづいて偉大な思想を咀嚼し、再考察し、自分自身の気質にあわせて変質させ、吸収する効果を高めたはずである。モンテーニュはなぜこれらの側面から論陣を張らなかったのでしょうか。やはり世間の礼儀作法が気にかかり、謙遜しながら弁解し、許しを乞う策をとったのであろうか。おそらくそのような懸念もあったにちがいないが、この点をあまりに重視するのは狭い見解である。一方で彼は、自己自身を判断の対象にしないのは礼儀にこだわって真理の追求に反している、とはっきり批判している。彼はこのようにして自分の態度を決意し、固めることのできる人である。対世間の気づかいだけが原因で、あのような自己描写弁護に終始したとは思われない。

書くという行為に含まれている意義や、その継続によって生じる進化はかならずしも作者自身に明瞭に意識されているとはかぎらない。新しいジャンルに踏みだし、自分にふさわしい作品様式を摸索しながら書いているモンテーニュには、とくにその傾向がつよい。私達が作品分析から推察した効用は、中期に自己描写を開拓していった結果であり、彼自身はその諸様相をまだ明確な言葉で表現できるほど自覚していなかったにちがいない。そのため、初期からつづいている、『エッセー』を自己の存在の代償物にしようとする強い欲求のからんだ弁明に言葉が費やされたのであろう。『エッセー』は執筆方針や理念の新しい導入によってではなく、書くという行為とともに変化し、進化してゆく作品である。したがって、重要な意味をもつ側面が十分に意識化され、言語化されていないところもある。

最後にこの点を考察しておこう。

自分を観察し、描くことを認識行為のなかに位置づけようとするならば、まず自己認識という問題が頭に浮かぶ。これは誰でも容易に思いつく関連である。ところが中期にはそのような表明がほとんどない。一方ではすでに自己描写が頻繁におこなわれ、その弁解も多く、自己自身を明らかにするのが『エッセー』を書く目的であると断言さえしている。また後期には自己認識の重要性をつよく主張している。これらの事実と考えあわせると、なおさらそれは奇妙な欠落である。自己認識に言及している可能性があるのは、つぎの箇所だけである。

ところで私の意見はきわめて大胆に、たえず私の無能力をとがめる。実際それもまた他のものとおなじように、判断力を働かせてみる題材である。世間の人々はいつも向かいあって見つめあっている。私は視線を内部へ逆転させ、そこに据え、専念させる。誰でも自分の前を見る。私は自分のなかを見る。自分だけにかかわって、たえず自己自身を観察し、検査し、探る。よく考える人でも、ほかの人たちはいつもよそのほうへ進んでゆく。彼らはいつも前進するのみである。私は自分自身のなかをころげまわる。(II-17, pp. 467-468)

この文章がはたしてどの程度自己認識の意義をのべようとしているのか、意見がわかれるであろう。随想の構造の分析から把握したように、自他の対比のもとでみずからについて説明するのは、中期のモンテーニュにはありがちなことである。この対比がおのずと他を批判し、自己を弁護する色彩をおびるために、彼の意識はまだそこまで進んでいないにもかかわらず、読者は自己認識の重要性を主張しているように思いたくなるのかも知れない。とくに後期の第3巻の章とか参考書などによって関連の知識をすでにもっている者は、そのような解釈をする恐れがある。しかしながら、この節における私達の分析と作者自身の言葉についての検討にもとづくならば、上の箇所は表面の意味どおりに受け取り、それ以上の読み込みをしないように注意すべきであろう。彼は自他の対比のもとに自分の態度を述べているにすぎない。自己認識の意義を主張する意図はおそらくまだなかったにちがいない。ただし無意識的には、それが根底にひそんでいたことは十分に想像できる。つまり、自己認識の哲学が先にあつて自己描写がおこなわれたのではなく、後者を実行し、後者について弁明する過程のなかで前者がだんだんと意識化されていったのである。言語に

よって明確に表現されるのを待っている状態にたいして、たとえば「汝みずからを知れ」というソクラテスの思想が影響し、後期において自己認識の哲学が展開されたにちがいない。引用文はこのような理解の仕方をすべきであろう。自己認識の意義の説明としてもうすこし明瞭になった文章が執筆年代の不明な章にある。これもおなじように解釈すべきであろう。

(1) もし我々が時々はみずからを眺めて暇をつぶし、他人について調べたり、自分に関係のないものごとを知ろうとして費やす時間を、我々自身を探ることに用いるならば、(2) 自分というこの組織全体がいかにか弱く、いかにか不備な部分でできあがっているか、たやすく気づくであろう。我々には満足して、そこに落ち着けるようなものはなにもなく、ただ望むとおりに想像したときでさえ、自分に必要なものを選択する能力がないとは、我々の不完全さのみごとな証拠ではないか。人間の最高善を見いだすために哲学者たちのあいだでくり返されてきた高尚な大論争も、その良い証拠である。それは決着も一致も見ず、今もなお続いているし、今後も永遠に続くであろう。

(I-53, p p. 473-474)

先ほどの箇所には比べるならば、自己認識の意義のより明確な主張であり、人称も「私」ではなく「我々」となって一般化もよりすすんでいる。しかしながら(1)は独立した部分ではなく、(2)の論を導入するために書かれている。したがって、おなじように、過大な評価は慎まなければならない。やはり、書くという行為のなかで自己描写の効用が意識化されてゆく途中のひとつの痕跡と見なすべきであろう。

同種のつぎの一例は「I-26, p p. 209-210」にある。「子供の教育について」という章題のとおり、子供に教えるべきことがらを要約、列挙しているなかに自己認識の大切さに言及した文が見られる。したがって上の(1)より記述の一般化と客観化はいっそうすすんでいる。しかし、列挙の一部にのべられているのであり、説明も(1)以上に明確になっているわけではない。他の主題について書くなかで生じた意識化と言語化のひとつにすぎないであろう。

作品を読む第三者にたいする自己描写の価値を主張するためには、ただ自己認識との関係を説くだけでは駄目である。個人を越え、人間性一般への発展がなければならない。自己認識が人間認識の中核をなし、さらに世界認識の根底にならなければならない重要さと

関連づける必要がある。モンテーニュが中期にこの認識の構図を感知したときもあったらしいと推察させるところが、一箇所ある。

(1) わが身を水星の周転円に置き、その上にまたがっている人々の話を聞くと、大道のほらふき歯医者を思いだす。(2) というのは、私がここで人間を主題にしながらかこなっている研究において、じつに多様な思想やあいつぐ困難の深い迷宮や哲学諸派の多くの不一致と不確実などに出会うのを思い、(3) さらにまた、あの人たちは自己自身や、たえず自分の目の前にあり、自分のなかにあるみずからの性状を認識するに到りえず、自分自身の動かしているものがどのようにして動いているかも知らず、彼ら自身の手で操作している機械を図説も解説もできないことなどを思うならば、(4) 第八天球の運動やナイル河の干満などの原因についてとても彼らを信じる気になれないのは、納得していただけるであろう。事物を知ろうとする好奇心は災禍として人間にあたえられた、と至聖なる言葉も言っている。(II-17, pp. 436-437)

(2) の最初でモンテーニュは今までとは異なった次元で著作を意味づけ、彼の研究の主題は人間であると言明している。彼自身の『エッセー』観全体に影響をおよぼすにちがいない重要な意識である。しかしみずからの作品について語ることの好きな彼が人間研究の抱負を披瀝している文章はほかに見当たらない。中期までのところ自己描写はこの次元から意味づけられていない。すでにのべたように、第2巻第17章は一貫して作者自身について書かれており、それ以外の話題は自己描写を契機にしてあらわれている。上記の引用もそのような脱線部である。つまり、「自」から「他」へ転換し、(1) や(4) のような認識にうつつをぬかす人たちや「事物を知ろうとする好奇心」を批判する方向へ展開する過程で、<<duquel le sujet c'est l'homme>> という関係代名詞による挿入が生じたのである。それは文章を書いてゆくなかで意識下の奥深いところからふと浮上した言葉であったにちがいない。実際書くという行為にはしばしばこのような現象がともなう。だからこそそれが私達の内部に蓄積されたものを意識化する大切な行為になる。「試す」という不安定さをみずからの責務として背負い、書くなかで自己の進化を追求するモンテーニュにあっては、そのような現象が見られるのはなおさら自然なことであろう。ちなみに、彼が脱線的な展開を抑制しないどころか、むしろ大切にす理由も、この例を見ればはっ

きりと了解できるはずである。「試し」は論理性にこだわり、脱線を嫌うならば、無意識的な内部の生成をも引き出してゆく深い豊饒性を失うのである。

引用文はさらに別の脈絡との関係をふくんでいる。(3)の自己認識の問題である。こうして、相互の関係はまだ明瞭に表現されてはいないが、世界認識と人間認識と自己認識がひとつの脈絡につながった構図が浮かびあがってくる。それは行きずりに生じた、ぼんやりとした意識にすぎず、中期にはまだ『エッセー』観のなかに取りこまれていない。しかしながらこれら三者の認識論は意識の深部ではすでに触れあっていると想像して良いであろう。それは新しい進化の兆しである。

私達の研究の中心は言葉を解釈するのではなく、『エッセー』の随想の展開の仕方そのものを分析することであった。それでは、意識の深部において進行していたと思われる上のような進化は、随想の過程にどのような形であらわれているのであろうか。私達はたとえばつぎのような展開に、自己描写と人間認識の連係を認めた。

(1)「私は遠くまで来すぎた」、「こんなに長い道を行けば、最後にはなにか不愉快な出来事にきつと巻きこまれるにちがいない」、私は心のなかでなんどもこのように考えた。私は十分に感じてもちたし、口に出しても言っていた。「私は出発する時がきた」、「四肢のどこかを切らなければならない時の外科医の方式にしたがい、盛りをすぎない、生きのよいうちに命を断ち切らなければならない」と。しかしこれらは空虚なお題目であった。その当時準備がととのっていたどころか、この結構な状態におちいって18ヶ月かそこらもすると、私はすでに病気と仲好く暮らすのをおぼえた。この結石病みの生活にすでに順応しはじめ、みずからを慰めたり希望をいだいたりするための材料も見つけ出している。(2)それほど人間というのは悲惨な自分の身になじんでゆくものであり、どんなに厳しい状態であろうと、生存するために受諾できないほどではない。(II-37, pp. 600-601)

(1)における内省から引き出され(2)に結晶しているのは、自己の個性ではなく人間一般についての認識である。自己自身を観察しながら、自己認識から人間性の認識を導き出す思考法が見られる。これはとりたてて言うほどの展開ではないなどと思っはならないであろう。『エッセー』の自己描写がただ家族や知人を楽しませるための自画像にすぎないならば、(2)へ発展するような思考なぞは必要ではない。そのような動きはけっし

て生じなかったであろう。あるいは、自己描写についての釈明の表面にある謙遜や卑下の調子に比べるならば、自分についての観察から人間一般を結論するのはまったく大胆な飛躍である。上の(1)から(2)へのような随想の展開は、なんらの進化も成熟も経ずして単純にあらわれる現象ではない。実際に分析してみても、自己描写→人間認識の発展パターンは中期の章からはごくわずかしか見つからない。自他の対比がすでに頻繁になっているのに比べれば、無きにひとしい。しかしこれは、自己描写が自我の強い欲求から始まっていることを考えるならば、当然でもある。自他の対比はそこから直接生じてふしぎではない形式であるが、前者は異なった認識の次元を含みこむ進化を経なければならぬからである。すなわちそれは自己描写——自己認識——人間認識——世界認識という脈絡を自覚してゆく成長である。私達が推察したように、モンテーニュは書くという行為のなかでこの脈絡を感知したときもあったにちがいない。おなじように、自己描写→人間認識という発展パターンも中期の彼が意識的におこなった方法であるというより、自己描写の継続が奥深い内部に成熟させていた進化が折りに触れ、自然にあらわれたのであろう。

第2章第3節（注）

（1）たとえばつぎの箇所を参照。<<Ce n'est pas a dire qu'on leur donne par telle voie d'obligation[...]car je ne veux pas qu'on s'y mesconte, a quelque part que ce soit.>> (II-8, pp.78-82)。なお、のちの加筆で最後にさらに「自」がつけくわえられている。

（2）たとえば<<Je ne me soucie pas tant, quel je sois chez autruy, comme je me soucie quel je sois en moy mesme.>>(II-16, p.423) 以下の部分は、「p p. 416-418」におけるエピクロスやカルネアデスと対峙している。

（3）II-A-69, t. 2. , p. 91, p. 134, p. 150などを参照。

（4）II-A-69, t. 2. , pp. 134-135.

4. 章の構成

『エッセー』は第1巻が57の章、第2巻が37の章に分けられた作品である。作者モンテニユはひとつの章の構成になにか趣向を凝らしたのであろうか。その形跡が認められるならば、どのような意識の表現なのであろうか。あるいは、章としてまとめる特別な作意などは存在しないとするならば、どのような理由によるのであろうか。『エッセー』において章というのはどの程度の独立性や統一性をもった作品なのであろうか。これらが章の構成の問題である。私達は今まで随想の展開の過程の分析をとおして『エッセー』の個性を理解してきたのであるが、次節で全体的な把握を試みるに先だち、章という単位から考察してみよう。

従来から章の構成は、長くてしかも紆余曲折に富む随想の作品について検討されてきた。おなじように私達も多かれ少なかれこの傾向の強い章を取り上げることにする。短くて脱線の少ない章は今までの私達の分析を適用すれば十分であり、章の構成として検討しなおす必要もないと思われるからである。ただ私達の特殊な点は初版の状態を対象にしていることである。序論でのべたように、複雑な章は恣意的な分析によっていくらかでも構成を論じ立てられる。章全体を対象にする以前に、作者の思考法とか随想の展開様式とかを十分に研究しておかなければならない。これが私達の見解であった。おなじ研究方法の継承として、後期や晩年の加筆を除いた、可能なかぎり単純な最初の姿を分析しながら、章の構成を検討することにした。加筆の層をすべて含んだボルドー本の姿を捉えて論じる以前に必要な作業のひとつであろうと思われるからである。

執筆年代が中期に推定されている章のなかで、量的な理由に質的な理由がくわわって論旨の読みとりに多かれ少なかれ困難が生じると思われるのは、I-26, II-8, II-12, II-16, II-17, II-33, II-37である。これらのなかで一番短いII-37と同等以上の長さのあるのは、II-10, II-32, II-34であるが、展開の紆余曲折はすくない。残りのその他は論旨が混乱する暇もないほどの小品である。それでは、最初のグループのななつの作品には、章という単位を意識した作意がなにか存在しているであろうか。結論から先に言うならば、以下にのべるかすかな形跡のほかには、展開の過程についての分析から知られる特徴とは異質の、それらしいものは見つけられなかつた。つまり、無秩序なのは外観だけであって、底には結論へむかって歩む論理的な思考が一貫しているとか、構成の仕方にはある深い意図がひそんでいるなどと、章

全体の分析から特別な評価の仕方を説かなければならないような痕跡は見つからなかった。章の構成という観点から見なおしたからと言って、モンテーニュの随想の態度についてとくに新しい発見は得られない。これが私達の結論である。

章の構成としてモンテーニュが選んだらしい趣向とは、「円環の構成」とでも名づける特徴である。なんども主題から逸れながら紆余曲折に富む展開をくりかえしたのち、彼は一番最初の話題にもどって章を結ぶのが好きだったようである。途中の脈絡がいかにか錯綜していようと、章の冒頭と末尾が結びつけられ、巡り帰る円環が形成される。冒頭と末尾の照応と結合によって不統一な話題が囲みこまれ、あまりにも開放的であった空間が最後には閉じられる。その結果、無秩序を包みこんだ秩序感や拡散を包みこんだ統一感が生まれるのを、彼は期待したのかも知れない。私達が先ほど限定したななつの作品のうち、いつに円環の構成が認められる。除外されるふたつをまず言うておけば、I I - 12とI I - 17である。残りの章に見られる冒頭と末尾の照応を説明するならば、「子供の教育について」(I - 26)は学問と自分との関係をのべながら教育論を導入し、この主題を中心にして論じたのち、最後には自分の受けた教育について語り、自己自身のことにもどって章を結んでいる。第2巻第37章は同種の傾向であり、章頭とおなじように『エッセー』論をのべながら章を終えようとしている。ただしこの後に、医学批判という中心の展開にもどった付加がすこしある。「父の子供にたいする愛情について」(I I - 8)は、章題との関連が薄くなったり濃くなったりしながら展開しているが、最後にははっきりと章題どおりの主題を論じている。しかしこれらの照応がはたして章の構成を意識した作為なのかどうかは不確かである。I - 26とI I - 37はいかにもモンテーニュらしい照応であり、話題の性質を越えた趣向なのかどうか簡単には決められない。I I - 8のような現象は特別な意志がなくとも、自然に生じてふしぎではない。主題を決めたのち、あちらこちらですこし脱線しながら、最後には肝心の問題にもどって終えるのは、普通にありうると思われるからである。しかしながらこのような曖昧さはあるが、これらは円環の構成の趣向を立証する傍証になりこそすれ、否定する根拠にはならない。

第2巻第16章には、普通には起こりえない章頭と末尾との照応が見られる。最後の婦人の貞操の話題は、どのような脱線や飛躍をおこなおうと以前の内容からは生じえないものであり、作者が意図的に冒頭と関連づけたと考えられる。この章は題名にあるとおり、展開につれて名誉の種々の側面が明らかにされてゆく。途中では脱線があり、章題との関連も薄れているが、終わりに近づくにつれてははっきりと主題にもどっている。むしろ最後

の部分のないほうが自然な照応である。しかも、婦人の貞操というのは、主題を導入する冒頭部の論に付随する一要素にすぎない。再度読みなおすことなく、読者がこの関連を思い浮かべるのはほとんど不可能であろう。したがってこの章はきわめて作為的に円環の構成に仕上げられている。作者自身が「最初の話についてさらに一言つけくわえるならば」（p p. 430-431）という語句を書き記しているように、それは自然に生じた展開ではなく、意図的になされた回帰である。

第2巻第33章は量的にはカエサル的美徳と悪徳に関する部分が7割近くを占めている。それらの内容が章の主題を論証する意味ももっているとは言え、あまりにもカエサル自身に関心が向けられすぎている。例証としてはじまったカエサルの話の方へ、脱線的に比重が片寄っていったと見なすべきであろう。そしてこののちモンテーニュは、「ところで、中断した最初の話にもどるならば」（p. 557）と、意識的に冒頭の論を取り上げ、わずか1ページほどの記述をおこない、照応によって脱線部を包みこみながら章を閉じている。なお「スプリナの話」という章題に関係のあるのは、最後の半ページだけであり、冒頭の論がわずかに間接的に関連するほかは、その他の部分はまったく無関係である。つまり彼は円環の構成に仕上げるなかで生じた話題を章題にしているのである。

最初に示したみつつの章は不確かな例ではあるが、第2巻第16章と第2巻第33章の証跡と考えあわせるならば、中期において章が長くなり、随想が紆余曲折を増してきたとき、モンテーニュは円環の構成の趣向をいだいたと推察できるであろう。ちなみに初版の『エッセー』全体についても冒頭と末尾との象徴的な照応が付与されている。唐草模様でつくられた花柄が扉に印刷されていると同時に、第2巻の《F I N. 》の下にはおなじ絵が逆向きに印刷されている。出版社の付加した飾りなのかモンテーニュの注文なのか分からないが、章の分析から知った特徴を思い浮かべると、なかなか気になる事実である。

では上のような構成の趣向はどのように理解すべきなのであろうか。『エッセー』のなかで『エッセー』について語るのが好きなモンテーニュも、この点についてはなんらの説明も示唆もあたえていない。私達はその意味を推察するしかない。脱線を抑制する論理性をもとうともせず、活発な思考のままに展開したとしても、章の最初と最後が結びあわされるならば、巡り帰る円環が形成され、ひとつの独立的な小世界ができあがる。こうして自由奔放な随想を包みこむ統一的な秩序が生まれる。しかもこれはけっして静的な秩序ではない。モンテーニュにとって世界も人間も認識の対象はすべて多様性と流動性を本質としているように、彼の認識の手段である『エッセー』もけっして静的な秩序の獲得を目指してい

ない。静的な秩序とはおのおのの事物が確固不動の定まった位置をもった体系であり、彼にとってこの完全性は憧憬としてはありえても、逆に現実はすべてが固定した定義を拒否する多様性と流動性を最大の個性としている。不動の位置を定める図式的な構成のなかに認識の対象をおさめることはできない。円環をなして閉じる小世界の姿が、絶えまない変化のなかにある事物の有しうる唯一の秩序かも知れない。みずからの世界観や随想法に抵触しない趣向として彼は円環の構成を思いついたのであろう。

末尾の内容を章頭と一致させているだけの特徴にたいして、円環という理解の仕方をするのは誇張が過ぎるのではないかと疑問と批判が呈されるかも知れない。確かに、円環の構成に仕上げるためにモンテーニュが途中の展開にも気を配ったような形跡はない。一章全体の随想の動きを円運動に近づけるために、技巧を凝らしたりはしなかったようである。しかし円環という意味の要点は、円の形をしている、あるいは円の軌跡を描く運動をしているという一方では、最初と最後、またはウロボロス風に言えば頭と尾が連結され、巡り帰って閉じる独立的な世界ができあがることである。彼がとくに後者の意味で円環の構成を選んだとしてもおかしくはない。ではなぜ前者の実現には心を配らなかったのだろうか。ひとつの理由は、後期の随想を思い浮かべながら言うのであるが、中期の章の展開はそれほど長くもなく、それほど拡散的でもなく、主題から離れたりもどったりする自然な照応が途中に生じていたからであろう。ひとつの理由は、『エッセー』という作品や「エッセー」という思考に関する全体的な解釈がからんでくる。途中の随想の自然な展開を拘束してまで章の構成に趣向を凝らすのは、彼の好む道でも選ぶべき道でもなかったにちがいない。

けっきょく『エッセー』の章には円環の趣向以外に構成らしい構成はない。ひとつの章を個別に分析しながら構成を指摘し、その意味を解釈したとしても、短い章ならば、実際は作者の思考法の一形式、あるいはそのいくつかの結合にすぎないであろう。たまたま章全体の姿と重なっているために、作品としての趣向のように見えるにすぎないのである。したがって作者の作意によってつくりあげられたとは言えない。作者の意志を越えた作品の構造と作者の意図的な趣向である構成とを混同しないようにしなければならない。私達は構造と構成という類義語をこのように使い分けたい。もちろんこの区別は、すべての行為に意識性と無意識性とを判別しがたい領域があるように、かならずしもつねに明確なわけではない。しかし、一章全体を考察するときこの点に注意しないならば、著作の態度を誤解する結果になるであろう。それは今までたびたび生じているように思われる。長い章

を対象にするときにはとくにこの危険が大きい。たとえば、分析によってある章の論理的な構図を描きだし、モンテーニュは随想を全体的に秩序づける思考法や著作態度をもっていと結論する一傾向がある。しかし研究者が全体を読みなおし、注意ぶかく分析するならば、秩序と論理性のある構図が引き出せるのは当然でもある。非論理性をふくんだ自由奔放な随想にも、おのずと関心の中心があり、それが移ってゆく変化がある。抽象して要約するならば、たやすく論理的な図式に変えられる。これは当たり前のことである。作者の思考の関心の所在と方向を知ろうとするのならば、その考察は意味がある。しかしながら発見したのは章の構造ではあっても構成ではない。そのような分析によって『エッセー』の非論理的な側面を弁護しようとしたり、章を構成する配慮を弁じたてたりしてはならない。秩序とか論理性とかは読みすすんでゆく読者の次元を離れて判断してはならない問題である。したがって、部分の動きと全体との両者の特徴を捉える方法を工夫しなければならない。やはり随想の展開の過程から思考法や随想法を把握したのちでなければ、章の構成について正しい評価はできないであろう。このように構成と構造を注意ぶかく区別するならば、『エッセー』には円環の構成以外に章という単位を意識した趣向は認められない。これが私達の結論である。

作意を凝らした意図的な構成が存在しないことの証明には厄介な点がある。なぜならば存在しないという証明は、存在すると主張する恣意的な分析にたいして反論するとき、具体的な説得力をもつからである。私達のこれからの論証は、モンテーニュが章の構成にあまり努力したとは思われない形跡や、一章全体を作為的にまとめるには不向きな思考法や著作の姿勢を指摘する傍証的な性格の論にならざるをえない。しかしながら私達はこれらの観点に立った『エッセー』全体の研究にもとづいて、恣意的な分析が描きあげる構成にたいして論駁する用意がある。あるいは、逆に言えば、章をつくる技巧を主張したい人たちは、たんにいくつかの章についての分析を示すだけではなく、私達の研究結果との矛盾を克服した解釈をださなければならない。私達の論証にはこのような意味も含まれている。

第2章第1節と第2節における私達の考察をまず思いだしていただきたい。第1節で把握した特徴から考えるならば、中期においてモンテーニュは前後の文脈や全体的な調和のために思考を制御したり、抑制したりするのを少なくする方向へすすもうとしている。第2節に指摘した「エッセー」という思考法は全体の組み立てに注意しながら動いてゆくような性格ではない。これらは章の構成を困難にする個性であると考えるのが妥当ではないだろうか。あるいは、ふたつの節で引用した彼自身の言葉も、章全体を考えながら書いてゆ

くような態度をとらないことを示している。しかしながら、他の箇所には、取りようによれば逆を言っているように解釈できる文章もある。たとえば、『エッセー』には見かけとはちがって論理性や秩序があると主張しようとするとき、しばしばつぎの言葉が引かれる。

私はひとりでに内容が分かるようであって欲しい。どこで変わり、どこで結論になり、どこで始まり、どこで再びとり上げられているかなどは、内容自体が十分に示している。鈍い耳やなまくらな耳のために連結や接合の言葉を挿入しながらつづりあわせたり、みずから注釈をくわえたりするまでもない。(III-9, p. 204)

これは後期の文章であるが、中期の考察に適用し、自由奔放な動きを運びはじめた随想の記述において「連結や接合の言葉」がどのように使われているか検討してみよう。引用文は『エッセー』が現実はこのとおりであると言っているのかどうか疑わしい。モンテーニュはみずからの目指す理想をのべたにすぎない、と解釈すべきかも知れない。最初の文の「あって欲しい」(J'entends que)は意味の上において以下の文にも関連するはずであり、彼がつづいて『エッセー』の現状を描き記していると読みとるのははたして正しいであろうか。<<elle montre assez>>の動詞の現在形は現実にはすでに存在している状態ではなく、基本的な真実を表すものであり、「内容が十分に示してくれる」とか「内容が十分に示すことができる」とか訳すべきであろう。上の文章は彼の著作の目指す方向を表現したのであって、「内容自体が十分に示している」ほどの秩序や論理性が現実には存在しているかどうかは別問題であろう。私達はより正確に理解するために、随想を「つづりあわせる」ための「連結や接合の言葉」を考察してみよう。後期よりも展開に紆余曲折がすくなく、しかもおなじような特徴のあらわれはじめた中期を調べるならば、「連結や接合の言葉」がどのような機能を果たすために登場し、実際にどのような効果をあげているかなどがわかるであろう。上の文章の本当の意味や章の構成などを知るための、具体的で有益な手がかりが得られるにちがいない。

部分相互の関連を示すために作者は初期より頻繁に連結の語句を記入している。視点を定めて注意さえすれば、これは簡単に気がつく事実である。そしてそれは中期において随想が紆余曲折を増してきたからであろう。もっとも顕著になるのは、閑話休題の類の語句である。たとえば、「要するに私のことに話をもどすと」(II-17, p. 465)、「私の主題について言えば」(II-19, p. 488)、「我々の魂のことにもどるな

らば」(II-12, p. 308)、「カエサルに話をもどすならば」(II-34, p. 570)などの表現によって脱線を修正し、以前にもどりながら出発しなおしている。前二者については、人によれば不必要であると感じるかも知れない。しかし、そこから推理して、モンテーニュは章の組み立てにそれほど細かく気をくばっているなどと結論づけてはならない。これらの語句がなぜ使われているかを評価するためには、以前の展開に注意しなければならない。必要度の低い前二者よりも後二者について考察するならば、その理由が明らかになる。後二者の直前の部分が以前の内容から派生する意義を考えてみよう。それらは主題に関して収集した事実にたいする「エッセー」として生まれている。事実には隠れている意味や教訓を判断する試みとして記されている。それらの記述は主題との関連から見れば秩序を乱す脱線であるが、しかしながら初期の終わりごろ「判断の試し」こそ著作の意義であり、目的であると決めたモンテーニュにとっては省略のできない部分である。つまり閑話休題の類に頼りながら、彼は論理性や秩序の義務と「エッセー」の遂行とのあいだの齟齬を処理しようとしたのである。一方前二者の例は、この妥協が習慣化した結果、特別必要でもないのに使用された形跡であろう。

中期になって彼は主題の論述とか章における秩序の問題に直面したにちがいない。彼の思考や著作の態度がこのような秩序と抵触する性格を強めてきたからである。考えればあたりまえであるが、上記のような語句は秩序づけるためのみならず、一方でみずからの思考に自由な発展を許すためであり、その結果である。したがって、簡単な語句では脱線を修正できないときもあり、第3巻第9章の言明とは反し、「みずから注釈をくわえたりする」。

私が以上に言ってきたのはすべて、動物と人間のすることの類似性を主張するためであり、我々を動物の仲間に加えようとし、入れなおすためである。(II-12, p. 183)

以上において、うぬぼれという悪徳に属すると言った第一の部分について、私がどこまで有罪であるか述べてみた。十分に他人を評価しないのが特徴である第二の部分については、うまく弁解できるかどうかわからない。(II-17, p. 468)

わき道にそれてこのような話題に飛びこんだのは、私がアウルス・ゲリウスに感じ

ている感謝の念からである。彼はプルタルコスの素行に関するつぎのような逸話を書き残してくれた。それは怒りという私の主題に関連している。(I I-31, pp. 529-530)

前後の文脈における上記の三例の特徴について、すこし説明をくわえておこう。最初の例はただ脱線を修正し、主題を確認するためではない。すこしあとに「したがって本論にたち帰って言えば」(pp. 184-185)と書いているように、論証の中心はちがったところにある。作者みずからの注釈は以前の実例と論から読者に特に汲みとってほしい意味に注意を促すためである。以前の展開が量と複雑さを増すうちに、重要な意味がぼけたからである。この例によっても私達は『エッセー』のエクリチュールの多義性を知ることができる。単語にしろ文にしろ、あるいは事実にしろ論にしろ、複数の意味を提示する可能性をふくんでおり、これらに反応して動く思考も同時にいくつかの方向へ発展してゆこうとするときもある。私達が明瞭に伝達するためには、意味を限定するような文脈の構築に苦心しなければならない。しかしそれは、一面から言えば、私達の思考の発展の可能性を圧迫するにひとしい。あるいは現実の複雑さと豊饒さから人為的に遠ざかることになる。モンテーニュは思索と表現がこのような行為になるのを嫌う。上記の注釈の文と「したがって本論にたち帰って言えば」の語句は、この特殊性に由来する文脈の不安定さを示している。前者の主張する意味は本論の論証のために除去されたりはしない独立性をもっていると同時に、本論の秩序を乱している。このような特徴を知らない読者は、前者の文によってようやく展開の筋道について安心しはじめたとたんに、後者の語句に出会い、かえって混乱するにちがいない。

第2巻第17章の例では、注釈による関連づけが読者のまったく思いだせないほど遠くにまでさかのぼっている。それは33ページ以前の、「この傲慢さにはふたつの部分があるように思われる。自己を過大に評価することと、他人を十分に評価しなかつたり、蔑んだりすることである」(p. 435)のところとぴったりと合う。このあと「最初に関しては」と書きはじめ、なんども脱線をしながら468ページに到り、上記のような文章によってまとめなおしたのである。しかしながらその配慮は読者の役にたたないどころか、「どこと、どのようにつながるのだろうか」と余計な当惑をあたえる害のほうが大きい。このような注釈などなしにつぎの主題に移ったほうがずっとすっきりしている。

最後の例の文章は章がはじまってから5ページ足らずで挿入されている。この章は全体

で8ページあまりしかないが、この注釈によつて展開が明確に理解できるようになるかどうか試していただきたい。内容は単純であるが、相互の関係や展開の理由を考えはじめると、意外に複雑であるのに気づくであろう。それは書いているときのモンテーニュの内面の脈絡と、『エッセー』を読んで私達の想像する脈絡とがうまく重ならないからである。両者の距離をちぢめる記述の配慮が不足しているからである。

以上のように、「連結や接合の言葉」や「みずから注釈をくわえた」文章に注目した、私達の研究から知られる範囲では、モンテーニュが論証や展開の秩序のためにみずからの思考を制御している形跡は見られない。それらの語句や文章は読者のために書かれたとしても、脈絡の理解を助ける効果はしばしば疑わしい。中期において思考と著作の原理が論証や章の秩序と矛盾しはじめたとき、彼は後者のために前者を制限しようとはしなかった。前者を自由に発展させた。連結や注釈の言葉はそののちの調整の跡である。この程度の意味においてならば彼が秩序にたいする配慮をしているとは言えようが、調和や統一性や全体的な構成のためにそれ以上の苦勞をしているとは思われない。

書くという行為によって私達は主題の部分についても全体についても、より正確で、より明瞭な認識を得られるが、一方また書く過程において自分の見方や考えが思ってもいなかったような発展をしはじめるときもある。論理性や秩序を重んじる者は前者の意義を強調するであろうが、モンテーニュは後者の側面も大切にする。彼にとっては書くという行為はみずからの思考に明確な言語の形態を付与するのみならず、その発展の可能性を摸索し、試す行為であった。長い章のところどころには、そのような摸索の部分、あるいは移行の部分が存在している。研究者が章の構造を分析し、示す際にも、全体図を描く一方で、主題が移ってゆく内部の仕組みをも明らかにすべきであろう。従来は得てしてこの点を欠いていたために、分析の恣意性の幅が広がり、結論もあやまった方向へ向かいがちであった。新しい発展への摸索がそのまま記されている記述のあり方こそ、『エッセー』の特徴のひとつなのである。きわめて長い第2巻第12章については特にこのような観点が必要である。たとえば「さらにまた、我々が動物たちに分与する資質でさえ」（p. 235）から「その知恵の効果になにか注目すべき実例があるかどうか見て見よう」（p. 243）までを例にとって説明しておこう。この箇所は章の最初の主題である、動物と人間との比較論をまとめている一種の結論部であると同時に、学問の空虚さを批判するつぎの主題が生まれる部分である。私達がこの箇所をたんに移行部と理解するのみならず、摸索部でもあると考えるのは、主題も展開も明瞭なふたつの論のあいだにあり、なおかつ、これ自体

の内部に脱線を含んだ紆余曲折があるからである。それは新しい発展の方向を摸索しながら書いた痕跡であるにちがいない。

人々が人間の優越性の根拠にする特性を空想的な富、動物が自然から受けている恵みを実質的な富として性格づけながら、モンテーニュは動物と人間との比較論をまとめはじめ。そして前者についての列挙のなかに理性、学問、名誉、後者についての列挙のなかに平和、休息、安全、無垢、健康などがあらわれる。文脈の最初の揺れと脱線は、236ページの中ごろにおいて特に健康の大切さが話題にされることによって生じる。しかしこの派生部にもとづく主張（p. 238）は以前の文脈へもどる内容であり、新しい発展部にはなりえない。そこで彼は「しかし、本論にたち帰って言えば」（p. 238）という語句とともに、出発しなおす。私達がすこし以前に検討した、おなじようなまとめ（pp. 183-184）とおなじ語句（pp. 184-185）があった箇所を思い出してみよう。そこでは前者は脱線部に属し、本論は種々の能力に関する人間と動物との比較であった。ところが、これが終わったのちには、関係が逆転する。238ページの語句の言う本論とは、比較から導きだす意見であり、思想なのである。つまり、以前に潜在し、すこし表面にあらわれかけた思考が新しく発展する原動力になっている。そして、それが可能になったのは、以前に脱線的な注釈を「エッセー」として書き記しておいたからであろう。これが第一の原因であるとは言わないが、両者の記述は呼応している。前者の記述の実行が238ページ以後の発展に寄与するところはあったにちがいない。両者の呼応は作者が技巧的に作った伏線ではなく、「エッセー」という態度から自然に生じたのでであろう。脱線を抑制しない思考と記述の方法がみずからの可能性を引き出し、発展させる効果を、モンテーニュは誰よりもよく知っていたにちがいない。そのような効用こそ『エッセー』の著作のひとつの誇りであったにちがいない。

238ページで「本論」に帰ったのちにも、彼はまだ新しい発展の方向を探り当てられず、さらにもう一度脱線する。彼はこの脱線を、「しかし、もう止めにしよう。この論はついてゆきたくないほど遠くにまで私をひっぱってゆくであろう」（pp. 239-240）と短く抑えようとはするが、「さらにつぎのことだけは言うておこう」（p. 240）と付加するのを止められない。そのため多かれ少なかれ文脈が乱れる。直後の論がどのような関連で言われているのか、容易に理解できない読者も少なくないであろう。「すべての哲学の学派が一致して、魂と肉体の平安が最高の幸福であると考えている」という主旨の論になぜ変わったのであろうか。引用詩句やつづく書きぶりからしても、読者は文脈の

理解に不安になるかも知れない。ポルド一本ではいっそう分かりにくくなっている。展開の経緯と方向を読者が察するために非常に重要な文である「学問は我々の苦痛や恐怖や情欲や感冒をすこしもとり除いてくれない」（pp. 240-241）が後期に削除され、「しかし我々はどこにそれを見出すであろう」という文に代えられているからである。前後の数行に限るならば後者のほうが明瞭であるが、さらに長い展開の脈絡のなかで見ると、「学問」という重要な要素を消去している。再度の脱線以後は学問や哲学や知恵などにたいするモンテーニュの関心が底流をなしているのであり、この点を捉えられるかどうか読解の難易を左右する。それさえ察知するならば、学問などに関する批判の色彩がだんだんと濃厚になり、ついに「その知恵の効果になにか注目すべき実例があるかどうか見てみよう」（p. 243）に到ってつぎの主題が定まる道筋を理解できるであろう。

以上のように展開の方向が揺れ動き、混乱している摸索の部分の存在は、モンテーニュの著作の姿勢や『エッセー』のエクリチュールの性格を暗示している。彼にとって書くというのは思索の結果を整理する行為ではなく、思索そのものである。したがって『エッセー』には活動中の思考とおなじように、論理性や秩序のみならず、非論理的な躍動や反秩序的な錯綜もあれば、一貫した流れや整然とした展開のみならず、分岐や逆流や停滞や摸索もある。それが「エッセー」の自然な姿だからである。モンテーニュが書くのは思索を活発にし、その可能性を引き出し、発展させるためである。この目的が追求される結果、『エッセー』には摸索の痕跡のみならず、明らかに整理が不十分であると言える部分さえ存在している。簡単な具体例をあげながら、この特徴について説明しておこう。たとえば第2巻第19章の、「また、彼の正義のことにもどるならば」ではじまる部分（pp. 484-485）に注目してみよう。「正義という点で言えば」（p. 483）以降について補うためにこの遡行をおこなったのであるが、ところがわずか5行たらず書き記しただけで、同人物の質素に話題を変えている。このような書き方をする作家はまずいないであろう。ほとんどすべての人が5行たらずの部分は「正義という点で言えば」の直後のところへ組み入れるであろう。草稿ならいざ知らず、すくなくとも作品にするときには、そのように修正するであろう。あるいは、いっそのこと削除してしまうであろう。この例に見るように、わずか2ページあまりを読みなおしたごく簡単な整理さえおこなう気のないモンテーニュに、一章全体にわたる秩序だった作業を期待できるであろうか。

おなじように容易に判断できる例をあげておこう。第2巻第34章の571ページにあ

る、「彼は自分を目立たせるために、戦では輝かしい色の豪華な甲冑をつけるのを習慣とした」と、つづく「彼は敵の近くでは兵士の手綱をいっそう引き締め、いっそう軍紀を厳しくした」の文章は、前後の内容と関連の薄い細部であり、読者にたいする効果から考えればむしろ除去すべきであろう。あるいは捨てきれないならば、両者とも（pp. 561-562）のどこかに組みこめるはずである。しかし彼自身はそんな修正のために章全体を読みなおす意志などもっていなかったにちがいない。

これらふたつの形跡からも分かるように、彼の著作の方法は位置や順序に注意しながら思考の流れを制御するためではなかった。その活力を引き出し、発展性をあたえるためであった。そのために反秩序的な特徴が生じるのも、止むをえなかった。ちなみに、再度にわたる加筆修正の際においても、削除とは比べようもないほど加筆が多く、語句や文章についての注意ぶかい推敲はあるが、部分の位置の変更や組み換えはおこなわれていない。モンテーニュは展開と全体の秩序を反省しながら整える苦勞など、最初から最後までする気はなかったにちがいない。

彼がそのような努力をしないのはけっきょく内部の部分々に力がそそがれ、価値が置かれているからである。各部分が独立性の強い意義をもっており、前後の脈絡や全体における関係に注意しながら順序や量的な配分を考えたり、章の構成につとめたりする必要がないのである。私達は初期の短い章については論理的な構造を指摘できたが、それは思考法の基本的な単位と章全体の姿が一致していたからにすぎない。中期において章が長くなってくると、特別な技巧も努力も必要としなかったこの調和がくずれはじめる。以前の思考法ではもはや展開を制御できなくなり、ひとつの章は小部分を統一した組織ではなく、ただ連結した集合体にすぎなくなる。

ここにあるのは支離滅裂な断片の寄せ集めである。私が脱線したのは、狩猟について以上の点を言うためであった。しかし私のことに話をもどすならば、私は他人の悲嘆にたやすく心が動かされる質であり、どんな機会でも泣いてよいのならば、すぐにもらい泣きするであろう。（II-11, p. 143）

モンテーニュが自由に脱線できるのは、『エッセー』が「支離滅裂な断片の寄せ集め」になるのを恐れないからである。彼は章の秩序のために脱線部を切り捨てたりはしない。章の統一性よりも、狩猟について考えてみた「断片」の意義を選ぶ。それは前後の脈絡に依

存しない、それ自体の存在価値をもっていると言えよう。上の言葉はたんなる脱線後の弁解ではなく、「断片」を基本的な単位とする随想の姿勢の表明なのである。

第2巻第11章はヴィレーの研究では執筆年代が不確実であるが、しかし、たとえ初期であるとしても、おなじ姿勢は中期において強まりこそすれ、けっして弱まりはしなかつたであろう。たとえば次のような、いっそう積極的な弁明がなされるに到っている。

私の好きな話し方は、紙に書くときも口で言うときとおなじような、単純、素朴な話し方である。滋味ゆたかがかつ力強く、簡潔がかつ緻密であり、冗漫よりは難解さを選び、気取りと技巧を遠ざけ、規則や文脈にこだわらない大胆な話し方である。そこでは一片々々がそれぞれに一体をなすのであり、学者や説教師や弁護士風ではなく、ストニウスがユリウス・カエサルの文章を形容したように、むしろ軍人的である。セネカにむけられた非難にならってカエサルにたいしても、「彼の言葉は生石灰であるが、砂が欠けている」と厚かましい批判をしたい者はすればよい。私は継ぎ目や縫い目の見える織物は好きではない。ちょうど肉体において骨や血管が数えられるようであってはならないのと同様である。(I-26, p. 231)

先に「支離滅裂」と訳した《descousu》という語が、「規則や文脈にこだわらない大胆な話し方」(desreglé, descousu & hardy) という説明のなかで使われている。<<descousu>>とはみずからの随想を卑下した形容ではなく、逆説的な自己主張なのである。それは「気取りと技巧」の拒否であり、「一片々々がそれぞれに一体をなす」という方針にもとづいている。ところで、そのようにして生まれる支離滅裂な作品は、「継ぎ目や縫い目の見える織物は好きではない」と言っているのと矛盾するのではないだろうか。しかしモンテーニュから見れば、論理的な関係や配列にこだわりながら部分々々を組み立てる「気取りや技巧」が、「骨や血管が数えられる」作品をつくる。逆に、日常話すのとおなじような素朴で大胆な随想は、「肉体」(晩年には「美しい肉体」と修正されている)のような生命体に近い調和を生む。論理が意識の流れを分断しないがゆえに、一片々々が一体をなして、しかも「継ぎ目や縫い目」の見えない展開になるのである。

一方「断片の寄せ集め」という表現がすこし別の意味を示すときもある。

この多くのさまざまな断片の寄せ集めは、つぎのような風にできあがってゆく。私

が筆をとるのは、あまりにもだらけた無為にさいなまれるときだけであり、ただ自分の家にいるときだけである。したがって、折々の所用で外出するのが往々にして数か月におよぶときもあるので、この本は何度も休止や中断ののちに完成した。しかも私は最初の思想を二番目の思想によつて訂正したりはしない。自分の考え方の推移を表現し、それぞれの部分を生まれたままの姿で人々に見てもらいたい。もっと早くから始めていたならば、自分の移り変わった様子をながめて楽しめたのに、とさえ思っている。(II-37, p. 599)

つまり『エッセー』は文脈の秩序から見て「支離滅裂な断片の寄せ集め」であるのみならず、時間的な中断のある「多くのさまざまな断片の寄せ集め」なのである。そしてそれは「それぞれの部分を生まれたままの姿で人々に見てもらいたい」からであり、「自分の考え方の推移を表現したい」からである。したがって『エッセー』の中心的な主題である自己描写がからんでくる。しかもそれは後者のような単純な意味においてだけではない。自己描写と『エッセー』の断片性との関係は後者から前者へ深まってゆく。モンテーニュが断片を関連づける論理性に頓着しないで、自分の自然な思考を追って書くようにつとめるならば、一片々々をつなぐ脈絡は客観的な論理ではなく、意識の流れという個性的で人格的な性質を帯びてくる。そこで『エッセー』に書かれた随想は、内容のみならず、展開の仕方においてもモンテーニュという人間を表現するようになる。『エッセー』が断片に分裂する危険をあえておかすのはそのためである。「一片々々がそれぞれに一体をなす」という随想と著作の方針は、作品と自己自身との同一性を追求する感情によって押し進められているのである。この関連はつぎの言葉にも読みとられる。

私は偶然以外には各部分の配列を決める参謀をもたない。夢想のあらわれるがままに積み重ねてゆく。それらは雑踏をなして押しあっているときもあれば、一列にならんでだらだらと続いているときもある。御覧のとおり調子の狂ったものではあるが、私は普段の自然な歩みを人々に見てもらいたい。(II-10, pp. 100-101)

「偶然 (la fortune)」とはたんに外部的な力のみではない。それは論理によって制御しえない思考の流れや、あるいは内面のすべての動きのもっている偶然性でもある。《la

fortune 》や《le hasard 》はモンテーニュにおいては人間の内部の流動性を見つめた表現でもある。『エッセー』によって自己自身の全体を表現し、自己の存在の代替物を創造しようとする欲求が、著作の視線をこのような方向へ深めたとしても、当然であろう。中期の『エッセー』にはこの結果であろうと思われる特徴が増してくる。もちろん、意識の流れとともに生起する「夢想 (resveries)」もそれなりの論理性をもっているのみならず、文章の枠組みのなかに入れる際にも多かれ少なかれ論理的な整備をくわえざるをえない。モンテーニュの方針にしたがって書いたからと言って、まったく無秩序で、まったく非論理的な作品ができあがるわけではない。しかし、また、著作を意識の流れに近づけてゆくならば、その個性と躍動性を共有できない第三者にとっては、反秩序的な性格が増してゆく。書かれた随想によって作りあげられる読者の意識の流れは、著作の際の作者の意識の流れとかならずしも合致しない。前者が後者を捉えきれない混乱や難解さが生じたとしてもなんらふしぎではない。すでに中期の作品にこのような特徴が散見される。これをくわしく論じようとするならば、文体論の分野に踏み入るわけであり、私達の能力にあまる大問題であるが、参考までに気づいた範囲でのべておこう。

第2章第1節で指摘した特徴をまず思い出してみよう。連想の原理によって説明しうる展開が中期の作品に増加しているのは、論理的な抑制を弱め、意識の躍動的な動きに身をゆだねる態度が強くなったからであろう。論理ばかりではなく、イメージの力が記述の方向に作用するようになったのである。読者の理解しがたい連想的な飛躍はそれをはっきりと証している。読者が論理的な関係にもとづく展開を期待している箇所で、作者がイメージに引かれた転進をおこなうならば、記述は曖昧さを帯びざるをえない。あるいは、前後の関連だけならば作者の連想を追ってゆけたとしても、つぎつぎと継起するならば、意識の流れを完全に共有できない読者はだんだんと経路や発展方向が分からなくなるであろう。『エッセー』の随想の難解さにはこのような側面もある。

平行構造は「雑踏をなして押しあっている」「夢想」の痕跡ではないだろうか。ひとつの観念がもっている複数の観念とのつながりが意識に浮かんだとき、論理的な混乱の危険性をおかしながら、いずれの方向へも随想を発展させたからであるにちがいない。また、その際の指示形容詞や所有形容詞や代名詞の使い方には、時として、意識内の随想と書かれた随想との相違に十分に注意を払っていない曖昧さが見られる。平行構造をなすふたつの論は書かれた随想においては時間的な前後関係のなかになされざるをえないが、意識内においては両者は同時的に最初の論とつながっている。そのためこの構造をなす後者の論

を書くとき、モンテーニュは前者の部分を飛び越え、最初の論との関連だけを考えながらこれらの語を使う。諸観念の錯綜を解きほぐすのに注意を奪われ、意識内の随想と書かれた随想との相違を軽視したのであろう。たとえば、第2巻第12章において、《Par cette voye se gaigne le credit des fables divinatrices》(pp. 365-366)ではじまる部分は平行構造のふたつめのシーケンスであるが、ここを読みはじめたとき読者の理解は一時的に混乱するにちがいない。ひとつめのシーケンスは << Un personnage de grande dignité me voulant approuver >> (p. 365) 以下の11行ほどの量であり、その原因は平行構造のみではない。ひとつめにも聖書についての記述があり、共通の論点のような錯覚をひき起こすのにくわえ、ふたつめの最初に《cette》という指示語が使われているからである。そのため読者は直前の部分を継承しながら発展しているかのように感じ、頭のなかに描く文脈に混乱が生じるのである。この《cette》はひとつめのシーケンスを飛び越え、さらに以前の内容を指している。第2巻第34章の《Ayant eu du pire aupres de Dirrachium》(p. 573)ではじまる部分にもおなじような現象が見られる。平行構造のこのふたつめのシーケンスにのっけから現れる《ses soldats》や《de facon qu'il eust plus》の所有形容詞や代名詞は、最初のシーケンスのなかの人物を指しているのではない。したがって「デュルラキオン」という土地についての知識のない者が、以前の誰についてのべようとしているのか、とまどってもふしぎではない。この例だけを見るならば、モンテーニュが平気でこのような書き方をしたのは、地名が以前との関連を表しているからであるとも言えよう。しかし先の例とあわせて考えるならば、やはり私達のような解釈をすべきであろう。意識内の自然な随想を写そうとつとめる結果、一方では、書かれた随想にこのような混乱が生じるのである。

論理によって意識の流れを分断しないならば、書かれた随想は「継ぎ目や縫い目の見える織物」ではなくなる。私達は以前このように説明した。『エッセー』によって具体的に、しかも簡単にそれを知ろうとするならば、主題が交代する部分や新しい主題が決まるまでの摸索部に注目するのがもっともよいであろう。また、すでに主張したように、長い章の展開を読み解くときには、それらの箇所をはっきりと把握しなければならない。第2巻第12章はもっとも哲学的な議論がおこなわれている、もっとも長い章であるが、一方その構成はかなり錯雑している。主題相互の関連や全体的な組み立てはどの程度論理的であり、モンテーニュ自身どの程度そのために努力しているのだろうか。研究者たちの意見はいろいろに分かれている。解決のために彼らは章の構成を分析し、提示してきた。しかしな

がら、分析によって抽出したシエーマが論理的な関係を説明できる類であったとしても、章の展開はかならずしも論理性をもっているとは言えない。作者の最終的な関心のいくつか論理的な関係をもっていることを示すにすぎない。読者が読みすすんでゆきながら主題相互の関係や全体的な発展の経路を把握できるような記述の仕方になっているであろうか。このような観点も大切である。それらが読者の捉えがたい性格をもっているならば、抽出したシエーマのみで論理的な構成であると結論するのは一面的である。中期において『エッセー』の書かれた随想は意識の流れのような、「継ぎ目や縫い目」の見えにくい展開になってくる。それはモンテーニュ自身の説明によっても、私達の作品分析によっても立証される事実である。たとえば「しかしながら人々はそれを疑ってみようとしなさい」（I I-12, p. 296）から「パラスの神が父の頭から飛び出してこの世にあらわれたように」（p. 303）までに注目してみよう。この箇所は以前の主題との関連から見れば脱線部であり、一方つぎの主題はこの展開のなかから生まれてくる。脱線部と思っていたところがいつのまにか主題部になる。前後関係における価値のこのような不明瞭な推移は、作者がみずからの意識の流れにたいして論理的な分節化をくわえることがすくないからであろう。この箇所を読むならば、なんら作為の感じられない話題の変化につれ、だんだんとひとつの主題が定まってゆく様子を観察できる。その展開はなんら技巧的でもなければ、奇を衒っているようでもない。ただ後を追ってゆくだけならば、私達にも違和感はない。展開の経緯や方向について論理的な理解を意識しだすと、不安になってくるのである。しかしこの例では、私達はしばらくしてやや安心することができる。「我々はまず最初に何によってそれを試せばよいのであろうか」（p. 302）以降で理性について検討する方針が明確にされたのち、「さて、人間の理性がみずからと魂について我々に教えてきたことを見てみよう」（p. 303）と、新しい主題が明示されるからである。一方で意識の流れを論理的に抑制しない自由な展開をおこないながら、一方で新しい発展の可能性を感じると、意識的に方向づけをおこない、明確に主題を設定したのである。この例はこのような反論理性と論理性が混交し、「継ぎ目や縫い目」の見えにくいモンテーニュ流の随想をしめすひとつの典型である。

以前の引用文が比喩的に表現していたような特徴を、文章について探しだすのもむつかしくはない。たとえば、意識のなかにおける諸観念の錯綜をкаろうじて整えたかのようなつぎの文章には、「夢想」が「雑踏をなして押しあっている」生気が感じられないであろうか。

Par ainsi le renard, de quoy se servent les habitants de la Thrace, quand ils veulent entreprendre de passer par dessus la glace quelque riviere gelée, & le lachent devant eux pour cet effect, quand nous le verrions au bord de l'eau aprocher son oreille bien prez de la glace, pour sentir s'il orra d'une longue ou d'une voisine distance bruyre l'eau courant au dessoubz & selon qu'il trouve par la qu'il y a plus ou moins d'epaisseur en la glace, se reculer ou s'avancer, n'aurions nous pas raison de juger qu'il luy passe par la teste ce mesme discours, qu'il feroit en la nostre, & que c'est une ratiocination & consequence tirée du sens naturel. (I I - 12, p. 186)

一般的に言ってモンテーニュは関係代名詞や現在分詞を多用している。それはこれらの構文が諸観念の複雑なからまりを解きほぐしながら、できるかぎり意識の自然な流れを書き写すのに便利だからであろう。あるいは、みずからの意識の流れを客観的に捉えなおし、諸観念の関係を明確にする努力がとぼしいがゆえに、名詞を修飾するために多くの言葉が費やされる一方、論理的な関係を表す語句が貧困になるのではないだろうか。『エッセー』に見られる長い文は、躍動的で複雑な意識の流れをかりうじて文という枠組みにおさめた姿であるとも言えよう。そして、時には、その作業がとうとう不可能であった痕跡さえ残っている。

Des Philosophes non seulement Stoiciens mais encore Epicuriens (& cette encheure je l'emprunte de l'opinion commune, qui est fauce : Car a la verite en fermeté & rigueur d'opinions & de preceptes la secte Epicurienne ne cede aucunement a la Stoique, & un Stoicien reconnoissant meilleure foi, que ces disputateurs (qui pour combatre Epicurus & se donner beau jeu luy font dire ce a quoy il ne pensa jamais, contournants ses parolles a gauche, argumentants par la loy grammairienne, autre sens de sa façon de parler & autre creance que celle qu'ils sçavent, qu'il avoit en l'ame) dict qu'il a laissé d'estre Epicurien pour cette consideration entre autres, qu'il trouve leur route trop hautaine & inaccessible. (I I - 11, p p. 127-128)

つまりモンテーニュは最初の《Des Philosophes non seulement Stoiciens mais encore Epicuriens》をとうとう文のなかに組み入れられなかつたのである（かっこの付けかたがおかしいが、初版の印刷はこのようになっている）。そのため彼は直後で《Or des philosophes Stoiciens & Epicuriens, dis-je, il y en a plusieurs qui ont jugé que》と、おなじ語句をくりかえしながら書かなければならない。

つぎのように《Car》をつらねた文章は、「夢想」が「一列にならんでだらだらと続いている」姿であると言えないであろうか。

(1) La fleur d'aage se meurt & passe quand la vieillesse survient, & la jeunesse se termine en fleur d'aage d'homme fait, l'enfance en la jeunesse, & le premier aage meurt en l'enfance: & le jour de hier meurt en celui du jour d'huy, & le jour d'huy mourra en celui de demain: (2) & n'y a rien qui demeure, ne qui soit toujours un. (3) Car qu'il ne soit ainsi, si nous demeurons toujours mesmes & uns, comment est ce que nous nous esjouissons maintenant d'une chose & maintenant d'une autre? comment est ce que nous ayons choses contraires ou les haïssons, nous les louons ou nous les blasmons? comment avons nous différentes affections ne retenant plus le mesme sentiment en la mesme pensée? (4) Car il n'est pas vray-semblable que sans mutation nous prenions autres passions: & ce qui souffre mutation ne demeure pas un mesme: & s'il n'est pas un mesme, il n'est donc pas aussi: ains quant & l'estre tout un, change aussi l'estre simplement, devenant tousjours autre d'un autre: & par consequent se trompent & mentent les sens de nature prenans ce qui apparait, pour ce qui est, a faute de bien sçavoir que c'est qui est.

(I I - 12, p p. 395 - 396)

モンテーニュは(2)を論証するために《Car》によって(3)をつけくわえる。ところが(3)はさらに説明を要する論に立脚しているのに気がつくと、平然とおなじ《Car》をつかつて(3)にたいする(4)の論証をつづける。思考の流れを統制したり、整理したりしない状態ではこのような展開はきわめて自然であり、他者のために明瞭に書こうと

する緊張がゆるんだときには私達も書きかねない文章である。もちろん「だらだらと続いている」感はいなめない。自分の意識の流れの外に立った客観的な反省による整備と再構成が不足していると言えよう。

《Car》の使い方に注目し、この語を使ってどのように相互関係をつくっているか調べてみるのは、彼の著作の態度を知るうえですくなからざる成果が得られるにちがいない。本論の目的に関連する調査のかたわらで、私達はそうのように感じた。つぎの《Car》は先の例とはすこしちがった側面を示している。これがどのように相互関係を表現しているか、考えてみていただきたい。

Quand au parler il est certain, que s'il n'est pas naturel, il n'est pas nécessaire. Toutes fois je croy qu'un enfant, qu'on auroit nourri en pleine solitude, esloigné de tout commerce (qui seroit un essay mal aysé a faire) auroit quelque sorte de parole pour exprimer ses conceptions : & n'est pas croyable, que nature nous ayt refusé ce moyen qu'elle a donné a plusieurs autres animaux. Car qu'est ce autre chose que parler, cette suffisance, que nous leur voyons de se pleindre, de se resjouir, de s'entrapeller au secours, se convier a l'amour, comme ilz font par l'usage de leur vois. Et la difference de langage, qui se voit entre nous, selon la difference des contrées, elle se treuve aussi aux animaux de mesme espece. Aristote allegue a ce propos le chant divers des perdris, selon la situation des lieux. (I I - 12, p p. 182 - 183)

このように書かれた文章の形態においては、《Car》は《& n'est pas croyable , que nature nous ayt refusé ce moyen》の内容にたいして理由を示していると理解するのが普通であろう。ところがモンテーニュは《ce moyen qu'elle a donné a plusieurs autres animaux》との関連だけを頭に置きながら以下を書きつづけている。つまり、「言葉は他の多くの動物も生まれながらもっている手段であると私は言ったが、なぜならば」という風な関係を読者が想像しなければならない。いくらフランス語の文章のすすんでいる順序どおりであるとは言え、普通にはありえない、読解を混乱させる書き方である。彼の意識内では関係詞節の内容がもっともつよく注意を引いたのであろうが、書かれた文にお

ける一般的な比重関係とは相当ずれている。みずからの意識内においては相互のつながりはあらためて語句によって示すまでもないくらいははっきりと感じられているとしても、読者は書かれた文章にしたがって関連を読み解くしかない。上の例は両者の相違に無頓着な書き方である。《Car》にかぎらず論理的な相互関係を示す語句には、ときおりこのような著作態度に由来する個人性と曖昧さがあり、私達読者が『エッセー』の随想の性格を念頭に置いて、いわば翻訳しなおさなければならない。中期や後期の長い章を読むときには、心得ておくべきひとつである。

以上、不十分な調査の範囲内で気のついた特徴を列挙してみたが、私達の研究テーマの傍証として参考にはなるであろう。中期の『エッセー』にあらわれてきた展開の複雑さや難解さはなんら作者の韜晦趣味や技巧によるのではなく、逆に、みずからの思考の自然を写そうとする姿勢によって生じている。この著作方針とともに『エッセー』は論理性と反論理性、秩序と反秩序の両者の性格をふくんだ作品になる。後者がだんだんと濃厚になるのが中期における発展の方向であって、モンテーニュが章という単位を独立的な小世界として意識したとしても、この方向に矛盾するような統一的な構成や全体的な調和をあたえるのは不可能だったであろう。みずからの欲求にかなった著作のあり方を摸索している彼には、とてもそのような余裕はなかったにちがいない。実際、一方で意識の自然な流れをできるだけ表現しようとつとめながら、一方で統一的な論理性と全体的な明確さをもった章を構成するなど、並み大抵の労力ではできない。そのための作業は『エッセー』にかすかな、微妙な形跡しか残さない底のものではない。ところが、後期や晩年の加筆修正にも明らかのように、語句や文の推敲のほかはほとんど増補であって、章の部分々々を注意ぶかく削除したり、組み替えたりしている痕跡はまったくない。彼はこのようなことのために精力を割く著作の姿勢は取らなかったと考えて、まちがってはいないであろう。

モンテーニュがみずからの著作のあり方を追求してゆくにつれ、『エッセー』の随想は「一片々々がそれぞれに一体をなし」、なおかつ「継ぎ目や縫い目」の見えない「織物」になってゆく。それは一方の自己描写という主題に即応した発展であった。彼は精神や肉体の特徴を描くのに飽きたらず、記述それ自体が思考の「普段の自然な歩み」を表現しているような自己描写を望むようになった。しかしながら、また、『エッセー』を書くことは人間や世界を認識する行為でもある。したがって、一片々々が「支離滅裂な断片」になるのを恐れず、客観的な論理によって関係づけ、組み立ててゆく構成を軽視する裏には、人間観や世界観にもとづく認識論がひそんでいる。彼は経験的な事実以外に理性の拠り所はな

いと自覚している。ところが一方、「人間界の事件の多様性がありとあらゆる姿をした、無限の実例を我々に提示する」(II-17, p. 463)のであり、現実の多様性と流動性が認識者を圧倒しようとしている。そのため彼は多種多様な事実を個々に検討する次元に甘んじる。対象の様相をひとつひとつ判別し、理解するのをみずからの責務とする。さらにその上におおのの考察の結果を関連づけ、総合し、全体的な認識を獲得することなど、彼には人間の能力を越えた業に思えるのである。彼の思索の実践原理である「エッセー」は、眼前の一事象の個々の側面を判断する個別的な考察であり、関係の論理によって判断体系を構築する運動はふくんでいない。もしも関係の論理が一章全体にわたる随想の展開を統べていたならば、あれほどわずかな訂正で、あれほど多くの加筆を『エッセー』は許さなかったであろう。モンテーニュが自由に加筆できたのは、一章の随想を構成する各部分には「一片々々がそれぞれに一体をなす」独立性があり、「エッセー」という思考が全体的な構築の論理を欠いていたからである。「エッセー」という原理を墨守するならば、思索の発展とともに『エッセー』はますます世界の多様性と流動性を反映せざるをえないのである。

けっきょく彼が「エッセー」によって獲得する認識は、多種多様で、かつそれぞれがたくさんの様相をもつ経験的事実の性格を離脱することなく、「支離滅裂な断片」のまま『エッセー』に書き並べられてゆく。彼はそれ以上を望まないばかりではなく、それだけですでに大変な仕事だったのである。彼の世代は、ルネサンス初期の人たちが熱狂的に新しい世界を開拓したあと、批判的作業を待っている「無限の実例」を目にした。人間性の輝く新鮮な事実は貴重な教訓を宿しているはずであった。すべてがまだ発酵状態にある世界はその多様性と流動性によって人間の思考を圧倒せんばかりであった。一方スコラ哲学の普遍的な思考の空虚さを体験したのち、経験を理性の根拠に据えて再出発しようとする自覚がすでに生まれていた。ルネサンス初期の人たちが広がった地平を涉猟しながら収集した事実を継承し、そこに宿る意味を批判的に検討することが、モンテーニュの世代の責務であったと言えよう。彼は現実の多様性と流動性に果敢に向かってゆく。事実の意味をただ個々に考察する次元に甘んじ、獲得した意味を統一すべき体系を構想する発展が彼の思索になかったとしても、無理からぬことであろう。それは彼のつぎの世代の責務なのである。

5. 『エッセー』の個性の確立

初期にモンテーニュは『エッセー』の根本的な性格を、書名と同一の語 (essai) を使いながら「判断の試し」と定義していた。中期にそれは微妙に変化し、「生来の能力」 (facultez naturelles) の「試し」へ広がってゆく。と言っても、もちろん判断力が排除されるわけではない。生来の能力のうち彼がもっとも重視するのは、依然としてこの能力である。中期にも相変わらず『エッセー』を「判断の試し」の書として説明するときもある。本質まで変わったわけではない。「判断の試し」と言い、「生来の能力の試し」と言い、どちらも一貫した作者の態度を表している。しかし同時に両者の相違は『エッセー』の進化を暗示している。すでに述べたように、私達は変化のみに目を奪われた、進化の捏造におちいらないように注意しなければならない。内部に同一性を含んでいる変化を捉えるべきであろう。まさに同一性と変貌を表すふたつの語句は、『エッセー』の進化を考察する視座となる資格をそなえている。今やモンテーニュが著作によって試すのは判断力だけでなく、「生来の能力」 (facultez naturelles) 一般である。すなわち「試し」は彼の精神の「自然」 (nature) 全体のかかわる行為になる。それはまた、ただ判断や推論などの知的な能力にとどまらず、モンテーニュという人間の「自然」にも通じる。したがって中期における「判断の試し」から「生来の能力の試し」への発展は『エッセー』の進化を象徴している。しかもそれはその種々の様相をつつみこんだ象徴である。この節で私達は作者自身の証言にもとづく『エッセー』論を展開しようとしているのであるが、「試し」のこの新しい意味に焦点をあてながら考察をはじめることになろう。

まず「生来の能力の試し」である『エッセー』は永遠に未完成の宿命をもっている。ちょうどモンテーニュが死ぬまで補筆訂正をつづけたように、それは永遠に未完成の書である。何度かの出版も完成のしるしではない。未完成の書として出版したところに特色がある。その特色はつぎのような感情に由来する。

私の生まれもった能力について言えば（この本はその試しなのですが）、仕事の重みでたわんでいるのが感じられます。私の理解力と判断力はよろめき、つまずき、ぐらつきながら、かろうじて手さぐりで進んでいます。できるかぎり前進したときでさえ、私はいちども満足をおぼえたことはありません。そのむこうにさらに世界がつづいているのが分かりながら、私の目はどんより曇って、はっきり見分けられません。

たんなる謙遜の言葉と解してこのような感情を軽視するならば、モンテーニュの真摯な探求を理解できないであろう。このような困惑は「生来の能力」で「試し」をおこなっている証である。ルネサンス初期の学者たちが残してくれた巨大な知識の遺産に満足することなく、彼は「生来の能力」で理解し、表現しながら『エッセー』をつくろうとした。そこに未知の薄明の世界を歩む渋滞感が生まれる。既成の思想や知識を自分の認識にすりかえる安易さを排するならば、私達は「よろめき、つまずき、ぐらつきながら、かろうじて手さぐりで進む」動揺や焦燥に苦しまなければならない。先人の思想が認識の対象であっても変わりはない。あくまで「生来の能力」で理解しようとするならば、やはりおなじような感情に襲われるであろう。あるいは、また、「できるかぎり前進したときでさえ」、すこしも満足できないとしてもふしぎではない。イデオロギーに服従して「試し」を放棄しないかぎり、真理の世界に「そのむこう」の部分が残るのは当然である。それは「試し」の真正と能力の鋭敏さの証拠でもある。まだ精神のなかにより良い認識の種子がひそんでいるからである。

いつも心のなかにはあるひとつの観念があって、私が文章にしたものよりりっぱな姿を提示するのであるが、表現することができない。(II-17, p. 438)

したがってモンテーニュの不満足感は彼の見ている世界の豊饒と深遠の同義語である。現在の自分の能力を越えて存在するものを直感する崇高な精神のしるしである。しかしながら彼は『エッセー』を書かなければならない。たとえ崇高な精神のしるしであろうと、強い不満足感は著作の筆を鈍らせるのではないだろうか。おそらく天才と言えども、完璧な作品を創造したとは確信できないであろう。普通芸術家はもっとも完全に近づき得たと信じる断念によって完成とするのかも知れない。しかしともかくも彼らは完全に向かって努力する。ところが逆にモンテーニュはそれを拒否することを『エッセー』の方法にする。未完成の自然さを「生来の能力の試し」という作品の眼目にする。「それぞれの部分を生まれたままの姿で人々に見てもらいたい」(II-37, p. 599)のであり、「最初の思想を二番目の思想によって訂正したりはしない」(II-37, p. 599)のを原則にする。「エッセー」は過去の理解や判断にこだわらず、ある日ある時の「生まれたまま」

を記すがゆえに「試し」なのである。そこに「エッセー」という随想の時間の特徴がある。

「生来の能力の試し」は過去に獲得した認識の吟味でもなければ、未来の認識体系のための実験でもない。対象に向かった自分のなかに芽を吹き、生長してゆく思想を「生まれたまま」表現しようとするとき、精神のなかで成熟しながら変容した過去は現在と一体になり、そのような現在の蓄積が未来に変わる。「生来の能力の試し」はつねに現在の意識を見つめ、現在の継起のなかで『エッセー』ができあがってゆく。『エッセー』は永遠に未完成な現在の堆積である。

不完全、未完成を標榜する『エッセー』はしかし私蔵の日記ではなく、出版作品である。画家の「試し」であるデッサンは目標の絵の影に消える。作家は種々の草稿を作品にすることはできない。つねに「試し」は作品の完成とともに消え去る運命にある。ところが『エッセー』は「試し」でもあり作品でもある。そこで作者と読者のあいだに奇妙な関係が生じる。モンテーニュは自分の思想について、「私の信じているとおりを示しているのであって、人がこう信じるべきだと主張しているのではありません」（I-26, p. 190）と、きっぱりと読者を拒絶する。『エッセー』は「生来の能力の試し」なのであるから、他人にたいして責任は負えないと言う。

私は自分の意見についてとても他人に責任がもてそうもない。自分にたいしてさえすこしも責任がもてないし、私自身満足してもいないのだから。（II-10, pp. 98-99）

モンテーニュは『エッセー』の無責任性を強調する。ではそれは作者の責任の放棄であろうか。すくなくともそれが『エッセー』の作者としての責任を遂行する道なのである。本来「試し」とは無責任でなければならない。もし過去や未来や他人との関係などを考慮しながらおこなわなければならないならば、それは功利的な目的や常識の緊縛から私達を解き放つ、創造的な生命力を失うであろう。責任はその活力と独創性を奪うであろう。モンテーニュは逆説的な宣言によって「試し」の純粹性を守りつづける。過去や未来や他人との関係を超越した、純粹な時間と空間のなかでそれを保持しようとする。『エッセー』の無責任性はじつは真摯な「試し」の裏面である。彼がみずから課す責務は自己の内部を見つめ、「生来の能力」で可能なかぎり自己の思索を発展させ、その過程と結果を忠実に、粉飾なしに『エッセー』に書き写すことである。したがって以下のほかに彼の責任はない。

だから私はいかなる確実性も保証しない。ただ私の考えていることを知らせ、論じている事柄について私のもっている認識が現在どこまですすんでいるか示すだけである。(II-10, p. 99)

ところで、純粹に個人的な時間と空間のなかでおこなう「試し」は、私達の行為のあるべき姿に似ていないだろうか。過去に支配されず、未来を思い煩わず、社会的利害のなかで右顧左眄することなく、「生来の能力」の語る声に耳を傾けながら現在の状況と直面するとき、深い内部から湧出する、私達自身の生の営みが始まるのではないだろうか。自己自身を實現し、創造する行為が可能になるのではないだろうか。しかしながらこのような純粹な時間と空間はめったに得られない。現実にはそれを妨げる障害が無数にある。モンテーニュは、いかにりっぱな言葉で飾られていようと、それらはほとんどすべて人間に自分自身の富と力を忘れさせ、空虚なものを追わせる虚名であると考えた。彼はできるだけ純粹な時間と空間に近づけることによって、「試し」を自然の創造的な生気に触れさせようとしているのである。論証の余裕はないが、『エッセー』を読むならば、彼の人間観や社会観や自然観のなかにおなじ脈絡にある思想を見出すであろう。

「生来の能力」は当然ながら「習得した能力」と対立する。純粹性を保とうとするならば、前者についての「試し」は後者を排除する必要がある。『エッセー』は学んだ知識を試す試験であってはならない。

この本は純粹に私の生まれもった能力の試しであって、けっして習得した能力についての試しではない。だから誰かに私の無知を突かれても、痛くも痒くもない。実際私は自分の意見についてとても他人に責任がもてそうもない。自分にたいしてさえすこしも責任がもてないし、私自身満足してもいないのだから。知識を求めている人は、知識のあるところへ行って漁るがよろしい。これほど私の不得手なものはない。ここにあるのは私の空想であって、これによって私は事物についてではなく、私について知識をあたえようと努めているのである。(II-10, pp. 98-99)

「生来の能力の試し」は反学問、無知を標榜する。『エッセー』は諸般の書籍を渉獵した知識を誇る本であってはならない。ちなみに当時は博学な著作が流行していた。文芸や思想にかぎらず、史実や故事逸話、風俗習慣など広く人事全般にわたる古今東西の知識を集

めた、文集や金言集や実例集が続々と編まれた。反学問の姿勢は、ひとつはこのような百科事典的な著作にたいする批判である。さらにひとつは、表現や思考の技術を教える学問を考えなければならない。この方針によってモンテーニュは弁証学が要求する整然と組み立てた論考や、細部に過敏な文法家の煩瑣な語法や、修辞学の技巧を凝らした文章などを否定しているのである。これらが中世の教育体系をなす七自由科目のうちの三学に相当するのは、言うまでもない。下線部に注意しながらつぎの引用を読むならば、今指摘した関連をたやすく察知できるであろう。

ただすこしでも賢くなろうとしているだけであって、学者になりたいとは思わない私にとっては、あのようなアリストテレス風の、論理学的な構成は具合がわるい。すぐに要点に進んでほしい。死とは何か、快楽とは何か、私はこんなことは十分にわかっている。そんな分析に暇どってほしくない。最初から正当で確固とした道理を説き、それらの攻撃に堪えるすべを教えていただきたい。そのためには文法家風の緻密さや言葉と論の巧妙な組み立てなどは役に立たない。(II-10, p. 111)

モンテーニュは『エッセー』の材料になっている知識についても責任を回避し、「空想」の素朴さを選ぶことによって、「生来の能力の試し」をさらに純粹にする。こうして彼は『エッセー』を過去や未来の束縛からも、第三者にたいする関係からも、学問という重荷からも解放し、二重三重に「試し」の自然な創造性を守る。

ところで、もっとも通俗的な意味においては学問のある人とは知識のある人のことであり、知識の収集と保持にあたる能力は記憶力である。したがって反学問を唱える者は「生来の能力」のなかで記憶力だけは尊重してはならないであろう。実際モンテーニュはたびたび記憶力の貧困さを吹聴する。たとえば、

おそらく私もいつかは事物を知りえるかも知れない。あるいは、偶然に運ばれて明確な認識に到ったときも、かつてあったかも知れない。しかし私の記憶力は保管を託した蓄えを三日保持する能力もない。(II-10, p. 99)

しかしながら記憶力が貧弱であると感じる感情は、現実にもそうであったかどうかというばかりではなく、対象にたいする接し方にも由来している。たとえば、読んだ哲学書の内

容をよく覚えているかどうかは、当人の記憶力だけが原因ではなく、思想を読む態度がおおきく影響する。思想についての知識を得ようとする者は自然とその外貌を記憶するほうへ意識が向かう。しかし哲学者の物の見方や考え方に注意をそそぎ、その思想を自己の内部に反射させ、いわば自己を耕しながら読む者は、内容を言葉で思い出す困難が大きいと言えよう。どの本にあった誰の思想であるかなども、たやすく忘れてしまうであろう。「生来の能力」で「試し」つつ読む者が、知識にたいしては注意がうとくなり、記憶があやふやになりがちなのは当然である。モンテーニュの記憶力の欠如の感情は『エッセー』を書く姿勢とまったく符合している。記憶が頭に貼りつける知識ではなく、理解が内部に沈殿させるものを求める態度がその原因である。

記憶というのは学問の集積所であり、容器である。それがこれほど欠如しているのであるから、知識がほとんどないとしても、あまり嘆くにはあたらない。私は諸学芸の名前や、それらが何をとり扱っているかなど、およそのことは知っている。しかしそれ以上は何も知らない。私は本に目を通しはするが、研究したりはしない。私のなかに残るのは判断力が取得したものだけであり、それが摂取した考え方や思想である。著者や引用箇所やその他の事柄はすぐに忘れてしまう。(II-17, pp. 455-456)

モンテーニュは「諸学芸の名前」や「それらが何をとり扱っているか」とか「著者や引用箇所」とかの記憶にたいして、「判断力が摂取した考え方や思想」を対比する。彼はよりもこれを目的にしなければならない。そのためには、記憶力が保存する外面的な知識はむしろ「すぐに忘れてしまう」ような態度が望ましいと言えよう。該博な知識をおさめている『エッセー』の作者が記憶力の貧困さを嘆くのは、けっして過度の謙遜でも銜いでもない。記憶力が貧弱であると感じたとしても、なんらふしぎではない。なんら自家撞着ではない。生涯書きつづけた『エッセー』の根本である「試し」の性格とまったく一致した感情である。まったくおなじ脈絡にある真実の言葉である。それは「試し」が知識の収集と蓄積におちいるのを恐れる態度に由来している。記憶力の貧困さを嘆く声はこの著作方針を墨守する自己確認でもあれば、その意義のパラドクサルな弁明でもある。

しかしながら反知識の書であるという宣言は、『エッセー』にあふれる知識に驚かされる読者にはなお合点のゆかぬところが残るであろう。『エッセー』は古典古代の思想、文芸、

歴史、風俗などの知識の宝庫の観がある。さらに作者の関心は古典古代にかぎらず、近代ヨーロッパはもとよりオリエント、アジア、新大陸など古今東西にわたっている。とくに初期の『エッセー』はこのような知識を拾い集め、綴り合わせただけではないのか。それ以外に「判断の試し」とか「判断力が摂取した考え方や思想」とかが見られたであろうか。反知識の宣言は初期の作品とまったく矛盾しているように思われる。初期から中期のあいだに著作の姿勢が反転したのであるだろうか。確かに読書から拾った実例に埋まった初期の『エッセー』は、まったく知識の書のような外見を呈している。しかしながら肝心なのは知識の量よりも知識にたいする態度である。モンテーニュがどのように読書実例を扱っているかを見なければならぬ。彼の「判断の試し」が読書実例の世界からはじまったのは事実である。しかしそれは「実例」(exemples)こそ「私のような非力な者が追うにふさわしい獲物」(I-14, p. 67) だったからである。執筆当初の彼は賢明な著者たちによっていわばすでに調理された読書実例をまず活用しようと考えたのである。本論の第1章で作品の構造を分析しながら繰り返し指摘したように、彼はただ読書実例を集めることに汲々としたのではない。読むという行為だけでは無秩序な散在を免れないさまざまな実例を、彼なりの判断で解釈し、組み合わせながら、判断と認識の練習をするためであった。「判断力が摂取した考え方や思想」は初期ではまだ知識の影に隠れていたが、そのような努力が実例の構成を司っていた。それはまた次のようなところからも知られる。モンテーニュはいつまでも読書実例に甘んじてはいない。すでに初期においても彼は読書実例を手本にしながら、みずからの見聞する世界のなかから自分自身で実例をさがしだしている。この変化は彼の関心が読書実例の収録に集中していなかった証拠である。知識の内容を理解し、判断しようとしてつとめた結果、事実を見る目が成長し、現実のなかに判断の対象をさがすのが可能になったのである。

読書実例が『エッセー』に占める比重の推移は「判断の試し」の進化の指標である。中期においてもそれは初期から連続した発展を見せる。たとえば第1巻第24章はローマの偉大さを示す実例を集めただけの作品ではあるが、そこにもひとつの変化が認められる。冒頭の文章は、読書実例を集める一方でモンテーニュは目を現代に向けていることを教えている。もう彼は読書実例の世界と現実の世界をおなじ地平に眺めて書いているのである。第2巻第9章はさらに進化した姿を見せている。実例を綴り合わせているのに変わりはないが、パルチア人の武器や武装法について集めた読書実例をフランスの例と一対に組み合わせながら章をつくっている。この構成は思索における両者の世界の一体化を示している

と言えよう。読書実例の影に隠れていたモンテーニュ自身の観察と判断が表面にあらわれるだけの成長を遂げたのである。今や彼は自分自身の観察眼で経験的な実例を発掘し、「生来の能力」だけで「判断の試し」を遂行することができる。もはや読書実例は必ずしも必要ではない。中期の『エッセー』では、自分自身の見聞から引き出した実例がはるかに多くなる。たとえば第1巻第26章や第2巻第8章のような長い章においてさえ、ほとんどすべて彼自身の観察によって捉えた実例である。これらの章は、読書実例をとり除いたとしても、論の運びになんら破綻は生じない。初期においては読書実例を組み立てる臆な意識でしかなかった「判断力が取得したもの」が、随想の展開を導くようになったからである。そして読書実例や見聞実例はその流れのなかに吸収される。中期に到って彼の思索はもはや読書実例のあとを追ってはいない。実例に依存した思索は実例を活用する思索に成長する。「判断の試し」は読書実例の影から抜け出て、「生来の能力の試し」というみずからの歩みをはじめめる。

読書実例と見聞実例という素材の変遷を以上に粗描したところからも察知できるように、いかに初期の『エッセー』が非個人的な外見であろうとも、やはり「判断の試し」が著作の中心であった。素材の進化は初期においてモンテーニュが「判断の試し」につとめたひとつの証明であろう。読書実例の教える意味を考え、判断しようとする努力がなければ、実例が進化するはずはないからである。中期において読書実例と見聞実例をみごとに組みこんだ随想へ成長したりはしないからである。したがって「生来の能力の試し」を反知識と性格づけるのは、けっして初期のことを忘れた勝手な宣言ではない。「判断の試し」の姿勢の継承である。ただ初期においてはまだ「判断の試し」が思想の展開へ発展しない未熟さのゆえに、読書実例という知識が表面を覆っていた。しかし中期にはこの方便への依存を脱する。反知識の宣言はその勝関である。「判断が摂取した考え方や思想」が『エッセー』の主体になった自信の表明である。

『エッセー』が「生来の能力の試し」として超時間、無責任、反学問の性格をもつのであれば、モンテーニュはいつ何を論じようと良いはずである。「私自身の生来の能力だけを使って、頭に浮かぶすべてを手あたりしだいに語る」（I-26, p. 187）とは、この関連に触れているのである。主題のこのような無限定性や選択の偶然性はやはり初期にはじまる。著作の目的である「判断の試し」がほぼおなじ性格をもつからである。下の言葉にはこの共通性が十分に読み取れるであろう。

判断力はあらゆる事柄に使う道具であり、いたるところに顔を出す。したがって、ここでおこなう判断の試しについても、私はあらゆる機会を利用する。自分にはわからない問題であろうと、試しに判断をはたらかせ、渡れそうな浅瀬はないか遠くから探してみる。・・・ [中略] ・・・あるときは空虚な、つまらない事柄にも判断を試し、信憑性をあたえたり、支えたり、補強したりするものがないかどうか考えてみる。あるときは議論の尽くされた高尚な問題に判断をめぐらしてみる。・・・ [中略] ・・・私は主題については偶然が提供してくれるままに任せる。私にとってはどれもおなじように結構なのである。(I-50, pp. 459-461)

結局「判断の試し」も「生来の能力の試し」も基本姿勢になら変わりはない。ただ初期においては前者は読書実例に強く依存し、思想の展開に発展するのはまれであった。モンテーニュの判断はまだ読書実例という事実の表面にとどまり、豊富な意味を汲みとる力が欠けていた。あるいは、そこに洞察した意味が経験のなかに蓄積されたみずからの内部の意味と呼応する交流は、まだ不足していた。したがって「判断の試し」が著作を導こうとしても、結局『エッセー』は借用した知識に埋まるしかなかった。ひとつの章が短いのもおなじ理由による。初期の彼がさがす意味の関連はすぐに切れ、また別の「試し」の対象を選ばざるをえないからである。一方中期以降では章はだんだんと長くなり、随想は紆余曲折を帯びてくる。判断力が看取する意味の脈絡が長く、複雑になったからである。さらに自己描写が『エッセー』の目的にくわわると、随想はモンテーニュという人間を表す諸事実の脈絡と交錯し、その特徴を強める。したがって、「生来の能力だけを使って、頭に浮かぶすべてを手あたりしだいに語る」という「生来の能力の試し」の態度が、基本的には以前の「判断の試し」と変わらないとは言っても、『エッセー』の随想に初期とは比較にならないほど錯綜した展開を招来する。鋭敏さと活発さを増した判断力が看取する意味は、読書実例の世界と経験的な世界が融合し、さらに自己自身という内面世界が交錯した複雑な脈絡のなかにある。過去にも未来にも束縛されない超時間性、すなわち随想の前後の組み立てにこだわらない自由さでそれを追ってゆき、「それぞれの部分を生まれたままの姿で人々に見てもらおう」ように書き記すならば、まだ論理が規整していない意識レベルの立体的な意味の錯綜が、前後関係の平面にしか置きえない書かれた随想を混乱させることになる。無責任性、すなわち自己の意識のなかに動く思索を忠実に表現する以外の責任を拒否する態度は、第三者には読み取りがたい脈絡をそのまま『エッセー』に写すことになる。

初期においては「判断の試し」が依拠していた読書実例という知識の客観性が一章を統一する機能をもっていた。しかし反学問を標榜する「生来の能力の試し」はもうこの客観性を離脱している。弁証学や修辞学を否定して「生来の能力」のみが導く自然な思索を尊重し、「頭に浮かぶすべてを手あたりしだいに語る」随想は、何を秩序の原理にすれば良いのであろうか。おそらく「試し」をおこなっているモンテーニュという人間の自然な秩序、なにか人格的な統一性以外にはないであろう。しかしながらそれが作品に有効であるかどうかは疑問である。人間の自然な思考は第三者の理解を越える飛躍や錯綜を宿している。論理的な関連とは別な理由で発現を求める要素をふくんでいる。その統一的な秩序を感じられるのは本人の内的感覚、無意識の世界までかかわる深い内的感覚のみであって、読者がつねに作者と一体になってそれを感じるのとは不可能だからである。

『エッセー』が以上のような性格の作品であるならば、その随想は何を伝えようとしているのであろうか。最後に残るのは「試し」をおこなっているモンテーニュという人間以外にはない。

ここにあるのは私の空想であって、これによって私は事物についてではなく、私について知識をあたえようと努めているのである。(II-10, p. 99)

「生来の能力の試し」はこうして自己描写が終着点になる。初期以来の「試し」はこの著作方針を発見し、純粹性を完成する。モンテーニュが判断し、考え、書くのは、ただ自然な自己を表現するための行為になる。逆に言えば自己描写は「試し」と一体の性格をもっている。ところで、すべての文芸作品はつまるところ作者の自我の表現であり、作者自身を知らせているとも言える。哲学者も思想によって自己自身を表現している。『エッセー』の自己描写はこれらとどこが違うのであろうか。芸術家が自己表現の行為によってつくる作品は、完全に向かって歩む彫琢の果てにある。その過程にある下絵、草稿、雛形は作品ではない。一方『エッセー』は不完全な過程を作品に変える。「それぞれの部分を生まれたままの姿で」表現する「試し」の軌跡がモンテーニュという人間を描いてゆく。『エッセー』は人生の歩みとおなじように、永遠に完成しない生成の書である。モンテーニュはその不完全性を生きることによって作品をつくり、自己自身を描く。芸術家でもなく哲学者でもなく、一般の市井の者として書きつづける。作家であることを拒否して作品のなかでも不完全性を甘受するとき、著作と人生が接近し、書くことが生きる彼を知らせることになる。

したがって『エッセー』が表しているのは完成した思想ではなく、思想を練っている思索であると言えよう。それは発見した真理についての論証ではなく、真理を求めて歩む思索によってつくられる。『エッセー』の特徴は彼が書きながら考え、考えながら思想を形成してゆく過程にあり、その動きや推移の記録が独創的な自己描写になる。そのため普通の思想書とは異なり、奇妙ではあるが、随想はみずからの真理性を放棄しなければならない。

だから私はいかなる確実性も保証しない。ただ私の考えていることを知らせ、論じている事柄について私のもっている認識が現在どこまですすんでいるか示すだけである。(II-10, p. 99)

もし自分の思想の「確実性」に責任を負わなければならないならば、「それぞれの部分を生まれたままの姿」で示し、自然な自己を描くことができなくなるであろう。客観的な真理体系を含みこもうとする思想は日常的な自己を越えた構築物でもある。したがって、「試し」つつある判断や思想を記すのでないならば、一方で自己の自然は描けない。モンテーニュは現在の認識に注意をそそぎ、自分のなかから正確にそれを引き出し、『エッセー』に写すのをみずからの責務とする。彼はこの点の「確実性」については責任をもたなければならない。とすれば必然的につぎのような責務も生じる。

私はつぎのような点については責任を負わなければならない。もし私の論がもたついたり、自分の意見に空虚なところや歪んだところがあってもすこしも気づかなかつたり、人からそれらを指摘されながら感じとれなかつたりするならば、それは私の責任である。(II-10, p. 100)

反学問を標榜する「生来の能力の試し」が「現在」の認識を捉える「確実性」を身上とするならば、「生来の能力」の能うかぎり自分の考えを正しく導き、発展させるように努めなければならない。そして、読者に伝えるためには、まず自分自身が自分の思想をよく把握し、ふさわしい姿形をあたえてやらなければならない。したがってその表現の苦勞は自己自身を発見してゆく行為でもある。

私は私の信じているとおりを示しているのであって、人がこう信じるべきだと主張しているわけではありません。ここで私が目指しているのは、ただ自分自身を明らかにすることだけです。(I-26, p. 190)

こうして、主題にかかわらず、随想することが自己自身を発見することであり、自己を描き知らせることであるという「試し」のサイクルができあがる。そしてモンテーニュはどのような認識についても読者の信ずべき客観的な真理性を放棄する。真理に関する自分の思想の責任を拒否しながら、執拗に「試し」のサイクルのなかを進む。しかしながら、それは真実の認識にもっとも近づく道なのではないだろうか。事物について書き記す行為を自己発見と自己描写に一致させるのはけっして容易ではない。そのためにはやはり超時間、無責任、反学問などの姿勢を守らなければならないであろう。もし過去からの経緯や未来についての憂慮によって現在の考えを歪めるならば、もし人の反感を買うのを恐れて自分の意見をごまかすならば、もし他人の思想を代用して自分の認識にするならば、随想が同時に自己発見となり自己描写となりはしない。それゆえに、純粹な「試し」のサイクルのなかで生まれる認識は真実であると言えよう。それは客観的な真理の資格に欠けるところがあるとしても、世界と自己のあいだに裂け目がない認識である。それはたんなる知識に終わるような認識ではない。認識が自己と一体になって生まれる人間的な真実である。人間からまったく独立した真理が存在するとしても、事物についての認識が同時に自己自身についての発見を招来しないならば、それは人間を導く真実の認識ではないであろう。

「試し」のサイクルにたいする執着はモンテーニュの真実にたいする感覚であったにちがいない。対象と自己とのあいだに夾雑物のない透明な空間、赤裸な自己が対象と向かいあう空間、そのような認識の空間では、対象を前にした自己を見つめ、自己のなかに生まれる考えを追究することが、同時に対象についての真の認識を獲得する道なのではないだろうか。彼は「生来の能力の試し」と自己描写を掲げ、いったん真理を放棄することによってこの空間を作りあげ、自分が実感できる真実の認識を探求しているのである。もちろんそのためには「生来の能力」にたいする強い信頼がなければならない。この点でその「試し」は正しく判断し、真偽を弁別するためにすべての人が生まれながらにもっているという「良識」(bon sens)の思想の先触れである。彼から見れば認識を妨げるものは、「生来の能力の試し」が排除した、浅薄な自我の過去や未来への拘泥とか人間関係とか既成の知識などの人為的な夾雑物である。おなじような自然への信頼とおなじような人為にたい

する批判は彼の思想の種々な面に存在している。

「生来の能力の試し」と自己描写の結合は随想のスタイルにも重要な影響をおよぼす。もともとモンテーニュの思索は事物の論理的な構造にたいする関心が乏しく、不一致な、多様な様相を追って展開するところがあった。読書実例の列挙にすぎないような初期の章においても、事物の多様性にたいする興味がしばしば構成を司っている。中期に到って思索が読書実例の圧迫を脱し、活発に活動しはじめると、個性的な「多様性の論理」によって随想は豊かなうねりを帯びてくる。さらに彼は自然な思考を追求し、その非論理性をも許すようになった。随想の論理的な連鎖や統一的な秩序に拘泥しない、自由奔放な展開があらわれてくる。『エッセー』に書かれた随想は気ままに話す日常の雑談や、時には、論理の枠をうち破る、意識内の躍動的な動きを思わせるようになる。自己描写はこのような進化を助長し、促進したにちがいない。

あなたはここに、私と話しているときに御覧になったのとおなじ風貌、おなじ姿態をお認めになるでしょう。たとえ普段の私とちがった別の態度やもっと上品でりっぱな姿を装いえたとしても、私はそうはしなかったでしょう。と申しますのは、これらの記述については、あなたの記憶にたいしてありのままに私を提示する以外の成果を望んでいないからです。(II-37, p. 646)

こうして超時間、無責任、反学問の随想には、自己描写の要請する新しい条件がくわわる。それは作者の思考の動きを「ありのままに」表現していなければならない。すでに「試し」の特性によって相互の論理的な関連や統一性を失いはじめていた随想が、自己描写によって追認されるばかりではなく、さらにその個性が増幅される。なぜなら『エッセー』に記す随想をみずからの内部の「ありのまま」の動きと一致させようとするならば、その展開にはどうしても意識の流れの超論理的な躍動が含まれてくるからである。意識における思考の流れを自然のままに書き記そうとしたとき、モンテーニュは『エッセー』が新しい性格を帯びるのを感じたはずである。

しかしながら往々にしてあまりにも放縦に流れ、技巧や気取りを避けようとするあまり、別の極端におちいるときがあるのも十分に感じている。(II-17, p. 441)

極度に自然さを追求するならば、作品としての『エッセー』に厄介な問題が生じる。つまり「書かれた随想」と「意識内の随想」との齟齬である。後者はしばしば、同時にいくつかの方向へ発展しようとする多岐な、立体的な構造をもっている。しかし前者はそれらすべてを表現することはできない。論理的な目的意識によって取捨選択をおこない、文章という平面的な継起のなかにおさめないならば、混乱を招くであろう。しかも意識内の随想は時として、当人以外にはつながりが理解できないダイナミックな飛躍をする。そのまま書かれた随想へ移しえない超時間的な豊饒性や、客観的な言語記述の掌握しきれない活力をもっている。自己の思考の自然さを追求してゆくならば、書かれた随想である『エッセー』はどうしても秩序を欠いてくる。「試し」と自己描写を一致させるために、可能なかぎり自然のままを書こうとしたとき、モンテーニュはこのような問題に直面したはずである。できるだけ「技巧や気取り」を排除したとき、『エッセー』の記述を乱す、自己という自然の力強い豊かさを覗き見たはずである。ちなみに個我の確立はすべての時期をつうじて思想の重要な核のひとつであるが、彼は作品で自己描写につとめるなかで、自己という世界の豊饒性と活力を発見していったとも言えるであろう。

『エッセー』は「判断の試し」から「生来の能力の試し」へ発展し、自己描写に到達した。私達はこの進化を「試し」と自己描写の親近性から想像してみることもできるであろう。まず「判断力はあらゆる事柄に使う道具であり」、その「試し」は、「主題については偶然が提供してくれるままに任せ」、「あらゆる機会を利用する」。「判断の試し」は対象の無限定性とその選択の偶然性によつて、経験領域のさまざまな側面へ広がってゆく。そのため精神の多方面の個性があらわれやすい行為である。しかも対象は「自分にはわからない問題であろうと」、「空虚な、つまらない事柄」であろうと、「議論の尽くされた高尚な問題」であろうと構わない。その世界は意味と無意味が混沌としている日常の世界に近い。飾らない平素の思索もそこに参加することができる。「判断の試し」は対象の質から見ても、量的な広がりから見ても、広く深く自己の自然のかかわる行為である。

つぎに「試し」は自分の意見を関係づけ、組み立てながら認識体系をつくってゆくような思索ではない。折々の判断や考えの可能性を最大限に引き出すのが目的である。したがって、修正や再構成に精力をそそぐのではなく、「それぞれの部分を生まれたままの姿で人々に見てもらおう」（II-37, p. 599）のは自然ななりゆきであるとも言えよう。

さらに「試し」は自己自身を他人との関係から解き放って自由にする。「試し」であるならば、他人に責任をもたなくても良い気楽さがある。「私は自分の意見についてとても

他人に責任がもてそうもない」と言うことが許される。「私はいかなる確実性も保証しない。ただ私の認識が現在どこまで進んでいるか伝えるだけである」と、開きなおれば良い。それは自然な自我の発露を抑制しないのみならず、率直に自己自身にしたがった思索へ誘う。

「判断の試し」が「生来の能力の試し」へ発展するなかで、「試し」はいっそう自己自身に近づく。「生来の能力」についての「試し」であるならば、理解力や判断力が「よろめき、つまづき、ぐらつきながら、かろうじて手さぐりで進んでいる」姿が『エッセー』に記されようと、おかしくはない。普段の普通の思索が作品のなかに市民権を得る。「生来の能力」と限定し、反学問の立場を標榜することによって、修辞法や弁証法などの思考や表現の技術を拒否し、自己の自然を主役として登場させる。たとえ読書の影響のもとに著作がはじまったとしても、記憶力が捉えたものではなく、「判断力が摂取した考え方や思想」に焦点が置かれるようになる。こうして「判断の試し」から「生来の能力の試し」へ発展するとともに、精神の自然が作品の主役になってゆく。「試し」自体の進化が作者全体の自然を描く自己描写のごく近くにまで達する。それは自己描写にゆきつく性格を多分にふくんでいると言えよう。と言っても、もちろん必然的な結果ではない。「試し」を自己描写の方向へ促す力がなければならない。その原動力は以前に説明した、自己描写の感情的な原因と認識的な原因である。無位無官の無聊の日々のなかで希薄になってゆく存在感に苦しむモンテーニュの心は、思想を媒介にする自己表現に飽き足りず、自己と作品とのいっそう緊密な関係を欲していた。また一方では、読書実例から見聞実例へと事実の領域を開拓する努力のなかで、さらに自己自身という事実の層へ進んでいった。これらの原動力に促されながら、「試し」は自己自身を対象にくわえ、自己描写と一体になってゆくのである。

モンテーニュは最初『エッセー』を「判断の試し」であると意味づけた。一方すでに初期の章のところどころに自己描写に近い表現様式があらわれている。官職を放擲しながらまだ新しい存在様式を確立しえない彼は直接的な自己表現を求めていた。その志向のもとに彼は見聞実例の世界のみならず、自己自身という事実の領域へ向かっていった。つまり自己描写は最初から「判断の試し」と一致した著作方針だったのではない。一方では「ここでおこなう判断の試しについては、私はあらゆる機会を利用する」と言いながら、「実習について」（II-6）における精緻な自己観察については、「死に慣れるためには死に近づくしかない」（II-6, p. 58）という「教訓を汲みとらなかったならば、あま

り意味がないであろう」(II-6, pp. 57-58)と評価している。どんな事柄でも良いはずである「判断の試し」の対象にはまだ自己自身が含まれていなかった。この章における自己自身という事実の層の発見は、「教訓」のような別の価値観で意味づけられていた。しかしながら中期における自己描写の実行が思索にも影響をおよぼしたのである。自己を描きながらの思索はおのずと日常的な経験の世界へ思索を導き、自分自身にそくして思想を形成させたにちがいない。それは読書への依存を脱する効果的な方法であったにちがいない。あるいは、古人の思想を語りながら自己自身に言及するのは、書物の言葉と自分の人生とのあいだに呼応する関連を呼び覚ましたであろう。そして古人の思想の摂取を促したのである。あるいは自他の対峙の構造に立つ自己描写は、自己を語ることが同時におなじ視点で他者を観察することであり、他人を批判することが同時に自分を反省することであるという観察と認識のリズムを生み、自己と他者の世界を往来する思考法を獲得させた。自己描写によって、外的世界にたいする認識行為は同時に自己自身について認識を深め、自我を確立する行為になった。こうして中期における進化のなかで、自己自身という世界が外部世界と変わらない、おなじ「判断の試し」の対象になったのである。

しかし何を知られようと、ありのままの自分を知ってもらったならば、目的を達している。しかも、これらのような、じつに愚かでくだらない事柄をあえて筆で記すことについて弁解はしない。この私という主題の卑小さがこれ以上の充実と堅牢さに耐えられないのである。・・・[中略]・・・いずれにせよ、他人の忠告をうけるまでもなく、このすべてが価値も重みもなく、私の企てが大胆で無謀であるのも、ちゃんと承知している。私の判断が混乱していなければ十分である。この本はその能力の試しなのである。(II-17, p. 459)

自己を観察し、描くのはもはや何か有益な教訓を引き出すためではない。どんなに「愚かでくだらない事柄」であろうと、「ありのままの自分を知ってもらったならば」、それはモンテーニュの「判断が混乱していない」証明である。りっぱに『エッセー』を書く目的、「判断の試し」という目的を果たしたのである。自己自身が主題になった今では、「判断の試し」と自己描写というふたつの方針は表裏一体である。『エッセー』は確かな存在感を求める自我の欲求を吸収し、モンテーニュの著作行為は感情的な安定性を増す。『エッセー』を書く行為は彼の現実の存在に重なった、新しい存在様式になる。空虚なものでも些細な

ものでも、どんな問題でも良いような「判断の試し」にはどうしても知的な遊びの空しさがあった。それは自己の存在に深くかかわった行為ではない。彼は本を書く職業を選んだのではなかった。『エッセー』を書きはじめたのは、退官生活の無聊のなかで精神が「茫漠たる想像の野原をあちらこちら奔放に走りまわり」（I-8, pp. 30-31）、「どこにでも居る」（同p. 31）がまた「どこにも居ない」（同前）ようになった自分に「確固たる目的」（同前）をあたえるためであった。しかし対象になんの中心もない「判断の試し」は「どこにでも居る」がまた「どこにも居ない」ような希薄な存在性を脱していない。まだおなじような存在の不確かさと曖昧さのなかにある。したがって中期において「判断の試し」が自己描写と一体になったとき、モンテーニュは『エッセー』の著作に深い満足感を覚えたにちがいない。まだ第三者にたいする価値は弁明できないにもかかわらず、彼が自己描写に執着するのも無理はない。「判断の試し」と自己描写を一致させた作品によって、執筆開始以来望んでいた「確固たる目的」と確かな存在感が得られたのである。『エッセー』は彼の存在のなかに根をおろす。『エッセー』を書くことは思索研鑽の行為であると同時に、自己の全体を表現し、全存在を再構成する行為になる。今やそれが自己の存在を生きることなのである。

「私の性質と能力の実際を、死後数年、いや数日でも存続できる堅固なもののなかに、変質も変化もこうむらないように収めておく」（II-37, p. 646）ためにモンテーニュは『エッセー』を書く。著作は自己自身を発見し、発見した自己を作品のなかに固定する行為になる。しかしながらその自己そのものが不動の根を張った存在ではない。それは世界の有為転変と万物の生成の運命を共有し、つねに変化している。

ここで私が目指しているのは、ただ自分自身を明らかにすることだけです。しかもその私自身は、新しい学修によって変えられたならば、明日にも別のものになるかも知れません。（I-26, p. 190）

したがって自己描写は自己の本質を描いているかどうかわからない。モンテーニュは生成する自己の一貌々々を記録するだけである。彼の描写はそれしか保証できない。

だから私はいかなる確実性も保証しない。ただ私の考えていることを知らせ、論じている事柄について私のもっている認識が現在どこまですすんでいるか示すだけであ

る。(II-10, p. 99)

このような自己描写はいくら筆を重ねようと自己の移り変わりを描くにすぎない。実際彼もこの側面に強く興味を覚えていたようである。

しかも私は最初の思想を二番目の思想によって訂正したりはしない。自分の考え方の推移を表現し、それぞれの部分を生まれたままの姿で人々に見てもらいたい。もっと早くから始めていたならば、自分の移り変わった様子をながめて楽しめたのに、とさえ思っている。(II-37, p. 599)

しかし移り変わってゆくものがはたして自己の真実と言えるであろうか。つねに変化している現象をただ描くだけでは、なんら真理は理解できないのではないだろうか。このような自己描写はむなしい行為ではないだろうか。たしかに「推移」する一貌々々を記録するならば、不確かな自己の存在が作品のなかに繋ぎ止められよう。変化を把握するのは自己が変化のなかに消え去るのを防ぐ行為になりうる。しかしながら自己描写がモンテーニュというひとりの人間の真実さえ表現していないのならば、まして一般的な真理は示しえない。それはモンテーニュ本人にとってしか価値がない。せいぜい彼の「移り変わった様子をながめて楽しめる」人たち、つまりそれほど彼に関心のある親密な知人たちにたいしてしか意味をもたない。すでにのべたように自己描写が思想の成熟に重要な貢献をしながら、彼は書斎の片隅で親戚や友人を楽しませる肖像以上の存在理由をあたえられない。「判断の試し」がすなわち自己描写である現在、それは『エッセー』がそれだけの価値しか主張できないにひとしい。まさに序文にあるように『エッセー』を書く目的は「わが家だけの、私的な目的以外のなにものでもない」と言わざるをえない。「彼ら〔親戚や友人たち〕がやがて私と死別したのち、私の態度や気質の特徴のいくらかをこのなかに発見しながら、私についてのかつての知識をより完全な、より生き々としたものに育ててほしい」(同序文)という「個人的な便宜」(同序文)以外の価値を主張することができない。しかしながらこのような限定は『エッセー』の個性の頑固な擁護でもある。「判断の試し」が同時に自己描写である著作はモンテーニュを「駆りたてている新奇な、風変わりな思いつき」(II-17, p. 459)であった。彼は自分の欲求にもっとも叶った作品様式を感じとったのであろう。いやさらに第三者にもなにか意味があるだろうと直感していたかも知れ

ない。理由は不明瞭であろうと、「これを自由に走らせてやらなければならない」（同前）。とにかく彼がこの「奇妙な、途轍もない企て」（I I - 8, p. 67）をつづける決心は固い。「わが家だけの、私的な目的」の、「個人的な便宜」の書と限定する裏には、『エッセー』の独創性を保持しようとする強い意志が隠れている。一方で一般読者との関係を拒絶しながら、他人が容喙する余地のない領分でそれを固守しているのである。

「判断の試し」が超時間、無責任、反知識を標榜し、自己描写がこうして他人との関係を拒否するとき、ここに自己充足的な世界が完成する。モンテーニュは『エッセー』のなかにこのような空間を築きあげた。それはすべてが自己に収斂する、ある意味では確かに堅固な世界である。しかしそれが終着点であってはならない。認識がそのような空間に閉塞して良いわけがない。自己描写とモンテーニュの認識は自己の存在に収斂しつつ、かつ自己を越えなければならない。自己描写が「判断の試し」になるから、「判断の試し」が自己を対象にしているからと言った循環を抜け、『エッセー』がことなつた次元の価値を獲得する必要がある。自己自身を対象にして判断を試みるのが同時に人間認識の試みであり、自己を描くのが同時に人間の性状や本質の研究に通じなければならない。そのとき作品は揺るぎない根を張り、最終的な安定性を得るはずである。『エッセー』を書くことが自己の存在を普遍的な人間性のなかに確立する行為になるはずである。中期までのところ、モンテーニュがそのような使命と自覚を明瞭に表明した言葉はまだ見当たらない。しかしながら、私達が第2章第3節で例示したように、彼はそのような認識の構図をほとんど感知していた。自己描写に付加された脱線部の記述において、自分の研究の主題は人間であるという挿入が関係代名詞によってなされている。それは『エッセー』を書く行為とともに意識下に進行していた進化をふと感知した言葉だったにちがいない。

したがって彼が「新奇な、風変わりな思いつき」に執着し、「奇妙な、途轍もない企て」を固持する感情には、『エッセー』の可能性についての予感がひそんでいたであろう。また、自己自身を「判断の試し」の主題とし、作品を自己描写の書としたとしても、かならずしも自己の狭い世界に跼蹐することにはならない。読書実例を対象にして始まった「判断の試し」は、経験的な外界の事実から自己自身という事実へ向かった。「判断の試し」の進化の結果、外部世界と内部世界がひとしく認識の対象になり、さらに自己という小宇宙が焦点を占める認識の世界ができあがった。それはまさしく自己へ収束してゆく歩みであった。しかしながらそれは自分の世界に閉じ籠もる退歩ではない。その収束は正当で、有益な進化である。本物の思想は一度自己自身への収斂を経なければならないであろう。それ

は自己認識を人間認識の中核にする発展の道に達したことを意味する。自己認識を中核にした人間認識によって真の世界認識がおこなわれる構図が生まれたのである。そこで自己認識は翻って世界認識に飛躍するであろう。「判断の試し」と自己描写を一致させ、他人にたいしては「新奇」、「奇妙」、「風変わり」など以外のすべての価値を放棄し、自己の世界に極限した『エッセー』がそこで再び他者の世界に甦るであろう。好奇心によって自己自身を忘却させるにすぎないような知識を拒否した、反学問の書である『エッセー』が、人間と世界についての知恵の書になるであろう。

1. 日常の思索の論理

1580年に第1巻と第2巻から成る『エッセー』を出版すると、モンテーニュはドイツからスイスを経てローマに到る、長途の旅に出発する。人生と社会をいわば高みから俯瞰しながら読書し、執筆する場所であった塔を離れ、動乱の世のまっただ中で行動し、思索する新しい時代がここに始まる。17か月の旅を終えたのちにも、執筆初期と中期を分かち現実体験の時期以上に長く、波乱に富んだ生活が彼を待っていた。1581年9月、まだ旅路にある彼のもとに、ボルドー市長に選出された知らせが届く。最初の任期はどうか平穩に過ぎるが、再選され、公務を奉じた生活は1585年8月までつづく。二期目の二年のあいだ、新教徒の勢力に背後を脅かされているボルドー市の市長は、宗教戦争の渦中であって内乱の世の辛酸を嘗めなければならなかった。さらに任期の終わりごろには、なんどか中世ヨーロッパの人口を激減させた死病、ペストが市中に発生する。最悪の人災と天災をつぶさに体験したのち、彼はふたたび塔の生活にもどり、『エッセー』第3巻を書き記す。この作品が私達の第3章の論考の対象である。

正確に言うならば、1588年に刊行された『エッセー』は新しく第3巻をくわえたばかりではない。以前の第1巻と第2巻も多くの加筆訂正を受けている。しかし序論でのべたように、進化の時期とその作品を明確に分け、考察と比較を容易にするために、私達は後者を除外し、前者のみを研究することにした。同様に1588年以降の増補も考慮の外に置いている。つまり私達は方法的に、1588年版『エッセー』の第3巻を最終的な作品と仮定するなかで分析をすすめ、進化を展望している。

第2章第1節で論証したように、すでに中期においてモンテーニュの思考の表現様式は論理性や統一的な秩序に反する兆しを見せていた。『エッセー』第3巻の随想はこの傾向をますます強め、自由奔放とも思われる展開が読者たちを驚かせてきた。しかしながら、そのような非論理性に目を奪われ、第3巻の円熟した論理を見落としてはならない。当然一方には論理的な思考があって、思索の発展を支えている。両者をともに観察しなければ、『エッセー』の随想について理解はできない。今までにもそのために誤解が生じているように思われる。この節では随想の展開の論理的な過程に注目しながら、『エッセー』に特徴的

な「エッセー」という思考の論理を抽出してみよう。

もっとも初期の作品は読書によって収集した実例をただ綴り合わせたにすぎないかのようであった。しかしモンテーニュの思考はどのようにして実例に学ぶかというところに向けられていた。第3巻の時代においても、基本的にその点に変わりはない。読書実例のほかに見聞実例や自己実例が多くなってゆく経験的な充実や進化はあっても、「エッセー」の姿勢は一貫している。経験の深め方をのべている次の言葉は、彼の思索の努力がどのようなところへ傾注されるかをよく表している。

経験を数えあげるだけでは十分ではない。それらの重さを測ったり、比べあわせたりしなければならない。それらを消化し、あるいは蒸留したのちに、含まれている道理と真理を引き出さなければならない。(III-8, p. 97) (1)

つまり、経験を吟味し、消化する思考とはどのようなものか、彼はどのようにして経験から真理を引き出しているか、などが具体的に把握されれば良いわけである。これらの点に注意するならば、随想の展開の過程に「エッセー」という論理が見えてくる。たとえば、その基本的な形式があらわれている短い部分を引用してみよう。

(1) 二、三年前にフランスでは、一年を十日短縮した。(2) この改革にはじつに多くの変化が付随するはずである。それは文字どおり天と地を同時に動かすことであつた。しかしながら、自分の位置を変えたものは何もない。私の隣人たちは種まきと収穫の時期や商売の好機や日々の吉凶を、今までずっと決めてきたのとまったくおなじ時点に見出している。我々の慣習にまちがいが感じられなければ、改良も感じられない。(3) それほどいたるところに不確実があり、それほど我々の知覚は粗雑なのである。(III-11, p. 250)

この主題に関する随想はまだつづいているが、ここに「エッセー」という論理のひとつの単位が読みとられる。それは先の引用で作者の説明しているとおりであって、「経験→吟味→結論」と形式化できるであろう。この形式は『エッセー』の随想を支えている、もっとも基本的な、もっとも典型的な論理である。

このような分析は無意味な形式化であると思う人もいるかも知れない。しかしそれは『

エッセー』の進化を観察する具体的な基準になる。初期の作品においても、「経験→吟味→結論」はもっとも基本的な思考であった。未熟な段階では、「経験」は読書で知った実例であり、「吟味」はわずか数行の注釈であり、「結論」は章題が代わりをしていた。すこし進化すると、ひとつの実例の意味を解釈するために、他の実例を集めながら吟味をおこない、結論を引き出していた。上に引用した随想はこのような著作法とおなじ思考形式によって展開しているのであって、両者を比較するならば、実例に学ぶ思索の進化と充実をはっきりと観察することができる。「経験→吟味→結論」という論理を基本にした思考が、初期の著作が読書実例の収集と羅列に終わるのを防ぎ、日常の一例を捉えて吟味する巧みな随想を生んでいる。

この思考形式ひとつを基準にしても、私達はほかにいろいろな比較ができるであろう。「経験」は最初には読書で知った史実や物語や風俗習慣などであったが、やがてだんだんとみずからの見聞した事実例が多くなって来る。そしてさらに、日常の些細な事件や自己自身を観察しながら引き出した実例がくわわり、広がりや深みを増してゆく。あるいは「結論」を比較してみると、思いのほか変化がすくないのに驚くかも知れない。もちろん、明瞭に変遷と進化を示している思想はあるが、基本的な考え方は総じてあまり変わっていないであろう。「吟味」の発展方向にはいくつかの焦点が生まれて来るであろう。人間を知り、自己自身を知り、そうして人生を生きるすべを知ろうとする意志によって方向づけられるであろう。たとえば上記の随想は経験についての考察を十分に人間と人生の側に引き寄せた魅力をふくんでいる。「吟味」のこのような充実と深化によって、日常的な事柄から哲学的な考察が生まれるのである。すべての事が人間と自己と人生についての認識に関連してくるのである。第3巻においてモンテーニュにつきのように言わせるのは、この点についての自信であるにちがいない。

私は気のむいた題材から始めてゆくことにしよう。と言うのは、すべてはたがいに
関連しあっているからである。(III-5, p. 8)

随想の展開の論理についての分析から、私達はさらにつきのような、みつつの基本形式に注目しなければならないのを知った。第一に、結論を引き出したのち、モンテーニュは参照すべき実例を追加し、結論の意見を補強し、あるいは修正する。第二に、結論の意味をさらに深め、より抽象的な一般化をおこなう。第三に、哲学的な認識を道徳的な解釈に

変え、人生を生きる知恵に転化する。

これらの論理形式をひとつひとつ例証するのは省略する。代わりに、それらすべてが同時に見られる随想の例を挙げれば十分であろう。私達の指摘した以上の四基本形式は、それぞれはきわめて単純であって、第三巻のような随想を理解するのに役立ちそうにもないと思われるであろう。しかしながら、これらの基本形式がさまざまに組みあわさりながらモンテーニュの思索が展開しており、私達の分析方法はたとえばつぎのような日常的な随想の巧みな論理性を明らかにすることができる。

- (1) 一本の歯がいま痛みも苦勞もなく抜け落ちた。寿命が自然に尽きたのである。
- (2) 私の存在のこの部分や他の多くがすでに死に、ほかはなかば死んでいる。血気さかんな年頃には第一位を占めていた、もっとも活発な部分も同様である。
- (3) このようにして私は衰弱し、私から去ってゆくのである。
- (4) すでにこれほど進んでいる転落の過程の一落下を、私の理性がまるで頂上からの墜落のように感じるとしたならば、じつに愚かなことではないだろうか。私はそんな風にはなりたくない。
- (5) 死はいたるところで我々の生とまじりあい、溶けあっている。衰退が死の時間に先駆け、我々の成長期のなかにさえ侵入している。
- (6) 私は25才と35才の姿の肖像画をもっている。これらを現在のと比べると、もはやどれほど私でなくなっていることか！現在の像は以前のとはじつに異なっており、臨終の時との比ではないにちがいない。
- (7) 自然をあまりに遠くまで引きずりまわすならば、そのあげくには、自然は我々から離れ、我々にたいする指揮を放棄せざるをえなくなる。そして、我々の目や歯や足などをあわれな異物の援助にすがらせ、我々につき従うのに倦み果て、技術の手のなかに我々をゆだねざるをえなくなる。それほどまでに自然を酷使してはならない。(III-13, pp. 67-68)

一本の歯が痛みもなく抜け落ちたという、なんの変哲もない出来事を捉えたこの随想は、論理的な組み立ての跡なぞまったく見られない文章である。しかし、私達が指摘した基本形式によって分析するならば、内部の論理的な骨格があらわれてくる。まず同種の事実をも考えあわせた(2)の「吟味」ののちに、(3)の「結論」が引き出される。そしてそれは続く(4)の部分で人生を生きる上の教訓に変えられ、さらに(5)ではより抽象的な、生と死の関係一般の認識へ高められる。(6)において立証となる事実の追加によっ

てこの認識が補強されたのち、(7)でもう一度実践的な解釈に転化されている。

なんら哲学的な意味があるようには思われない日常の些細な事件を、人間や人生に関する認識と知恵に深めてゆく、鮮やかな随想の展開である。『エッセー』執筆以来ずっと事実には学ぶ思索を鍛えてきたモンテーニュの真骨頂があらわれている。「もっともよく知られた、もっとも平凡な、もっとも普通の事柄でさえ、もし我々がそれらの輝きを見出すすべを知っているならば、自然の最大の奇跡とも、もっともすばらしい実例ともなりうる」(III-13, p. 31)というみずからの言葉の、みごとな実行である。しかも、それは事実には学ぶ「エッセー」によって練りあげた、自然で強靱な論理に支えられている。『エッセー』の随想は奔放な展開の一方に、練熟した論理をもっている。その素晴らしさは今見たとおりである。しかしながら、骨格をなすよつつの基本形式も、これらがさまざまに結合した変形も、結局は個々の経験を考察する論理にすぎない。モンテーニュの論理は現実の直接的な解釈をほとんど越えていない。事実を考察して得たひとつの「結論」を補強したり、修正したり、あるいはさらに深め、あるいは人生の側へ引き寄せるような、方法的な発展はあるが、引き出されたいろいろな「結論」を総括し、統一してゆこうとする論理はない。したがって、「エッセー」という思考の結果は相互の関連には無頓着に散らばっている。

同一の対象について考察をつづけ、いくつかの意味が発見されたときでさえ、彼の態度は変わらない。対象の一面々々についての解釈を繰り返すだけであって、明らかになったおのおのの意味を関係づけ、総合する認識へ向かうことはない。たとえば、第3巻第13章で法律について論じているところに(pp. 2-15)、この特徴が見られる。全体を眺めるならば、この部分は法律の不合理性を論証する共通性をもっているのであるが、随想自体には統一に向かう動きはない。モンテーニュは法律を見る視点をさまざまに変えると同時に、脱線的な発展もくわえながら、法律用語の曖昧さ、解釈の自由さ、人間の行為の無限の多様性と人為的に固定した法律との不均衡、裁判の恣意性や誤審など、ひとつひとつ不合理性を明らかにしてゆく。結果から見るならば、これらの考察を整理、総合した、統一的な秩序のある構成が可能のように思われるのであるが、彼は対象の一面々々を個別に判断してゆくばかりであって、全体を捉えなおそうとする思考の動きは見られない。随想の展開につれ、「判断の試し」はその場その場に記され、相互の論理関係はそれぞれの内容の自然な暗示にまかせている。対象を吟味して引き出した意味の相互関係の秩序は、「エッセー」という思考によって書かれる作品『エッセー』には存在しえないのである。

「エッセー」という思考のこのような特徴は、視点を変えながら同一の問題を考察している最中でさえ脱線がおこなわれるところからも推察できるであろう。統轄する論理がそこになんら働いていないのである。先ほどの例においても、法律を主題にした展開はもう終わったのかと思わせるような脱線部がある。あるいは、また、第3巻第5章で既婚女性の貞操の義務を論じているところも（pp. 269-299）、さまざまな側面へ巧妙に視点を変えながら発展している例であるが、やはりいくつかの脱線部をふくんでいる。たとえば、途中二度に渡って、女性の嫉妬についてのべられている。しかし、主題の性格から言うならば、男性の嫉妬は関連があるが、女性の嫉妬はそうではない。つまり、随想の展開の背後に統轄する論理がないため、「嫉妬」の語を契機にした連想的な脱線を抑制しえなかったにちがいない。

さらにまた「エッセー」は脱線を規制しないのみならず、その量を適度な範囲に抑えることさえもしない。主題にそった記述部分よりも、派生した脱線部のほうがはるかに長い例も珍しくはない。このような特徴は「局部肥大」と名づける現象のひとつでもある。常識的には、部分々々の記述の量は主題との関連性の強弱や全体的な均衡を考えながら決めなければならない。ところが、第2章第2節において論証したように、個性的な活動を始めるとともにモンテーニュの思考は古典的な均衡から遠ざかり始める。「エッセー」という思考は局部肥大という現象を生じさせる。具体的な例証は省略するが、その傾向は後期において強まりこそすれ、けっして弱まってはいない。第2章第2節における私達の分析を参考にしながら、文の構造や随想の展開のなかに、中期よりもより容易に、より多くの例を見つけることができるであろう。「エッセー」という思考に各部分の量的な配分を決める配慮や論理性がもともと欠如しているのならば、脱線の量が常識はずれであったとしてもなんらふしぎではない。

結局のところ、彼の思考法からすれば本論と各論とか、本筋と脱線とかの区別はない。角度を変えて言うならば、彼は意識のなかに展開する随想を受け入れてゆくだけであって、それ以上の論理的な操作をするつもりはない。主題とか全体的な秩序とかの、外部的な人為的強制によって意識の流れを規整するつもりはない。そのなかで直面する事柄を吟味するのに全力を注ぎ、前後関係や主題や全体との関連のなかで記述にどのような論理的な抑制をくわえなければならないかなどは考慮しない。『エッセー』の各章には主題らしきものは存在するが、その理解を私達の常識の範囲に押し込めてはならない。たとえば第3巻第9章に、「私をこうした旅へ誘う別の原因は、わが国の現在の風俗が合わないからである」

(p. 136)と、明確に主題「旅」と関連づけながら、「わが国の現在」の話を導き入れているところがある。しかし、モンテーニュがこれについて語るのは10行とつづかない。すぐに政治形態についての理論や国家の改革や盛衰などの一般的な議論へそれてゆく。つまり、主題は彼の思考に運動をあたえる働きをするだけであって、その運動を規制し、秩序づける役目はもっていないのである。彼はそのような論理性と非論理性に身をまかせながら、「判断の試し」をくりかえすのに甘んじる。彼にとって秩序とは、個々の事実と自己との関係を秩序だてるところにあり、事実相互の関係や事実と人間一般との関係のなかにうち立てる方向にはないからである。

「エッセー」という思考法の特徴は当然作者の精神の個性や、彼の目に映る世界像と密接に関連している。次にこのような観点から論考を深めてみよう。

経験的な思考をさらに進め、たとえば帰納的な方法などによって総合と体系化へ向かっていても良いはずでありながら、モンテーニュがそうしないのは、とても実行可能なようには思えないからである。すでに初期から抱いていたおなじような感情は、後期においても変わりはない。むしろ、観察と思考が経験に密接するにつれ、いっそう強くなったようである。多様性や流動性と名づける事物の性質が、ますます鮮烈に彼の心を打つようになったのであろう。

理論的な総合へすすむためのもっとも基本的な作業は、似ているものと違っているものを区別し、整理、分類することであろう。ところが彼にはそれさえ可能なようには思えない。彼に見えるのは物の類似ではなく、差異である。

類似性が物をおなじように感じさせるのは、差異性がちがっているように感じさせるほどではない。(III-13, p. 2)

この文の前には、卵やトランプの裏面でさえも、相違を識別できる者がいるという話が挙げられている。モンテーニュはそのような些細な個性さえ閉却できないのであろう。それならば、対象間の類似性を捉えてすすめる思考など、いっこうに確実と思われぬのは当然である。

現象はつねに相異なっているがゆえに、我々がそれらの比較照合から引き出そうとする結論は不確実である。差異、多様という性質ほど、事物の姿に一般的なものはな

い。(III-13, p. 2)

総合的な思考を妨げているのは、事物の多様性ばかりではない。さらにその根本の、ひとつの物を捉える認識も、曖昧で不確実である。おなじ対象が見る角度や見る状況が異なるにつれ、さまざまな様相を見せる。いずれをその本当の姿であると決めるのか、きわめて困難である。

このように友人たちについて、私は言動から内面の傾向を発見する。と言っても、じつに種々様々な、無限に多様な行動を整理し、「属」とか「項目」のたぐいを設け、さらに自分の区分と配分を明確にしながら「綱」とか「細目」に分けるためではない。

だが、いかに多くの種類があり、かつどのような名前があるのか、数えあげられはしない。

一度にまとめて表現しえない事柄についてのよう、私は種別なぞおかまいなしに、ばらばらに自分の意見をのべてゆく。関連と一致は我々のような平凡で卑俗な魂のあいだには存在しない。知恵は堅固な、全一な建造物であって、それぞれの部分がみずからの位置をもち、それぞれの特徴をおびている。この無限に多様な様相を類別し、我々の流動的な性質を固定し、秩序づけるのは、学者たちにまかせよう。と言っても、これほど混然とし、じつに微妙で、しかも偶然に左右される事柄について、彼らが目標に達しうるかどうかはあやしい。私はたんに我々の行動を相互に関係づけることのみならず、主要な特質によってひとつひとつを的確に規定するのも困難であると思う。それほど我々の行動は両義性があり、さまざまな色合いで輝いている。(III-13, pp. 21-22)

私達の先ほどの考察の正しさを十分に立証してくれる文章である。モンテーニュが総合的な把握をおこなおうとする野望を捨て、対象の個々の側面についての観察と判断に甘んじる思考法をまもりつづけるのは、「無限に多様な様相を類別し、我々の流動的な性質を固定し、秩序づける」など、とても可能なようには思えないからである。しかも、「相互に関係づける」作業のみならず、「主要な特質によってひとつひとつを的確に規定する」

のさえ困難なのである。さらには、『エッセー』の書き方が論理的な構築性や秩序に従わないのも、このような人間観や世界観に由来する。「一度にまとめて表現しえない事柄」だから、「種別なぞおかまいなしに、ばらばらに自分の意見をのべてゆく」のである。上の文章には、対象の多様性や多面性に強い印象を受けている意識によって思考法や作品の様式や文体が決定されている関連がよくあらわれている。

事物や現象の複雑多岐な姿にたいして、整理と分類をおこなった一例が法律である。モンテーニュは、いくら法律を精細、緻密にしようとも、起こった事件になんら疑問の余地なく当てはまる条項なぞつくりえないと信じている。そして、それには、上の文章にも「我々の流動的な性質」とあったように、すべての物事の、たえず変化して止まない流動性もからんでいる。

たえず変化している我々の行動と固定した不動の法律とはほとんど関連がないのである。(III-13, p. 3)

すべての存在物、すべての現象は、その多面性と多様性と流動性によって、思考による整理、分類、総合に逆らっている。この根源のゆえに曖昧さと矛盾と誤謬に満ちている典型的な例が、モンテーニュから見れば法律と裁判であった。もちろんそれは彼が青年期に法官生活を送り、そのあたりをつぶさに体験したからにちがいない。しかしより根底では、一般に固定や不動という性質に疑惑や不信の感情をもっているからでもあろう。確かにこれらの性質は彼の思考や思想とは正反対のものであり、つぎの言葉はいかにも彼らしい警句である。

断定と頑固は愚昧と無知の通常の兆候である。(III-13, p. 20)

以上私達は認識対象にたいする意識の特徴に「エッセー」という思考法の原因を尋ねた。しかし、さらに、認識の主体の側にも大きな理由がある。解釈と推論をつみかさねながら総合と統一へ向かうためには、認識の主体は確実に前進し、向上する運動をもった存在でなければならない。偶然に左右されない意志によって、着実な構築の歩みをおこないうる者でなければならない。人間のこのような向上性や、現象の変化にまどわされない、冷静な理性の働きなどを信じられないならば、関係づけ、統合する論理による思考を選ぶ気に

なれないのは当然であろう。モンテーニュが感じているのは、つぎのような人間の条件である。

さらに言うならば、我々の知恵や熟慮さえもたいていは偶然の導きに従っている。私の意志や思考はあるときはある風の吹くままに動き、別のときには別の風の吹きようで変わる。そして、私なしにすすんでゆく動きがたくさんある。私の理性はその日その日の衝動と動揺をもっている。(III-8, p. 102)

「知恵や熟慮」や「意志や思考」がこのように偶然的な性質のものであるならば、思想的な営為も整然とした歩みになりようがない。努力を積んだとしても、年月の経過とともに物事についての理解がすすむとはかぎらないし、思想が進歩するとはかぎらない。

私の理解はつねに前進しているとはかぎらない。ときどき後退もしている。自分の思想について最初のより二番目や三番目のほうをより信頼するわけでもなければ、過去のよりも現在のをいっそう疑わしく思わないわけではない。(III-9, p. 150)

このような人間に思索による統一的な構築なぞ可能であろうか。現実の抽象的な固定化を目指すような論理がはたして賢明と思えるであろうか。それは普遍的な真理という観念にとらわれた、空虚で無益な虚構にすぎないのではないだろうか。モンテーニュから見れば、以上のような現実と人間自身の運命を甘受し、運動のなかに留まる以外に賢明で有益な方法はありません。したがって「エッセー」というのは対象と自己自身の運動と変化のまっただなかでおこなわれる思考である。

もしも私の魂が大地にしっかりと足をつけ、明確な姿をとれるならば、私は自分を試したりはしないで、決めてゆくであろう。私の魂はつねに修業と試練のなかにある。(III-2, p. 190)

「自分を試したりはしないで」にあたる原文は《je ne m'essaierois pas》となっている。つまり、書名『エッセー』の動詞形を使ってのべているこの文章のなかに、「エッセー」

という思考と運動の一体性が読みとれるのである。この箇所の全体的な解釈には、のちにとりあげる後期の自己描写がからんでくるが、それは別にして一般的な認識の問題として考えてもまちがいはない。モンテーニュは確定しえないからこそ、「エッセー」しつづけるのである。

したがって「エッセー」という思考は、認識の対象も主体もなんら確定しようのない運動を繰り返しているなかでおこなわれる行為である。彼は作品を『エッセー』と題することによって、現実と人間の不確実な運動のただなかに留まる決意を表明したとも言えよう。つぎのような晩年の加筆も、ただ謙遜や弁解のためではない。中期から明確になったみずからの思考の本質にそくした自己主張でもある。

なぜなら、私の言っていることについて私が確実に保証できるのは、そのときそのような考えを私の思考のなかに、しかもゆれ動き、混乱する思考のなかにいただいたという事実以外にはないからである。(III-11, p. 1033) (2)

「エッセー」は、ともにゆれ動きつづける、対象の世界と自己自身の世界が接触した一点、一時点の一回性に甘んじ、それ以上を目指さない行為である。おそらく現代の多くの者は、そのような次元に留まる思索は無意味で空しいと思うであろう。しかし、近代の学問と科学の発達以来、抽象化と体系化への論理をもった思考のみが唯一、正当であるかのように考えられ、私達は平凡な人生を送る、日常の人間の観点から捉えるのを忘れている。モンテーニュと私達とのあいだには、人間の思考という行為について理解の仕方に相違があるのかも知れない。つづいて、この点についての論究に移ろう。

近代以降人間の思考はただ世界を理解するためではなく、世界を支配する能力になった。事物の性状を探究し、現象の原因を知って、対象を操作しようとする。世界を作り変えようとする。私達は宇宙の創造者でもあるかのように思考する。その姿や機構や運動の法則などについて、考える能力をもった人間が真理を決めてゆく。現代においては、思考は何かを決定する行為であって、なんら決定を目指さない思考などありえないように思われる。このような点に関してモンテーニュはつぎのように言う。

通常見るところ、人間は当面した事実について真相を探究するよりも、理由を詮索するほうに喜んで時間をついやす。事物はほったらかし、原因を論じることに興じる。

おかしなしゃべり屋たちである。原因の認識は我々にではなく、事物を統治している人のみに属する特権である。我々は事物をただ受け入れるだけであって、起源や本質を看破しなくとも、我々の性状にしたがってまったく充実した利用が可能である。酒は根源的な特性を知っている人により快いわけではない。それどころか肉体と魂は、学識をまじえるならば、世界の利用についてみずからのもっている権利を妨げ、悪化させる。決定することと知ることは、与えることとおなじく、主人と支配者に固有の行為であり、目下や臣下や修業者のなすべきは、受け取り、享受することである。（
III-11, p. 251, p. 1026）(3)

モンテーニュの思索の性格について多くのことが読み取れよう。彼は生活のなかで出会い、『エッセー』を書きすすめる意識の流れのなかで出会うひとつひとつの事実を受け取ることに甘んじる。彼の努力は「真相を探究する」のに注がれ、それ以上に推論をめぐらせて原因などを詮索しようとは思わない。考えるという行為によって事実がより明らかに見えるようになれば十分であって、それ以上の論理的な操作をくわえようとは思わない。大切なのは「起源や本質」や「根源的な特性」ではなく、人生を生きる自分自身との関係であり、「我々の性状にしたがってまったく充実した利用」をおこなうことだからである。そして、これらの思想の根底に、モンテーニュと世界との関係の特徴が見られる。彼は「受け取り、享受する」者として世界に対しているがゆえに、「エッセー」という思考法で十分なのである。「原因の認識は事物を統治している人のみに属する特権であり」、「決定することと知ることは主人と支配者に固有の行為なのである」。彼と世界の関係はこのように受動的である。しかし、それはまた、別の角度から言えば、彼が思考や理性などによって現実の人間自身から抜けでるのを好まないからである。認識によって自己を超越する野望などをいдаかず、日常の人生を生きる自分自身に留まりつづけるからである。現代人にはモンテーニュの思索の原理は消極的すぎるように思われるかも知れない。しかし、それは学問や科学の華々しい思考や認識に目を奪われ、日常の思索を軽視しているからであろう。実際、現実の人間は、細部へのこだわりや余計な想像にまどわされず、虚心に事実を見て取るのさえ容易ではない。

小さなことが我々の注意をそらせ、視線を変えさせる。小さなことに我々がとらわれているからである。我々が事柄自体を見つめ、その要点を見つめているときはほと

んどない。我々の心を打つのは表面的な、些細な状況や印象であり、事柄から飛び散る空虚な表皮である。(III-4, p. 241)

人間のこのような過誤や迷妄に反省が到らないならば、モンテーニュの思考の真骨頂は理解できない。それを簡単に知ろうとするならば、第3巻第11章を読めば良いであろう。この章において彼は、奇跡はありうるのかどうか、あるいは魔女は存在するのかどうかなどについて根本的な断定はできなくとも、現実の事件にたいして鋭い批判をおこない、りっぱに対処しうることを示している。欺瞞と誤信の構造を分析しながら、まず何よりも、事件のなかにある事実を注視し、正確に真相を捉えるように論じている。そして、それらはすべてつぎのような人間性についての痛切な反省にもとづいている。

我々はただ欺瞞から身を守るのにだらしがないのみならず、自分から求め進んでその罠に飛びこんでゆく。(III-11, p. 253)

したがって、原因や本質を決定できなくとも、事物の真相をしっかりと見つめるすべを会得するだけでも大変な意味がある。私達と事実との関係を曇らせ、混乱させる条件は、外部にも内部にも数多くある。それらを自覚し、それらに抵抗しうる思考を鍛えなければならぬ。モンテーニュの問題意識はこのようなところにあった。

また彼は明らかな認識を得られないならば、あるいは、はっきりと何かを決定できないならば、思索が無意味であるなぞとは思っていない。外部の対象にのみ注意を奪われ、思索と人間自身の関係を見るのを忘れてはならない。たとえ対象についての知識が増したり、明確になったりしなくとも、考えること自体が人間にたいして有益な作用をもっている。つぎの箇所では、結果は別にした認識行為自体の意義について曖昧であった文章が、晩年の加筆によって明瞭になっている。「エッセー」という思考の実践とともに、このような自覚が強まっていったにちがいない(Bは1588年版の記述を、Cは晩年の加筆を表す)。

(B) 私の精神は浮かんだ最初の考えに飛びつき、動き出し、あらゆる方面に自分の活力の証拠をしめす。あるときは力強さへ向かって、あるときは秩序や優美へ向かって采配をふるい、(C) みずからを整え、調整し、強化する。(B) 私の精神は自分自身でみずからの能力を呼び覚ますだけのものをもっている。自分に有益な材料も、想像力や判断力をはたらかせるべき主題も、すべての人とおなじように十分に、固有

にあたえられている。(C) 雄々しく自己自身を吟味し、活動させるすべを知っている人にとっては、思索は充実した、有意義な勉強である。私は心を豊かな知識で飾るより、鍛えるほうが好きである。心がけしだいで柔弱にもなれば剛健にもなるという点において、自分の思想と語りあうのにまさる行為はない。もっとも偉大な人たちはこれをみずからの仕事とする。(III-3, p. 213, p. 819)

どんな問題であろうと、つねにモンテーニュは人間を中心に据えた物の見方を忘れない。彼は思索の行為をただ事物の認識との関係においてのみ捉えるのではない。それは「みずからを整え、調整し、強化する」効用をふくんでいる。もちろん、そこに想定されている人間や自己自身はたんなる認識者ではなく、人生を生きようとしている人間であり、自分である。それだからこそ、「心を豊かな知識で飾るより、鍛える」ほうを重視するのである。人生という観点に立たないならば、対象の認識を別にして思索が「充実した、有意義な勉強である」理由が理解できないであろう。確かに、日常の人生を生きる人間は、知識を広くしたり、認識を厳密にしたり、体系化したりするよりも、彼の言うような思索のあり方を反省すべきであろう。対象についての確実な、全体的な認識をもたらさないとしても、思索が人生を生きる自己を鍛え、人生を生きる知恵を生むならば、彼にとってはそれで十分なのである。このような人生中心主義の思想は第3巻で鮮烈に表明されている。たとえば、

アレクサンドロス大王の勇気が世界を舞台にして発揮した活力も、ソクラテスの勇気があのような平凡で地味な行動のなかでしめした活力に比べるならば、はるかに劣るように思われる。私には、アレクサンドロス大王の代わりにソクラテスを考えてみるのはやさしいが、ソクラテスの代わりにアレクサンドロスでは考えられない。後者に「何ができるか」と尋ねるならば、「世界を征服すること」と答えるであろう。おなじ質問をしたならば、前者は「人間の自然な性状にふさわしく人生を送ること」と言うであろう。こちらのほうがはるかに普遍的な、はるかに困難な、はるかに正当な学問である。(III-2, pp. 197-198)

したがって、最後に、モンテーニュの人生観と思索の姿勢「エッセー」との関係を考察してみよう。

対象の認識のみにこだわらず、自己自身を鍛えようと心がけたとしても、かならずしも思索が混沌とした運動のなかに留まりつづけるわけではないであろう。自己を鍛える目標が決まっているならば、そこにもおのずと決まった方向や規則的な歩みが生まれてくるであろう。自分をおのずかの型に鍛えあげよう、さもなければ人生に効果的でないという思想と意志があるならば、思索という運動もおのずから秩序だってくるはずである。モンテーニュにおいていっこうにこのような傾向が生じないのは、彼が自分の型の目標や人生を一定の形につくりあげようとする意図などをもっていないからである。

もしも好きのように自分を仕立てられるとしても、固着して離れられなくなるのも厭わないほど結構な流儀なぞひとつもない。人生は複雑多岐で、気まぐれな、不規則な運動である。(III-3, p. 212)

モンテーニュはこのような人生という運動をどうこう変えようとは思わない。なんとか固定しようとしめない。自然のままに生きるのが彼の主義である。このような人生の自然に合わさなければ、思索も行動もすべて虚構になるであろう。

人生は物質的で肉体的な運動であり、本質的に不完全で無秩序な行為である。私は人生にたいして、その本質どおりに仕えようとしておいている。(III-9, p. 193)

こう書いたとき彼は、他の箇所に「私は博学な、勇壮な思想をもちたいとは思わない。むしろ自然な、人生に快い思想をもちたいと思っている」(III-9, p. 129)とあるように、もちろんそこに思想もふくめている。『エッセー』を書く自分と人生を生きる自分とはけっして分裂していない。思想も人生にたいして、その本質にふさわしく仕えなければならない。おなじような「複雑多岐で、気まぐれな、不規則な運動」をもった思索から生まれるのでなければならない。

結局モンテーニュは日常生活の思考法に磨きをかけたのである。外部世界の動きと自己自身の動きが交わった点における行為にすぎない思考に甘んじながら、一方で、この節の最初で私達の分析したような論理性を鍛えた。統一的な安定性のない思索の動揺と混沌に堪えながら、自己の姿勢を貫いた。したがって、彼が『エッセー』を「精神の排泄物」に

譬えているのは、まさに「エッセー」という思考の日常性を表現している。しかも、日常の排泄物と考える意識は自分の思想がたえず動揺と変化をつづけているという感情とむすびついており、いっそうよく「エッセー」の性格を示している。

皆様の御存知のとおり、私は今まで一本の道を歩んできた。今後も、この世にインクと紙のあるかぎり、中断もせず苦勞もせず、この道を歩みつづけるであろう。私は自分の人生を行動によって記録することができない。それがあまりにも低劣な運命のなかにあるからである。私は思想によって記録する。ちょうど私の見た一貴族に似ている。彼は腹ぐあいによって自分の人生を伝えていた。彼の家にゆけば、7、8日分の便器が順序よく陳列されているのが見られた。それが彼の研究であり、思索であった。彼には他の話題はいっさい鼻もちがならなかった。すこしはより上品ではあるが、ここに書いているのも、ときには固く、ときにはやわらかく、いずれにしろつねに不消化な、年老いた精神の排泄物である。文法というただひとつの主題についてディオメデスが6000巻を著したのを思うならば、どんな題材にゆき当たってもたえず動揺と変化をつづける私の思想を、いったいいつになれば表現し終えるのであろうか。

(III-9, p. 119)

このような日常性に徹しているのであるならば、『エッセー』の記述のあいだに矛盾があったとしても、目くじらを立てるべきではないであろう。モンテーニュの思考法を考えるならば、それが自然であって、許すべき瑕疵である。彼は生活のある一時点における経験の吟味と、その一時点における結論を記しているにすぎない。彼はそれ以上には進んでいないし、それ以上の権利を主張してもいない。むしろ、経験の直接的な解釈のあいだに矛盾があることこそ、真摯な思索の証であろう。いくら思考の対象にしようとも、経験自体は無秩序なところがあり、人間は矛盾をふくんでいるのが自然だからである。それらの性格は、日常の次元を離れ、総合と体系化へ向かう際に、解消に努力するものだからである。

『エッセー』が「判断の試しの手紙」であるという定義の理解についても、おなじような注意が必要である。判断の試しの「結果」の集積が『エッセー』を作っているように思ってはならない。そのような誤解をおかすならば、もっとも異色な特徴を見落とすであろう。モンテーニュにとっては『エッセー』を書くことが判断の試しであって、したがってそれは判断の試しの「過程」の記録である。そこに、思考が日常性に徹するところから生まれた特

色がある。あるいは、言い方を変えるならば、鮮やかにその過程を表現するに到ったからこそ、作品が本当にエッセーの名に値するのである。「エッセー」という思考の本質は認識し、決定することではなく、人間に有益な効果をおよぼす思索のあり方自体にあり、修業する者としての探究の仕方にある。したがって、すでに確定した試しの結果を記述するのではなく、思想が結実するまでの揺れ動く探究の過程を描きえてこそ、エッセーがふさわしい表題になる。

モンテーニュが練りあげた、経験にそくした思考法を、フランシス・ベーコンの帰納的認識方法の先駆として位置づける見方がある(4)。それはそうかも知れない。しかしながら、判断と認識の体系を目指す近代哲学の観点から評価するだけでは、彼の思考法の真面目は捉えられない。確かに彼は抽象的な思弁を嫌い、経験に学ぶ思考を重視し、練磨したが、経験的な認識を関係づけ、組織する方向へ歩んだことはなかった。後者のような思考法はむしろ初期の非個人的な著作の一部に見られるのであって、中期から後期においてその方向への進化があったとは思われない。第2章第5節で考察したように、モンテーニュは中期において未完成、無責任、反学問、過去にも未来にもこだわらない超時間的空間、主題の無限定性と選択の偶然性など、「エッセー」のあり方を追求し、確立した。後期においてもその姿勢は変わっていない。したがって、一方で経験に学ぶ思考を重視しながら、一方で彼が追求したのは、思考の創造性を発揮する工夫であった。彼が注意したのは、「試し」とは何かという原理的な規定ではなく、どのようにすれば「試し」の創造性を発揮できるかであった。作品名に相当する語の《essai》や動詞形《essayer》の意味が進化の過程において明確になってゆくのではなく、逆に、拡散してゆく動きを示しているのも、そのためである。第1章以来の私達の考察や第3章の「作品論の進化」の節でも分かるように、『エッセー』を書く基本姿勢は何か、「エッセー」とは何かなどについては、初期の終わりごろに基本的な性格は決まっていた。それ以後はおなじ道を探求しながら、深みと豊かさをくわえていったのである。『エッセー』にあらわれる《essai》や《essayer》の統計的な整理についても、おなじような処理をするのが正しいであろう。基本的には表題には、これらの語のすべての意味がこめられている。モンテーニュが「試し」という思考の創造性を追求するにつれ、そのような意味の広がりが見られるようになったのである。

時代的な位置づけのなかで捉えるならば、彼が意識していたのは伝統的なスコラ哲学の弊害であった。思考法についても彼はいかに反スコラのルネサンス人らしい追求をおこ

なった。

取り扱う方法を考えるために主題を離れるときがあろうと、すこしも主題を損ないはしない。しかし私の言っているのは技巧的な、スコラ的な方法ではなく、健全な悟性の、自然な方法である。(III-8, p. 88)

「自然な」は意味が広く漠然としている。私達の今までの考察にもとづいて、この語にこめられた意味をもうすこし具体的に考えてみよう。モンテーニュが言いたいのはまず「自由」ということであろう。知的な権威や政治的な、あるいは宗教的な権力に束縛されていない状態である。自然な思考はそのような自由さをもっており、それが創造性につながる。彼が「エッセー」という思考の条件をいろいろと考えているのは、創造的な自由を獲得するためであったと言えるであろう。さらに、中期から後期になるにつれ、その延長上で強まる性格が「運動性」である。思考の自然な運動に身をまかせるのは、旧来の観念や権威よりも、みずからの内部のささやかな創造性を大切にするためでもあれば、自分の過去の認識が固定観念になったり、自己認識が自己満足に留まるのを避ける方法でもあっただろう。しかも次節にみるように、思考の自然な活動性を重視する姿勢はますます非論理性を招来している。一方には練熟した経験的な思考があり、しかし一方には奔放で非論理的な躍動がある。けっきょく両者の一体になったのがモンテーニュの思考であり、随想である。それは自己が外部世界と対峙する経験的な思考の論理性と、みずからの内面の活動を最大限に許容する非論理性とをあわせもっている。自己を鍛える強さのみならず、自己の可能性をひきだし、自己自身を表現する豊かさをもっている。彼は思考において論理性と秩序の強制が人間自身を浅くし、貧しくするのを恐れていたにちがいない。私達が『エッセー』に見るのは、自分の個性の全体がかかわる運動を思考にあたえる、すばらしい仕掛けである。そしてそれが「技巧的な、スコラ的な方法ではなく、健全な悟性の、自然な方法」であった。創造的な自然を蘇生させる方法であった。

第3章第1節（注）

（1）第3巻についてのページ表示は私達の研究方法に従い、I-A-10の1588年版にもとづいている。

（2）いわゆる（C）の晩年のテキストについては、ページ表示はI-A-8にもとづいている。

（3）「おかしなしゃべり屋たち」以下は晩年の加筆である。したがってページはI-A-10とI-A-8のふたつを記した。

（4）II-A-41, pp. 278-282.

2. 自由奔放な随想

『エッセー』第3巻の随想は読者を困惑させる自由奔放な展開で有名である。モンテーニユの熟達の随想は秩序を欠いた錯綜におちいつているようにさえ思われる。この節で私達は随想の展開の仕方と特徴に注目し、話の脱線や論の急転のメカニズムや展開の紆余曲折の構造などを分析してみよう。そののち溯って、見出した特徴の起源を探り、発展の様子を振り返り、進化の理由を考えてみよう。

第3巻の随想は展開の常識的な論理を打ち破る、変幻自在な躍動性をもっている。文の構造や文脈における論理的な重要度には無頓着に、一語や一句の切っ掛けからまったく新しい方向へ発展してゆくときがある。まず一例をあげて説明しよう。

(1) ところで私は馬車も輿も船も長くは乗っていられない(若いころはいっそう堪えがたかった)。町中でも田舎でも馬のほかはあらゆる乗り物が嫌いである。しかし輿よりも馬車のほうがつらくない。おなじ理由で、凧の海で感じる動きよりも、怖くなるような激しい揺れのほうが辛抱しやすい。我々の下から船を取り去るような、櫂のもたらすあの軽い動揺を感じると、なぜだかわからないが頭と胃が混乱してくる。それはすわっている椅子が揺れるのに堪えられないのと似ている。すいすいと帆や水流に運ばれたり、引いてゆかれるときのような一定した動きは、私にはまったく苦痛ではない。気分が悪くなるのは断続的な振動であり、しかもそれがゆるやかなときにはいっそう堪えがたい。私はこのように言う以外にその状態を描くことができない。医者たちはこの出来事にそなえるために、手拭いをまいて下腹部を締めつけるように命じたが、自分のなかにある欠点とは戦って自分の力で克服する習慣であったので、私は一度もそれを試したことはない。(2) マルクス・アントニウスは楽器を演奏する少女を侍らせ、ライオンに引かせた車に乗ってローマの町を練り歩いた最初の人であった。その後ハリオガバルスもおなじようにして、神々の母キュベレと自称し、さらに酒神バックスを真似、虎を繫駕した。また、ときには二頭の鹿や、あるときには四匹の犬を車につないだり、さらには四人の裸の少女に引っぱらせながら、自分も全裸になって壮麗な行列をした。皇帝フィルムスは車にすばらしく大きな駝鳥を繫駕したが、その様は走っているというより飛んでいるかのようであった。(III-6, pp. 46-48)

引用を短く抑えたために論の性格が察しがたいかも知れない。前半は船酔いを主題にした随想に属し、この原因を考察するために各種の乗り物の振動とみずからの反応を反省し、比較している部分である。後半は御覧のとおり逸話の収録である。では両者はどのような関連があるのだろうか。なぜこのようなまったくちがった内容への展開が生じたのであろうか。私達はその答えを引用文中の下線で示した。つまり《coche》という語が(1)と(2)を結びつけているただ一筋の糸である(訳語ではやむをえず「馬車」と「車」の二語になっている)。しかも《coche》は船酔いの原因を考察するために(1)の始めで軽く触れられた乗り物のひとつにすぎない。展開の論理をまったく無視した、あまりにも個人的な話題の転換である。読者が必然性を理解できないとしても、なんらふしぎではない。この随想の変化は執筆中の意識の流れを表現しているのであろう。風変わりな車で練り歩いた逸話の典拠である、パトルス・クリントゥスの『正しい規律について』を読んだ鮮やかな印象がこのような展開を誘ったのであろう。けっきょく作者の全生活を知悉できない他人には断言の仕様はないが、おそらくすでに(1)の最初から《coche》という語は、彼の意識の反映によって特別な色合いで輝いていたにちがいない。ちなみにこの語にたいする愛着度や親密度は晩年の加筆によっても想像できる。戦争用につくられたさまざまな《coche》の実例が(1)と(2)のあいだに挿入され、その量は(2)の約3倍に及んでいる。したがって、《coche》という語が作者の内部でもっていた特別な力が、引用文のような展開を引き起こしたと思われる。このような主観的な解釈を嫌い、客観的な根拠を追求する人たちは、ほかにもっと妥当な理由があるはずだと疑うかも知れない。しかし、私達の思考の流れにおいても、論理的な抑制を緩めるならば、諸観念のつながりがしばしば私達を非論理的な飛躍へ誘う。文章についての常識を振り払い、意識の流れの非論理的な躍動性を反省してみるならば、上記のような展開の自然さを納得できるであろう。モンテーニュは作品としての随想がこのような個人性を帯びるのさえ憚らなかつた。一語や一句を契機にした飛躍はその非論理的な躍動性の一類型である。列挙したうちの一例のみについて長く述べた脱線(1)、同格として付加した語句の内容に関する論が主流を奪う展開(2)、ひとつの句の含むイメージに引かれた新しい随想の発展(3)など、以前の論の性格や文の構造を考えるならば一般的には新しい展開を導きえない細部が随想の流れを変えるのは、第3巻では特別に珍しくない現象である。

モンテーニュは文脈の論理には頓着せず、随想にふくまれる観念のひとつを自由に取りあげる。それが上のようにごく細部の観念であるときには、随想は読者の予想もしていな

い方向へ急転する。このような奔放さを許している随想ならば、主題を構成する主要な論点から気のむくままにいくつかを選び出しながら新しい展開をおこなうのは、なおさら珍しくはない。そしてそのときどの論点が抜け落ちようと、彼は意に介さない。それは私達の第2章では「論点の変位」と名づけた現象であるが、続いてあらわれるときには「ずれの展開」と形容するほうが分かりやすいかも知れない。例をあげながら説明するならば、たとえば先ほどの(2)のあとでは、君主が祭典などに使う費用の是非についての論がはじまる。それは(2)との関連のみを見れば自然な発展のようであるが、しかし重要な要素が脱落している。ここまでの随想の論点はつぎのように要約できる。

(1) 船酔いの原因 (coche と輿と船の振動の比較) → (2) 君主たちの豪華な coche → (3) 豪華な祭典などにたいする君主の出費の是非

つまり(3)への展開の際に、モンテーニュは(1)と(2)を結ぶ唯一の要素である《coche》をまったく無視している。この「ずれ」によって(3)が早くも(1)とはなんの関係もない随想に変わったのである。そしてその後しばらく、おなじように金銭の鷹揚さが帝王の徳と言えるかどうかなどを論じる。しかし話がローマ皇帝の散財に及ぶと、絢爛豪華な闘技場の有様を仔細に描きはじめる。帝王の徳との関係は背景に退き、忘れ去られる。この関係が消え去ったとき、闘技場の趣向に発揮されているローマ人のみごとな才知が、人間はその後衰退の道をたどっているという思想を彼に想起させる。そこで彼は、過去についても現在についても世界の極小部しか把握していない、みじめでちっぽけな知識でもって世界の凋落や衰微を論じる愚かさを批判し、もっとも有力な反証として、発見されたばかりの、まだ若々しいアメリカに言及する。そして再び論点がずれ、世界の衰亡とか人間の認識とかの観点はまったく消え去り、あとはただアメリカ原住民についてのあれこれを話しつつける。第3巻第6章の(3)以下は、このような論点の変位の連続した「ずれの展開」によって主題が変化している。

このような展開は細部からの飛躍ではなく、以前の重要な論点に立脚している。したがって前後の随想にはあきらかな共通性がある。しかし、要点の一部をただ継承すれば展開の論理性が生まれるわけではない。論点の相互関係や比重の推移こそ、論理が統べなければならないはずである。ところがモンテーニュはこのような論理性にも拘泥しない。論点を気ままに無視し、自由に選びとる。その結果重要な論点が抜け落ち、あるいは文脈を変

化させるあたらしい論点が変わり、いつの間にかちがった主題へ移ってゆく。このような論点の変位は第2章第1節で指摘したが、後期の随想ではさらに複合し、連続してあらわれるようになったわけである。それが随想の非論理的で軽快な展開のひとつの型になっている。この「ずれの展開」においては、私達は眼前にモンテーニュの思考を追っているように感じながら、いつの間にか出発点も経路も行き先も分からなくなってしまう。

つぎに『エッセー』の随想の心理的な特徴として、イメージや連想に影響された展開を知っておかなければならない。観念が論理の抑制をうち破る活力を保持し、自由奔放な変化を引き起こしているのを思うならば、展開の分析に連想の原理を援用できたとしてもふしぎではない。対照、類似、隣接という原理によって説明の可能な展開例が、第3巻には容易に、数多く見つけられる。たとえば、

(1) 有り難いことにまだどのような裁判官も、どんな訴訟事件であろうと(私のであれ第三者のであれ、刑事であれ民事であれ)、裁判官として私に話しかけた人はいない。どの牢獄も、たんなる訪問者としてさえ、私を迎え入れたものはない。それを想像するだけでも、いや、ただ外見を思い浮かべるだけでさえ、私は不愉快な気分になる。(2) 私は貧欲に自由を求める人間なので、誰かにインドのどこかの片隅に近づくの禁じられただけでも、生きるのがいくぶんより窮屈に感じられる。したがって、開放的な土地と空気がどこかに見つけられるかぎり、身をひそませなければならぬような国にくすぶっていたりはしないであろう。我々の法律と喧嘩をしたために、たくさんの人たちが主要な町々や宮廷への出入りや公道の使用を禁じられ、この王国の一地方に釘づけになっている。ああほんとうに、彼らのような境遇は私にはどんなにか堪えがたいであろう。もし私の仕えている法律がほんの指先でも脅かすならば、ただちに立ち去り、どこであろうとほかの法律を見つけにゆくであろう。我々のおちいっているこの内乱の世にあって、私はささやかな知恵をしぼり、往来の自由が妨げられないようにしている。(3) ところで法律は信頼によって、つまり正しいからではなく、法律であるという理由によって維持されている。それが法律の権威の神秘的な根元であって、ほかには何もない。したがって誰であれ、正しいからという理由で法律に従っている者は、義務にそくして正しく従っているとは言えない。(I I I-13, pp. 14-15)

引用部は裁判の誤謬や不正を批判する論につづいている。したがって(1)と(3)が展開の主流であり、(2)は脱線部である。それは(3)が(2)につながらないところからも分かるであろう。関連のやや曖昧なこの脱線的な分岐を促したのが、連想的な意識の動きである。(1)のなかの「牢獄」が「自由」という対照的な観念を呼び起こし、(1)から(3)への展開に優先して(2)への脱線が起こったにちがいない。ちなみに「自由」というのはモンテーニュの強く意識している問題のひとつであり、言及する機会を逃さず利用したとしてもふしぎではない。

上記の例は、連想的な特徴を知っていようといまいと、随想の流れを把握するのはさほど困難ではない。余計な原理を適用する必要はないとも言える。しかし『エッセー』においては、論理的にはどうしても理解できない展開が、連想の観点から分析しなおすことによって納得できるときがある。それは格別に稀な例ではない。たとえば、

(1) 私の心がもっとも痛むのは、我々の病の症状を数えてみると、我々の錯乱や人間の愚かさがもたらしたものとおなじくらいに、天の授けた、まさに我々に固有の、生来のものが見られることである。(2) さらにまた、このとりとめのない夢想の書においても、記憶が私を裏切り、おなじことをうっかり二度記させたのではないかと恐れている。私は見直すのが嫌いであり、一度自分から離れたものを手に取りなおすのは、まったく嫌々ながらである。ところで、ここには、私の新しい学習の成果など何もない。これらはありふれた思想であって、おそらく百べんぐらい考えたはずであり、以前にすでに書いたのではないかと恐れている。繰り返したたとえホメロスであろうと誰であろうと退屈であるが、ただ外見だけの、はかない、軽薄な事柄にとっては致命的である。いやたとえ有益な教えであろうと、くどくどしいと私は不愉快になってくる。セネカがその良い例である。(III-9, pp. 145-146)

宗教戦争という国家の病を憂う随想は引用部で突然『エッセー』の話にかわる。前者は前から相当長くつづいており、ほとんどの読者はまったく異質な話題の唐突な出現に困惑するであろう。しかしそれは作者の意識の流れの自然な変化にすぎない。(2)の最初で平然と書いている「さらにまた(Encores)」も自然さの現れであろう。「私の心がもっとも痛む(Ce qui me poise le plus)」と「恐れている(crains-je)」という観念の類似性に引かれた連想が(1)から(2)への展開を惹起したのである。 つづいて隣接の

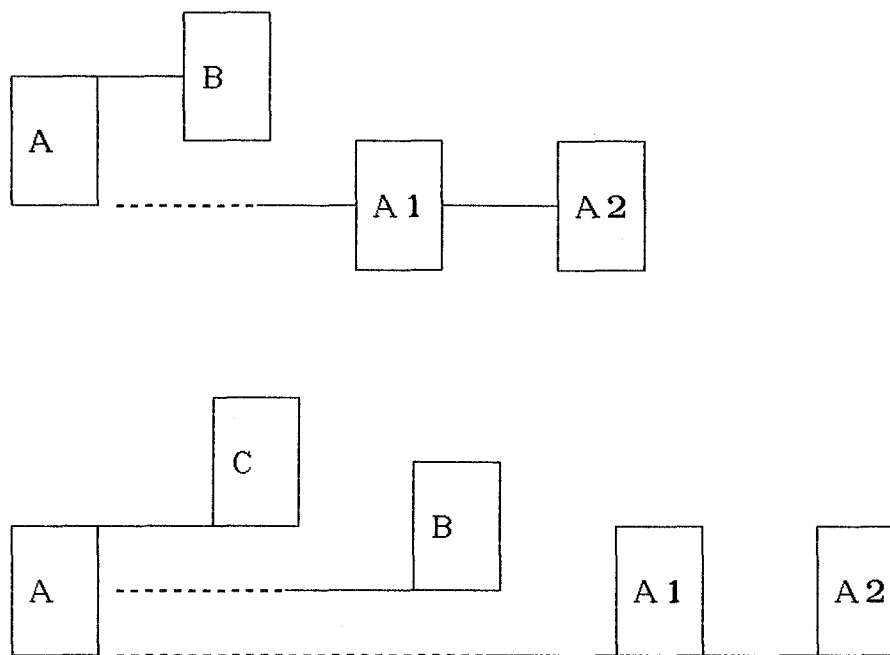
原理で解釈できる一例をあげておこう。

(1) 話をもどすならば、したがって遠くでひとりで死ぬのはあまりつらくはない。
(2) しかしまた、ついに耄碌し、長い余生を引きずるようになった人たちは、自分のみじめさで大勢の家族を悩ませるような願望をいだくべきではないであろう。誰だつて最後には老人をわずらわしく、堪えがたく感じるようになる。普通の義務はそれを越えるところまではゆかない。あなたは妻や子供たちを長い慣れによって、もはやあなたの不幸を感じもしなければ哀れみもしないほど鈍感にさせながら、最良の友人たちに無理やりに残酷を教えているのである。私の疝痛のうめき声はもはや誰も心配させない。たとえ我々が彼らとの交際からなにか喜びを得るとしても（境遇の相違が、どんな人であれ、たやすく蔑視や憎悪を引きおこすので、この幸せはいつも生じるとはかぎらない）、こんな年になってまでそれを濫用するのはあんまりではないだろうか。彼らが私のために優しい心でがまんしているのを見れば見るほど、私には彼らの苦勞がますますつらく感じられる。たがいに支えあうのが我々の掟ではあるが、他人の上に重々しくのしかかってはならないし、彼らの破滅を支柱にしてはならない。ある男は自分の病気をなおすために幼い子供たちを殺させ、その血を薬にした。また、別の男は若い娘たちを調達し、夜に自分の老いた肢体を暖めさせ、彼女たちの香しい息に彼の臭く重苦しい息をまぜた。そんな真似をしてはならない。(3) このような衰弱の状態に達した者の隠棲の地としては、私はヴェネツィアを推奨したい。(I I I - 9, pp. 180-181)

遠い外国への老人(=モンテーニュ)の旅行についてのべた文脈からの引用であり、(1)で主題にもどりながら、ただちに(2)において「旅行」の論点为背景にしりぞき、家族や若い人たちにたいする老人のあるべき態度が論じられる。そして(3)で突然ヴェネツィアを話題にしたのち、引用部以降でふたたび(1)を継承して書きつづける。したがって、この文脈における(2)から(3)への発展は論理的にはあまり興味深い例ではない。その飛躍を作者の心理の生々とした動きとして味わいながら、ヴェネツィアにたいする彼の感情を想像するところに面白みがある。(2)の背景をなす外国旅行に「隣接」していた経験が突然意識の表面に浮上し、ヴェネツィア滞在の思い出をこめて(3)が記されたにちがいない。

私達は今まで展開の非論理性を分析してきたが、つづいて随想の紆余曲折を構造の面から捉えなおし、『エッセー』の読者がモンテーニュの奔放自在な随想を追ってゆく手引きを発見するようにつとめよう。

非論理的な躍動性をもった随想は平行、交差、遡行と名づける構造的な特徴を残しながら発展してゆく。まず平行構造とは、二種あるいは稀には三種の随想がおなじ先行部から生まれ、それぞれが個別に、独自の展開をおこなう特徴を名づけたものである。図示すれば下記のようなになる。

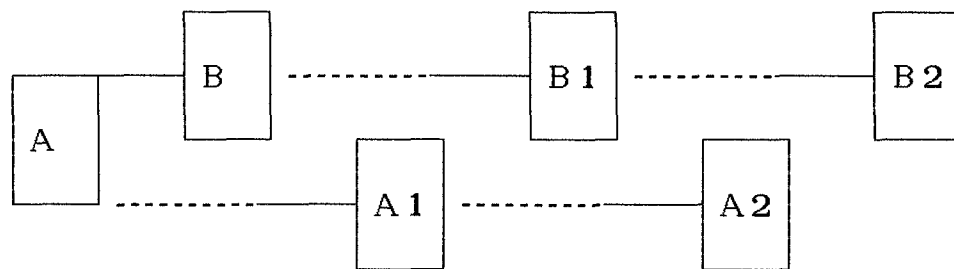


『エッセー』に書かれた状態においては随想は左から右へ実線をたどる順序で展開している。しかしながら随想部A1はB（下の図ではBはC、A1はB）から発展しているのではない。BとA1（下の図ではC、B、A1）はすべて随想Aの内部に発展の源がある。したがって書かれている順序どおりに理解しようとするならば、BとA1（下の図ではCとB、BとA1）との関連の把握に悩まなければならない。読者は平行構造に気づき、A→B、A→A1→A2（下図の場合ならば、A→C、A→B、A→A1→A2）と読みなおすべしを心得ておくべきである。

平行構造は単純に考えればいわゆる脱線の別名にすぎない。しかし、脱線にもいろいろな型があるのみならず、たんにこの観点からの理解ですますならば、モンテーニュの随想の重要な側面を看過するであろう。この構造は、あるときは、対象を見る視点の柔軟な変

化から生まれる。現実には一様な性格の事柄などまずありえないのであつて、視点を変えさえすれば、複雑な様相があらわれ、思考を展開するいく筋もの道が開けてくる。ある問題を見つめたとき、道徳哲学的な認識や人間性の考察やあるいは自己自身についての反省と認識など、いくつかの方向への発展の可能性が感じられたとしてもふしぎではない。このようなとき私達ならば文脈の秩序におうじた取舍選択をするが、モンテーニュはそんな常識など頓着せず、いずれの方向へも「判断の試し」をおこなう。思考法の根本と不可分なこのような姿勢がひんぱんに平行構造を引き起こすのである。

こうして派生した主題が一度ではうまく論じられなかったり、平行構造をなすふたつの流れが豊かに話題をふくんでいたり、あるいはそれらのいずれかに新しい主題を決めがたいときには、モンテーニュはゆきつもどりつしながら随想を発展させてゆく。その結果異なる随想が交互にあらわれ、いわば交差の構造をつくる。図示するならば、



『エッセー』は実線の順序で書かれているが、随想部BからA 1、A 1からB 1（以下同様）への発展はない。ふたつの脈絡、A—B—B 1—B 2とA—A 1—A 2が交差した構造になっている。私達の調査から判断するかぎりでは、中期の随想にはこのような構造を示すほどの論点の揺れや曖昧さはまだないようである。したがって第2章第1節ではこの例証をおこなわなかったのも、短い引用で済ませられる例をあげながら、具体的な説明をくわえておこう。

(1) 私の意見が反論されたとき、私のなかに呼び覚まされるのは、注意力であつて怒りではない。(2) 私は反駁したり、忠告したりしてくれる人のほうへ近づいてゆく。(3) 真理がお互いの共通の利益でなければならぬであろう。(4) 彼は何を答えようと言うのであろうか。憤怒の激情がすでに彼の判断力を動転させている。理性以前に判断が混乱してしまっている。(5) 我々が十分に自覚できるように議論

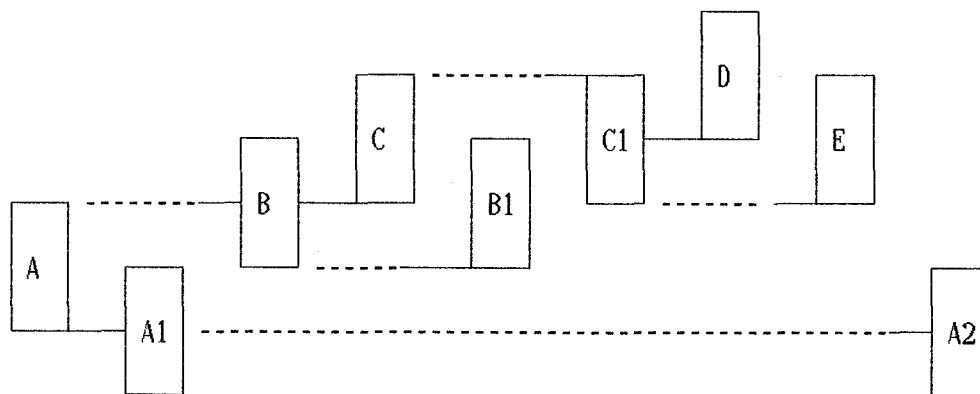
の判定にお金を賭け、負けたことの物質的な証拠が残るようにするのも有益かも知れない。私の召使が私にむかって、「旦那さまの無知と頑固が去年は20回で100エキユにつきました」と言えるのも良いであろう。(6)どのような人の手のなかに見出そうとも、私は真理を愛し、歓迎する。遠くからであろうと近づいて来るのが見えたらば、私は機嫌よく真理に降服し、うち破られた私の武器を差し出す。(7)そして確かに私は私を畏敬する人たちよりも、私をやりこめる人たちとの交際を求める。我々に感服し、同調する者を相手にするのは、だらけた、有害な快楽である。(8)アンティステネスは子供たちに諭し、自分を褒める者にけっして好意をもったり、好遇したりしてはならないと言った。(9)私は相手の弱さにうち勝った勝利をうれしく感じるよりも、白熱した論争の最中に相手の道理の力に自分を従わせ、自分自身にうち勝った勝利をはるかに誇らしく思う。(III-8, pp. 85-87)

平易な内容であるにもかかわらず、上記の部分はなぜかすっきりと理解できない。(1)から(9)がひとつの文脈であって、それぞれ前の論を受けながら発展していると思うならば、考えれば考えるほど分からなくなってくるであろう。複数の文脈の交差があると見なすのが、もっとも理解しやすい。引用部は(1)と(2)と(3)のみつの論点をふくんでいる。それらは相互に関連のある問題ではあるが、一度にまとめて論じられるかどうかを考えるならば、むしろ密接な関連性は弱い。そのためモンテーニュはこれらの発展方向のあいだで揺れるばかりで、統一性のある論に到達しえないのである。複数の文脈が交錯し、平易なようにも難解なようにも思われる性質が生じているのである。さらに詳しく分析するならば、(4)は(1)との関係による発展であり、(5)はこの文脈を継承した展開である。ところが(6)をおなじ文脈に沿って進展していると思えば、たちまち前後関係の論理性が曖昧になってくる。一方、(6)は(3)を受けた発展であるから見なすならば、なんら曖昧ではない。(7)についても同様である。「そして(Et)」と書き始めてはいるが、前の部分との関連は明確ではない。(2)にもどった新しい文脈が交錯したのである。(8)がその発展であるの言うまでもない。(9)もおなじように、(7)や(8)との関係にこだわると、不明瞭になってくる。(6)との関係にもどっていると考えるならば、単純である。以上のように引用部は(1) → (4) → (5)、(2) → (7) → (8)、(3) → (6) → (9)というみつの文脈のあいだをゆきつもとどろつしながら論じているのである。もちろんこれらが完全に

分離しているわけではない。他の文脈との関連を推察できないわけではない。しかし基本的にはそれは平行構造とおなじように文脈相互のあいだに意味の共鳴が生じているのであって、総合的なひとつの文脈を想定すべきであるという根拠にはならない。一筋の道に沿った発展として読むときの難解さと曖昧さに比べるならば、私達のように三種の文脈を基本的に分けて考えたほうがはるかに理解しやすいはずである。複数の発展方向のあいだでモンテーニュが迷い、揺れ、あるいはそれぞれの可能性を摸索し、試してみた痕跡として捉えるのが良いであろう。一直線を進むのではないこのような思考の運動は、意識的で論理的な制御と整理をくわえなければごく自然な現象であり、引用部はこの観点から捉えるならば、たちまち明快になる。そして、その上で、文脈相互のあいだの意味の干渉と反響を考えれば良いのである。

ところで、この交差の構造がひんばんに見られる第3巻第9章の構成を論じ、モンテーニュはいたずら心から読者をとまどわせるために、別々に書きあげた二種の随想を寸断し、混ぜ合わせてひとつの章にした、と推断する意見が述べられたことがある(4)。しかしながら第9章の構成にこのような作為を想像するのは、モンテーニュ流の随想の展開を十分に把握していないからである。ふたつの異なった主題が消えつ現れつ発展してゆく歩みは、その紆余曲折の構造のひとつであって、第9章ではその特徴が章全体にわたっているにすぎないのである。

前述の平行と言ひ、交差と言ひ、これらは『エッセー』の随想を分解した基本構造である。実際にはこれらが複合しながら、いっそう複雑な展開になっている。そしてその過程で「遡行」という現象があらわれる。たとえば、図示してみるならば、



B → Eの流れはA1 → A2にたいする関係から見れば平行構造をなしているが、

さらにその内部にB → B 1とC → C 1との交差を含み、C 1の随想からDとEが分岐し、DとEが平行構造になっている。このように各随想の発展の可能性を気ままに追いながら、小枝が尽きれば枝に帰り、枝が切れれば幹に戻ってゆくような展開においては、随想が遠い以前へ溯らなければならないときがある。図に例をとって言うならば、Bからの流れがEの支脈に到って尽きると、モンテーニュは突然A 1から新しくA 2を発展させる。根本的にはAから分岐した一方のA 1を継承したにすぎないが、すでに複雑な展開を繰り返したのちでは、遡行と呼ぶのがふさわしい特徴である。しかも遡行にあたっての、読者にたいする配慮は精々「話をもどすならば (Pour revenir à mon conte) 」 (I I I - 9, p. 180) とか「だが私の本題にもどろう (Mais venons à mon theme) 」 (I I I - 5, p. 258) などの断り書きを記すだけであり、もはや奔放な展開のあとでは、読者がもとの「話」や「主題」が何であったか思い出せないのも稀ではない。本人は明瞭であると感じていたであろうこのような指示も、彼の意識の躍動と一体になれない第三者には理解しがたいのである。しかも閑話休題の類の語句さえない遡行もある。また、以前との関連にこだわるならば、読者はときには数十ページ以前まで溯らなければならない。

以上に分析した自由奔放な展開のメカニズムは第3巻の随想にのみ見られる特徴なのであろうか。初期以来の作品様式の変遷を振り返ってみよう。私達の指摘した類型の起源や頻出度の変化は、『エッセー』の進化について多くのことを示唆しているはずである。

印象的な判断にとどまっている人たちは、連想的な飛躍や遠い以前への遡行などは千変万化な第3巻の随想に固有な現象であるように思うであろう。しかしながら、ほとんどの類型はすでに初期から存在している。論点の変位、平行構造、遡行、連想的飛躍などの実例を、私達は初期の章に発見することができる。もっともその数は中期や後期に比べればはるかに少なく、他の部分の展開も単純であるため、さほど読者を困惑させるわけではない。しかし、多くの章は読書から拾った実例を綴り合わせているにすぎないような初期において、雛形にしろすでにそれらがあらわれているならば、その事実は「エッセー」という随想様式の進化についての解釈に大きな影響を及ぼす。まず例をいくつか実証してみよう。

つぎの引用は平行構造と連想的飛躍の一例である。

(1) おなじように試み、習慣というこの激しい先入観を振り解こうとした人ならば、疑う余地もなく是認されている多くの事柄が、付随した年月の白髪としわに支えられているにすぎないのに気づくであろう。しかも、この仮面をはぎとり、真理と理

性にもとづいて吟味するならば、自分の判断がまったくひっくりかえったように感じるであろう。しかしながら、また、いっそう確かな状態に置きなおされたようにも思うであろう。たとえば、私はそのとき彼に尋ねてみるだろう。いったい国民が自分のまったく理解できない法律に強制的に従わされている事態ほど、奇妙なことがほかにあるだろうか。結婚や贈与や遺言や売買などあらゆる私事にわたって、自国語で書かれていなければ公示されてもないために知りようのない規則にしばられ、これを理解し利用したければ、必然的に金で買わなければならないほど奇妙なことがあるだろうか。(2) わが国の歴史家の伝えるように、我々にローマ帝国の法律を課そうとしたシャルルマーニュ大帝に最初に反対したのは、ガスコーニュの一貴族で、私の地方の人であった。私はこのことを運命に感謝している。(3) 合法的な習慣として裁判の職が売買され、判決がまったくの現金払いであり、払う資力のない者には裁判が拒否されても違法ではない、いったいこんな国よりも野蛮なところがほかにあるだろうか。しかもこの商売は非常に大きな権威をもっているので、聖職者、貴族、人民という昔からのみつつの身分にくわえ、裁判を取り扱う人たちの第四の身分が国家のなかにできあがっている。この身分は法律を職務とし、財産と生命にたいする至高の権力をもっており、貴族の集団とは異なった別の集団をなしている。その結果、名誉の掟と正義の掟という、多くの事柄でまったく反対のふたつの法が存在している。したがって、裏切り者を容赦するならば名誉の法によって厳しく非難され、復讐を実行するならば正義の法によって重く罰せられる。武人の本分にもとづくならば、侮辱を我慢する者は名誉と地位を失う。ところが、市民の義務にもとづくならば、雪辱を遂げる者は死刑を宣告される。もし傷つけられた名誉の償いを求めて法律に訴えるならば、名誉を失い、もし訴えないならば、法律によって処罰される。しかも、非常に異なったこれらふたつの集団がただひとりの君主に仕えながら、一方は平和、他方は戦を務めとしている。一方は利益他方は名誉、一方は知識他方は勇気、一方は言葉他方は行動、一方は正義他方は武勇、一方は道理他方は力、一方は長衣他方は短衣をそれぞれ分かち持っている。

(4) 衣服のようなつまらない事柄ではあるが、本当の目的に立ち帰って考えるならば、それは肉体に役立ち、快適であるためであり、似合うとか優美であるとかも本来この点にかかわっている。私の感じるままに、想像しうるもっとも奇妙な服装をあげるならば、まず第一にわが国の四角い縁なし帽、とくに、色とりどりの飾りととも

に婦人たちの頭にたれさがっている、髷つきピロードの長い尻尾であり、つづいては、我々がまじめに口に出しさえできないような器官を人前に示し、誇示しているあの無益な、くだらない型である。(5) しかしながら、これらの考察が良識のある人をして世間一般の慣習に背かせるわけではない。それどころか、反対に、すべて型破りな特殊な態度は、本当の理性よりもむしろ狂気とか野心的な気取りとかに由来するようと思われる。賢者は魂を俗衆のところから内部へ引きもどし、自由にものごとを判断する余裕と力を保持すべきである。しかしながら、外部に関しては、一般の流儀と形式に完全に従わなければならない。(I-23, pp. 141-145)

まず、平行構造の部分については、多くの説明はいらないであろう。(2) は脱線部であり、(3) は(2) の介在を無視し、(1) の末尾の論を継承している。(3) にはなんら(2) の内容を発展させたところはなく、これら両者は平行して(1) とつながっている。

つぎに展開の脈絡と(4) との関係に注意してみよう。内容を部分的に比べるかぎりでは、(4) は(1) や(3) の最初や(5) と似た性格をふくんでおり、格別に問題はないように思われるかも知れない。しかしながら、以前とのどのような関連で(4) が生まれたのであろうか。どのように(4) を評価しながら(5) への展開を理解すべきなのであろうか。考えはじめると分からなくなる読者も少なくないであろう。その理由は第一に、(3) から(4) への発展の論理性が薄弱だからである。実は両者の関連は(3) の終わりの対照的な列挙のなかの、最後の一組にもとづいているにすぎない。(4) の「衣服(vestemens)」の話は、「長衣(la robe longue)」と「短衣(la courte)」の語に刺激された連想から生まれたにちがいない。それ以外に(3) から(4) へ話題が変わる理由は考えられない。しかし一方では、(4) は(1) で設定された文脈にもどりながら記されている。つまり作者は連想的な話題の転換とともに(1) から(3) の論に、いわば落ちをつけたのである。したがって(4) の末尾で(1) からの論の流れが決着したのであり、(5) は直接(4) を受けているのではない。それは(5) の冒頭の「これらの考察(Ces considerations)」という表現を見ても分かるはずである。「これら」は習慣的な事柄の非合理性を論じた(1) や(2)、さらにはそれら以前から続いている考察を指している。そして(5) はこの章の前半と後半を分ける重要な転回点になっている。(5) 以前は習慣についての認識であり、(5) 以降章末までは、引用部によっても明白なように、

視点を変えた論になる。習慣が非合理的であるならば私達はどのように振る舞うべきか、という行動のあり方が論じられる。

(1) から (5) の展開はさほど自由奔放な性質ではなく、一章全体を読みなおさなければ把握できないわけではない。理解を困難にしている第二の原因は段落の切り方にある。モンテーニュ在世中の1580年版にも1588年版にも本文には段落改行はなく、「ポルドー本」にも彼がのちに付加しようとした形跡はない(5)。後世の版の校訂者が変化に富む随想を追う助けとしてはじめたようである。ところが引用部は現代の版を見ると、(4)の冒頭で行を変え、そのまま(5)へ続けている。論の転回点に一致しているべき改行は、上に述べたように、明らかに(5)のところになければならない。(4)で行を改め(5)へ続ける段落区分は、逆に、論の重要な変わり目を隠している。なお、(5)とともに(4)の最初でも改行すべきかどうかの判断は微妙であるが、私見では(4)はそのまま(3)の末尾へ付けるのが良いであろう。そして、(3)の末尾の語を連想の契機にした、モンテーニュ流の展開の個性を残すべきであろう。(4)に段落をつけるのはこの個性に反しているのみならず、(5)の重要な改行の効果を減じるにちがいない。何よりも随想の展開をつぶさに分析した私達の研究は、現在の段落改行の誤りを発見し、モンテーニュの随想の方法にふさわしく、しかもその紆余曲折の節々がより明瞭になるように改善するのも役立つのである(6)。

論点の変位の例に移ろう。たとえば、もっとも初期の1572年頃に書かれた「着物を着る習慣について」にその一例がある。章題に沿った話はずぎのような性格をもっている。

マッシニッサ王は大変な老齢になるまで、寒かろうと雨であろうと嵐であろうと、人からいくらすすめられても何かをかぶる気にはなれなかった。またアゲシラオス王は老いるまで夏も冬もおなじ服を着つづけた。スエトニウスの言うところでは、カエサルはいつも軍の先頭を進み、しかも非常にしばしば、日が照ろうと雨がふろうと、徒歩で、頭はむきだしであった。またハンニバルについてもおなじように言い伝えられている。

そのとき彼は天から落ちる急流のような、しのつく雨を裸の頭に受けて。

(I-36, pp. 348-349)

ところがつぎにモンテーニュは以下のような実例をつけくわえながら章を閉じる。

マルタン・デュ・ベレー大將は、リュクスアンブルに遠征のとき、非常にきびしい寒さを体験したと語っている。糧食の酒が斧やまさかりで割られ、目方で分配されたほどであり、兵士たちは籠に入れて運んだ。またオウィディウスにもよく似た記述がある。

つばから出されても酒は容器の形そのまま、彼らは汲んで飲まずに、あたえられた塊を口に入れる。

(同, p. 349)

モンテーニュは引用の前者から後者へどのような関連をたどって展開したのであろうか。前者の「着物」と「寒さ」という論点に注意するならば、後者が「着物」という要素を無視し、「寒さ」のみを選び、「着物を着る習慣」とはまったく無関係な文脈へずれたのが理解できるであろう。読書に拾った実例を綴り合わせているだけの著作のなかに、すでに論点の変位の類型が見られるのである。ただ初期の彼はのちの時代のように平然と非論理的な展開をおこなってはいない。前者と後者のあいだでつぎのような釈明をしている。

また、我々は寒さについて話しており、しかもフランス人は色とりどりの服を着る習慣があるのだから、別の一片をつけくわえておこう。(同, p. 349)

したがって、少なくとも初期においては、『エッセー』に文脈のずれが生じるのは、モンテーニュが非論理性に気づいていないからではない。彼自身、「寒さ」という一脈のつながりしかない最後の読書実例を書きくわえるならば、秩序が乱れ、章が「色とりどり」になるのを自覚していた。知っていながら敢えてそのような常識に拘泥しないのが、彼の随想の姿勢であると言えよう。しかし一方、なぜ釈明してまで、わずか10行ほどの話を付記したのであろうか。これを捨てて章の秩序を守るのは簡単にできたはずである。意識的に章の統一性を乱すのが彼の意図だったのであろうか。しかしながら、他の作品と考えあわせるならば、初期の彼がそのような随想様式を目指していなかったのは、まずまちがい

がない。実例にたいする好奇心と愛着がその原因であろう。これらの感情が秩序を守ろうとする論理的な抑制よりも強いため、章の姿が「色とりどり」になったのである。実際、実例にたいする好奇心が随想の秩序や統一性を乱す特徴は、もっとも初期から後期まで一貫して見られる。先ほどの引用例では、モンテーニュは論理的なずれに気づきながら、けっきょく実例を付記した。論理的な秩序よりも事実の魅力を採った。読書実例を書き綴る「エッセー」が経験にそくして思考する「エッセー」に成長しても、変わりはない。論理的なずれがあろうと、やはり彼はその方向へも随想を発展させ、判断を試す機会を豊富にするほうを選ぶ。彼は終始読書実例を現実とおなじように見ており、これにたいする好奇心は事実そのものにたいする関心とおなじである。したがって、読書実例が減少し、経験にそくした思考の展開が中心になった時期においても文脈のずれがあらわれるのは、なんらふしぎではない。そこにあるのはおなじ価値観であり、おなじ随想の姿勢である。

ちなみにトゥルノンは著書(7)の第2章第2節で《syntheses et transpositions》、《critiques》、《dechiffrements》、《reinterpretations》などの概念によって、1580年版における随想の各部分相互の関係を分析しているが、彼は私達が説明したばかりの箇所を「再解釈」として捉えている(8)。しかしそれは明らかに誤解であろう。98ページからの彼の例証と比べてみても、異なったものを同一視している。そこに述べられているように、モンテーニュは脱線を繰り返しながら何度か同一の主題にもどり、視点を変えて論じなおすときがある。私達が「遡行」と名づけた現象は、しばしばそのような「再解釈」によって生じており、トゥルノンの見解は納得がゆく。そして、この場合には、途中の展開がいかにか錯綜していようと、遡行した先さえ分かるならば、読者がどのような「再解釈」であるのか理解するのは困難ではない。つまり両者の関係そのものは論理的であり、論理的な発展によって進展している。ところが第1巻第36章の例は、一部の論点は共通しているが、全体的には別の主題への転進であり、以前の主題を異なった視点から解釈しなおした意義はなんら認められない。論理的な発展ではなく、非論理的な飛躍である。この例をおなじ種類に含めるのは、256ページの説明とも合致しない。「再解釈」はひとつの視点やひとつの見解への固着を排する動性を証している、とトゥルノンは考えている。確かにそのような柔軟性はモンテーニュの個性であり、長所であり、私達の研究の結果とも一致している。しかし、一方、第36章の例を含めるのは、「再解釈」という概念による彼の研究成果をかえって曖昧にしている。これはむしろひとつの対象への固着を嫌う、随想の軽快な展開の類型であり、後期に近づくにつれてますます頻繁になる特徴

である。おそらくトゥルノンの誤解は研究方法に由来している（と言っても彼の研究は随想自体に関しての、ヴィレー以降の最大の業績であり、その欠点は一個人の限界としてやむをえないのであるが）。つまり、ひとつは286ページで彼自身のべているように、随想にひそんでいる論理的な思考と非論理的な展開とを同時に分析しないで、まず前者のみに注目したために、後者との区別が十分にできなかつたのであろう。ひとつは進化という視野での再把握がないために、『エッセー』のなかの現象とモンテーニュの言葉についての評価に適切さを欠いたのである（p. 102の注番号61の箇所とp. 363の説明も参照）。

つづいて初期における遡行の例を見てみよう。第2巻第3章につきのように始まる部分がある。

この疑問の解決に干渉した国家もあった。かつてわが国のマルセーユでは、公費によって毒人参で作られた毒薬が保存され、死を早めたい者は最初に元老院の600人に動機を納得させたのち、これを利用することができた。そして、自分をあやめるのは、当局によって理由の正当性が認められたときしか許されなかつた。（同、pp. 32-33）

当然「この疑問」という言葉が遡行の先を示している。それは1580年版では7ページ前にある、つぎの箇所を指している。

ひとりの人間をして自殺の決心に到らしめるに十分正当な理由とは、どのようなものであろうか。最初の意見をとる人たちのあいだにも、この点については大きな疑問があつた。（同、pp. 25-26）

つまり、この考察に一段落がついたとき、モンテーニュは7ページ以前へ溯りながら再出発したのである。紆余曲折を生む随想法のひとつである遡行はすでに初期からあつた特徴なのである。ただ初期のこの章では、途中で一度、自殺の主題からやや逸れているにすぎない。のちの随想のように、新しい発展部や脱線部をいくつも含んだ、複雑な展開が終わってから再出発しているわけではない。後期においては平行構造や交差が繰り返され、複合しているのに比べ、初期においては、平行構造によって分岐した随想からさらに脱線

するほどの自由さは見られない。以前の展開が比較的単調であるため、遡行と言っても構造的にはほとんど平行構造とおなじ姿をしている。それが初期の特色である。逆に言えば、中期以降の随想の複雑さは、すでに初期からあった随想法が複合しながら生じたのである。モンテーニュがなにかの理由で突然著作の態度を変更したからではない。その複合と複雑化は、対象の種々の様相を見つめる観察と思索が進歩した、自然な結果である。彼がますます現実の複雑な脈絡を把握するようになるとともに、問題のひとつひとつからいく筋もの発展の道が開け、随想の展開はさまざまの支脈を生み、紆余曲折を増したのである。先の「論点の変位」の例において、自分自身文脈のずれを承知しながら読書実例を追加し、章が「色とりどり」になったように、彼はいくつかの発展の可能性に出会ったとき、論理性や秩序という基準によって取舍選択するような方法を採らない。それならば、彼の観察眼が鋭さをくわえ、思考が現実の複雑な脈絡を活発に捉えるようになればなるほど、初期に散見された随想法がますます数を増し、複合するようになるのは当然であろう。

この節で最初に分析を試みた第3巻の随想の自由奔放な特徴は、以上のように、すでに初期の没个性的な章にわずかではあるがその類型が存在している。簡単に変遷と進化を要約するならば、それらは中期ではとくに長い章によくあらわれるようになり、後期の第3巻では量的にも質的にもいっそう著しくなっている。したがって中期や後期の紆余曲折に満ちた随想は、著作方針の意識的な転換のみによって原因を説明してはならない。『エッセー』を書きはじめたときからモンテーニュの内部に存在していた特徴が思索の成長につれて発展した、自然な複雑化にすぎないところがある。しかしながら、事実の錯綜する脈絡を発見してゆく思索の成長につれ、必ずしも表現様式が複雑になってゆくわけではない。必ずしも彼のように、論の展開が紆余曲折を増すわけではない。把握した事実の意味を関係づけ、明確な論を構成することもできるはずである。思索の成長が論点の変位や平行構造や遡行などを複合させ、さらに連想的な躍動をふくむ自由奔放な随想へ導くところに、モンテーニュの進化の個性があると言えよう。この視点から進化を眺め直すならば、「自然な複雑化」が納得できるであろう。第1章以来の私達の考察にもとづき、つぎのような理由が推察できる。

人間や世界を認識しようとするとき、彼はいつも流動性と多様性の感情に襲われる。あらゆる人間の行為、世界の全存在物、すべての事象は、変化して止まない流動性とさまざまに異なっている多様性が本質であるように思われる。対象がなんであれ、彼の思索にはつねにこの基本的な感情が反映している。それは初期から後期までを一貫して染めている、

彼の思索の世界の色調である。後期の思想的な円熟も不変の真理を確信した境地ではない。前節で示したように、観察と思索がすすむにつれ、彼はますます多様性と流動性を感じるようになっていく。したがって、外の世界を眺めても、自己自身を観察しても、つねに流動性と多様性を強く感じるモンテーニュにとっては、対象が何であれ、認識は確定的な、不動の秩序を目指す行為ではありえない。まず大切なのは、どのような対象についても、その多様性と流動性を十分に自覚することである。ものごとを広い視野で捉え、正しく判断するためにはそれが必須であり、いかに世界の多様性と流動性に学ぶか、ここに思索の要諦がある。ところが人間は自己の非力もかえりみず、多様性と流動性を越える一般法則を詮索し、思弁をもてあそぶのが好きである。彼から見れば、空虚な野望がそのような絶対性に駆り立てるのである。思索の進化あるいは深化はけっして統一的な秩序へ向かう歩みではない。むしろ多様性と流動性のただ中へ進み入り、そこに活路を見出さなければならぬ。彼がこのような姿勢を守りつづけるならば、思索の歩みとともに『エッセー』が世界と自己自身の多様性と流動性をいっそう取り込むようになり、紆余曲折を帯びた展開になるのも当然であろう。初期にはまだ個々に、単純な姿であらわれた随想法が思索のすすむにつれてだんだんと複合し、作品の構造がますます複雑になるのも自然な発展であると言える。

「エッセー」という思考法が『エッセー』の記述におよぼす影響は、つぎのような箇所とその加筆を読むだけで容易に思い出せるであろう。おそらく初期の終わり頃に書かれたにちがいない第1巻第50章の冒頭に、エッセーという表題に関連させながら、「判断の試し」という著作の基本姿勢が語られていた。

判断力はあらゆる事柄に使う道具であり、いたるところに顔を出す。したがって、ここでおこなう判断の試しについても、私はあらゆる機会を利用する。・・・ [中略] ・・・私は主題については偶然が提供してくれるままに任せる。私にとってはどれもおなじように結構なのである。しかも主題を全体的に、かつ底の底まで論じるつもりはない。それぞれがもっている千の顔のなかから、自分の気に入ったのをとりあげる。
(I-50, pp. 459-461)

「判断の試し」という思考法のこのような定義は多様性と流動性の基本的感情にふさわしい。それはいっこうに秩序や統一性を目指していない。体系の論理性が問題を呼び寄せ

るのでもなければ、認識の構想が選択を決めるのでもない。判断の対象は何でも良い。今読んだばかりの本の一節でも良ければ、昨日偶然出会った事件でも良い。「判断の試し」はまったく対象にこだわらないのが第一の特色である。しかもモンテーニュは対象自身のもつ秩序や関連も意に介さない。気のむくままに一側面を選ぶ。全体を捉えて組織的な関係を分析したり、徹底的に探究して原理を発見しようなどとは思わない。なぜならどのような対象も「千の顔」をもっており、人間の能力で「全体的に、かつ底の底まで」知りつくせるほど単純ではないからである。彼が論理的で体系的な認識を放棄し、個別的な洞察である判断力を磨く道を探るのはそのためである。このような感情、このような思索の姿勢は20年近く『エッセー』を書きつづけたのちも変わっていない。晩年のモンテーニュはすぐあとにつきのように補筆し、内容を強めている。

というのは、どんなものであろうと、私には全体が見えないからである。もっとも、我々に全体を見せてやると約束している人たちでさえ、見えてはいないのである。私はそれぞれのもっている何百という手足や顔のなかからひとつを取りあげ、ある時はただなめてみたり、ある時は軽く触れてみたり、時には骨にとどくまでつねってみる。私はできるかぎり深く切り込むが、できるかぎり広くとは思わない。さらに好きなのは、普通と変わった光をあてながら捉えることである。もしわが身のほどを知らないならば、思い切ってなにかの問題を徹底的に論じるであろう。だが私はこちらに一語、あちらに一語と、本物からもぎ取ってきた見本をばらばらに、計画も約束もなしに撒き散らしてゆく。うまくやらなければならない義務も固執しつづけなければならない義務もない。気の向くままに変わっても良いし、懐疑や不確実や私の最大の特徴である無知に降参しても良い。(I-50, p. 302)

対象の多様な様相を強く感じる感覚、その印象に忠実な思考法および『エッセー』の書き方、これらの基本的な性格は初期も晩年も変わってはいない。「判断の試し」という軽妙さや、関連や組み立てに拘泥しない融通無碍ぶりがますます進んでいるのが感じられるばかりである。問題の選択にも選んだ対象の全体的な関係にもまったく拘束されない、きわめて自由な「判断の試し」は、「気の向くままに変わろう」と、どこで「懐疑や不確実」や「無知に降参」しようとかまわぬ円転滑脱な思索の動きを引き起こし、「ばらばらに、計画も約束もなしに撒き散らしてゆく」ような記述を招く性格をもっているのである。

初期の非個人的で単純な著作の構造がすでにこのような傾向を示していた。読書から採集した実例を綴りあわせる仕方にモンテーニュの好む論理があらわれており、そこでは「しかし」の類の語句が特徴的であった。と言っても彼の使う《Mais》とか《Toutefois》とか《Si est-ce que》は否定し去るのではなく、同時に別の事実や解釈も真実でありうることを示そうしている。つまり、どうしても彼は常識的な、画一的な定義をはみだす多様な現実の側面へ注意が引かれるのであり、自分の意見が硬直した断定になるのを気づかうのである。「しかし」の論理は現実の多様性と流動性に敏感な、画一的な判断を嫌う思考に由来している。

中期の随想を分析しても、以前とちがった性格の論理で展開しているようには見えなかった。思索は総合的な構想を欠き、個別的な認識と判断の性格が強い。関係づける論理が乏しいため、問題の一面々々を考察した論はただ並んでいるにすぎないところがある。随想の部分々々はしばしば、併記するだけの《Aussi》、《D'avantage》、《Et puis》、《Au reste》、《Au demeurant》、《Outre》などで結ばれ、相互の論理的な関係は内容が自然に暗示するのにかかせている。関係の論理による総合などに頓着せず、モンテーニュは「判断の試し」を繰り返している。

「また」の類の語があらわしている並列の論理は、その一方の構成要素として、初期からつづく「しかし」の論理をもっている。彼は後者によって繊細に事実の相貌を識別してゆくが、その認識はやはりただ併記されるだけである。それは否定によって新しい関係づけを導く「しかし」ではなく、視点を変化させながら現実の多様な側面へ観察を広げてゆくのみである。その結果、思索の発展につれて事実は氾濫するばかりで、論理関係はますますその中に埋没してゆく。相互の関係を内容自体に暗示させるのが困難になり、彼はつぎのように言わざるをえなくなる。

私は偶然以外には各部分の配列を決める参謀をもたない。夢想のあらわれるがままに積み重ねてゆく。(II-10, pp. 100-101)

結局、「また」の論理にしる、視点を変える「しかし」の論理にしる、「夢想」を「積み重ねる」以外のことはできない。「夢想」を関係づけ、整理し、統一的な秩序をつくることはできない。前節で考察したように、後期に到ってもモンテーニュの思索はなんら新しい論理を取り入れようとはしていない。「できるかぎり深く」捉えるための円熟は見ら

れるが、「できるかぎり広く」関係づけようとする思索の動きは存在しない。その基本的な性格は初期以来の論理とまったく変わらない。彼のような思索の実践によって思想は豊かに広がり、判断力の練磨とともに深みを増してゆくであろう。しかしながら「また」や「しかし」の論理によっては、いくら思索が発展しようと、諸事象を関連づけ、体系的な認識を構築することはできない。初期とちがった論理が中期や後期の思索にないならば、「ずれ」や分岐や遡行という、事実を「積み重ねる」随想法を継承するしかない。思索が活発になるにつれ、その展開はこれらの初期とおなじ発展形式を繰り返し、錯綜させてゆく以外にないのである。

モンテーニュは現代的な意味のたんなる随筆家ではなく、近世哲学史でもとりあげられる思想家である。『エッセー』は哲学的な諸問題を論じた思想書でもある。それならば、彼は自己の論理の欠点を反省すべきではなかったであろうか。このような疑問を呈する人もいるかも知れない。しかしながらその批判はすでにひとつの固定観念をふくんでいる。彼の哲学観からすれば、彼の論理になんら不都合はない。

ただすこしでも賢くなろうとしているだけであって、学者になりたいとは思わない私にとっては、あのようなアリストテレス風の、論理学的な構成は具合がわるい。すぐに要点に進んでほしい。死とは何か、快樂とは何か、私はこんなことは十分にわかっている。そんな分析に暇どってほしくない。最初から正当で確固とした道理を説き、それらの攻撃に堪えるすべを教えていただきたい。そのためには文法家風の緻密さや言葉と論の巧妙な組み立てなどは役に立たない。(II-10, p. 111)

モンテーニュは子供にたいしても哲学がりっぱな教育科目であると推奨し、本当の哲学の単純な理論は弁証法とか三段論法とかの仮面を必要としないとのべている。おなじように引用部でも、「アリストテレス風の、論理学的な構成(ordonnances logiciennes et aristoteliques)」や「言葉と論の巧妙な組み立て(l'ingenieuse contexture de paroles et d'argumentations)」などを否定している。実際『エッセー』の随想は判断力を発揮する部分々に重点があり、章という単位はほとんど独立的な意味をもたない総体である。真面目は各部分の「判断の試し」にある。どのように判断の結果を配分し、組み立てるかなどは、彼の哲学観からすれば些事にすぎなかったにちがいない。

以上のように、多様性と流動性の基本的感情、「判断の試し」という思考法と論理、お

よび哲学観、これらいずれの面から見ても、『エッセー』におけるモンテーニュの思索は活発な活動につれ初期の「ずれ」や分岐や遡行などの発展形式を反復し、複合させ、紆余曲折を帯びる傾向をもっている。これらの個性の一体になった成長が『エッセー』の随想様式の進化であり、奔放自在な随想をたんに作家の意図的な意匠のように捉えてはならない。モンテーニュはそのような職業的な作家ではない。彼はできるだけ作家・モンテーニュが作品・『エッセー』と人間・モンテーニュのあいだに介在しないように努めた。まさにその意識の表れが自己描写という方法であり、主題であるとも言えよう。作品のなかで人間・モンテーニュを作家・モンテーニュが描くのである。こうして作品——作家——人間の関係はますます緊密になる。したがって、中期から『エッセー』の特色として彼が強く意識した自己描写は、随想様式の進化にまで大きな影響をおよぼす。最後にこの関連を考えてみよう。

自己描写の影響は深く彼の思索の態度にまでおよんだにちがいない。『エッセー』を自己描写の作品と決め、憚ることなく自分の日常を語りはじめるとともに、著作をすすめる彼の思索は、自己自身を対象にしていなくてさえ、上下を脱いだ平生の寛ぎに近づいたであろう。自己描写が自然な自己を解放し、思索の飾らない個性を発露させ、上にのべたような、個性の自然な進化を促したであろう。作品をつくるという緊張がやわらぐにつれ、初期にはまだ抑えられていた、「ずれ」や分岐や遡行などの随想法がひんぱんになるのである。以前の例証に見られた、「また我々は寒さについて話しており、しかもフランス人は色とりどりの服を着る習慣があるのだから」という文は、論点の変位にたいするためらしい跡でもあろう。このような弁解を差しはさんだのは、まだ初期のモンテーニュには非論理性への気兼ねがあったからである。おなじような論理的な抑制の跡はつぎの一例にもうかがわれる。「嘘つきについて」の冒頭の自己描写は1580年版ではつぎのように中断されている。

記憶について口を出すのが私ほど不似合いな者はいないだろう。というのは、私のなかにはその形跡すらほとんど認められないからである。世の中に記憶力がこれほどひどく欠如している人がいようとは思われない。他のすべての部分は普通で人並みなのであるが、この点については特異で、きわめて珍しく、評判と名声を得るに値するのではないかと思っている。これに関していくつか面白い話もできるのであるが、目下のところは主題を追ってゆくほうが良いであろう。記憶力に自信のない者が嘘つき

になろうとしてはいけないと言われているのは、理由のないことではない。(I-9, pp. 32-33)

主題を導入する最後の文からもわかるように、「嘘つきについて」の話は記憶力と関係がある。自分の記憶力の欠如に言及しながら章を書き起こすのも、一法であろう。ところが初期のモンテーニュはすぐに、それが「いくつか面白い話」を語る自己描写へ発展するのを抑えている。章の主題を考えた、論理的な抑制が働いたのである(「目下のところは主題を追ってゆくほうが良いであろう」)。事実そのような配慮を止めた後期の彼は「これに関していくつか面白い話を」云々の文を消し去り、自分の記憶力についての話を挿入している。つまり、この例の示すように、自己自身についてためらいなく語れるというのは、随想が章の主題というような論理的な抑制から自由になる意味をもっている。その影響は自己を語らないときの随想にも及び、思考の躍動性を解放したにちがいない。中期の作品から急に連想的展開が多くなるのは、まさにその効果であろう。なぜなら連想のような心理的な展開は自然な自己の発露なしにはありえないからである。

中期において自己描写が『エッセー』の主眼に決められるとともに、その考え方も進化してゆく。そして、随想のあり方に直接的な影響をあたえる自己描写観に到達する。作品のなかで大胆に自己について語る自由さが思索の自然な個性を引き出すにつれ、モンテーニュはけっきょく自分の随想そのものが自分という人間を知らせているのに気づく。彼は直接自己を描くのではない自己描写の分野を発見する。

ここにあるのは私の空想であって、これによって私は事物についてではなく、私について知識をあたえようと努めているのである。(II-10, p. 99)

それならば『エッセー』は、随想の様式も自己を写すべきであろう。その展開は彼の思考の自然に一致していなければならない。個人的な連想が随想を導くのも当然であり、作者の内面の躍動を読者が理解しがたいときがあるのも仕方がない。モンテーニュの自然な思考の個人性が作品にあらわれることが当然の権利となり、義務となるのである。私達が前章の第3節や第4節で分析したように、すでに中期の一部の章では随想や自己描写はこのような方向へ向かい始めていた。この新しい随想様式が十分に開花したのが、後期である。『エッセー』第3巻はすべて、随想の動きそのものが自己描写であるという方法を実行

したものである。彼自身の説明もいっそう真髓に触れている。

私は自分の対象 [=自己自身] を確定できない。それは生まれつきの酔っぱらいで、みだれた足どりでよろよろ歩いている。私は興の向いた瞬間に、その一貌のあるがままを捉える。私は実体を描かない。推移を描く。それも一年ごととか、俗に言う7年ごととかではなく、一日ごと、一分ごとの推移を描く。(III-2, p. 189)

ちなみに、自分が絶えず変化しているという意識と変化を記録することにたいする興味とは、すでに中期から密接な関連をもっている。それはつぎの二箇所を読み合わせるだけで十分に理解できるであろう。

私は私の信じているとおりを示しているのであって、人がこう信じるべきだと主張しているのではありません。ここで私が目指しているのは、ただ自分自身を明らかにすることだけです。しかもその私自身は、新しい学修によって変えられたならば、明日にも別のものになるかも知れません。(I-26, p. 190)

この多くのさまざまな断片の寄せ集めは、つぎのような風にできあがってゆく。私が筆をとるのは、あまりにもだらけた無為にさいなまれるときだけであり、ただ自分の家にいるときだけである。したがって、折々の所用で外出するのが往々にして数か月におよぶときもあるので、この本は何度もの休止や中断ののちに完成した。しかも私は最初の思想を二番目の思想によって訂正したりはしない。自分の考え方の推移を表現し、それぞれの部分を生まれたままの姿で人々に見てもらいたい。もっと早くから始めていたならば、自分の移り変わった様子をながめて楽しめたのに、とさえ思っている。(II-37, p. 599)

したがって、このような進化の方向を考えるならば、先ほどの引用文中の「一分ごとの」という語句はたんなる言葉の綾とは思われない。随想の記述のあり方の、いっそうすすんだ段階を示しているにちがいない。作者の自然と作品との一致は極限まで追求され、今や『エッセー』はモンテーニュ自身の多様性と流動性と一体にならなければならない。ただ「

空想(fantasies)」の内容がその個性によってモンテーニュという人間を表しているのみならず、「空想」の展開そのものが彼の思索の自然を写していなければならない。『エッセー』に記された随想は作者の「空想」の「一分ごとの推移」、すなわち意識の流れまでも表現していなければならない。こうして、すでに初期に散見する平行構造や遡行や論点の変位や連想などの随想法の進化は、意識の流れとして捉えた、自己の内的生命の自然を描く自己描写によって完成する。そのような自己の随想の自然を『エッセー』という作品に仕上げる行為が、モンテーニュにとって考えることであり、書くことであり、自己を生きることなのである。

第3章第2節（注）

（1）たとえば、《Il n'est rien qu'on doive tant recommander à la jeunesse [...] ny a qui les corvées poisent moins.》（I I I - 13, p p. 56-57）を参照。

（2）たとえば、《Le plus aspre et difficile mestier du monde [...] quand nous en pourrons finer.》（I I I - 7, p p. 75-76）を参照。

（3）たとえば、《Or le devoir de chasté a une grande estendue [...] un peu l'enfant, le craintif et le serviteur.》（I I I - 5, p p. 287-288）を参照。

（4）I I - A - 66を参照。

（5）ただし私達の研究の際に利用したのは、「ボルドー本」の写真再版ではなく、印刷によって復元したI - A - 1の版である。

（6）どこで行を変え、どのように段落に分けるかは、個人の趣向の側面があるのは否定できない。しかし、ときには読者の理解に少なからざる影響をおよぼす。とくにモンテーニュの随想の展開がけっして読みとりやすすくないのを思うならば、『エッセー』にとっては些細な問題ではない。読者のために周到な注意を払うべきであろう。ところが、現在流布している版においては、段落改行の不適切や誤りがかなり読解を妨げている。その数の多さは随想自体についての研究の遅れを如実に示している。ここで論じるには長すぎるかも知れないが、今まで注意されていないので、いくつかの具体例とともに私達の改善の提案を簡単に記しておこう（ページの表示はフランス語版はI - A - 8により、また参考までにI - B - 6の翻訳の箇所を付記した）。

まず本文で分析した例を利用しよう。「ボルドー本」の姿では（1）と（2）のあいだに（C）の加筆があるが、私達の批判と主張を変更しなければならない理由はなんら生じていない。（5）で改行しないのは論の重要な転換点を隠す誤りであり、（4）は連想の契機の存在している（3）の末尾へつづけるほうが良い。しかし、本文では省略したが、以前の段落区分も考えなおさなければならない。そのためには少なくとも《Revenons à l'empire de la coustume》「再び習慣の力にもどろう」（I - 23, p. 116, p. 209）から検討しなければならない。この文以下（5）までの展開が読みとりにくいのは、私達が本文で指摘した原因のほかに、《De vrai, la pudicité est une belle vertu》「まことに純潔は一つの美德である」（p. 117, p. 210）ではじまる段落が長すぎるからである（私達の引用文は改行なしにこの段落につづいている）。もちろん、しか

るべき理由があるならば、それもひとつの趣向と言えよう。しかし、論旨に曲折のある長い段落を不注意につくるならば、読者の脈絡の把握を妨げる。改行を増やしたほうが一般読者には理解しやすい煩雑な段落が現行の『エッセー』にはまれではない。《De vrai》「まことに」以下はその一例にあたる。

この段落は《Qui voudra se desfaire de ce violent prejudice de la coustume》「あの習慣から来る強力な偏見を抜け出ようと思う者は」（p. 117, p. 211）と《Qu'est-il plus farouche que de voir une nation》「現に次のような国があったとしたらどうであろう」（p. 117, p. 211）のところで行を変えるのが適切であろう。まず前者についてのべるならば、この箇所は直前の論を継承しているのではない。ラテン語の引用文（p. 116, p. 209）までの、習慣の支配力の強さという内容と、以降の、権威の根拠がじつに薄弱であるという内容との両者を包括しながら、新しく論を発展させている。それは前者の最初の文に十分にあらわれている。したがって、ここで行を改め、新しい段落をおこすほうが、読者には論の屈折点を読みとりやすいはずである。

後者で改行すべき理由は直前の《Je sçay bon gré à la fortune》「わたしは偶然に向かって感謝しなければならない」以下の文章にある。この部分は付加的な脱線部なのであり、終わったところで行を変え、後者がふたたび主題にもどっていることをより明瞭にすべきであろう。改行しないならば、脱線の継続なのかどうか、一瞬読者に無用のとまどいをあたえるからである。しかもあとには連想的な飛躍が控えているのであるから、この些細な混乱は増幅される恐れがある。

本文でのべたように、モンテーニュは統一的な秩序にこだわらず、目前の随想の発展の可能性を追いながら脱線をくりかえしたのち、突然もとの中心的な文脈に帰り、新しく出発しなおす。私達の言う遡行という現象であり、しかも先ほどの《Revenons à l'empire de la coustume》「再び習慣の力にもどろう」のような閑話休題の類はしばしば記されていない。したがって、傍流にまどわされず、主流に帰る箇所で行を改めるように注意しなければならない。さもないと、両者の混同を読者に強いるにひとしい。

《Nostre suffisance est détaillée à menues pieces.》「我々の器量はこまかな諸性能に細分されている」（III-9, p. 992, p. 99）ではじまる段落を例にあげよう。最初の4行の内容からどのような関連によって《Qui se vante, en un temps malade comme cettuy-cy》「当今のような病める時代に」（p. 993, p. 99）以下の論へ発展したのであるだろうか。じつに難解である。しかしそれはモンテーニュの随想のせい

ではなく、あやまった段落改行のせいである。それでは、《Qui se vante》「当のような」以下の数行を読んだのち、《La vertu assignée aus affaires du monde》「政治が必要とする徳は」（p. 991, p. 96）ではじまる段落の冒頭部と比べていただきたい。この簡単な比較からだけでも、両者の類似性は分かるはずである。すなわちこの箇所の随想の流れはひとつではない。《La vertu assignée aus affaires du monde》「政治が必要とする徳は」からの展開は、《Je sens que, si j'avais à me dresser tout à fait à telles occupations》「わたしは、そういう仕事に完全に自分を慣らさなければならぬとすれば」（p. 992, p. 97）以下の自己描写を切っ掛けにして、《Nous ne savons pas distinguer les facultez des hommes》「我々は人間の諸性能を識別する術を知らない」（p. 992, p. 98）から《Nostre suffisance est détaillée à menues pieces》「我々の器量はこまかな諸性能に細分されている」以下の4行に到る傍流が分岐したのである。そして《Qui se vante》「当のような」以下でふたたび主流にもどり、最初の《La vertu assignée aus affaires du monde》「政治が必要とする徳は」の主題を継承しながら発展させているわけである。したがって、相互の関連性にはなんら難解なところはない。個性的な表現方法に由来する随想の構造がそれを読みとりがたくし、その基本的な構造を十分に把握していない校訂者の段落区分の誤りがさらに紛糾させているのである。

『エッセー』に注意ぶかく適切な段落改行を付すためには、モンテーニュの随想の飛躍や紆余曲折のメカニズムを知っているだけでは不十分である。彼の思考法についても理解していなければならない。《J'aymois à me parer, quand j'estoy cadet》「わたしは、若い頃」（III-6, p. 902, p. 230）で行を改め、そのまま《Nous avons des comptes merveilleux de la frugalité de nos Roys》「我々是我々の諸王がその身のまわりや賜物に関して」（p. 902, p. 230）へ続かせ、《Et a lon raison d'accuser Theophrastus》「またテオフラストスが」（p. 902, p. 230）であらたに段落を起こしている箇所を例にあげてみよう。第2者だけを見るならば、第1者の内容と似たところがあり、後者は前者の導入部のように思われるかも知れない。しかし、それは前後の随想の流れを無視している。第2者以下の主題は君主による公金の浪費であり、《L'estrangeté de ces inventions me met en teste cett'autre fantasie》「こういう変わった思いつきは、またこんなふうわたしに考えさせる」（p. 902, p. 229）のところで設定された問題を発展させたものである。これらの点をはっきりと把握するた

めには、この例では、モンテーニュの思考法についての理解が必要になってくる。

《L'estrangement de ces inventions》「こういう変わった思いつきは」から考えなおしてゆくなれば、この箇所は彼が《Marc Antoine fut le premier qui se fit mener à Rome》「マルクス・アントニウスこそは」(p. 901, p. 229)以下から汲みとったこと、すなわち実例と実例についての解釈という、もっとも初期から見られる基本的な思考法にもとづく発展である。そして、こうして始まった論が《Comme à un gentil homme》「同様に、貴族が」(p. 902, p. 230)という比較表現とともに主流からすこしそれてゆく。最初の論の重要な要素である「君主」という論点が残る「貴族」に変わるからである。

あとにつづく《Le conseil qu'Isocrate donne à son Roy》「イソクラテスはその王に与えた次の勧告は」(p. 902, p. 230)の晩年の加筆部はしばらく別にするならば、付属的な細部である《Comme à un gentil homme》「同様に、貴族が」以下がさらに《J'aymois à me parer》「わたしは、若い頃」の自己描写へ誘導する。後者は前者の貴族のような態度と対比させながら、自己自身を描いたものである。この展開は、他者についての記述が同時に自分について反省させ、自己にたいする凝視が同時に他者をながめる視点を定めさせるという、自他のあいだを往来する観察と認識のリズムから生まれたにちがいない。これもひんぱんに見られる基本的な特徴である。したがって《J'aymois à me parer》「わたしは、若い頃」の自己描写は自他の対比という思考形式によって《Comme à un gentil homme》「同様に、貴族が」の部分から生まれたのであり、前者はけっして《Nous avons des comptes merveilleux》「我々は我々の諸王が」以下の論の導入部ではない。傍流は自己描写によって終わり、このあとでふたたび君主による公金の浪費という主流の主題を発展させているのである。

《Le conseil qu'Isocrate donne à son Roy》「イソクラテスはその王に与えた次の勧告は」の晩年の加筆が以上の流れを分断している。読書実例を晩年に非常に多く追加したモンテーニュは、ここでも、《L'estrangement de ces inventions》「こういう変わった思いつき」ではじまる論を補強するために、イソクラテスの逸話を挿入したのであろう。そのため、服装のおしゃれが共通の要素である脈絡が切断され、自己描写が孤立している。しかし、誤解のないように言っておかなければならないが、このような例は非常にまれである。すくなくとも私達の研究の傍らで気づいた範囲では、加筆は随想の紆余曲折を増幅してはいるが、以前の文脈を破壊するようなときはほとんどない。随想の脈絡を把握しが

たい責任を加筆に転嫁してはならない。その原因のほとんどは随想の展開方法についての研究不足にある。

この箇所の改行段落を改善する私案をのべよう。まず《L'estrangement de ces inventions》「こういう変わった思いつき」で行を改める。以前との関連だけを見るかぎりでは、その必要はないが、あとの乱れを考慮に入れたからである。そして後続のみつつの部分は思いきってひとつづきにし、しかも前につないでひとつの段落にするのが良いであろう。つまり改行は主流の主題を論じなおす《Nous avons des comptes merveilleux》「我々は我々の諸王が」までおこなわない。もちろん《Et a lon raison d'accuser Theophrastus》「またテオフラストスが」は前者の継承であり、おなじ段落にふくめなければならない。私案ではみつつの部分をひとつづきにするとところに難があるが、しかしこの展開はどのように段落の切り方を変えようと、より明確にはならない。もっとも大切なのは論の転回点と改行との一致である。現行のように《Nous avons des comptes merveilleux》「我々は我々の諸王が」から新しい段落になっていないのは、些細な欠点ではない。しかもその部分が6行たらずで改行されている。そのため前の2行の自己描写がたんなる導入部（実際は私達の分析したように付加的な脱線部）以上の重みをもっているように受けとられる恐れがある。論点の比重の推移が理解しがたいのは、現行の段落改行にも責任があると見えよう。

半ページほどさかのぼって、別の問題を指摘しよう。《Les Roys de nostre premiere race marchaient en pais sur un charriot trainé par quatre boeufs.》「我々の最初の王朝の諸王は、常時四頭の牛がひく車によって国内を巡視したものである」（p. 901, p. 229）の位置に注意していただきたい。この話を前後の実例と比べるならば、前は戦争用に工夫した車の例であり、後にあるのは皇帝たちがさまざまな動物に引かせた車である。したがって、内容に一致した改行は《Marc Antoine》「マルクス・アントニウス」（p. 901, p. 229）ではなく、《Les Roys de nostre premiere race》「我々の最初の王朝の諸王」か、あるいはひとつ前の文《Mais laissons ces coches guerriers》「だがもうこういう戦争の話はやめにしよう」になければならない。先入観なしにテキストに向かったならば、ほとんどすべての人がこのように段落を切るであろう。ところが版の校訂者たちはいわゆる（A）（B）（C）のテキストの変わり目と改行とをできるかぎり一致させようとしている。その意識は非常に強い。そのためにこの箇所では《Mais laissons ces coches guerriers》「だがもうこういう戦争の話はやめにしよう」と

いう作者自身の断り書きを無視してまで、《Marc Antoine》「マルクス・アントニウス」で行を変えているのである。私達が今までに指摘した改行段落の誤りも、おなじように、テキストの区別をしようとする意識が誘因になっているであろう。他の箇所にも、そのように想像できる時がしばしばある。また、『エッセー』には2、3行の非常に短い段落がかなりあるが、そのほとんどは随想の流れを考えた工夫からではない。改行と3種のテキストの区別を一致させようとして、無意味に短い段落をつくっている。そのため、随想の脈絡におうじた改行の効果が弱くなっている。

以上の私達の批判は直接的にはI-A-8の版に向けられている。しかしながら参考文献表に記した他の『エッセー』も大同小異である。比較の詳細は省略するが、いくつかの相違はあつても、全体が私達の改善に近い改行段落は見られない。

上にあげた具体例について、さらにまた別の観点から読みなおしていただきたい。それらの随想の流れを読みとるために、(A) (B) (C)の記号が従来主張されているように、ほんとうに役にたったであろうか。ほとんど頼りにならなかったはずである。これらの箇所の脈絡の把握が困難な原因は、第一は私達が本文で分析したような、随想の展開におけるモンテーニュ的な個性であり、第二はあやまった改行である。加筆訂正は従来から信じられているほど大きな原因ではない。『エッセー』の他の箇所でも多くの場合、加筆は最初のテキストの紆余曲折の個性を強めてはいるが、新しい混乱を引き起こしているわけではない。したがって、記号どおりに同時代のテキストを追って読みなおしたとしても、文脈の把握が容易になるとはかぎらない。I-A-3の序文が言っているように、テキストへの(A) (B) (C)の記入は読書を助けるよりも煩雑にする欠点のほうがはるかに大きい。しかしながら、これを廃止している校訂者たちも、従来とほとんど変わらない段落改行を踏襲している。ボルドー本の状態をひとつのテキストと見なすのならば、それを根本から考えなおさなければならない。現行の『エッセー』には随想の構造やモンテーニュの思考法の研究にもとづいて改善しなければならない箇所が数多くあるからである。

なお、ついでに付記するならば、本文における私達の引用文は慣例に従って最初の行の頭を下げたのち、長さや検討すべき問題にたいする私達の判断にしたがって改行を付している。

(7) I I-A-67.

(8) I b i d. , p p. 101-102.

3. 自己描写

『エッセー』第3巻に到るや、すべての章において自己描写が作品の著しい特徴となる。「読者に」という序文の明言しているように、中期の終わり頃それが制作原理として立ち立てられたからである。と言っても、両執筆期における考え方がまったく同じであるとはかぎらない。しかし、変化や発展を考察するに先だって、作品の主題に決められたのちの第3巻において自己描写が実際にどのようにおこなわれているのか、まずそれを観察しておこう。今日まで多くの批評家や研究者たちが『エッセー』のこの異色な特色について説明してきた。しかしながら、テキストの具体的な分析によって実体や意義を明らかにする試みはなされなかった。作品のなかで自己を描くと言っても、その描き方にもその行為から生まれる効用にも、さまざまな種類があるように思われる。その現実の複雑さと豊かさは、『エッセー』のなかに述べられているような、作者自身の理解をさえ越えているかも知れない。自己描写に言及している言葉を解釈するだけでは、まったく不十分なのである。作品のなかで自己を語るとはどのような行為であり、どのような効用を付随するのであろうか。まず最初に、これらの種々相を具体的に分析してみよう。そして、その後これらの分析とつぎ合わせながら、作者自身の自己描写論を考察し、それとともに初期以来の進化をも展望してみよう。

自分自身のことを反省し、みずから起こった事柄を書き記すのは、ある特殊な現象を記録するだけの行為ではない。ただそれひとつの認識のみならず、自分はどのような人間であるかという自己認識をももたらさう。それは強いて説明するまでもないであろう。また、自己を語る話は内省的な自己観察ばかりではない。自分の身の上に降りかかった事件を語るのも、一種の自己描写であろう。むしろ後者のほうが普通によくある類かも知れない。しかし、本当に自己を描いた記述になるためには、ただ事件について報告するのみならず、内省的な視線によって現象面を越えた自己認識がなされなければならないであろう。つぎに挙げる文章は、ある男が部下とともに避難の場を求めに来たふりをしながら、モンテニュー城を奪い取ろうとした事件について語る途中に挿入されている。

(1) しかしながら、最初にあいそよく迎えようとしながら、最後まで押し通さなかったならば得るところがないと思い、また、すべてをぶちこわさずに厄介払いはできなかったので、私がいつもやるように、もっとも自然でもっとも単純な方策に身を

ゆだねることにした。そして、彼らを入れるように命じた。(2) 実際、本当のところ、生まれつき私は警戒心や猜疑心はあまり強くない。もっともおだやかな解釈と容赦のほうへ自然に傾いてゆく。私は平凡な理法に従いながら人間を捉える。明白な証拠によって強いられないならば、極悪非道な性癖を信じる気になれない。怪物や奇跡についても同様である。(3) その上私は好んで運命に頼り、ひたすらその腕にすがってなりゆきに身をまかせるような人間である。その結果は、今日までのところ、不平を言うより満足した機会のほうが多かった。そして、自分より運命のほうがいっそう賢明であると思った。私の生涯の行動のなかには、困難に打ち勝って、あるいはさらに、深謀遠慮によって遂行されたと、人から見られるようなものいくつかある。だがそれらの行動でさえ、3分の1は私のものであるとしても、確かに3分の2はたつぷりと運命のおかげである。(4) これらの男たちは中庭で馬に乗ったままであった。首領は私といっしょに広間にいたが、部下の消息がわかり次第すぐに立ち去らなければならぬと釈明し、彼の馬を厩舎に入れさせるのを望まなかった。(III-12, pp. 308-309)

(1) のような書き方をした切っ掛けから(2)では自分の性質について、(3)では自分の行動様式について自己認識をおこなったのち、(4)でふたたび事件の記述にもどっている。(2)と(3)はそのような認識行為ではなく、自己描写をより内面的にした記述法の変化にすぎないとも言えるかも知れない。しかしながら、直接この内容からそのときはじめて導き出されたのかどうかは別にして、自分という人間と生き方について認識や再認識がおこなわれたのに変わりはない。

上の自己描写はこのように二重、あるいは(2)と(3)を区別すれば三重の構造をもっている。しかし、そればかりではない。さらに広い範囲にわたって分析する必要がある。襲撃事件のエピソードが語られるようになったのは、ソクラテスとその醜い顔という話題にかこつけて、自分は人に信用されやすい顔に恵まれているという自己描写へ移ったからである。つまり、前者は後者の自己認識を立証するための実例でもある。

引用文から後への展開も見てみよう。自分の容貌によって救われた体験をさらにひとつ書き加えたのち、モンテーニュはつぎのようにまとめている。

もし私の顔が私にかわって答えてくれなかったならば、あるいは、もし人が私の目

や声のなかに私の意図の無邪気さを読みとらなかつたならば、正しかろうとまちがってしようと思ひ浮かんだままを言ったり、ものごとを軽率に判断したり、無分別、無遠慮にふるまってきた私が、こんなに長いあいだ喧嘩も軋轢もなく生きのびてはこれなかつたであろう。(III-12, p. 312)

この文章の前半から察せられるように、モンテーニュ邸奪取事件のエピソードは先だつ自己描写と関連するばかりではなく、ソクラテスとその醜い顔という主題にふくまれた「肉体と精神との相関関係」(III-12, p. 302)の問題について、判断の一材料となる体験例を提示するためでもある。それは自己の世界を越え、一般的な考察を支える事実例としての役割をも果たしている。

したがって、自分の身にふりかかった事件を語った自己描写は、その外部の枠との関係から見れば、「私は形から言っても、人にあたえる感じから言っても、めぐまれた顔をもっている」(III-12, p. 306)という自己認識の立証例であるのみならず、さらには肉体と精神の相関関係を考察するための事実例でもある。と同時に、その内部を見れば、自分の性質と行動様式について別の自己認識をもたらしている。自己自身を知るという学問についてモンテーニュが「私はほかには自慢の種はないが、このことには無限の深さと複雑さを見いだしている」(III-13, p. 19)と言っているように、私達が以上に見たのは、自己描写の構造の「深さと複雑さ」の一例でもあろう。このように自己描写においても、精神の運動は豊饒ではあり、変化に富んでいる。そこには、近代合理主義の認識方法が確立される以前の混乱があると言えるかも知れない。しかし、私達は、むしろ、自己認識を中核にしながら世界の広大さと複雑さのなかを動きつづける強靱な運動性を評価すべきであろう。以下において私達は個別的に自己描写についての分析をすすめてゆくが、多くの場合それらは随想の奔放な動きのなかの一局面であるのを忘れてはならない。

自己を観察し、描く行為がふくんでいるのは、ただ自己を認識する効用のみではない。個人的な事柄をすぐに人間一般に押し広げたがる愚かさの危険性があるとは言え、人間認識や世界認識に発展してゆく可能性をもっている。その具体的な分析のひとつとして、「私(Je)」と「私達(Nous)」との人称による表現の関連に注目してみるのも良いであろう。第3巻の随想においてモンテーニュは両者を巧みに交代させながら、表現においても認識においても自己の世界を越えている。一例を挙げてみよう。

(1) 私は腹をたてそんな機会を避け、うまく行っていない事柄を知るのを逃げて
いる。しかしながら、そんなに都合よくは行かない。わが家で始終なにか不愉快な出
来事に出会わずにはすまない。くだらない、恥ずべき痛みではあるが、しかし痛みで
あるのに変わりはない。(2) もっとも細い捕縄がもっとも深く傷つける。小さな文
字が目をいっそう害し、いっそう疲れさせるように、小さな事件はいっそう我々を刺
す。これらの家庭のとげが密生し、細くなるにつれ、いっそう鋭く我々を傷つける。
しかも、前兆なしに、やすやすと不意を突いて我々に襲いかかる。(III-9, p.
126)

(1) における「私」についての記述は、(2) において「我々」に関する事実の次元
へ移される。そして、この過程を経て、つづく(3) のような一般的な認識に高められる。
しかもそれはもう一度(4) の自己描写によって立証され、深い真実味が付与されてい
る点をも見のがしてはならない。

(3) 我々の生活は繊細で、傷つきやすいものである。(4) いったん不機嫌のほ
うへ顔をむけるやいなや、どんなに愚かな原因からであろうと、私はそちらの側へ気
分をつのらせてゆく。不機嫌はつきつきとみずからの養分を引きよせ、積み重ねなが
ら、自分自身の動揺で育ち、激化してゆく。

あまだれの落下が岩をうがう。

これらの絶えまないあまだれが突き刺さり、私を消耗させてゆく。(III-9, p.
127)

このような「私」と「我々」の巧みな交代は、モンテーニュが自己認識と自己描写を、
自己の世界を越える認識様式とし、表現様式とするに到った具体的なひとつの現れであろ
う。

自己自身を語り、描くのは、今までとはちがった意味においても、ただ自己を知り、自
己を知らせるための行為ではない。経験を反省するならば、人生を生きるための教訓や知
恵を引き出すことができる。当然『エッセー』においても自己描写はこのような機能をもつ

ている。経験談のところどころで警句や箴言めいた一般化がおこなわれる形式は、実例をあげるまでもなく、誰にでも想像がつくにちがいない。

しかし、自己描写が人生を生きる教訓や知恵を得る切っ掛けになるという機能は、必ずしも明確な形式をもっているわけではない。みずからを観察し、描きながらしっかりと自己自身を把握することが人生を生きる知恵になりうるのであり、読者にたいしても、深く、力強く、率直な自己認識の魅力がおなじような影響をおよぼしうるのである。自己描写はしばしばこのような微妙さをもっている。たとえば、

私の父は自分の生まれた場所に建築をするのが好きであった。そして私は一家の仕事管理するすべての面において、彼の実例と規則にならうのが好きである。しかも、できるかぎり私の後継者たちにも守らせるつもりでいる。父のためにできるもっと良いことがあるならば、私はそれをするであろう。彼の意志が今もなお私を介して働き、遂行されるのを、私は誇らしく思っている。どうか神さま、かくも善良なる父に報いる暮らし方が、ひとつたりとも私の手から抜け落ちませんように！私が古い城壁の一部を完成し、つくりの悪い建物の一部を修理するのに手を出したのも、確かに、私の満足のためであるより、父の意図を思ったからであった。と言うのは、私の個人的な関心からならば、非常に魅力があると人々の言う建築の喜びも、狩猟も、庭いじりも、その他の隠居生活の楽しみも、あまり私の気晴らしにはならないからである。これらにたいして私の食指はうごかない。その他の思想についても、自分にわずらわしく感じられるならば、すべて同様である。私は博学な、勇壮な思想をもちたいとは思わない。むしろ自然な、人生に快い思想をもちたいと思っている。(III-9, pp. 128-129)

父との関係から視線が離れ、自己自身へ集中するなかで生まれた最後の文章は、モンテニユにたいしても読者にたいしても、自己認識としてのみならず人生の知恵として働きかけるはずである。自己描写の機能にはこのような微妙さがある。

自分自身について語る話がところどころで勧告や忠告に変わるのは、また別の理由がある。個人の経験は特殊なものではなく、普遍性があり、他者にとっても有益であると信じているからである。

私はかなり長く生きたので、こんなに遠くまで私を導いてきた習慣について利害を評価することができる。味わってみたい人のために、毒見役として試しておいた。(I I I - 13, p p. 27-28)

もちろんモンテーニュは習慣についてのみこのように考えているわけではない。この文脈における「習慣(l'usage)」の中心は個人の暮らし方と生き方であり、けっきょく人生を生きてきた体験すべてが含まれてもおかしくはない。また、『エッセー』における経験の提示は、実際にはたんなる味見よりもっと積極的である。他者や人間一般にたいしてもっと緊密な、もっと広い関係をもっている。

(1) さらにまた経験は私につきのようなことを教えてくれた。我々は焦ると損をする。病気にも寿命があり、限界がある。それに通路をあたえてやらなければならない。私の見るところ、なるがままに任せている私のなかに病気がとどまる期間は、人よりもみじかい。私はもっとも頑固でもっともしつこいと一般に思われている病気のいくつかを、助けも出さず、医術にも頼らず、それどころか医術の規則に逆らってまで、それら自身の衰微を待ちながら乗り越えた。(2) すこし自然のなすがままに任せておこうではないか。自然は我々よりも自分の仕事をよく理解している。(3) 「しかし、誰それはそのために死にましたよ」「その病気がなくとも、あなたは別の病気で死にますよ。三人も医者をはべらせておきながら、死ぬのを免れられなかった人がたくさんいるじゃないですか。実例というのは何にでも使える自由な型紙で、どんな意味にでも解釈できます。もし快い医術ならば、受け入れなさい。それはそれなりの現実的な利益があります。」(4) 私は風邪や痛風や下痢や動悸や偏頭痛やその他の病気が私のなかで衰え、自然に死ぬがままにほっておいた。すると、身中に養うのに半ば慣れた頃には、それらをなくしていた。(5) 病気を払いのけるには、挑戦するより懇懇に迎えるほうが良い。我々の人間たる条件を静かに堪えなければならない。医学がどうであろうと、我々は年をとり、衰弱し、病気になるようにできている。(6) メキシコ人たちは母親の体内からでてきた子供につきのように挨拶し、自分の子供にあたる最初の教訓とした。「子供よ、おまえは堪え忍ぶためにこの世に生まれ来た。我慢せよ、辛抱せよ、そして黙せよ。」(I I I - 13, p p. 43-44)

どのようにして病気を克服したかという体験談は、すくなくとも同病者には、もっともよく他人の経験の価値を教えるであろう。しかし『エッセー』においては、このもっとも実際的な価値をもつ自己描写でさえ、ただ現象的な範囲にとどまるものではない。(1)と(4)のような経験についての反省は、他者にたいする闘病のための忠告のみならず、さらに(5)や(6)の次元へすすんでゆく。(5)における人称の変化は巧みである。(4)の「私(Je)」の話は、(5)の最初で《On》によって微妙に個人から離れ、つづいて《Il faut》の非人称によって一般化されたのち、最後の文において「我々(Nous)」人間全体の宿命のなかに位置づけられる。人間認識のなかで病気一般にたいする態度が考えられた(5)の段階を経て、(6)はさらにそれを越えた次元へすすむ。たんに病気のみならず、人生にある不幸すべてにたいする身の処し方の問題に変わる。引用が長くなるのを憚らなければ、(6)を受けた展開部が上記全体とおなじくらいつづいたのち、ふたたび(1)や(4)のような病気に関する自己描写に帰るところまで示すべきであろう。病気に対処する態度が当人の自然観や人間観などの認識や、これらにもとづく覚悟なしには確立しえないのを知っているモラリストの自己描写は、以上のような広がりや深みのある構造のなかで展開するのである。

どのような形態をとろうと自己を語ることは、ほとんど常に、他者に向かったの自己主張と切り離しがたく結びついている。今までの例のようにそれがあまり強くない自己描写のほうがむしろ少ないであろう。そこに灰汁の強さや手前味噌の臭気を感じる程度は、読者によって大変な個人差があるであろうが、もともと自分自身について語る行為は、たとえ終始自己を否定しようとして、多かれ少なかれ他者にむかって自己の存在を主張し、みずからの正当性を訴える性質をふくんでいると言えよう。

(1) 私はこのような一般の態度とは反対であって、運よく高貴な身分にあり、民衆の尊敬を受けている人については、その才能をいっそう疑ってかかる。(2) 我々はよく注意しなければならない。自分の都合の良いときにしゃべり、自分の好きな話題を選び、主人としての威光をふりかざして話を中断したり、変更したり、敬意と崇拜の念でふるえている聴衆の前で、頭のしぐさや微笑や沈黙によって他者の反論から身を守ったりできるのは、実に有利なことなのである。(III-8, p. 105)

真理の体現者として作者があらわれ、他者にむかって教えるもっとも単純な形式を抽出

してみた。経験を反省し、自己の行動様式を把握するなかで体得した真理が明らかになるとともに、自己描写は他者にたいする忠告に変わるのである。

つぎの例は会話や議論を主題にしてのべている部分である。自己描写はどのような関係のなかで、どのような働きをしているのであろうか。

したがって意見の対立は私を不愉快にもしないし、狼狽させもしない。ただ私を刺激し、鍛えるだけである。我々は矯正を逃げるが、そういう機会にはすすんで身をさらすべきであろう。説教の形ではなく談論の形で生じたときには、とくにそうである。反論されるたびに、人々は正当であるかどうかには目を向けずに、正しかろうとまちがってしようと、ただひたすら、どうして言い逃れようかと考える。手を差し出すかわりに、我々は爪を差し出す。・・・[中略]・・・私の意見が反論されたとき、私のなかに呼び覚まされるのは、注意力であって怒りではない。私は反駁したり、忠告したりしてくれる人のほうへ近づいてゆく。真理がお互いの共通の利益でなければならぬであろう。彼は何を答えようと言うのであろうか。憤怒の激情がすでに彼の判断力を動転させている。理性以前に判断が混乱してしまっている。我々が十分に自覚できるように議論の判定にお金を賭け、負けたことの物質的な証拠が残るようにするのも有益かも知れない。私の召使が私にむかって、「旦那さまの無知と頑固が去年は20回で100エキュにつきました」と言えるのも良いであろう。どのような人の手のなかに見出そうとも、私は真理を愛し、歓迎する。遠くからであろうと近づいて来るのが見えたならば、私は機嫌よく真理に降参し、うち破られた私の武器を差し出す。そして確かに私は私を畏敬する人たちよりも、私をやりこめる人たちとの交際を求める。我々に感服し、同調する者を相手にするのは、だらけた、有害な快樂である。アンティステネスは子供たちに諭し、自分を褒める者にけっして好意をもったり、好遇したりしてはならないと言った。私は相手の弱さにうち勝った勝利をうれしく感じるよりも、白熱した論争の最中に相手の道理の力に自分を従わせ、自分自身にうち勝った勝利をはるかに誇らしく思う。(III-8, pp. 84-87)

この例においては自分自身についての記述そのものが他者にたいする教訓や忠告として働く。自己を描くことが倣うべき手本を示すにひとしい。この自己描写が模範の提示として他者に作用するのは否定できないであろう。

自己描写とはたんに自己を描くだけではなく、さまざまな意味あいにおいて他者との関係をふくんでいる。それをもっともよく表しているのは、自己描写が自他の対比のもとにおこなわれる特徴であろう。一般の自他の関係とおなじようにこの形式はいろいろな機能をもっている。それは、ある時には、他者と自己との差異についてのちょっとした確認であり、ある時には、その差異の強調である。あるいは、この対比の欲求が内省を誘い、そこから自己分析が展開する。あるいは、自他の対比が一度で終わらず、くり返しおこなわれながら認識が発展するときもある。しかし、この特徴が純粹に認識的な構造であるように感じられる場合は、むしろ少ないであろう。そこにはしばしば、他者と対峙した自己主張が感じられる。他者についての記述から展開したとき、その自己描写はただ自己を語るばかりではなく、他者を批判する意味をも帯びている。あるいは、自己描写が中心であるときでさえ、途中や最後に、他者にたいして批判的な比較がくわえられる。

なぜこのような構造が見られるのか、その理由の推察はむつかしくはない。ひとつは認識上の理由である。自己を認識する行為はしばしば他者との比較によって遂行されるからである。それはつぎのようにモンテーニュ自身がのべているとおりである。

自分の観察にはらってきた長期間の注意が、かなりうまく他人を判断する訓練にもなっている。私がこれ以上に首尾よく、これ以上に説得力をもって話せる事柄はあまりない。たびたび私は友人たちの性格について、彼ら自身がなすよりも正確に見てとり、いっそうよく見分けるときがある。私の描写の的確さで友人を驚かせ、忠告をあたえたときもあった。子供の頃より自分の生活を他人の生活に映しながら見る習慣があったために、このようなことに熱心な性癖がついてしまった。(III-13, p. 21)

しかし、自他の対比の構造は上のような理由のみによって生じているのではない。モンテーニュの批判精神や社会にたいする態度などにも由来している。つぎのような対峙によって自我を形成した体験も作品のなかにこの構造をひきおこす要因であろう。

世の中には私のような気質の者もいくらかはいるかも知れない。私は模倣より対立によって、随従より回避によって自分を教育するほうがうまくゆく。この種の教育法を念頭におき、大カトーは「賢者が愚者から学びとることは後者が前者から学びとる

ことより多い」と言った。また、パウサニアスの語る古代の琴弾きも同様である。その人は常々弟子たちに強いてむかひのへたな楽師の演奏を聞きにやらせ、その不協和と拍子はずれを憎むように教えた。残酷にたいする嫌悪感は、いかなる寛容の模範が私を引きつける力にも優り、はるかに寛容のほうへ私を追いやる。りっぱな馬術教師が私の姿勢を矯正する指導も、馬上の代訟人やヴェネツィア人を見るのには及ばない。悪い言葉づかいはりっぱな言葉づかい以上に私自身の改良に役だつ。他人の愚かな態度が毎日私に警告し、忠告する。快いものより不愉快なものの方が強く影響し、よく覚醒させる。当世にふさわしいのは、一致ではなく対立によって、類似ではなく相違によってすすめてゆく、逆向きの改善の方法である。良い模範に教えられる機会はほとんどないので、私は日常に教訓の得られる悪い実例を利用している。盗みや裏切りを日ごろ見ることが私の素行と性行を正した。(III-8, pp. 81-82)

自己描写が自他の対比のなかでおこなわれる特徴については、ひとつひとつ実例をあげるまでもないであろう。すでに多くの引用によって観察してきたので、ある程度の想像はつくにちがいない。また、すこし注意ぶかく読みさえするならば、第三巻のひとつの章だけでもいくつもこの例を発見できるであろう。したがって、今までののべた他の思考法と連合しながら展開している一例を挙げるにとどめよう。私達はそこで自己描写の多様な性質を鑑賞し、モンテーニュの言う、「このことにおける無限の深さと変化」を実感できるであろう。

(1) 私の意志でならば、たとえむこうが望んだとしても、知恵とさえも結婚するのは避けたであろう。(2) しかし、我々がどう言おうと、一般の生活の風習と習慣が我々を運んでゆく。(3) 私の行動の大部分は選択によってではなく、慣例によってなされる。(4) とは言っても、私はなかなか結婚する気にはなれなかった。人に引きずられ、外的な理由で決意させられた。(5) というのは、たんに不快な事柄のみならず、醜悪で邪悪であろうと、避けるべき事であろうとどんなものであろうと、なにかの条件や事情で受け入れられるようになる。人間の態度とはこれほどにむなし。(6) それに、たしかに当時は、すでに結婚を経験した現在よりもはるかに心構えの不足した、不承々々の気持ちのまま引っぱってゆかれた。そして、人には放縦な

ように見られているけれども、私は実際には自分の約束し、思っていた以上に厳格に結婚の掟を守ってきた。(7) 縛られるのを許したならば、もはや反抗する時期ではない。慎重に自分の自由を惜しまなければならない。しかし義務に服したのちには、共通の義務の掟のもとに身をおかなければならない。すくなくとも、そのように努めなければならない。(8) 憎悪と軽蔑によって振る舞うつもりでこの契約をかわす人たちは、不正で有害な行為をおこなっている。そして、まるで神聖な御託宣でもあるかのように女性たちの手から手へ渡っているのを見かける、つぎのけっこうな俗諺、

主人にたいするごとく夫に仕え、裏切り者にたいするごとく彼を警戒せよ。

これはすなわち「夫にたいして疑りぶかく、敵意のこもった、いやいやながらの敬意をもって振る舞え」と言うに等しく、挑戦と戦いの叫び声であり、同様に不正でひねくれている。(9) 私は弱い男だから、こんなとげとげしい企てはとても遂行できない。真実のとおりのであるならば、道理の是非を混同し、自分の欲求に合致しない秩序や規律ならばなんでも嘲るような、精神の巧妙さと緻密さの完成には、私はまだ到達していない。迷信を憎むからと言って、私はただちに不信仰のほうへは走らない。(10) 自分の義務をつねに果たしているわけではないとしても、すくなくともつねにその義務を愛し、認めなければならない。(III-5, pp. 266-267)

(1)、(4)、(6)を読めば、結婚が主題の自己描写であるのは明らかである。しかし、その展開はこのように複雑な構造をもっている。まず(2)において「我々」への人称の移行によって一般的な観察のなかで捉えなおされるとともに、(3)の自己認識がおこなわれる。(5)では、最後の文が示しているように、人間認識へ発展する。(6)で再開された自己描写は(7)において、《0n》と非人称の《II》への移行のなかで箴言に変えられる。(8)における他者の批判的な観察は(6)の自己との対比のもとでおこなわれている。と同時にそれは(9)とのような自他の対比を誘い、結婚問題よりも抽象的な次元の自己描写が生まれる。そして(10)の箴言化は単純な比較では(7)とあまりちがわないが、文章の流れのなかではより一般的な意味を帯びるはずである。このようにモンテーニュは自己描写をいろいろな意義をもつ様式に磨きあげた。具体例の分析によって私達が指摘してきたのもいくつかの基本的な形式であって、それらが上記のように連

合しながら自己描写のさまざまな展開が生じているのである。

しかしながら、今まで把握したような側面にしか注意をそそがないのは正当な理解ではない。『エッセー』第3巻の自己描写は、たんに作者が自己を認識し、自己を形成する役にたつのみならず、人生を生きるための教訓や知恵の提示として機能し、あるいは他者や同時代への批判を導き、あるいは自己を越える一般的な人間認識へ通じている。モンテーニュはたんなる自己自身という対象を越える広がりや重みを自己描写にあたえるに到った。しかしながら、このような正面の意義からのみ理解するのは、かえってその根本を見誤るおそれがある。『エッセー』に記される自己描写は必ずしも認識的な関連と意義をふくんでいるとは思われない。モンテーニュが自己自身への言及においてつねにその範囲にとどまろうとする節度をもっているようには見えない。彼の自己描写を愛し、全面的に肯定している読者ならばいざ知らず、つぎのような自己描写の価値に疑問をおぼえる人がいたとしてもふしぎではない。

(1) 仕事と快樂のためには、古代の人たちのしていたように昼食を抜き、ごちそうを食べるのは帰宅と休息のときまで延ばし、一日の仕事を中断しないほうがはるかに具合がよい。かつては私もこのようにしていた。その後の経験では逆に、健康のためには昼食をとるほうが良く、目ざめているあいだに消化がより良くおこなわれるのに気づいた。(2) 私は健康なときも病気のときも、ほとんどのどがかかわかない質だ。病気のときには口は乾燥するが、渇きはおぼえない。そして普段飲むのは、食べているあいだに欲求が生じたときだけであり、しかも食事が相当すすんでからである。普通の体格の人間としては、私はかなりよく飲む。食欲をそそる食事のときや夏には、ちょうど三度しか飲まなかったアウグストゥスの限度を越えるのみならず、四という不吉な数字で止まるのを禁じたデモクリトゥスの掟を犯さないために、欲しければ五杯(約四分の三リットル)も流しこむ。というのは小さなグラスが私の好みで、ほかの人たちは不作法であると避けているが、私にはグラスを乾すのが気もちがよいからである。(3) 私はぶどう酒をたいていは半分、たまに三分の一の水で割って飲む。そして、わが家に居るときには、父の医者が父と彼みずからに命じていた古来の習慣にならい、私のぶどう酒には食卓に出す二、三時間前の、蔵にあるころから水をまぜておく。(4) もっとも通用している、もっとも一般的な生活法がもっとも良いのである。特殊なことは一切避けるべきであろう。私はぶどう酒を水で割るドイツ人も嫌

いなら、これを生のまま飲むフランス人も嫌いである。このような事柄には世間の習慣が法律である。(III-13, pp. 71-72)

(1) から察せられるように健康法と生活法を主題にした流れのなかで、このような自己描写がおこなわれている。しかし今までの私達の分析のような、認識的な意義の観点から説明しようとするならば、相当なこじつけの論になるであろう。主題との関連において(2)の記述がなぜ必要であり、どのような価値があるのであろうか。(4)において一般的な認識が結晶しているように見えるが、これは(3)とのみ関連しているのであり、しかもこの経験的な反省を元にして導き出されているとは言えない。むしろ逆に、(4)のような一般化した書き方によって(3)の正当性を理由づけているのであり、(3)から(4)への論理的な発展はきわめて希薄である。したがって(2)と(3)の記述は自分について語る饒舌の傾向が強く、認識的な必要性よりも自己を語り、知らせたい欲求が背景に感じられる。他の随想の展開とおなじように自己描写も主題との関係によって制御されているわけではない。わずかな切っ掛けから始まったのや、認識的な意義が曖昧な類や、思い出話や饒舌の性格の濃厚なものけっしてまれではない。これらの例についても今までの分析例とおなじような解釈を押し通そうとするのは無理がある。それらは以前の例の表面から隠れていた性格が露になったにちがいない。もちろん共通性はあるが、やはり、自己描写にたいするちがった感情とちがった態度を読みとるべきであろう。以下の後半部において以上の具体的な分析を参考にしながら作者自身の自己描写論を考察するに際しても、このような側面から捉えるのを忘れてはならないであろう。

後期においてモンテーニュが、『エッセー』の中心は自己描写であると考えているのはまちがいない。すでに中期の序文で「私自身が私の書物の題材なのである」と宣言しているのであるから、それは当然であろう。しかし、後期の彼の言葉はずっと明快で、ずっと力強い。たとえば、

私は他のどんな問題よりも自己自身を研究する。これが私の形而上学であり、自然学である。(III-13, p. 15)

では、「自己自身を研究する」ことはどのような意義をもっているのであろうか。モンテーニュは以前よりはるかに明確な主張をおこなうに到っている。中期のようにおなじ類

の弁解をくり返すこともなく、自信にみちてその意義を説明している。後期にはいくつもあるそのような箇所のひとつを挙げるならば、

私はプラトンのなかでより自分のなかで自分自身を理解するほうが好きである。良い生徒でありさえするならば、自分に関するもっている経験のなかから、私は自分を賢くするに足るだけのものを十分に見つけられる。過去の過激な怒りを思い出し、この興奮にどこまで押し流されたかを反省する者は、アリストテレスのなかでよりもこの情念の醜さをよく分かり、いっそう正しい嫌悪をいだくようになる。自分が体験したり、恐怖を感じた災難や、些細な原因で動転したことなどを思い出す者は、こうしてみずからの性状を認識し、将来の変動に備えることができる。カエサルの人生と云えども、我々にたいしては、我々の人生以上に意味ぶかい実例を提供してくれるわけではない。皇帝の人生であろうと庶民の人生であろうと、つねにひとつの人生であって、人間のあらゆる出来事がからんでいる。ひたすら耳を傾けよう。必要としている主要事はすべて我々が我々自身に語っている。(III-13, pp. 16-17)

したがって、自己描写による自己自身の研究が「汝自身を知れ」という哲学の実践として説明しうるのは、容易に察しがつくであろう。上の引用文から発展した部分と第3巻第9章の末尾にそのような意見がのべられている。しかしながら、この関連を知るだけでは、モンテーニュの思想とのつながりを十分に理解したとは言えない。第3巻の『エッセー』において自己認識と自己自身の形成と人生を生きることが一体になっている思想を味読しなければならない。そうすれば、自己描写についての弁明が力強くなった背景を推察できるであろう。しかし、この点についての追求と詳論は私達の主題から遠ざかるので、参考程度の言及にとどめておこう。たとえば、自分の精神を育て、鍛えることについて言っているつぎの言葉は、もはや「汝自身を知れ」という哲学の説明とは感じられない。

その上我々は精神に多くのものをあたえ、つかませようとするあまり、その把握と取得の行為を妨げている。あるものはただ提示するにとどめ、あるものは付着させ、あるものは合体させなければならない。精神はすべてを見、すべてを感じることができるが、しかし自己自身の養分で育てられなければならない。まさしく自分にかかわり、まさしく自分の所有物であり、自分の本質であるものを知らなければならない。

モンテーニュにとって自己自身をよく知るといのはただ認識上の、思想上の問題ではなかった。彼はそれを日常の生き方として考えた。たとえば、自己認識は人間関係のありようを決める上にも重要な影響をおよぼす。

ときには人の仕事の処理に引っぱり出されたとしても、私はそれを手に取るのは約束したが、肺や肝臓に入れる約束はしなかった。背負いはするが自分と合体はさせない、心はくばるがけっして熱中はしない、と約束をした。そのようなとき私は注意ぶかく見つめるが、抱きしめはしない。自分の内臓や血管にもっている個人的な煩務を整理し、片づけるだけで大変であり、他人の仕事にそんなに深くかかわって骨を折る余裕はない。自分に固有の、生来の、本質的な用事で十分に忙しいので、そのうえ人の用事まで招き入れようとは思わない。(III-10, p. 215)

自己自身を知る、自己を形成する、人生を生きる、この三者が一体になっている思索がモンテーニュの思想の中心である。『エッセー』の巻末を飾る言葉が雄弁にそれを語っている。

自己の存在を正しく享受するすべを知ることは、ほとんど神のごとき絶対的な完成である。我々がちがった境遇を求めるのは、自分の条件の利用の仕方を知らないからであり、自己の外へ出ようとするのは、みずからの内部の働きを理解しないためである。私の考えるところ、もっとも美しい生活とは、奇跡じみたところも気違いじみたところもなく、普通の模範に従った生活である。(III-13, p. 92)

以上の方面における思想の深まりが背後から自己描写にたいする自信を強めたであろう。また、一方、『エッセー』における自己描写の実行がそれらの思想の深化に寄与したはずである。両者はともに影響しあいながら進化したにちがいない。

自己描写が自己認識を誘発する作用は私達の随想の分析からも明らかであるし、自己認識の効用に関するモンテーニュの説明も十分に納得できる。また、彼の思想の核心に通じているのも理解できる。しかしながら、これらはいずれも当の作者にとっての意義である。

作品において自己描写を実行するかぎり、読者という他者にとって価値がなければならぬ。中期では彼はこの点を明確にできず、卑下したような弁解をくり返すばかりであった。たとえば序文で、「私がこれを書いたのは、親戚や友人たちの個人的な便宜のためである」と断ったり、第2巻第8章の冒頭では、印刷機を利用した以外には世間とのつながりは何もないとさえのべている。一方後期には、他者にたいする自己描写の価値を主張した文章がいくつか見られる。

ある人がどのように考え、どのように行動し、どのように生き、どのような性格の人間であったかを知るのは、まったく無益ではない。個人の経験はなんら共通性がないわけではなく、他者にとっても有益な教訓をふくんでいる。それは今さら言うまでもないであろう。このような側面を捉えて自己描写の弁護ができよう。

要するに、ここに走り書きしている雑録は、生活の試行錯誤の記録にすぎない。これは心の健康のためには、教訓を逆に汲みとるならば、かなり良い手本になる。しかし、肉体の健康となると、私以上に有益な経験を提供できる者は誰もいない。(I I I - 13, p. 26)

もちろん「教訓を逆に汲みとるならば」という言葉が、自己描写の価値の読者にたいする関係を表している。モンテーニュは自分という人間の観察やみずからの経験についての反省を、読者にたいするこのような関係において意味づける。いわゆる反面教師の役割である。

もっぱら他の人々にたいする見せしめのために罰をあたえるというのが、我々の司法の慣習である。絞首刑に処する者を矯正するのではなく、これによって他の人間を矯正するのである。私のやり方も同様である。私の過ちは今となっては生来のもので、直しようがない。しかし、君子が自分を模倣させることによって公衆を益するのに反し、私はおそらく私の轍を避けさせることによって裨益するであろう。

おまえには見えないのか。アルピウスの息子はいかに生活に苦しみ、バルスはいかなる貧窮のなかにあるか。これこそ遺産を浪費するなという、大きな教訓である。

私が私の欠点を公表し、告発するならば、誰かがこれを恐れることを学ぶであろう。

(III-8, pp. 80-81)

しかしながら、実際には『エッセー』の自己描写は、自他の対比の構造などがはっきりと示しているように、このような自己否定の強いものでもなければ、謙虚な性質のものでもない。むしろ、他者や社会と対峙するなかで自己自身を明確にし、自己を主張する色合いのほうが濃厚である。上記の釈明のような自己描写は実際には小数である(1)。モンテニユの積極的な姿勢を考えるならば、つぎのような言い方がよりふさわしいであろう。

私は自分の経験によって人間の愚かさを告発する。(III-13, pp. 20-21)

「自分の経験」というのは文脈からして自分の愚かさについての経験であり、前のふたつの説明とあまりちがっていないとも言えよう。他者にたいする自己描写の価値をこのような側面から主張しなければならないのは、『エッセー』で頻繁に、多方面にわたって自己を語る行為がそれほど世間の礼儀に反し、無寝で高慢に映りやすいからであろう。それは中期の弁解ぶりからも察しがつく。しかし、上の言葉は以前のに比べ、自己描写によって他者に働きかけようとする積極的な気迫が感じられる。自己を描くなかで生まれる認識は、ただ一個人の特殊な事実の認識ではなく、人間一般に通じるにちがいないという自信がひそんでいるように思われる。後期において、自己描写がもつこのような人間認識の意義を主張しているのは、つぎの文章である。

私は卑しく、光彩のない生活をお目にかける。だがそんなことはどうでもよい。民衆の私生活であろうと、もっと華々しい生活であろうと、おなじように道徳哲学のすべてが関連している。人はめいめい人間の性状の本質を完全にそなえている。(III-2, p. 190)

以上のように、自己描写の意義についてのモンテニユの主張は、中期とは比較にならないほど進んでいる。あるいは、また、自己認識の重要性を力説しているのは、読者が『エッセー』によってその実行の仕方を学べるという意味において、間接的に自己描写を弁護

する意図もあつたであろう。今まで考察したどの文章も、他者にたいする価値をはっきりと自覚するに到ったことを示している。とすれば、今や自己描写についてはそのような弁明をするだけで十分なはずである。しかしながら、後期においても彼の説明は、以上とはちがった性格のものが多い。読者一般にたいする価値を主張するようになった進化に注意を奪われ、この点を見落としではならない。

考えてみれば、彼はなぜ中期に上のような弁明をおこなえなかったのであろう。最後の引用文ほど深い認識には達しえなかったとしても、「私が私の欠点を公表し、告発するならば、誰かがこれを恐れることを学ぶであろう」という類の釈明ならば、当時の彼が思いつかなかつたほうがむしろふしぎである。あるいは、読者一般にたいする自己描写の価値を主張している後期の文章は、上の四例だけである。この節の前半部で私達のおこなった随想の分析が示しているように、彼が自己描写において自己を越える思考法や表現法をさまざまに実行しているのを思うならば、この数はあまりにも少な過ぎるのではないだろうか。これらのいずれの疑問についてもその理由は、自己描写がたんに客観的な認識行為として進められているのではないからである。すでに初期の頃から自己描写には、作品のなかに自己の姿を固定することによって存在感の充足を求める感情がからんでいた。認識的な目的よりもむしろこのような欲求が自己描写を発展させ、その範囲を広げたのである。モンテニユ自身もみずからの心理を知っていたにちがいない。だからこそ、自己を語るのが頻繁になった中期には、作品にふさわしくない行為をくり返し弁解するほうに注意を奪われたのである。初版の『エッセー』が博した好評が、この後ろめたい思いを消滅させたのであろう。「私がこれを書いたのは、親戚や友人たちの個人的な便宜のためである」という類の弁解は、後期にはもはや見られない。と言つても、ひたすら自己描写の一般的な価値を主張しているのでもない。彼は自己描写にたいする自分の感情を十分に自覚している。作品の成功がもたらした自信によって、その感情にいつそう忠実に『エッセー』を書くようになったとさえ言えるであろう。

『エッセー』の文章について、不注意なまちがいは訂正するが、習慣になったのは直すつもりはないと説明している文脈で、彼はつぎのように言っている。

この仕事の第一の目的と完成は、これが厳密に私自身のものであるということだ。

(III-5, p. 6)

なぜこのような強調をしたのであろうか。私達が今まで検討した、自己描写についての彼の説明からは、その理由は理解できない。作品と読者一般との関係ではなく、作品と作者との関係を注視しなければならない。

自分の文章の習慣的なまちがいを訂正しないで作品のなかに残しておくことは、自己認識のためにはかならずしも大切であるとは言えない。それは現実の自己をありのままに表現するために必要なのである。上の言葉はこの意志の率直な表明にほかならない。そこには、「文は人なり」という意味においてのみならず、文章のまちがいきえも自己を表現しているのを喜び、最大限に作品と自己との一致を求める感情がある。後期においてこのような感情は強まりこそすれ、けっして消えてはいない。

ここでは我々、つまり私の本と私は一致して、まったくおなじ歩調で進んでゆく。

よそでは作者を別にして作品を褒めたり、非難したりできるが、ここではそうではない。一方に触れる者は他方にも触れざるをえない。(III-2, p. 191)

考え方の当否は大いに議論の余地のある、このようなことを書くのは、作品と自己との一致にたいするモンテーニュの執着がそれだけ強いからであろう。この節の前半部の最後で挙げたような自己描写は、作者にたいしても読者にたいしても、認識的な価値も教訓的な価値ももっていない。これらの観点からならば、無用であると言えよう。『エッセー』のなかの自己をできるだけ現実の自己に近づけようとする欲求が影響し、あのような範囲にまで自己描写を広げたのである。随想の展開がますます奔放になり、ときには前後の関連さえ曖昧になって来たのも、おなじ理由がからんでいた。随想の展開においても彼が自己と作品との一致を求めたからである。そのため『エッセー』の書かれた随想は、意識内の自然な随想が第三者にたいしてもつ奔放さや曖昧さを帯びるようになったのである。

文章においても、自己描写の広がりにおいても、随想の展開においても作品と自己自身との一致を追求するのは、当然ながら自己認識のためでもなければ、人間認識のためでもない。それは作品にたいする作者の心理と欲求の問題である。『エッセー』はできるかぎりモンテーニュという存在と個性を知らせなければならない。客観的な認識行為としての意義は別にして、そこに『エッセー』の主観的な使命がある。

司祭の耳にひそかに、そっと打ち明ける我々の懺悔を非難する新教徒に与して、私

は公然と、敬虔な心で、飾らずに自分について告白する。聖アウグスティヌスやオリゲネスやヒッポクラテスはみずからの意見のまちがいを公表した。私はみずからの素行のまちがいを公表する。私は自分を知ってもらうのに飢えている。だが、真実を知ってもらえるならば、どれほど多く知ってもらえるかどうかは問題ではない。いや、もっと正確に言うならば、私は何にも飢えてはいないが、私の名前を知るようになった人たちから別の人間のように誤解されるのを、是が非でも避けたいのである。(I I-5, p. 257)

直後の部分では、「よりよく知ってもらえるならば、褒められるのが少なくなっても満足である」とも言っている。『エッセー』の自己描写は現実の存在の代償物となって、このような欲求を満たす様式でもなければならぬ。

すこしちがった文脈のなかでこの願望を見直してみよう。

私はわずかな人々とわずかな年月のために私の本を書いている。もしこれが後世に残るような内容であったならば、もっと堅固な言語に託すべきだったであろう。今日まで我々の言語のたどった絶えまない転変を見るならば、現在の形がこれから50年後も通用していると、誰が期待できるであろうか。したがって、私は恐れずに多くの個人的な事柄を挿入する。それらは今日生きている人たちのあいだで用を果たし終わり、しかも、普通の知性より深く洞察できる人たちにだけ特別に理解される事柄である。結局私の嫌なのは、故人の思い出がかきまわされるのをしばしば見かけるように、「彼はこのように考え、このように生きていた。これが彼の望みであった。臨終のときに話せたならば、彼はこう言って、こういう贈り物をしたであろう。私は誰よりも彼をよく知っていた」などと、人々に議論されることである。ところで、礼儀作法がゆるすかぎり、私はここで自分の性格と感情を理解してもらおうとしている。しかし、よく知りたいとおっしゃる方には、誰にでも、口頭でもっと自由に、もっと率直に申しあげよう。ともかくも、注意して見るならば、私がすべてを言っているか、あるいはすべてを示していることに、人々はこの手記で気づくであろう。口で言えないときには、指で指し示している。

しかし、これらの痕跡がわずかであろうと、鋭敏な人には十分である。これらで

もってあなたは一人で残りを知りえよう。

私は自分の願望や自分という人間について推測の余地をまったく残さない。もしこれらを話題にしなければならないときには、真実のとおり正しく語っていただきたい。たとえ名誉をあたえるつもりであろうと実際とはちがった私の姿を捏造する人を否認するためならば、私はあの世からでも喜んでもどってくるであろう。(III-9, pp. 182-183)

この文章には自己描写にからまる感情の脈絡や以前の執筆期との類似性や相違などがいろいろと読みとられる。モンテーニュは、『エッセー』で自己を描くのは、死後においても自分について真実を語ってもらいたいからであると言う。まずこの点から考えてみよう。この言葉は第2巻第37章で「あなたの記憶にたいしてありのままに私を提示する」(p. 646)のために、「私の性質と能力の実際を、死後数年、いや数日でも存続できる堅固なものの中に、変質も変化もこうむらないように収めておくのが私の望みなのです」(p. 646)と言っていたのを思い出させる。あるいは自画像(II-17, p. 460.)といい、書斎の片隅の肖像(II-18, p. 476.)といい、おなじ類の説明にあたる。つまり、このような感情は後期もほとんど変わっていないのである。一方には以前の時期よりずっと進んだ弁明が見られながら、自己描写にこめた願望はほとんどおなじである。あるいは、そこには同時に、自分の作品の普遍性にたいする不安がまじっているかも知れない。中期に序文で「私がこれを書いたのは、親戚や友人たちの個人的な便宜のためである」と言わざるをえなかったように、モンテーニュは後期においても、「個人的な事柄」を主題にした『エッセー』は自己の存在をあまり越えるものではなく、「わずかな人々とわずかな年月」のための書物にすぎないのではないかと疑ってもいたようである。しかし、そのような心の片隅の疑懼よりも、けっきょくは『エッセー』を自分について「すべてを言った」、「あるいはすべてを示した」本にした満足感のほうが大きかったであろう。すくなくともそのような執着心のほうが強かったにちがいない。自分についてのまちがった評判を「否認するためならば、私はあの世からでも喜んでもどってくるであろう」という言葉は、自己という個人的存在にたいする固執を率直に表現している。

したがって、存在の代償物である『エッセー』を書く行為には、交友の楽しさを求める感情がある。『エッセー』に描かれたモンテーニュが、現実のモンテーニュに代わって、他者

との交際をつとめるのである。しかし彼は作品のなかだけの存在にも徹しきれない。「しかし、よく知りたいとおっしゃる方には、誰にでも、口頭でもっと自由に、もっと率直に申しあげよう」という言葉は、そのあたりの心理から書かれたはずである。自己描写は自分を知ってもらう喜びを味わえる交友の代替物ではあるが、ラ・ボエシの死とともに友情を理想化した彼はどこか満足しきれない。自己描写のこの脈絡はつぎの箇所にはっきりとあらわれている。

もしお互いの気質に好感がいだきあえそうな紳士や良い仲間が、田舎にでも、町にでも、フランスにでも、あるいは他国にでもいるならば、自宅にとどまっている人であろうと、旅行中の人であろうと、たなごころ笛を吹いて合図していただきさえすれば、参上して生身の『エッセー』を提供いたします。(III-5, p. 252)

自己を描いて得たこのような利益のほかにも、私はさらにひとつのことを期待している。死ぬまでに私の気質がどこかの紳士に気に入っていただき、馬が合いそうだと思っただけならば、友情を結ぶのを求めてくれるかも知れない。(III-9, p. 179)

以前にはモンテーニュがこのような希望を表明したことはない。しかし、誤解してはならない。それはなんら新しい変化ではない。私達は初期の章の分析によって、自己描写の認識的な起源の一方にひそんでいる感情的な起源を論証した。そして、作品のなかで自己を描きながら存在感を充足しようとする欲求は、親友ラ・ボエシの死によって引き起こされた、存在の欠如感にひとつの原因があると推察した。上の言葉は、自己描写が一面ではまさにこのような感情によって押し進められてきたのを示していると言えよう。まったくおなじ感情が自己描写の進化ののちに自覚され、表明されたにすぎない。

しかし、また、以上のような一貫した自然な進化自体がちがった性質を引き寄せ、みずから加えてゆく。先ほどの引用文にもどって、その現れを見てみよう。

後期においてもモンテーニュは『エッセー』を「わずかな人々のために」、「多くの個人的な事柄を挿入して」書くと言っている。しかし、彼はもはや「親戚や友人たちの個人的な便宜のために書いた」とは言わない。対象は世間一般のなかの「わずかな人々」である。作品と他者との関係が広がったのはまちがいない。そのひとつの理由は、初版が好評で迎

えられ、自己描写が非難ばかりを浴びることもなく、読者との関係のなかでともかくも認知されたからであろう。あるいは、現実のモンテーニュの世界が広がったのも、理由に考えられよう。初版出版後のイタリア旅行や二期にわたるボルドー市長のつとめが、人間関係についての彼の意識をすこし変化させたのかも知れない。

しかし、そこにはまた、内的な理由がある。彼は自己描写がただ一個人を知る以上の興味を引き起こすにちがいないという確信をいだくようになっていく。「しかも、普通の知性より深く洞察できる人たちにだけ特別に理解される事柄である」とつけくわえた短い文が、自己描写の個人性についての消え去らぬ不安の一方で、普遍的な価値を察知した自信をも示している。もちろんその価値とはすでに考察したような、自己認識としてのみならず人間認識としての意義である。

以上のように、後期においても、自己描写には感情的な性格と認識的な性格がまじっている。そして、表現様式の熟成度においても、モンテーニュの自覚においても、以前の時期と比べて進歩がいちじるしいのは明らかに後者の面である。しかしながら、後期の自己描写をこの側面に片寄って捉えるのは、正当な理解ではない。自己描写が一個人についての知識以上の価値をもつことを主張した言葉は少ない。とくに、人間認識としての意義を弁明しているのは、ただ一箇所である。むしろ多いのは、以前よりすこし変貌したとはいえ、あいかわらず自己描写の個人的で感情的な側面を釈明している言葉である。それはこの面への彼の執着の強さを表しているであろう。

進化については新しい変化を過大視し、自己描写については作者自身にとっての意味を看過する嫌いのあるヴィレーは、ほとんど認識的な側面のみについて進歩を説明し、解釈するのに満足している。たとえば彼は、私達が前半部の最後に挙げたような、認識的にはほとんど無価値な自己描写の存在に気づいてはいるが、この事実をみずからの解釈のなかに取り込もうとはしない。この種の自己描写はすこし慎みを欠いた記述で、なくても不都合ではなく、例外的な汚点であると評価をくださばかりであって、なぜモンテーニュが書いたのか考えようとしなない。しかも、とくに「経験について」という最終章にこの種の饒舌が多いのは彼の指摘しているとおりであり、たんなる例外とは言えないはずである(2)。

『エッセー』の自己描写とは何かを考察しようとするならば、この側面を除外するわけにはゆかない。ヴィレーの見解にとどまるならば、第3巻に自己描写が増えたのは老人になってより放縱になったからであると見なす、16世紀のパーキエとあまり変わりはない(3)。私達が折りに触れて論証したように、自己描写はつねに認識的な性格と感情的な性格が一

体になって発展してきたのであり、部分的にはいずれかが表面に出る濃淡の相違はあっても、その進化は一方が他方より優勢になる動きではない。この点を明確に捉えているならば、作者にとっても読者にとっても認識的にはほとんど無価値な自己描写が後期に存在し、とくに「経験について」の章に多いのは、別にふしぎではない。特別に原因を探さなければならぬ現象ではなく、進化の自然な流れである。『エッセー』に描かれた自己を現実の存在の代替物にしながら存在感を満足させようとする欲求が根底にあるのを考えるならば、精神のみならず外部の肉体の特徴をも描写する自己描写が中期から発展したのちに、後期において日常の行為や生活についての記述が生まれたのも当然な変化であろう。無関係なようでありながら、さらにこれはモンテーニュの認識の態度とも関連している。第3章第1節において論考したように、経験的な思考の練熟につれて彼の認識の視線はいっそう卑近な日常の世界へ向けられるようになる。それとともに自己描写が彼の日常の行為を記すようになったにちがいない。自己描写において認識的な性格と感情的な性格が一体であるのみならず、随想の展開においても自己描写と他の事柄についての思考とは密接に関連しながら動いているのであるから、このように推測してもまちがってはいないであろう。したがって、モンテーニュがみずからの認識の態度についての最終的な表明の章として書いたと思われる「経験について」のなかに、ヴィレーが例外的な汚点であると言っているような自己描写が多いのはたんなる偶然ではないにちがいない。両者の記述を生む内面の運動が不可分である証跡であろう。

自己描写が一個人について知識をあたえる以上に価値があるのは、とくにみずからの内面の観察と分析が普遍的な人間認識に通じているからである。もちろんこの点については私達にも異論はない。しかし伝統的な解釈は『エッセー』の自己描写を心理分析の趣味から捉え過ぎている。それは17世紀以降の文学観を適用した偏見ではないだろうか。16世紀においては自己という存在についての関心は、はっきりと内面の心理に向けられるほど焦点が定まっていたようには思われない。モンテーニュにかぎって言っても、心理分析の趣味が『エッセー』に自己描写を出現させたのではない。第1章第6節において考察したように、作品とのより直接的なつながりを求める自己表出の欲求がルソンの形式のあちこちに亀裂を生じさせ、そこにみずからの存在の姿を固定させたのである。このような方向へ彼を誘った原因のひとつとして、私達はラ・ボエシの死を推察したが、しかし、親友との死別や退職による自由な生活は内部にひそんでいた欲求をあらわにしたにすぎないであろう。それらが彼を近代的な個人の方へ歩み出させる状況に置いたのである。したがって、

より根本的には、ルネサンス期における自伝の流行や(4)、あるいは絵画における自画像の誕生の過程(5)に見られるような、自己という個人的存在にたいする興味と、同時に神や共同体から切り離されはじめた一個人としての不安などが、ルソンという形式を打ち破らせ、自己自身をより表面に引き出していったにちがいない。出発点にもどり、映えない解釈が結論になったようであるが、しかしながら、平凡な観点によって初期から後期にわたる作品分析とモンテーニュ自身の自己描写論の解釈がより進展するならば、それは些細な成果ではない。むしろ私達は、広い視野のなかで平凡な理解を実行するほうが、細部を拡大して巧妙な論を展開するよりもいっそうむつかしく、いっそう大切であると信じている。

自伝のようなジャンルを選ぶ立場にない者や、その興味のない者は、どのような作品様式によって自我の欲求を満足させれば良いのか分からなかったであろう。モンテーニュは一方において第1巻第8章のようにはっきりと、自己の内面の衝動に従って著作をすすめてゆく決意をしながら、他方ではルソンという形式によって出発した。しかし彼は自己に忠実に進化の道を歩んだ。すでに初期にその兆候があらわれている。そして、初期から後期に到るまでずっと、自己描写によって作品に自己の存在を固定する充足感に従いながら、一方では自己を中核に据えた認識の方法を鍛えた。初期、中期、後期のいずれの時期においても、感情的な性格と認識的な性格の二重性が作品様式の進化の原動力だったのであり、自己描写の姿と構造に「無限の深さと変化」をあたえたのである。

第3章第3節（注）

（1）したがって、自分の欠点を告白しているという点を捉え、自己描写とカトリックの懺悔との共通性を指摘した論（II-B-15, pp. 44-45）は、興味ぶかい説得力もあれば、論拠に『エッセー』の文章を引証するのも可能であるが、しかしながら、自己描写の全体の脈絡のなかで考えるならば、あまり妥当な解釈ではない。

（2）II-A-69, t. 2., pp. 271-272.

（3）III-A-23, p. 517.

（4）II-A-27, pp. 229-235. II-A-69, t. 2., pp. 136-139. III-A-14, pp. 232-237.

（5）III-B-9, pp. 6-38.

4. 運動の象徴的な意味と円環の構成

この論考の第3章の対象である『エッセー』第3巻は13の章にわかれている。それらが私達の言う後期の作品のすべてであり、章の数は以前にくらべはるかに少ない。しかしこの時期に創作活動が鈍ったわけではない。「最初の頃にしていたようにあまりに頻りに章を切る」(III-9, p. 995)のをやめ、「章をもっと長くすることを始めた」(同, p. 995)からにすぎない(1)。中期にもいくつか長い章はあるが、この言葉にもっとも合致するのは第3巻である。これらの章になにか作者が趣向をこらした構成が存在するであろうか。これが私達のこれから考究しようとする問題である。

章の構成と言うとき、当然私達は全体の組み立て方に注意をそそがなければならない。そして作者がその趣向にこめた思想を読みとらなければならない。と言うのは、内部の随想の展開にある特徴と章の構成とを混同してはならないからである。前者はむしろ作者の思考の様式であり、章を組み立てる構想とはいわば次元が異なっている。以前に章の構成が盛んに論議された頃のつぎのような分析は、この点を峻別するのを怠ったため、不毛な結果におわった。モンテーニュの随想は「哲学的考察」、「経験例」、「歴史的事例」、「伝承的事例」、「自己描写」の要素が交代しながら展開すると考え、ヴィットコーヴァーは「馬車について」(III-6)の構成が下記のようになっていると説明した(2)。

哲学的考察 → 伝承的事例 → 哲学的考察 → 自己描写 → 伝承的事例 →
→ 哲学的考察 → 自己描写 → 歴史的事例、等々。

このような分析は先ほど注意をうながした混同以外の何ものでもない。指摘された要素の交代は随想の展開を支えているモンテーニュ的思考法であり、章全体の構成についての意識はまったく説明できない。ヴィットコーヴァーはこの思考法のもつ論理性が章を秩序づけていると言いたいのかも知れない。とするならば、そこにも大変なあやまりがある。彼女の言う五要素が存在し、上のように組みあわさっているとしても、随想の展開が論理的であるとはかぎらない。そのような要素の存在ではなく、相互の関連の仕方が展開の論理性のかなめだからである。たとえば、「自己描写 → 歴史的事例」の発展が論理的に飛躍していることも十分にありうる。歴史的事例が自己描写との関係のもとに記されているとしても、後者の内容のごく些細な一部としか関連がないならば、論理性を欠いた、曖

昧な展開である。すでに私達が例証したように、『エッセー』の随想にはそのような非論理性は珍しくない。要素の存在を分析するだけでは、随想のモンテーニュ的な飛躍をまったく無視することになる。ヴィットコーヴァーの指摘しているような要素は、もっとも初期の作品以来彼の思索を支えてきた。その点に限るならば、まちがってはいない。しかしながら、一方、随想の非論理性とか超論理的な飛躍も重要な個性である。それらを考慮に入れないで、章全体の展開を理解することはできない。彼女の「馬車について」の分析は、思考法的一面として説明すべきところを章全体の構成と混同している。

おなじ第3巻第6章の構成を、セースは連想の原理によって捉えようとした。そして、「」のなかの語を連想の契機とした、つぎのような道筋を想像した(3)。

船酔いの原因は「恐怖」である——→「私」の場合は「恐怖」ではない——→「私」は「馬車」には堪えられない——→「馬車」を珍しい動物に引かせた「王」がいる——→「王」は浪費家であったはならず、「誠実」でなければならない——→「私達」とくらべると、私達の先祖は「誠実」であった——→「私達」は歴史の「認識」においてほとんど進歩していない——→「世界」の「認識」と言えば、最近「新世界」を発見したばかりである——→私達の「馬車」の話にもどろう——→「新世界」における「馬車」。

おそらくセースが連想の原理によって解釈するのを思いついたのは、モンテーニュの随想の展開が自由奔放なからであろう。実際ときどき超論理的な飛躍が見られる。そのような箇所には連想の原理を適用するならば、私達は彼の意識の躍動を追体験できるであろう。その限りにおいては、私達もその有用性に異論はない。しかしながら、すべて連想で説明するのは安易な乱用であり、彼の随想と思索を誤解させるばかりである。いくら奔放に見えようとも、内部の多くの箇所には当然ながら思索の要求する論理性が存在している。思考の発展の論理が随想の展開をうながしている。たとえば第6章の冒頭はセースよりもヴィットコーヴァー風に、船酔いの原因についての「哲学的考察」が自分自身の経験にそくして探究する「自己描写」へ発展した、と解釈すべきである。さもないと、『エッセー』の重要なテーマである「自己描写」がモンテーニュの思索において果たす役割を理解することはできない。このような思索の論理的な発展を無視し、連想的につなぎうる要素を探すだけでは、浅薄な遊びのような分析にとどまるしかない。しかもセースはそれを章の構

成という別の次元に及ぼし、ヴィットコーヴァーとおなじあやまちを犯している。

ふたりの分析が失敗した最大の原因は、章の構成以前の問題、すなわち論理性と非論理性をあわせもったモンテーニュ流の随想そのものを十分に研究していなかったからである。そのため、随想の個性の一面に注意をうばわれたのみならず、展開の過程の特徴と章の構成とを識別できなかったにちがいない。まず最初に『エッセー』の随想全体について、一方ではその展開を支えている思考法の論理的な諸形式を、他方では話題の急転や脱線や曖昧な発展や紆余曲折などのメカニズムを把握していなければならない。さもなければ、恣意的な分析によって章の構成を捏造するにすぎないであろう。やはり、私達が論考の基礎にしているような調査が、前段階として不可欠なのである。そののちならば、思考法や随想法についての全体的な研究を背景にした、確かな根拠のある解剖によって章の随想の道筋を明らかにし、たんなる展開の過程の特徴を越えてなおかつ全体の組み立て方に個性があるかどうか見分けられるであろう。随想の展開としてではなく、ひとつの章の作り方として特徴があるかがわかるであろう。

私達はすでに第2章第4節において、中期に属する章について構成の有無を論じた。そのとき、つぎのような点から、章の構成が存在しがたいことを示した。

- (1) 「一片々々がそれぞれに一体をなす」が随想の方針であり、それらの関係や配列には拘泥しない。部分相互の関連を示す「連結や接合の言葉」は秩序にたいする配慮ではなく、自由な脱線後の彌縫策である。
- (2) この姿勢は作品のなかに自然な自己を表現するのにふさわしく、『エッセー』の重要なテーマである自己描写にも合致している。
- (3) 「エッセー」という思考は個々の考察を関係づけ、総合する論理を欠いている。
- (4) 作者の認識論や世界観もそれを是認している。

これらの特徴から判断するならば、統一的な秩序とか論理的な結構をもつ構成はまず不可能であり、モンテーニュが章の構築に骨を折ったとは考えられない。

第3章第2節においては、私達は思索の成長につれて『エッセー』の記述に紆余曲折が増す理由を考察した。それはそのまま章の構成というような全体的な秩序が存在しがたい理由にもなる。『エッセー』第3巻について章の構成に反する特質はつぎのようにまとめられる。

(1) 「エッセー」という思考法は以前となんら変わらない。個々の判断と認識を重んじつつ、依然として秩序や統一のための関係づける論理を取り入れていない。

(2) 思想的な円熟にもかかわらず、ますます強く世界と人間の多様性と流動性を感じるモンテーニュにとって、対象が何であれ認識は確定的な秩序を目指す行為ではありえない。

(3) 自己描写の欲求は以前にも増して強く、思考の流れを論理的な抑制からいっそう解放し、随想の展開それ自体においても作者の自然と作品との一致が追求されるようになる。

したがって後期に到ると、章を作る構想によって随想の流れを規整することと『エッセー』を書くこととはいよいよ相容れがたくなる。

章の構成についての解釈は以上のような個性を無視してはならない。意図的な構成を指摘するとしても、これらの性格と矛盾しないものでなければならない。さもないと、章の構成についての分析のほか、矛盾を解消する『エッセー』論をも同時に示さなければならない。『エッセー』全体の随想様式についての研究が、このように、恣意的な分析と推論にたいする歯止めになってくれるのである。

第3巻第6章「馬車について」は、展開がもっとも難解であると言われている。そして、多くの人が諸説を提示してきた。私達もこの章を取り上げ、具体的な検討に入ろう。

まず随想の道筋と骨組みを明らかにしなければならない。冒頭から《et les dompter par moy-mesme.》「自力でこれを制御することに慣れたからである」(p. 47, p. 228)(4)までは、船酔いの原因を考察した論であるのに異論はないであろう。それ以上細かい分析は章の構成を考えるためには不必要である。つぎに突然、馬の代わりに珍しい動物に車を引かせた実例が列挙される。章の構成を論じようとする者ならば、当然それ以前に、話題のこのふしぎな急転を説明できなければならない。この展開を生じさせたのは、一読ではとても気づけないような些細な要素である。最初の部分の終わり頃にモンテーニュは船酔いの原因を考えるため、馬車(coche)や輿や舟の動き方をくらべ、自分の反応を反省している。その中の《coche》という語が珍しい動物に引かせた車(coche)の話の思い出させたのである。この非論理的な転進は心理的な理由によるのであろう。車の実例の典拠である、ペトルス・クリニトゥスの『正しい規律について』を読んだ鮮やかな印象が、このきわめて個人的な急転を促したにちがいない。それは第三者には捉えがたい展

開であろうとも、意識の流れの躍動性を思えばなんらふしぎではない。後期の『エッセー』にはこのような飛躍や曖昧さが増えている。最初は当惑させられた展開が、しばしば連想の原理の援用によって内面についての想像が可能になる。私達はこの章以外の実例によって私達の解釈をたやすく立証することができる。

実例の列挙ではじまる第2の部分は、《non pas la despence》「その莫大な出費は許すわけにゆかない」（p. 57, p. 239）のところで終わると見なすべきであろう。国家の公金の使用における君主の徳が共通のテーマであり、このテーマは実例にひそむ意味を読みとろうとする思考の習慣から生まれたものである。獅子や虎や鹿や駝鳥などに車を引かせながら華々しく町を練り歩いた君主たちの話から、モラリスト・モンテーニュはつぎのように問題を見つけ出す。

これらの奇妙な思いつきを読んだとき、私の頭にはつぎのような別の考えが浮かんだ。すなわち、君主が法外な費用を使って自分をひきたたせ、りっぱに見せようとするのは一種の小心であり、あるがままの自分に自信のない証拠である。（p. 48）

この「別の考え」を発展させながら以下へ展開したのである。

したがって第2の部分のテーマの出現はたんに連想によるのではない。そのように見なすならば、実例についての考察が『エッセー』の随想の発展に果たす重要な役割を看過するであろう。どのように実例を取り扱うかというのは、執筆開始当初から作品様式の問題でもあれば、思索のあり方の問題でもあった。そして、モンテーニュは実例の教える真実を読みとることを、「エッセー」という思考の中心にした。それは第3巻においても続行されている。船酔いの原因についての探究の過程にあらわれた「馬車 (coche)」を契機として、珍しい動物に引かせた車 (coche)の話へ連想的に急転したのも、想像力を刺激した鮮やかな印象のみならず、背景にモラリスト的な関心があったからであろう。

実例が宿すさまざまな意味を読みとろうとする思考と、実例が随想の発展に果たす機能とを理解していなければ、『エッセー』の展開を解剖することはできない。とくに心得ていなければならないのは、ひとつの実例がまったく性質のちがうふたつ以上の意味を含んで展開に作用するメカニズムである。『エッセー』においては、それはつぎのような原因でしばしば起こる。すなわち、見る角度を変えるならば、ただひとつの実例からいくつかの意味があらわれ、それが教える真実は一、二に尽きるものではない。実例にひそむ意味を

看取するのを思索の基本にし、現実の多様性についての理解を重視するモンテーニュは、論理的な秩序のためにそれらを取捨選択するのを好まない。そこで、以前に指摘した平行構造のような現象が生じるわけである。ひとつの実例の前後で話題がまったく変わるのも、根本はおなじである。時として実例は前後の関連のなかでまったくちがったふたつの意味を表している。「馬車について」の章にもどって説明するならば、第2の部分の最後に記された円形闘技場の実例は、二重の意味を含みながら随想の屈折点になっている。第2の部分のテーマとの関連から見ると、それは君主による公金の浪費の実例として追加されている。しかし同時に、ギリシア・ローマ文化びいきのモンテーニュはそこにまた別の意味を感じとる。そして彼はこの実例の意味の変化を書き残しながら、随想の方向を急転させている。

こうした途轍もない企てになにか許しうるところがあるとするならば、創意と奇抜さに驚嘆させられる点であって、出費ではない。これらの空虚な行為にさえ我々が見出すのは、これらの時代のもつ、我々のとはちがった才気の豊饒さである。(p. 57)

こうして実例の新しい解釈によって、まったく内容の異なる随想が展開する。それが第3の部分であり、《l'autre en vigueur》「もう一方の足がびんびんしているということになろう」(p. 59, p. 242)までつづいていると考えてみよう。そうすれば、「新世界」が第3の論の末尾であり、同時に新しい発展の契機であることが明瞭になる。「新世界」はやはり二重の意味を提示しながら、随想の屈折点になっている。一方では、生まれたばかりのような若々しいアメリカ新大陸は、世界がだんだんと衰微しているという思想の愚かさを反省させる、明白な証拠である。と同時に、他方では、モンテーニュの日頃の強い関心によって、それは随想の方向をふたたび急転させる力として働く。第3の部分の「世界の衰微」という論点の影響も受けながら、おそらく彼の心のなかには、ヨーロッパ人の侵入が新世界の衰亡を早めるのではないかという不安が呼び起こされたにちがいない。彼は卑劣な侵略と残酷な略奪を糾弾し、新大陸の原住民を弁護し、賛美する論へ移ってゆく。それが章末までの第4の部分である。

以上が「馬車について」の章の展開であり、それぞれの内部では共通のテーマをもった四部から成っている。以上のように分けるならば、各部分を読むかぎりでは、難解である

と思う者は誰もいないであろう。しかし、通読したときには、随想の経路や方向を見失った人は少なくないにちがいない。たしかにこの章の動きと変化は自由奔放とも変幻自在ともいえよう。しかしながらそれはモンテーニュの随想の「自然な」展開なのである。各部分の変わり目で説明したような随想の飛躍や急転の類型は、第3巻の他の章にも見られるのみならず、以前の中期や旧来非個性的と烙印の押されている初期にさえ発見できるものである。このような点についての研究が不足していたために、あやまった解釈が生じている。たとえば、ヴィレーの説を検討してみよう(5)。

もはやこの章の構成は、この期のモンテーニュに常であるように（前章の解説を参照）自由、滑脱であるばかりではない。読者を驚かせ、迷わせるために、作者は無秩序を装っている。

つまりヴィレーは無秩序を装う技巧によってこの章が作られたと考えている。ところで、この章にたいする無秩序な印象は、私達の言う四部がそれぞれの内部では統一性をもっていながら、相互の内容では非常にちがっていることに由来する。無秩序を装う技巧はこれら四部を結びつけるところ以外には考えられない。しかしながら、私達の説明したように、各部分へ移る変化の仕方は読者に頓着しない個人性であろうとも、この章特有のものではない。初期からの進化の過程や同時代の章から類型が見つけられるように、モンテーニュの随想にとってはきわめて自然な飛躍であり、転進である。彼は普通の論述とはちがう、そのような個性を写しうる作品様式を追求してきた。もしヴィレーのように解するならば、『エッセー』の随想の奔放な展開はほとんどすべてこの章の技巧の類型と見なさなければならなくなる。彼の誤解の根底にはこのような側面についての認識不足がある。

自分の仮説を立証するために、つづいてヴィレーが『エッセー』のつぎの言葉を引用しているのも、やはり理解をあやまっている。

私は、技巧や虚飾を避けるあまり、別の欠点におちいることがある。

モンテーニュがここで「別の欠点」と言っているのは、無秩序を装う技巧を意味しているのではない。「技巧や虚飾を避けるあまり」無秩序を装うようになったと解するのは、まったく文意を誤解している。技巧や虚飾を避けて自然さを追求するあまり、別の欠点が

生じるようになったのである。当然このように理解しなければならない。そして、自然さの追求は『エッセー』における自己描写の問題から考えるべきであり、そうすれば「別の欠点」がどのような類かも知ることができる。

後期における自己描写の目標は、もはや最初の頃のように自分の性格とか肉体的な特徴を記述するのみではない。モンテーニュの野心は大きく、今や『エッセー』を書くこと全体が自己を描くことでなければならない。思想内容のみならず、随想の展開そのものも彼の個性に一致していなければならない。彼の自然な思考を描写していなければならない。矛盾しているようであるが、『エッセー』を書く行為にはこのような自然さの追求がある。つまりモンテーニュは、躍動的な意識の流れを『エッセー』に写すところまで、自己描写の方法を進めたのである。ところが、そこに作品としてひとつの問題が生じる。もちろん、言語によって思考し、表現するかぎり、言語のシンタックスを基礎にした習慣的な論理性に従っており、第三者に通じうる秩序の枠をまったく破壊するわけではない。しかし、それでもなお個人の意識の流れには、本人以外には理解できない飛躍や急速な変化や、全人格のかかわる内的な感覚によってしか秩序感をおぼえられないような、異質な観念の混交などがある。そこで、どうしても書かれた随想には、当人の意識の流れと一体になりえない読者が飛躍や無秩序と感じる特徴が生まれる。それが「技巧や虚飾を避けるあまり、別の欠点におちいる」という意味である。

ヴィレーは出典の研究が無秩序をつくりあげる技巧をあばいたと思込んでいる。しかし、その説明には難点が多い。彼によれば第3巻第6章の基礎はペトルス・クリニトゥスの『正しい規律について』、ジュスト・リプスの『円形劇場』、ロペス・デ・ゴマラの『インド通史』、これら三冊からテーマを借用した三種の随想である。まずこの説で理解できないのは、船酔いの原因についての探究の出発点になっている、ブルタルコスの『自然学的諸問題』がなぜ除外されたかという点である。ヴィレーはこの最初の部分を、『正しい規律について』にもとづく、私達の言う第2の部分に帰属させているが(6)、この捉え方はつぎのような理由できわめて不自然である。私達が区分した第2、第3、第4の部分は、それぞれの内部だけで見るならば統一的な秩序があり、ヴィレーの挙げている三冊と関連づけることができる。私達の言う第1の部分もおなじように併置されるべき資格をもっている。船酔いの原因というテーマを中心にした統一性があり、源泉として『自然学的諸問題』と関連がある。対等な独立性があり、しかもまったく異質な内容であるにもかかわらず、一方を他方に従属させるのはおかしい。さらにまた、読書からの刺激を著述の出

発点とし、しかもその事実を記しながら章をはじめるのは、初期から見られる習慣であり、第3巻第6章の冒頭についてもおなじように見なすべきであろう。順序を逆にし、最初の部分を第2の部分に帰属させなければならない理由はまったくない。

つぎにヴィレーは、《l'idée de luxe et de libéralité》が、彼の挙げた三本に由来する部分の似通った要素であると言う。最初のふたつの部分については、そのような説明の仕方もありえるだろう。しかし『インド通史』を借用した部分をこの観念で説明するのは、前二者にあわせるための誇張である。ヴィレーはごく一部の、メキシコの都市の壮麗さについての記述を抽出しながら立論しているが、彼自身の源泉の注釈からもわかるように、モンテーニュが『インド通史』を利用して書いたところはまだほかにも沢山ある。この点でも前二者とはちがっている。『インド通史』を利用した記述の目的は、明らかに、新大陸におけるヨーロッパ人の略奪を弾劾するためである。メキシコの都市の壮麗さに触れた部分は脱線的な一部にすぎない。それを誇張し、随想の展開に占める比重のちがった前二者と結びつけ、共通の要素であると主張するのはまちがっている。

ヴィレーのあやまりはけっきょく随想の展開についての読解が不十分であるのが原因である。『正しい規律について』と『円形劇場』と『インド通史』からの借用を基礎にしながら、モンテーニュは《l'idée de luxe et de libéralité》が共通するこれらからまったくちがった方向へ発展させた三種の随想を、読者を驚かせ、迷わせ、無秩序を装うために技巧的に綴りあわせた。ヴィレーはこのように推定する。しかし、随想の内部の諸要素が展開のなかでどのように作用しあい、どのように関連しているか、この点についての把握を怠っている。メキシコの都市の壮麗さについての部分が量的には些細であろうと、『インド通史』を利用した随想のすべてがここから生まれているならば、彼の立論の欠点は小さい。ところが、前二者とメキシコの都市の実例が随想の展開に果たしている役割ははっきりとちがっている。君主が珍しい動物に車を引かせた実例からは、私達が以前の分析で指摘したように、モンテーニュは公金の使用における君主の徳という問題を読みとり、華麗な円形闘技場の描写からは、これらの時代の才気の豊かさに比べればのちの人間は衰微したばかりなのかという議論を引き出した。『エッセ』のなかには実例を解釈する思考の跡がそれぞれ明瞭に残っている。実例のふくむ意味を汲みとろうとする思考が以下の随想を生んだのである。したがって、三種の書物から「テーマを借りたみつつの冥想」というヴィレーの説明は、表現の不注意でないとするならば、典拠の評価をまちがっている。モンテーニュは珍しい動物に引かせた車の話や闘技場の描写を借りてはいるが、「テーマ

を借りた」のではない。テーマは彼自身から、すなわち、実例のふくむ意味を読みとるのを基礎にした「エッセー」の実践から生まれたのである。それは初期からおこなわれている行為であり、彼の思索の基本である。『正しい規律について』も『円形劇場』も読まないでこのように結論するのは、僭越であると非難されるかも知れない。しかし、源泉についてのヴィレーの詳細な注釈と比べあわせてみても(7)、実例の解釈から発展した部分においてはもはやこれらの書物は利用されていない。この事実と私達の研究とにもとづいて、正当な判断は可能なのである。

今のべたような「実例——→解釈——→随想の展開」という関連と比較するならば、メキシコの都市の実例が果たしている役割は明白な相違がある。以後の随想はそこに源があるのではない。前二者のように明瞭な関係ではなく、モンテーニュ風の個性的な飛躍をした脈絡がひそんでいるのではないかと疑ってみる必要もない。『エッセー』を書きはじめ以来、実例の意味を考え、それにもとづいて思索を展開するのは、彼の哲学の基本であり、そこにはけっして飛躍や曖昧さはない。これらの特徴は「実例——→解釈——→随想の展開」という基本的な「一片々々」の変わり目や相互の関係に見られる現象であり、一片の内部はみごとな思考が「一体をなして」いる。したがって、メキシコの都市の実例が『インド通史』を借用した随想のなかでもっている価値を判断するのに余計な詮索はいらない。この部分のテーマは壮麗なメキシコの都市が引用される以前にすでに決まっている。「アメリカ」という論点が導入されたのは、若々しい新大陸が人間のちっぽけな知識で世界の衰微まで断定する愚かさを反省させる格好の実例だからである。と同時に後者の内容が影響し、ヨーロッパ人の進出が新世界の滅亡を早めるのではないかという不安がそこから来ていた。つまり、私達の言う第3部から第4部へ移る際に、新世界征服の弾劾と原住民弁護という以後のテーマはほとんど決まっていたのである。したがってメキシコの都市の実例は君主の車の話や闘技場の描写とはちがひ、随想の展開に占める役割ははるかに小さい。それは第4部では脱線的な一部にすぎない。新しいテーマが決まり、実例をあげながら随想を展開しようとしたとき、おそらく以前の内容の影響を受けたのであろう。第3部は非常に短いのであるから、第2部の終わりでモンテーニュが長々と剽窃した円形闘技場の壮麗な描写のなごりが随想の流れに作用し、『インド通史』からの借用をメキシコの華麗な都市の実例から始めさせたとしてもふしぎではない。原因はとにかくとして、第4部の最初から読むならば、この実例が以下の展開の源であるというヴィレーの説のあやまりは、簡単に理解できるはずである。

仮にヴィレーのように、共通な要素のあるみっつのテキストからまったく異なった方向へ発展させた三種の随想を、無秩序を装うために技巧的に綴りあわせたと推察すべきであるとしても、彼の考察には大変な不備がある。簡単な作業とは思われないのに、それがどのような技巧かまったく考えていない。第1部から第2部への飛躍以外は、読者は眼前の随想を追っているかぎり、展開になんら不自然さを感じないであろう。直前直後のつながりだけを見ているかぎり、自然な脈絡のように受けとるにちがいない。ところが、以前の内容の全体とかその経路とか、あるいは読了後章の主要なテーマは何かなどと思返すと、読者は混乱しはじめる。別々に書いた随想をそんな風に綴りあわせる技巧が可能であろうか。可能であるとしても、ヴィレーのモンテーニュ観を根底から変えなければならないであろう。彼の説は、つまりめ技巧に大変な労力を費やしているモンテーニュを想定しなければならなくなる。しかも、ヴィレーが具体的に分析をすすめるならば、彼の言う「技巧」とおなじ類型を他の章のあちこちに見出すはずである。したがって『エッセー』全体で無秩序を装う技巧を弄しているモンテーニュを結論しなければならなくなる。

ヴィレーが随想の展開の特徴を研究した上で章の構成を分析しているようには思われない節は、そのほかにもある。たとえば、彼はつぎのように推論をすすめている。

しかしモンテーニュは選んだみっつのテキストに共通なこの特徴を強調するかわりに、それぞれに結びつけたみっつの随想をまったくまちまちな方向へ発展させている。その結果、末尾のつながったみっつの章のようなものができあがった。

第3巻第6章だけを検討しているかぎり、多く人はヴィレーの見解が実状とよく合致しているように思うであろう。しかし、『エッセー』全体における随想法や思考法を調べてきた私達は、実状の分析は似ていても、評価の仕方はまったくちがう。まずヴィレーは、モンテーニュが選んだテキストに共通な特徴を捉えながら章を作らなかつたのをふしぎがっているようであるが（すくなくとも彼の立論のひとつの拠り所にしている）、この章にかぎらず彼はそのような書き方をしない。初期の多くの章のなかに少数、摸索期の思考法として、集めた実例の共通性に立脚しながら論をつくろうとしている例があるにすぎない。彼の随想がみずからの流れをもつようになると、そのような作品の作り方はしていない。したがって、選んだテキストに共通な特徴を強調していないのは、第3巻第6章の特異性としては、まったく考慮に入れてはならない。さらにまた、選んだテキストは共通性をも

っているが、発展の方向がまちまちであるというのも、『エッセー』ではごく普通の現象であり、この章の個性と見なすことはできない。すでに説明した「エッセー」という思考やこの対象である実例の性格を思い出していただきたい。実例は現実とおなじように、見る角度とか考える側の問題意識が異なれば、汲みとる意味もさまざまに変わってくる。現実の多様性に従順なモンテーニュは、一面の意味のみを読みとって済ますのを嫌うところがある。したがって、共通な特徴をもったいくつかのテキストから、その数だけまちまちな方向へ発展している随想があろうと、同一の実例からまったく内容のちがう随想がいくつか生まれていようと、『エッセー』にはありがちな現象である。そのために、ヴィレーの思うほど無秩序が生じるわけではない。『エッセー』においては実例が随想のなかでもつ意味は多価的であり、「エッセー」という思考はそれに従っているのを知りさえすればよい。第3巻第6章では、第2部と第3部をつなぐ円形闘技場の実例と、第3部から第4部への変り目にある新世界という実例が、二重の意味をもっているのに気づきさえするならば、随想の展開の自然さを理解できる。したがって「末尾のつながったみつつの章のようなもの」というヴィレーの表現が、形容としては実状に合致しているとしても、別々に書かれた三種の随想が綴りあわされたと結論する根拠にはまったくならない。

以上ヴィレーを詳細に批判しながら、『エッセー』全体にわたる随想の展開それ自体についての研究が、従来の説のあやまりを正しうる具体例を示してみた。特に、『エッセー』の源泉に関する実証的な研究が、かえってヴィレーに理解をあやまらせているところには、重要な教訓が隠れていると思われる。執筆に際して典拠になった書物の発見は確かな事実ではあっても、それらは所詮ばらばらな要素にすぎないのであり、単純な適用によって随想の流れが説明できるわけではない。随想の流れは、そのダイナミズムの内側から眺める工夫なしには捉えられない。実証的な研究は、それにふさわしい、テキスト自体の内的な研究とうまく一体にならなければならない。『エッセー』の源泉についての研究も、随想の展開についての内的な研究と相互に寄与しうるであろう。たとえば、私達が明らかにしたような随想の流れを、さらに、源泉になっている書物のコンテキストと比較するならば、その特徴をいっそうよく把握し、内面的な動きをいっそう生き々と再現できるにちがいない。しかしながら、テキスト自体についての研究と結びつけるのを怠るならば、章の構成についてのヴィレーの立論のように、実証的な研究が内的なものの理解をゆがめることも大いにありうるのである。

一方、ヴィレーのような見解とはまったく正反対の意見もある。すなわち、内部の諸部

分が緊密に関連している秩序があり、全体を考えた厳密な構成が存在すると主張する人たちもいる。その一例として、エチアンプルの分析を検討してみよう(8)。

彼の推論の根底は、私達の言う第2の部分と第4の部分のテーマについての解釈にある。彼によれば、前者は公金の使用や浪費の問題をめぐって「我々の」王たちを、後者は「我々の」植民地政策を断罪するために書かれたのであり、両者は内政から海外政策へ発展する緊密な関連をもっている(Cf. p.267, p.269, p.270, p.272)。私達はふたつの部分のテーマについては異論はない。論じられている問題の性格上第2部は、たとえモンテーニュ本人が否定しようとも、同時代のフランス王たちにたいする批判がこめられていると取られかねない。あるいは、彼にそのような意図があったことも十分に想像できる。また、第4部が例に挙げているのはスペイン人ではあるが、エチアンプルがイタリック体で強調しながら論考しているように、モンテーニュは「我々」ヨーロッパ人の侵略と破壊として非難する書き方を選んでいる。しかしながらこれらの事実は、章について秩序や構成の存在をなんら保証するものではない。私達の見解では、『エッセー』の記述には作者の内部の躍動的な意識の流れに従おうとする、自然さの追求がある。しかし、このような態度で書きすすんだとしても、著述の関心と意図には要所々々でひとつの方向性と秩序が生まれるのであり、ある部分とつぎの部分の中心的なテーマを分析し、いわば外部から眺めなおし、比較したときに、論理的な発展性を仮定できるのは当然である。どのような展開のなかに述べられているかを除外し、部分的な抽出のみにもとづいて秩序とか構成を論じてはならない。第2部と第4部のテーマを解釈したエチアンプルの魅力的な論にまどわされ、章の秩序と構成に関する分析と推論のあやまりを看過してはならない。実際に彼の論証においては、非常に大きな前者の魅力と説得力が波及的な影響をおよぼしながら、後者についての結論が妥当なように思わせているからである。それ以外ではほとんど自己の仮説にとらわれた誤解なのであるが、章の内容と展開の細部まで思い出しながら論考を読むのは相当に困難であるため、その説得力になかなか抵抗できないのである。

エチアンプルの結論はきわめて明快である。「馬車について」の章には力強くかつ繊細に織りなされた、大胆で明晰なひとつの思考があり、長さが厳密に等しい、均整のとれた二大部分から構成され、それぞれの部分は危険な主題に先だつ曲がりくねった導入部(私達の言う第1部と第3部にあたる)と、機知に富んだ結びとのあいだにはめ込まれている(Cf. pp.273-274)。この結論を立証する彼の細部の分析にたいする批判に移る前に、ふたつの疑問をのべておこう。まず、些細な点についてすこし意地の悪い反論からはじめるな

らば、長さが厳密に等しい二大部分から成ると彼は主張しているが、1588年版では前半部は後半部より3、4ページほど短い。晩年においてモンテーニュは両者の量を等しくするための計算をしながら、加筆したのであろうか。それならば『エッセー』の著者にたいする見方を相当に変更しなければならない。つぎに、第2部と第4部が権力にたいする批判であるのはまちがいないとしても、これらのテーマとモンテーニュの言論は、苦勞して曲がりくねった導入部をかぶせなければならないほど危険なものであろうか。『エッセー』の他の箇所にはもっと危険な思想がいくつもある。この章にかぎって構成の技巧によって隠さなければならないとも思われぬし、導入部がふたつの部分の危険性をとくべつに緩和しているようにも思われぬ。

エチアンプルの仮説についてのより詳細な批判に入ろう。第3巻第6章をふたつに分けるべきであるならば、彼のような区分になる。したがって、二大部分に分け、それぞれが《une introduction》ではじまり、《une conclusion》で終わるという捉え方(Cf. aussi p.268)が適切であるかどうかを検討してみなければならない。まず、順序は逆になるが、第3部は第4部の導入部にすぎないのであろうか。すでに説明したように、前者は円形闘技場の実例が第2部にたいするのとちがった意味をもちながら、世界の衰微という論点があられる部分である。そのため第2部との区切り目も明瞭な一箇所を指摘できるわけではない。私達は移行部と見なすのが正しいと信じているが、第3部は独立性の弱い、短い論であり、私達とおなじ分析から第4部の導入部にすぎないという解釈へ発展させようとも、いちじるしいこじつけには見えない。その誤りについての判断は微妙である。議論は主観的な応酬にならざるをえないであろう。したがって、エチアンプルの説が正しいとしよう。しかしながら、第1部が危険な主題への「曲がりくねった入り口」(une sinieuse entrée, p.273)であると解釈するのは、妥当ではない。第1部はモンテーニュの思考法にそくした一貫性と独立性をもっている。主題は船酔いであり、彼はプルタルコスの説に対抗しながらその原因の探究を試みている。読書で出会った賢者の意見を自分の知識と体験にもとづいて検討してみるの、彼が初期から実行している、思索を刺激し、著作を始動させるひとつの方法である。もちろん、途中には脱線的な発展もあり、自己描写や自己認識の記述もあるが、いずれも『エッセー』においては普通の現象であり、「曲がりくねらせる」作為の結果ではない。船酔いの原因についての探究を機軸とした展開である。つぎに、第1部と第2部との関連から見れば、すでに述べたように、連想的な飛躍の契機になった「馬車」の語以外には、両者のつながりはない。この点で、明らかに、第3部

と第4部との関係とはちがっている。第1部の内容には、短いとは言え、それなりの独立性があり、しかも第2部との関係はきわめて特異で些細である。前者が後者の付属部であるとは言えない。たんに先行している部分であるにすぎない。以上のような理解の仕方がモンテーニュの思考法と随想法にそくした、自然な捉え方である。それでもなお多くの人の心のなかには、第1部を第2部に帰属させ、エチアンプルのように解釈したい気持ちが残るであろう。確かにそのほうがすっきりとゆく。しかしながら、それだからこそ注意しなければならない。彼の見解の方へ人々を傾かせるのは、随想の分析の正当性ではなく、明確な構成の発見を喜び、安心する近代合理主義者の心理と偏見なのである。私達の分析にはこのような強力な味方はなく、自分の仮説にあわせてこじつけた不自然さをひとつひとつ指摘する以外にない。したがって、その作業をつづけよう。

前半部と後半部にはそれぞれ《une conclusion》(p.268)、あるいは《une piquante conclusio verborum》(p.274)と呼ぶべき箇所が存在しているであろうか。そして、ふたつの主要部が《une introduction》とのあいだにはめこまれた(p.273)構造になっているであろうか。これらの問題についての検討には、ひとつ困った点がある。エチアンプルの説明は、前半部のどこを結論部と考えているのか不明瞭である。彼の書き振りから推察するならば、円形闘技場の描写に関連した全体ではなく、最後にある、「こうした途轍もない企てになにか許しうるところがあるとするならば、創意と奇抜さに驚嘆させられる点であって、出費ではない」という文章らしい。たしかに、分析によって抽出し、この文章の書かれている位置とその内容だけを注目するならば、結びの部分になる資格をそなえているように思われる。実は、細部のことになるので今まで触れなかったが、私達の言う第3部はここから始まる。後につづく文章も引用しながらすでに説明したように、実例の意味を解釈する思考法によって随想の方向が変化してゆくからである。エチアンプルの区分や従来のおよそどの版の段落改行のように、闘技場の描写の後にある文章を分断するのは、初期以来のモンテーニュの基本的な思考法をはっきりと理解していないからである。「出費ではない」という表現を根拠にして第2部の結びの文章と見なすのは、あまりにも単純である。モンテーニュは前の部分と関連づけながら新しい展開を起こしているのであって、すでに彼の関心は「創意と奇抜さ」のほうへ移っている。彼の思考法についての研究のほか私達の解釈の根拠を補足するならば、まずひとつは、「出費ではない」という語句以外に、第2部の内容と関連した表現はもはやまったく見られないからである。さらにひとつの理由は上記の文章以前にある。闘技場についての記述は「しかしながら」(C'estoit

pourtant une belle chose) によって導入されており、「出費」を批判する語調はほとんど感じられない。「創意と奇抜さに驚嘆させられている」書き振りがはるかに濃厚である。闘技場の描写は公金の豪華で空虚な使用の実例としての役割をもってはいるが、すでにちがった意味の方向へ傾きはじめている。モンテーニュの意識の内部においては、この記述の頃からすでに随想の方向が変化しはじめていたであろう。このように考えてまちがいはない。したがって、以上のような二重性と意味の動揺のために、第2部についての結論部は存在しない。そのようなのが『エッセー』の随想であり、それが自然な読解である。

後半部についてはエチアンプルは、「我々の馬車に話をもどそう」(p. 72) 以下の記述を結論部と見なしている。この意見については、ほとんどの人がまったく当然であると思うにちがいない。もちろん、それ以上に解釈をすすめようとしなければ、私達も異論をとねえるつもりはない。しかしながら、後半部の最初と関連づけ、主要部をはめこむ枠をなす明確な構成であると結論するのは、あやまりである。章末の逸話は新大陸の実例であり、スペイン人の侵略がからんではいるが、断り書きのとおりなんら前の部分からの発展ではない。そして、「話をもどす」先は後半部の最初ではなく、第2部の冒頭にある「馬車」以外にはありえない。したがって、この点を考えるならば、章末の記述は後半部の結びとしての資格を半ばうしなう。「新大陸の文化」や「スペイン人の侵略」などの面では後半部と関連しているが、一方では、前半部に話をもどしながら章を締めくくっているからである。さらに、つぎの点に注意するならば、エチアンプルの解釈のあやまりに気づくであろう。「この話に入る切っ掛けになった華麗さと豪華さについては」(p. 71) という断り書きではじまる部分も、おなじように、なんら先行部からの発展による記述ではない。それでは、後半部の主題が導入された「切っ掛け」は何だったのであろうか。まず思い浮かぶのは、後半部の最初に紹介されたメキシコとクスコの都市の「華麗と豪華さ」である。それらでなければ、闘技場の描写までさかのぼらなければならない。のちに再度検討するので、より詳しい分析は省略するが、いずれにしろ、導入部と呼応しながら後半部をはめこむ枠をなす結びとしては、終わりから二番目の、ペルーの道路の話がよりふさわしいのであり、章末の逸話は後半部についてではなく、章全体についての結びなのである。

エチアンプルの説にたいする反論は以上で十分であろう。彼の分析と解釈のさらに細かい点を批判するのは省略することにしよう。彼はいくつかの特徴を随想の流れから切り離して抽出し、自己の固定観念にあわせた評価と推論によって明確な構成を捏造したのであ

る。ヴィレーの説に不満足な一方の研究者たちのおちいるわなが、そこにある。彼らに章の構成を誤解させる原因は、ひとつの章には全体に共通した主題とか一貫した思想の表明とかがあるにちがいないし、また、なければならぬ、という近代合理主義の固定観念である。彼らはすっきりとした、教科書どおりの構成に還元できなければ、『エッセー』をおとしめているようで安心できないのかも知れない。しかしながら、以前から指摘してきたように、モンテーニュの思考法や随想法、世界観や人間観、認識論や哲学観など、どの側面から考えてみても、章が統一的な秩序をもっていないことこそ『エッセー』にふさわしい。どのような面においても、「共通性」とか「統一性」とか「全体性」とかいう性質ほど彼に似つかわしくないものはない。第3巻第6章についても、全体的かつ最終的な結論は何かとか、一貫している主題や思想は何か、という風に追求せずにはおれない合理的執着や近代的偏見が、随想の展開についての読解を難解にしているのである。実際は、私達が分けたよっつの部分は、それぞれ十分な秩序もあれば、明快でもあり、随想の変わり目の個性を心得ていさえするならば、なんら困惑する必要はない。それ以上の全体的な統一性を求めさえしなければ、第3巻第6章はなんら無秩序でもなければ、難解でもない。モンテーニュ風の随想の流れを素直に把握しさえすれば良いのである。

それでは『エッセー』の章には、構成の趣向はまったく存在しないのであろうか。この点について自説をのべることに移ろう。第3巻第6章についてまだ私達は恣意的でない、自然な分析の仕方を示しただけであった。私達が分けたよっつの部分は、個々に見ればそれぞれのテーマをもった秩序があり、一方、全体の関連性を捉えようとするならば、無秩序のように思われてくる。けっきょく『エッセー』の章はこのような秩序と無秩序との躍動的な混交なのである。そして、モンテーニュ流の随想を追うすべに習熟しさえするならば、これらの自然な混交のほかにも、構成のための作為があるかどうかが見えてくる。才気ばしった、きわどい分析をしなくとも、構成の趣向に気づくことができる。それが「円環の構成」である。作品のあり方と自己の思想の根本がからんだ秩序と無秩序という性格を内に含みながら、なおかつ章の全体を総合する趣向として、モンテーニュは円環の構成を考えついたらしい。実際にそれがどのようなものなのか、検討してきた第6章にそくして論をすすめよう。

すでに説明したように、私達の言う第4部へ入るまでは自然な展開であり、構成の技巧の跡はない。それが見られるのは、章が終わりに近づいてからである。そのときモンテーニュは随想の流れを遡行しはじめ、話題を章の最初の方へもどしてゆく。そして最後に

は、章の末尾が同一の話題によって章の冒頭と結びあうようにする。「馬車について」においては、このような遡行は三段階にわたっている。一度目はつぎのように始まる部分である。

メキシコ王国の人々は、彼の地の他の国民より文化や芸術がいんぶんかすすんでいた。したがって彼らは我々とおなじように、宇宙は終末に近づいていると判断していた。そして、我々のもたらした荒廃をその兆候であると見なした。(p. 70)

第4部のテーマである「我々のもたらした荒廃」についての弾効が終わり、このような書き出しとともに話題が急転する。おなじ新世界についてはあるが、以前とはまったく無関係に、メキシコ国民の世界観と終末観の思想が紹介される。そしてその内容は、ローマの円形闘技場の実例から転じ、終末論的思想を批判した第3部と照応している。「我々とおなじように」という語句は、遡行の関連づけをおこなおうとする意識によって書かれたにちがいない。

つづいて、おなじように話題が急転する。その理由も作者自身が示している。

この話に入る切っ掛けになった華麗さと豪華さについては、ギリシアもローマもエジプトも、有用さや困難さや高貴さなどのいずれをくわえて評価しようとも、その仕事のどれひとつとして、ペルーに見られる道路に比肩させることはできない。(p. 71)

この作為的な遡行によって、円形闘技場およびそれ以前の華麗さと豪華さとの対応が生まれる。ヴィレーは、「この話に入る切っ掛けになった華麗さと豪華さ」という言葉から、メキシコの壮麗な都市の実例が新世界についての随想の源であると信じたのかも知れない。しかし、そのような発展と展開にはなっていないという、すでに説明した理由のほかに、この文章から見ても、ペルーとの比較の対象はギリシアやローマやエジプトなど旧大陸の文化であり、私達の言う第2部にあたる。ところで、第3部ではなく第2部が第4部の「話に入る切っ掛けになった」とモンテーニュが書いているのは、以前の私達の分析をなんら否定するものではない。闘技場の実例を新しい視点から解釈することによって第3部が生まれ、急テンポの展開で新世界を例証とするに到ったのであり、私達はこの短い部分を

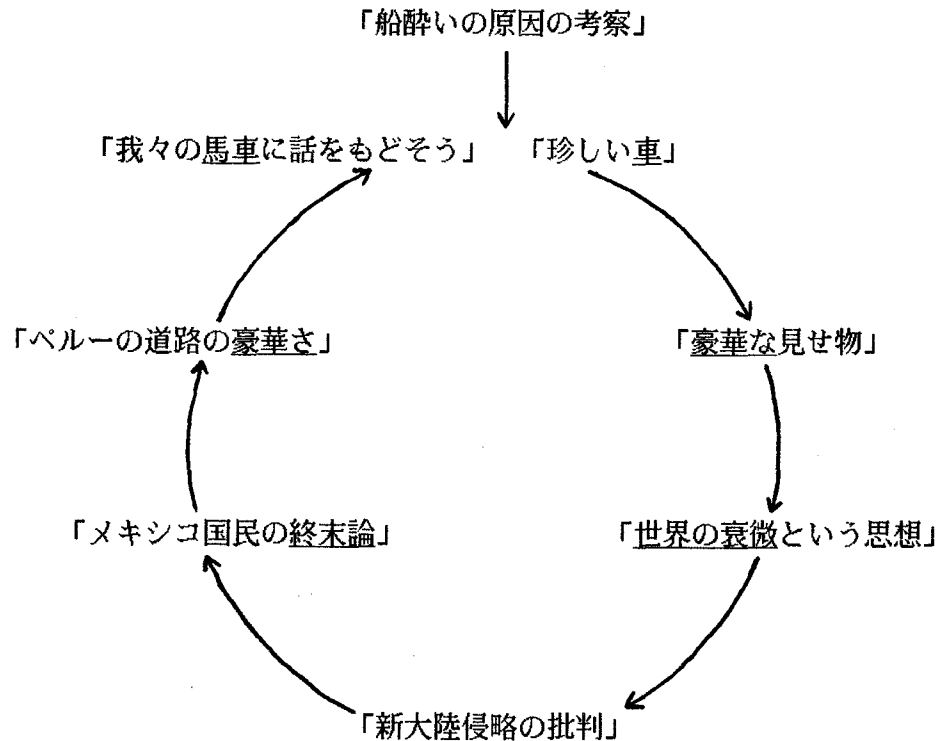
独立性の弱い移行部であると見なした。したがって、新世界について話すようになった最初の切っ掛けを、闘技場の実例のふくむ「華麗さと豪華さ」から説明したとしても、なんらふしぎではない。

最後の遡行はいっそう唐突で、いっそう作為的である。「我々の馬車に話をもどそう」という一文によって遡行がおこなわれ、しかも、すぐさま「輿」の話に変更される。

我々の馬車に話をもどそう。彼らは馬車や他のあらゆる乗り物の代わりに、男たちの肩にかつがれて運ばれる。(p. 72)

このようなこじつけによって、モンテーニュは話題を第2部の最初までもどす。君主たちが珍しい動物に引かせた車の実例以外には、遡行の先は考えられない(なお《coche》というフランス語を「馬車」とか「車」とか訳しているが、「輿」はまったく別の語である)。

したがって第3巻第6章「馬車について」は三度の作為的な遡行によって回帰の動きがつくられ、円環の姿にまとめられている。ただ第1部はこの構成からはずれている。第1部から第2部へは連想的な飛躍によって変わり、あとの連続的な展開とは性格がちがっているために、円環のなかにおさめるのが困難だったのかも知れない。あるいは、第1部は章全体の導入部や枕の役をつとめているとも考えられる。いずれにしろ、三度にわたる作為的な遡行が円環の構成の趣向を明白に示している。図示してまとめるならば、つぎのページようになる。



章題についてのヴィレーの疑問も同時に簡単に解消する。各部分に関連づける共通性を示す、たとえば「奢侈について」などの題名をつけずに、モンテーニュはなぜごく一部を占めているにすぎない「馬車」を章題に選んだのであろう。ヴィレーはこのようにふしぎがっている。彼はそこにも眩惑的な意図があるのではないかと疑っているようだ。しかし、上記の特徴を把握するならば、明白に理解できるはずである。たとえ量はわずかであろうとも、構成の要を表現するために「馬車について」と題するのは十分な理由がある。さらに、このような章題のつけ方はこの章だけではない。第3巻第11章も、量的にはごく些細な部分ではあるが、円環の構成の要であるために、「跛について」と題されている。しかもおなじような趣向はすでに中期から実行されている。「スプリナの話」(II-33)という題名はまったくおなじ構造と構成にもとづいている(第2章第4節参照)。エチアンプルは、内容の危険性をやわらげるために、当たり障りがなく、しかも人をあざむくような章題が選ばれたと推察する(p.273)。そして、第3巻の同様の例として、第11章と第5章を例証にあげている。第11章は奇跡と魔女狩りについて批判した、第6章よりもはるかに危険な章であり、有力な例証である。しかし「ウェルギリウスの詩につ

いて」(III-5)と題することが、性についての大胆な議論をどれほど隠す働きをしているかは疑問である。ウェルギリウスの詩自体がエロティックなところがあり、モンテーニュの論も直接ここから発展している。したがって第6章や第11章より眩惑的な効果ははるかに少ないからである。さらに、私達の指摘した「スプリナの話」という題名と章の内容を考えあわせるならば、いっそう疑問が増す。この章は欲望や快楽が主題の一部をなしてはいるが、章の構成や題名によってヴェールをかぶせなければならないほどきわどい記述であるとはとても思えない。しかも、スプリナの話は、快楽の原因である自分の魅力を否定した例であるとは言え、ふたたび欲望や快楽に焦点をあてている。カエサル寛容や野心という話題へ脱線したまま章を閉じるほうが、前者を曖昧にする効果は大きいはずである。と言っても、私達は、モンテーニュは自分の意見の危険さや表現の大胆さを韜晦する工夫などはしなかった、と主張するつもりはない。その可能性はおおいにありうる。しかしながら、この理由づけはどんな問題にも簡単に利用できる万能薬である。十分な調査と綿密な作品分析にもとづいて使わなければならない。16世紀は、一方では、たしかに厳しい弾圧の世紀である。しかし、一方では、中央集権の機構がまだ成熟していないからであろうか、前者と不釣り合いで矛盾していると思われるほど自由なところがある。まずこれら両者の側面をしっかりと把握していなければならない。そして、さらに、『エッセー』全体について、権力および社会の慣習の検閲的な視線が想定される箇所におけるモンテーニュの表現の仕方を分析し、研究しなければならない。私達はこのような調査と研究をおこなっていないので、エチアンプルの推察の可能性を否定しようとは思わない。しかしながら、私達の研究とつき合わせながら考察した範囲内においては、章題についての彼の仮説は十分な根拠をもっていない。

さらに円環の構成はほかの章からも立証される。すでに私達は中期の作品について、末尾と冒頭的话题を重ねながら章を閉じる趣向を指摘した。随想の展開が紆余曲折を増してくるとともに、モンテーニュはこのような秩序づけを思いついたらしい。後期の13の章についても同様の趣向が発見される。第6章のほかに、第1章、第7章、第9章、第10章、第11章が章の末尾と冒頭とを結びつけた構成である。第5章と第12章もおなじ傾向に見えしう。随想が同一のテーマにそって展開し、ほとんど脱線のない第3章と第4章は、この問題から除外される。けっきょく13の章のうち、円環の構成をとっていないのは第2章、第8章、第13章のみである。

この頻度以外に、作者自身の言葉も私達の推察を立証している。中期の章においては、

「最初の話題についてさらに一言つけくわえるならば」(I I-16, pp. 430-431)とか、「ところで、中断した最初の話にもどるならば」(I I-33, p. 557)などの語句が、章を結ぶとき冒頭との関連を意識していることを教えていた。第3巻の章にもやはりおなじような表現が見られる。すでに例示した第6章以外においても、「しかし、始めたところで終わるために言うならば」(I I I-7, p. 79)や「これらの実例は私が最初に言ったことの証明にならないであろうか」(I I I-11, p. 266)などの、円環の構成を意識した語句が残っている。

以上を考えあわせるならば、章をひとつの世界として捉えはじめたとき、モンテーニュは円環の構成を思いついたらしいと結論できるであろう。しかし、末尾と冒頭とを重ねあわせながら章を結ぶだけで、円環と言えるであろうか。当然このような疑問が出されるであろう。そして、もし円環を図形としてのみ思い描くならば、この形容はますます不適合に思われるであろう。一方、運動をくり返しながらも、最後には最初のところへもどる回帰の運動のイメージとして円環を理解するならば、『エッセー』の章に適用してもおかしくはない。『エッセー』の随想は運動性がおおきな特徴であり、モンテーニュは意識的に章尾と冒頭とを結びつけているからである。おそらく彼は円運動を想像しながら、そのような終わり方をしたにちがいない。三度の作為的な遡行によって回帰の運動をより著しくし、より円形に近づけている第3巻第6章が、彼の意識を明瞭に示している。たしかに、秩序と無秩序の混交した運動体である章を円環に閉じ、自由奔放な随想を包みこむ小世界を作りあげるの、きわめて『エッセー』にふさわしい。私達は本節のはじめにおいて、作品の個性と作者の思想から判断して技巧的な章の構成が存在しがたい理由を説明した。それらのいずれにも抵触しない、いかにも『エッセー』らしい趣向である。

円環の構成はどのような意味をもっているのだろうか。当然つづいて考えなければならぬ問題である。それをさぐる観点はいくつかある。もっとも一般的には、たとえばユングの『心理学と錬金術』にある多くの実例を参照しながら、「円」とか「輪」の象徴的な意味を考えてみるのも良いであろう。あるいは、フランス・ルネサンスの他の作品において「円」や「円運動」についての意識を研究し、比較してみることもできよう。たとえばロンサールは、巨人族のオリンポス山襲撃を敗退させるのに功績があった報奨として、ジュピターが星たちを天に固定し、車輪状に公転するようにしてやった、と歌っている(9)。それがなぜ報奨なのか、この時代の「運動」についての思想がそこにある。つまり、すべての存在物は有為転変のなかにあるという世界観の一方に静止の神話があって、不動

なものこそ完全であり、運動は不完全なものの属性であると思われていた。そして、円運動は始めも終わりもないがゆえに、静止にもっとも近く、もっとも完全な運動であると見なされていた。したがって、それまで偶然的な動きをつづけていた星たちは、ジュピターによって天球に固定され、地球の周囲を回るようになり、もっとも完全な円運動を付与されたわけである。章という小世界を円環に仕上げるモンテーニュの趣向は、このような同時代の思想と比較できるかも知れない。しかし本稿では、円環の意味を解説する出発点として、ただ『エッセー』の内部にのみ考察を限定することにする。まずその範囲内で、円環の構成が作者のどのような意識の表現であるか考えてみよう。

モンテーニュは自分の作品について語るのが好きな人であるが、円環の構成を説明した箇所はない。円についての言及も皆無に近い。したがって直接『エッセー』の文章から円や円環の構成に関する彼の意識を知るすべはない。しかし、章を円環に仕上げる趣向が存在するのは確かなのであるから、『エッセー』を読む角度を工夫するならば、どこかに対応する脈絡が見つかるはずである。それは恐らく「運動」の価値評価の脈絡であろう。円環を主として円運動のイメージで捉えるならば、モンテーニュの思想と「運動」はいろいろな意味でかかわりが深く、思想的な表現の裏にその価値評価の体系を読みとれるであろう。そうすれば、円環の構成の意味を解説する道がひらけてくるにちがいない。

私達は以前から彼のさまざまな思想の根底にある、多様性と流動性という特徴を重視してきた。運動についての意識の研究も当然ここから始まる。世界観や人間観の中心にある流動性の認識を表現した文章は、どの執筆期にも多く見られる。たとえば、

我々は欲望の赴くままに、ふらふら右へ左へ、上へ下へと、折々の風に運ばれてゆく。それが我々の普通の態度である。欲しいものを考えるのはただ欲するその瞬間だけであり、置かれる場所ごとに色を変える例の動物のように移り気である。いま立てた計画をすぐに変更し、かと思えばまたもとに戻す。見られるのはただ動揺と無定見ばかり。(II-1, p. 4)

世界は永遠の変動にほかならない。そこではすべての物が絶えず動いている。大地も、ユーカサスの岩も、エジプトのピラミッドも、世界全体の運動とそれ自身の運動によって変化している。(III-2, p. 189)

すべての存在物はたえず動き、たえず変化している。しかし、それが現実であり事実であるとしても、人間はただ現象に服従するだけの存在ではないはずである。最初の引用文にはモンテーニュの非難が感じられるようにも思われる。理性によって人間は不変の真理の世界に到達できるはずであり、真理を認識した、ゆるぎない信念と意志によって自己を陶冶し、有為転変の世界を越えられるはずである。一方では彼もそんな風に考えるときがあるようだ。一般とは対照的に、確固たる秩序や恒常性をもっているのが哲人の知恵であり、賢者の生活である。

ある種の法と規律を自分の頭のなかに定め、打ち立てた人であるならば、我々は彼の人生のあらゆる局面において、ひとしい生活態度とものごと相互の確実な関連と秩序が輝くのを目にするであろう。(I I - 1, p p. 4-5)

関連と一致は我々のような平凡で卑俗な魂のあいだには存在しない。知恵は堅固な、全一な建造物であって、それぞれの部分がみずからの位置をもち、それぞれの特徴をおびている。(I I I - 13, p. 22)

モンテーニュも変化と動揺の現実を超越した、このような秩序と恒常性の世界を考えている。ここに運動の価値評価のひとつの対がある。しかし後者はけっきょく憧憬にすぎないのであり、彼はこの方向を目指すのが一般の正しい道であるとは思わない。なぜなら恒常性は現実の人間においては似て非なるものに墮落するからである。モンテーニュにおいて静止は正と負の評価の二義性をもっている。理想的恒常性の対極に、その現実態として、停滞やよどみという静止がある。現実の人間や社会では、静止は逆に警戒し、避けなければならない。

なにかひとつの生活法を役立たせたいと思うならば、続けるのを避けることだ。さもなくば我々は硬化し、活力を鈍らせてしまう。六か月もすればあなたの胃はすっかり療法に慣れてしまって、あなたの収穫と言え、ほかの使い方をすれば必ず害があるという、自由の喪失だけであろう。(I I I - 13, p. 70)

青年は自分の規律を破って活力を目覚めさせ、自分の力がかびて鈍るのを防がなければならない。(I I I - 13, p. 33)

ギリシア・ローマの傑出した哲人ならば完全な恒常性の域に達せられるとしても、現実
に一般の人間においては似て非なるものしか得られない。無変化や静止はけっきょく「硬
化し」、「活力を鈍らせてしまう」のであり、人間の自然な力をむしろ弱める恐れが強い。
上の引用文はいずれもそれを生理的な次元から表現しているが、たんに特殊な事実として
ではなく、その深みに根拠をもった、一般的な真実として理解すべきであろう。現実の世
界では私達がただ守りつづければ良いような、それでもなお「自分の力がかびて鈍ら」な
いような「生活法」や「規律」などはない。「役立たせたいと思うならば、続けるのを避
ける」必要があるような活動性が自然の理である。恒常性に憧れるのはやまやまであるが、
所詮は私達を超越したものであって、現実にはふさわしくない。平凡な人間にすぎない者
が恒常不変をまねようとするならば、みずからの自然な、自由な力を失わせる、よどんだ
静止におちいるであろう。したがってモンテーニュの最終的な境地も、不動や恒常にそぐ
わない人間性を覚悟するところから生まれる。

(C) 私は格別な関心と愛着をいだいて人生の快樂を誇らしげに追求している者で
はあるが、よくよく眺めてみるならば、見出すのはほとんどただ風ばかりである。し
かし、それで良いではないか。我々は全体が風なのである。ともかく、風は我々より
ずっと賢明であって、ざわめき、ゆれ動くのを好み、みずからの本来のつとめに甘ん
じる。そして「安定」とか「堅固」のような、自分自身にない性質を望んだりはしな
い。(III-13, pp. 1106-1107)

自分を越えた上にある恒常性も、自分を退化させる下の静止も、どちらも選びようのな
い境遇にあるという考え方は、モンテーニュにおける中位の人間とか中庸などの思想を思
い出させる。人間は恒常とか静止の、分かりやすい極端な道に従うことはできない。動揺
と変化という人間性の自然を受諾して人生を送るしかない。

しかしながらまた人間の動性は、追い求めるばかりで幸福を享受できない不幸の根源で
もある。あるいは、われとわが身や社会を滅ぼす破壊的な力に変わりさえする。一方では
人間の活力についてもはや可能性の夢のみをえがけないところに、ルネサンス最初の世代
ではないモンテーニュの複雑さがある。恒常性や静止を拒否して活動性を評価しながら、
なおかつ不安や警戒心を抱かざるをえない。際限なく前進する動きは、彼にあっては、未
来の可能性を象徴するイメージではない。それは限定できない存在である人間の恐ろし

さを暗示している。

貧欲や野心に限度が見出されないのみならず、肉欲にもまた限りがない。それは飽満のあともなお生きつづける。我々は持続する満足も終着点も命じられない。それはみずからの所有するものを越え、つねに進んでゆく。(III-5, p. 24)

「『安定』とか『堅固』のような、自分自身にない性質を望んだりはいしない」で、「ざわめき、ゆれ動くのを好む」風のように、自然な動性のなかに生きようとしても、また不安を抱かざるをえない。人間の動性は、放置すればたちまち「終着点を命じられない」ようになる底のものである。そこには人間自身を翻弄する、デモーニッシュな力さえ働いているように思われる。しかも、貧欲や野心や肉欲だけがそうなのではない。人間のすべての活動には、「限度が見出されない」運動におちいる危険性がひそんでいる。

我々の探究にはけっして終点がない。我々の終点はその世にある。人間の精神の追求は終わりもなければ形もない。疑惑と曖昧さがその栄養である。このことはアポロンの神託が十分に示している。アポロンはいつも二重の意味をこめ、ぼんやりと、遠まわしに告げる。実際に腹を満たしてくれないで、気づかいと心労の種をあたえる。それは停止もなければ目的地もない、永久的な運動である。(III-13, p. 8)

飽くことのない探究はたくましい精神の印のようでもあるが、すこし見方を変えるならば、それは人間の宿痾でもある。その衝動に身を任せれば人間がりっぱになり、幸せになるわけではない。私達の一般の見方とはちがっているかも知れないが、モンテーニュから見れば、自己自身を置きざりにする超越的な力に隔らされるのは、むしろありがちなことである。自己を遠く離れてゆく運動はけっして精神の偉大さの証拠ではない。晩年の加筆ではあるが、つぎの文章が簡潔にこの思想を表現している。

(C) 魂の偉大さは高く飛び、遠くへ進むところにあるのではなく、自己を整え、抑制するすべを知るところにある。(III-13, p. 1110)

しかし、「自己を整え、抑制する」のは、恒常性を獲得するためではない。すでに考察

したように、恒常性は現実の人間においてはよどんだ静止と退化にひとしい。それはあくまでも人間の動性を処する行為である。自然な活力を保ちながら、運動を整え、際限のないものにならないように抑えるべきであろう。そうすれば理想的な運動が生まれるはずである。そして、そのイメージが円運動であったにちがいない。つぎの文章には、私達の以上の考察のほとんどすべてを含みながら、円環のイメージが表現されている。

欲望と所有を広げれば広げるほど、我々はいっそう運命と逆境の襲撃にさらされる。我々の欲望の活動はもっとも手近な身辺の安楽を境界にして、その狭い範囲内に抑えなければならぬ。さらにその走路は、終着点をよそにもった直線状ではなく、短い迂回ののち両端が我々のなかで結びついて終わるような、円状に制御しなければならない。しばらくのちに必ず元に帰る、このような自己への回帰なしにおこなわれる行動は、吝しよく漢や野心家やその他まっすぐに走る多くの人たちがみずからの疾走によっていつも前へ前へと運ばれてゆくように、空虚で病的な行動である。(III-10, pp. 227-228)

さらに円環はモンテーニュのもっとも重要な思想と関連するのを見落としてはならない。つまり、回帰する円状の運動に整える力が自我という核力にほかならない。そしてそれは自己認識によって養われる。円を理想的な運動と考えることは、彼がすべての認識のなかで自己認識をもっとも重視する脈絡とまったく符合している。自己を認識の対象にふくめ、かつその中心にするならば、好奇心に駆られてただ広がってゆくにすぎないような病的な認識が防がれ、自己自身を知り、把握するならば、あの世にしか終着点のないような人間の動性が、自我という中心のある円運動に変わるのである。

普通ならば理由を想像するすべもなく、ほとんどの人が注意を向けないであろうが、以上のような事実を知ったのちに読むときには、つぎの箇所に円があらわれているのはまったくの偶然とも思えない。

(C) 私がドイツで見たところ、ルターの意見の疑問な点が残した異論と論争の多さは、聖書について彼がひき起こした数に優るとも劣らなかつた。我々の議論は言葉の応酬である。たとえば「自然とは何か。快楽とは何か。円とは何か。代襲相続人とは何か」とたずねるとする。質問は言葉でなされ、おなじように言葉で返ってくる。

「 」の中はただのたとえであり、そこに挙げられているからと言って、モンテーニュが円を重視しているとは断言できない。しかしながら、思いつくままの列挙であるとしても、円以外は彼自身との強い結びつきが容易に想像できる。「自然」も「快樂」も彼の思想の核心に触れる言葉である。「代襲相続人」という語は、彼の思想の背景をなす体験として重要な、法官生活との関連からあらわれたと見なしてまちがいはない。とすれば「円」も内面にひそんでいた何かを書かせたはずである。恐らく、運動の価値評価の分析によって私達の掘り起こしたような脈絡が、意識のなかに存在していたからであろう。だからこそ、内面的なつながりの強い他の語に並んで記されたちがいない。円にたいするモンテーニュの関心の傍証として、つけ加えておこう。

『エッセー』を書く行為も、運動についての考察によって発見したのとまったく同じ脈絡を含んでいる。この関係も忘れてはならない。モンテーニュが『エッセー』を書くのは、なにか確かな知識を読者にあたえるためでもなければ、思想体系を築くためでもない。そこにはやはり固定した秩序や恒常性を嫌う傾向が見られる。

(B) 人生におけるもっとも共通した特徴を捉えながらある人を判断するのは、もっともな理由があるように見える。しかし、我々の生活態度や思想は生まれつき変わりやすいのであるから、私の思うところ、りっぱな著者たちでさえ我々について不変不動の性格を作り上げようとやっきになるのは、まちがっている。(II-1, p. 2)

この無限に多様な様相を類別し、我々の流動的な性質を固定し、秩序づけるのは、学者たちにまかせよう。と言っても、これほど混然とし、じつに微妙で、しかも偶然に左右される事柄について、彼らが目標に達しうるかどうかはあやしい。(III-13, p. 22)

したがって『エッセー』を書くというのは、運動のなかにおける、みずからも運動であるような行為である。「エッセー」という思考は、無限に多様な様相をもち、絶えず変化している対象がある瞬間に見せた一側面について、試しに判断力を行使し、捉えた事実を記し

つづける。それは恒常的なものを確定しない思考なので、時には果てしない行為のように思われる。

文法というただひとつの主題についてディオメデスが6000巻を著したのを思うならば、どんな題材にゆき当たってもたえず動揺と変化をつづける私の思想を、いったいいつになれば表現し終えるのであろうか。(III-9, p. 119)

以上の特色が『エッセー』を書く行為であるならば、章に明確な秩序も構成もあたえられないのも当然である。ではそれは「まっすぐに走る」だけの、「空虚で病的な行動」と変わらないのであろうか。もちろんモンテーニュは多様性や流動性を人間性の自然として甘受はしても、そのような性質の運動を認めることはできない。彼が「動揺と変化をつづける」自分の思想を記しつづけるのは、それがただ先へ進んでゆくだけの探究ではなく、自己自身へ帰る行為だからである。すでに中期において彼は、どんな問題について何をのべようと、結局は自己自身を描いているという自己描写観に到達している。思いのままに次々と話題を変えながら、とりとめもなく随想を展開してゆく気楽さもそこから生まれる。

私は気のむいた題材から始めてゆくことにしよう。と言うのは、すべてはたがいに関連しあっているからである。(III-5, p. 8)

たしかにすべての問題にはなんらかの関連性がある。しかしながら、だからと言って筋道に頓着しないですむわけではない。好きなように関連の糸を辿ってゆくのが許されるのは、自己自身を描くのが究極の目的だからである。自由に展開する随想の「動揺と変化」の中心には、つねに自己を捉えようとする意識がある。随想の内容が表面的には統一性に欠け、しかもつぎつぎに変化し、まさに多様性と流動性以外の何ものでもないように見えようとも、それらはすべて自己描写と自己認識へ向かっている。この求心力によって、変化と運動が「まっすぐに走る」だけの、「空虚で病的」なものになるのが防がれるのである。このような思索と著作行為の運動性と求心性を、モンテーニュが円の比喻によって説明した文章はない。しかし、彼が章を円環の構成に仕上げている事実がこの欠如を補っている。すなわち、さまざまな主題を論じ、躍動的な変化をつづけながら、しかも拡散的ではなく、すべてが関連しあい、集束点をもっている随想の象徴が、自己という核力をもつ

た円運動であり、円環の構成であったにちがいない。

円環の構成は、人間と世界と自己自身の多様性と流動性ととも思案が動きつづけながら、中心に自己描写と自己認識をもっている『エッセー』にきわめてふさわしい。この構成によって、人間と世界に本質的な運動が制御され、自己を中心にして動いている、安定した動的な小宇宙ができあがる。しかも、その自己のさらに核心には、人間の普遍性があるはずである。

私は卑しく、光彩のない生活をお目にかける。だがそんなことはどうでもよい。民衆の私生活であろうと、もっと華々しい生活であろうと、おなじように道徳哲学のすべてが関連している。人はめいめい人間の性状の本質を完全にそなえている。(I I I-2, p. 190)

したがって、それは人間が中心である、円環の宇宙と言えるかも知れない。とすれば、ジョルジュ・プーレが『円環の変貌』で指摘しているように、中心と球体という神をあらゆる象徴図が人間についても用いられるに到る、ルネサンス的円環の変貌に相当するとも理解できるであろう。しかし、モンテーニュの場合、円環の要諦はやはり自己認識にあるのを忘れてはならない。無限に拡大しつづけ、刻々と変わりゆき、個人の認識力ではとても秩序づけられそうにもない世界が、拡散的な、際限のない運動によって人間を脅かし、不安や恐怖をもたらすのを防ぐのは、自己認識という求心力である。世界の多様性と流動性に自己自身という求心力と核力が付与されることによって、調和的な円運動が生じるのである。

第3章第4節（注）

（1）これらの引用文は晩年の加筆であり、したがってI-A-8のページを表示している。

（2）II-A-25, pp. 264-265.

（3）II-A-25, pp. 265-266. なお、私達はこのエチアンプルの論文をとおして知った範囲内で、ヴィットコーヴァーとセースの説を批判したにすぎない。

（4）ページ表示はI-A-11による。私達の論文の方法にしたがい、「馬車について」の構成を論じている研究者たちとちがって私達は、1588年版の姿を分析対象にしている。しかしながら、章の全体的な脈絡に変わりはない。すくなくともこの章については、この相違は私達の批判と解釈の価値を減じるものではない。

なお、参考までにI-B-6の箇所を併記した。

（5）I-A-8の章頭の解説を参照。II-A-69, t. 2., pp. 285-289のほうがすこし詳しいが、論旨はおなじである。

（6）この点についてはII-A-69, t. 2., p. 286を読まなければ分からない。

（7）I-A-4, t. 4., pp. 395-402.

（8）II-A-25.

（9）《Hymne des Astres》, v.47-v.92.

5. 作品論の進化

どの執筆期においてもモンテーニュは頻繁にみずからの『エッセー』に言及している。それは恐らく『エッセー』が新しい様式の商品であったため、絶えず読者にむかって弁明しなければならなかったからであろう。あるいは、それらの言葉は商品のあり方についての探索や発見を示しているであろう。著作の態度が固まっていた後期においても、彼自身の『エッセー』論は少なくはない。すでに私達は今までの節の主題との関連においてその相当数を考察したが、最後にもう一度、商品にたいする意識とその進化に焦点をしばらくながら、私達の研究にもとづく、彼自身の『エッセー』論の解釈を試みてみよう。

後期の商品の冒頭、つまり第3巻第1章もモンテーニュ自身の商品論で始まっている。ここで彼は、ふと頭に浮かんだつまらないことさえも『エッセー』に書き記すと述べたのち、著作の姿勢について、「誰彼かまわず出会った人に話しかけるように、私は紙にむかって話しかける」(p. 165)と説明している。この箇所の商品論については、ふたつの解釈の仕方があるだろう。ひとつは「つまらないこと」に力点を置いた解釈である。常識的にはつまらないように見えようと、頭から否定しないで試しに表現してみるの、軽視できない効用をもっている。たとえば、自分の従来への価値観や世間一般の意見などの拘束から解放し、自由に発展させてみるならば、今までつまらないと思っていたことが意外な真実とか着想を含んでいるのを知るときがある。このような「試し」が新しい創造を示唆したり、柔軟な見解へ導いたりする。あるいはまた、自由に試す経験をくり返しながらか、本当につまらないことかどうか判断する力を養わなければならない。さもなければ、古くからの明確な価値尺度が崩壊した領域や時代においては、ときどき気楽につまらないことを言うどころか、「一生懸命にそれを言う」(III-1, p. 165) 頑迷さにおちいる恐れがあると言えよう。以上のように考えるならば、モンテーニュの言葉はただの謙遜や卑下ではなく、思考の自由さや「試し」の創造性にかかわる、まったく『エッセー』にふさわしい弁明である。

ひとつは最初に引用した文章に注目する解釈である。そのキーワードは「話す」であり、「書く」論理よりずっと自由な記述法を採っている特徴を強調している。一般の書物のように論の構成に苦心するのを止め、モンテーニュは思いの浮かぶままに『エッセー』に話しかけ、書きつづけてゆく。この引用文は書く事柄のみならず、書く順序にもこだわらない著作の態度に言及している。

つまり、第3巻の冒頭の作品論には、他にもよく見られるような、主題の無限定性と随想の展開の非論理的な躍動性が読みとられる。もちろん、両者は密接に関連しながら、『エッセー』の創造性を生んでいる。これらは根本的な原則であり、以前の執筆期と比較するならば、意外なほど変化がないのに驚くにちがいない。中期では、「私自身の生来の能力だけを使って、頭に浮かぶすべてを手あたりしだいに語る」（I-26, p. 187）と述べたり、あるいは「私は偶然以外には各部分の配列を決める参謀をもたない。夢のあらわれるがままに積み重ねてゆく」（II-10, pp. 100-101）などと説明している。比較はたやすく、連続性が結論できるのは明らかである。

後期の随想と比べるとき、初期の作品はとてもおなじ方針で書かれたとは思えないほどちがっている。しかしながら、作品を書く根本の姿勢についての方法的自覚はほとんどおなじであるのを見落としてはならない。

判断力はあらゆる事柄に使う道具であり、いたるところに顔を出す。したがって、ここでおこなう判断の試しについても、私はあらゆる機会を利用する。・・・[中略]・・・さらに私は主題については偶然が提供してくれるままに任せる。私にとってはどれもおなじように結構なのである。しかも主題を全体的に、かつ底の底まで論じるつもりはない。それぞれがもっている千の顔のなかから、自分の気に入ったのをとりあげる。私は普通とちがった珍しい光のあて方で捉えるのが好きである。（I-50, pp. 459-461）

初期の終わり頃に書かれたにちがいないこの文章は、むしろ中期や後期の言葉よりも鮮烈に主題の無限定性と選択の自由さを宣言している。それに反して、一方の展開の自由さはあまり明確に述べられていない。まだ初期においてはモンテーニュの思索がルソンという形式を十分に打ち破っていなかったからであろう。慣習的な形式に亀裂を生じさせることに注意と精力が費やされ、思索の活動はまだ個性的で奔放な運動をおこないえなかったからであろう。しかしながら、「しかも主題を全体的に、かつ底の底まで論じるつもりはない。それぞれがもっている千の顔のなかから、自分の気に入ったのをとりあげる」という原則の立て方には、すでにその萌芽が感じられる。すくなくとも、初期においても一方の原則は他方の原則と矛盾していないのみならず、潜在的にきわめて近い関係にあった。しかも、執筆の動機を語ったもっとも初期の作である、第1巻第8章と読み比べるならば、

それはいっそう確実であるように思われる。この章の終わりの説明によれば、無為の生活を送っていると「心のなかにはたくさんの魑魅魍魎がつぎつぎと、あてもなく、無秩序に生まれてくるので、私はその愚劣さ、奇怪さをゆっくりと眺めるために、時がたてば精神みずからが恥じいるようにとも願いながら、それらを記録しはじめた」(p. 33)のである。つまり、主題の選択と記述の仕方に関するモンテーニュの方法論的意識は、初期においては後者の表明がまだ不明瞭であるとは言え、『エッセー』を書き始めてよりほとんど変わっていない。相違よりはるかに連続性が顕著であって、首尾一貫しているときええよう。そして、その方法はさらに根本的に言うならば、「技巧的な、スコラ的な方法ではなく、健全な悟性の、自然な方法」(III-8, p. 88)であり、この態度はどの時期についてもあてはまる大原則であったにちがいない。

モンテーニュが比喩的に『エッセー』の特徴を形容した表現に「束ね仕事」(fagotage)、「ごった煮」(fricassée)、「寄木細工」(marqueterie)などがある。これらみつつの異なった執筆期のみつつの形容の仕方も、作品にたいする彼の意識がほとんど変わっていないことを示している。つづいてこの点を考察してみよう。

これらの形容から多くの人がまず思い浮かべるのは、『エッセー』が随想のみならず、金言や故事実例や詩句や古人の思想などのさまざまな引用から成っている姿であろう。しかし、いずれの場合においても、モンテーニュはそのような意味で使っているのではない。このように形容する作品意識には、書物からの借りものは含まれていない。この点を誤解しないようにしなければならない。したがってこれらは初期の作品のみにたいする形容でもなければ、初期の章にのみあらわれる言葉でもない。最初の語は、初期か中期か不確定な章の、つぎのような文脈で使われている。

ここにあるのは支離滅裂な断片の寄せ集めである。私が脱線したのは、狩猟について以上の点を言うためであった。しかし私のことに話をもどすならば、私は他人の悲嘆にたやすく心が動かされる質であり、どんな機会でも泣いてよいのならば、すぐにもらい泣きするであろう。(II-11, p. 143)

つまり、『エッセー』は気ままに脱線しながらできあがってゆく作品であり、「断片」相互の関連は「支離滅裂」で、全体を関係づけ、統一する秩序を欠いている。このような性格を《un fagotage de pieces descousues》と表現したのである。

私達がいま注目した部分はボルドー一本では消去されている。したがって《fagotage》という語が現在の『エッセー』にあらわれるのは、つぎの一箇所だけである。

この多くのさまざまな断片の寄せ集め (ce fagotage de tant de diverses pieces) は、つぎのような風にできあがってゆく。私が筆をとるのは、あまりにもだらけた無為にさいなまれるときだけであり、ただ自分の家にいるときだけである。したがって、折々の所用で外出するのが往々にして数か月におよぶときもあるので、この本は何度も休止や中断ののちに完成した。しかも私は最初の思想を二番目の思想によって訂正したりはしない。自分の考え方の推移を表現し、それぞれの部分を生まれたままの姿で人々に見てもらいたい。もっと早くから始めていたならば、自分の移り変わった様子をながめて楽しめたのに、とさえ思っている。(I I - 37, p. 599)

この箇所のみが残ることによって《fagotage》は、論理的な関連性を欠く断片を束ねたという意味が消え、休止や中断のある折々の随想を寄せ集めた意味になる。しかし、『エッセー』には両者の性格があり、注目すべき個性はむしろ前者である。とすれば、一方が消去されたのは、作品を形容した《fagotage》の語の理解にとっては大きな損失であろう。

後期では「フリカッセ」という一種のシチュー料理に譬えられている。この語が使われているのは、つぎの一箇所である。

要するに、ここに走り書きしている雑録 (cette fricassée que je barbouille ici) は、生活の試行錯誤の記録にすぎない。これは心の健康のためには、教訓を逆に汲みとるならば、かなり良い手本になる。しかし、肉体の健康となると、私以上に有益な経験を提供できる者は誰もいない。(I I I - 13, p. 26)

「シチュー」のイメージは、作者の随想のみならず金言や詩句や故事実例などのいろいろな借用から成っている『エッセー』の特徴を表すのにふさわしい比喻のように思われるのであるが、モンテーニュ自身はそのような意味で用いているのではない。乏しい文脈はあるが、その点は十分に明らかであろう。この料理用語は、作品が「生活」の次元にとどまりつづける思索の「記録」であるところから生じる性格を表現している。《fagotage》の後者の例とほとんどおなじ側面を述べている。先ほどの引用文にもどって言うならば、

休止や中断があり、執筆の時間に連続性が欠けていたとしても、作品が「さまざまな断片の寄せ集め」になるとは限らない。その原因は物理的な現実の時間ではなく、どのような時間と空間にしたがって作品を書くかという作者の態度である。モンテーニュが日常的な時間を越える、抽象的で論理的な時間のなかで関係づけ、統一する書き方を選ばなかったからである。逆に《fagotage》にとどまるところに、『エッセー』という作品の時間の特徴があると言えよう。「フリカッセ」という表現もおなじような時間性と不統一性を示している。人生を生きるなかで「試行錯誤」する行為を思索の要諦として重視するのみならず、さらにそれを文章に書くのは、その行為をいっそう力づよく推進するためであって、より抽象的な一般化や体系化へすすむためではない。したがって、その「記録」は秩序と無秩序の両者をふくみながら展開する「生活」の次元を越えないがゆえに、統一的な時間性や論理性を欠如したままであるしかない。

「寄木細工」(marqueterie)という語は執筆第4期にあたる、晩年の加筆にあらわれている。

(C) 私の本はつねにひとつである。ただ、版を改めて出すようになるにつれ、買いにきた人がまったく手ぶらで帰らないようにするために、(この本はうまく合わない寄木細工にすぎないので) なにか付随的な飾りをつけくわえるように決めている。

(III-9, p. 964)

『エッセー』はモンテーニュのただひとつの作品であり、新版ごとの加筆につれて大作になった事実については、説明するまでもないであろう。上の引用は、彼が追加はするが訂正はしないふたつの理由を述べた文章の一部である。前後の文脈のなかで捉えるならば、明らかに彼の意見や随感の加筆に言及したのであって、詩句や故事実例などの追加のことではない。したがって、『エッセー』は思想の「寄木細工」のような作品であると言わんとしたのである。その意味は、以前の《fagotage》や《fricassée》とおなじように理解するのが正しいであろう。つまり、部分々に力を集中した判断の試しと思索の展開が、相互の関連や全体的な統一性には無頓着に連なり、時間的にも一貫した秩序を欠く折々の随想が集まっている「寄木細工」である。だからこそモンテーニュは随所にたやすく書き加え、気軽に挿入できるのである。

以上のように、『エッセー』の特徴をみずから比喩的に表現した語句から見ても、モンテ

ーニユの作品意識はどの執筆期においてもまったく変わっていない。

ところで、上記の私達の論証は曖昧で、強引な印象をあたえたかも知れない。しかし、その原因は別のところにある。三種の比喩的表現のいずれについてもほとんどの人が自然に思い浮かべるのは、作者の随想のほかに、さまざまな書物から借用した、詩句や金言や実例などから成り立っている『エッセー』の特徴だからである。一方、モンテーニユの真意はそうではない。彼がみずからの著作行為について説明した文章を読むとき、私達はこのずれに注意しなければならない。すこし脱線するようであるが、上記の論証を補強する役割も付与しながら、しばらくこの点をめぐる考察をしよう。たとえば、「書くときには私は書物の道連れや思い出なしにすます」(III-5, p. 5)という文は、非常に誤解されやすい。みずからの作品を説明しながらモンテーニユは気ままな随想の側面を強調したあげく、ついにこの箇所では、なんら書物に頼らずに書いているかのように言う虚栄心におちいつている。このような類の非難をあげた人たちもいる。この引用文はじつに単純な内容で、ほかに異なった解釈があるはずはなく、『エッセー』が第3巻においても書物からの数々の借りものを挿入している事実と矛盾しているように思われる。それが不明瞭な表現であるのに気づく人は少ないであろう。しかし、「書物の道連れや思い出」によって『エッセー』に記すことがらが詩句や金言や実例であると想定しながら、あとにつづく文章を理解しようとするならば、たちまち全体の意味が曖昧になる。書物への依存がその程度であるならば、「りっぱな著者たちがあまりにも私を圧倒し、勇気をくじく」(III-5, p. 5)のが懸念されるからであるという理由は、今さら誇張がすぎると言わねばなるまい。それならば、モンテーニユは初期以降とても『エッセー』を書きつづけられなかったであろう。また、そのような想定では、《ma forme》が妨げられるのを恐れるという語句の意味は把握できない。結局のところ、疑義の余地のないように思われる最初の引用文こそ、表現が不明確なのである。そこで彼が「書く」と言ったとき、借用が明らかな詩句や金言や実例などはその対象に含めていない。その文は随想を展開する部分について、書物にある思想や考え方に頼って書くときはない、と言わんとしたと解すべきであろう。このように理解するならば、ふたつ目の引用文は説明するまでもなく、意味は明瞭である。《ma forme》を含む文のほうは、この語の多義性を十分に制御する文脈を書いているため、実際にやや曖昧である。しかし、筋道の立った解釈ができないほどではない。《forme》とは、先天的でもあれば後天的でもある「形」や「型」であって、この文脈ではモンテーニユらしい物の見方や考え方の意味になる。彼は書物の影響でそれが『エッセー』にあらわ

れなくなるのを恐れているのである。『エッセー』は学んだ知識ではなく、天賦の能力を試す著作でなければならない。また、そこで表明される意見は、真理にかなっているかいないかという以上に、モンテーニュらしい《forme》を明らかにし、自己描写になりえなければならない。問題の文章は『エッセー』のこのような性格を背景にして書かれたものである。

私達はただモンテーニュを弁護するために、上のような解釈を案出したのではない。他の箇所における彼の『エッセー』についての説明の仕方を参考にしながら、文脈全体の明確な理解を求めた結果にすぎない。ちなみに、三種の比喩的表現より以前に引用した作品論も、詩句や金言や実例などの借用は「書く」という意味に含まれないのを前提にした述べ方である。「書くときには私は書物の道連れや思い出なしにすます」という文は、見かけとは反し、表現の曖昧さが誤解を招くのであって、事実を隠す意図はなかったはずである。後期においても、必要があれば彼は読書の知識に依存している『エッセー』の側面を見すえ、はっきりと論じている。

おなじように誰かが私について、ここでたんに他人の花を積み重ねただけであり、自分のものはただ花を結びつける糸を提供しただけである、とも言えるであろう。（
III-12, p. 299）

『エッセー』がこのような形式に従っているのは隠しようのない事実であって、モンテーニュ自身認めるにやぶさかでない。「私もかなりたくさん原典以外から拾って引用した」（III-12, p. 299）と、率直な告白もしている。と同時に彼は、引用をちりばめて偉く見せようとする気取りや、その数の多さを誇るおろかな名誉心に批判をくわえている。つまり、とくに古典古代の遺産とルネサンス人の著作との関係をめぐる時代的な問題を背景にしながら、みずからの作品と他との相違を説明しようとしているのである。そしてその弁明は妥当な範囲を越えていないように思われる。まず彼は、借りものによって自分を装い、隠すつもりはなく、生まれつきの自分を表現するのが本当の意図であると言う。『エッセー』を書き始めて以来、「他人の花」をどのように利用するかというのは、モンテーニュがつねに意識していた方法の問題であった。「判断の試し」とか「天賦の能力の試し」という方針をかけたが、『エッセー』が当時流行していたような、たんに知識を寄せ集めた金言集や実例集の類にとどまらないように心がけた。したがって彼の説明は

まったくの言い訳ではなく、十分な根拠があると言えよう。もうひとつの弁明も、急所を逸してはいない。「他の人々は盗んできたものを並べたて、数えあげる」（III-12, p. 300）のに比べモンテーニュは、馬どろぼうがたて髪やしっぽに色を塗ったり、乗用馬を荷馬に変えたりしながら使うように、新しい創意と解釈をくわえながら利用するのだと言う。私達の研究は原典と『エッセー』のなかとの意味の相違についてはまったく判断できないが、しかし、書物で学ぶ知識の利用法を彼がさまざまに試しているのを明らかにした。彼が「盗んできたものを並べたて、数えあげる」ような著作を越えようと努力したのは、疑いようのない事実である。

著書と引用との関係を述べた他の一箇所においても、その理解と批判と弁明はいずれも正鵠を射ている。人々は「印刷された証拠しか重視せず、本のなかに書かれていない人物は信用せず、権威ある時代の真理しか信じない」（III-13, p. 30）。あるいは、「書物に書かれた、外国の模範を追いかけ」（同, p. 30）、「論の真実性よりも引用の名誉を追い求めている」（同, p. 31）。このような風潮を批判しながらモンテーニュは、「私の友人もアウルス・ゲリウスやマクロビウスも、私を見たことも彼らの書いたことも、おなじようにすすんで引き合いに出す」（同, p. 30）と、みずからの態度を明らかにする。そして、日常の平凡な事実をしっかりと判断し、思索の糧にすることの大切さを唱える。いずれも自分の歩んだ道を反省しながらおこなったにちがいない、正当な批判と主張である。この点については、彼の思索を支える読書実例と見聞実例と自己実例との関係やその進化に注目した私達の作品分析によって、十分に納得できるはずである。

したがってモンテーニュは作品の要素や思索の材料として引用や引証を考えなければならぬときには、すこしも包み隠さず、問題点を明瞭に把握した論を展開している。しかしながら、そのような自覚も、自己の作品にたいする意識のなかでは、だんだんと辺境に押しやられていったようである。「書くときには私は書物の道連れや思い出なしにすまず」という誤解をまねく文が書かれたのも、それが原因なのかも知れない。詩句や金言や故事実例は作品の付随的な装飾であるという意識が、進化につれてだんだんと強くなっていったのであろう。つぎの晩年の加筆はそこに由来する奇妙な齟齬と彼の心理を暗示している。

（C）自分の意図と最初の形式以上に時代の好みにあわせ、他人の勧めに従って、私はこれらの借りた装飾を毎日ますます付加している。それらが自分の信じていると

おり私に似あっていないとしても、かまいはしない。誰か他の人の役に立つかも知れない。(III-12, p. 1055)

まず数量的な事実関係から言えば、ボルドー市版『エッセー』にある「借りた装飾」の多くは、初版出版後から1588年までの間と、以降死ぬまでの晩年に挿入された。つまり、作品の書物への依存が弱まり、個性的な随想が展開している執筆期に、一方ではさかんに引用や引証が追加されている。『エッセー』は進化につれて、作品の要素や思索の材料として最初に必要としていた以上にますます「借りた装飾」を増やすという矛盾をおかしている。「自分の意図と最初の形式以上に」とは、そういう意味である。しかしながら、その原因については、モンテーニュの言うとおりを信じるのが正しいようにも思われない。随想はだんだんと書物に頼る必要が減じているのに、彼はただ「時代の好みにあわせ、他人の勧めに従って」、さかんに引用と引証を追加したのであろうか。「私に似あっていない」と判断しながら、「誰か他の人の役に立つかも知れない」という理由でそうしたのであろうか。私達の作品分析にもとづくならば、そのようには思われない。彼の言葉が嘘いつわりであると言うのではないが、自分の生きている時代状況に注意がうばわれ、自己自身の欲求についての反省が忘れられている。随想の流れをゆがめ、作品の秩序を乱す読書実例の記入さえおこなわれていることなどから考えてみても、やはりそこには彼自身の好みがあり、ディレクタントィズムがあったにちがいない。それは実際に『エッセー』を読んだときにはほとんどの読者が感じるはずであるが、彼自身は特別に説明する気はなかったようだ。つぎの文章と加筆にわずかにあらわれているにすぎない。

したがって魂の無為の状態は私にとってはつらい仕事であり、健康の害になる。たいていの精神はまどろみから覚め、活発になるために外部の材料を必要とするが、私のはむしろ静まり、休息するためにそれを必要とする。《閑暇の罪悪を労働によって追ひ払わなければならない。》と言うのは、私の精神のもっとも骨が折れる、主たる研究は自己自身を研究することだからである。(C) 書物は私の精神にとってはこの研究からそらしてくれる仕事の類である。(III-3, p. 213, p. 819)

この言明のもっとも興味をそそられる点は、無為との関連にある。なぜなら、『エッセー』執筆の動機をのべた最初の作品論は「無為について」という章だったからである。上の言

葉を使いながら、「無為」が精神の「健康の害になる」「つらさ」から逃れ、「静まり、休息するために」、モンテーニュは『エッセー』を書き始めたのであると説明したとしても、「無為について」における証言になんら悖るところはない。このように彼の精神の特徴はすこしも変わっていないが、しかし一方『エッセー』との関係には変化が見られる。初期のころは無為のつらさから逃れる一法として、書物を利用して『エッセー』をつくった。ところが、上の後期の文章と加筆では、『エッセー』を書く目的は自己自身についての研究に変わり、書物がもっとも苦しいその仕事からの気晴らしになっている。無為のつらさを晴らす方法としては著作がしりぞき、書物が主になる分裂が生じたのである。そしてこの変化は、書物からの借りものへの依存を脱し、個性的な随想様式を確立した後期と晩年において、たくさんの引用と引証が加筆されている現象と呼応しているにちがいない。すなわち、思索と作品様式の成長につれて生じた著作と書物との質的な分離は、モンテーニュの精神の別の一面においては、無為や自己観察の心労をいやす読書の楽しみへの傾斜をいっそう強めたのである。その結果、『エッセー』の進化とは矛盾するような形で、書物から「借りた装飾」がますます増えていったのであろう。

『エッセー』についての作者自身の説明は中期や初期の言葉と比較し、こうして知られる文脈のなかで読みとるときに誤解が防がれる。私達はそれを示しながら、関連する文章を検討してきた。つづいて、『エッセー』とはどのような作品であるか、なぜ『エッセー』を書くのか、後期にモンテーニュが全体的に定義し、弁明している作品論を考察することに移ろう。

私は自分の人生を行動によって記録することができない。それがあまりにも低劣な運命のなかにあるからである。私は思想によって記録する。ちょうど私の見た一貴族に似ている。彼は腹ぐあいによって自分の人生を伝えていた。彼の家にはゆけば、7、8日分の便器が順序よく陳列されているのが見られた。それが彼の研究であり、思索であった。彼には他の話題はいっさい鼻もちがならなかった。すこしはより上品ではあるが、ここに書いているのも、ときには固く、ときにはやわらかく、いずれにしろつねに不消化な、年老いた精神の排泄物である。(III-9, p. 119)

この説明にはなんら不明瞭なところも難解なところもないが、うっかり誤解しないように、注意深く考える必要はあるだろう。思想によって自分の人生を記録すると言っても、

哲学者の練り上げた思想体系やその構築の経緯が、作者の個性や人生を表しているような意味とはちがっている。もちろん共通する面はあるが、『エッセー』の『エッセー』たるゆえんは相違のほうにある。哲学者は個人と生活を越えた空間と時間のなかで、客観的で普遍的な真理へむかって進んでゆく。一方モンテーニュは他者にたいする価値を放棄してさえ、あくまで個人と生活の次元にとどまりながら思索の営みを記録する。知りあいの貴族の尾籠な例を引きあいに出すのも、そのような日常性を強調するためである。それは中期と比べ、なんら新しい原則ではないが、おなじ方針の実行によって思索と著作がますます日常の人生と密接になった進化を想像させる表現である。

日々の生活との関係から言うならば、『エッセー』は一種の日記の機能をはたした作品でもある。しかし、日常の個人は思想体系はもっていないとしても、思想はもっていると言えるのであるから、『エッセー』は思想書でもある。しかも、ただ思想を記録しているのみならず、モンテーニュという人間全体の自画像を描いている。つぎに引用する説明が一読の印象ではどこか混乱しているように感じられるのは、『エッセー』が一種の日記であり、一種の思想書であり、一種の自画像であるという多様な性格の微妙な境界に成立している作品だからである。しかもそれが根底にある世界観や人間観とのかかわりのなかで説明されているからである。モンテーニュ自身の文章には、責任を帰すべきほどの混乱や曖昧さはない。

他の人々は人間を教育し、私は人間について語る。しかも、きわめてできの悪い一個人を描く。もしあらためてこれを作り直さなければならないならば、本当に私は現在とはまったく別人にしてしまうであろう。しかし今となってはどう仕様もない。ところで、私の個々の描写はさまざまに変化するが、けっして本筋からはそれない。世界は永遠の変動にほかならない。そこではすべての物が絶えず動いている。大地も、コーカサスの岩も、エジプトのピラミッドも、世界全体の運動とそれ自身の運動によって変化している。恒常ということさえ、きわめて緩慢な変化にほかならない。私は自分の対象を確定できない。それは生まれつきの酔っぱらいで、みだれた足どりではよろよろ歩いている。私は興の向いた瞬間に、その一貌のあるがままを捉える。私は実体を描かない。推移を描く。それも一年ごととか、俗に言う七年ごととかではなく、一日ごと、一分ごとの推移を描く。私の話は時間と照合しなければならない。すこしあとで私は変わるかも知れないが、偶然にそうなるのみならず、意図的なときもある。

この本はさまざまに変化する出来事と、不確定でときには相反する思想の検査である。それは私が別の私になるからであろうか。それとも私が対象を捉えるのが、ちがった状況とちがった見方によるからであろうか。いずれにしろ、私の言が矛盾するときもおそらくあるだろうが、しかし、デマデスが言ったように、真実にはけっして反していない。もしも私の魂が大地にしっかりと足をつけ、明確な姿をとれるならば、私は自分を試したりはしないで、決めてゆくであろう。私の魂はつねに修業と試練のなかにある。私は卑しく、光彩のない生活をお目にかける。だがそんなことはどうでもよい。民衆の私生活であろうと、もっと華々しい生活であろうと、おなじように道德哲学のすべてが関連している。人はめいめい人間の性状の本質を完全にそなえている。

(III-2, pp. 189-190)

後期のなかでもっとも広い視野の、もっとも詳しい作品論がここに見られる。世界と人間を支配している多様性と流動性の状況において、「つねに修業と試練のなかにある」と自省しながら「確定」の誘惑をしりぞけ、「検査 (contrerolle)」や「試し (essayer)」をくりかえすのに甘んじる認識の姿勢が明らかにされている。記述に「矛盾」はあっても、「真実にはけっして反していない」というのは、おなじレベルの認識の特徴に言及し、一般の哲学者の思想との相違を強調したものである。このような関連を背景にしながら、日常の思想の記録であり同時に自己描写の書である『エッセー』について説明がなされている。私達の第2章で考察したように、両者の方針を一致させる制作原理はすでに中期に打ち立てられている。基本的には中期と後期に相違はない。しかしながら、上の文章はおなじ態度で書きすすめられた著作の成熟を示している。『エッセー』が「さまざまに変化する出来事と、不確定でときには相反する思想の検査」であり、また、「一年ごととか、俗に言う七年ごととかではなく、一日ごと、一分ごとの推移を描く」自己描写の作品であるというどちらの説明も、おなじ制作原理を守りつづけながら、人間と思想の躍動的な深部へますます進み入っているのを感じさせる。あるいは、「民衆の私生活であろうと、もっと華々しい生活であろうと、おなじように道德哲学のすべてが関連している。人はめいめい人間の性状の本質を完全にそなえている」という言葉は、自己認識を根本にした思索の充実とこの経験を積み重ねた自信が言わせたにちがいない。抽象化と普遍化ではなく、多様性と流動性のただなかへ踏み入ったのちに、ようやく「本質」を視野に捉えた進化を示している。いずれの文章にも、中期と同一の著作原理の実行がもたらす変質と変貌が十分にあら

われている。

中期から後期へかけた『エッセー』の進化は、自己描写との結びつきがますます緊密になったのが最大の原因であろう。それに連れた、作品にたいするモンテーニュの意識の変化をもっともよく表しているのは、つぎの短い作品論である。

要するに、ここに走り書きしている雑録は、生活の試行錯誤の記録(un registre des essais de ma vie)にすぎない。これは心の健康のためには、教訓を逆に汲みとるならば、かなり良い手本になる。しかし、肉体の健康となると、私以上に有益な経験を提供できる者は誰もいない。(III-13, p. 26)

この『エッセー』の定義には、作品の独創性を表現するために書名に選ばれた語が使われている。初期には「判断の試し」として、中期では「天賦の能力の試し」として定義されていたのと比較してみよう。「私の生活の試し」という表現はおなじ「試し」の成熟ぶりをよく表している。「判断の試し」から「天賦の能力の試し」への発展は、『エッセー』とモンテーニュとのつながりを判断力から精神全体へ広げた。それに比べ「私の生活の試し」は、精神と肉体のみならず人生までもつつみこむ、いっそう広く深い結びつきである。それは「生きることの試し」と言ってもよいであろう。すなわち『エッセー』を書くことはモンテーニュにとって思索することであると同時に自己の存在を生きることなのである。「自分の人生を行動によって記録する」かわりに、「思想によって記録する」と言えるためには、そのような深化がともなわなければならない。「私の生活の試し」という形容は、作品と自己自身と自己の人生が一体化する道程をたどり終えたモンテーニュの満足感の表明でもあろう。「試し」のこの発展のなかには、同一の原理の実行がもたらした成長と変貌が端的にあらわれている。

後期における彼の弁明で以前と比べたもっとも著しい相違は、『エッセー』と世間とのつながりを容認した論の存在である。ふしぎなようだが中期までは彼は執拗にその関係を断ち切ろうとした。初版の出版のさいに付加された序文が彼のこの感情を象徴している。世間にむけて出版という行動をとりながら、最初から「私が筆をとった目的はわが家だけの、私的な目的以外のなにものでもない」と断るかと思えば、最後には「こんなに軽薄で空虚な主題のためにあなたの閑暇をお使いになるのは、賢明なことではない」と結ぶ奇妙さである。すでに論考したように、中期までの『エッセー』論や自己描写論は世間や一般読者と

の関係を拒否するなかで鍛えられ、磨かれた。ところが後期には、それを許容した考え方が見られる。

世間の好評は予想していたよりすこし多くの大胆さを私にあたえてくれた。しかし、私のもっとも恐れているのは、飽きさせることである。当代のある紳士のしたように、私は倦怠をおぼえさせるより、むしろ突き刺すほうを選びたい。(III-9, pp. 150-151)

モンテーニュが態度を変更したからではなく、初版の評判が『エッセー』と世間を結びつけたのである。それは想像するに難くない。そして、彼が「倦怠をおぼえさせるより、むしろ突き刺すほうを選びたい」と思っているように、生じたその新しい関係は著作行為にたいしてなんらかの影響をおよぼしたであろう。それは十分にありうる。しかしながら、私達の作品分析から判断するかぎりでは、それらしい痕跡は認められない。世間との関係の発生は重要な変化をひきおこすほどではなかったにちがいない。また、彼自身の作品論についての、以下のような検討から推察しても、世間の評判は中期までの制作方針を変更させるより、むしろいっそう推進させるように作用したと思われる。

新版のために『エッセー』に筆を入れるとき、追加はするが訂正はしないふたつの理由をのべた箇所がある。その一方は、自分の理解は前進するのみならず後退もし、訂正して損をする恐れがあるという理由であり、他方は世間との関係を考慮しているからであると言う。

読者よ、この試みをさらにつづけ、私の肖像の残余について三度目の補充をするのをお許し願いたい。私は追加はするが訂正はしない。第一の理由としては、世間にたいしてみずからの著書を抵当に入れた者は、もはや権利はないと考えるのが当然だからである。できるのならば、もっとよい意見を他の箇所で言うべきであり、自分の売った作品を毀損しないようにしていただきたい。このような人たちからは、死後でなければ何も買うべきではないであろう。出版する前によく考えていただきたい。どうして急ぐ理由があるだろうか。(III-9, p. 149)

諸版を比較したとき訂正がけっこう見つかるからと言って、「私は追加はするが訂正は

しない」という断言が嘘であるとも言えない。膨大な追加に比べるならば、訂正は無きにひとしい。モンテーニュの公言どおりに理解してよいであろう。しかしその論はあまり正当なようには思われない。かなり手前勝手な言い分である。あれほど大量の加筆は初版の『エッセー』をほとんど改変しているとも見なしうるものであり、訂正さえしなければ「自分の売った作品を毀損しない」という義務を守ったわけではない。

上の文章は後期における新しい方針を表すほどの作品論ではない。「追加はするが訂正はしない」著作の態度は、実際には、世界観や人間観や「エッセー」という思考法などがからんだ深い原因をもっている。たとえば、推敲と修正に励むのは、自分の能力がときには退歩するなぞとは考えないで、年月とともに進歩すると信じているからであろう。ところが、第二の理由でのべているように、モンテーニュはそのような人間観をもっていない。あるいは、「エッセー」という思考は世界の多様性と流動性の様相を個別に吟味しながら、判断をくりかえす運動である。以前の認識を訂正しながらより高次の、より統一的な認識へすすむ方向性をもっていない。「エッセー」という思考法による作品『エッセー』が追加によって発展するのは、自然な傾きと言えよう。あるいはまた、訂正によって以前の姿を消すのは、考えの推移を示そうとする自己描写の目的にもふさわしくない。したがって上に引用した言葉は、新しく生じた世間との関係のなかで著作の方針を捉えなおしたようなものではない。作品の新しい進化を招くような意識ではない。従来の制作原理の範囲内のことを、世間にあわせて説明しなおしたにすぎない。

出版によって自己描写がいやおうなく一般読者とかがわるなかから生まれた影響については、つぎのような告白が記されている。

自分の性格や素行を公表することによって、それがいくらか私を規正する働きをするという、思いがけない利益を私は感じている。自分の肖像を裏切らないようにしようという類の配慮が、ときどき浮かんでくる。この公の宣言が私を強いて自分の道にとどまらせ、私の性状についてのイメージに矛盾しないようにさせる。一般にそれは今日よこしまな、病的な判断ほどゆがんでもいなければ、ねじれてもいない。私の態度の一貫性と単純さは解釈の容易な相貌を呈するはずであるが、その流儀はいくぶん新しく、慣習からはずれているので、悪意が利用する、きわめて良い手札をあたえることになる。しかし、まじめな批判をしようとする人にたいしては、私が告白し、認めている欠点のどこに咬みつけばよいか、十分な材料を提供している。たっぷりと

飽きるほどであり、空を打つ心配はない。私自身が暴露と非難を先どりしているために、氣勢がそがれるように思われるならば、増幅と拡大に権利を行使するのはもっともである。攻撃は正義を越えた権利をもっている。私のなかに根があるのを示した悪徳を大木にまで引き伸ばし、現在私をとらえている悪徳のみならず、私がおちいりかけているにすぎないものまで利用するのも仕方がない。それらは質においても量においても言い立てるべき悪徳である。好きなように私を打つがよい。ともかく、結局のところ、適当な程度を越えて人にけなされたり褒められたりするの、おなじくらいしばしばあるようである。同様に子供時代以来名誉の程度や席次において、自分の真価より下に置かれたときよりもむしろ上に置かれたほうが多かったようである。(I I-9, pp. 177-179)

自己を描くことを主題にした『エッセー』の出版は、普通の作品の場合とはちがった反響を呼んだようである。とくに、最初の「思いがけない利益」についての説明が「私の態度の一貫性と単純さ」以下からむしろ逆の、被害の話へ脱線してゆく展開ぶりは、自己描写が誤解や中傷の種になってモンテーニュを悩ましたらしい現実を想像させる。彼はここでみずからの感情を清算しようとしているのであろう。「結局のところ、適当な程度を越えて人にけなされたり褒められたりするの、おなじくらいしばしばあるようである」と自分を慰め、平衡を保った判断につとめながら、一方では「好きなように私を打つがよい」と、自己描写の主題を貫く覚悟をかためている。このようにこの主題の面においても作品の出版は軽微ならざる影響をおよぼしたようである。後期における以前に増しての自己描写の弁明は、その衝撃にも原因があるかも知れない。しかし結局、私達の第3章第3節における考察にくわえ、上の引用からもわかるように、出版後の反響は従来の自己描写の姿勢を弱めるどころかさらに強めている。消極的にするどころかいつそう積極的にしている。それは中期に確立した制作方針を変更させるようには作用しなかったにちがいない。作品の出版は多かれ少なかれモンテーニュを社会のなかへ引き出した。それは黙殺するのは容易でない影響をおよぼしたが、しかし彼のなかに作家としてのなんらかの社会的な意識を育てる力はまったくもっていなかった。彼が社会との関係を肯定しない根本に変わりはない。

しかし、浮浪者や怠け者にたいするよう、無能で無益な作家にたいしても、なん

らかの強制的な法の執行があるべきであろう。そうすれば、私をはじめ他のたくさんの方がわが国民の手のもとから追放されるであろう。冗談で言っているのではない。乱作は乱世のひとつの症状らしい。内乱におちいってからほど我々の書いた時代があるだろうか。衰亡のころほどローマ人の書いた時があるだろうか。精神の洗練によって国民がより賢明になるわけではないという理由のほか、この暇つぶし仕事は各自が本業をなおざりにし、職務から逸脱するところから生まれる。時代の腐敗は我々めいめいの個人的な寄与によってつくられる。力のある者たちはその力に応じてあるいは反逆、あるいは不正、不信仰、圧政、貧欲、残虐などをもたらす。もっとも弱い者たちは愚昧や空虚や無為を捧げる。私はこの部類である。(III-9, pp. 119-120)

モンテーニュはただ謙遜や卑下のみでこのように言っているのではない。たとえ好評で迎えられ、読者一般とのつながりが生まれたとしても、『エッセー』がそのなかで成長する社会的な条件が欠けている。上の文章についてはそのような状況も考慮しなければならない。宗教戦争による内乱の世は、政治的あるいは宗教的な主張や宣伝の冊子ではない『エッセー』が社会との有意義な関係を築く期待を許さない。また「この暇つぶし仕事は各自が本業をなおざりにし、職務から逸脱するところから生まれる」という言葉は、モンテーニュの意識のみならず、当時の著作行為の社会的な位置の不確かさを映しだしている。

しかしまた、根本的に思想の方向性から見ても、彼が社会との関係のなかで『エッセー』を捉え直そうとしなかったのはなんらふしぎではない。彼は何ごとにしるその方向への拡散を恐れ、警戒する。自己との関係を見つめ、深めてゆくのが彼の思想の方向である。著作についてもやはり変わりはない。たとえばこの特徴は、中期において不完全と反学問を標榜し、他人にたいする責任を拒否しながら、執拗に「試し」と自己自身との一致を追求した姿勢が証明している。その後の出版によって社会の反響がなんらかの作用をおよぼしたとしても、従来の方針を変更させるほどの力をふるわなかったのも当然であろう。まして著作の考え方はすでに中期に確立されていたのであり、後期はそれにもとづく発展にすぎない。この節においていくつかの側面から検討したように、さらに初期と比較してみても、モンテーニュの基本方針は一貫している。

皆様の御存知のとおり、私は今まで一本の道を歩んできた。今後も、この世にイン

クと紙のあるかぎり、中断もせず苦勞もせず、この道を歩みつづけるであろう。(I

II-9, p. 119)

モンテーニュの著作行為と『エッセー』の進化の本質を悟らせる言葉である。

結 論

もっとも初期に書かれた章と第3巻の章を比べるならば、『エッセー』はおなじ作者の作品とは思われないほどの相違がある。あるいは、円熟した『エッセー』は簡単には言いつくせないさまざまな個性をふくんでいる。これらの現象を眺めるならば、制作の方針がなんども変更され、いくつも建てられたように想像したくなる。しかしモンテーニュは一本の道を歩みつづけた人である。中心にある同一の姿勢を見落としてはならない。それが書名に掲げられた「エッセー（試し）」であり、この基本姿勢による著作の実行によって『エッセー』が進化したのである。それでは「エッセー」とはけっきょく何なのであろうか。各節の主題に応じた考察を繰り返しながら私達はその特徴を明らかにしてきたが、最終的で全体的な定義となると、まだ曖昧なままである。しかしながらはたしてモンテーニュはそれを明確に示しているであろうか。彼は「エッセー」とは何かという定義ではなく、その創造性を追求したのである。どのようにして人間の思考に創造的な活力を回復するか、この点に彼の最大の関心があったにちがいない。このように理解するならば、定義の曖昧さは逆に明確な把握の基礎になるであろう。たとえば、もっとも初期に書かれ、しかも執筆の動機を語っている第1巻第8章は、著作の基礎として思考の個性的な活動を主張し、同時期の作品の没個性とは矛盾しているように思われる。しかし、そこに思考の創造性についての彼の最初の直感があると見なすならば、なんら理解に苦しむ類の矛盾ではない。実際の初期の作品が示すように、彼は時代の遺産を継承してルソンという著作形式に従った。しかし一方では、それを創造的な行為にするためには、個人の思考の躍動的な生命力と動性を尊重しなければならないと直感したにちがいない。「エッセー」という姿勢は初期の終わりから中期にかけてこの直感がもうすこし方法化されたのであり、基本的な性格になんら相違はない。したがって「エッセー」の対象とそのあり方を注視するならば、『エッセー』の進化をたんなる変化ではなく、同一の原理が引き起こす成長と変貌として捉えられる。ヴィレーの進化の研究の欠点は、ひとつは変化のみを描いた単純さにあるが、この点を修正し、補完できる。これはたんに言葉の修正などではなく、認識を訂正する。たとえば、すでに述べたように、ヴィレーが第3巻の随想の奔放な展開を無秩序をてらった技巧と解釈するのも、同一のものの変貌を把握する研究が欠けているからである。

『エッセー』という作品の進化は、動的で創造的な「エッセー」という思考がルソンという過去の様式を破壊してゆく過程である。おなじ執筆期にもいろいろな様式の作品が見られ

るように、それは持続的な運動であって、外部からのある思想家やある作品の影響によって突然引き起こされた変化などではない。もちろんヴィレーの説明はそれほど単純ではないが、読書の影響に注意がうばわれている嫌いは否めない。これが彼の進化の考察の他のひとつの欠点である。と言っても、私達は読書の影響力を否定するつもりはない。それが進化を促進した可能性は大いにありうる。しかし、一方に、作者自身の行為の継続がもたらす進化を捉える観点がなければならぬ。さもなければ読書の影響について適切な評価はできない。作品と作者の内的な進化の運動を注視した私達のような研究と連結させながら、その再評価がなされなければならないであろう。

『エッセー』の進化の一本の道筋は執拗に一貫している反スコラの意識を背景にしている。スコラの抽象性や普遍性や静的秩序にたいして、モンテーニュは具体性や日常的な一回性や動性を対抗させながら、思考の生命力を回復し、その創造性を発揮しようとした。そこに彼の時代的位置と「エッセー」という思考の使命があった。したがってその創造性の追求は思考の批判的な運動性や破壊的な躍動性を喚起し、保持することとほとんど等しかった。それらを推進力にしながら彼は新しい作品様式を開花させた。一方、認識行為において運動性を重んじる姿勢は、容易に動性になじまない書かれた作品の内部に一種の無秩序を生じさせる。しかし、ひとりの人間が自分の時代とつぎの時代の課題を同時に果たすことはできない。生まれもった条件を背負いながら思想や作品における創造的な価値を追求してゆくならば、秩序ではなく無秩序のほうへ、論理性ではなく反論理性の方向へすすまなければならないときもある。モンテーニュ風に言うならば、それがその時代やその人間の「運命」であり、たんに技巧や気取りの問題ではない。モンテーニュの思考は構築ではなく、批判的な作業が主体であり、破壊と建設最中の運動性を特色とし、まだ静止と新しい秩序の段階には到っていない。やたらと『エッセー』の無秩序性を弁護し、秩序や論理性のヴェールを考案し、かぶせようとするのは、彼を尊敬する態度であるどころか、逆に、17世紀以降の偏見によって彼の真の苦勞と才能を軽視するに等しい。『エッセー』の随想は論理的であるか、非論理的であるか。秩序があるか、無秩序であるか。このような二者択一を設定し、いずれかを結論しようとするのは無意味である。両者の性格があるというのが単純な事実であり、しかもこの混在にこそ彼の思考の活力と創造性の秘密がある。したがって両側面をしっかりと認識するすべを知らなければならない。そして、彼は両者のどのような調合によって創造的な思考をおこなっているか。私達はこのような追究をもっとおこなうべきであろう。

モンテーニュの思考と『エッセー』の様式とこれらの進化は複雑な姿を見せ、さまざまな問題をふくんでいる。私達は従来よりより根本的に、より明確に理解するすべを示したつもりである。それは一言で言えば『エッセー』を「エッセー」によって把握するという、平凡な方法である。ではなぜ今まで人々はこの点に気づかなかったのであろうか。ひとつは「エッセー」という思考と作品様式の特徴には、いろいろな理由がからんでいるからである。たとえば私達の示したように、作者の世界観や人間観や哲学観や認識論などとの関連に注目しなければならない。さもなければ考察を深められない。しかも個々の関連だけを見るならば、特別な発見とは言えない、あたりまえの読解のように見える。柔軟で多様な視点の変化をおこなわなければ、考察に重みと深みをあたえられない。それは深く考えようとする人間にとってもっとも困難な行為の類である。他のひとつの主たる原因は、『エッセー』を「エッセー」によって把握する作品分析の方法について工夫が乏しかったからである。おそらく多くの人たちは、たとえおなじような着想をしたとしても、随想の展開の過程を綿密に分析する私達のような方法を貫くことによって、どの程度の成果を得られるのか、おおいに疑問に思ったにちがいない。私達もその点が非常に不安であった。そのため、基本的な方法は一貫させながら、いくつかの主題を論じようとした。しかしながら、一応の終着点に達した現状から見れば、私達の研究はあきらかに多数の主題をふくみすぎている。随想の展開の構造、その論理性と非論理性のメカニズム、これらの観点からの自己描写の再検討、章の構成、三段階に分けたそれぞれの進化の考察、現時点から見れば、大きな問題をあまりにも多く抱え込みすぎている。そのために個々の主題についての追究が緻密さを欠き、粗雑であるのは否めない。おなじように随想の展開の過程を分析する方法によつて、ヴィレー以降で最初の本格的な研究を発表したトゥルノンは、私達の主題のうちの一つ、「エッセー」という思考の論理性の実体を解明する目標に限定している。しかも、ヴァリアントを分析の対象にしているが、進化を解明しようとはしていない。そして、私達以上に大部な本にまとめあげている。つまり私達の主題のひとつひとつがすでに一冊の論考になりうるほどの大問題なのである。したがって、緻密さの欠如については寛大な判断をお願いしたい。しかしこの欠点の一方には、視野のすこし広い認識の構想によって、問題の構図と複数の脈絡を明瞭にした長所もあるはずである。多様な側面を視野に捉えているために、個人の分析の恣意性がすこし抑制され、析出した特徴についての評価と解釈が片寄らず、妥当な範囲にとどまっているのではないかと自負している。しかしながら、結局のところ、細部はいかに粗雑であろうとも、独自の方法によって新しい研究の

豊饒な可能性を探りあて、提示していると評価していただけるならば、私達は十分に満足である。

参考文献

I. 『エッセー』の諸版

A. 欧文

(1) Les Essais de Montaigne. Reproduction typographique de l'exemplaire annoté par l'auteur et conservé à la Bibliothèque de Bordeaux. 3 vol. Paris, 1906-1931.

(2) Oeuvres complètes de Michel de Montaigne. Ed. Arthur Armaingaud. 12 vol. Paris, 1924-1941.

(3) Essais. Ed. Maurice Rat. 2 vol. Paris, 1962.

(4) Les Essais de Michel de Montaigne. Publiés d'après l'exemplaire de Bordeaux par Fortunat Strowski, édition appelée généralement l'Édition Municipale. 5 vol. Bordeaux, 1906-1933.

(5) Oeuvres complètes de Montaigne. Ed. Albert Thibaudet et Maurice Rat. Paris, 1962.

(6) Essais. Ed. Pierre Villey. 3 vol. Paris, 1930-1931.

(7) Essais. Ed. Pierre Michel. 5 vol. Paris, 1957.

(8) Les Essais de Michel de Montaigne. Ed. Pierre Villey et V.-L. Saulnier. Paris, 1965.

(9) Oeuvres complètes. Texte établi et annoté par Robert Barral en collaboration avec Pierre Michel. Paris, 1967.

(10) Essais. Reproduction photographique de l'édition originale de 1580. 2 vol. Genève, 1976.

(11) Les Essais de Montaigne. Publiés d'après l'édition de 1588 avec les variantes de 1595. 7 vol. Paris, s.d.

B. 翻訳

(1) 原二郎訳『モンテーニュ・エッセー』、2巻、「筑摩世界文学大系」、筑摩書房、1962.

(2) 関根秀雄訳『随想録』、6巻、「新潮文庫」、新潮社、1963.

- (3) 原二郎訳『エッセー』、6巻、「岩波文庫」、岩波書店、1965-1966.
- (4) 荒木昭太郎訳『モンテーニュ・エッセー』、「世界の名著」、中央公論社、1967.
- (5) 荒木昭太郎訳『エッセー新選』、「世界文学全集」、講談社、1982.
- (6) 関根秀雄訳『モンテーニュ随想録』、7巻、白水社、1982-1983.

II. 『エッセー』とモンテーニュに関する研究

A. 欧文

何度もあらわれる雑誌名はつぎのように略示した。

ACTES : Montaigne et les Essais 1580-1980. Actes du Congrès de Bordeaux (Juin 1980), Paris-Genève, 1983

BHR : Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance

BSAM : Bulletin de la Société des Amis de Montaigne

CAIEF : Cahiers de l'Association Internationale des Etudes Françaises

なお文献名の記載の仕方は、私達の大学ノートの古いメモに不統一や不備があるため、以下の一部におなじような粗雑さが生じているが、ご容赦願いたい。また、出版地名を記すべき箇所に括弧がついているのは、出版社名である。

- (1) ARAKI(Shotaro). Montaigne vu par les japonais : son attitude devant la mort, in ACTES, pp.113-119.
- (2) ARMAINGAUD(Dr. A.). Editions des Essais de Montaigne de 1588 et de 1580, (Daniel-Chambon).
- (3) ATKINSON(Geoffroy). La forme de l'essai avant Montaigne, in BHR, t.VIII, 1946, pp.129-130.
- (4) AULOTTE(Robert). Montaigne, Apologie de Raimond Sebond, Paris, 1979.
- (5) BARAZ(Michael). Sur la structure d'un essai de Montaigne(III. 13. De l'expérience), in BHR, t.XXIII, 1961, pp.265-281.
- (6) BARAZ(Michael). L'être et la connaissance selon Montaigne, Toulouse, 1968.
- (7) BLINKENBERG(Andréas). Quel sens Montaigne a-t-il voulu donner au mot <Essais> dans le titre de son oeuvre? in BSAM, 3e s., No 29, 1964, pp.22-32.
- (8) BLUM (Claude). Ecriture et système de pensée. 1580 : L'Histoire dans les

<<Essais>>, in ACTES, pp.3-13.

(9) BLUM(Claude). La mort des hommes et la mort des bêtes dans les <<Essais>> de Montaigne : sur les fonctions paradigmatiques de deux exemples, in French Forum, vol.5, No 1, 1980, pp.3-14.

(10) BLUM(Claude). La fonction du <<déjà dit>> dans les <<Essais>>:emprunter, alléguer, citer, in CAIEF, No 33, 1981, pp.35-51.

(11) BLUM(Claude). Les <<Essais>> de Montaigne : Les signes, la politique, la religion, in Columbia Montaigne conference papers, Lexington, 1981, pp.10-30.

(12) BONNEFON(Paul). Montaigne. L'homme et l'oeuvre, Bordeaux, 1893.

(13) BONNET(Pierre). Evolution et structure du texte des <<Essais>>, Avant-propos in Pour une édition critique des Essais de Marcel Françon(Schoenhof's Foreign Books, Inc.).

(14) BONNET(Pierre). L'Exemplaire de Bordeaux et le texte définitif des <<Essais>>, (Taffard), 1964.

(15) BOON(Jean Pierre). Montaigne gentilhomme et essayiste, Paris, 1971.

(16) BRODY(Jules). Au-delà de 1580 : l'évolution d'une forme, in ACTES, pp. 195-208.

(17) BRUNSCHVICG(Léon). Descartes et Pascal, lecteurs de Montaigne, New York, 1944.

(18) BUTOR(Michel). Essais sur les Essais, Paris, 1968.

(19) CANCELON(Dr.). L'esprit positif et scientifique dans Montaigne, (Editions d'Art, Edouard Pelletan).

(20) CLAIR(M.). Essai sur les particularités de la langue de Montaigne, in Revue de philologie française et de littérature, 24e Année, 1910.

(21) COMPAYRE(Gabriel). Montaigne et l'éducation du jugement, Paris, 1907.

(22) COPPIN(Joseph). Montaigne traducteur de Raymond Sebond, in Mémoires des Facultés catholiques de Lille, fasc. XXXI, 1925.

(23) DREANO(Mathurin). La crise sceptique de Montaigne, in BHR, t.XXIII, pp. 252-264.

(24) EHRLICH(Hélène H.). Montaigne : la critique et le langage, Paris, 1972.

- (25) ETIEMBLE(René). Sens et structure dans un essai de Montaigne, in CAIEF, No 14, 1962, pp.263-274.
- (26) FRAME(Donald M.). <<Jugement et sens>> dans le chapitre <<De la prae-sumption>>, in ACTES, PP.209-212.
- (27) FRIEDRICH(Hugo). Montaigne, traduit de l'allemand par Robert Rovini, Paris, 1968.
- (28) GLAUSER(Alfred). Montaigne paradoxal, Paris, 1972.
- (29) GRAY(Floyd). Le style de Montaigne. Paris, 1958.
- (30) GRAY(Floyd). La balance de Montaigne : exagium / essai, Paris, 1982.
- (31) GRUN(Alphonse). La vie publique de Montaigne. Etude biographique, Paris, 1855.
- (32) HENDRICK(Philip J.). Le dialogue de Montaigne : <<L'Apologie de Raimond Sebond>>, in ACTES, pp.213-221.
- (33) ISHIGAMI IAGOLNITZER(Mitchiko). La sagesse de Montaigne et celle de Kenko, moine japonais du XIVe siècle, in Mémorial du 1er congrès international des études montaignistes(Bordeaux-Sarlac, 1er - 4 Juin 1963), pp.85-90.
- (34) ISHIGAMI IAGOLNITZER(Mitchiko). La notion de liberté chez le Bouddha et chez Montaigne, in ACTES, pp.162-167.
- (35) JANSEN(F.J.Billeskov). Sources vives de la pensée de Montaigne, Copenhague et Paris, 1935.
- (36) JASINSKI(René). Sur la composition chez Montaigne, in Mélanges d'histoire littéraire de la Renaissance offerts à Henri Chamard, Paris, 1951, pp.257-267.
- (37) KRITZMAN(Lawrence D.). Destruction / Découverte. Le fonctionnement de la rhétorique dans les <<Essais>> de Montaigne, Lexington, 1980.
- (38) LABLENIE(Edmond). Essais sur Montaigne, Paris, 1967.
- (39) LABLENIE(Edmond). Les additions ultimes de Montaigne d'après une étude du chapitre <<De la vanité>>(III, IX), in BSAM, No 13, 1968.
- (40) LAMANDE(André). La vie gaillarde et sage de Montaigne, Paris, 1927.
- (41) LANSON(Gustave). Les Essais de Montaigne. Etude et analyse, Paris, 1930.

- (42) MARCU(Eva). <<Dérapages>> d'idées et de style de Montaigne, in BSAM, No 29, 1964.
- (43) MEIJER(Marianne S.). L'ordre des <<Essais>> dans les deux premiers volumes, in ACTES, PP.17-27.
- (44) MICHA(Alexandre). Le singulier Montaigne, Paris, 1964.
- (45) MICHEL(Pierre). Le passage de Montaigne dans l'est de la France, in Actes de Mulhouse-Bale(1980), pp.12-26.
- (46) MOREAU(Pierre). Montaigne, Paris, 1966.
- (47) NACAS(Athanase). Notes sur la morphologie des <<Essais>>. (A propos des mots <<article>>, <<leçon>>, <<conte>> et <<discours>> dans l'oeuvre de Montaigne), in ACTES, pp.222-236.
- (48) NAUDEAU(Olivier). La pensée de Montaigne et la composition des <<Essais>>, Genève, 1972.
- (49) OKUBO(Yasuaki). Essai sur le mécanisme de la pensée de Montaigne, in Etudes de langue et littérature françaises 36, 1980, pp.16-35.
- (50) OKUBO(Yasuaki). Agencement par contradiction dans les <<Essais>> de Montaigne, in Etudes de langue et littérature françaises 48, 1986, pp.1-12.
- (51) PEROUSE(Gabriel-A.). La lettre sur la mort de La Boétie et la première conception des <<Essais>>, in ACTES, pp.65-76.
- (52) PLATTARD(Jean). Montaigne et son temps, Paris, 1933.
- (53) POLETTI(Joseph-Guy). Montaigne à bâtons rompus, Paris, 1984.
- (54) PORTEAU(Paul). Montaigne et la vie pédagogique de son temps, Paris, 1935.
- (55) PORTEAU(Paul). Sur un paradoxe de Montaigne, in Mélanges offerts à Paul Laumonier.
- (56) POUILLOUX(Jean Yves). Lire les <<Essais>> de Montaigne, Paris, 1969.
- (57) POULET(Georges). Montaigne, in Etude sur le temps humain, pp.49-62, Paris, 1972.
- (58) RIGOLOT(François). Les <<incipit>> des <<Essais>> ; structure et évolu-

tion, in ACTES, pp.247-260.

(59) RUEL(Edouard). Du sentiment artistique dans la morale de Montaigne, Paris, 1901.

(60) SAYCE(Richard). L'ordre des <<Essais>> de Montaigne, in BHR, XVIII, 1956, pp.7-22.

(61) SAYCE(Richard). Renaissance et maniérisme dans l'oeuvre de Montaigne, in Renaissance Maniérisme Baroque(Actes du XIe stage international de Tours), 1972, pp.137-151.

(62) STROWSKI(Fortunat). Montaigne lu à Bordeaux. Etudes sur l'édition des <<Essais>>, (G.Gounouilhou), 1902.

(63) STROWSKI(Fortunat). Montaigne, Paris, 1906.

(64) TERRASSE(Jean). Sur Montaigne et les <<Coches>>, in Rhétorique de l'essai littéraire, Montréal, 1977, pp.11-26.

(65) THIBAUDET(Albert). Montaigne, Paris, 1963.

(66) THOMAS(Jean). Sur la composition d'un essai de Montaigne, in Humanisme et Renaissance, t.V, 1938. pp.297-306

(67) TOURNON(André). Montaigne la glose et l'essai, Lyon, 1983.

(68) VILLEY(Pierre). Les livres d'histoire moderne utilisés par Montaigne, Paris, 1901.

(69) VILLEY(Pierre). Les sources et l'évolution des Essais de Montaigne, 2 vol. Paris, 1908.

(70) VILLEY(Pierre). Montaigne et François Bacon, (Revue de la Renaissance), 1913.

(71) VILLEY(Pierre). Montaigne devant la postérité, Paris, 1935.

(72) Villey(Pierre). Les Essais de Michel de Montaigne, Paris, 1946.

(73) VOIZARD(Eugène). Etude sur la langue de Montaigne, Paris, 1885.

(74) WINTER(Ian J.). Montaigne's self-portrait and its influence in France, 1580-1630, Lexington, 1976.

(75) WINTER(Ian J.). L'emploi du mot <<forme>> dans les <<Essais>> de Montaigne, in ACTES, pp.261-268.

(76) ZANGRONIZ(Joseph de). Montaigne, Amyot et Saliat, Paris, 1906.

B. 邦文および翻訳

(1) 荒木昭太郎 『モンテーニュ』、「人類の知的遺産、29」、講談社、1985。

(2) 荒木昭太郎 「モンテーニュの表現意識の問題」、「フランス・ルネサンス文学」2、1965。

(3) 荒木昭太郎 「モンテーニュとシャロン」、『フランス文学講座5 思想』、大修館書店、1978。

(4) 荒木昭太郎 「モンテーニュの『エッセー』における動物の位置づけ」、(東京大)「外国語科研究紀要」25-2、1978。

(5) 荒木昭太郎 「モンテーニュの『エッセー』に現われるさまざまな動物」、(東京大)「教養学科紀要」10、1978。

(6) 荒木昭太郎 「アンドレ・ジードのモンテーニュ論種々」、(東京大)「外国語科研究紀要」33-2、1986。

(7) 上田友子 「モンテーニュにおける人間的理性の概念」、(大阪大) Gallia 5、1960。

(8) 落合太郎 『モンテーニュ』、岩波書店、1937。

(9) オーロット、ロベール 荒木昭太郎訳「『レーモン・スボン弁護』をめぐって——モンテーニュと試行の義務」、(東京大)「外国語科研究紀要」30-2、1983。

(10) 斎藤広信 「モンテーニュの情熱——『友情』に関する一考察——」、(東北大) Regards 10、1967。

(11) 斎藤広信 「モンテーニュの自己描写宣言」、(東北大) Regards 12、1970。

(12) 斎藤広信 「『エッセー』におけるモンテーニュと自己」、(東北大)「文化」33-4、1970。

(13) 斎藤広信 「モンテーニュの“自己描写”の〈方法〉について」、(日本女子大)「文学部紀要」24、1975。

(14) 斎藤広信 「『食人種について』の一考察」、(日本女子大)「文学部紀要」28、1979。

- (15) 斎藤広信 「モンテーニュとマテュラン・レニエ」、(日本女子大)「文学部紀要」32、1983。
- (16) 斎藤広信 「シャロンとモンテーニュ(その一)」、(日本女子大)「文学部紀要」34、1985。
- (17) サント・ブーヴ 渡辺一夫訳『モンテーニュ小論』、白水社、1939。
- (18) サント・ブーヴ 佐藤輝夫、関根秀雄訳「モンテーニュ 1・2」、『サント・ブーヴ選集第1巻』、実業之日本社、1947。
- (19) ジイド、アンドレ 渡辺一夫訳「モンテーニュについて」、前掲I-B-(1)の上巻に収録。
- (20) 関根秀雄 『モンテーニュ研究』、創芸社、1950。
- (21) 関根秀雄 『モンテーニュとその時代』、白水社、1976。
- (22) 関根秀雄 『モンテーニュ逍遙』、白水社、1980。
- (23) 田中重弘 『女の世紀を旅した男』、北洋社、1980。
- (24) ツヴァイク、シュテファン 渡辺健訳「モンテーニュ」、『ツヴァイク全集』5、みすず書房、1961。
- (25) 中川誠 「モンテーニュとイギリス・エッセイ文学(1)」、(静岡大)「教養部研究報告」19-2、1984。
- (26) 中村栄子 「『友情について』の一節をめぐって——『エッセ』の構成に関する一考察——」、(日本フランス語フランス文学会) Etudes de langue et littérature françaises 17, 1970。
- (27) 原二郎 『モンテーニュ』、「岩波新書」、1980。
- (28) 広島敏史 「モンテーニュの<<自然>>——Conscience morale について——」(日本フランス文学会)「フランス文学研究」12、1961。
- (29) 広島敏史 「モンテーニュの『エッセ』における方法と構成について」3、「モンテーニュ研究の歴史」(大阪大) Gallia 10・11、1971。
- (30) ビュトール、ミシェル 松崎芳隆訳『モンテーニュ論——エッセをめぐるエッセ』筑摩書房、1973。
- (31) プーレ、ジョルジュ 山崎庸一郎訳「モンテーニュ」、『人間的時間の研究 1』筑摩書房、1969。

A. 欧文

くりかえし現れる雑誌名はつぎのように略示した。

AL : Aspects du libertinisme au XVI^e siècle(Actes du colloque international de Sommières), Paris, 1974.

(1) AULOTTE(Robert). Amyot et Plutarque : la tradition des <<Moralia>> au XVI^e siècle,

(2) BARRIERE(Pierre). La vie intellectuelle en France du XVI^e siècle à l'époque contemporaine, Paris, 1961.

(3) BENE(Charles). Erasme et le libertinisme, in AL, pp.37-49.

(4) BENOUIS(Mustapha K.). Le dialogue philosophique dans la littérature française du seizième siècle, The Hague • Paris, 1976.

(5) BLUM(Claude). De la méthode de résoudre les controverses : le traité du concile de Duplessis-Mornay, in La controverse religieuse(XVI^e-XIX^e siècles) (Actes du 1er Colloque Jean BOISSET), pp.117-130.

(6) BUSSON(Henri). Le rationalisme dans la littérature française de la Renaissance(1533-1601), Paris, 1957.

(7) CEARD(Jean). La notion d'hérésie selon le jésuite Maldonat, in AL, pp. 59-71.

(8) CHINARD(Gilbert). L'exotisme américain dans la littérature française au XVI^e siècle, Paris, 1911.

(9) DELVAILLE(Jules). Essai sur l'histoire de l'idée de progrès jusqu'à la fin du XVIII^e siècle, 1910.

(10) DESJARDINS(Albert). Les sentiments moraux au XVI^e siècle, Paris, 1887.

(11) DEZEIMERIS(Reinhold). De la renaissance des lettres à Bordeaux au XVI^e siècle, Bordeaux, 1864.

(12) DUBOIS(Claude-G.). La conception de l'histoire en France au XVI^e siècle (1560-1610), Paris, 1977.

(13) DUBOIS(Claude-G.). Le maniérisme, Paris, 1979.

(14) JULES(Charles-A.). Les débuts de l'expansion et de la colonisation

françaises(XVe-XVIe siècles), Paris, 1947.

(15) KOYRE(Alexandre). L'apport scientifique de la Renaissance, in La synthèse idée-force dans l'évolution de la pensée, Paris, pp.29-65.

(16) LA BOETIE(Etienne de). Oeuvres complètes d'Etienne de La Boétie, Genève, 1967.

(17) LA GARANDERIE(Marie-Madeleine). L'architecture textuelle à la Renaissance, in Etudes seiziémistes offertes à V.-L.SAULNIER, Genève, 1980, pp.65-73.

(18) LEJEUNE(Philippe). Le pacte autobiographique, Paris, 1975.

(19) MALOCHET(Jean-M.). Aspects du libertinage au XVIe siècle selon Brantôme, in AL, pp.177-190.

(20) MARGOLIN(Jean-C.). Réflexions sur l'emploi du terme <<libertin>> au XVIe siècle, in AL, pp.1-33.

(21) MASTELLONE(Salvo). Gallicans et libertins, in AL, pp.227-234.

(22) MENAGER(Daniel). Introduction à la vie littéraire du XVIe siècle, Paris, 1968.

(23) PASQUIER(Estienne). Lettres a M. De Pelge in Oeuvres complètes d'Estienne Pasquier, Genève, 1971, t.2., pp.517-519.

(24) RENAUDET(Augustin). Préréforme et humanisme à Paris pendant les premières guerres d'Italies(1494-1517), Paris, 1953.

(25) ZANTA(Léotine). La renaissance du stoïcisme au XVIe siècle, Paris, 1914.

(26) WHYTE(Lancelot). L'inconscient avant Freud, traduit de l'américain par Janine Morche, (Payot).

B. 邦文および翻訳

(1) ヴェルダン、アンドレ 岩坪紹夫訳『懐疑主義の哲学』、青山社、1982。

(2) エリオット、ジョン・ハクスタブル 越智武臣、川北稔訳『旧世界と新世界 1492-1650』、岩波書店、1975。

(3) クリステラー、パウル・オスカー 渡辺守道訳『ルネサンスの思想』、東京大学出版会、1977。

- (4) コイレ、アレクサンドル 野沢協訳『コスモスの崩壊——閉ざされた世界から無限の宇宙へ』、白水社、1974。
- (5) サイファー、ワイリー 河村錠一郎訳『ルネサンス様式の四段階——1400年—1700年における文学・美術の変貌』、河出書房新社、1976。
- (6) ストロウスキー、フォルテユナ 森有正、土居寛之訳『フランスの知恵』、岩波書店、1951。
- (7) 高橋康也 『道化の文学 ルネサンスの栄光』、中央公論社、1977。
- (8) 竹田篤司 『モラリスト 生き続ける人間学』、中央公論社、1978。
- (9) 田中英道 『画家と自画像 描かれた西洋の精神』、日本経済新聞社、1983。
- (10) ドレスデン、セム 高田勇訳『ルネサンス精神史』、平凡社、1970。
- (11) 中川久定 『自伝の文学——ルソーとスタンダール——』、岩波書店、1979。
- (12) 中川久定 『ディドロの『セネカ論』』、岩波書店、1980
- (13) 野田又夫 『ルネサンスの思想家たち』、岩波書店、1963。
- (14) 野田又夫 『ルネサンスの人間像』、平凡社、1965。
- (15) 速水敬二 『ルネッサンス期の哲学』、筑摩書房、1967。
- (16) フェーブル、リュシアン 二宮敬訳『フランス・ルネサンスの文明』、創文社、1981。
- (17) フォール、ポール 赤井彰訳『ルネサンス』、白水社、1968。
- (18) プーレ、ジョルジュ 岡三郎訳『円環の変貌 上巻』、国文社、1973。
- (19) 渡辺一夫 『フランス・ルネサンス文芸思潮序説』、岩波書店、1960。
- (20) 渡辺一夫 『フランス・ユマニズムの成立』、岩波書店、1976。